宗典部

第十一卷

BL
1411
T8J3
1929
v.35

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂
國譯大藏経

LIBRARY
MAY 3 1971
UNIVERSITY OF TORONTO
BL
1411
T8J3
1929
V.35

昭和新纂 國譯大藏經 宗典部 第十一卷

妙法蓮華經玄義 目次

私記緣起……一
卷第一上……六
卷第一下……二五
卷第二上……五三
卷第二下……七六
卷第三上……一〇七
卷第三下……一三五
卷第四上……一五九
卷第四下……一八九
卷第五上……二一八

卷第五下……二四八
卷第六上……二七七
卷第六下……三〇七
卷第七上……三三九
卷第七下……三六七
卷第八上……三九五
卷第八下……四二三
卷第九上……四四九
卷第九下……四七六
卷第十上……五〇一
卷第十下……五三三

妙法蓮華經玄義

宗典部
第十一卷

私記緣起

沙門灌頂述す

(一)大法東漸して僧史に載する所、詎ぞ幾くの人か、曾て講を聽かずして、自ら佛乘を解する者有らん乎。縱令發悟するも、復能く定に入つて陀羅尼を得る者ありや不や。縱ひ定慧を具するも、復帝京に二法を弘めんや不や。縱令席を盛んにすとも、徒衆を謝遣して山谷に隱居せんや不や。縱ひ世を避け玄を守るも、徵されて二國の師とならんや不や。縱ひ帝者に尊まるとも、太極に御に對して仁王般若を講ぜんや不や。縱ひ正殿に宣揚するも、主上の爲に三禮せられんや不や。縱令萬乘膝を屈するも、百の高座、百官、稱美讚歎して、彈指殿に喧すしきや不や。縱ひ道俗顒顒たるも、法華の圓意を玄悟せんや不や。縱ひ經の意を得るも、能く文字無うして、樂說辯を以て晝夜流瀉せんや不や。唯我智者のみ諸の功德を具したまへり。

(三)幸ひなる哉、灌頂、昔し建業に於て始めて經文を聽き、次に江陵に在つて玄義を奉蒙し、晩に台嶺に還つて仍鶴林に値ひたてまつれり。荊揚に往復して途將に萬里ならんとす、前後補接して纔に一徧を聞くのみ。但未だ不聞を聞かざるのみに非ず、亦乃ち聞く者も未だ了せず。卷舒讚仰して彌堅高なるを覺る。猶恨む、緣淺くして再びせず、三びせざりし

【一】天台大師の上足章安尊者灌頂の記する所にして、大師口說の法門を記錄傳述するの因緣興致を明かにするものなり。一にまた意序とも名く。

【灌頂】陳の文帝天嘉二年に生れ、唐の貞觀六年に寂す、壽七十二なり。嘗て天台の門に入る、常に函丈に侍し、大師の所說悉く筆錄に載す。

【二】天台大師の十德を擧ぐ。

【二法】定慧の二法。

【二國】陳、隋の二國をいふ。

【三】以下傳述の意を明す。

ことを。諮詢地無く、犢の乳を思ふが如し。茲に復惟れ念ず、斯言若し墜ちなば將來患むべし。涅槃に若樹若石と明し、今經には若田若里と稱す。聖典に聿遵して、書して之を傳へん、玄と文と各十卷なり。或は經論の誠言を以て此深妙に符し、或は諸師の異解を標して彼非圓を驗む。後代の行者、甘露の門茲に在るを知るべし。

序王

（一）言ふ所の妙とは、妙は不可思議に名く。言ふ所の法とは、十界十如權實の法なり。蓮華とは、權實の法を譬ふ。良に以れば、妙法は解し難く、喩を假るに彰れ易し。況意、乃ち多けれども、略して前後に據し、合して六を成ず。一に蓮の爲の故の華は、實の爲に權を施すを譬ふ。文に云はく「第一寂滅を知り、方便力を以ての故に種種の道を示すと雖も、其れ實に佛乘の爲なり」と。二に華の敷くは、權を開するを譬へ、蓮の現ずるは實を顯すを譬ふ。文に云はく「方便の門を開きて眞實の相を示す」と。三に華の落つるは權を廢するを譬へ、蓮の成ずるは實を立つるを譬ふ。文に云はく「正直に方便を捨てて但無上道を說く」と。又蓮は本を譬へ、華は迹を譬ふ。本より迹を垂れ、迹は本に依る。文に云はく、「我實に成佛してより來、久遠なること斯の若し。但衆生を敎化して是の如きの說を作すのみ、我少くして出家し、三菩提を得たり」と。二に華の敷くは迹を開するを譬へ、蓮

【別時】天台大師、別時に經を講じ給へる時の序說にして、之を別行經序と名く。

【一】先づ五義を以て經名を釋す。

【十界十如】十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛界を云ふ。十如とは、諸法の相、性、體、力、作、因、緣、果、報、本末究竟等を指す。而して十如は十界の通體、十界は十如の別體なり。

【文に云く】法華經の文を指す。以下之に準ず。

【本、迹】本とは五百億塵點劫の昔に大通智勝佛の下にて成佛せし釋尊の十其身を云ひ、迹とはその久遠の成道を本とし、番番出世して衆生を化導したまふを指す。かるが故に未來永

の現ずるは本を顯すを譬ふ。文に云はく「一切世間、皆今始めて道を得たりと謂ふも、我成佛してより來、無量無邊那由他劫なり」と。三に華の落つるは迹を廢するを譬へ、蓮の成ずるは本を立つるを譬ふ。文に云はく「諸佛如來の法は皆是の如し、衆生を度せんが爲め皆實にして虛ならず」と。是を以て先に妙法を標し、次に蓮華を喩ふ。化城の執教を蕩かして草菴の滯情を廢し、方便の權門を開して眞實の妙理を示し、衆善の小行を會して廣大の一乘に歸せしめ、上、中、下根に皆記莂を與ふ。又、衆聖の權巧を發いて本地の幽微なるを顯はす。故に增道損生して位大覺に隣る。一期の化導、事理倶に圓なり。蓮華の譬、意斯に在り矣。經とは、外國には修多羅と稱す、聖教の都名なり。有翻無翻の事は後に釋するが如し。

〔二〕記者釋して曰はく『蓋し序王とは經の玄意を叙す、玄意は文心を述す、文心は迹本に過ぎたること莫し。仰いで斯旨を覩ずるに、衆義冷然たり。妙法蓮華は即ち名を叙するなり、眞實の妙理を示すとは體を叙するなり、廣大の一乘に歸すとは宗を叙するなり、化城の執教を蕩かすとは用を叙するなり、一期の化圓なりとは教を叙するなり。六譬は迹本を叙するなり。文略にして意周し矣。』

〔三〕私序王

劫に迹佛出世し給うて教化に從はるるなり。

【三菩提】阿耨多羅三藐三菩提（Anuttara-Samyak-sambodhi）の略にして、無上正偏知、又は無上正等正覺と譯す。佛の覺智なり。

【化城の執教云云】聲聞の小果に止住せんとする機類に對して其迷執を破し、五百由旬の寶所を示し、一佛乘の大果を得しむるを云ふ。

【二】章安尊者、更に文師の序意を釋す。

【三】章安尊者の私序

【一】一經の始末を詳じ、經題を釋す。

【四華六動】何れも法華六瑞中の瑞相にして、以下法華經迹門開顯の意を詮す。

【三變千踊】寶塔踊出二品に出づる所にして以下法華經本門の開顯の意を詮す。

【二】五義を以て總じて序を釋す。

【三】正しく玄義一部を讀ずる時の序なり。

【一】初に法華一部の由致を明し題目を釋す。

（一）夫れ理は偏圓を絶すれども圓珠に寄せて而も理を談じ、極は遠近に非ざれども寶所に託して而も極を論ず。極會し、圓冥じて、事理倶に寂なり。而して寂せざる者は、良に無明の酒に耽りて、珠を繫くと雖も而も覺らざるに由る。涅槃の道に迷ひて、路遠からざれども而も長しと言ふ。聖主世尊は、斯倒惑を愍みたまひて、四華六動して方便の門を開き、三變千踊して眞實の地を表し、咸く一切をして、普く見聞することを得せしめたまへり。祕密の奧藏を發く、之を稱して妙と爲す。權實の正軌を示す、故に號して法と爲す。久遠の本果を指す、之を喩ふるに蓮を以てし、不二の圓道に會す、之を譬ふるに華を以てす。聲佛事を爲す、之を稱して經と爲す。圓詮の初め、之を目けて序と爲す。序類相從する、之を稱して品と爲す。衆次の首を名けて第一と爲す。

（二）釋して曰はく『談記は是れ名を叙す。會冥は是れ體を叙す。圓珠は是れ宗を叙す。倶寂は是れ用を叙す。四華六動は是れ教を叙す。本迹は知んぬべし。』

譚玄本序

（一）此妙法蓮華經は本地甚深の奧藏なり。文に云はく、是法は示すべからず、世間の相常住なり。三世の如來の證得したまふ所なり。文に云はく「是れ第一寂滅なり、道場に於て知り已んぬ。大事因緣をもつて世に出現す、始め我身を見て佛慧に入らしめ、未だ入らざる

【二】次に解釋。

者の爲に、四十餘年、異の方便を以て第一義を助顯せり。今正直に方便を捨て、但無上道を說く」と。言ふ所の妙とは、不可思議の法を褒美するなり。又妙とは、十法界十妙の法なり。此法卽ち妙、此妙卽ち法にして二無く別無し。故に妙と言ふなり。又妙とは、自行權實の法妙なり、故に蓮華を擧げて之を況ふ。又妙とは、迹に卽して而も本、本に卽して而も迹なり、卽ち本に非ず迹に非ず。或は開廢と爲す云云。又妙とは、最勝修多羅甘露の門なり、故に妙と言ふ。

(二)釋して曰はく、『妙に別の體有ること無し、體の上の褒美とは妙の名を叙す。妙卽ち法界法界卽ち妙とは體を叙す。自行の權實とは宗を叙す。本迹の六喩は用を叙す。甘露門とは教を叙するなり。』

【一】天台智者大師、隋の開皇十三年、荊州玉泉寺に於て說きたまふ所にして、天台一家の判教相の大本を開するものなり。

【二】五重玄義を釋するに先づその名目を列ね、而して次に此を釋するに通別の二義あるを示す。

【釋名、辯體、明宗、論用、判教】天台大師の用ひられし獨特の經文解釋法にして之を五重玄義と稱す。釋名とは妙法蓮華經の題名の玄義を釋し、辯體とは經所詮の哲學的實體を闡明し、明宗とは經の實際的宗趣を明し、論用とは經の實際的功用を評論し、判教とは經の佛一代所說の經中に於ける地位を判別するを云ふ。

【三】是より下正しく五義を釋する

妙法蓮華經玄義　卷第一上

天台智者大師の說

(二)釋名第一　辯體第二

明宗第三　論用第四

判教第五

此五章を釋するに、通有り、別有り。通は是れ同の義、別は是れ異の義なり。此の如き五章は徧く衆經を解す、故に同と言ふ。名を釋するに名異り、乃至、教を判ずるに教異る、故に別と言ふなり。衆經の初に例するに、皆五事を安ずるは、則ち同の義なり。如是は詮異り、我聞は人異り、一時は感應異り、佛住は處所異り、若干人は聽衆異るは、則ち別の義なり。又通とは共の義、別とは各の義なり。此通別の如きは專ら一部に在り。通は則ち七番に共解し、別とは則ち五重に各說す。例せば、利鈍に廣略の二門を須ふるが如し。衆經の通別は今論ぜざる所、一經の通別を今當に辯ずべし。

(三)通に就いて七番共解を作す。一に標章、二に引證、三に生起、四に開合、五に料簡、六に觀心、七に會異なり。標章は憶持し易からしめ、念心を起すが故なり。引證は佛語に據つて、信心を起すが故なり。生起は雜亂せざらしめ、定心を起すが故なり。開合、料簡、

中、初め通釋に就いて七番共解をなす。即ち先づ七章を列擧し、而して七重の共意五心に依ることを說く。

【五根】信、精進、念、定、慧。

【五障】欺、怠、瞋、恨、怨言。

【五力】信、精進、念、定、慧。五根と同じきも、惡を排し斥くる意にていふ。

【三脫門】空解脫門、無相解脫門、無我解脫門。

【三】七番共解の中、初に標章。而して標章の中第一にし釋名を標す。

【融、不融】茲にては單に圓教を指して融と云ひ、藏通別の三教を指して不融と云ふ。

會異等は、慧心を起すが故なり。觀心は卽ち聞き卽ち行ず、精進心を起すが故なり。五心立ちて五根を成じ、五障を排して五力を成じ、乃至、三脫門に入る。略して七重の共意を說くこと此の如し。廣く五章を解する者は、一一に廣く五心、五根を起し、佛の知見に開示悟入せしむるのみ。

(三)初に五章を標す云云。名を標するに四と爲す、一に立(名)。二に分別、三に結、四に譬なり。立名とは、原(大)聖の名を建つるところなり。蓋し深を開して以て始(行)を進め、咸く視聽して倶に見聞することを得、途を尋ねて遠きに趣き、而して極に至らしめんが爲なり。故に名を以て法に名け、衆生に施設す。分別とは、但、法に麤妙あり。若し隔歷の三諦は麤法なり、圓融の三諦は妙法なり。此妙諦は本有とす。文に云はく、「是法、法位に住す、世間の相常住なり。唯我のみ是相を知る、十方の佛も亦然なり」と。尙不退の菩薩、入證の二乘も知る所に非ず。況や復、人天群萠の類をや。佛是を知りたまふと雖も、務めて速かに說きたまはず。文に云はく、「我若し佛乘を讃ぜば、衆生は苦に沒在せん。法を謗つて信ぜざるが故に、三惡道に墜ちん」と。所以に初の敎に融と不融とを建立す、小根は倂せて聞かず。次の敎に不融を建立す、大根は都て用ひず。次の敎には倶に建立す、融を以て不融を斥ひ、小根をして不融を恥ぢて融を慕はしむ。次の敎にも倶に建立す、小根をして、融に寄せて不融に向はしめ、大根をして、不融に從つて融に向はしむ。種種に建立して衆生に施設すと雖も、但隨他意語なり、佛の本懷に非ず。故に不務速說と言ふ。

【三】但、對、帶】[illegible]妙ならざるが故に擇びてかく云ふなり。

【四】標章の中第二に標體。

今經は、正直に不融を捨てて但融を說き、一坐席をして同一の道味ならしむ。乃ち如來出世の本懷を暢べたまふ。故に此經を建立して、之を名けて妙と爲す。結せば、當に知るべし、華嚴は兼、三藏は但、方等は對、般若は帶なり。此經は復兼、但、對、帶無し、專ら是れ正直無上の道なり、故に稱して妙法と爲す。蓮華に譬ふるは、例するに麤妙あり。云何が麤なる、狂華は菓無し、或は一華多菓、或は多華一菓、或は一華一菓、或は前菓後華、或は前華後菓なり。初は外道の空しく梵行を修して剋獲する所無きを喩へ、次は凡夫の父母を供養して報、梵天に在るを喩へ、次は聲聞の種種苦行して止涅槃を得るを喩へ、次は緣覺一遠離の行の亦涅槃を得るを喩へ、次は須陀洹の却つて後道を修するを喩へ、次は菩薩の先に緣修を藉りて後の眞修を生ずるを喩ふ。皆是れ麤華なり、以て喩と爲す。蓮華は奇妙し、爲蓮故華は華實具足す、實に即して權なるを喩ふべし。又、華開蓮現は權に即して實なるに喩ふべし。又、華落蓮成、蓮成亦落は非權非實に喩ふべし。是の如き等の種種の義便なり、故に蓮華を以て妙法を喩ふるなり。

(四)體を四と爲す、一に釋字、二に引同、三に簡非、四に結正なり。體の字は禮に訓ず、禮は法なり。各其親を親とし、各其子を子とし、君臣節に撙く。若し禮なくんば則ち法に非ず。出世の法體も亦復是の如し、善惡、凡聖、菩薩、佛あり、一切法性を出でず。正しく實相を指して以て正體と爲す。故に壽量品に云はく、「三界の三界を見るが如くならず、如に非ず、異に非ず」と。若し三界の人は三界を見て異となし、二乘の人は三界を見て如

【金剛藏】金剛藏菩薩は華嚴經の十地品を說く、世親之を釋す、十地論釋之れなり。

【二經】本迹二經【兩論】地論、中論。【二家】論家と今家（天台）。【四執】前出の斷無等の四種の謗、有無等の四見を指す。【三聖】藏、通、別の三教の聖人をいふ。

となす。菩薩の人の三界を見るは亦如亦異なり。佛の三界を見るは非如非異なり、雙べて如異を照す。今、佛の所見を取りて實相の正體と爲す。金剛藏に佛の甚微智を說くは、辭異なれども意同じ。其辭に曰はく「空にして有、二ならず、異ならず、盡ならず」と。空は斷無に非ず、故に空にして有と言ふ。有即ち是れ空、空即ち是れ有なり、故に不二と言ふ。空有を離れて外に別に中道あるに非ず、故に不異と言ふ。一切處に徧ず、故に不盡と言ふ。此れ亦龍樹と意同じ。中論に云はく「因緣所生の法は、即空、即假、即中なり」と。因緣所生の法即空とて、此れ斷無に非ざるなり。即假とは不二なり、即中とは不異なり、因緣所生法とは即ち徧一切處なり。今、實相の體を言はば、權に即して而も實なれば、斷無の謗を離る。實に即して而も權なれば、建立の謗を離る。權實即ち權實に非ざれば異の謗を離る、雙べて權實を照し一切處に徧ずれば盡の謗を離る。斯れ乃ち二經の雙美を總べ、兩論の同致を申べ、二家の懸會を顯はし、今經の正體を明すなり。私に謂はく、實相の法は、橫に凡夫の四執を破し、竪に三聖の證得を破す。凡夫を破するは解すべし。聖を破すとは、三藏の二乘は但空を指して極となす。頗梨珠の一往は眞に似たれども、再び研けば便ち僞なるに譬ふ。身子の云はく「我等同じく法性に入れども、如來無量の知見を失す」と。空有の旨、正しく此證を破するなり。通教の人は但空、不但空共ずるを指して極となす。雜色珠を裹めば、光色に隨ひて變ずるに譬ふ。所見の光に緣りて其本體を亡じ、玄黃の色を逐うて二乘に墮落す。大經に云はく「聲聞の人は但空を見て不空を見ず。菩薩の人

【垢衣】信解品の窮子の意。

【衣內の繫珠】五百弟子授記品の譬の意。

【五】標章の中第三に標宗。

【三因、三果】前三教にて各各三因別なり。即ち三藏教にては諦緣度、

は但空を見るのみに非ず。亦不空を見る」と。所見既に殊なり、不二の旨正しく此證を破す。別教の人は不但空を指して極となす、廻に二邊を出でて雲外の月の如し。邊を棄てて中を取るは、空を捨てて空を求むるが如し。不異の旨正しく此證を破す。若し彼に行りて、此に無くんば、則ち正法徧ねからず、不盡の旨亦此證を破するなり。此等は皆佛の甚微智に非ざれば、金剛藏の意と同じからず。佛の證得したまふ本有常住に非ざれば、方便品と同じからず。一切處に徧ぜざれば、壽量品と同じからず。既に正體に會せず、何れの法にか攝屬せん。但空は是れ化他の實、但不但は是れ自行化他の實、二邊を出づるの中は是れ自行の權なり。並に他經の所說にして、今の體に非ず。

今經の體とは、化他の權實即ち是れ自行の權實と體す。垢衣の內身、實に是れ長者なるが如し。自行化他の權實即ち是れ自行の權實と體す、衣內の繫珠即ち無價寶なるが如し。自行の權即ち自行の實なるは、一切世間の治生產業皆實相と相違背せざるが如し。一色一香も中道に非ざるは無し、況や自行の實、而も實に非ざらんや。

(五)宗とは三と爲す、一には示、二には簡、三には結なり。宗とは要なり、所謂る佛自行の因果にして、以て宗と爲す。云何が要となす。無量の衆善も因を言はば即ち攝し、無量の證得も果を言へば則ち攝す。綱維を提ぐるに目として動かざるは無く、衣の一角を牽くに纏として來らざるは無きが如し。故に宗要と言ふ。然るに諸々の因果を善く明らめ識んぬべし、尚別教の因果をも取らず、況や餘の因果をや。餘の因果とは、昔は三因大に異にし

通教にては般若、別教にては地前三因の理を指し、正果とは其到來する證果を云ふ。

【七種方便】二あり。一は人、天、聲、緣の四乘と藏通別の菩薩乘。二は藏教の聲、緣と通教の三乘と、別圓の菩薩之を通じて方便と云ふは、七賢位にして見道の聖位に入る方便の行位なればなり。

【六】標章の中第四に標用。

【薩婆悉達云云】佛本行經に出づる譬にして佛の他の諸王子に勝るるを詮はす。之れ前三教及近成の力用の圓教のそれに劣れるを指す。

て、而も三果小しく同じ。又、三因大に同じうして、而も三果小しく異なり。又、一因迥に出でて一果融ぜず、因に善を攝せず、果も德を收めず。則ち佛自行の因に非ず、佛の道場所得の果に非ず。又簡とは、諸經に佛の往昔所行の因果を明すは、悉く皆拂はる。咸是れ方便にして、今經の宗要に非ず。意を取りて言を爲さば、因は久遠の實修を窮め、果は久遠の實證を窮む。此の如きの因は、竪に七種方便より高く、橫に十法界の法を包ぬ。初め此實相の行を修するを名けて佛因と爲し、道場に所得するを名けて佛果と爲す。但智を以て知んぬべし、言を以て具にすべからず。略して此の如きの因果を擧げて、以て宗要と爲すのみ。

(六)用とは三と爲す、一に示、二に簡、三に益なり。用とは力用なり、三種の權實二智は皆是れ力用なり。力用の中に於て更に分別せば、自行の二智、理を照し、理周きを名けて力となす。二種の化他の二智、機を鑒みて、機徧きを名けて用と爲す。秖自行の二智即ち是れ化他の二智、化他の二智即ち是れ自行の二智なり。理を照すは即ち機を鑒み、機を鑒みるは即ち理を照すなり。薩婆悉達が祖王の弓を彎き滿つるを名けて力となし、七の鐵鼓に中り、一の鐵圍山を貫き、地を洞し、水輪に徹するが如きを名けて用と爲す。諸の方便教は、力用の微弱なること凡人の弓箭の如し。何となれば、昔の緣は化他の二智を稟けて、理を照すこと徧からず、信を生ずること深からず、疑を除くこと盡さざればなり。今の緣は自行の二智を稟けて佛の境界を極め、法界の信を起し、圓妙の道を增し、根本の惑を

【七】標章の中第五に標教、而して之に三意ある中、先づ初に根性の融不融の相を明す。
【師弟の遠近、不遠近】法華經にて遠近は佛は五百億塵點劫の昔成道の古佛にして爾來番番出世化益し來れりと師弟の關係の深き因縁を説き法華以前太だ古きことを示す。これ法華以前の諸經の今番成道のみを説くと大に異るなり。
【高山、幽谷、平地】華嚴經の三照の譬なり。三照とは天台の五時の譬にして、この譬と涅槃經五味の譬と、法華經信解品とに依りて五時を立つ。
【頓説】華嚴經を指す。
【小、大】小は小乘の人、大は大乘教を指す。
【牛より云云】涅槃經五味の譬にして五味とは乳、酪、

斷じ、變易の生を損ず。但生身、及び生身得忍の兩種の菩薩のみ倶に益するに非ず。法身と法身の後心との兩種の菩薩も亦倶に益す。化の功廣大なると、利潤の弘深なるとは、蓋し並に經の力用なり。

〔七〕教相を三と爲す、一に根性の融、不融の相、二に化道の始終、不始終の相、三に師弟の遠近、不遠近の相なり。教とは、聖人の下に被らしむるの言なり。相とは、同異を分別するなり。云何か分別する、日の初めて出でて前に高山を照すが如し、厚く善根を植ゑて斯の頓説を感ず。頓説は本小の爲ならず、小は座に在りと雖も聾の如く瘂の如し。良に小は大に堪へず、亦是れ大は小を隔つるに由る。此れ華嚴の如し。法を縁に被らしむるに約せば、縁の大益を得るを頓教の相と名け、説の次第に約せば、牛より乳味を出す相と名く。次に幽谷を照す。淺行偏に明らけく、當分に漸く解す。此れ三藏の如し。三藏は本大の爲にせず、大は座に在りと雖も、多陀婆和は小の識らざる所なり。此れ乃ち小は大を隔て、大は小に隱る。法を縁に被らしむるに約せば漸教の相と名け、説の次第に約せば酪味の相と名く。次に平地を照す。影高水に臨み、器の方圓に逐ひ、波の動靜に隨ふ。一佛土を示して淨穢不同ならしめ、一身を示現するに巨細各異なり。一音の演法も類に隨ひて各解し、恐畏し、歡喜し、厭離し、斷疑す。神力不共なり。故に見に淨穢有り、聞に褒貶有り、嗅に薝蔔と不薝蔔と有り、華に著身と不著身と有り、慧に若干と不若干と有り。此れ淨名、方等の如し、法を縁に被らしむるに約せば猶是れ漸教なり、説の次第に約せば生蘇味

生蘇、熟蘇、醍醐なり。天台之を五時に配するに凡そ二義あり、一は次第相生の義、二は五味濃淡の義なり。

【多少、姿】多は時の長短、姿は經の内の香の多少、影して、三藏の始行に譬ふ、初教に譬ふ。

【三子、三田、三馬】華嚴經に多種の三譬を列ぬ。今は三種の内先づ佛化は上根に對して化し、次に頓根に及ぶ。この一節次第の化導の正意に於ては華嚴も涅槃も異ならざるを示す。

【三道】聲聞、緣覺、菩薩の三乘の道。

【四果】聲聞の四果、即ち須陀洹果（預流果）斯陀含果（一來果）阿那含果（不還果）阿羅漢果を云ふ。

【善吉】須菩提のこと。

の相なり。復、義有り。大人は其覚用を蒙り、嬰兒は其聰明を喪ひ、夜遊の者は失没し、作務の者は興成す。故に文に云はく「但菩薩の為に其實事を説きて、我の為にせず、斷眞要を説く」と。三人倶に學すと雖も、二乘は聾を取る。其には大品の如し。若し法を縁に被らしむるに約せば斯是れ漸教なり、說の次第に約せば熟蘇味の相と名く。復、義有り。日光普く照して高下悉く均平なり、土圭の影を測るに縮ならず盈ならず。若は低頭、若は小音、若は散亂、若は微善、皆佛道を成ず。人の獨り滅度を得ること有らしめず、皆如來の滅度を以て之を滅度す。其には今經の如し。若し法を縁に被らしむるに約せば漸圓教と名く、若し說の次第ならば醍醐味の相なり。當に知るべし、華嚴の譬と涅槃とは義同じきことを、三子、三田、三馬等の譬は皆菩薩を先にし、次に二乘に及び、後は則ち凡夫を平等にす云云。

問ふ「既に五味を以て分別す、那ぞ同じく漸と稱ふや。」答ふ「漸に約して五味を明すことを得るのみ。又若し小の大を開かざるは、大は一向是れ頓なり。若し大の小を用ひざるは、小は一向是れ漸なり。若し大を以て小を破するは是れ漸頓並べ味ぶ。若し小を帶して大を明すは是れ漸頓相資く。若し小を會して大に歸するは是れ漸頓泯合す。故に無量義に云はく「漸頓の二法、三道、四果合せず」と。今時は則ち合す、即ち此義なり。」問ふ「云何が相資くる。」答ふ「小は大を聞きて小を恥ぢて而も大を慕ふは、是を頓の小を資くと爲す。佛、善吉に命じて教を轉ぜしめ、大に菩薩を益するは、是を漸、頓を資くと爲す。前に分

【寂場を動ぜず云云】佛は寂場頓大の教化を止めて鹿苑の小化を施せども、佛の眞意に於ては小しも渝らざるの意なり。

【三密】身、口、意。

【四門】有、空、亦有亦空、非有非空。

別するが如きは、但顯露に約して漸頓五味の相を明す。若し不定を論ぜば、義則ち然らず。高山頓說すと雖も、寂場を動ぜずして而も鹿苑に遊化す。四諦の生滅を說くと雖も、而も不生不滅を妨げず。菩薩の爲に佛の境界を說くと雖も、而も二乘の智斷有り。五人、果を證すと雖も、八萬の諸天、無生忍を獲ることを妨げず。當に知るべし、頓に卽して而も漸、漸に卽して而も頓なることを。大經に云はく、「或時は深と說き、或時は淺と說き、問ふべきに卽ち遮し、遮すべきに卽ち問ふ」と。一時、一說、一念の中に備に不定有り、有義の專ら一部を判ずるに同じからず。味味の中、悉く此の如し。此れ乃ち顯露不定なり、祕密不定は其の義然らず。如來は法に於て最も自在を得たまふ。若しは智、若しは機、若しは時、若しは處、三密、四門、妨無く礙無し。此座に頓を說き、十方には漸を說き、不定を說く。頓の座は十方を聞かず。十方は頓の座を聞かず。或は十方に頓を說き、不定を說き、此座には漸を說く。各各相知聞せず、此に於ては是れ顯、彼に於ては是れ密なり。或は一人の爲に頓を說き、或は多人の爲に漸を說き、不定を說く。或は一人の爲に漸を說き、多人の爲に頓を說く。各各相知らずして、互に顯密と爲す。或は一座には默し十方には說き、十方には默し一座には說き、或は俱に默し俱に說く。各各相知らず、互に顯密と爲す。復此の如しと雖も、未だ如來は法に於て自在の力を盡さず。但智を以て知るべし、言を以て辨ずべからず。復甚だ多しと雖も、亦漸、頓、不定、祕密を出でず。今の法華は是れ顯露にして祕密に非ず、是れ漸頓にして漸漸に非ず、是れ合にして不合に非ず、是れ醍醐にして四

【八】敎相三意の中第二に化道の始終不始終の相を明す。

【當機益物】如來衆生の機類に隨つて相應の法を說きつ利益を與ふるを云ふ。

【九】敎相三意の中第三に師弟の遠近不遠近の相を明す。

【道樹】伽耶菩提道場。

【補處】位妙覺に隣る菩薩をいふ。

【一〇】七番共解の中第二に引證。而してまた中に大分二あり、卽ち初は序品、神力の二文を引きて通じて五章を證し、次に藥王品の文を引きて別して敎相を證するなり。

【五佛章】方便品に出づ。十方諸佛、過去佛、未來佛、現在佛、釋迦佛の五

味に非ず、是れ定にして不定に非ず。此の如く分別するに、此經と衆經の相とは異れり。

(八)又異とは、餘教は當機益物にして如來施化の意を說かず。此經は佛の教を設けたまふ元始、巧に衆生の爲に頓、漸、不定、顯、密、種子を作すを明す。中間に頓漸五味を以て、調伏長養して之を成熟す。又、頓漸五味を以て之を度脫す。並に脫し、並に熟し、並に種うること番番息まず。大勢威猛は三世に物を益す、具には信解品の中に說くが如し。餘經と異れり。

(九)又、衆經に咸云はく「道樹に師の實智始めて滿じ、道樹を起つて始めて權智を施す」と。今經は、師の權實は道樹の前に在りて、久久に已に滿ずと明す。諸經に明すは、二乘の弟子は實智に入ることを得ず、亦權智を施すこと能はず。今經に明すところは、弟子の入實甚だ久しく、亦先より解して權を行ず。又、衆經は尙道樹の前に、師と弟との近近權實を論ぜず、況や復遠遠をや。今經は道樹の前に權實長遠なることを明す、補處も世界を數ふるに知らず、況や其塵數をや。經に云はく「昔、未だ曾て說かざる所、今皆當に聞くことを得べし」と。殷勤に稱讚すること良に以有り。當に知るべし。此經は諸教に異ることを。

(一〇)二に引證とは、文殊の答問の偈に云ふが如し「我、燈明佛を見たてまつりしに、本の光瑞此の如し。是を以て知んぬ、今の佛の法華經を說かんと欲したまふことを」と。何ぞ但二萬億のみならん、大通智勝、及び五佛章の中、三世の佛の說皆法華と名く。文に云はく、

佛等しく初め三乘隨宜の法門を說き、後、一佛乘に開示悟入せしむる方法を一にせるを示す。

【諸法實相】最極究竟の實理を指す、三千性相の諸法、悉く咸一實中道實相の理に契ひて圓融無礙なる邊を名くるなり、而もかかる理は言論を絶し思慮を斷ぜる境なり。

【會三歸一】法華經に於ては爾前にて立てし三乘は之方便なりと開會して等しく一佛乘に歸入せしむるを云ふ。

【開近顯遠】法華經に於ては佛の伽耶始成の近を開して久遠實成の本地を顯示するを云ふ。

【九法界】佛界を除く菩薩より地獄界に至る九界を云ふ。

「今佛光明を放ちて實相の義を助發したまふ」と。又云はく、「諸法實相の義已に汝等が爲に說く」と。又云はく、「無量の衆に尊まれて、爲に實相の印を說く」と。此れ亦今古同じく實相を以て體と爲すなり。文に云はく、「佛當に法雨を雨らして、道を求むる者をして充足せしめたまふべし」と。即ち是れ會三歸一の法雨、佛道の因を求むる者を充足せしめ、乃至、一切皆會して充足せしむ。若し開近顯遠の法雨は、佛道の果を求むる者をして充足せしむ。文に云はく、「諸の三乘を求むる人、若し疑悔あらば、佛は當に爲に除斷して、盡く餘り有ること無からしめたまふべし」と。又云はく、「諸佛の法は久しうして後要ず當に眞實を說くべし」と。即ち是れ三乘、五乘、七方便、九法界等の疑を斷じて皆信を生ぜしむ。此れ經の用を證するなり。又如來神力品に云はく、「要を以て之を言はば、如來の一切所有の法、如來の一切自在神力、如來の一切祕要の藏、如來の一切甚深の事、皆此經に於て宣示し顯說す」と。一切の法とは、權實の一切の法皆攝す。此れ經の名を證するなり。一切の自在神力とは、內用を自在と名け、外用を神力と名く。即ち用を證するなり。一切祕要の藏とは、器に非ずんば授くること莫きを祕と爲し、正體を要と爲し、含容する所多くして而も積聚無きを藏と名く。此れ體を證するなり。一切甚深の事とは、實相を甚深と名け、實相の爲の修因深因と名け、實相を究竟するを深果と名く。又法師品に云はく、「若し此經を聞かば、乃ち是れ善く菩薩の道を行ず」と、深因なり。佛道を求むる者咸く我前に於て、妙法華經の一句をも聞き、乃至、一念も隨喜するに、我皆授記を與ふ。乃至、須臾

【開、示、悟、入】法華經方便品に出づ。衆生をして佛知見に開示し悟入せしむること。

も之を聞かば、即ち三菩提の深果を究竟することを得ん」と。此れ宗を證するなり。二文を引く所以は、古佛は事定まる、要略を擧げて以て疑を釋す。今佛は説き竟つて、要略を擧げて以て付屬す。中間は正しく機に當つて廣く説く、故に引きて證せざるのみ。若し引かば、開、示、悟、入は即ち其文なり。大事の因緣の爲の故に名を證し、佛の知見は體を證し、開示悟入は宗を證し、爲令衆生は用を證し、此れ餘經に異るは教を證す。

又藥王品に十譬を擧げて教を歎ず、今其六を引くべし。大なること海の如く、高きこと山の如く、圓なること月の如く、照すこと日の如く、自在なること梵王の如く、極は佛の如し。海は是れ功德有り、萬流歸するが故に、同一鹹なるが故なり。法華も亦爾なり、佛の證得したまふ所、萬善同じく歸し、同じく佛乘に乘ず。江と河と川流とは、此大德無し、餘經も亦爾なり。故に法華最大なり。山王は最も高し、四寶所成の故に、純ら諸天の所居なるが故なり。法華も亦爾なり、四味の教の頂に在りて四の誹謗を離る。開示悟入純ら一根一緣にして同一道味なり、純ら是れ菩薩にして聲聞の弟子無きが故なり。月は能く滿盈するが故に、月は漸く圓なるが故なり。法華も亦爾なり、同體の權實なるが故に、漸を會して頓に入るが故なり。燈、炬、星、月は闇と共に住す、諸經の二乘の道果を存して小と竝び立つるに譬ふ。日は能く闇を破するが故なり、法華は化城を破し、草菴を除くが故なり。又、日は星、月を映奪して現ぜざらしむるが故に、法華は迹を拂ひ方便を除くが故なり。輪王は四域に於て自在なり、釋王は三十三天に於て自在なり、大梵は三界に於て自在

【俗諦】一切の事相の因緣生滅の理。【無學】不生不滅の理を指す。然も眞俗二諦は相對的の名なり。天台の圓教にては眞俗不二を談ず。【中道】空有の二邊に偏らず絕對にして双遮双照の眞如實相を名く。【三諦圓融】今經にては色心の萬法盡く空假中の三理圓融無礙なりと說く。而も三諦各各三諦を具し一諦を舉ぐれば即ち一切を指示し一切を具す。正に是れ色心實相の理遍にして有佛無佛性相常然の妙諦なり。【五佛子】佛の最初に度し給へる阿若憍陳如等の五比丘を云ふ。【無學】聲聞の第四果即ち阿羅漢の翻名なり。一切の煩惱を斷盡して更に學修すべき處な

なり。諸經は、或は俗諦に於て自在、或は眞諦に於て自在、或は中道に於て自在なれども、但是れ歷別の自在にして大自在に非ず。今經は三諦圓融して最も自在を得れば、大梵王に譬ふ。餘經は衆生を拔き生死を出す。五佛子の凡夫に於て第一なるが如し。或は衆生を拔き涅槃を出す、菩薩の無學の上に居するが如し。今經は衆生を拔出して、方便教の菩薩の上に過ぐ。即ち法王と成し、最も第一と爲す。諸の譬喩を引きて教相の最大なることを明せり。例して知んぬ、用、宗、體、名も亦大なること海の如く、境、智、乃至利益も亦大なること海の如くなるを。教相は山の如し、四味の教の上に在り。用、宗、體、名、境、智、利益も亦復是の如し。教相の虧盈圓滿なること月の如し、用、宗、體、名、境、智、利益も亦復是の如し。教は化城を破す、用、宗、體、名、境、智、利益も亦復是の如し。教相は自在なり、餘も亦是の如し。教相は王が中の王なり、餘も亦是の如し。但文を引きて教を證するのみに非ず、餘の義も亦成ず。

二三に生起とは、能生を生と爲し、所生を起と爲す。前後に次第有り、麤細相違せず。肇の云はく「名は物を召すの功無く、物は名に應ずるの實無し。名無く物無し、名物安ぞ在らん」と。蓋し第一義の中の無相の意のみ。世諦には言を爲す、名無くんば以て法を顯すこと無し。故に、初に名を釋す。名は法に名く、法は即ち是れ體なり。名を尋ねて體を識り、體は宗に非ずんば會せず。體に會して自行已に圓なれば、體より用を起し、化識を導利す。利益既に多し、須く教相を分別すべし。神力品の中には教の次第に約す、一切

きを以て無學と云ふ。
【二一】七番共解の中第三に生起。
【肇】羅什門下にして關中四哲の一僧肇を云ふ。今は肇論を指す。
【含識】有情のこと。
【二二】七番共解の中第四に開合。

の法本より皆佛法なり。大經に云はく、「一切の世諦も、若し如來に於ては即ち是れ第一義諦なり。衆生は顚倒して佛法に非ずと謂へり」。今明かに言つて之を示す、故に一切法と言ふ。此法を說かんと欲して、先に神力を以て駭動す、故に一切自在神力と言ふ。既に變通を見て醒悟して渇仰し、教を說くことを爲すを得るなり。教は實相を詮ず、故に祕密の藏と言ふ。教を稟けて修行するに、即ち因果有り。故に甚深の事と言ふ。四義と餘經との同異を分別せんと欲して、次に教相を明すのみ。序品は行の次第に約す、初め經卷、若は善知識に從つて聞見する所有り、即ち名を聞くなり。聞くが故に理を推し、體顯はる。體を顯すに行を須ゆ、行は即ち因果、(是れ)宗なり。行、自ら惑を排し、亦衆生を利す。是れ用なり。同異を分別するは教相なり。開示悟入も亦行の次第に約す。法は本開閉無し、今呼びて方便門開と爲す。此れ名を聞くなり。眞實の相を示すは體なり。迷よりして悟を得るは因を悟るなり、因に由るが故に果を悟るは宗なり。悟るが故に深く入り、亦他をしても入らしむるは用なり。同異を分別するは教なり。今の五義は、序品に依りて行の次第を扶くるなり。

(二二)四に開合とは、五章共に一經を釋するに、種種に分別することは、解し易からしむるが故なり。凡そ三種の開合有り、五種と十種と譬喩とを謂ふ。初に釋名は通じて事理を論じ、顯體は專ら理を論じ、宗と用とは但事を論じ、教相は事理を分別す。釋名は通じて教行を說き、顯體は教に非ず行に非ず、宗と用とは但行、教相は但教なり。釋名は通じ

【三軌】迹門十妙中の三法妙にして、眞性軌、觀照軌、資成軌を指す。
【三道】煩惱、業、苦。
【三德】法身、般若、解脫。
【一三】七番共解の中第五に料簡。
【七譬】法華經中に委しく十喩あり。天台は總譬の一及び別の七譬を用ふ。總譬は經題の蓮華、七喩は譬喩品の火宅、信解品の窮子、藥草品の藥草、化城品の化城、授記品の繫珠、安樂行品の頂珠、壽量品の良醫の七喩なり。

て因果を說き、顯體は因に非ず果に非ず、宗は自の因果、用は教他の因果、教相は上の法を分別す。釋名は通じて自行化他を論じ、體は自に非ず他に非ず、宗は是れ自行、用は是れ化他、教相は自他を分別す。釋名は通じて說默を論じ、體は非說非默、宗は默、用は說、教相は分別す云云。十種とは、釋名は總じて三軌を論じ、體と宗と用とを開して三軌に對し、教相は三軌を分別す。釋名は總じて三道を論じ、體と宗と用とは開して三道に對し、教相は三道を分別す。乃至第十には、釋名は總じて三德を論じ、體と宗と用とを開して三德に對し、教相は三德を分別す云云。譬喩とは、譬へば總じて人身と名くるも、身を開すれば則ち手、足、頭有り。此身を分別するに、貴賤賢愚種種差降あるが如し。人身は名を譬へ、識は以て體を譬へ、命は以て宗を譬へ、煖は以て用を譬へ、分別は教相を譬ふ云云。

〔一三〕五に料簡とは、若し蓮の爲めの故の華は、華果必ず俱ならば因中有果に墮せずとせん耶。答ふ、『因中有果とは、外道の邪法なり、已に初教の爲めに破せらる。尚ほ權實の義に非ず、況や是れ圓因圓果、醍醐眞乳の法ならん耶。』問ふ、『華を以て權を譬ふるに、權は是れ小乘の法ならば、則ち草菴を壞すべからず。草菴旣に破す、何んが華を以て權を喩ふることを得ん。』答ふ、『小乘は、是れ化他の權なり。是故に須く破すべし。今は自行の權を明す、故に華を以て喩ふる耳。』問ふ、『文の內、火宅より醫子に至るまで、凡そ七譬は、悉く蓮華を明さず。何を以てか、此を取りて題と爲るや。』答ふ、『七譬は是れ別、蓮華は是れ總

【智德、斷德】智は理を證し、斷は惑を破するの德を云ふ。

なり。總を擧げて、別を攝す、故に首に冠らしむ。」問ふ、「一切の法、皆佛法なり。何の意ぞ、權を簡び實を取つて、體と爲るや。」答ふ、「若し開權顯實は、諸法皆體なり。若し廢權顯實は、前に用ふる所の如し。」問ふ、「何が故ぞ、雙べて因果を用ひて宗と爲るや。」答ふ、「因に因りて果を致し、果は因の爲に辯ぜらる、若し能辯に從はば因を以て宗と爲し、若し所辯に從はば果を以て宗と爲す。二義は本是れ相成ずれば、單に取ることを得ず。又、迹本の二文俱に因果を說くが故なり。」問ふ、「宗を論ずるに化他の因果を簡び、用を論ずるには俱に自と他との權實を取るや。」答ふ、「宗は自行を論ず、故に須く他を簡ぶべし。用は是れ他を益す、是故に雙べ取るなり。」又、問ふ、「用は是れ化他なれば、亦自行の權實を須ひざるべし。」答ふ、「自利を以て他を利せんと欲するが故なり。」「並す、宗も亦應に然るべし、自に化他の因果を行ぜんと欲す、是故に應に他を取るべし。」答ふ、「化他の因果は佛菩提を致すこと能はず、是故に取らず。」『並す、用の（中の化）他の權實も亦他をして極に至らしむること能はず、亦應に取るべからずや。』答ふ、「他は宜しく此を須ひて利すべし、是故に取るなり。」問ふ、「宗と用とは俱に智斷を明す、云何が分別せんや。」答ふ、「自行は智德を以て宗と爲し、斷德を用と爲す。若し化他は、自他の智斷を俱に宗と爲し、化他の智斷を俱に用と爲す。」問ふ、「何が故ぞ五章にして、四ならず六ならざる。」答ふ、「設ひ四、六と作すも亦復疑を生ぜん、無窮の問に答せんことは非なり。」問ふ、「經經各異る意有り、那ぞ五義共に衆經を釋することを得ん耶。」答ふ、「若し經經別して釋せば、但別

【一四】七番共解の中第六に觀心。

【覺觀】覺とは麤分別、觀とは細分別、二者倶に定心を妨ぐる煩惱。

を得て同を得ず。今共に五義を論ずるに、同を得、別を失せず。」

〔一四〕六に觀心を明すとは、標章より料簡に至つて悉く觀心を明す。心は幻焰の如し、但名字のみ有り。之を名けて心と爲す。適其有を言はば色質を見ず、適其無を言はば、復慮想を起す。有無を以て思度すべからざるが故に、故に心を名けて妙と爲す。妙心軌とすべき、之を稱して法と爲す。心法は因に非ず果に非ず、能く理の如く觀ずれば即ち因果を辨ず。是を蓮華と名く。一心、觀を成ずるに由りて、亦轉じて餘心を教ふ、之を名けて經と爲す。釋名竟んぬ。心は本名無く亦無名無し。心を不生と名く、亦復不滅なり、心即ち實相なり。初め觀ずるを因と爲し、觀の成ずるを果と爲す。觀心を以ての故に惡覺起らず。心數の塵勞は、若は同、若は異、皆化せられて轉ず。是を觀心と爲す。五章を標し竟んぬ。觀心の證を引かば、釋論に云はく「一識を色と名け、四陰を名と名く」と。心は但是れ名のみなり。大經に云はく「能く心性を觀ずるを名けて上定と爲す」と。上定とは第一義定なり、心是れ體なるを證す。大經に云はく「夫れ心有る者は皆當に三菩提を得べし」と。心は是れ宗なり。遺教經に云はく「心を一處に制すれば事として辦せざるは無し」と。心は是れ用なり。釋論に云はく「三界は別法無し、唯是れ一心の作なり」と。心能く地獄、心能く天堂、心能く凡夫、心能く賢聖なり。覺觀の心は是れ語の本、心を以て心を分別す。心是れ教相なることを證するなり。觀心の生起とは、心を以て心を觀ずるに、能觀の心に由つて所觀の境有り。觀の境に稱ふを以ての故に、心に從つて解脱を得るが故なり。若し

【三支】無明、愛、取の三。
【七支】識、名色、六入、觸、受、生、老死の七。
【二支】行と有の二。
【四聖】六凡に對して、聲聞、緣覺、菩薩、佛の四の聖位を云ふ。

一の心に解脫を得れば、能く一切衆生をして皆解脫を得しむるが故なり。心王、心數の同時俱起等を分別するは、即ち是れ義相なるが故なり。觀心の開合とは、心は是れ諸法の本なり、心は即ち總なり。別して說くに三種の心有り、煩惱の心は是れ三支、苦果の心は是れ七支、業の心は是れ二支なり。苦の心は即ち是れ法身、是れ心の體なり。煩惱の心は即ち般若、是れ心の宗なり。業の心は即ち解脫、是れ心の用なり。即ち心を開して三と爲す。十二因緣の心の性を分別するに、即ち六道の差別有り。心の濫を分別するに、即ち四聖の高下有り。是を被相と爲し、開合を竟ぬ。觀心の料簡とは、問ふ、「事解、已に足る、何ぞ煩しく心を觀ずるや」と。答ふ、「大論に云はく、『佛は信行の人の爲に佛を以て喩と爲し、法行の人の爲に身を以て喩と爲す』と。今亦是の如し、文字の人の爲には事に約して解釋し、坐禪の人の爲には觀心の意を作す。又、論に四句を作して云はく、『禪有りて多聞無きは是れ實相を知らず、譬へば大闇の中には、目有れども見る所無きが如し。多聞にして智慧無きも亦實相を知らず、譬へば大明の中には燈有りて而も照すところ無きが如し。多聞にして利智慧なるは、是れ所說を應に受くべし。聞無く智無きは、是を人身牛と名く』」。今聞慧をして並に修せしめんとして、事と觀心とを雙べ辨ず。一部に首尾の二意有り、弟子に說行の義有り。華嚴に云はく、『譬へば貧窮の人、日夜に他の寶を數ふるも、自ら半錢の分無きが如し』と。（是れ多聞の失なり。）下の文に云はく、『未得謂得、未證謂證』と（增上慢）。の失なり。何となれば、觀を縱放すること、風中の燈の物を照すこと了かならざるが如

【三觀】一心三觀の行なり。空假中を圓かに現前陰妄の一心に觀ずるを云ふ。

【六卽】天台の立つる所にして、一は以て圓融の法門の高深なることを顯はし、一は以て修觀の位次を說明す、蓋し六とは差別の相對的方面を示し、卽とは平等不二の絕對的方面を闡はす。

けれぱなり。但耳より入り口より出づることを貴みて、都て心を治せず、自ら是として人を陵ぎ、見を增し非を長ず。刃を把りて自ら傷るものなり。解の惡道を牽くこと、其觀を習はざるに由る。若し觀心の人は、心に卽して而も是なり。己卽ち佛に均しと謂ひ、都て經論を尋ねずして增上慢に墮す。此れ則ち炬を抱いて自ら燒くものなり、行の惡道を牽くこと聞を習はざるに由る。若し貧窮を免れんと欲せば、當に三觀を勤むべし。上慢を免れんと欲せば、當に六卽を聞くべし。世間相常住なるは理卽なり、諸の過去の佛に於て、若し一句をも聞くこと有るは名字卽なり、深信隨喜に觀行卽なり、六根清淨は相似卽なり、實智の中に安住するは分證卽なり、唯佛與佛究盡實相は究竟卽なり。心を修めて內に觀ずれば卽ち法財有り、正信して外聞すれば復上慢無し。眼智明に開きて利益を具足す、何ぞ觀解せざるを得ん耶。

妙法蓮華經玄義卷第一上

【一】七番共解の中第七に會異を明す　就中今初に四悉檀を以て五章に對するなり。【四悉檀】佛の說法は四悉檀を出でず。佛此四法を以て衆生を成佛せしむるが故にいふ。一に世界悉檀とは衆生の樂ふ所に從ひて分別して爲に正因緣世界の法を說いて世間の正見を得せしむるを云ふ。二に各各爲人悉檀とは佛衆生の各各の心に相應して法を說き正信を想し善根を增長せしむるを云ふ。三に對治悉檀とは種種の教法の藥もて衆生の惡見の病を對治するを云ひ、四に第一義悉檀とは、佛、衆生の機緣熟するを見て諸法實相を示して悟入せしむるを云ふ、

妙法蓮華經玄義　卷第一下

天台智者大師の說

(二)七に會異とは、問ふ、「佛に所說有れば四悉檀に依る。今五義を解するは、彼と會するや不や。」答ふ、「此義今當に說くべし。先に五章に對し、次に四悉檀を解せん。世界悉檀を釋名に對するに、名は一部を該ね、世界も亦三に冠たり。第一義を體に對するは、最も分明なり。爲人を宗に對するに、宗は因果を論ずれば、爲人生善と義同じ。對治を用に對するに、用の疑滯を破するは、治病と(その)事齊し。悉檀を分別するを教相に對す、教相は後に說くが如し。」問ふ、「何ぞ次第ならずや。」答ふ、「悉檀は是れ佛の智慧なり、利鈍の緣に對するときは則ち四種を成ず。利人は世界を聞きて第一義を解す、此れ釋名に對して體を辨ずること卽ち足る。若し鈍人は未だ悟らず、更に爲人生善、對治破惡を須ひて乃ち第一義に入る。則ち具に四を用ふるなり。五重玄義は意利鈍を兼ね、四悉檀の法は專ら鈍者の爲にす。對する義は是れ同じけれども、次第は則ち異れり。」問ふ、「(大)論は專ら大品を釋して、法華に渉らず、何ぞ彼悉檀を指して此五義を通ずることを得ん。中論は通じて諸經を申ぶ、何の意ぞ用ひざるや。」答ふ、「釋論に云はく、『四悉檀に八萬の法藏、十二部經を攝す』と。法華何ぞ預らざることを得ん耶。中論は通申なれば、理宜しく須用ふべし。

【十二部經】一切經を十二種に分けし名。十二とは修多羅、祇夜、和伽羅那、伽陀、優陀那、尼陀那、阿波陀那、伊帝日多伽、闍陀伽、毘佛略、阿浮陀達磨、優婆提舍經なり。

【四沙門果】聲聞の聖位にして初果(須陀洹)乃至四果(阿羅漢)を云ふ。

【三】是より下四悉檀を解するに先づ十章を分ち、而して次にその名を釋す。

若し具に論を引かば、博くして而も未だ巧ならず。今論の題を取りて五章を申べんに、中の字は體を申べ、觀の字は宗を申べ、論の字は用を申ぶ。瓔珞に云はく「破法の方便、立法の方便、利益衆生の方便」と。論に研覈して執を破し、三寶四諦を立て、四沙門果を得ること有り」と。故に知んぬ、論の字は用を申ぶることを。中觀に理不可思議なるは妙を申べ、觀境の是れ權實なるは法を申べ、觀智の是れ因果なるは蓮華を申べ、觀の詮は經を申ぶ。論の三字を四悉檀に合して、以て五義に對するに通申の意顯る。若し更に論を以て餘經を申ぶれば、偈の初句を取つて三藏を申べ、次の句は通を申べ、次の句は別を申べ、次の句は圓を申ぶ。法華は又第四句の所申と爲す。豈止兩論の此五章を申ぶるのみならんや、五章通じて諸經論を申ぶるなり。」

(三)次に四悉檀を解するに十重と爲す。一に釋名、二に辨相、三に釋成、四に對諦、五に起教觀、六に說默、七に用不用、八に權實、九に開顯、十に通經なり。

釋名とは、悉檀は天竺の語なり。一に云はく「此には翻無し、例せば修多羅の多含なるが如し」と。一に云はく「翻じて宗、成、墨、印、實、成就、究竟等と爲す。」孰れか是なるを知ること莫し。地持の菩提分品に說くらく「一切の行は無常、一切の行は苦、一切の法は無我、涅槃は寂滅なり」。是を四優檀那と名く。此に翻じて印と爲し、亦は翻じて宗と爲す。印は是れ楷定なり、改易すべからず。佛、菩薩は此法を具して、復以て傳教す。此れ教に就いて印を釋するなり。經に「世智の所說は有無二なきが如し、此法は楷定なり、

【南岳師】天台智者大師の師なり。即ち南岳慧思禪師にして北魏の宣武帝延昌四年（西紀五一五）武津縣に生れ、陳の宣帝大建九年（西紀五七七）南岳山に寂す。生年六十四。著書に法華經安樂行儀等六部現存す。

【三】四悉檀の相を辨ず。

【五衆】五蘊（色、受、想、行、識）の舊譯名。

【六道】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天にして之を六凡ともいふ。

此を以て傳授す」と。經に「過去の寂默（諸）牟尼尊は展轉して相傳ふ」と。此れ行に就いて印を釋するなり。經に「增上、踊出、乃至第一有を出し、最上にして衆共に歸仰す、世間に無き所なり」と。此れ宗の義を釋す。彼明文了義、優檀那を釋す。諸師何ぞ宗印を用ひて、四悉檀を翻ずることを得ん。此の如く既に謬る、餘の翻も亦信じ叵し、南岳師は、大涅槃に例して梵漢兼稱す。悉は是れ此（方）言、檀は是れ梵語なり。悉の言は徧なり、檀を翻じて施と爲す。佛は四法を以て徧く衆生に施したまふ、故に悉檀と云ふなり。

（三）二に辨相とは、世界は車の如し、輪輻軸輞和合するが故に車有り、別の車有ること無し。五衆和合するが故に人有り、別の人有ること無し。若し人無くんば、佛は是れ實諦の人なるに、云何ぞ我れ六道の衆生を見ると言はん。當に知るべし、人有ることを。「人は世界の故に有り、第一義には非ず。第一義は是れ實なるべし、餘は實なるべからずや。」答ふ「各各實なり。如如法性等は世界の故に無く、第一義の故に有り。人等は第一義の故に無く、世界の故に有り。五陰、十二入、十八界、一切の名相隔別すること有るを名けて世界と爲す。外人は此世界に迷ひて法相に達せず、或は無因緣にして世界有りと計し、或は邪因緣にして世界有りと計す。大聖は、衆生の聞かんと欲樂する所に隨順して、分別して爲に正因緣世界の法を說きて世間の正見を得せしめたまふ。是を世界悉檀の相と名く。二に各各爲人悉檀とは、大聖は、人の心を觀じて爲に法を說きたまふ。人心各各不同なれば、一事の中に於て或は聽し、或は聽さず。雜業の故に（苦樂）雜りて世間に生じ、雜觸、雜受を得

【一家に云云】天台にて有、空、亦有亦空、非有非空の四門の法をもて機を引導し一實の中道に入ることを明すをいふ。

るが如し。更に破群那經に說くこと有り「人、觸を得ること無く、人、受を得ること無し」と。二人、後世を疑ひて、罪福を信ぜざるが爲に、斷常の中に墮す。故に此說を作す。此意は、傍らに見を破せんが爲にすれども、正しくは是れ信を生ぜしめ、善根を增長して其善法を施すなり。故に各各爲人悉檀と名く。三に對治悉檀とは法有り、對治には則ち有り、實性には則ち無し。對治とは、貪欲多からんものには不淨を觀ずることを教へ、瞋恚多からんものには慈心を修することを教へ、愚癡多からんものには因緣を觀ずることを教へて、惡病を對治す。此法藥を說きて普く衆生に施す、故に對治悉檀の相と名くるなり。四に第一義悉檀とは、二種有り、一に不可說、二に可說なり。不可說とは即ち是れ諸佛、辟支佛、羅漢所得の眞實の法なり。偈を引きて云はく、「言論盡き竟り、心行も亦訖んぬ。生ならず滅ならず、法、涅槃の如し」と。諸の行處を說くを世界と名け、不行處を說くを第一義と名く。二に可說に約せば、一切實、一切不實、一切亦實亦不實、一切非實非不實、皆諸法の實相と名く。佛は是の如き等の處處の經の中に於て、第一義悉檀の相を說きたまふ。此れ亦、是れ一家に四門入實を明すの意なり。故に中論に云はく「向道の人の爲に四句を說くに、快馬の鞭影を見て即ち正路に入るが如し」と。若し四句を聞きて心に取著を生ずるは、皆是れ戲論なり、豈第一義ならん耶。私に十五番を以て其相を釋して解し易からしめん。事の理を說くに隨つて、聞く者歡悅するは是れ世界なり。宿の善心生ずるは是れ爲人なり。新惡を除遣するは是れ對治なり。聖道を悟ることを得るは是れ第一義なり。雙べて假實を

【無漏】漏とは煩惱の義。一切世間の事物は煩惱所含の[illegible]なるが故に有漏と云ひ、出世間の事[illegible]は煩惱無きが故に無漏と云ふ。

【四善根】聲聞の凡位の中、內凡の位にして一に煖法とは聖道に近づき無漏の智火漸く起らんとするの位、二に頂法とは四諦の理を見る智慧明かとなり、恰かも山の頂より四方を見るが如くなれば名く、三に忍法とは四諦の理を忍可樂欲し、又頂煖を忍伏する力強きが故に退せざる位、四に世第一法とは世間有漏の法の中に於て最勝なるが故に世第一と云ふ

說くは是れ世界なり。論に「輪輻輞轂の故に車有り、五陰和合の故に人有り」と。單に假人を說くは卽ち爲人なり。論に「或は人有りと說き、或は人無しと說く」と。單に實法と說くは卽ち對治なり、論に「對治は則ち有り、實性は則ち無し」と。雙べて假實を非するは卽ち第一義なり、論に「言語の道斷へ、心行も亦訖る」と云云。因緣和合して善人と惡人の異り有るは是れ世界なり、善緣和合して善人有るは是れ爲人なり、惡緣和合して惡人有るは是れ對治なり、雙べて善惡を非するは是れ第一義なり。五陰實法の隔歷するは是れ世界、善の五陰より善の五陰を生ずるは是れ爲人、善の五陰を以て惡の五陰を破するは是れ對治、無漏の五陰は是れ第一義なり。善法と惡法と異りあるは是れ世界、今の善法を以て後の善法を生ずるは是れ爲人、今の善法を說きて今の惡法を破するは是れ對治、非善非惡は是れ第一義なり。問うて曰はく『人は善惡に通ず、何ぞ生善は是れ爲人なりと言ふことを得んや。』答ふ『善業は人の所乘たり、其の善をして生ぜしむるが故に爲人と言ふ。』問ふ『爲人は生善ならば秖應に善を生ずべし、那ぞ復惡を斷せんや。』答ふ『爲人の生善なるは是れ舊、是れ正、斷惡は是れ傍、是れ新なり。(對)治の中の治惡は是れ舊、是れ正、生善は是れ新、是れ傍なり云云。』三世の隔別なるは是れ世界、來世は是れ爲人、現世は是れ對治、三世に非ざるは是れ第一義なり。四善根の內外凡と隔別なるは是れ世界、煖、頂は是れ爲人、總別念處は是れ對治、世第一法の眞に近きは是れ第一義なり。見道と修道と異りあるは是れ世界、見道は是れ爲人、修道は是れ對治、無學道は是れ第一義なり。非學

【三種の法】不淨と慈悲と因緣を云ふ。

非無學は是れ世界、見學は是れ爲人、作學は是れ對治、無學は是れ第一義なり。世界悉檀の中に爲人有り、爲人の中に對治有り、對治の中に第一義有り、第一義の中には三悉檀無し。云云。一の悉檀に通じて四悉檀有り、論に云はく、「陰入界の隔別なるは是れ世界、因緣和合の故に人有るは是れ爲人、正世界の邪世界を破するは是れ對治、正世界を聞きて悟入することを得るは是れ第一義なり。爲人に四有りとは、雜業の因緣を以て雜觸、雜受を得るは是れ世界、一事の中に於て或は聽すは是れ爲人、或は聽さざるは是れ對治、人の觸を得ること無く、人の受を得ること無きは是れ第一義なり。對治の中に四有りとは、佛三種の法を以て人の心病を治したまふに、藥、病異るが故に是れ世界、人を治するは是れ爲人、病に對するは是れ對治、實性則ち無きは是れ第一義なり。第一義の中の四とは、一切實、乃至、四句は是れ世界なり。佛、支佛の心中所得の法、眞理諦に非ずやとは、是れ爲人なり。一切の語論、一切の見、一切の著皆破すべく、一切通ずること能はざるを第一義のみ能く通ずとは、是れ對治なり。言語の道斷へ、法、涅槃の如しとは是れ第一義なり。」又通じて作さば、四悉檀の不同なるは通じて是れ世界悉檀なり。四悉徧く衆生を化するは、通じて是れ爲人なり。四悉檀皆邪を破するは、通じて是れ對治なり。一種を聞くに隨ひて皆能く道を悟るは、通じて是れ第一義なり。別して作さば、苦〈諦〉、集諦に約して世界を明し、道諦の能治に約して爲人を明し、道諦の所治に約して對治を明し、滅諦に約して第一義を明す。問ふ、『論に依つて相を解すること已に足れり、何ぞ多釋を用ひんや。』答ふ、

【四】四悉檀を解するに十重ある中第三に釋成。

【五】四悉檀を以て四種の四諦に對す。

【生滅、無生、無量、無作】四種の四諦の名。一に生滅の四諦とは三藏教の實生實滅の四諦を云ひ、二に無生の四諦とは通教の因果當體即空の四諦を云ひ、三に無量の四諦とは別教の隔縁差別無量の四諦を云ひ、無作の四諦とは圓教の斷惑證理の造作を離れたる四諦を說くに名づく。

【六】四悉檀を解するに十重ある中第五に起教觀を明す。教中今初めに起義なり。

『論に云はく、「四悉檀に八萬四千の法藏を攝す」と。(今)私に十五法に約して分別するに何の咎かあらん。』

(四)三に釋成とは、四悉檀は是れ龍樹の所說、四隨は(是れ)禪經に佛の說きたまふ所なり。今、(禪)經を以て(大)論を成ずるに、義に於て彌明かなるものあり。所謂る樂欲に隨ひ、便宜に隨ひ、對治に隨ひ、第一義に隨ふ。樂欲は因に從つて名を得、世界は果に從つて稱を立つ。釋論に云はく、「一切の善惡は欲を其本と爲す」と。淨名に云はく、「先に欲の鉤を以て牽き、後、佛道に入らしむ」と。佛經は修因の相を擧げ、論は得果の相を明す。(故に今)隨樂欲を擧げて、世界悉檀を釋成するなり。隨便宜とは行人所宜の法に隨ひ、各各爲人とは是れ化主の機を鑒みて其可否を照す。論に云はく、「一事の中に於て或は聽し或は聽さず」と。宜しきには聽し、宜しからざるには聽さず。金師の子は數息に宜しく、浣衣の子は不淨に宜しきが如し。經は行者の機宜を擧げ、論は化主の鑒照を明して、以て釋成するなり。餘の兩種は、經論の名義同じ云云。

(五)四に諦に對すとは、直に一番の四諦に對することは前に說くが如し。廣く四種の四諦に對すとは、四種の四諦一一に四悉檀を以て之に對す。復、總じて對すれば、生滅の四諦を世界に對し、無生の四諦を爲人に對し、無量の四諦を對治に對し、無作の四諦を第一義に對す。

(六)五に觀教を起す。幽微の理は觀に非ずんば明かならず、契理の觀は悉檀に非ずんば起ら

【從假入空觀】依正色心の諸法の虚假不實なることを諦究してこれを眞諦の空理に入るを云ふ。即ち空觀なり。

【七覺】七覺支のこと擇法乃至行捨等を云ふ。之に依て修道の思惑を斷ずることを得るなり。

【從空入假觀】空觀に止住せず更に進んで假に入り藥病を分別し應病與藥するを云ふ。假觀なり。

【一切智、道種智、一切種智】大智度論の所說、一切智とは一切法の空相を知る聲緣の智、道種智とは一切道別の道法を知る菩薩の智、一切種智とは一切法の總相別相に通達して無礙なる佛智を云ふ。之を空假中の三諦の觀智に配し得。

【中道第一義觀】三觀中の中觀の德

す。從假入空觀を修する時は、先に正因緣の法を觀ず。此法は內外、親踈隔別す、若し殷勤に樂欲せずんば則ち所習成ぜず、必ず須く曉夜に精勤し、欣悦して厭ふこと無かるべし。此れ即ち世界悉檀に初觀を起すなり。若し假を觀じて空に入らんと欲せば、須く爲人の便宜を識るべし。若し觀を修するに宜しきは、即ち擇、精進、喜の三覺分を用ひて之を起す。若し止を修するに宜しければ、則ち除、捨、定の三覺分を用ひて之を起す。念は兩處に通ずるなり。是を隨宜に善心則ち發ると爲す。若し沈浮の病有らば、須く對治悉檀を用ふべし。若し心沈む時は、念、擇、進、喜を以て之を治す。若し心浮く時は、念、捨、除、定を以て之を治す。若し善く爲人を用ふれば善根則ち厚く、若し善く對治を用ふれば煩惱則ち薄し。七覺の中に於て、隨つて一覺に依るに恍然として失するが如し。即ち此覺分に依りて研修するに、能く眞明を發して第一義を見る。是を、四悉檀を用ひて從假入空觀を起し、一切智を成じて慧眼を發くと爲す。若し從空入假觀に、巧に四悉檀を用ひて道種智、法眼を取るも亦是の如し。若し中道第一義觀を修し、巧に四悉檀を用ひて一切種智、佛眼を取るも亦是の如し。若し一心三觀に、巧に用ふることも亦是の如し。

（七）起教とは、大論に云はく「佛は常に默然を樂ひて說法を樂はず」と。淨名に亦杜口を論じ、此經には言を以て宣ぶべからずと云ふ。大經に云はく「生生不可說、乃至、不生不生不可說」と。又云はく「亦說くことを得べし。十因緣の法は生の爲に因と作る、亦說くことを得べし。十因緣とは無明より有に至るまでにして、此十をもつて衆生を成ず」と。四

の根性を具して、能く如來の四種の法を說きたまふを感ず。若し十因緣所成の衆生有りて下品の樂欲有れば、能く界內の事善を生ず。拙度に惑を破し、析法を以て空に入る。此因緣を具する者には、如來則ち生滅の四諦の法輪を轉じて三藏教を起したまふ。若し十因緣の法所成の衆生有りて中品の樂欲有れば、能く界內の理善を生ず。巧度を以て惑を破し、體法を以て空に入る。此因緣を具する者には、如來則ち無生の四諦の法輪を轉じて、通教を起したまふ。若し十因緣所成の衆生有りて上品の樂欲有れば、能く界外の事善を生ず。歷別に惑を破し、次第して中に入る。此因緣を具する者には、如來則ち無量の四諦の法輪を轉じて別教を起したまふ。若し十因緣所成の衆生にして、上上品の樂欲有れば、能く界外の理善を生じ、一の惑を破すれば、一切の惑を破し、圓頓に中に入る。此因緣を具する者には、如來則ち無作の四諦の法輪を轉じて圓教を起したまふ。

(八)復次に、一一の教の中に各各十二部經有り、亦悉檀を用ひて之を起す。若し十因緣の法所成の衆生にして、正因緣世界の事を聞かんと樂ふものには、如來、則ち爲に直に陰界入等假實の法を說く、是を修多羅と名く。或は四、五、六、七、八、九言の偈を以て、重ねて世界陰入等の事を頌す、是を祇夜と名く。或は直に衆生の未來の事を記し、乃至は、鴿雀の成佛等を記するは、是を和伽羅那と名く。或は孤起の偈を以て、世界陰入等の事を說く、是を伽陀と名く。或は人の問ふこと無きに自ら世界の事を說く、是を優陀那と名く。或は世界の不善の事に約して而も禁戒を結す、是を尼陀那と名く。或は譬喩を以て世界の

名にして、空假二諦双照して心心に寂滅自然に薩婆若に流入するを云ふ。

【一心三觀】絕對主觀たる三觀智を以て絕對客觀たる三千三諦の妙境を照す天台の宗教の極意心要を云ふ。

【七】起教觀の中、次に起教を說く。即ち初め不可說を明し、次に可說を明す。可說の中に又經と論とあり、而して經の中初めに四教。

【八】次に十二部に約する中、また初めに四教、次に五時。

【修多羅】スートラ(Sūtra)經の長行。

【祇夜】ゲーヤ(Geya)重頌。

【和伽羅那】ブヤーカラナ(Vyākaraṇa)授記。

【伽陀】ガーター(Gāthā)諷誦。

【優陀那】ウダーナ

ナ(Udāna) 無問自說。
【尼陀那】ニダーナ(Nidāna)因緣。
【阿波陀那】アバダーナ(Avadāna)譬喩。
【伊帝目多伽】イティブリタカ(Itivṛtaka)本事。
【闍陀伽】ジャータカ(Jātaka)本生譚。
【毘佛略】バイブルヤ(Vaipulya)方廣。
【阿浮陀達磨】アブタダルマ(Adbhuta-dharma)未曾有。
【優婆提舍經】ウパデーシャ(Upadesa)論議。

事を說く、是を阿波陀那と名く。或は本昔世界の事を說く、是を伊帝目多伽と名く。或は本昔受生の事を說く、是を闍陀伽と名く。或は世界廣大の事を說く、是を毘佛略と名く。或は世界未曾有の事を說く、是を阿浮陀達磨と名く。或は世界の事を問難す、是を優婆提舍と名く。此は是れ世界悉檀に衆生を悅ばしめんが爲の故に十二部經を起す。或は十二種の說を作して衆生の善を生ぜしめ、或は十二種の說を作して衆生の惡を破し、或は十二種の說を作して衆生をして悟らしむ。是を四悉檀に三藏の十二部經を起すと名く。

若し十因緣の法所成の衆生にして、空を聞かんと樂はば、直に爲に五陰、十二入、十八界は卽空ならざる無しと說く。或は四、五、六、七、八、九言の偈を以て、重ねて陰界入卽空を頌す。或は能く陰入界卽空と達する者には、便ち授記を與ふと說く。或は孤然として、陰界入卽空なりと說く。或は問無きに自ら陰界入卽空なりと說く。或は陰界入卽空なりと知るを名けて禁戒と爲すと說く。或は如幻如化等を擧げて、陰界入の卽空なるを喩ふ。或は本昔の世間國土卽空なりと說く。或は本生の陰界入卽空なりと說く。或は卽空は廣大なりと說く。或は陰入界の卽空は希有なりと說く。或は陰界入の卽空なるを難問す。是を隨樂欲世界悉檀を以て、通教の十二部經を起すと爲す。或は十二種の說卽空生善を作し、或は十二種の說卽空破惡を作し、或は十二種を作して卽空を說き、理を悟らしむ。是を四悉檀に通教の十二部經を起すと爲す。

若し十因緣の法所成の衆生有りて、一切世界、一切の陰界入、及び不可說の世界、不可

說の陰界入等の事を聞かんと樂はば、如來卽ち直に一切の正世界、及び陰入等一切の翻覆世界、及び陰入等、一切の仰世界、及び陰入等一切の倒住世界、及び陰入等の一切の穢國、一切の淨國、一切の凡國、一切の聖國、是の如き等の種種の世界、不可說の世界、種種の陰入界、不可說の陰入界を說く云云。或は四言、乃至、九言の偈を作して重頌す。或は孤起の偈を以てす。或は能く國土陰入界を知る者は、卽ち與記成佛す。或は能く知る者は卽ち禁戒を具す。或は譬喩を以て說く。或は昔の國土の事を說く。或は昔の受生の事を說く。或は廣大の事を說く。或は希有の事を說く。或は論議の事を說く。是の如き等の十二種の說は其樂欲を悅ばしめ、或は其善を生ぜしめ、或は其惡を破し、或は悟入せしむ。是を四悉檀に別敎の十二部經を起すと名く。

若し十因緣所成の衆生ありて、不可說の國土、不可說の陰界入皆是れ眞如實相なることを聞かんと樂はば、卽ち直に一切の國土依正は卽ち是れ常寂光、一切の陰入卽ち是れ菩提にして、是を離れて菩提有ること無し。一色一香も中道に非ざる無く、是を離れて別の中道有ること無し、眼、耳、鼻、舌は皆是れ寂靜門なり、是を離れて別の寂靜門有ること無しと說く。或は偈を作して重頌す。或は孤起の偈を作し、或は無問自說を作し、或は知る者に記を與へ、或は知る者は戒を具す、或は譬喩を作し、或は昔の世界を指し、或は本生を指し、或は廣大を說き、或は希有を說き、或は論議を作す。是を樂欲に赴く世界悉檀に圓敎の十二部經を起すと爲す。或は十二種の說を作して妙善を生ぜしめ、或は十二種の說

【九】可說の中經と論ある中、是より下論に約す。

【摩得勒伽】マートリカー(Mātṛkā)論藏の別名。譯して本母といひ行母と云ふ。

を作して頓に惡を破し、或は十二種の說を作して頓に理に會せしむ。是を四悉檀に頓敎の十二部經を起すと爲す。

復次に、別、圓兩種の四悉檀を用ひて十二部經を說くは、是れ華嚴敎を起すなり。但一番の四悉檀を用ひて十二部經を說くは、是れ三藏敎を起すなり。若し四番の四悉檀を用ひて十二部經を說くは、是れ方等敎を起すなり。若し三番の四悉檀を用ひて十二部經を說くは、是れ般若敎を起すなり。若し但一番の四悉檀を用ひて十二部經を說くは、是れ法華敎を起すなり。大論に云はく、「四悉檀に十二部經を攝す」とは、其義上の如し。

(九)地持に云はく、菩薩は摩得勒伽に入りて不顚倒論を造す、正法をして久しく世に住することを得せしめんが爲に論を作るなり。菩薩は是禪に住して衆生を觀るに、佛世を去る後に於ては根緣不同なれば、論を作りて經を通ず。天親は兩番の四悉檀を用ひて地論を作り、華嚴を通ず。舍利弗は初番の四悉檀を用ひて毘曇を作り、五百の羅漢は毘婆沙を造り、三藏の有を見て道を得るの意を通ず。訶梨跋摩も亦初番の四悉檀を用ひて成實論を造り、三藏の見空得道の意を通ず。迦旃延も亦初番の四悉檀を用ひて昆勒論を造り、三藏の空有を見て得道する意を通ず。龍樹は四番の四悉檀を用ひて中論を造る、三番は正しく大乘を通じ、一番は傍に三藏を通ず。彌勒は二番の四悉檀を用ひて地持を造り、華嚴を通ず。無著も亦二番の四悉檀を用ひて攝大乘を造る。龍樹は三番の四悉檀を用ひて大智度を造り、大品を通ず。天親は一番の四悉檀を用ひて法華を通ず。世人傳ふらく、「天親と龍樹と各涅槃論を

【一〇】四悉檀を解するに十重を立つる中、第六に說默を明す。

【身子】舍利弗のこと。

作る」と。未だ此土に來らざるも、準例して知んぬべし。又、五通の神僊、種種の諸論、釋天の善論、大梵の出欲論は、皆初番の悉檀を用ふ。方便利益する意なり。書に云はく、「文行誠信、禮を定め詩を刪り、裕を後昆に垂る」とは即ち世界(悉檀)なり。人を官するに德を以てし賞して世に延ぶるは、即ち爲人(悉檀)なり。叛けるは之を伐ち、故(の罪)を刑するに小無きは、即ち對治(悉檀)なり。政、清靜に在り、道、天心に合して人王無上なるは、即ち是れ世間の第一義悉檀なり。

(一〇)六に聖說、聖默を起すとは、思益に云はく、「佛、諸の比丘に告げたまはく、汝等當に二事を行ずべし。若は聖說法、若は聖默然なり」と。聖說は上に辨ずるが如し。聖默然とは、夫れ四種の四諦は並に是れ三乘の聖人所證の法なり。下凡の知る所に非ず、故に說くべからず。假令ひ之を說くとも、盲人の爲に燈を設くるが如し、何ぞ無目の者を益せん乎。故に不可說をもつて聖默然と名く。華嚴の中に世界の不可說不可說を數ふるは、理極の不可說不可說を明す。無量と無作との兩番の四諦、不生生、不生不生の法に約して不可說を明す。不可說なれば聖默然と名く。若し三藏の中には、憍陳如比丘、最初に眞實の知見を獲得し、寂然として聲字無し。身子の云はく、「吾聞く、解脫の中には言說有ること無し」と。是れ生滅の四諦生生の法に約して不可說を明すなり。不可說なれば聖默然と名く。淨名の杜口、大集の無言菩薩は、「智を以て知るべからず、識を以ても識るべからず。言語の道斷へ、心行亦訖んぬ。不生不滅にして、法、涅槃の如し」と。此四番の四諦不可說に約

【脇比丘】パールシュハ（Pārśva）付法藏傳の第十祖、小乘有部宗の人にて、第四結集を爲す馬鳴の師なり。
【馬鳴】アシュバゴーシャ（Aśvaghoṣa）元中天竺の外道なれども脇比丘の弟子となり大いに大法を弘通す。

す、不可說なれば聖默然と名く。若し大品には、句句悉く不可得なり。不可得とは、身を以て得べからず、心を以て得べからず、口を以ても得べからざるなり。此れ三番の四諦、生不生、不生生、不生不生の法に約して不可得を明す。不可得の故に不可說なり、不可說を聖默然と名く。此經に明さく、「止みなん止みなん說くべからず、我法は妙にして思ひ難し。是法は示すべからず、言辭の相寂滅す。言を以て宣ぶべからず、思量分別の能く解する所に非ず」と。此れ無作の四諦、不生不生の法に約して不可說を明すなり、不可說の故に聖默然と名く。

問ふ、「樂他の爲の故に聖說法有り、自樂の爲の故に聖默然と名く。默然は則ち他を益せざるや」。答ふ、『正しくは自樂の爲にし、傍らに亦他を益するなり。若し人、文を厭ひ言諦を好まざれば、是人を悅ばしめんが爲に、かるが故に聖默然す。律の中に、他を福せんが爲の故に供を受け、聖則ち默然したまふが如き、脇比丘の馬鳴を對破するが如きは、是故に默然す。佛、結跏し、正念して、身心動ぜざるが如し。無量の人をして道跡を悟ることを得せしむ、是故に默然す。皆是れ四悉檀に此默然を起し、一切を利益す。何ぞ無益と謂はん』。問ふ、『論に云はく、「四悉檀に八萬四千の法藏を攝す」と、其相云何』。答ふ、『賢劫經に云はく、「佛の初發心より去つて、乃至舍利を分つまで、凡そ三百五十の法門あり。一一の門に、各六度有り、合して二千一百度なり。是度を用て四分の煩惱を對破すれば、合して八千四百を成ず。一變して十と爲るに約して、合して八萬四千なり。若し八萬四千

【二】四悉檀を解するに十重を分つ中、第七に用不用を明す。

【富樓那】プールナ(Purna)佛十大弟子の中、說法第一の阿羅漢にして法華の因緣周の說法を聽きて開悟し當來法明如來の記莂を受く。

の法藏の名を作すは、是れ世界悉檀の攝なり。若し八萬四千の塵勞門の名を作すは、爲人悉檀の攝なり。八萬四千の三昧、八萬四千の陀羅尼門も亦是の如し。若し八萬四千の對治、八萬四千の空門を作すは、對治悉檀の攝なり。若し八萬四千の諸波羅蜜、八萬四千の度無極を作すは、第一義悉檀の攝なり。又一說に、佛地に三百五十の法門有り、一一の門に十善有り、合して三千五百の善有り、四分を治すれば則ち一萬四千なり。又六根を治すれば即ち八萬四千なり。

（二）七に得用、不得用を明さば、夫れ四悉檀は獨り如來のみ有りて究竟して具に得、微妙に能く用ひたまふ。下地已去は得用同じからず。凡そ四句有り、得ず用ひず、得て而も用ひず、得ずして而も用ひ、亦は得亦は用ふ。凡夫外道は苦集流轉して、尚四悉檀の名字だも知ること能はず。誰か其得を論ぜん。既に其れ得ず、云何ぞ能く用ひんや。若し三藏教の二乘は、殷勤に自ら行ずる者は苦を知り、集を斷じ、道を修し、滅を證して眞に入る、亦名けて得と爲すべし。衆生を度せず、故に用ふること能はざるなり。假令ひ用ふる者も、機に逗うて當らず、故に淨名に滿願を訶して云はく、「人の根を知らずんば法を說くべからず、穢食を以て寶器に置くこと無し」と。富樓那の如きは、九句に外道を化して反つて蚩笑せられ、文殊は暫く往きて師徒皆伏す。此は是れ樂欲を知らず、世界悉檀を用ふること能はざればなり。身子の如きは、二弟子を教へて善根發せず、更に邪疑を生ず。此れ爲人悉檀を用ふること能はざればなり。五百の羅漢の如きは、迦絺那が爲に四諦を說きて都て利益無

【析法と體法】析法とは三藏敎にて諸法を分析して空なりと悟る體法、體法とは通敎にて色即是空なりと體達して空を悟るを云ふ。

【十住、十行、十廻向】何れも別敎内凡の位にして十住は界内の見思塵沙を斷じ、界外の塵沙を伏す、十行は界外の塵沙を斷じ、十廻向は界外の無明を伏する位。

【五品弟子】圓敎の行位の八階の第一なり。即ち隨喜品、讀誦品、說法品、兼行六度、正行六度の五品を云ふ。

【二三】四悉檀を解するに十重を立つる中、第八に權實を明す。

し。佛は爲に不淨觀を說きたまふに即ち惡を破することを得たり。此れ對治悉檀を用ふること能はざればなり。身子の福增を度せざるが如き、大醫にして治せざれば小醫は手を拱く、五百も皆度せず。佛これを度して即ち羅漢を得たり。此れ第一義悉檀を用ふること能はざればなり。支佛も亦然なり、是を得て而も用ひずと名く。次に三藏敎の菩薩を明さば、苦集を知り、道を修すと雖も、正結惑を伏して未だ滅の諦行らず。但三悉檀を得るのみ。未だ一を得ずと雖も、而も能く四を用う。所以は何ん、病導師の船檝を具足して身は此岸に在れども而も人を彼岸に度すが如し。常に人を化するを以て事と爲し、自ら未だ度を得ずして先に人を度す。是を不得而用と爲す。通敎の一乘は、體門は巧なりと雖も、得て而も用ひざること三藏と同じ。通敎の菩薩は、初心より六地に至るまで、亦は得亦は用ふるも、用ひて而も未だ巧みならず。七地に假に入りて、其用則ち勝る。若し別敎の十住は、但析法と體法と兩種の四悉檀を得て、而も未だ用ふること能はず。十行に方に能く用ふ。十廻向には進んば相似の四悉檀を得、亦能く相似に用ゆ。登地は分眞に得、亦分眞に用ふ。圓敎の五品弟子は未だ得用すること能はず、六根淸淨は相似に得用し、初住は分眞に得用す。唯佛のみ究竟して得、究竟して用ふ。

(二三)八に四悉檀の權實を明さば、四諦に各四悉檀を辨ずるは、此れ通途の說のみ。釋論に云はく「諸經は多く三悉檀を說きて第一義を說かず」とは、此れ三藏を指す。三藏は多く因緣生生の事相を說くも、色を滅して空を取れば、少しく第一義を說く。三藏の菩薩に就か

ば、但三悉檀に約して四を明す。若し佛に就かば即ち四を具す、闕りと雖も終に是れ拙度なり、權に小機に逗ず。若し通教の四諦に四悉檀を明すは、法即ち眞なりと談す、其門則ち巧なり。故に釋論に云はく、「今第一義悉檀を說かんと欲するが故に、摩訶般若波羅蜜經を說く」と。佛、菩薩に就かば皆四有ることを得。而るに方便の眞諦に約して以て悉檀を明せば、猶權に屬するなり。若し別教の四諦に四悉檀を明すは、中道に約すれば此意則ち深し。而して猶是れ歷別なれば、別の相にして未だ融せず。教道は是れ權、此れ則ち妙に非ず。今、圓教の四諦に四悉檀を明すは、其相圓融す、最實の說なり。故に四悉檀は是れ實、是れ妙なり。若し此權實を用ふるに、五味の教に約せば、乳教は即ち四權四實有り、酪教は但四權有り、生蘇は則ち十二權四實有り、熟蘇は則ち八權四實有り、涅槃は十二權四實有り、法華は四種俱に實なり云云。問ふ、「三藏の菩薩は四悉檀を得と雖も、通教に望むれば但三悉檀を成ず。今通教を別教に望むること云何。」答ふ、「二義有り。當通に是れ四を得るも、別に望むれば但三を得るのみ。」問ふ、「別教を圓に望むるに、亦爾るや不や。」答ふ、「一、例せず、圓と別とは證道同じきが故に。二、竝して曰はく、「三藏と通教とは俱に眞諦を照すと、亦俱に四を得べしや。」答ふ、「三藏は眞諦同じと雖も、菩薩は惑を斷せず、故に一を闕く。圓と別とは俱に惑を斷ず、是故に俱に四なり。」又竝す、「三藏、通等は四なりと雖も而も三なり、是れ權なるべし。別教は四にして而も三ならず、應に是れ權に非ざるべし。」答ふ、「三藏と通教は教證俱に是れ權なり、故に但三にして四無し。別教は教道は權、

【一三】四悉檀を解するに十重ある中第九に開權顯實を論ず。
【三法】聲聞、緣覺、菩薩の三乘。

證道は實なり。證に從はば則ち四、教に從はば則ち權なり。』又難す、『證道は四有れども教道は應に三なるべし。』答ふ、『若し地前を取りて教道と爲さば、應に所聞の如くなるべし云云。』

(一三)九に開權顯實とは、一切の諸法皆妙ならざること莫く、一色一香も中道に非ざるは無し。衆生の情、妙を隔つるのみ。大悲、物に順じて世と諍はず、是故に諸の權實不同を明す。故に無量義に云はく、『四十餘年、三法、四果、二道合せず』と。今方便の門を開して眞實の相を示す、唯一大事因緣を以て但無上道を説き、佛知見を開して悉く究竟の實相に入ることを得せしむ。化城を除滅するは即ち是れ麤を決し、皆寶所に至るは即ち是れ妙に入るなり。若し乳教の四妙と、今の妙とは殊ならず、唯其四權を決して今の妙に入らしむ。是故に文に云はく、『菩薩は是法を聞きて、疑網皆已に除こる』とは、即ち此意なり。酪教の四權、生蘇の十二權、熟蘇の八權を決して皆妙に入ることを得。故に文に云はく、『千二百の羅漢悉く亦當に作佛すべし』と。又云はく、『聲聞の法を決了するに、是れ衆經の王なり。聞き已つて諦に思惟し、無上道に近くことを得ん』と。方等、般若に論ずる所の妙は、亦今の妙と殊ならず。權を開して實を顯はすは、其意此に在り。問うて曰はく、『諸の權の悉檀を決して、同じく妙の第一義と成す。當に爾るべしと爲んや不や。』答ふ、『權を決して妙に入るなり。自在無礙なり、假令ひ妙の第一義も三を隔てず、三も一を隔てず、一三自在なり。今且らく一種の解釋を作さん。若し諸の權の世界悉檀を決して妙の世界悉檀と

【一四】四悉檀を解するに十重を分つ中、第十に通經。

爲すは、即ち是れ釋名の妙に對するなり。亦是れ九法界の十如是の性相の名、同じく佛法界の性相と成り、一切の名を攝す。亦是れ天性を會して父子を定め、更に與に字を作し、之を名けて兒と爲す。我實に汝が父、汝は實に我子なり。若し諸の權の第一義悉檀を決して妙の第一義悉檀と爲すは、即ち經體の妙に對するなり。即ち是れ佛の知見を開して眞實の相を示し、引いて寶所に至らしむるなり。若し諸權の爲人悉檀を決して妙の爲人悉檀と爲すは、即ち是れ宗妙に對するなり。此經に云ふが如し、「各諸子に等一の大車を賜ふ」と。若し諸の權の對治悉檀を決して妙の對治悉檀に入るは、即ち是れ用の妙に對するなり。文に云はく、「此寶珠を以て、用ひて所須に貿ふ」と。又云はく、「此の如きの良藥、今留めて此に在り。用ひて之を服すべし、差えざることを憂ふること勿れ」と。經に云はく、「正直に方便を捨てて但無上道を說く、執を動じ疑ひを生ぜば、佛は當に爲に除斷して、盡く餘り有ること無からしむべし」と。又云はく、「我已に滅度を得れども、聞きて亦憂惱を除く」と。「若し是れ諸の權の四悉檀の同異を分別して、決して此經の妙悉檀の中に入るに、復同異を見ず。昔未だ曾て說かざる所、今皆當に聞くことを得べし」と。即ち是れ妙にして同異ならず、即ち教相の妙に對するなり。即ち文に云ふが如し、「種種の道を示すと雖も、其れ實に一乘の爲なり」と。諸の同異を分別すと雖も、同異ならざることを顯さんが爲に、無分別の法を說くなり。」と。

〔一四〕十に通經とは、問ふ、「今四悉檀を以て此經を通ず、此經の何の文か四悉檀を明す耶」。答

【一七】是より以下五重各說す。就中初めに名を釋する中、先づ章を開き、而して次に通別を判ず。

ふ。文の中要由に皆此意有り、具に引くこと能はず、今略して迹と本との兩文を引くべし。方便品に云はく、「衆生の諸行、深心の所念、過去所習の業、欲、性、精進の力、及び諸根の利鈍を知り、種種の因緣、譬喩、亦は言辭を以て、應に隨つて方便して說く」と。此れ豈に是れ四悉檀の由に非ずや。欲とは即ち是れ樂欲、世界悉檀なり。性とは是れ智慧の性、爲人悉檀なり。精進力は即ち是れ破惡、對治悉檀なり。諸根の利鈍とは即ち是れ兩人情を得ること同じからず、即ち是れ第一義悉檀なり。又壽量品に云はく、「如來明かに見て錯謬有ること無し、諸の衆生に種種の性、種種の欲、種種の行、種種の憶想分別有るを以ての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因緣、譬喩、言辭を以て種種に說法したまふ。所作の佛事、未だ曾て暫くも廢せず」と。種種の性とは即ち是れ爲人なり、種種の欲とは即ち是れ世界なり、種種の行とは、即ち是れ對治なり、種種の憶想分別とは即ち是れ推理、邪の憶想を靜じて第一義を見ることを得るなり。兩處の明文に四義具足す。而して皆衆生の爲に說法すと言ふ、豈四悉檀に教を說くの明證に非ずや。

【一八】第二に、別して五章を解す。初に名を釋するに四と爲す、一に通別を判じ、二に前後を定め、三に舊を出し、四に正しく解す。妙法蓮華の衆經に異るは別なり、俱に稱して經とするは通なり。此二名を立つるに凡そ三意に約す、謂はく、教、行、理なり。緣に從ふが故に教別、說に從ふが故に教通なり。能契に從ふが故に行別、所契に從ふが故に行通なり。理は名に從ふが故に別、名は理に從ふが故に通なり。略して說くこと竟んぬ。夫れ教

【阿那波那】アーナパーナ（Anapana）舊譯には安般と云ふ。數息觀にして出入の息を數へて禪定に入る觀法の名。

は本機に應ず、機宜同じからざるが故に部部別異なり。金口の梵聲は通じて是れ佛說なり、故に通と別との二名有り。行に約せば、泥洹眞の法寶は、衆生種種の門を以て入る。五百の比丘各身因を說くが如し、佛言はく、「正說に非ざること無し」と。三十二菩薩各不二法門に入る、文殊稱して善しとなす。大論に明さく、「阿那波那は皆是れ摩訶衍なり、不可得なるを以ての故に」と。當に知るべし、行に從へば則ち別なれども、所契は則ち同じきことを。求那跋摩の云はく、「諸論各端を異にすれども、修行の理に二有ること無し」と云ふ。理に約せば、理は則ち二ならず。（而も名字一に非ず。智度に云はく、「般若は是れ一法なるも、佛は種種の名を說きたまふ」と。大經に云はく、「解脫も亦爾なり、諸の名字多し。天帝釋に千種の名有るが如し。名異なるが故に別、理一なるが故に通なり。今、妙法の經と稱す、即ち是れ教の通別なり。各諸子に等一の大車を賜ひ、是寶乘に乘じて直に道場に至るとは、即ち行の通別なり。或は實相と言ひ、或は佛知見、大乘、家業、一地、實事、寶所、繫珠、平等大慧等と言ふは、即ち是れ理の通別なり。此三義に約す、故に兩名を立つるなり。問ふ、「教主同じからず、教を說くること亦異なるに、云何がして今日の梵聲を名けて教通と爲すと言ふや。」答ふ、「此に兩義有り。一には當分、二には跨節なり。當分とは、三藏の佛の如し。種種の緣に赴きて種種の教を說く、緣異なるが故に教別、主は一なるが故に教通なり。此教に依つて行ずるに、能契と所契とあり、種種に互に名くれども、理は種種あること無し。經に言はく、「即ち瓔珞を脫ぎ、弊垢の衣を著し、譬つて言は

【二六】妙法の二字に就いてその前後を簡定す。

【二七】諸師の見解を出だし、而して後之を難ず。

【道場の觀】道場寺の慧觀法師。

く、勤作して復た餘に去ること勿れ。并に汝に價を加へ、及び足に油を塗らん」と。此れ則ち身口の行理齊分して說く、餘の解を作すことを得ざるなり。通、別、圓等の敎、行、理も、當分に亦た圓なり。斯義解し易し、而して理は融じ難し云云」。二に將師とは、何れの處にも別して四敎主各各の身、各各の口、各各の說有り。復其無量の功德莊嚴の身を隱して、現じて丈六の紫金身と爲り、甘露常樂の味を說かずして、鹹酢無常の辛辣を說き、王者の服飾を棄てて土器を執持するは、名けて方便と爲す。若し方便の門を開して眞實の相を示さば、即ち向の身是れ圓常の身、向の法是れ圓法なり。向の行、向の理、皆即ち眞實なり。此の如く、通じて是れ一音の敎なれども、而も大小差別有り。能契に長短有るも所契は唯一極なり。種種の名も一究竟を名とし、唯一の究竟は衆名に應ず。此の如く敎行理の通別を論ずることを作すは、相は則ち解し難く、理は即ち明め易し云云」。

(二六)二に妙法の前後を定むとは、若し義の便に從はば、應に先に法を明し、(後)卻つて其妙を論ずべし。下の文に云はく、「我が法は妙にして思ひ難し」と。若し名の便に從はば、應に先に妙、次に法なるべし。彼を美めんと欲して、稱して好人とするが如し。篤く論ずるに人無し、何ぞ好と稱する所あらん。必ず應に人を先にし好を後にすべし。今の題は名の便に從ふ、故に妙を先にし法を後にす。解釋は義の便(に從ふべし)、故に法を先にし妙を後にす。復前後すと雖も、亦相乖かず云云。

(二七)三に舊解を出す。舊解甚だ多ければ、略して四家を出すべし。道場の觀の云はく、「物に

【會稽の基】法華寺の慧基法師。

【光宅の雲】梁三大法師の一光宅寺の法雲なり。

【有餘、無餘】聲聞の極果にして猶ほ肉體は存すれども精神的に涅槃の證りを得たる境地を有餘と云ひ、肉體精神共に滅し灰身滅智したる涅槃の境涯を無餘と云ふ。

應じて三を說く、三は眞實に非ず、終に其一に歸す、之を無上と謂ふ、無上の故に妙なり」と。經を引きて云はく「是乘は微妙にして淸淨第一なり、諸の世間に於て上有ること無しと爲」と。又云はく「言譚を象外に寄すれども而も、其體は精麤を絕す、所以に妙と稱す」と。又經を引く「是法は示すべからず、言辭の相寂滅す」と。會稽の基の云はく「妙とは同を表するの稱なり、昔は三因異に趣き、三果殊に別なれば、妙と稱することを得ず」と。北地師の云はく、「理は則ち三に非ず、三教を麤と爲し、非三の旨を妙と爲す」と。此れ意同じうして而も辭弱し。光宅の雲の云はく、「妙とは一乘の因果の法なり。昔の因果に各三の麤有るに待するに、今の教の因果に各三の妙有り。昔の因果の麤とは、因の體狹く、因の位下く、因の用短し。聲聞は四諦を修し、支佛は十二因緣を修し、菩薩は六度を修す。三因差別して、相收むることを得ざれば、因の體是れ狹し。昔第九の無礙道の中に行ずるを、菩薩と名く、伏道にして斷ぜず、未だ三界を出でず、故に因の位下しと名く。第九の無礙は止四住を伏して無明を伏せず、故に用短しと言ふ。是を昔の因は三義の故に麤と爲すなり。昔の果、麤なりとは、體狹く、位下く、用短し。有餘と無餘とは業德備はらず、故に體狹しと言ふ。位化城に在りて變易を出でず、故に位下しと言ふ。第九の解脫は、止四住を除いて無明を破せず。又八十年の壽は、前は恒沙を過ぎず、後は上數に倍せず、是故に用短し。是をもつて昔の果は三義の故に麤と爲す。今の因は體廣く、位高く、用長しとは、三を會して一と爲し、萬善を收束す、故に體廣しと言ふ。此界內無礙道

の中に行ずるのみに不ず、界外に出でて菩薩の道を行ず。故に位高しと言ふ。無明に惑を伏することは但円住のみに不ず、進んで無明を伏す、故に用長し（是を以て）今の因は三義妙なり。今の果の三義妙なりとは體廣く、位高く、用長し。體に萬德を備へ、衆善普く會す、故に體廣しと言ふ。位は實所に至る、故に位高しと言ふ。五住の惑を斷じ、神通をもつて壽を延べ衆生を利益す、故に用長しと言ふ。（即ち）今の果は三義の故に妙と為す。即ち是れ一乘の因果の法妙なるなり。

今古の諸釋（の中）、世に光宅を以て長と為す。南方の大乘を釋するを觀るに、多くは羅什に承け、羅什は多く通の意に附す。光宅の妙を釋するも、寧ぞ遠きことを得ん乎。今先に光宅を難ず、餘は風を望まんのみ云云。因體闊狹の四句とは、若し昔の因の體狹きを昔と為すと謂はば、何を指してか昔と為すや。若し三藏等を指さば然るべし、若し法華已前を指して皆稱して昔と為さば、此れ爾るべからず。何となれば、般若には、一切の法皆摩訶衍なりと說く、（即ち）運載せざる靡し。思益に明さく、「諸法の相を解すは是れ菩薩の徧行」と。華嚴の入法界は祇洹を動ぜず、淨名の一念に一切法を知るは是れ道場に坐すと為す。昔の因此の如し、收めざる所無し、若爲ぞ是れ狹ならんや。若し今の因の體廣しと言はば、那ぞ忽ち法華に「一乘を明すは是れ了、佛性を明さざるは是れ不了なり」と言はん。那ぞ復、法華に「緣因を明すは是れ滿、了因を明さざるは是れ不滿なり」と言はん。那ぞ復「前は恆沙に過ぎ後は上數に倍すれども、猶是れ無常の因なり」と言はん。既に無常の因を以て那ぞ常

【法性身】法身の別名。佛三身の一。佛身法性の如くにして十方無量の光明音聲等もて無量の法身菩薩を濟度する身を云ふ。

果を得ん、因果倶に無常ならば、此無常の人那ぞ佛性を見ん。了義に非ざるが故に、體に行一を收めず、滿字に非ざるが故に體に敎一を收めず、常住に非ざるが故に體に人一を收めず、佛性を見ざるが故に理一を收めず。當に知るべし。今の因は狹が中の狹、狹は則ち是れ麤なり。昔の體既に廣し、昔は還つて是れ妙ならん。此一難已に麤妙を知る、遠復具に後の難を作さん耳。因位高下の四難とは、般若は是れ無上明咒、無等等明咒なり。上人も應に上法を求むべし。因の敎則ち下からず。大論に云はく「菩薩は三界の外に出で法性身を受け、菩薩の行を行ず」と。因位則ち下からず。淨名に菩薩の德を歎じて「無等等の佛の自在慧に近し。十方に魔王と作る者皆是れ不可思議解脫に住す」と。則ち因人下からず。淨名に云はく「佛道を成じて法輪を轉ずと雖も、而も菩薩の道を行ず」と。又云はく「諸佛の祕藏に入ることを得ざるは無し」と。則ち理を見ること下からず。是の如きの因位は四一皆高し、云何ぞ麤なりと言はん。若し今の因位高しと言はば、敎那ぞ忽ち是れ第四時なる、位那ぞ忽ち無礙道に住して無明を伏する、人那ぞ忽ち是れ生死の身にして法性身に非ざる、理那ぞ忽ち無常にして佛性を見ざるや。當に知るべし、今の因は皆四一無く、其位下くして麤なり。昔の因は四一を具し、高くして而も妙なることを。因用長短の四難とは、釋論に云はく「處處に皆無明三昧を說く」と。是れ敎の用長し。是事を知らざるを名けて無明と爲す。「佛は一切種智をもつて一切の法を知る。明と無明と二無し、若し無明不可得なりと知らば亦無明無し、是を入不入法門と爲す」と。是れ則ち行長し。「又一日

【阿惟越】アビニヴルトヤ(Avinivartya)阿鞞跋致とも云ふ。不退轉、無退の義なり。成佛するに定まりて再び凡夫地に墮することなき菩薩の位に名づく。

般若を行ず、日の世を照すが如き螢火蟲に勝る、若し人薝蔔林に入れば餘香を嗅がず、誰か復た二乘の功德を樂はん。座に體を須ひず、華、身に著せず、皆是れ阿惟越の類なり」と。則ち人の用長し。「色無邊なるが故に般若亦無邊なり、受、想、行、識無邊なるが故に般若亦無邊なり」と。是れ則ち理長し。當に知るべし、昔の教、行、人、理は倶に長し、長きが故に是れ妙なることを。若し今の因の用長しと謂はば、那ぞ復た法華は是れ麤相の教と言はん。教則ち短なり。行も麤相なれば、行則ち短なり。麤相は佛性を明らめざれば、理則ち短なり。四一既に闕く、今は短にして而も麤なり。昔の用は既に長し、長ければ則ち是れ妙なり。果體廣狹の四難とは、若し昔の果の體は是れ有餘、無餘にして、常樂の德を備へざれば狹と爲し麤と爲すとは、此れ豈然らん乎。般若は是れ佛母にして十方の佛皆護す。淨名に云はく、「未だ曾て此の實相深經を聞かず」と。當に知るべし、昔の果の體に樂德を備ふることを。若し今の果の體廣なりと謂はば、應に滿と了とを備ふべし。何が故ぞ復た、亦は滿不滿、亦は了不了なりと言ふ。何が故ぞ復た佛果無常と言ふ、亦我、樂、淨等無けん。樂德缺然として廣の義安ぞ在らん。若し體廣ならば、法身は應に一切處に徧すべし。何が故ぞ復た、壽止八十、或は七百阿僧祇にして、灰斷して滅に入り、此を去りて彼に至らずと言ふ耶。若し體廣なりと言はば、應に五眼を備へ、佛性を見るべし。當に知るべし、今の果は四一を闕く、狹にして而も是れ麤なり。今を將て昔に望むるに、昔は還つて是れ妙なることを。果位高下の四難とは、今の果の位若し高ければ、諸教何ぞ第五の教の下きに在るこ

とを得る。行那ぞ無常を出でず、人那ぞ變易を出でざる。理那ぞ祕藏を窮めざらん。當に知るべし、今の果の位は四一を闕き、皆下く皆麤なり。昔の果の位は四一を具して、皆高く皆妙なることを。果用長短の四難とは、若し今の果の用長ければ、敎何ぞ常住を明らめざらん、行何ぞ頓に無明を破せざらん、何人ぞ即ち是れ毘盧遮那ならざらん、理何ぞ即ち是れ祕藏ならざらん。當に知るべし、今の果は妙法有ること無し、豈麤に非ずや云云。而して復神通延壽と言ふ、是れ何の神通ぞ。若し作意の神通ならば彼外道に同じ、若し無漏の神通ならば彼小乘に同じ、若し實相の神通ならば則ち延に非ず不延に非ず、能く延、能く不延なり。能く延べば何ぞ止延壽のみならん、而して眼を延べ、佛性を見せしめざらん。何ぞ舌を延べて常住を說かざらん。眼、性を見ざれば、則ち實相の神通に非ざることを知る。(是れ)麤に非ずして何とか謂はん。前の一難に已に麤なるを知り、後の難重ねて來る耳。彼は因果の六種を作し、以て麤妙を判じ、又四一を以て專ら妙を判ず。今其麤を難ず、皆四一を備ふるときは則ち昔の麤も麤に非ず。其妙を難ず、全く四一無くんば則ち今の妙は妙に非ず。其一句に於て四句の難を設く、四六二十四難。彼矛盾を用て自ら相撃つが故なり、盈ならず縮ならず、應に齊等なるべき耳。

妙法蓮華經玄義卷第一下

【一】經題妙法の二字を解釋するに、四章を分つ中、第四に今家の正解を出だす。

【觀心釋】法華經を解釋するに用ひし天台獨特の方法たる四釋の一にして、前の三釋が共に教の釋にして客觀的規矩なるに對し、觀心釋は主觀的實踐的實證の釋なれば、己心に約して實相の理を觀ずる解釋法なり。

妙法蓮華經玄義　卷第二上

天台智者大師の說

（一）四に、正しく今意を論ずるに二と爲す。先に略して彼名を用ひて妙の義を顯す。因に三義を具すとは、一法界に九法界を具するを體廣と名け、九法界の卽ち佛法界なるを位高と名け、十法界の卽空卽假卽中たるを用長と名く。一に卽して而も三を論じ、三に卽して而も一を論ず。各異に非ず、亦横に非ず、亦一に非ず、故に妙と稱す。果體に三義を具すとは、體の一切處に徧ずるを體廣と名け、久く已に成佛して、久遠久遠なるを位高と名け、本より迹を垂れて過、現、未來の三世に物を益するを用長と名く。是を因果の六義、餘經に異ると爲す。是故に妙と稱するなり。又乳經は、一種の因果は廣、高、長、一種の因果は狹、下、短なり。則ち一は麤、一は妙なり云云。酪經は唯一種の因果にして、狹、下、短なり。但麤にして妙無し。生蘇の經は三種の因果は狹、下、短、一種の因果は廣、高、長なり。則ち三は麤、一は妙なり。熟蘇の經は二種の因果は狹、下、短、一種の因果は廣、高、長なり、則ち二は麤、一は妙なり。醍醐の經は一種の因果にして廣、高、長なり、但妙にして麤有ること無し。又醍醐の經は妙因妙果にして、諸經の妙因妙果と異らず。故に稱して妙と爲す。

復次に觀心釋は、若し己心を觀ずるに、衆生心、佛心を具せざるは是れ體狹く、具す

【二】是より以下廣く法を釋するに先づ南岳大師、心、佛、衆生の三法を分つことを擧ぐ。

【衆生法、佛法、心法】衆生法とは九界の衆生各十界十如を具して本來諸佛の所悟と體に於て別なきが故に妙となす。諸佛の所悟も亦十界十如を具し衆生と其體異らず。故に妙なり。心法は吾人現前一念の妄心も本來十界十如を具して佛と異りあることなし、亦從つて衆生法とも異らず。こ

るは是れ體廣し。若し己心の佛心に等しからざるは是れ位下く、若し佛心に等しきは是れ位高し。若し己心、衆生心、佛心の卽空卽假卽中ならざるは是れ用短く、卽空卽假卽中なるは是れ用長し。復次に、一法界に於て十法界六卽の位に通達するは、亦是れ體廣く、亦是れ位高く、亦是れ用長し。初に十法界に約するは是れ理一を顯し、次に五味に約するは、是れ敎一に約し、次に觀心に約するは是れ行一に約し、次に六卽に約するは是れ人一に約す。略して妙の義を示すこと竟んぬ。廣く說かば、法を先にし妙を次にす。

(二)南岳師は三種を擧ぐ、衆生法、佛法、心法を謂ふ。經に、衆生をして佛の知見に開示し悟入せしめんが爲の如く、若し衆生に佛知見無くんば、何の所にか開を論ぜん。當に知るべし、佛の知見は衆生に蘊在することを。又經に、但父母所生の眼を以てすとは卽ち肉眼なり、內外の彌樓山を徹見するは卽ち天眼なり、諸色を洞見して而も染著無きは卽ち慧眼なり、色を見ること錯謬無きは卽ち法眼なり。未だ無漏を得ずと雖も、而も其眼根淸淨なること此の若し。一眼に諸眼の用を具するは卽ち佛眼なり。此は是れ今經に衆生法妙を明すの文なり。大經に云はく、「大乘を學する者は、肉眼有りと雖も名けて佛眼と爲す」と。耳、鼻の五根も例して亦是の如くなるべし。殃掘に云はく、「所謂る彼眼根は、諸の如來に於ては常なり。具足して無減に修するに、了了分明に見る」と。乃至意根も亦是の如くなるべし。大品に云はく、「六自在王とは性淸淨なるが故なり」と。又云はく、「一切法、眼に趣くに是趣過ぎず。眼尙不可得なり、何に況や趣有り非趣有らんや。乃至一切の法、意

の三法妙皆十界十如を具したれば、本來平等にして差別あることなし。

【六自在王】眼等の六根は衆生を迷境に置く力自在なるを以て名づく。

【三】南岳の三法に依て大師更にこれを廣釋する中、初めに衆生法を明す。中に於てまた先に法數を列ね、次に法相を解す。

に趣くも亦是の如し」と。此れ即ち諸經に衆生法妙を明すなり。佛法妙とは、經に「止みなん止みなん說くべからず、我が法は妙にして思ひ難し」といふが如し。佛法は權實を出でず。是法甚だ深妙にして、見難く了すべきこと難し。一切衆生の類、能く佛を知る者無し。即ち實智妙なり。及び佛の諸餘の法も亦能く測る者無し、即ち權智妙なり。是の如きの二法は、唯佛と佛とのみ乃ち能く諸法の實相を究盡したまふ。是を佛法妙と名く。心法妙とは、安樂行の中の、其心を修攝して一切法を觀ずるに動せず退せず、又一念隨喜等の如し。普賢觀に云はく「我心自ら空なり、罪福に主無し、心を觀ずるに心無く、法も法に住せず。又心は純ら是れ法なり」と。淨名に云はく「身を觀ずるに實相なり、佛を觀ずるも亦然り。諸佛の解脫は、當に衆生心行の中に於て求むべし」と。華嚴に云はく「心、佛及び衆生は、是三差別有ること無し。心の微塵を破して、大千の經卷を出す」と。是を心法妙と名く。

(三)今三法に依つて更に廣く分別すべし。若し衆生法を廣くせば、一往通じて諸の因果及び一切法を論ず。若し佛法を廣くせば、此れ則ち果に據る。若し心法を廣くせば、此れ則ち因に據る。衆生法を二と爲す、先に法數を列ね、次に法相を解す。數とは、經論に或は明さく「一法に一切法を攝す」と。謂はく、心是れなり。三界は別の法有ること無し、唯是れ一心の作なり。或は明さく「二法に一切の法を攝す」と。所謂る名、色なり。一切世間の中但名と色と有り。或は明さく「三法に一切の法を攝す。命、識、煖を謂ふ」と。是の

如き等の增數乃至百千なり。今經には十法を用て一切の法を攝す、所謂る諸法の如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等なり。南岳師は此文を讀みて皆如と云ふ、故に呼んで十如と爲す。天台師の云はく「義に依つて文を讀むに凡そ三轉有り。一に云はく、是相如、是性如、乃至是報如なり。二に云はく、如是相、如是性、乃至如是報なり。三に云はく、相如是、性如是、乃至報如是なり」と。若し皆如と稱するは、如は不異を名く、即空の義なり。若し如是相、如是性と作すは、空の相性を點じて名字施設し、邐迤不同なるは即假の義なり。若し相如是と作すは、中道實相の是に如す、即中の義なり。分別して解し易からしむ、故に空假中を明す。意を得て言を爲さば、空即ち假中なり。如に約して空を明さば一空一切空なり、如を點じて相を明さば一假一切假なり、是に就いて中を論ずれば一中一切中なり。一二三に非ずして而も一二三、不縱不橫なるを名けて實相と爲す。唯佛と佛とのみ此法を究竟したまふ。是十法に一切の法を攝するなり。若し義の便に依らば、三意と作して分別す。若し讀便に依らば、當に偈文に如是大果報種種性相義と云ふに依るべし云云。次に權實を判ぜば、光宅は前の五如是を以て權と爲し、凡夫に屬し、次の四如是を實と爲て聖人に屬す。後の一如是は、總じて權實を結す。偈を引きて證して云はく「如是大果報」と、大の故に知んぬ、是れ實なり。「種種性相」と故に知んぬ、是れ權なることをと。今恐くは爾らず、大の義に三有り、大、多、勝なり。若し大を取りて實と爲さば、亦應に多を取り勝を取るべし。種種の名、豈

多の義に非ざらんや。若し權を凡夫に屬すと言はば、凡夫は何の意ぞ實無からん。若し實を聖人に屬せば、聖人、何の意ぞ權無からん。此の如く抑沒するは、義として依るべからず。又北地師は、前の五を以て權と爲し、後の五を實と爲す。此れ皆人情なるのみ。今權實を明さば、十如是を以て十法界に約す、六道四聖を謂ふなり。皆法界と稱するは、其意三有り。十數皆法界に依る、法界の外更に復法有ること無し、能所合して稱す、故に十法界と言ふ。二には、此十種の法は分齊同じからず、因果隔別し、凡聖異り有り、故に之に加ふるに界を以てす。三には、此十皆即ち法界にして一切法を攝す。一切の法地獄に趣くに、是趣過ぎず。當體即ち理なれば更に所依無し、故に法界と名く。乃至、佛法界も亦復是の如し。若し十數、法界に依らば、能依を所依に從ふるは即ち入空の界なり。十の界界隔つるは即ち假界なり、十數皆法界なるは即中の界なり。解し易からしめんと欲して、此の如くに分別す。意を得て言を爲さば、空即ち假、中にして、一二三無きこと前の如し云云。

此一法界に十如是を具し、十法界に百如是を具す。又一法界に九法界を具すれば、則ち百法界千如是有り。束ねて五差と爲す、一には惡、二には善、三には二乘、四には菩薩、五には佛なり。判じて二法と爲す、前の四は是れ權法、後の一は是れ實法なり。細しく論ずれば各權實を具するも、且く兩義に依る。然るに此權實は不可思議なり、乃ち是れ三世諸佛の二智の境なり。此を以て境と爲す、何れの法をか收めざらん。此境より智を發す、

何れの智か發さざらん。故に文に諸法と云ふ、諸法とは是れ所照の境廣きなり。唯佛と佛とのみ乃ち能く究盡すとは、能照の智深くして邊を窮め底を盡すことを明すなり。其智慧門は解し難く入り難しとは、境妙を歎ずるなり。我所得の智慧は微妙にして最第一なりとは、智と境と相稱ふを歎ずるなり。方便品の長行に略して此法を說き、後の開示悟入は廣く此法を說く。火宅は此法を譬喩へ、信解は此法を領解し、長者は子に此法を付し、藥草は此法を述成し、化城は此法に引入す。是の如き等の種種は、祇十如權實の法を名くる耳。如來は洞かに達して十法の底を究め、十法の邊を盡す。明に衆生の種、非種、芽、未芽、熟、不熟、可度脫、不可度脫を識る。實の如く之を知りて錯謬有ること無し。殃掘摩羅は是れ惡人なりと雖も、實の相性熟すれば即時に度を得。四禪比丘は是れ善人なりと雖も、惡の相性熟すれば即ち度するに堪へず。當に知るべし、衆生の法は不可思議なり。實と雖も而も權、權と雖も而も實なり。實權相即して相妨礙せず。牛羊の眼を以て衆生を觀視すべからず、凡夫の心を以て衆生を評量すべからず。智、如來に如して乃ち能く評量すべし。何を以ての故に、衆生法妙なるが故なり。

(四)次に十如是の法を解す、初には通じて解し、後に別して解すべし。通じて解せば、相は以て外に據る、覽て而も別つべきを名けて相と爲す。性は以て內に據る、自分改まらざるを名けて性と爲す。主質を名けて體と爲し、功能を力と爲し、構造を作と爲し、習因を因と爲し、助因を緣と爲し、習果を果と爲し、報果を報と爲し、初の相を本と爲し、後の報

【火宅】譬喩品第三所出の譬。

【信解】信解品第四所出の譬。

【藥草】藥草喩品第五所出の譬。

【化城】化城喩品第七所出の譬。以上は何れも法華八譬の一なり。

【殃掘摩羅】アングリマールヤ（Aṅgulimālya）指鬘外道のこと。佛在世の時舍衛城に住し殺人得道を信ぜしを佛の教化によつて改過得道せし者。

【四禪比丘】佛在世の時四禪を得し一阿羅漢、自ら四道を得たりと謂ひ増上慢を生ぜしかば命終に臨み何鼻地獄に墮するに至る。

【四】正しく法相を解する中廣く十如是の法を釋す。而して今先きに通解をなす。

【五】別して十如是の法を解するに四趣、人天、二乘、及び菩薩佛の四番となし、而して先づ四趣の十法を明す。

【泥黎】ニラヤ(Niraya)地獄のこと。

を末と爲し、所歸趣の處を究竟等と爲す云云。若し如の義を作さば、初後皆空なるを等と爲す。若し性相の義を作さば、初後相在るを等と爲す。若し中の義を作さば、初後皆實相なるを等と爲す。今此等に依らずして、三法具足するを究竟等と爲す。夫れ究竟とは、中乃ち究竟、卽ち是れ實相なるを等と爲す。

(五)次に別して解せば、氣類相似たるを取りて合して四番と爲す。初に四趣、次に人天、次には二乘、次には菩薩、佛なり。初に四趣の十法を明さば、如是相とは卽ち是れ惡相なり、不如意處に墮することを表す。譬へば、人未だ禍あらざるに否色已に彰れ、相師は覽て別ちて能く凶衰を記するが如し。惡相若し起らば、遠く泥黎を表す。凡夫は知らず、二乘は髣髴として知り、菩薩は知ること深からず。佛は知ること邊を盡す、善相師の洞かに始終を見るが如し、故に如是相と言ふ。如是性とは、黑は自分の性なり。純ら黑惡を習ひて改變すべきこと難し。木に火有りて、緣に遇へば卽ち發するが如し。大經に云はく「有漏の法は生の性有るを以ての故に、生能く之を生ず」と。此惡に四趣の生の性有り、故に緣能く發す。若し泥木の像は、外相有りと雖も內に生性無ければ、生も生ずること能はず。惡性は爾らず、故に如是性と言ふ。如是體とは、彼摧析の麤惡の色心を攬りて以て體質と爲す。復次に此世に先に已に心を摧き、來世に色を摧く。又此世の華報も亦色心を摧き、來世の果報も亦色心を摧く。故に摧かるる色心を以て體と爲す。如是力とは惡の功用なり。譬へば片物未だ用ひられずと雖も、擬するに任ゆる所に指し、其れ用有りと言ふが如し。

大經に云はく「舍を作るには木を取りて縷線を取らず、布を作るには縷を取りて泥木を取らず」と。地獄は刀に登り劍に上るの用有り、餓鬼に銅を呑み鐵を噉ふの用あり、畜生は强き者は弱きを伏し、魚鱗相噉ひ、車を牽き重きを挽く。皆是れ惡の力用なり。如是作とは、構造經營して三業を運動し、諸惡を建創す。之を名けて作と爲す。大經の第八に云はく「譬へば、世間に惡行を爲す者を名けて半人とするが如し」と。既に惡行を行ずるを地獄の作と名く。如是因とは惡の習因なり。自種相生じ、習續して斷ぜず。習發するを以ての故に、惡を爲すに成じ易し。故に如是因と名く。如是緣とは緣とは助なり。所謂る諸惡の我我所、所有の具度、皆能く習業を助成す。水の能く種を潤すが如し、故に報因を用て緣と爲す。如是果とは習果なり。多欲の人は地獄の身を受け、苦具を見て謂つて欲境と爲し、便ち染愛を起すが如し。此を謂つて習果と爲す。如是報とは報果なり、多欲の人地獄の中に在りて、欲境に趣く時卽ち銅柱鐵牀の苦を受くるが如し。故に如是報と名く。本末究竟等とは卽ち三義有り。本空なれば末も亦空なり、故に等と言ふ。又惡の果報は本相性の中に在り、此れ末と本と等なり。本の相性は惡の果報の中に在り、此れ本と末と等なり。若し先に後の事無くんば、相師も預め記すべからず。若し後に先の事無くんば、相師も追つて記すべからず。當に知るべし、初後相在ることを。此れ事を假りて等を論ず。中實の理心は佛果と異らず、一色一香も中道に非ざるは無し。此れ理に約して等を論ず。是義を以ての故に、故に本末究竟等と言ふ。三義具足す、故に等と言ふなり。

【六】人天界の十法を明す。

【七】二乘界の十法を明す。【五分法身】小乘にて法身と立つるもの。五種の功德法（戒、定、慧、解脫、解脫知見）を以て佛身を成ずるを以てなり。

【七生】聲聞四果の內初果を云ふ。【一往來】聲聞四果の內第二果。

【八】菩薩と佛界との十法を辨ず。

(六)次に人天界の十法を辨せば、但善と樂とに就いて語を爲して、四趣に異にす。相は清升を表す。性は是れ白法なり。體は是れ安樂の色心なり。力は是れ善器に堪任す。作は是れ止行の二善を造る。因は是れ白業なり。緣は是れ善の我我所、所有の具度なり。果は是れ任運に善心に酬いて生ず。報は是れ自然に樂を受く。等とは前に說くが如し云云。

(七)次に二乘の法界の十法を辨せば、眞無漏に約す。相は涅槃を表す、性は是れ非白非黑の法なり、體は是れ五分法身なり、力は能く動かし能く出して道器に堪任す。作は是れ精進勤策するなり、因は是れ無漏の正智なり、緣は是れ行行の助道なり、果は是れ四果なり。二乘は既に不生なり、是故に報無し。何が故ぞ、眞を發すれば是れ果にして而も報を論せざる。無漏の法起りて習因に酬いば是れ習果なることを得。無漏は生を損するも不生の法に非ず、故に後報有ること無し。三果に報有らば殘思未だ斷ぜず、或は七生、或は一往來、或は色界生は無漏の報に非ず。是故に唯九にして十ならず。若し大乘に依らば、此無漏も猶有漏と名く。大經に云はく「福德莊嚴は有爲有漏にして是れ聲聞僧」と。既に無漏に非ず、別惑を損せざれば、猶變易の生を受く。則ち無漏を因と爲し、無明を緣として變易土に生ず、即ち有報なり。

(八)次に菩薩と佛界との十法を明さば、此れ更に細しく開するに三種の菩薩有り云云。若し六度の菩薩は、福德に約して相、性、體、力を論ず。善業を因と爲し、煩惱を緣と爲して、三十四心に結を斷ずるを果と爲す。佛は則ち報無く、菩薩は即ち十を具す。若し通教の菩薩は、

【誓扶習生】菩薩利他の爲に誓願力を以て餘殘の習氣を扶けて生を三界に受くるの謂なり。

【次第觀】別教の菩薩は先づ十住の位に空觀を修して見思を破し、十行の位に假觀を修して塵沙の惑を破し十地の位に中道觀を用ひて無明を破す。未だ眞妄を隔つるが故に觀法又次第す。隔歷次第の三觀と稱せらるる所以なり。

【分段、變易】分段とは諸の有漏の善不善の業が煩惱障の助緣に由りて感ずる三界六道の果報なり。其果報に分分段段の差あれば分段と云ふ。見思の惑を具する一切の有情之なり。變易とは諸の無漏の善業が所知障の助緣に由つて感ずる界外の淨土の果報にして阿羅漢以

無漏に約して相性を論ず。六地の前は殘思に報を受け、六地に思盡きて後身を受けず。誓扶習生するは實業の報に非ず、故に唯九にして十無し。若し別教の菩薩は、中道を修せんとして次第觀を行ずるに約して、而も十法を論ず。此人は通惑を斷ずと雖も、自ら生有ることを知る、則ち十法を具す云云。夫れ變易に生ずるには、則ち三種の不同あり。一には全く未だ別惑を斷ぜずして變易に生ずるは、卽ち是れ三藏の二乘、及び通教の三乘是れなり。類せば、分段博地の凡夫の見思を伏せざる者の如し云云。二には別惑を伏して變易に生ずるは、卽ち是れ別教の三十心の人なり。中道を習ひ、伏して未だ斷ぜず。類せば、分段小乘の方便道の如し云云。三に別惑を斷じて變易に生ずるは、初地、初住の斷惑の如き是れなり。類せば初果の如し、見諦を斷ずと雖も猶七生有り、彼亦是の如し。若し未だ斷伏せずして生ずるは、方便行眞無漏を用て因と爲し、無明を緣と爲す。若し伏斷する者は、順道法愛を因と爲し、無明を緣と爲して變易土に生ず云云。

佛界の十法とは、皆中道に約して分別す。淨名に云はく、「一切衆生は皆菩提の相なり、復得べからず」と。此れ卽ち緣因を佛相と爲るなり。性は以て内に據る、智願猶在りて失せず、智は卽ち了因にして佛性と爲す。自性淸淨心は卽ち是れ正因なれば佛體と爲す。此れ卽ち三軌なり云云。力とは、初めて菩提心を發するに二乘の上に超ゆるを名けて力と爲す。作とは、四弘誓願の要、期なり。因は卽ち智慧莊嚴なり、緣は卽ち福德莊嚴なり、果は卽ち一念相應大覺朗然無上菩提を習果と爲す、報は卽ち大般涅槃果果の斷德なり、禪

上の聖者の生死なり。分段の土とは同居土を云ひ變易の土とは方便土に名づく。

【見諦】眞理を證悟すること。聲聞の預流果已上、菩薩の初地已上。

【三賢十聖】菩薩乘の円位。十住、十行、十廻向を三賢とし、十地位を十聖と爲す。賢は惑を伏し、聖は斷ずる位なり。

【增道損生】法華迹門にて成佛記別を受けたる菩薩が本門にて初住已上佛果に至る迄に漸次に悟の智を增して生死の縛を減損するの利益を受くるを云ふ。

【四十一地】十住

定三昧一切具足す、是れ報果なり。不二等とは即ち相性の三諦と、究竟の三諦と異ならず、故に等と言ふ。空諦等とは、定有の衆生の如、乃至佛の如皆等なり。俗諦等とは、衆生未だ發心せざるに、佛は當作佛を記す。佛は既に已に成佛して、佛の不生の事を說く。即ち是れ初後相在るは假等なり。中の等とは、凡聖皆實相なり。

佛果に就けば、亦は九、亦は十なり。通途に語を爲さば、地地より皆萬行有り。福德を因と爲し、無明を緣と爲し、習果報果、分に十法を得て具足せざること無し。此經に云はく、「無量の無漏清淨の果報を得」と。法王の法の中に「久しく梵行を修し、始めて今日に於て其果報を得たり」と。又云はく「久修業所得」と。大經に云はく「我今獻する所の食、願はくは無上報を得ん」と。仁王に云はく「三賢十聖は果報に住す」と。攝大乘に云はく、「因緣生死に後生死有り。皆是れ分に果報を論ず」と。果報は即ち是れ生滅なり。何となれば、無明分に盡す、是故に滅を論ず。眞明轉た盛なり、是故に生と言ふ。又殘の無明在り、是故に生と言ふ。一分の惑除く、是故に滅と言ふ。大論に云はく「一人は能く耘り、一人は能く穫る」と。萬行資成するは種の如く、智慧惑を破するは耘るが如し。增道損生の意此に在り。因十一地に皆十法有り。若し妙覺に就いては亦は九、亦は十なり。何となれば、中道の智慧は乃ち是れ生を損すればなり。生既に未だ盡きざるが故に諸地の生滅不同有れども、妙覺は損生の義足る、最後に那ぞ報を論ずることを得ん。故に云はく、「唯佛のみ一人淨土に居す」と。三十生盡く大覺に等し、後有の生死無きは、煩惱盡くる

十行、十廻向、十地等覺を云ふ。

【中陰】又は中有といふ。此に死して彼に生ずる中間に受くる陰形を云ふ。

が故なり。智德已に圓なれば、復習果無し。後身を受けざるが故に、報果無し。又現生の後に約して、九を論じ十を論ず云云。若し涅槃經の文を按ずるに、願得無上報といふは、卽ち佛界の報の無上なることを明すなり。佛報既に無上と言ふ、佛の相性等の九法、悉く皆無上なり。何となれば、六道の相性は、全く五住を表す。二乘の相性は、四住を破するを表し、全く無明を表す。菩薩の相性は、次第に、五住を破することを表す。佛の相性は、一切種智の淨きこと虛空の若く、五住の爲に染されざるを表す。故に佛の十法は、最も無上たり云云。復次に、六趣の相は、生死の苦を表し、二乘の相は、涅槃の樂を表し、佛界の相は、非生死、非涅槃、中道の常樂我淨を表す。故に佛界は、最も是れ無上なりと言ふ。復次に四道は惡を表し、人天は善を表し、二乘は無漏善を表し、菩薩と佛は、非漏非無漏善を表す。故に佛界は、最も是れ無上たり。復次に、六道は、諸行の因緣生法を表し、二乘は卽空を表し、菩薩は卽假を表し、佛は卽空卽假卽中を表す。故に佛界は、最も無上たり。復次に、四趣は但惡を表して、善を表すること能はず。人天の相は、但善を表して、亦惡を表すること能はず。二乘は、但無漏を表して、善惡を兼ねず。佛相は、兼ねて一切の相を表す。若し佛相を解せば、卽ち遍く一切の相を解せん、是故に、佛界は最も無上たり。故に賢聖集に云はく、「地獄の中陰は、但地獄を見て、上趣を知ること能はず。若し天の中陰は、能く天及び下を知り、其相之を表するも、正徧知を明さず。佛相は正徧知を表す。佛智既に徧く諸相を知るは、經敎に徧く之を說くべし。若し此法を用て、五味

【正徧知】サミヤク、サンブツダ(子 myak-sambuddha) 正徧覺とも正徧智とも譯す。佛十號の一、眞正に徧く一切法を知るを名づく。

【九】之より下開權を明し、又諸教偈を以て結す。

の教に寄れば、乳教は菩薩界と佛界の兩の性相を說く。或は即假の等に入り、或は即中の等に入る。入中は乃ち是れ無上なれども、而も一の方便を帶すれば未だ全く無上なるにあらず。酪教は但二乘の相性を明して、析空の等に入ることを得るも、尚即空の等に入ることを明さず、況や復餘をや。故に無上に非ず。生蘇は四種の相性を明して、或は析空の等に入り、或は即空の等に入り、或は即假の等に入り、或は即中の等に入る。唯佛の相性のみ即空即假即中に入ることを得。而して三の方便を帶するが故に無上に非ず。熟蘇は三種の相性を明して、或は即空に入り、或は即假に入り、或は即中に入る。唯佛の性相のみ即空即假即中に入ることを得るも、而も二の方便を帶するが故に無上に非ず。此法華經は九種の性相を明して、皆即空即假即中に入る。「汝は實に我子、我は實に汝が父なり。一色一味も純ら是れ佛法にして、更に餘法有ること無し」と。故に知んぬ、佛界は最も無上なることを。

(九)復次に餘經に明す所の九の性相は、佛の性相即空即假即中に入ることを得ざれば、此經は皆方便を開き、普く入ることを得せしむ。又其相性を接するに、即ち是れ即空即假即中なれば、引入を論ぜず。是故に如來、慇勤に此法華經を稱歎して最も無上と爲すの意此に在り。復次に百界千法は縱橫甚だ多し、經論の偈を以て之を結して、其をして解し易からしめん。中論の偈に云はく「因緣所生の法は、我即ち是れ空なりと說き、亦名けて假名と爲し、亦中道義と名く」と。六道の相性は、即ち是れ因緣所生の法なり。二乘及び通教の

【一二】三法を解釋する中、第二に佛法を明す。

菩薩等の相性は、是れ我說卽是空なり。六度別教の菩薩の相性は、是れ亦名爲假名なり。佛界の相性は、是れ亦名中道義なり。要を結すること少なりと雖も、前の多を攝得することと、義則ち見るべし。又涅槃の偈に云はく、「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。生滅滅し已りて寂滅を樂と爲す」と。六道の相性は卽ち是れ諸行なり、二乘通教の相性は卽ち是れ無常なり、別教の菩薩の相性は卽ち是れ生滅滅已なり、佛界の相性は卽ち是れ寂滅爲樂なり。又生滅滅已、寂滅爲樂は卽ち是れ別教の相性なり。生滅に卽して仍是れ寂滅なれば、滅し已るを待たずして方に稱して樂と爲すは、是を圓教の佛界の相性と爲す云云。又七佛通戒の偈に云はく、「諸惡は作すこと莫れ、衆善を奉行せよ。自ら其意を淨うする、是れ諸佛の教なり」と。四趣の相性は卽ち是れ諸惡なり、人天の相性は卽ち是れ衆善なり、自ら其意を淨うすとは卽ち析假の淨意有り、是れ二乘の相性なり。入假の淨意は是れ菩薩の相性なり、入中の淨意は是れ佛界の相性なり云云。若し能く十の相性と、衆の經論律と合することを解せば、卽ち三藏の通別に通達し、一切の法を識りて障礙有ること無し。廣く衆生法の相を明すこと竟んぬ。

(二〇)二に廣く佛法を明さば、佛豈別法有らん、祇百界千如、是れ佛の境界なり。唯佛と佛とのみ斯理を究竟す、爾大なれば蓋も亦隨つて大なるが如し。無邊の佛智を以て廣大の佛境を照し、其源底に到るを隨自意法と名く。若し九法界の性相の本末を照して、纖芥も遺さざるを隨他意法と名く。二法の本より十界の迹を垂れ、或は已身を示し、或は他身を示し、

【二】三法の中、第三に心法を廣釋す。

或は自意語を說き、或は他意語を說く。自意、他意も思議すべからず、己身、他身は微妙寂絕なり。皆非權非實にして、而も能く九界の權、一界の實に應ず。而して佛法に於て損減する所無し。諸佛の法、豈妙ならざらんや。是事知んぬべし。勞しく廣說すること無し。方便品の中に至りて、更に之を明すべし。

(二)三に廣く心法を釋せば、前に明す所の法、豈心に異なることを得んや。但衆生法は太だ廣く、佛法は太だ高ければ、初學に於て難しと爲す。然るに心、佛及び衆生は、是三差別有ること無し。但自ら己心を觀ずるを、則ち易しと爲す。涅槃に云はく「一切の衆生に三定を具足す」と。上定とは佛性を謂ひ、能く心性を觀ずるを名けて上定と爲す。上は能く下を兼ぬ、即ち衆生法を攝得するなり。華嚴に云はく「心を法界に遊ばして虛空の如くなるは、則ち諸佛の境界を知る」と。法界は即ち中なり、虛空は即ち空なり、心、佛は即ち假なり。三種を具するは即ち佛境界なり、是れ心を觀ずるに仍佛法を具すと爲す。又遊心法界とは、根塵相對して一念の心起るを觀ずるに、十界の中に於て必ず一界に屬す。若し一界に屬せば即ち百界千法を具し、一念の中に於て悉く皆備足す。此心の幻師は、一日一夜に於て常に種種の衆生、種種の五陰、種種の國土を造す。所謂る地獄假實の國土、乃至は佛界假實の國土なり。行人、當に自ら選擇すべし、何れの道にか從ふべき。又虛空の如しとは、心を觀ずるに自ら心を生ぜば、緣を藉るを須ひず。緣を借りて心有らば、心に生力無し。心に生力無ければ、緣も亦生無し。心と緣と各無くんば、合しても云何ぞ有ら

【一一三】已に法を釋せるを以て今更に妙の一字を解す。中に於てまた通別の兩釋を設け、通釋にまた相待、絶待の二妙を開することを示し、而して初めに相待妙を明す。

【閻浮提】ジャムブドビーパ(Jambudvipa)須彌山の南方に當れる大洲、即ち吾人の世界にして洲の中心に閻浮樹林あるを以て名あり。

ん。合しても尙得亘し、離しては則ち生ぜず。尙一生無し、況や百界千法有らん耶。心空なるを以ての故に、心より生ずる所の一切も皆空なり。此空も亦空なり。若し空も空に非ずんば、空を點じて假を設く。假も亦假に非ず。假無く空無ければ畢竟清淨なり。又復佛の境界とは、上佛法に等しく、下衆生法に等し。又心法とは、心、佛及び衆生、是三差別有ること無き、是を名けて心法と爲す。問ふ、『一念の心に云何ぞ百界千法を含受するや。』答ふ、『三種を借りて譬と爲す。止觀の中に說くが如し云云。』

(一一三)二に妙を明すに、一には通じて釋し、二には別して釋す。通を又二と爲す、一には相待、二には絶待なり。此經は唯二妙を論じて、更に非絶非待の文無し。若し更に作さば、何れの惑をか絶し、何れの理をか顯さん、故に更に論せざるなり。光宅は法華の妙を用て、前の諸教の皆麤なるに待す。且に妨ぐる所有り、已に前に難ずるが如し云云。今麤に待するの妙とは、半字を待するを麤と爲し、滿字を明すを妙と爲す。亦是れ常、無常、大、小相待して麤妙と爲るなり。淨名に云はく「說法は有ならず、亦無ならず、因緣を以ての故に諸法生ず」と。卽ち是れ滿字を明すなり。「始めて佛樹に坐し、力、魔を降して甘露の滅を得、覺道成ず」と。卽ち昔の半を提げて、待して滿を出すなり。般若に云はく「閻浮提に於て第二の法輪轉ずるを見る」と。亦是れ鹿苑を指して第一と爲し、般若を待して第二と爲るなり。涅槃に云はく「昔波羅奈に於て初めて法輪を轉じ、今拘尸城に於て復法輪を轉ず」と。此經皆共に鹿苑を以て半と爲し、小と爲し、麤と爲す。此に待して滿、大、妙を明すは

【五衆】五蘊のこと。

共義是れ同じ。今の法華に明さく、「昔波羅奈に於て四諦の法輪、五衆の生滅を轉じ、今復最妙無上の法輪を轉ず」と。此れ亦鹿苑を待して麤と爲し、法華を妙と爲す。妙の義は皆同じく麤に待すること亦等し、文義此に在り。問ふ、『方等に齊つて來、滿の理殊なること無きは、悉く應に妙と稱すべきや。』答ふ、『今亦教を尅して時を定めず、那ぞ忽ち方等に齊ると云ふや。縱令爾るものも別に所以有り、何となれば、利根の菩薩は彼に於て妙に入りて、法華と異るに不ず。鈍根の菩薩及び二乘の人は、猶方便を帶して、諸味に調伏す。方等は生蘇を帶して妙を論じ、以て麤を待す。般若は熟蘇を帶して妙を論じ、以て麤に待す。今經は二味の方便無く、純ら眞の醍醐に妙を論じ、以て麤に待す。此妙と彼妙は、妙の義殊なること無し。但方便を帶すると、方便を帶せざるとを以て異と爲る耳。復次に三藏は但半字生滅門にして、滿理に通ずること能はず、故に名けて麤と爲す。滿字は是れ不生不滅門なれば、能く滿理に通ず。故に妙と名く。能く滿理に通ずるに復二種有り、一には方便を帶して滿理に通じ、二には直滿理を顯すなり。方等、般若は、方便を帶して滿理に通じ、今經は直に滿理を顯す。故に中論に云はく、「鈍根の弟子の爲に、因緣生滅の相を說き、利根の弟子の爲に因緣不生不滅の相を說く」と云云。中論の偈に云云。若し不卽の空は眞に通ずる方便と爲す、是故に麤と言ふ。若し能く卽空なるは是れ中に通ずる方便たり。中に通ずる方便は、若し卽空卽假を帶して中に通ずる者は麤、空假を帶せずして直に中に通ずるは妙なり云云。』問ふ、『乳より醍醐に至るまで同く稱して滿と爲すは、是譬

【一三】通釋の中第二に絶待妙を明す

云何。」答ふ、『今譬を以て譬を解するに、官に三航及び私船有りて、此岸より人を彼岸に度すが如し。乳教は大、中の兩航共に人を彼岸に度すが如し。酪教は私船の人を中洲に度すが如し。生蘇は四種の如し、小航と私船とは人を中洲に度し、兩航は人を彼岸に度す。熟蘇は三航の如し、一航は中洲、二航は彼岸なり。醍醐は大航の人を彼岸に度すが如し。三航は同く是れ官物なり、故に俱に稱して滿と爲す。私船は官物に非ず、是故に半と言ふ。官物の中二航は小なれば、容る所蓋し寡し。大航は壯麗にして容載倍多ければ、獨り稱して妙と爲す。智者は譬喩を以て解を得、共譬の義是の如し云云。

（一三）二に絶待に妙を明すに四と爲す。一には、隨情の三假の法起る。若し眞諦に入れば待對卽ち絶す。故に身子の云はく、「吾聞く、解脫の中には言說有ること無し」と。此れ三藏經の中の絶待の意なり。二に隨理の三假は、一切世間皆幻化の如し、事に卽して而も眞なれば、一事として而も眞に非ざる者有ること無し。更に何物を待してか不眞とせん耶。彼三藏に望むるに、絶も還つて絶ならず。事に卽して而も眞なれば乃ち是れ絶待なり。此れ通教の絶待なり。三に別教若し起れば、卽眞の絶に望むるに還つて是れ世諦なり。何となれば、大涅槃に非ざれば猶是れ生死の世諦にして、絶還つて待有り。若し別教の中道に入れば、待則ち絶す矣。四に圓教若し起れば、無分別の法を說く、邊に卽して而も中なれば佛法に非ざるは無く、亡泯清淨なり。豈更に佛法を以て佛法に待せん、如來法界なるが故なり。法界を出すの外、復法の相形比すべきもの有ること無し。誰に待してか麤と爲し、

【無生忍】初地乃至七八九地に於て得る諦、生滅を遠離せる眞生實相の理に安住せる眞智をいふ。

誰に勝へてか妙なるを得ん。待すべき所無く、亦所絶無し、知らず、何をか名けて強ひて言つて絶と爲ん。大經に云はく、「大を不可稱量、不可思議と名く、故に名けて大と爲す。譬へば虚空の小空に因つて名けて大とせざるが如し。涅槃も亦爾り、小相に因つて大涅槃と名けず」と。妙も亦是の如し、妙は不可思議と名く。麤に因りて而も名けて妙とせず。若し定んで法界有り、廣大にして獨り絶なりと謂はば、此れ則ち大に所有有り、何ぞ謂つて絶と爲ん。今、法界清淨にして見聞覺知に非ず、說示すべからず。文に云はく、「止みなん止みなん說くべからず、我法は妙にして思ひ難し」と。止みなん止みなん說くべからずとは、即ち是れ絶言なり。我法は妙にして思ひ難しとは、即ち是れ絶思なり。又云はく、「是法は示すべからず、言辭の相寂滅す」と。亦是れ絶歎の文なり。待を以て示すべからず、絶を以て示すべからず。待を滅し絶を滅す、故に寂滅と言ふ。又云はく、「一切諸法は常に寂滅の相なり、終に空に歸す。此空も亦空なれば、則ち復待絶無し」と。中論に云はく、「若し法は待の爲に成ぜば、是法還つて待と成る。今則ち待に因る無く、亦所成の法無し」と。華首に云はく、「既に無生忍を得ば、亦無生を生ぜず」と。無生即ち無生なるを、是を絶待と名く。此より降りて已外、若し更に作さば、何物をか絶し、何の理をか顯さん。流浪無窮にして則ち戯論に墮す。乃ち是れ迷情を以て分別して、絶は不絶に待し、非絶非待は亦待亦絶に待す。言語相逐うて永く絶ゆること無し矣。何となれば、言語は覺觀より生ず、心慮息まずんば語何に由りてか絶えん。癡犬の塊を逐うて徒らに疲勞すれども、塊

【有門、空門】四教各四門を立つ。今は圓教の四門を指すなり。有門とは見思の假を觀ずるに即ち法界、一切の佛法を具足せば三諦相即の假なり。如是、人法二空を觀ずれば又三諦相即の空を成ず餘他の門例して知んぬべし。

終に絶えざるが如し。若し能く妙に寰中を悟らば覺觀の風を息め、心水澄清にして言思皆絶す。黠師の塊を放ちて人を逐ふが如し、塊の本既に除けば塊則ち絶す矣。妙悟の時、洞に法界の外法無きことを知りて、而も絶を論ずるは、有門に約して絶を明すなり。是絶をも亦絶するは、空門に約して絶を明すなり。快馬の鞭影を見て入るを得ざること無きが如し、是を絶待妙に名く。

是兩妙を用て、上の三法を妙にす。衆生の法も亦二妙を具すれば、之を稱して妙と爲す。佛法、心法も亦二妙を具す、之を稱して妙と爲す。若し上の四種の絶待を將て五味の經に約せば、乳教は兩絶、酪教は一絶、生蘇は四絶、熟蘇は三絶、此經は但一絶有り。若し開權の絶は、一妙の絶に入らざるは無し。問ふ、『何の意ぞ絶を以て妙を譯するや。』答ふ、『祇妙を喚ぶに絶と爲す、絶は是れ妙の異名なり。世人の絶能と稱するが如くなるのみ。又妙は是れ能絶、麤は是れ所絶なり。此妙に麤を絶するの功有るが故に、絶を擧げて以て妙と名く。迹の中の如き、先に方便の教を施すは大教起ることを得ず、今大教若し起れば方便の教絶す。所絶を將て、以て妙と名くるのみ。又迹の中の大教既に起れば、本地の大教興ることを得ず。今本地の教興れば、迹の中の大教即ち絶す。迹の大を絶するの功は本の大に由る、迹を絶するの大を將て本の大と名く、故に絶と言ふ。又本の大教若し興れば、觀心の妙起ることを得ず、今觀に入りて妙寂なれば言語の道斷え、本の教即ち絶す。絶は觀に由る、此絶名を將て觀妙と名く。此義を顯さんが爲の故に、絶を以て妙と爲す。今迹の

【一四】妙を別釋するに就いて、先に其の數を結し妙を示す。

【鷲頭】法華經の說處、靈鷲山。

【一五】別して妙を釋する中、第一に迹門の十妙を明す、即ち先に十妙を列ね、之を釋するに五番となすを示し、而して次に第一標章を說く。

絶妙を將て上の衆生法を妙にし、本地の絶妙を將て上の佛法を妙にし、觀心の絶妙を以て上の心法を妙にす。前の四絶は横に四教に約し、今の三絶は竪に圓教に約す云云。」

（一四）別して妙を釋せば三と爲す。若し鹿苑の三麤と鷲頭の一妙は皆迹中の說なれば、迹に約して、十重を開して妙を論ず。此妙に迹有り本有り、本は元初に據る、元初の本妙は十重に妙を論ず。迹本は俱に是れ教なり、教に依りて觀を作すに、觀復十重有りて妙を論ず。迹の中に衆生法妙、佛法妙、心法妙有りて、各十重あれば合して三十重なり。此と衆經と、妙を論ずるに同有り異有り。本の中の三十妙は、衆經と一向に異る。此六十重は一一に復待妙、絶妙有れば、則ち一百二十重有り。若し麤を破して妙を顯はすは、即ち上の相待妙を用ひ、若し麤を開して妙を顯はすは上の絶待妙を用ふ云云。

（一五）迹の中の十妙とは、一に境妙、二に智妙、三に行妙、四に位妙、五に三法妙、六に感應妙、七に神通妙、八に說法妙、九に眷屬妙、十に功德利益妙なり。十妙を釋するを五番と爲す、一には標章、二には引證、三には生起、四に廣解、五に權實を結す。標章とは、云何が境妙なる、謂はく十如、因緣、四諦、三諦、二諦、一諦等なり、是れ諸佛の師とする所なるが故に境妙と稱す。智妙とは、謂ゆる二十智、四菩提智、下、中、上、上上、七の權實、五の三智、一如實智なり。境妙なるを以ての故に、智も亦隨つて妙なり。法常なるを以ての故に、諸佛も亦常なり。函蓋相稱ひ、境智不可思議なり、故に智妙と稱す。行妙とは、增數の行を謂ふ。次第の五行、不次第の五行なり、智、行を導くが故に、かるが故に行妙と言ふ。

【二六】 第二に引證

位妙とは、三草の位、二木の位、一實の位を謂ふ。妙行の所契なるが故に位妙と言ふ。三法妙とは、總じて三法、縱の三法、横の三法、不縱不横の三法を謂ふ。類通三法は皆秘密藏なるが故に稱して妙と爲す。感應妙とは、四句の感應、三十六句の感應、二十五の感應、別圓の感應を謂ふ。水上り升らず、月下り降らずして、一月一時に普く衆水に現じ、諸佛來らず、衆生往かずして、慈善根の力此の如きの事を見る、故に感應妙と名く。神通妙とは、報通、修通、作意通、體法通、無記化化通を謂ふ。無謀の權、緣に稱ひて轉變す、若は遠、若は近、若は種、若は熟、若は脫、皆一乘の爲の故に神通妙と言ふ。說法妙とは、十二部の法、小部の法、大部の法、逗緣の法、所詮の法、圓妙の法を說くを謂ふ。理の如く圓に說きて、咸衆生をして佛の知見に開示し悟入せしむ。故に說法妙と言ふ。眷屬妙とは、業の眷屬、神通の眷屬、願の眷屬、應の眷屬、法門の眷屬を謂ふ。陰雲の月を籠むが如く、群臣豪族前後に圍繞す、故に眷屬妙と言ふ。利益妙とは、果の益、因の益、空の益、假の益、中の益、變易の益を謂ふ。猶大海の能く龍雨を受くるが如し、故に利益妙と名く。

(二六)二に引證とは、但迹の文を引きて尚本の文を引かず、況や餘經を引かんや。文に云はく、「諸法如是相等は唯佛と佛とのみ、乃ち能く諸法實相を究盡す」と。實相は是れ佛の智慧門、門は即ち境なり。又云はく「甚深微妙の法は見ること難く、了ずべきこと難し。我及び十方の佛、乃ち能く是相を知る」と、即ち境妙なり。「我所得の智慧は微妙にして最第一なり」と。又「此妙慧を以て無上道を求む」と。「無漏不思議甚深微妙の法は、唯我のみ是相を知

る」と云云。即ち智妙なり。「本無數の佛に從ひて、具足して諸々の道を行ず。此諸々の道を行じ已つて、道場にして果を成ずることを得たり」と。又云はく、「合掌し敬心を以て、具足の道を聞かんと欲す」と。又「諸法は本より來、常に自ら寂滅の相なり。佛子、道を行じ已つて來世に作佛することを得ん」と。即ち行妙なり。「天より四華を雨して住、行、向、地を表す。開、示、悟、入も亦是れ位の義なり。是寶乘に乘じて四方に遊ぶ」と。四方は是れ因位なり。直に道場に至るとは、是れ果位なり。是を位妙と名く。「佛自ら大乘に住す、其所得の法の如きは定慧の力莊嚴す」と。大乘は即ち眞性、定は即ち資成、慧は即ち觀照なり。是を三法妙と爲す。「我三七日の中に於て、是の如きの事を思惟す」と。又「我佛眼を以て六道の衆生を觀見す」と。又「一切衆生は皆是れ吾子なり」と。又「遙に其父を見るに、師子の牀に踞す」と。即ち感應妙なり。「今佛世尊は三昧に入りたまへり、是れ不可思議に希有の事を現す」と。即ち神通妙なり。「如來は能く種種に分別して巧に諸法を說きたまふ、言辭柔軟にして衆心を悅可す」と。身子の云はく、「佛の柔軟の音深遠にして甚だ微妙なり」。又其所說の法、皆悉く一切智地に到るを聞く」と。又「但無上道を說く」と。又「已今當の說最も信じ難く、解し難しと爲す」と。即ち說法妙なり。「但菩薩を敎化して聲聞の弟子無し」と、即ち眷屬妙なり。「現在未來に若し一句一偈を聞かば、皆三菩提の記を與ふ」と。又「須臾も聞く者は即ち三菩提を究竟することを得ん」と。又「若し小乘を以て化せば、我即ち慳貪に墮せん、此事を不可と爲す」と。又「終に一人をして獨り滅

【一七】第三に生起

度を得せしめず、皆如來の滅度を以て而も之を滅度す」と。即ち自益妙なり。

（一七）三に生起とは、實相の境は佛天人の所作に非ず、本より自ら之有りて今に適るに非ず。故に最も初に居す。理に迷ふが故に惑を起し、理を解するが故に智を生ず。智は行の本たり、智目に因りて行足を起す。目足及び境の三法を乘と爲し、是乘に乘じて淸涼池に入り、諸位に登る。位は何所にか住する、三法祕密藏の中に住す。是法に住し已んぬれば寂にして而も常に照なり、十法界の機を照し、機來れば必ず應ず。若し機に赴き應を垂るるには、先に身輪を用て神通を發す。神通を見已りて道を受くるに堪任すれば、即ち口輪を以て宣示し開導す。既に法雨に霑ひて教を稟け道を受け、法の眷屬と成る。眷屬は行を行じて生死の本を拔き、佛知見を開きて大利益を得るなり。前の五は自に約し、因果具足す。後の五は他に約し、能所具足す。法は無量なりと雖も十義の意圓なり、自他の始終皆悉く究竟す。

妙法蓮華經玄義卷第二上

【一】迹門の十妙を釋するに五番ある中、第四に廣く解す、就中今初めに諸境を釋するに先づ六種の境を列ね、乃至その生起を說く。

【二】六種の境の中、初めに十如の境を指す。

【三】六種の境の中第二に因緣の境を明す。而してまた正釋に四ある中初めに思議生滅の十二因緣を明す。

妙法蓮華經玄義　卷第二下

天台智者大師の說

（一）四に廣く境を釋するに、又二と爲す。一には諸境を釋し、二には諸境の同異を論ず。境を釋するに六と爲す、一には十如の境、二には因緣の境、三には四諦の境、四には二諦の境、五には三諦の境、六には一諦の境なり。然るに衆經に、緣に赴きて境を明すこと甚だ衆し、豈具に載すべけんや。略して六種を擧ぐるのみ。六種の次第は、十如是は此經に說く所なり、故に初に在り。次に十二因緣三世の輪廻は本來具に有り、如來世に出でて分別して巧に示し、四諦の名興る。廣より略に至るに、次に二諦を辨ず。二諦の諦は通ずれば、別して中道を顯す。次に三諦を明す、三諦は猶方便を帶すれば直に眞實を顯す。次に一諦を明す。一諦は猶名相有れば次に無諦を明す。始無明より終實際に至るまで、略して六種を用ふること足る。

（二）一に十如の境を明すこと、已に前に說くが如し云云。

（三）二に因緣の境を釋するに、又四と爲す。一には正釋、二には麤妙を判じ、三には麤を開して妙を顯し、四には觀心なり。正釋を又四と爲す、一には思議生滅の十二因緣を明し、二には思議不生不滅の十二因緣を明し、三には不思議生滅の十二因緣を明し、四に不

【自在天】マヘイシュヴラ（Maheśvara）外道の主神、色界の頂にありて三千界の主たり。

思議不生不滅の十二因緣を明す。思議の兩種の因緣は、利鈍の兩緣の爲に、界內の法を辨ずるなり。中論に云はく「鈍根の弟子の爲に十二因緣生滅の相を說く」と。此れ外道に簡異す、外道は邪に謂はく「諸法は自在天より生ず」と。或は言はく「世性」と。或は言はく「微塵」と。或は言はく「父母」と。或は言はく「無因」と。種種に邪推すれども道理に當らず。此正因緣は邪計に同じからず、唯是れ過去の無明顚倒の心中に諸行を造作し、能く今世の六道の苦果を出す、好惡同じからず。正法念に云はく「畫人五彩を分布して一切の形を圖するに、端正醜陋稱計すべからざれども、其根本を原ぬるに畫手より出づ」と。六道の差別は自在等の作には非ず、悉く一念無明の心より出づるところなり。無明と上品の惡の行業と合すれば、卽ち地獄の因緣を起す。黑色を畫き出すが如し。無明と中品の惡の行業と合すれば、畜生道の因緣を起す、赤色を畫き出すが如し。無明と下品の惡行と合すれば鬼道の因緣を起す、青色を畫くが如し。無明と下品の善行と合すれば卽ち修羅の因緣を起す、黃色を畫くが如し。無明と中品の善行と合するは卽ち人の因緣を起す、白色を畫くが如し。無明と上品の善行と合するは卽ち天の因緣を起す、上上の白色を畫くが如し。當に知るべし、無明と諸行と合するが故に、卽ち六道の名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老病死等あり、上中下に隨つて差別同じからざることを。人天の諸趣は苦樂萬品なり、生を以て死に歸し、死し已つて還て生じ、三世盤廻すること車輪の旋火の如し。故に經に言はく「有河洄澓して衆生を沒し、無明に盲ひられて出づること能はず」と。經に又稱し

【和須蜜】ワシュミトラ(Vasumitra)華嚴經五十三善知識中の一、婬女の大善知識なり。

て、「十二牽連と爲り更に相拘帶す。亦十二重城とも名け、亦は十二棘園とも名く」と。此十二因緣は新新に生滅し、念念住せず、故に生滅の十二因緣と名くるなり。料簡せば、纓路の第四に云はく、「無明は行を緣として十二を生じ、乃至、生は老死を緣として亦十二を生ず。是れ則ち一百二十の因緣なり。初是れ癡なれば、乃至老死も亦是れ癡なり。不覺の故に癡なり、初亦不覺なれば、老死に至りても亦不覺なり。癡の故に生じ、癡の故に死す。若し能く因緣を覺すれば、因緣即ち行せず。癡行せざるが故に則ち將來の生死盡くるを、名けて黠と爲す、黠は即ち道に隨ふ。

又十二緣起と、十二緣生とは、同とせんや異とせんや。此れ同じく是れ一切の有爲の法なるが故に、異ること無し。亦差別有り、因は是れ緣起、果は是れ緣生なり。則ち二は緣起、五は緣生、三は緣起、二は緣生なり。又無明は是れ緣起、行は是れ緣生なり。乃至生は是れ緣起、老死は是れ緣生なり。又四句あり、緣起にして緣生に非ず、未來の二支の法是れなり。緣生にして緣起に非ず、過去の二支、現在の阿羅漢、最後の死陰是れなり。緣起にして緣生なるものは、過去と現在との羅漢の死の五陰を除いて、諸餘の過去現在の法是れなり。緣起に非ず緣生に非ざるは、無爲の法是れなり。法身經に說く、「諸の無明決定して行を生じ、相離せずして常に相隨逐す。是を緣起にして緣生に非ずと名く。若し無明決定して行を生ぜず、或時は相離して相隨はず。是を緣生にして緣起に非ずと名く。乃至、老死も亦是の如し。尊者和須蜜の說はく、因は是れ緣起にして、因より生ずる法は

【四種の色根】眼、耳、鼻、舌の四根。

【歌邏羅等】名色の內容にして胎內の五位と云ふ。一に歌邏羅(Kalalam)受胎の意。二に阿浮陀(Arbudam)托胎後二七日を經て皰を形作りし位。三に卑尸(Pesi)三七日、漸く血肉を生ず。四に伽那(Ghana)四七日を經て肉の堅まる位。五に波羅奢訶(Prasakha)五七日を經て漸く六根具足するの位。

是れ緣生なり。和合は是れ緣起、和合より生ずるは是れ緣生なり。十二因緣支の二は是れ過去、則ち止常なり。二は是れ未來則ち止斷なり。現在は則ち中道を顯す、現の三因を推して則ち未來の二果を說き、現在の五果を推すときは、則ち過去の二因を說く。三世に皆十二支有れども、因果を推すが爲の故に是の如きの說を作す。十二時とは、無明は是れ過去の諸結の時なり、行は是れ過去の諸行の時なり、識は相續の心及び眷屬の時なり。名色は已に生を受けて相續し、未だ四種の色根を生ぜず、六入未だ具せず、一には歌邏羅、二には阿浮陀、三には卑尸、四には伽那、五には波羅奢訶なり。是の如き等の時を名色と名く。六入は已に四種の色根を生じ、六入を具足す。此諸根未だ觸の爲に所依と作ること能はず、是時を六入と名く、此諸根已に能く觸の爲に所依と作れども、未だ苦樂を別たず、危害を避くること能はず。火を捉り毒に觸れ、刀不淨を把る、是時を觸と名く。能く苦樂を分別し危害を避くる等、能く貪愛を生じ婬欲を起さず、一切の物に於て染著を生ぜざる、是時を受と名く。上の三受を具する、是時を愛と名く。境を貪るを以ての故に四方に追求する、是時を取と名く。追求の時身口意を起す、是時を有と名く。現在の識の未來に在るが如き、是時を生と名く。現在の名色、六入、觸、受の未來に於けるが如き、是時を老死と名く。一刹那の十二緣とは、若し貪心を以て生を殺すに、彼相應の愚は是れ無明なり、相應の思は是れ行なり、相應の心は是れ識なり、有作の業を起せば必ず名色有り、有作の業を起せば必ず六入有り、彼相應の觸は是れ觸なり、彼相應の受は是れ受なり、貪は即ち是

【薄拘羅】ヷックラ（Vakkula）善容又は偉形と翻ず。羅漢の名。

【四】因緣の境を釋する中、第二に思議不生不滅の十二因緣を明す。

れ愛なり、彼細覺の解は是れ取なり、彼身口の作業は是れ有なり、此の如きの諸法生ずるは是れ生なり、此の諸法の變ずるは是れ老なり、此の諸法の壞するは是れ死なり。問ふ、「何ぞ智を說いて支とせざるや。」答ふ、「一切の時、一切の處に、皆く有る者に支を立つ。自ら人有り、生れてより智無きこと、薄拘羅の如し。生來頭痛を識らず、況や餘の痛をや。是の故に立てず。」問ふ、「憂悲は是れ支なりや否や。」答ふ、「非なり。終を以て首を斷ずのみ。老死の如きは必ず憂悲す。」問ふ、「無明に因有りや否や。老死に果有りや否や。若し有らば應に是れ支なるべし、若し無くんば則ち無因無果の法に墮せん。」答ふ、「有れども而も支に非ず。無明に因有り、不正思惟を謂ふ。老死に果有り、憂悲を謂ふ。又無明に因有り、老死を謂ふ。老死に果有り、無明を謂ふ。現在の愛、取は是れ過去の無明なり、現在の名色、六入、觸、受の此四は、若し未來に在れば老死と名く。受は愛に緣たりと說くが如きは、當に知るべし、老死は無明に緣たりと說くことを。猶車輪の如く、更互に相因る。欲界の胎生の者には十二支を具す、色界の者には十一なり、名色無し。無色界には十有り、名色、六入を除く。又言はく、具に有り、色界の化生の諸根未だ猛利ならざる時、是を名色と名く。無色界には色無しと雖も而も名有り、當に知るべし、悉く十二支を具することを。」問ふ、「無明と行と取、有とは、何の異りかあるや。」答ふ、「過現と新故と、已に果を與ふると未だ果を與へざる等の異なり。」

（四）二に思議不生不滅の十二とは、此れ巧を以て拙を破す。中論に云はく、「利根の弟子の爲

【五】因緣の境を釋する中、第三に不思議生滅の十二因緣を明す。

【阿黎耶】アーラヤ(Ālaya)八識中の第八、無沒、藏、室等の義あり。有情根本の心識にして共人の受用すべき一切の事物を執持して失せざる義。之について眞と見ると眞妄和合と見る等種種の見あり。

に十二不生不滅を說く」と。癡は虛空の如く、乃至老死も虛空の如し。無明は幻化の如く不可得なるが故に、乃至老死も幻化の如く不可得なり。金光明に云はく、「無明の體相は本是れ有ならず、妄想の因緣和合して有り。不善の思惟、心行の造する所なり」と。幻師の四衢道に在りて、種種の象馬、瓔珞、人物等を幻作するが如き、癡は眞實なりと謂ひ、智は眞に非ざるを知る。無明は六道の依正を幻出す、當に知るべし、本自ら有ならずして、無明の爲す所なることを。佛は本性に非ずと知れば則ち怖心生ぜず、生ぜざるが故に滅せざるが如し。是を思議不生不滅の十二因緣の相と名く。

(五)三に不思議生滅の因緣とは、小を破して大を明す。利鈍の兩緣の爲に、生滅の法を說く。華嚴に云はく、「心は工なる畫師の種種の五陰を作るが如し。一切世間の中、心よりして造せざるは莫し」と。畫師は即ち無明の心なり、一切世間は即ち是れ十法界の假實の國土等なり。諸論に明すところ、心より一切法を出すこと同じからず。或は言はく「阿黎耶は是れ眞識なり、一切の法を出す」と。或は言はく「阿黎耶は是れ無沒識なり、無記無明にして一切の法を出す」と。若し定んで性實を執すれば、冥初に覺を生じ、覺より我心を生ずるの過に墮せん。尚界內の思議の因緣を成ぜず、豈界外の不思議の因緣を辨ずることを得んや。惑既に不思議の境に非ずんば、惑を翻ずるの解、豈不思議の智を成ずることを得んや。此を破すること、中觀の中に說くが如し。今明さく、無明の心は自に不ず、他に不ず、共に不ず、無因に不ず、四句皆思議すべからず。若し四悉檀の因緣有れば、亦說くことを

【意生身】マノーマヤ（Manomaya）初地已上の菩薩の身にして衆生濟度の爲に意の如く受生し得る身なれば名く。

【八自在】大般涅槃に常樂我淨の四德あり。其我德に八自在あり。八大自在我とは、一に能く一身を示して多身と爲し、二に一塵身を示して大千界に滿たし、三に大身輕く擧げて遠くに到り、四に無量の類を現じて常に一土に居し、五に諸根互用し、六に一切法を得ること法想無きが如し等の八を云ふ。

得べし。四句に夢を求むるに得べからずして、而も夢中に一切の事を見るを說くが如し。四句に無明を求むるに得べからず、而も無明より界內外の一切の法を出す。界內の十二因緣を出すこと、前に說くが如し。界外の十二因緣を出すとは、寶性論に云ふが如し、羅漢、支佛の空智は、如來の身に於ては未見ざる所なり。二乘は無常等の四の對治行りと雖も、如來の法身に依るに復是れ顚倒なり。顚倒の故に卽ち是れ無明なり、無漏界の中に住するに四種の障り有り、緣、相、生、壞を謂ふ。緣とは、無明住地の行の與に緣と作るを謂ふ。相とは、無明の行に共じて因と爲る。生とは、無明住地の無漏の業因に共じて生ずる三種の意生身を謂ふ。壞とは、三種の意生身、不可思議を緣ずる變易の死なり。還つて界內の十二因緣の、無明より老死に至るが如し。緣とは卽ち無明支なり、相とは行支なり、生とは卽ち名色等の五支なり、愛、取、有の三支は前に例して知んぬべし。壞とは卽ち生死支なり。此十二支は、數は界內に同じく義意は大いに異れり。彼論に云はく、「三種の意生身は未だ無明の垢を離るることを得ざれば、未だ究竟無爲の淨を得ず。無明の細戲未だ永く滅せざれば、未だ究竟無爲の我を得ず。無明の細戲論の集因、無漏業生の意陰未だ永く滅せざれば、未だ無爲の樂を得ず。煩惱染、業染、生染未だ究竟して滅せざれば、未だ甘露究竟の常を證せず。緣の煩惱道を以ての故に大淨を得ず、相の業道を以ての故に八自在の我を得ず、生の苦道を以ての故に大樂を得ず、壞の老死を以ての故に不變易の常を得ざる者は、不思議生滅の十二因緣に由る。是を界外の不思議生滅の十二因緣の相と爲す云云。

【六】因緣の境を釋する中、第四に不思議不生不滅の十二因緣を明す。

【了因、緣因、正因佛性】理智用の三法の未だ性に在りて隱れたるを三佛性と名く。

【七】四種の十二因緣に就いて麤妙を判ず。

【毘伽羅論】聲明記論と譯す。五明中、語學に關する書なり。

（六）不思議不生不滅の十二因緣とは、利根の人の爲に事に卽して理を顯す。大經に云はく、「十二因緣を名けて佛性と爲す」とは、無明、愛、取は既に是れ煩惱、煩惱道卽ち是れ菩提なり。菩提に通達すれば復煩惱無し、煩惱既に無ければ卽ち究竟淨、了因佛性なり。行、有は是れ業道、卽ち是解脫なり、解脫自在なるは緣因佛性なり。名色、老死は是れ苦道、苦卽ち法身なり。法身は苦無く樂無し、是を大樂と名く。生ぜず死せざれば是れ常、正因佛性なり。故に言はく「無明と愛と、是二の中間は卽ち是れ中道なり」と。無明は是れ過去、愛は是れ現在なり。若は邊、若は中、佛性に非ざること無し、竝に是れ常樂我淨なり、無明も生ぜず、亦復滅せず。是を不思議不生不滅の十二因緣と名く。

（七）二に麤妙を判ぜば、因緣の境は麤妙に當らず、之を取るの淺深に差降有ることを致すのみ。若し無明より諸行、乃至老死を生ずれば三より二を生じ、二より七を生じ、七より三を生じ、更互に因緣となる。煩惱と業との因緣、業と苦との因緣によりて無常生滅す。中論には此れ鈍根を敎ふるの法なりと判じ、涅槃には牛字を懸覺にすと稱し、此經には但虛妄を離るるを名けて解脫と爲すと。故に知んぬ、此境は則ち麤なることを。若し無明の體相は本より自ら有ならず、妄想の因緣和合して而も有りといはば、境既に幻の如く、智も亦復爾し。經に言はく、「若し一法の涅槃に過ぐるもの有るも、我亦如幻如化なりと說く」と。中論には利根を敎ふと明し、涅槃には長者、毘伽羅論を敎ふと稱し、大品には名けて如實の巧度と爲し、此經には小樹と名く。斯境は則ち巧なり。若し無明は是れ緣なり、緣

【三德】法身、般若、解脫を云ふ。卽ち三因佛性の果上顯現の德に名く。所謂る正了緣の三因佛性と名異なれども其の體同じ。

【八】四種の十二因緣に就いて麤を開して妙を顯はす。

より相を生じ、相より住有り、生に從ふが故に壞す。緣を滅するが故に淨なり、相を除くが故に我なり、生を出すは則ち樂なり、壞無きが故に常なり。中論に云はく、「因緣生の法は亦名けて假名と爲す」と。大品には十二緣は獨菩薩の法なりと稱し、涅槃には無明を滅するに因りて則ち熾然を得と稱す。此經には則ち是れ大樹なり、而も增長を得と。前に比すれば妙と爲し、後に方ぶれば麤と爲す。若し無明三道は卽ち是れ三德なりと言はば、三德を斷じて更に三德を求むべからず。中論に云はく、「因緣所生の法を亦中道義と名く」と。大品に說はく、「十二因緣は是れ坐道場と爲す」と。涅槃に云はく、「無明と愛と、是二の中間は卽ち是れ中道なり」と。此經には、「佛種は緣より起る、是故に一乘を說き、亦最實事と名く」と。豈妙に非ずや。前の三は是れ權なり、故に麤と爲す。後の一は是れ實なり、故に妙と爲す。此麤妙を用て五味の敎を歷れば、乳敎は二種の因緣を具す、一は麤、一は妙なり。酪敎は一麤、生蘇は三麤一妙、熟蘇は二麤一妙、法華は但一妙を說く。是を麤の因緣に待して、妙の因緣を明すと名く。

【八】二に開麤顯妙とは、經に我法は妙にして思ひ難しといふが如し。前の三も皆是れ佛法なり、豈思議の麤の不思議の妙に異る有らんや。文字を離れて、解脫を說くの義有ること無し。秖思議を體するに卽ち不思議なり。譬へば、長者の盆器、米麪を引いて窮子に給與すれば窮子の物と成る。若し天性を定むれば、窮子も復客作の人に非ず。盆器家に還る、安ぞ是れ他物ならんやの如し。如來は不思議に於て、方便して麤を說く。何ぞ麤を保して妙

【九】上來明す所の十二因緣に就いて觀心釋を設く。

【一〇】廣く境を釋する中、第三に四諦を明す。就中初めに章を分ち、次に他解を出だし、而して後之を斥ふ。

に異にすることを得ん。今聲聞の法を決了するに是れ諸經の王なり、即ち是れ兩因緣を開して即ち妙を論ず。又大經に云はく、「諸の聲聞の爲に慧眼を開發す」とは、昔の慧眼は但空を見て不空を見ず、今慧眼を開すれば即ち不空を見る、不空は即ち佛性を見るなり。故に云はく「慧眼を以て見るが故に、而も了了ならず。佛は佛眼を以て見れば則ち了了なり」と。此れ即ち菩薩の慧眼を決して、第三の因緣を開す、即ち絕對に妙を論ずるなり。

(九)四に觀心とは、一念の無明即ち是れ明なりと觀ず。大經に云はく、「無明明とは即ち畢竟空なり」と。空慧の無明を照すは、無明即ち淨なり。譬へば、人有りて賊有りと覺知すれば、賊能く爲すところ無きが如し。既に無明の爲に染されざれば、即ち是れ煩惱道淨し。煩惱淨きが故に即ち業無し、業無きが故に縛無し、縛無きが故に是れ自在我なり。我既に自在にして業の爲に縛られざれば、誰か是名色觸受を受けん。受くること無くんば則ち苦無し、既に苦陰無くんば、誰か復遷滅せん。即ち是れ常德なり。一念の心既に十二因緣を具す、此因緣を觀じて恆に常樂我淨の觀を作せば、其心念念に祕密藏の中に住す。恆に此觀を作すを聖胎に託すと名く、觀行純熟すれば胎分成就す。若し無明を破すれば聖胎を出づと名く云云。

(一〇)三に四諦の境を明すを四と爲す、一には四諦を明し、二には麤妙を判じ、三には麤を開して妙を顯し、四には觀心なり。初の文に、又二有り、一には他解を出し、二には四種の四諦なり。有師、解すらく、勝鬘の無邊の聖諦は、二乘の有餘に對して佛の究竟を明す。

【二】正しく四種の四諦を釋するに四種の別あるを標し、然る後第一に生滅の四諦を明す。

【偏圓事理】教に約して偏圓と爲し法に約して事理と爲す。

【二十五有】三界の果報を通じて二十五有あり、即ち欲界に十四有、色界に七有、無色界に四有あり。

二乘は是れ有作の四聖諦、作とは有量の四聖諦なり。無作の四聖諦とは、無量の四聖諦なり。作、無作は行に就き、量、無量は法に就く。二乘は諦を觀じて法を得ること盡さず、更に所作有り、故に有作と名く。法を得ること盡さずんば、則ち限量有り。經に言はく、「他に因りて知るは、有るものは是れ有作の行なり」と。他に因りて知るは一切知に非ず、無量の法を知らざるなり、故に有作有量と言ふ。無作無量とは、佛智は窮盡無く更に所作無し、故に無作と名く。自力を以て一切を知ると、知るとは無作の行なり、一切とは是れ無量の法なり。此の如く釋するは、四名を唱ふと雖も但二諦を成ずるのみ、今用ふる所に非ず。

(二)四種の四諦とは、一には生滅、二には不生滅、三には無量、四には無作なり。其義、涅槃の聖行品に出づ。偏圓事理に約して四種の相を分つ。言ふ所の生滅とは、眞に迷ふこと重きが故に、事に從つて名を受く。然るに苦集は是れ一法なれども、因果を分ちて兩と成す、道滅も亦然なり。雜心の偈に云はく、「諸行の果性は是を苦諦と說き、因の性を集諦と說き、一切の有漏の法究竟して滅するを滅諦と說き、一切の無漏の行を道諦と說く」と。大經に云はく、「陰入重擔逼迫し繫縛するは是れ苦諦なり、見愛の煩惱の能く來果を招くは是れ集諦なり、戒、定、慧、無常、苦、空の能く苦の本を除くは是れ道諦なり、二十五有の子、果の縛斷するは是れ滅諦なり」と。遺教に云はく、「集は眞に是れ因なり、更に別の因有ること無し。滅苦の道は、即ち是れ眞道なり」と。此れ皆生滅の四聖諦の相を明すなり。

【二】四種の四諦の中、第二に無生の四諦を明す。

【三】四種の四諦の中、第三に無量の四諦を明す。【五住の煩惱】三界に輪廻せしむる

次第は麤より細に至る、苦の相は麤なるが故に先に說く。滅は眞に非ずと雖も、滅に因つて眞に會す。滅の相は細なれば亦先に說く。又世の苦果を擧げて世の集を厭はしめ、滅は能く出世の果に會す。其道を欣ばしむれば此の如きの次第を作す。聖とは邪法を對治す、故に正聖と言ふ。諦とは三解有り云云。謂はく、自性は虛ならず、故に稱して諦と爲す。又此四を見て不顚倒覺を得、故に稱して諦と爲す。又能く此法を以て他に顯示す。故に名けて諦と爲す。大經に云はく、「凡夫は苦有りて諦無く、聲聞、緣覺は苦有り苦諦有り」と。當に知るべし、凡夫は聖理を見ず、智を得ず、諦くこと能はざれば、但苦にして諦無し。聲聞は三義を具す、故に稱して諦と爲す。此釋と經と合す。

（二）無生とは、眞に迷ふこと輕きが故に理に從つて名を得。苦は逼迫の相無く、集は和合の相無く、道は二相ならず、滅は生相無し。又苦空に[illegible]ず、三も亦是の如し。又無生とは、生を集道に名く、集道卽ち空なり。空の故に集道を生ぜず、集道生ぜざれば則ち苦滅無し。事に卽して而も眞なり、滅して後眞なるに非ず。大經に云はく、「諸の菩薩等は苦に苦無しと解す、是故に苦無くして而も眞諦有り」。三も亦是の如し。是故に名けて無生の四聖諦と爲す、四諦の意は前に說くが如し。

（三）無量とは、中に迷ふこと重きが故に事に從つて名を得。苦に無量の相有るは、十法界の果不同なるが故なり。集に無量の相有るは、五住の煩惱不同なるが故なり。道に無量の相有るは、恒沙の佛法不同なるが故なり。滅に無量の相有るは、諸の波羅蜜不同なるが故な

根本枝末の煩惱を云ふ。一に見一切處住地、二に欲愛住地、三に色愛住地、四に有愛住地、五に無明住地之なり。

【波羅蜜】パーラミター(Paramita)究竟又は到彼岸或は度と翻ず。菩薩の大行に名づく。

【二四】、四種の四諦の中、第四に無作の四諦を明す。

り。大經に云はく、「諸陰は苦なりと知るを、名けて中智と爲す。諸陰を分別するに無量の相有り、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず、我彼經に於て竟に之を說かず」と。是も亦其の如し。是を無量の四聖諦と名く。

〔二四〕無作とは、中に迷ふこと輕きが故に理に從つて名を得。理に迷ふを以ての故に、菩提是れ煩惱なるを名けて集諦と爲し、涅槃是れ生死なるを苦諦と名く。能く解するを以ての故に、煩惱即ち菩提なるを道諦と名け、生死即ち涅槃なるを滅諦と名く。事に即して而も中なれば、思無く念無く誰か造作する無し、故に無作と名く。大經に云はく、「世諦即ち是れ第一義諦なり。善方便有りて、衆生に隨順して二諦有りと說くも、出世の人知れば即ち第一義諦なり」と。一實諦とは、虛妄無く、顛倒無く、常樂我淨等なり。是故に名けて無作の四聖諦と爲す。然るに勝鬘に無作の四諦を說く中、別して一の滅諦を取りて、是れ佛の究竟する所、是れ常、是れ諦、是れ依なり。三は是れ無常にして、諦に非ず依に非ずといふ。何となれば、三は有爲の相の中に入る、故に無常なり。無常は則ち虛妄なり。故に諦に非ず。無常は則ち不安なり、故に依に非ず。滅諦は有爲を離るるが故に是れ常なり、虛妄に非ざるが故に是れ諦なり、第一安隱なるが故に是れ依なり。故に第一義諦と名け、亦不思議と名くるなり。達摩鬱多羅は此義を難ず、然るに經に說く、佛菩提の道は三義の故に常なり。一には惑盡くるが故に常、二には煩惱より生ぜざるが故に常、三には解滿ずるが故に常なり。衆流の海に歸するが如し。那ぞ道諦無常と云ふや」と。答ふ、勝鬘に此說を作すは、

【如來藏】眞如の煩惱中に隱れたるを云ふ。之に三義有り。一に所攝の義、二に隱覆の義、三に能攝の義之なり。

【二五】上の四諦の境に就いて麤妙を判ず。

【教行證】一切の佛法この三に攝在す。即ち教法と之に隨順する修行と及びその證果となり。

【三種】通別圓の三教。

前の苦滅諦は壞法の滅に非ず。無始無作等、恆沙を過ぐる佛法成就す、如來法身は煩惱藏を離れずと說く、苦諦を說きて、隱れたるを如來藏と名け、顯れたるを名けて法身と爲す。二乘の空智は、四不顚倒の境界に於て見ず知らず。今顯說せんと欲して、一は是れ常、是れ實、是れ依なりと說く。對治、除障、身顯行るが故に、三は常に非ず實に非ず、一は是れ常、是れ實なりと明す耳。今釋す、若し爾らば、一諦は顯なれば是れ無作の諦なり、三諦は未だ顯れざれば無作の諦に非ずといふは、一は是れ了義にして、三は了義に非ず。當に知るべし、勝鬘に說く所は次第を說く。淺より深に至り、歷別にして未だ融せず。乃ち是れ無量の四諦の中の無作にして、是れ發心畢竟二不別の無作に非ず。涅槃に云はく、「諦有り實有り」と。當に知るべし。四種皆諦と稱し、實と稱し、常と稱することを。

(二五)二に麤妙を判ぜば、大小乘に諦を論ずるに此四を出でず。或は教行證融ぜざる者を麤と爲し、教融じて行證未だ融ぜざるも亦麤なり。但に融ずる者は則ち妙なり。若し五味に約すれば、乳教は兩種なり、二乘は竝に聞かず、大を以て小を隔つれば則ち一は麤一は妙なり。酪教は一種にして、大乘の用ひざる所なり。小を以て大を隔つれば根敗麤鄙なり、是故に麤と爲す。生蘇の教は四種あり、一(圓教)は三(前三教)を破す。三(藏通二教)は入らず、二(別圓二教)は一(中道)に入ると雖も、一(別教)は教融ぜざるが故に、三は麤、一は妙なり。熟蘇の教は三種なり、一(圓教)は二(通別教)を破す。一(別教)は一(中道)に入り、一(通の鈍)は一(中道)に入らず。一(別教)は一(中道)に入ると雖も教融ぜざるが故に、

【二六】四種の四諦に就いて麁を開し妙を顯はす。

【生生不可說、生不生不可說、不生生不可說、不生不生不可說】涅槃經の四不可說と稱し、同じく涅槃の四種の四諦と及び中論の四句偈と共に、天台四教判の典據とさる。

二は麁、一は妙なり。醍醐の教は但一種の四諦にして、唯妙にして麁無し。此を麁に待して妙を明すと爲す云云。

（二六）三に麁を開して妙を顯すは、先に諸經の意を叙す。大品は、此三種の四諦を明す、文に云はく、『色即ち是れ空なり、色滅して空なるに非ず』とは、無生の意なり。『一切の法は色に趣く、是趣過ぎず』とは、無量の意なり。『色尚得べからず、何に況や趣有り不趣有らんや』とは、無作の意なり。中論の偈に亦三意有り、後の兩品に小乘の觀法を明すは、即ち生滅の意なり。無量義に、一の中より無量を出すことを明すは、是れ無作より三種の四諦を開出するなり。法華に、無量は一に入ることを明すは、是れ三種の四諦を會して、無作一種の四諦に歸するなり。涅槃の聖行には追つて衆經を分別す、故に具に四種の四諦を說く。徳王品には追つて衆經を泯じ、倶に四種の四諦を泯す。文に云はく、『生生不可說、生不生不可說、不生生不可說、不生不生不可說』と。若し初の句を釋して云はく、『云何なるか生生不可說なる、生生の故に生じ、生生の故に不生なり、故に不可說なり』と。若し文に依らば、但生不生を擧げて生生を釋す。此生、生即ち生不生なれば、那ぞ偏に生生との み作して而も說くべけんや。佛は利根の人の爲に、一を擧げて而も三を傚す。若し取意せば、生生即ち生不生、亦即ち不生生、亦即ち不生不生なり。那ぞ偏に生生の一句と作して而も說くべけんや。若し此意を得れば、下の三句も傚するに皆此の如し。問ふ、『佛は何が故ぞ偏釋を作したまふ耶。』答ふ、『利根の爲の故なり。』亦是れ因緣有るが故に、宜し

【一七】四諦の境に就いて觀心の解をなすべきも、今之を略す。

【一八】廣く諸境を釋する中、第四に二諦の境を明す。中に於て、先づ章を分ち、次に諸意を擧げ他の失を叙し、然る後今家の正判を示す。

【二諦】眞諦と俗諦。眞諦とは聖智所見の眞實の理性俗諦とは迷情所見の世間の事相を云ふ。

く此の如くなるべし。時の衆は、快馬の鞭影を見て骨に徹することを俟たざるが如きのみ。此の如く追つて泯ずるに、何の說か寂せざらん耶。或は三種の可說を麤と爲し、一の可說を妙と爲す。或は三の不可說を麤と爲し、一の不可說を妙と爲す。或は四皆可說なるを麤と爲し、四皆不可說なるを妙と爲す。或は四の可說に麤有り妙有り。或は四の不可說に麤有り妙有り。或は四の可說皆麤に非ず妙に非ず、或は四の不可說皆麤に非ず妙に非ず。是の如き等の種種を皆泯了して妙に入れ、權を開して實を顯す。四皆不可說なるは、是れ位高く、四皆可說なるは是れ體廣く、四の亦は可說、亦は不可說なるは是れ用長し。四の可說に非ず不可說に非ざるは、是れ高に非ず廣に非ず、長に非ず短に非ず、一に非ず異に非ず、同じく稱して妙と爲す。

（一七）觀心は知んぬべし、復記せざるなり。

（一八）四に二諦を明さば又四と爲す。一には略して諸意を述し、二には二諦を明し、三には麤妙を判じ、四には麤を開して妙を顯すなり。夫れ二諦とは、名は衆經に出でて、而も其理は曉らめ難し。世間紛紜として由來碩に諍ふ。妙勝定經に云はく「佛、昔文殊と共に二諦を諍ひて、俱に地獄に墮す。迦葉佛の時に至つて、共に所疑を質す」と。二聖の因地も尚了すること能はず、況や卽ち人情彊ひて去取を生ずるをや。問ふ、『釋迦、迦葉に値はば卽ち是れ二生の菩薩なり。云何ぞ始めて二諦を解せん。爾前は復應に惡道に墮すべからず。』答ふ、爾前の語は寛し、何ぞ必ず二生の前に齊つて、始めて惡道より出でんや。又二生の

【一生】兜率一生。閻浮一生。

【莊嚴の旻】梁の三大法師の一、莊嚴寺の僧旻。

【中論師】開善寺智藏のこと。梁の三大法師の一。

【四假】因緣、隨緣、就緣、對緣の四假にして中論師の云ふ所なり。

菩薩は將に補處に隣る、補處の位は多し。別圓には永く此理無し。通教の見地も已に惡道を免るれば、亦墮落無し。既に是れ三藏の菩薩なるべし、一生に至る時猶未だ惑を斷せざれば、始めて二諦を解すといふも、此義皆無し。自前に惡道に墮するも、亦其義有らん。』問ふ、『三藏の菩薩は墮落有り、餘の三教は無しといはば、今經明すに何ぞ十地に猶虎狼師子等の怖有りと云ふや。』答ふ、『惡友の爲に殺さるるときは則ち地獄に墮するも、惡象の爲に殺さるれば地獄に墮せず。然るに圓教の肉身は、一生の中に於て、超えて十地に登るの義有り。此れ則ち煩惱已に破すれば、地獄の業無けれども、猶肉身有りて未だ惡獸を免れず。餘教の肉身は、一生の中に十地に登らざれば、唯行解を作して煩惱を以て虎狼と爲す。行の解を作すとは理に於ては則ち通ずれども、事に於ては未わず云云。然るに釋する者同じからず、莊嚴の旻は、佛果の二諦の外に出づるに據りて、中論師の爲に彈せらる。此の如きの佛智は、何れの理をか照し、何れの惑をか破す。若し別理の照すべき無くんば、應に外に出づべからず。若し外に出でて而も別の照す無くんば、何に藉りてか出づることを得ん。進んでは三（諦）を成ぜず、退きては二諦を成ぜず云云。梁の世の成論は、世諦を執すること同じからず。或は言はく「世諦は名と、用と、體と皆有り」と、或は「但名、用のみにして而も體無し」と。或は「但名のみ有りて、體と用無し」と云云。陳の世の中論は破立同じからず、或は古來の二十三家の二諦の義を明すを破して、自ら二諦の義を立つ。或は他を破し竟りて、四假に約して二諦を明す。古今の異執、各證據を引き、自ら一文を

保して餘說を信ぜず。今謂はく爾らず、夫れ經論の異說は、悉く是れ如來の善權方便なり。根を知り、欲を知りて種種同じからず。略して三異有り、隨情、情智、智等を謂ふ。隨情の說とは、情性同じからざれば、說も情に隨つて異なり。毘婆沙に明すが如し、「世第一法に無量の種有り」と。際眞も尙爾り、況や復餘をや。盲の情に順じて種種に乳を示すに、「盲異說を聞きて而も白色を諍ふが如し。豈卽ち乳ならんや。衆師は此意に達せずして、各各一文を執して自ら見諍を起し、互に相是非して、一を信じて一を信ぜず。浩浩として亂なる哉、孰れか是なることを知ること莫し。若し二十三說、及び能破の者は、經の文證有らば、皆判ずるに是れ隨情の二諦の意なるのみ。文證無くんば、悉く是れ邪謂にして彼外道に同じ、二諦の攝に非ざるなり。隨情智とは、情謂の二諦にして、二は皆是れ俗なり。若し諦理を悟れば乃ち眞と爲すべし、眞は則ち唯一なり。五百の比丘各身因を說くが如き、身因乃ち多けれども正理は唯一なり。經に云はく、「世人の心の見る所を名けて世諦と爲し、出世の人の心所見を第一義諦を名く」と。此の如くに說くは、卽ち隨情智の二諦なり。隨智とは、聖人は理を悟れば但眞を見るのみに非ず、亦能く俗をも了す。眼の膜を除けば色を見、空を見るが如し。又禪に入る者は、出觀の時心身虛豁にして、輕雲の空に靄くに似て、已に散心に同じからざるが如し。何に況や眞を悟りて、而も俗を了せざらんや。毘曇に云はく、「小雲障を發けば大雲障を發く、無漏途深ければ世智轉淨し。故に經に言はく、「凡人は世間を行じて世間の相を知らず、如來は世間に行じて世間の相に明了なり」

【九】正しく二諦を明すに、初めに意を說き功能を明し、七種の二諦を列ぬ。

【一〇】所謂る七種の二諦を釋する中第一に藏教實有の二諦を明す。

と。此は是れ隨智の二諦なり。若し此三意を解せば、將に經論を尋ぬるに、種種に說くと雖も、一一の諦に於て皆三意を備ふ。

（一九）二に正しく二諦を明さば、取意存略せば但理性を點じて眞諦と爲し、無明十二因緣を俗諦と爲す。義に於て即ち足れども、但人心麤淺にして其深妙を覺らざれば、更に開拓して即ち七種の二諦を論ずべし。一一の二諦に更に三種を開せば、合して二十一の二諦なり。若し衍門の二諦を用つて、一切の邪計を簡すれば執著皆盡きん。劫火燒きて遺木を留めざるが如し。況や後の諸諦は逈かに文の外に出づ、復世情の圖度に非ず。言ふ所の七種の二諦とは、一に實有を俗と爲し、實有の滅を眞と爲す。二には幻有を俗と爲し、幻有に即して空なるを眞と爲す。三には幻有を俗と爲し、幻有に即して空、不空共なるを眞と爲す。四には幻有を俗と爲し、幻有即空不空にして、一切法の空不空に趣くを眞と爲す。五には幻有、幻有即空を皆名けて俗と爲し、有ならず空ならざるを眞と爲す。六には幻有、幻有即空を皆名けて俗と爲し、有ならず空ならずして、一切法の不有不空に趣くを眞と爲す。七には幻有、幻有即空を皆俗と爲し、一切法の有に趣き、空に趣き、不有不空に趣くを眞と爲す。

（二〇）實有の二諦とは、陰入界等は皆是れ實法なり、實法の所成は森羅萬品なり、故に名けて俗と爲す。方便して道を修し、此俗を滅し已りて乃ち眞に會することを得。大品に云はく、「色を空ずれば色は空なり、俗を滅するを以ての故に謂つて空色と爲し、色を滅せざるが故

【二】七種の二諦を說く中、第二に通教の二諦を釋す

【三】七種の二諦の中、第三に別接通の二諦を明す

【使】邪見、疑、癡を云ふ。

に謂って色空と爲すこと。智の中に業無く、文字の中に菩提無しとは、皆是れ此意なり。是を實有の二諦の相と爲す。此に約するに亦隨情、隨情智、智等の三義有り、之を推して知んぬべし。

【二】幻有空の二諦とは、前の意を斥ふなり。何となれば、實有の時は眞無く、有を滅する時は俗無ければ、二諦の義成せず。若し幻有を明さば、幻有は是れ俗なり。幻有不可得なれば、俗に卽して而も眞なり。大品に云はく、「色に卽して是れ空、空に卽して是れ色なり」と。空と色と相卽すれば、二諦の義成ず。是を幻有無の二諦と名く。此に約して亦隨情、情智、智等の三義有り。云云。隨情は小に同じく、當に分別すべし。何となれば、實有の隨情、眞を照すこと此と異らざれども、隨智の俗を照すこと同じからず。何となれば、通人は眞に入ること巧なれば、復局つて俗を照すも亦巧なり。百川海に會すれば、其味別ならず、復局つて源に還せば、江と河と則ち異るが如し。俗は是れ事法なれば、照異なること喩ひに非ず。眞は是れ理法なれば、同ならざるべからず。秖通人の出假に就くに、亦人人不同なり。意を以て得べし。三藏の出假を例するに、亦應に是の如くなるべし云云。

【三】幻有空不空の二諦とは、俗は前に異ならず、眞は則ち三種同じからず。一俗は三眞に隨つて、卽ち三種の二諦を成す。其相云何、大品に明すが如き、漏に非ず無漏に非ず。初の人聞はく、非漏は是れ俗に非ず、非無漏は是れ眞を遣ると。何となれば、行人、無漏を緣じて著を生ずるは、滅を緣じて使を生ずるが如し。其著心を破して、引いて無漏に入る。

此は是れ一番の二諦なり。次の人に非漏非無漏を聞きて謂はく、二邊を非して別して中理を顯す、中理を眞と爲す。又是れ一番の二諦なり。又の人は、非有漏非無漏を聞きて即ち雙非するは正しく中道を顯す、中道法界は、力用廣大にして虚空と等し、一切の法は非有漏非無漏に趣くと知る。又是れ一番の二諦なり。大經に云はく、「聲聞の人は但空を見て不空を見ず、智者は空及び不空を見る」と。即ち是れ此意なり。二乘は謂はく、直空に著す。空に著するを破するが故に、かるが故に不空と言ふ。空著若し破すれば、但是れ空を見て不空を見ざるなり。利人は謂はく、「不空は是れ妙有なり、故に不空と言ふ」と。利利人は不空を聞きて謂はく、「是れ如來藏なり、一切の法如來藏に趣く」と。還つて空不空に約するに、即ち三種の二諦有り。復次に、一切法の非漏非無漏に趣くに約して三種の異を顯さば、初の人は、一切の法、非漏非無漏に趣くを聞きて謂はく、「諸法は空を離れず、周く十方界に行くに還つて是れ鮮匿の如なり」と。又の人は趣を聞きて、此中理は一切の行來趣して之を發すべしと知る。又の人は一切趣を聞きて、「即ち漏に非ず無漏に非ず、一切の法を具す」と。是故に、此一俗は三眞に隨つて轉ずと說く。或は單眞に對し、或は複眞に對し、或は不思議の眞に對す。無量の形勢婉轉して機に赴き、出沒して物を利す。一一皆隨情、情智、智等の三義有り。若し隨智證すれば、俗は智に隨つて轉ず。智、偏眞を證すれば即ち通の二諦を成ず。智、不空の眞を證すれば即ち別入通の二諦を成ず。智、一切の不空に趣くの眞を證すれば、即ち圓入通の二諦を成ず。三人の入智同じからざれば、復

【薩婆若】サルバジュニャー（Sarvajña）一切智。
【遊戲神通】菩薩の神通を現ずるに自在なること遊戲するが如きに喩ふ。
【二三】七種の二諦の中、第四に別の二諦を明す。
【二四】七種の二諦の中、第五に圓入別の二諦を明す。
【緣修】十地已前に作意修成して次第の二觀の方便を用ひて九界差別の相を破するを云ふ。
【二五】七種の二諦の中、第六に圓敎の二諦を明す。

局つて俗を照すも亦異る云云。何が故にか、三人同じく二諦を聞きて、而も解を取ること各異るとは、此は是れ不共般若と二乘と、共に說く、即ち淺深の殊耳。大品に云はく、「菩薩の初發心に薩婆若と相應する有り、菩薩の初發心に遊戲神通して佛國土を淨むるが如き有り、菩薩の初發心に即ち道場に坐して、佛の如しと爲すもの有り」とは、即ち此意なり。

(二三)幻有無を俗と爲し、不有不無を眞と爲すとは、有無は二なるが故に俗と爲し、中道は有ならず無ならずして不二なれば眞と爲す。二乘は此眞俗を聞きて俱に皆解せず、故に瘂の如く聾の如し。大經に云はく、「我と彌勒と共に世諦を論ずるに、五百の聲聞は眞諦を說くと謂へり」とは、即ち此意なり。此に約するに亦隨情、隨智、智等有り云云。

(二四)圓入別の二諦とは、俗は別と同じく、眞諦は則ち異る。別人は謂ふらく「不空は但理のみ、此理を顯さんと欲せば、緣修の方便を須ゆ。故に一切の法、不空に趣くと言ふ」と。圓人は不空の理を聞きて「即ち一切の佛法を具して缺減有ること無し」と。故に一切の法、不空に趣くと言ふを知る。此に約するに亦隨情等有り云云。

(二五)圓教の二諦は、直に不思議の二諦を說く。眞即ち是れ俗、俗即ち是れ眞なり。如意珠の如し、珠は以て眞を譬へ、用は以て俗を譬ふ。珠に即して是れ用、用に即して是れ珠なり。不二にして而も二なれば眞俗を分つのみ。此に約するに亦隨情、智等有り云云。身子の云はく、「佛は種種の緣、譬喩を以て巧に言說す。其心安きこと海の如し、我聞きて疑網斷ず」

【三六】問答料簡。

【別接通】通教即空の理を觀ずるところに別教但中の理を證り接ぐを云ふ。

【圓接通】通教の理に圓教不但中の理を證り接ぐを云ふ。

【圓接別】別教の初地已前賢位の人をして圓教初住已上の聖位に入らしむるを云ふ。

【三七】上來の二諦の境に就いて麤妙を判ず。

し」即ち其意なり云。

(二二〇)問ふ、「眞俗は應に相對すべし、云何ぞ不同なるや。」答ふ、「此れ應に四句あるべし。俗異眞同、眞異俗同、眞俗異相對、眞俗同相對なり。三藏と通とは、眞は同にして而も俗は異なり。三の人通は、眞は異にして而も俗は同なり。別は眞俗皆異にして相對す。圓入別は、俗は同にして眞は異り。圓は眞俗不異にして而も相對す。不同にして而も同なり、若し相入せざれば當分の眞俗にして、即ち相對す云云。七種の二諦は廣く說くこと前の如し。略して說かば、界内の相即と不相即と、界外の相即と不相即とは四種の二諦なり。別接通は五なり、圓接通は六なり、圓接別は七なり。」問ふ、「何ぞ三藏を接せざるや。」答ふ、「三藏は是れ界内の不相即なり、小乘の者を取る根敗の士なり、故に接を論ぜず。餘の六は是れ摩訶衍門なり、若し前進せんと欲せば亦去ることを得べし、是故に被接す。」問ふ、「若し接せずんば亦會せざるや。」答ふ、「接の義は會の義に非ず。未會の前は被接を論ぜず。」

(二二七)二に麤妙を判ぜば、實有の二諦は半字の法門なり、鈍根の人を引きて戲論の糞を蠲除す。二諦の義成せざれば、此法を麤と爲す。如幻の二諦は滿字の法門にして、利根を教へんが爲にす。諸法の實相は三人共に得れば、前に比して妙と爲す。同じく但空を見れば、後に方ぶるに即ち麤なり。別を以て通に入るは能く不空を見る、是れ即ち妙と爲す。教、理を譚ずることを論ぜず、是故に麤と爲す。圓を以て、通に入るを妙と爲す、妙は後に異らず。通の方便を帶す、是故に麤と爲す。別の二諦は通の方便を帶せず、是故に妙と爲す。教、

【心相體信】法華經信解品の譬、般若の轉教を喩ふ。

理を斷ずることを融せず、是故に麁と爲す。圓入別は理融ずれば妙と爲し、別の方便を帶すれば麁と爲す。唯圓の三諦は正直無上道なり、是故に妙と爲す。次に隨情智に約して麁妙を判ぜば、且く三藏に約するに、初に隨情の二諦を開く。實語を執して虛語と爲し、諸見を起すが故に、生死浩然として佛法の氣分無し。若し能く念處を勤修すれば、四善根を發す。是時隨情の二諦を皆名けて俗と爲す。無漏を發得して照す所の二諦を、皆名けて眞と爲す。四果の人より無漏智を以て照す所の眞俗を、皆隨智の二諦と名く。隨情は即ち麁、隨智は即ち妙なり。譬へば、乳を轉じて始めて酪と成すことを得るが如し。既に酪を成じ已れば、心相體信して入出に難り無し。即ち隨情、情智、智等に通、別入通、圓入通を說くことを得、其をして小は恥ぢ大を慕ひ、自ら敗種を悲しみて、上乘を渇仰せしむ。是時、酪を轉じて生蘇と爲すが如し。心漸く通泰すれば、即ち隨情、情智、智等の爲に別、圓入別を說き、不共般若を明す。命じて家業を領ぜしめ、金銀珍寶、出入取與、皆知らしむ。既に是を知り已れば、即ち生蘇を轉じて熟蘇と爲すが如し。諸佛の法は久しうして後、要ず當に眞實を說くべし。即ち隨情、情智、智等に圓の二諦を說く、熟蘇を轉じて醍醐と爲すが如し。是れ即ち六種の二諦に衆生を調熟す、歷して四味と成す、是故に麁と爲す。醍醐の一味は、是れ即ち妙と爲す。又束ねて麁妙を判ずれば、前の二種は隨智等有りと雖も、一向に是れ隨情なり。他意語を說くが故に、故に名けて麁と爲す。別入通より去りては隨情等有りと雖も、一向に束ねて情智と爲す。自、他意語等を說くが故に、亦は麁、亦は妙な

【一八】二諦の境に就いて麤を開し妙を顯はす。

【華王界】蓮華藏世界。

り。圓の二諦は隨情等有りと雖も、一向に是れ隨智なり。佛の自意語を説くが故に、かるが故に稱して妙と爲す。問ふ、『前の二の二諦は一向に是れ隨情ならば、應に見諦に非ざるべし、亦道を得ざるや。』答ふ、『中道を得ざるが故に隨情と稱す。諸佛如來は空しく法を説かず、中道第一義悉檀に非ずと雖も、三悉檀の益を失せず。大概之を判ずれば皆隨情に屬して麤と爲すのみ。若し七種の二諦を以て五味の教に歴れば、乳教には別と圓入別と圓との二種の二諦有り。二は麤、一は妙なり。酪教は但實有の二諦のみあり、純ら麤なり。生蘇は七種の二諦を具す、六は麤、一は妙なり。熟蘇は六種あり、五は麤、一は妙なり。法華は但一の圓の二諦有りて六の方便無く、唯妙にして麤に不ず。題に標して妙と爲すは、意此に在り。是を相待に麤妙を判ずと爲す。』

(一八)四に麤を開して妙を顯さば、三世の如來は、本衆生をして佛知見を開き、無生忍を得せしめんとして、大事の因緣を以て世に出現す。法華論に云はく『蓮華の水を出づるは、義盡すべからず。小乘泥濁の水を出離するが故に、如來大衆の中に入りて坐す。諸の菩薩の蓮華の上に坐して、無上清淨の智慧を説くを聞く者の如し。必ず華葉に坐するに非ず、乃ち是れ諸の菩薩、一圓の道を説くを聞きて一圓の果を證し、華王界に處して舍那佛と同じく蓮華臺に坐する耳。佛意此の如し、始めて我身を見、初めて一實を聞きて、已に華臺に入る。未入の者の爲に、頓より漸を開す。更に異の方便を以て第一義を助顯し、諸の二諦を説く。或は單、或は複、或は不可思議、種種不同なれども、皆華臺の爲に而も方便

【寂滅道場】 化身佛の有餘涅槃を證得せし道場。釋尊にては伽耶山頭、尼蓮禪河邊の菩提樹下金剛座上を云ふ。

【大通智勝】 三千塵點劫の昔に出世せし如來の名、この佛の在世に十六王子あり、佛より法華經を聽き、滅後宣布す。其第十六王子は即ち今の釋尊にして、今日の大衆は其時已來の結緣衆なり。

を作す。但如來は常寂にして、而も化は法界に周し。實に分別して先に謀り後に動じて、此汲引を施すに不ず。慈善根の力、諸の衆生をして、此に從つて入ることを得せしむ。有人の言はく、始め鹿苑より皆是れ法華の弄引なり。今言はく爾らず、且く近く說かば、寂滅道場より已來悉く法華の弄引たり。所以に光り他土を照し、現佛悉く頓の爲に漸を開す。文殊は先佛も亦頓の爲に漸を開するを引く、此の如きの弄引は、猶恨むらくは其近きことを。大通智勝より以來、而も衆生の爲に法華の方便を作す。當に知るべし、止近く寂場に在らざることを。又此れ猶近し、本成佛してより已來、而も衆生の爲に華臺の方便を作す。又復猶近し、本行菩薩道の時より、而も衆生の爲に華臺の方便を作す。文に云はく「我本誓願を立て、普く一切の衆をして、亦同じく此道を得せしめん」と。當に知るべし、弄引は豈止今のみならん耶。本來の所化華臺に入るは、自ら是れ一邊なり。其未入の者は、上の方便息まざるが如く、中間も亦是の如し。若し華嚴、方等、般若の經よりは、或は別入通、圓入通、圓入別等に華臺に入る者と、本入の者と異ること無し、復自ら是れ一邊なり。其未だ入らざる者は、四味に調熟して、皆此經に於て華臺に入ることを得せしむ。諸教の中、或は三味、二味、一味に住し、或は全く生しき者は、皆囊を決して妙ならしめ、悉く華臺に入らしむ。三藏の果を保して破し難きをも已に破し開し、難きをも已に開す。況や破し易く開し易きをや、悉く情に隨ひ本に仍りて、當門に實を顯し、即ち華臺に入る。文に云はく「七寶の大車、其數無量にして、各諸子に賜ふ」と云云。此れ即ち權を

【涅槃贖命】法華の後涅槃經を說きたまへる目的意義をあらはす語にして、此れに二義有り、一は當座、二は末代なり。卽ち前者は當座の人をして中道常住の慧命を贖はしむるをいひ、後者は末代の衆生をして斷滅の惡見を防ぎ戒律を重んじて、法身常住の慧命を贖はしむるの意なり。

【十の勝相】大乘の功德を顯はさんが爲に大乘の教に依つて立つ。一には依止、二には應

開して實を顯さば諸麤皆妙にして、絶待の妙なり。若し上に說くが如くんば、法華は衆經を總括して、而も事此に極まる。佛出世の本意なり、諸の教法の指歸なり。人此理を見ずして、是れ因緣事相なりと謂つて、輕慢して止まずんば舌口中に爛れん。若し其旨を得ば、深く七種、二十一種、無量の教門を見ん。意氣博遠なり、更に相間入し緗淡精微なり。橫に周く、竪に窮め、悉く法華に歸會す。二萬燈明迦葉等の古佛、教を設くるも妙なること此に極まる。有經に云はく、「彌勒は當來に亦妙なること此に極まる。釋迦仰いで三世に同ず、亦妙なること此に極まる。涅槃は命を贖ふ重寶なり、重ねて掌を抵つのみ」と。此妙旨を觀ずるに宏壯包籠なり、尋ねん者は須く其意を曠しうすべし、人情を以て彼太虛を局ること莫れ。

攝大乘に十の勝相の義を明し、咸く深極と謂つて、地論をして宗を翻ぜしむ。今試みに十妙を以て之に比するに、彼は漏るる所有り。且く理妙を用て依止勝相に比すれば、不思議の因緣を明して四句に破執す、豈黎耶庵摩羅を留めて依止とせん耶。四悉檀の施設は、止無明他生の一句を立せず。彼は直是れ一道に義を明して、開合衆經、頓漸は物の爲にし、約教、約行、隨情、隨智は大に佛化を包みて深く始終を括るを見ず。因緣の一境已に依止より廣し、更に四の四諦、七の二諦、五の三諦、一諦等を用て比せば、彼に準擬するもの無し。迹中の十妙已に漏るる所有り、本の中の十妙は群經に無き所なり、何に況や彼論をや。又觀心の十妙は卽ち行用なることを得。貧人の果頭の寶を數ふるが如くならず。當に知る

知、三には入應知四には因果、五には入因果修差別、六には差別に於て戒に依て學す。七には中に於て心に依て學す、八には中に於て慧に依て學す、九には果寂滅を學す、十には智差別。

【二九】廣く諦境を釋する中、第五に三諦の境を明す。就中先づ初め他教に依りて名義を立し、乃至問答料簡す。

【三〇】正しく簡諦を明すに就いて、先づ章を開き、次に正しく釋す。

べし、十妙の法門は鱗沓重積すること勝て言ふべけん哉。天竺の大論も尚其類に非ず、眞丹の人師何ぞ勞はしく語るに及ばん。此れ誇耀に非ず、法相然るのみ。思うて自ら之を見よ、辭の費を俟つことなかれ。

(二九)五に三諦を明さば、衆經に備に其義有れども、而も名は纓珞、仁王に出づ。謂はく、有諦、無諦、中道第一義諦なり。今經にも亦其義有り、壽量に云はく「非如非異」と、即ち中道なり、如は即ち眞、異は即ち俗なり。問ふ、「若し此經に四種の因緣等の名無くんば、那ぞ其義を用ひんや。」答ふ、「五住二死の名は勝鬘に出づれば、涅槃に其義を用ふべからずや。若し五住を用ひざれば即ち無明を破せず、若し二死を用ひざれば即ち常住に非ず。又三佛の名は楞伽に出づ、餘經に三佛の義無かるべしや。衆經は皆是れ佛說なり、名は乃ち同じからざれども、義蓋がるべからず云云」

(三〇)今三諦を明すに三と爲す、一には三諦を明し、二には麤妙を判じ、三には麤を開して妙を顯す。前の兩種の二諦を卻くるは、中道を明さざるを以ての故なり。五種の二諦に就くに、中道を論ずることを得れば、即ち五種の三諦あり。別入通に約せば、非有漏、非無漏を點ずるに三諦の義成ず。有漏は是れ俗、無漏は是れ眞、非有漏非無漏は是れ中なり。當教に中を論ずれば、但空に異る而已。中に功用無く、諸法を備へず。圓入通の三諦とは、二諦は前に異らず。非漏非無漏を點ずるに一切の法を具すれば、前の中と異れり。別の三諦とは、彼俗を開して兩諦と爲し、眞に對して中と爲す、中は理なるのみ云云。圓入別の

三諦とは、二諦は前に異らず、眞の中道を點ずるに佛法を具足す。圓の三諦は但中道に佛法を具足するのみに非ず、眞俗も亦然なり。三諦圓融して一三三一なること、止觀の中に說くが如し云云。

(三二)二に麤妙を判せば、別圓入通は通の方便を帶す、故に麤と爲す。別は通を帶せざれば、妙と爲す。圓入別は別の方便を帶すれば麤と爲し、圓は方便を帶せざれば最も妙となす。五味の敎に約せば、乳敎には三種の三諦を說く、二は麤、一は妙なり。酪敎には但麤ありて妙無し。生、熟蘇は皆五種の三諦を具す、四は麤、一は妙なり。此經は唯一種の三諦なり。即ち相待妙なり。三に麤を開して妙を顯さば、前の諸麤を決して、一の妙の三諦に入るるに、待すべき所無し。是を絕待妙と爲す。

(三三)六に、一諦を明さば、大經に云はく、「言ふ所の二諦とは其れ實に是れ一なり、方便して二と說くのみ。醉ひて未だ吐かずんば日月轉ずと見て、轉日及び不轉日有りと謂ふも、醒めたる人は但不轉を見て轉を見ざるが如し。轉二を麤と爲し、不轉を妙と爲す」。三藏は全く是れ轉二にして、彼醉へる人に同じ。諸の大乘經は、轉の二を帶して不轉の一を說く。今經は正直に方便を捨てて但無上道を說く、不轉の一實なり、是故に妙と爲す。地持に明す、「地相に義を明すは相似の法を說く。地實に義を明すは眞實の法を說く。又敎門の方便は即ち敎道に義を明し、所證の法を說くは即ち證道に義を明す」と。今借りて之を用ふるなり。諸佛の法は久しうして後、要ず當に眞實を說くべしとは、即ち地實の義なり。道場

【三諦圓融】空假中の三諦互具互融したれば一諦を擧ぐるには一切を具し絕對ならざるなき妙極を云ふ。故に色心の萬法、法法塵塵悉く皆な當體圓融の三諦ならざるなし。

【三二】三諦の境に就いて麤妙を判じ麤を開して妙を顯す。

【三三】廣く諸境を釋する中、第六に一諦の境を明す。而して初めて別して之を明す中自ら三意あり、即ち分別、判、開なり。

【三】一諦を明す中、通じて無諦を釋す。

所得の法とは、卽ち是れ證道に義を明す、是故に妙なり。此實に執著せば、實語も是れ虛語なり、語見を生ずるが故に、故に名けて麤と爲す。融通すれば著無し、是故に妙と言ふ。開麤顯妙は解すべし云云。

(三三)諸諦は說くべからずといふは、諸法は本より來常に自ら寂滅の相なり、那ぞ諸諦紛紜として相礙ゆることを得ん。一諦尙無し、諸諦安んぞ有らん。一一皆不可說なり。可說を麤と爲し、不可說を妙と爲す。不可說も亦不可說なるは是れ妙なり。是妙も亦妙なり、言語道斷の故に。若し通じて不可說を作さば、生生不可說、乃至、不生不生不可說なり。前の不可說を麤と爲し、不生不生不可說を妙と爲す。若し麤は妙に異なれば、相待して融ぜず。麤と妙と不二なるは、卽ち絕待妙なり云云。五味の敎に約せば、乳敎は一の麤の無諦と、一の妙の無諦とあり。酪敎は一の麤の無諦なり。生蘇は三の麤の無諦と、一の妙の無諦となり。熟蘇は二の麤の無諦と、一の妙の無諦となり。此經は但一の妙の無諦なり。開麤は前の如し云云。問ふ、『何が故ぞ大小通じて無諦を論ずるや。』答ふ、『釋論に云はく「聖人の心中所得の涅槃を破せず。未得の者、涅槃を執して戲論を生ずるが爲なり。無生を緣ずる使の如し、故に破して無諦と言ふ」と。』問ふ、『若し爾らば、小乘は得と不得と倶に皆破せらる。大乘も得と不得と亦倶に破すべしや。』答ふ、『例に不ず。小乘は猶別惑の除くべく、別理の顯すべき有り、故に得と雖も須く破すべし。中道は爾らず、得云何ぞ破せん。』問ふ、『若し爾らば、中道は唯應に一實諦有るべし、無諦と言ふべからずや。』

答ふ、不得の者、中を執して惑を生ずるが爲に、かるが故に無諦を須ゆ、實得の者には有り、戯論の者には無し云云。

妙法蓮華經玄義卷第二下

【一】廣く境を釋する中、已に正しく諸境を說き終れるを以て、今更に其等諸境の同異開合を論ず。即ち初めに來意を明し、次に十二因緣を十如に合す。

妙法蓮華經玄義　卷第三上

天台智者大師の說

〔一〕二に諸境の開合とは、先に十如を以て首と爲す。何となれば、此經の命章には絕言に十如を稱歎するを以てなり。今更に五境を說く、云何が同異ある耶。十二因緣と十如との開合は、名異なるが故に開と言ひ、義同じきが故に合と言ふ。無明支を如是性に合し、行支を如是相に合し、識、名色、六入、觸、受を如是體に合し、愛を如是緣に合し、取を如是力、作に合し、有を如是因に合し、生老死を如是果、報等に合す云云。又總じて合せば、如是相に行と有との兩支を合し、如是性に無明と愛と取との三支を合し、如是體に識、名色、乃至老死の七支を合す。如是力は還つて是れ煩惱道の三支なり、無明と愛と取とは能く業を生ずる力なり。如是作は還つて是れ行、有の二支なり、能く苦の爲に業を作す。如是因は還つて是れ行有の二支なり、七苦の爲に因と作る。如是緣は是れ無明と愛と取との三支なり、能く業を潤し苦を取る。如是果は還つて是れ行、有の習果なり。如是報は還つて是れ行、有の業なり、名色等の報を招く。此兩番は、通じて思議の十二因緣を用て六道の十如是に合す。次に不思議の十二因緣を用て四聖の十如に合せば、無明支轉ずれば即ち變じて明と爲る、明は即ち了因となり、聖人の如是性と成る。惡の行支轉ずれば即ち變じて善の行と爲

【六度】六波羅蜜とも云ふ。度は到彼（涅槃）岸の義。菩薩の行を云ふ。即ち布施、持戒、忍等、精進、禪定、智慧之なり。

【三法】修德の三因を云ふ。

【二】諸境の開合を論ずる中、第二に、四種の四諦を十如、十二因緣に合す。

る。善行は即ち緣因にして、聖人の如是相と成る。識、名色等の苦道轉ずれば即ち法身なり、聖人の如是體を成す。愛と取との二支轉ずれば、聖人の菩提心と成る。即ち是れ如是力なり。有支の果を含むは變じて六度の行を成す、即ち聖人の如是作と成り、亦轉じて聖人の如是因となる。此行支轉ずるに三種有り、正道に轉じて如是因と成り、助道に轉ずるは聖人の如是緣と成る。老死支轉ずれば法性常住と成り、聖人の如是果報を成ず云云。又總じて作さば、體、力、作の三法は、秖是れ煩惱、業、苦なり、變じて法身、菩提心、六度行等と成る。三法を勤習するに内に在りては性と成り、外に在りては相と成る。正意は體と成り、誓願深遠なるは力と成り、行を立つるは作と成り、果を牽くは因と成り、相助くるは緣と成り、剋發するは果報と成る云云。若し細しく四聖を分たば節節に異り有り。今大概を取る、故に通じて釋する耳。經に云はく、「一切智願猶在りて失せず」と。二乘も亦通釋を作すことを得るなり。

(二)四種の四諦を十如に合せば、生滅と無生と兩種の苦集は是れ六道の十如なり。如是相と如是性は是れ集、如是體は是れ苦なり。如是作、力、因、緣は又是れ集、如是果、報は又是れ苦なり云云。生滅と無生との兩種の道滅は、是れ析體の二乘及び通の菩薩の十如なり。如是相、性は即ち是れ道、如是體は即ち是れ滅なり。如是力、作、因、緣は皆是れ道、如是果、報は又是れ滅なり。無量と無作との兩種の苦集は、即ち是れ四聖界外の果報の十如なり。集諦は即ち是れ界外の如是相、性、力、作、因、緣なり。苦諦は即ち是れ界外の如是體、果、報等

【三】諸境の開合を論ずる中、第三に七種の二諦を十如、十二因緣、四諦に合す。

なり云云。無量と無作との兩種の道滅は即ち是れ四聖界外の涅槃の十如なり。道諦は即ち是れ涅槃の性、相、力、作、因、緣等にして、亦是れ般若、解脫なり。滅諦は即ち是れ涅槃の體、果、報等にして、亦常住法身を成ず云云。四種の四諦は四種の十二因緣に合せば、生滅と無生との兩苦集は、即ち是れ兩種の思議の十二因緣なり。生滅と無生との兩種の道滅は、即ち是れ兩種の思議の十二因緣の無明滅、乃至老死滅なり。無量と無作との兩苦集は、即ち是れ兩の不思議の十二因緣なり。無量と無作との兩道滅は、即ち是れ兩不思議の十二因緣の無明滅、乃至老死滅なり。此れ解すべし。

（三）七種の二諦を十如に合せば、藏と、通と、別、圓入通との凡そ四俗は、皆是れ六道の十如なり。藏と通との兩眞は、是れ二乘の十如なり。別と圓入別との兩俗は、有の邊は是れ六道の十如、無の邊は是れ二乘の十如なり。圓の俗は此れ九法界の十如に通ず。別入通と、圓入通と、別と、圓入別と、圓との凡そ五種の眞は皆是れ佛法界の十如なり。七種の二諦を四種の十二因緣に合せば、藏と通と別、圓入通との凡そ四俗は、即ち是れ思議の兩種の十二因緣なり。藏と通との兩眞は、即ち是れ思議の十二因緣の無明滅、乃至老死滅なり。別と圓入別との兩俗は、有の邊は是れ思議の十二因緣、無の邊は是れ思議の無明滅、乃至老滅なり。圓の俗は、即ち界内外の四種の十二因緣に通ず。別入通と圓入通と別と圓入別と、圓との凡そ五種の眞は、即ち是れ界外不思議の十二因緣の無明滅、乃至老死滅なり。七種の二諦を四種の四諦に合せば、實有の二諦は即ち生滅の四諦なり。幻有の二諦は即ち無生

【四】諸境の開合を論ずる中、第四に五種の三諦を、十如、十二因緣、四諦、二諦に合す。

の四諦なり。別入通と、圓入通との兩俗は、還つて是れ無生の苦集なり。別入通の眞は是れ無量の道滅なり。圓入通の眞は是れ無作の道滅なり。別の俗と、圓入別の俗とは、此は是れ無量の苦集、圓の俗は是れ無作の苦集なり。別の眞は是れ無量の道滅、圓入別の眞と圓の眞とは是れ無作の道滅なり。

(四)五種の三諦を十如に合せば、別入通と圓入通との兩俗は、是れ六道の十如なり。別の俗と圓入別の俗とは、有の邊は是れ六道の十如、無の邊は是れ二乘の十如なり。圓の俗は意九界に通ず云云。五種の眞諦は、皆是れ二乘、菩薩等の十如なり。五種の中諦は、皆是れ佛界の十如なり。五種の三諦を四種の十二因緣に合せば、別入通と圓入通との兩俗は、是れ六道思議の十二因緣なり。別と圓入別との兩俗は、有の邊は是れ思議六道の十二因緣の生、無の邊は是れ思議の十二因緣の滅なり。圓の俗は義通ず云云。今且く是れ四種の十二因緣を用ふれば、五種の眞諦は即ち是れ思議の十二因緣の滅なり。亦即ち是れ不思議の十二因緣の生なり。五種の中諦は、即ち是れ不思議の十二因緣の滅なり。五種の三諦を四種の四諦に合せば、別入通と圓入通との兩俗は、即ち無生の苦集なり。別の俗と、圓入別の俗と、圓の俗とは、通じて是れ無生の苦集なり。亦是れ無生の道滅なり、亦是れ無量の苦集なり。別入通と圓入通との兩眞は、本但空を取る邊は是れ無生の道滅なり。別の眞と圓入別との眞は、即ち是れ無生の道滅なれども、無量に於ては是れ苦集なり。圓の眞は無生に於ては是れ道滅なれども、無量と無作とに於ては是れ苦集なり。別入通の中は是れ無量の道滅、

【五】諸境の開合を論ずる中、第五に一實諦を十如、十二因緣、四諦、二諦及び三諦に合す。

【六】第六に無諦を以て十如、十二因緣、四諦、二諦、三諦及び一諦に合し、而して後、無を以て無に合す。

圓入通の中は是れ無作の道滅、別の中は是れ無量の道滅、圓入別の中は是れ無作の道滅、圓の中は正しく是れ無作の道滅なり。五種の三諦を七種の二諦に合せば、前の兩二諦に合せられざるを簡ぶ。次に二種の二諦は、二の俗は即ち是れ五種の三諦が家の五種の俗なり。二の眞は、空の邊は即ち是れ五種の三諦が家の眞、不空の邊は即ち是れ五種の三諦が家の中なり。後の三種の二諦の三の俗は、空の邊は即ち是れ五種の三諦が家の眞、有の邊は即ち是れ五種の三諦が家の俗なり。三の眞は即ち是れ五種の三諦が家の中なり。又一種の說を作して後に簡ぶが如きは、前の二諦は合せられず。後の五俗に眞有り俗有り、後の五眞に眞有り中有り。

(五)一實諦を十如に合せば、一一の法界に皆十界を具す。九界を簡卻するは、但佛法界と同なり。三種の十二因緣を簡ぶは、但一種の十二因緣の滅と同じ。三種の四諦を簡ぶは、但一實の四諦と同じ。七種の二諦を簡ぶは、但五の眞諦と同、不同有り。五種の三諦を簡ぶは、但五の中諦と同じ云云。

(六)無諦不可說と言ふを十如に合せば、如は不異を名く、即ち是れ空寂なり。言辭の相寂滅して說示すべからず、即ち是れ十種皆如の義なり。諸の無明滅、乃至老死滅は其義甚深なり、甚深は即ち無諦と同じ。生生不可說、乃至不生不生不可說は即ち無諦と同なり。七種の眞諦皆不可說なり、最初の眞諦不可說とは、身子の云ふが如し、「吾聞く解脫の中には言說有ること無し」と。況や後の六をや、生死に非ず、涅槃に非ず。既に二邊に非ざれば亦中

【七】前に準じて隨情等の三意を明し、次に問答を設けて疑を釋し、更に後問答して經文を通釋す。

道無し、即ち五住の中諦は無諦と同なり。一實は虚空を名く、虚空には一無し、云何ぞ實有らん、即ち無諦と同なり。無諦は自ら存する所無し、平等大慧も若干無きなり。若干無しと雖も、若干は無量なり。之を舒ぶれば法界に充滿す、何れよりか來ることを知らず。無量なれども若干無し、之を收むれば所有を知ること莫く、何れよりか去ることを知らず。不來不去即ち是れ法佛なり云云。

（七）復次に七種の二諦は、條に就きて開合し、轉轉相入す、一一に又各隨情、隨情智、隨智等有り。餘の五義も例するに亦應に有るべし、今具に載せず。何となれば、佛一音を以て法を演説したまふに、衆生は類に隨つて各解を得と、自ら之を思ふべし。

問ふ、『諸境の理既に融會す、何の意ぞ紛紜して更に相攝入する耶』。答ふ、『如來、十界の性相を觀知したまふに成熟の者、未成熟の者有り。未だ熟せざれば謗を起さしめず、小機若し熟すれば時を失せず、其宜しき所に隨つて單に應じ、複に應ず。偏圓相入して而も之を成熟し、聞かば即ち益を得せしむ。華嚴には具に十界を鑒むと雖も、兩界熟するが故に、別、圓の二種を以て之を成熟す。三藏も亦十界を鑒みれども、二乘の性相熟するが故に、生滅を用て之を成熟す。方等も亦十界を鑒みれども、四界熟するが故に、四種を用て相入して之を成熟す。般若も亦十界を鑒みれども、亦四界熟するが故に、三種を用て相入して之を成熟す。法華も亦十界を鑒み、一の性相熟すれば、但一圓の諦を以て而も之を成熟す。若し善巧方便出沒の調熟無くんば、云何ぞ境智而も融妙なること

【八】迹門十妙の中第二に智妙を解釋す。即ち先づ來意を明し、次に正しく之を釋す。而して正釋の中初め總じて諸智を論ずるに六章を開し、その第一に數を擧ぐ。

とを得ん耶。譬へば、畫師の尚能く五彩を淡入して、種種の像を作すが如し。況や佛法王は法に於て自在にして、而も種種に間入して衆生を調伏すること能はざらんや。

問ふ、「上に六境等を明す。此の經に名無くして其義有ることを許可するや不や。」答ふ、「十如の名義は已に前に備なり。四種の十二因緣は、化城品に生滅の十二緣を明す。譬喩品に但離虛妄といふは、是れ不生の十二緣なり。方便品に佛種從緣起と云ふは、是れ界外の無量と無作との兩種の十二緣なり。四の四諦は、譬喩品に諸苦所因貪欲爲本といふは、是れ生滅の四諦なり。藥草喩品に了達空法といふは、是れ無生の四諦なり。又無上道と云ひ、及び方便品に但說無上道、如來滅度等といふは、是れ界外の無量、無作兩種の四諦なり。十如の差別は是れ俗諦なり、唯佛と佛とのみ乃ち能く諸法實相を究盡すとは即ち眞諦なり。安樂行品に亦不分別、有爲無爲、實不實法と云ふは、有は是れ俗諦、無は是れ眞諦なり、亦不分別は是れ二邊を遮して中道を顯すなり。壽量品に、非如非異と云ふは、非異は俗に非ず、非如は眞に非ず、三諦の義なり。方便品に更以異方便、助顯第一義と云ふは、是れ一實諦なり。又唯此一事實と云ふ、若は說無分別法と言ひ又は諸法寂滅相、不可以言宣とは、是れ無諦の義なり。」

(八)第二に智妙とは、至理玄微にして、智に非ずんば顯ること莫し。智は能く所を知れども、境に非ずんば融せず。境既に融妙なれば、智亦之に稱ふ、其れ猶影響のごとし。故に境に次いで智を說く。智を即ち二と爲す、初に總じて諸智を論じ、二には境に對して智を

【一には世智云云】一より六の六度智に至るまで三藏教、七より十の體法菩薩出假智に至る迄通教。十一より十三の十地智に至る迄別教。十四より十六別教の佛智に至る迄が三教果頭、十七より二十の妙覺智迄が圓教。【九】第二に類を出す。【外凡】三藏教の行位の中五停心、別相總相念處の三賢位を云ふ。この位にては未だ智力弱く伏惑すること能はず。【內凡】同じく凡位の內、煖、頂、忍、世第一の四善根位を云ふ。茲にては惑を伏し相似に諦理を見ることを得。【別教の三十心】十住、十行、十回向の三十心なり。この位にては見思塵

論ず。總じて智を明すに六と爲す、一には數、二には類、三には相、四には照、五には判、六には開なり。數とは、一には世智、二には五停心、四念處智、三には四善根智、四には四果智、五には支佛智、六には六度智、七には體法聲聞智、八には體法支佛智、九には體法菩薩入眞方便智、十には體法菩薩出假智、十一には別教十信智、十二には三十心智、十三には十地智、十四には三藏の佛智、十五には通教の佛智、十六には別教の佛智、十七には圓教の五品弟子智、十八には六根清淨智、十九には初住より等覺に至るの智、二十には妙覺智なり

（九）二に類とは、世智は道行ること無く邪計妄執す。心、理外を行じて信ぜず入らず、故に一と爲す。五停心と四念處とは已に初賢に入り、佛法の氣分あり。俱に是れ外凡なるが故に一と爲す。四善根は同じく是れ內凡なり、故に一と爲す。四果は同じく眞を見る、故に一と爲す。支佛は別相觀を以て能く習を侵す、故に一と爲す。六度は理を緣ずる智弱く、事を緣ずる智强し、故に一と爲す。通教方便の聲聞は體法智勝る、故に一と爲す。支佛は又小しく勝る、故に一と爲す。通教の菩薩入眞の方便智は四門に徧く學す、故に一と爲す。通教の出假の菩薩の智は正しく俗を緣ず、故に一と爲す。別教の十信智は先に中道を知り、前に勝れ後に劣る、故に一と爲す。別教の三十心は俱に是れ內凡なり、故に一と爲す。十地は同じく是れ聖智なり、故に一と爲す。三藏の佛は是れ師位の名なり、三乘の弟子に勝る。故に一と爲す。通教の佛智は斷惑照機勝る、故に一と爲す。別教の佛智は又勝る、故

沙の惑を斷盡し乃至無明を伏す。

【一】六章の中第三に諸智の相を辨ずるに初め世智。

【五神通】天眼通天耳通、他心通、宿命通、如意通を云ふ。

【二】諸智の相を辨ずる中第二に五停四念智を明す。

【四倒】常、樂、我淨の四の謬見。

【三】諸智の相を辨ずる中第三に四善根智を辨ず。中に於て今先きに煗法を明す。

に一と爲す。圓教の五品弟子は同じく煩惱性を具して能く如來祕密の藏を知る、故に一と爲す。六根清淨は智、眞に隣る、故に一と爲す、初住より等覺に至るまでは同じく無明を破す、故に一と爲す。妙覺の佛智は無上最尊なり、故に一と爲す。是の如き等、其類に隨つて相似たる者を分ち、或は離し或は合して判じて二十と爲す云云。

（一〇）三に相を辨ぜば、天竺の世智は極、非想に至る。此間に宗とする所は、要は忠孝に在り。五行、六藝、天文、地理、醫方、卜相、兵法、貨法、草木千種皆識り、禽獸萬品の名を知る。又左に塗り右に割き、等しくして憎愛無く根本定を獲て五神通を發す、河を停めて耳に在り、釋を變じて羊と爲し、風雲を納吐し日月を捫摸す。法は是れ世間の法なり、定は是れ不動定なり、慧は是れ不動出なり。名利を邀へ見愛を増す、世心の知る所なるが故に世智と名く。

（一一）五停、四念は、定有る故に停と言ひ、慧有るが故に觀と言ふ。觀は能く邪を翻じ、定は能く亂を制す。數息は散を治し、不淨は貪を治し、慈は瞋を治し、因緣は癡を治し、念佛は障道を治す。念處は是れ苦諦の上を觀ずるの四智なり、四倒を治す。四倒起らざるは、此四觀に由る。初めに四倒を翻じて未だ聖理に入らず、故に外凡智と言ふ。

（一二）煗法は四諦の境を緣じて智を生ず、煩惱を伏するの智更に增して十六觀智と成る。火を鑽るに上下相依りて火を生じ、薪を燒くが如し。有の智を以て有の境を知り、能く煗智を生じて、有をして萎悴せしむ。夏時華を聚めて蕎と爲れば、華より煗氣を生じて、還つて

自ら萎粋するが如し。又陰に依りて陰を觀ずるに智火を發し、還つて陰を燒くこと、兩竹相摩して火を生じ、還つて竹林を燒くが如し。尊者瞿沙の說かく、解脫を求むる智火は、煖最も初に在り。火の煖り初に在るを以て相と爲すが如し、無漏の智火も亦煖法初に在るを以て相と爲す。日の明相、初に在るを相と爲すが如し、是故に煖と名く。正法毘尼の中に於て、信愛敬を生ず。正法とは道諦を緣じて信じ、毘尼とは滅諦を緣じて信ず。一煖能く四諦を緣ず、云何ぞ二と言ふや。答ふ、此二は最勝なれば應に先に說くべし。又正法は是れ三諦、毘尼は是れ滅諦なり。佛、滿宿の爲にするが如し、我に四句の法有り、當に汝が爲に說くべし。汝知らんと欲するや不や。當に汝が意を恣にすべし、四句は卽ち四諦なりと。所有の布施、持戒、盡く解脫に向ふは、是れ其意趣なり。色界定より起るは、是れ其依なり。自地に於ける前生の善根は、是れ相似の因なり。四の眞諦を緣ず、頂は是れ其功用の果なり。自地の相似の後生の善根は、是れ相似の因なり。四の眞諦を緣ず、頂は是れ其功用の果なり。自地の相似の後生の善根は、是れ依果なり。色界の五陰は、是れ其報なり。涅槃決定の因と、及び善根を斷ぜざるとは、是れ其利なり。十六行は、是れ其行なり、是れ緣生なり、是れ修慧なり、色界繫なり、三三昧なり、三根は、所說に隨つて相應す、衆多の心なり、是れ退なり。煖に三種有り、下の下、下の中、下の上を謂ふ。頂に三有り、中の下、中の中、中の上なり。忍に二種有り、上の下と上の中なり。世第一に一種有り、上の上を謂ふ。此四善根は、三を以て之を言はば、煖は是れ下、頂は是れ中、忍

【五無間】阿鼻地獄のこと。五無間とは趣果、受苦、時命、形なり。

【三】四善根智の中、第二に頂法を釋す。

と世第一は是れ上なり。復有說は、煗に二有り、下の下と下の中とを謂ふ。頂に三有り、下の上と、中の下と、中の中を謂ふ。忍に三有り、中の上と、上の下と、上の中を謂ふ。世第一法に一有り、上の上を謂ふ。亦三を以て之を言はゞ、煗は是れ下の下、頂は是れ下の中、忍は是れ中の上、世第一は是れ上の上なり。瞿沙の云はく「煗に下の三有り、頂に六有り、下の下、乃至中の上なり。忍に八有り、下の下、乃至上の中なり。世第一は但上の上なり。三を以て之を言はゞ、煗法は一種なり、下を謂ふ。頂法は二種なり、下と中を謂ふ。忍に三種有り、下と中と上を謂ふ。世第一に一種有り、上と謂ふ。煗に二の捨有り、一には離界地、二には退時なり。退く時捨てて地獄に墮し。五無間を作れども、而も善根を斷ぜず。頂も亦是の如し、忍は唯一捨にして地獄に墮せず云云。

〔三〕頂法とは、色界の善根に動不動、住不住有り、難不難、斷不斷、退不退有り。動乃至退者に就いて二有り、下は是れ煗、上は是れ頂なり。彼不動乃至不退の者を二と爲す、下は是れ忍、上は是れ世第一法なり。復有說は「應に下頂と言ふべし。所以は何ん、煗法の頂に在るが故に頂と名け、忍法の下に在るが故に下と名く」と。復有說は、「山頂の道は人久しく住せず、若し難無くんば、必ず此を過ぎて彼に到るべし。若し難に遇はば、卽便ち退還するが如し。行者も頂に住すること久しからず、若し難無ければ必ず忍に到り、若し難有らば退きて煗に還る、猶山頂の如し、故に頂と云ふ」と。云何が觀を爲すや、佛法僧に於て下の小信を生ず。小信とは、此法久しく停まらず、故に下小と言ふ。此信に佛を緣じて小信

【非想非非想處】無色界の第四天を非想非非想天と云ひ其禪定を非想非非想處と名く。

を生ず、是れ道諦を緣ずるなり。法を緣じて下の小信を生ず、是れ滅諦を緣ずるなり。問ふ、「應に能く四諦を緣ずべし、云何ぞ二諦を緣ずと言ふや。」答ふ、「道滅は勝るが故なり。淸淨過ぐる無きは是れ妙、是れ離にして能く信を生ずる處なり。化を受くる者、信樂の心を生ぜんが爲の故なり。若し世尊、苦集は是れ信敬すべしと說かば、「則ち化を受くる者無し。此煩惱、惡行、邪見、顚倒は云何ぞ信敬すべけん。我常に此が爲に逼迫す。受化の者は、道滅に於て欣樂を生ず、是故に二を說くなり。復有說は、「佛僧を信ずるは是れ道を緣じ、法を信ずるは是れ三諦を緣ず」と。則ち盡く四諦を信ずるなり。」問ふ、「頂に住するものも亦陰を信じ、亦寶を信じ、亦諦を信ず。何が故ぞ但三寶を信ずと說くや。」答ふ、『三寶は是れ信敬を生ずる處なり、但行者の意に隨へば、陰に於て悅適を生ずるを、是を名けて煩と爲す。寶に於て悅適を生ずるを、是を名けて頂と爲す。諦に於て悅適を生ずるを、是を名けて忍と爲す。」問ふ、「何が故ぞ頂退のみにして、煩の退を說かざるや。」答ふ、『頂既に退す、亦應に煩の退をも說くべし。行者の頂に住る時、煩惱業の留難多し。煩惱等是念を作す、「若し行者、忍に到れば我復誰が身中に於てか、當に果報を作るべけん」と。若し欲界を離るる時も亦念ず、「行者欲界を出づれば、我復誰が身中に於てか果報を生ぜん」と。非想非非想處を離るる時亦念ず、行者彼欲を離れ已らば、更に身を受けじ。我復誰が身中に於てか果報を生ぜん」と。此三時に於て諸の留難多く、留難退するが故に大に憂惱す。人の寶藏を見て大に喜び、取らんと欲するに則ち失するが如し。頂法に住する者自

【一四】四善根智の中、第三に忍法を解す。

ら念ず、「久しからずして當に忍を得べし。永く惡道を斷じて大重利を獲、猶聖人の如くならん」と。而して忽ちに退失す、故に大に憂惱す。是故に頂退と言ふ。若し能く善友に親近し、共に從ひて隨順方便の法を聞き、內心に正觀して佛菩提を信じ、善說法を信じ、僧清淨の功德を信ずるは是れ寶を信ずるを說く。色無常なりと說き、乃至識無常なりと說くは是れ陰を信ずるを說く。苦、集、滅、道有ることを知るは是れ諦を信ずることを說く。若し是の如くんば即ち頂に住し、若し是の如くならずんば即ち頂を退す。

〔一四〕忍法の觀とは、正しく欲界の苦、色、無色界の苦、欲界の行の集、色、無色界の行の集、欲界の行の滅、色、無色界の行の滅、欲界の行を斷ずるの道、色、無色界の行を斷ずるの道を觀ず。是の如きの三十二心を、是を下忍と名く。行者後時に、漸漸に行及び緣を減損す。復更に正しく欲界の苦、色、無色界の苦を觀じ、乃至、欲界の行を斷ずるの道を觀ず。色、無色界の行を斷ずるの道を觀ずることを除く。是中に從つて中忍と名く。復更に正しく欲界の苦を觀じ、色、無色界の苦を觀じ、乃至色、無色界の行の滅を觀じて、一切の道を除滅す。復正しく欲界の苦、色、無色界の苦を觀じ、乃至欲界の行の滅を觀じて、色、無色界の行の滅を除く。復正しく欲界の苦を觀じ、乃至色、無色界の行の集を觀じて、一切の滅を除滅す。復正しく欲界の苦を觀じ、乃至欲界の行の集を觀じて、色、無色界の行の集を除く。復正しく欲界と色、無色の苦を觀じて、一切の集を除く。復正しく欲界の苦を觀じて、色、無色界の苦を除く。復正しく欲界の常に相續して斷ぜず、遠離せざることを觀ず。是の如

【一五】四善根智の中、第四に世第一法を釋す。

く觀ずる時、深く厭患を生ず。復更に減損して、但二心と作して一行に觀ず。苦法忍、忍法智に如似たり。是の如く正しく觀ずるを、是を中忍と名く。復一心に欲界の苦を觀ずるを以て、是を上忍と名く。

【一五】復次に世第一法を生ず、世第一法の後、次に苦法忍を生ず。譬へば、人の己國より他國に適かんと欲するに、財産多くして持ち去ること能はず。物を以て錢に易へ、錢を嫌ひて金に易へ、金を嫌ひて多價の寶に易へて、他國に往適が如し。行者、乃至漸く捨て、相續して離せずして上忍を生ず。上忍の後第一法を生じ、第一法の後苦忍を生ず。問ふ、「世第一法に三品有りや不や」答ふ、「一人には無く、多人には有り。身子は上、目連は中、餘は皆下なり。佛と、支佛と、聲聞とに就いて三品と爲す。」

世第一法とは、此心心數の法は餘法に於て最と爲し、勝と爲し、長と爲し、尊と爲し、上と爲し、妙と爲す。亦は分、亦は都なり。分とは、世間の法に勝れども見諦には勝らず。見諦は眷屬相離せず慧力偏に多きが故に、熏禪は凡夫と與に同じく一處に生ぜざるが故に盡智の時一切の善根永く一切の諸の垢障を離るるが故なり。三三昧は乃至無漏を惡賤す、何に況や有漏をや。應に都勝なるべからず。分に彼煖、頂、忍法に勝ならば、亦應に第一と言ふべし。應に分勝と言ふべくんば、煖、頂、忍、一切の凡夫所得の禪、無量、解脫、除入に勝るなり。或は言はく、「都勝」と。一切の事業の中の勝と謂ふには非ず、但能く聖道の門を開くを以ての故なり。彼見諦等は聖道の門を開くこと能はず。世第一法は聖道の門を開く

を以て、彼見諦等の法を修することを得。見諦等の法を修することを得る者は、皆是れ世第一法の功用なり。是世第一法の名義は最勝の義、是れ第一の義なり。妙果を得るは是れ第一の義なり。高幢の頂の如く、更に上有ること無し。是れ第一の義なり。問ふ、「前の諸義に差別有りや。」答ふ、「此れ皆上妙の義を歎説するも亦差別有り。不淨、安般に於ては最と名け、聞慧に於ては勝と名け、思慧に於ては長と名け、煖に於ては尊と爲し、頂に於ては上と爲し、忍に於ては妙と爲す。又未至に依るを最と爲し、初禪に依るを勝と爲し、中間を長と爲し、二禪を尊と爲し、三禪を上と爲し、四禪を妙と爲す。是の如きの種種の説は、此れ毘婆沙に依りて釋す。委しく知らんと欲せば、彼に向つて尋ぬべし。

(一六)初果は八忍八智あり。三果は重慮して眞を緣ずれば九無礙、九解脫智あり。

(一七)支佛は總相、別相を用ふ。三世に約して苦集を明し、十二因緣を分別するが如きは即ち別相の相なり。

(一八)六度は理を緣ずるの智弱ければ、伏して而も未だ斷せず。事智強ければ能く身、命、財を捨てて遺顧する所無し。聲聞は能く眞を發して聖と成れども、猶我衣我鉢を論じ、互に強弱を論ず云云。

(一九)通教の聲聞は、總相の一門を以て俗即ち眞なりと達す。通教の緣覺は、能く一門の總相、別相に於て、俗即ち眞なりと達す。通教の菩薩は、能く四門の總相、別相に於て、俗即ち眞なりと達す。又能く徧く四門に出假して、衆生を教化す。

【安般】アナハナに同じ。數息觀のこと。

【聞、思、修慧】三慧と稱す。經教を見聞するに由つて生ぜし智慧を聞慧と稱し、理を思惟するに由つて生ぜし智を思慧と稱し、禪定を生ずるに由つて生ぜし智を修慧と稱す。

【一六】諸智の相を辨ずる中、第四に四果智を明す。

【八忍八智】見道に入り四聖諦を觀じて生じたる無漏の法忍法智を云ふ。

【九無礙九解脫】三界を九地に分ち一地の修惑を九品に分ち之を斷ずる無礙道と解脫道の二有り、一地の惑に九品有れ

ば九無礙九解脫有り。

【一七】諸智の開を辨ずる中、第五に四佛智。

【一八】第六に六度智、

【一九】第七に體法聲聞智、第八に體法支佛智、第九に體法菩薩智、第十に體法菩薩出假智を辨ず。

【二〇】第十一別教十信智より乃至第二十妙覺智を明す。

【二一】總じて諸智を論ずるに六章を開する中、第四に智、境を照すことを明す。

〔二〇〕十信には果頭の眞如實相を信じて、此理を求めんが爲に十信の心を起す。十住は正しく人空を習ひ、傍ら假中を習ふ。十行は正しく假を習ひ、傍ら中を習ふ。十廻向は正しく中を習ふ。初地は中を證し、二地已上は中を重修す。三藏の佛は、一時に三十四心、八忍、八智、九無礙、九解脫を用つて正習を斷じ盡くす。通の佛は道場に坐し、一念相應の慧を以て餘殘の習氣を斷ず。別教の佛は、金剛の後心を用て一品の無明を斷じ、究竟し盡して佛と成る。或は言はく、「斷ずる時は是れ等覺ならば、佛は所斷無からん」と。但菩提を證得し、圓滿し、具足するのみ。圓の五品は、五欲を斷ぜずして而も諸根を淨め、煩惱の性を具して能く如來祕密の藏を知る。六根淨の位は、相似の中道智を發し、初住は如來の一身無量身を獲、法流海の中に入りて行じ、任運に流注す。後位は解すべし、復記さず。

〔二一〕四に智の境を照すことを明さば、若し智に由りて境を照し、境に由りて智を發さば、四句皆性の中に墮す。別記の如し云云。若し四悉檀の因緣に境智を立つれば、但名字のみ有り云云。問ふ、「知能く境を照す、境も亦能く智を照すや不や」。答ふ、「若し不思議と作して釋せば、更互に相照すも義亦妨げ無し。仁王般若に云はく、『智及び智處を皆名けて般若と爲す』と。鏡面の左右に相照すに譬ふべし。亦大地の一能く種種の芽を生じ、芽も亦地の一を生ずるが如し。且く斯義を置く。

世智は六道の十如を照し、五停心の智より去りて體法に至る凡そ七智は、二乘の十如を照す。六度及び通教出假の菩薩の智は兩屬す、上求は菩薩の十如を照し、下化は六道の十

如を照す。四十心の智も亦兩屬す、上求は菩薩の十如を照し、下化は六道の十如を照す。十地の智も兩屬す、次第に照すは菩薩の十如を照し、不次第に照すは佛の十如を照す。五品より去りて凡そ四智は、皆佛界の十如を照す。總略すること此の如し、細揀は云云。

二十智の四種の十二因緣の境を照すは、世智と、五停と、四念と、四果と、乃至支佛と、六度と、三藏の佛との凡そ七智は、思議生滅の十二因緣の境を照す。通教の三乘人眞の方便智と、出假の智と、佛智との凡そ五智は、思議不生不滅の十二因緣の境を照す。別教の十信と、三十心と、十地と、佛との凡そ四智は、不思議生滅の十二因緣の境を照す。其中別の意無きに非ざれども、且く大判に從ふのみ。圓教の四智は、不思議不生不滅の十二因緣の境を照す。二十智の四種の四諦を照すは、前の三藏等の七智は、生滅の四諦の境を照す。次に通教の五智は、無生滅の四諦の境を照す。次に別教の四智は、無量の四諦の境を照す。次に圓教の四智は、無作の四諦の境を照す。次に二十智の二諦を照すは、前の七智は是れ析空の二諦を照し、次の五智は是れ體空の二諦を照し、次の八智は斷中の二諦を照し、其の間、別圓相入の者は意を以て得べし云云。次に二十智、三諦を照すことを明さば、前の七智は無中の二諦を照す、是れ因緣所生の法なれば皆俗の攝に屬す。次の五智は含中の二諦を照せば、即空の一句にして、皆眞諦の攝に屬す。次に別圓の八智は顯中の二諦を照す、即ち是れ假名と亦名中道との二句なり、皆中道諦の攝に屬す。次に二十智の一實諦を照すは、此れ須く釋論に四悉檀を明して、皆名けて實と爲すを引くべし。世界の故に實、乃

【三】總じて諸智を論ずるに六章を開する中、第五に麤妙を判ず。

至第一義の故に實なり。當に知るべし、實の語は亦四諦に通ず。生滅の故に實、無生滅の故に實、無量の故に實、無作の故に實なり。前の三藏の七智は生滅の實を照し、次の通教の五智は無生滅の實を照し、次に別教の四智は無作の實を照し、次に圓教の四智は無作の實を照す。前後の諸實は云云。次に二十智無諦無照とは、無諦は別の理有ること無し、若し四種の四諦に於て悟ることを得ば、復諦と不諦とを見ず、故に無諦は亦通ずるなり。前の七智は生滅の無諦を照す、生生不可說の故に。次の五智は無生滅の無諦を照す、生不生不可說の故に。次に四智は無量の無諦を照す、不生生不可說の故に。次の四智は無作の無諦を照す、不生不生不可說の故なり。前の無諦は是れ權、後の無諦は是れ實なり。此れ言教に就く。若し妙悟に就かば、聖人の心中の所照に同じといふは、則ち權實有るを見ず、故に非權非實なり。空拳を以て小兒を誑し一切を誘度し、方便して權を說き、方便して實と說く。理に會するの時は復權實無し、故に非權非實と稱して妙と爲す。

(三三〇)五に麤妙を明さば、前の十二番の智は是れ麤なり、後の八番の智を妙と爲す。何となれば、藏、通等の佛は自ら是れ無常なり、亦常を說かず。彼二乘、菩薩は何ぞ常を聞きて、常を信じ、常を修することを得ん。是故に麤と爲す。別教の十信は、初より已に常を聞き常を信修す。尚彼佛に勝る、何に況や餘をや。是故に妙と爲す。常途に法華に常を明さざるを云ふは、秖是れ三藏の意のみ。今明さく、十信は中を知る、已に牟尼に過ぎたり、則ち八番を妙と爲す。又別教の四智は三は麤、一は妙なり。圓教の四智は悉く皆妙と稱す。

何となれば、地人の云はく、「中道は乃ち是れ果頭に能く顯る、初心の學者、仰いで此理を信ず、藕絲を山に懸くるが如し、故に説と、信と、行と皆圓の意に非ず。故に十信の智を羅と爲す。十住は正しく空を修し、傍ら假中を修す。十行は正しく假を修し、傍ら中を修す。十廻向は始めて正に中を修す、此中は但理にして諸法を具せず。是故に皆異なり。登地の智は無明を破し、中道を見る、證は則ち妙と爲す。顯せば通、藏の兩種は倶に道を得るも、而も三藏の門拙なるが如し。今別教も亦爾り、教門は皆權にして而も證は是れ妙なり云云」圓教の四智皆妙なりとは、法相の如く説き、説の如く信じ、理の如くにして而も行ず。始五品を論じ、終妙覺に竟るまで、實にして權に非ず、是故に皆妙なり。是を麤智に待して、妙智を説くと名く。

又知見に約して麤妙を明さば、知と見とは云何。然るに分別するに四有り、知に不ず見に不ず、知にして見に非ず、見にして知に非ず、亦は知亦は見なり。先に三藏に約して釋し、後に圓に約して釋す、中間は例して解すべし。凡夫は聞かざるが故に知らず、證せざるが故に見ず。五停四念より世第一法に至りては、聞くが故に知ると名け、未だ證せざるが故に見に非ず。辟支佛は聞かざるが故に知に非ず、自然に證するが故に是れ見なり。四果は聞くが故に亦是れ知、證するが故に亦是れ見なり。偏轉して麤妙を判ずることと解すべし。圓教に約して釋せば、七方便は聞かざるが故に知らず、未だ證せざるが故に見ず。五品六根は聞くが故に知り、未だ證せざるが故に不見なり。宿習を發する者は見と名く、聞

【三智一心】大論に出づる文にして天台にては之によりて一心三觀の旨を立つ。三智とは一切智、道種智、一切種智にして之の三智一心に圓かに具するを一心三觀と云ふ。

に從はざるが故に不知なり。教を稟けて修入する者は、亦は知亦は見たり。是れ師節に傳へて麤妙と爲す。究竟して論ずれば、前來二十種の智あり、略して之を言はば權實の二智を出でず。經にいふが如し、如來は方便知見波羅蜜皆悉く具足すとは、即ち總べて束ねて前來の諸の權智を得るなり。如來の知見は廣大深遠なりといふは、即ち是れ總じて前來の實智を束ぬるなり。方便既に其れ具足す、何ぞ該ねざる所かあらん。知見既に其れ廣大深遠なり、何の攝せざる所かあらん。境淵邃無ければ智水測ること莫し、唯佛とのみ乃ち能く究盡す。此の如きの知見は即ち是れ眼智なり、眼は即ち五眼具足し、智は即ち三智一心なり。一切種智は實を知り、兩智は權を知り、佛眼は實を見、四眼は權を見る。此知即ち是れ見、此見即ち是れ知なり。前の諸智に對するに諸智は是れ麤なり、此知見は之を名けて妙と爲す。若し知見の中の意を得ば、復五眼を論ぜず。迷ふ者未だ了せざれば更に眼に約して麤妙を明さん。肉眼の盲閉するが如き何に由りてか色を見ん、徒に人の意を開きて種種の想を起すは、終に眞見に非ず。眼をして開かしめんと欲せば、應に須く瞖を治すべし。那ぞ眼を閉づることを得ん、執諍して何の益かある耶。眼を閉ぢて想ふは則ち麤、眼を開きて見るは則ち妙なり。天眼未だ開かざれば、障の外を見ざるを麤と爲す。禪定願智を修するの力能く淨色を發得し、障の内外を徹して明闇隔無し。慧眼未だ開かざれば常に死逕に行く、假令情想するも亦復實に非ず、故に麤と爲す。無漏豁かに發するは、故に稱して妙と爲す。諦理明了なり、故に妙と稱す。法眼未だ開かざれば機に差ひ

【三三】總じて諸智を論ずるに六章を開する中、第六に麤を開して妙を顯す。

【三十七品】四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道の三十七科にして之れ涅槃に至る道の資糧なりとす。

【八邪】邪見、邪思惟、邪語、邪業、邪命、邪方便、邪念、邪定にして八正道の反對を云ふ。

【別教云云】別教

て法を說く、身子の辟教、滿願の穢器の如し、名けて麤と爲す。通を障ふる無知を破し、藥病を分別するは、之を名けて妙と爲す。佛眼開かざれば、實相を見ず、故に文に云はく、「二乘の人及び新發心の者は、不退の菩薩の知ること能はざる所なり」と。故に四眼は皆麤なり、諸の菩薩衆と信力堅固なる者を除く。信に入ることを得るを以て、相似の佛眼は能く眞の佛知見を開く、乃ち名けて妙と爲す。諸教は多く四眼を說き、或は四眼を帶して佛眼を說く、是故に麤と爲す。今經は獨り佛眼を說く、是故に妙と爲す。是を麤に待して妙と爲すとするなり。

(三三)六に麤を開して妙を顯すことを明さば、前の十六番の智は、若し決了せざれば、但是れ麤智なり。若し決了することを得れば、悉く妙智と成る。何となれば、妙莊嚴王の如きは先に是れ外道の世智なれども、法華經を聞きて便ち決了することを得、邪相を以て正相に入る。諸見に於て動ぜずして而も三十七品を修し、八邪を捨てずして而も八正に入る。即ち是れ正智を決して妙智に入ることを得るなり。或は五品と齊しく、或は相似と齊しく、或は分得と齊し。節節に入の義有り、細しく作すことは云云。若し五停方便智、乃至通教の佛等の智は、若し決了せざれば、即ち是れ麤智なり。今權を開して實を顯さば、汝等が行ずる所は是れ菩薩の道なり、來りて妙位に入る。一一に將に十二番の智をもつて、來りて圓妙の四智に入る、或は五品、相似、分得等の智に入るべし云云。又別教歷別の智を決了して妙智に入る、當體は即ち是れ某の位進んでは是れ某の位に入る。細揀は云云。十

にて用ふる修觀は眞如と妄法と隔歷なりとして次第の三觀を用ふれば圓教の一心互具互融の三觀と相違するが故に歷別の智等と云ふ。

【二四】智妙を釋する中、第二に境に對して智を明す。就中、今初に二章を分ち、而してその第一に五境に對する中先づ略して十如の意を明す。

六の麁智皆妙智と成りて麁の待すべき無し、即ち是れ絶待の智妙なり。

復次に麁眼を開して妙眼と爲さば、餘經は說きて五眼と爲すと雖も五眼融せず、是故に麁と爲す。今經は四眼を決了して、佛眼に入らしむ。文に云はく「父母所生の眼も遂に淸淨なることを得。大乘を學する者は、肉眼有りと雖も名けて佛眼と爲す」と。即ち是れ肉眼を決了して、名けて佛眼とするなり。淨名に云はく、「世孰れか眞の天眼有らん」とは、佛世尊のみ有りて、二相を以て諸佛の國を見ず。此れ即ち是れ天眼を決了するに、即ち是れ佛眼なり。「願はくば世尊の如く、慧眼第一淨なることを得ん」とは、即ち是れ慧眼を決了して、能く妙に入ることを得るなり。法眼を決して妙に入るは、邊際智滿是れなり。四眼融じて佛眼に入れば、寂にして而も常に照なり。故に文に云はく、「聲聞法を決了するに是れ諸經の王なり」と。五眼具足して菩提を成じ、佛の知見を開す。故に稱して妙と爲す。問ふ、「佛眼開するを乃ち名けて妙と爲さば、六根は淨しと雖も云何ぞ妙とせんや。」答ふ、「佛眼未だ開せずと雖も、已に能く圓に學し圓に信ず。迦陵頻伽の殼中に在りと雖も、音聲已に諸鳥に勝るが如し。即ち是れ假名相似等の妙なり。若し開すれば即ち是れ分妙、究竟妙なり云云。」

（二四）二に境に對して智を明すに又二あり、一には五境に對し、二には展轉して相照すを境に對す。初めに應に十如の境に對すべし。此れ既に一經の意なり、處處に之を說けば解すべし、故に復釋せず。

【二五】五境に對する中、第二に六境に對するに、先づ四教に對して智を明す。

（二五）次に四種の十二因縁に對して智を明さば、大經に云はく、「十二因縁に四種の觀有り。下智觀の故に聲聞の菩提を得、中智觀の故に緣覺の菩提を得、上智觀の故に菩薩の菩提を得、上上智觀の故に佛の菩提を得」と。何となれば、十二因縁は本是れ一境なり、解の不同なるに緣りて、開して四種と成すのみ。今四教の意を以て之を釋せば、三藏は其に三人有り、而も皆析智を以て界內の十二因縁の事を觀じて衍門と爲す。然るに析智は淺拙にして、三人の中聲聞最も劣なり。劣人を以て淺法を標す、故に下智と名くるなり。通教も亦三人有り、同じく體智を以て界內の十二因縁の理を觀ず。體法深なりと雖も、眞に望めて巧と爲し、別に望むれば未だ巧ならず。三人の中には緣覺は是れ中なり、中人を以て通法に名く、故に中智と言ふ。別教は佛と菩薩と俱に界外の十二因縁の事を知る。次第の菩薩は、佛に比すれば猶未だ是れ上ならざれども、通と藏とに比すれば則ち是れ上法なり。故に上智を以て名に當つ。圓教は佛と菩薩と俱に、界外の十二因縁の理を觀ず。初心は事に即して而も中なり、此法最も勝る。故に佛を以て名に當つ、かるが故に上上智觀と言ふなり。四教を以て四觀を釋するに、義に於て允合すと云云。言ふ所の下智觀とは、受は觸に由り、觸は入に由り、入は名色に由り、名色は識に由り、識は行に由り、行は無明に由ると觀ず。無明顚倒不善の思惟は不善の行を致し、四趣の識、名色等を感ず。若し善の思惟は善行を致し、人天の識、名色等を感ず。此無明を觀ずるに、念念無常にして前後住せず、所生の善惡は遷變して速かに朽ち、所受の名色衰損して代謝す。煩惱、業、苦更互の因緣、都て暫くも

【過去の二因云云】十二因緣法の三世に亙りて互に因果となり轉轉する相を云ふ。即ち無明と行は過去の二因、識、名色、六入、觸、受は現在の五果、愛、取、有は現在の三因、生、老死を未來の二果とす。

【子縛】煩惱のこと。煩惱は生死の苦果を生ずる種子なれば子と稱し、而も之によりて三界に縛著せらるるが故に縛といふ。

【果縛】肉身のこと。即ち前世の業によりて得たる果報なるが故に果縛と稱せらる。

【滅智灰身】當には灰身滅智と稱し色心共に永く滅して迷の影なきをいふ。

停まること無し。過去の二因と、現在の五果と、現在の三因と、未來の二果と、三世に往復することと猶車輪のごとし。疑惑の本既に無常、苦、空、無我なれば則ち無明滅す。無明滅するが故に諸行滅し、乃至老死滅す。若し火を然さずんば、是れ則ち種無し。是を子縛斷と名く。子無ければ則ち果無く、滅智灰身して二十五有を離る。是を果縛斷と名く。則ち是れ下智に十二因緣を觀じて、聲聞の菩提を得るなり。

中智とは、愛は觸に由り、乃至行は無明に由ると觀ず。無明は祇是れ一念の癡心なり、心は形質無く、但名字のみ有り。內外中間に之を求むるも得ず、是字住せず亦不住ならず。猶幻化の如くにして、虛しく眼目を誑かす。無明の體相は本より自ら有ならず、妄想の因緣和合して而も生ず。所有無きが故に、假に無明と名く。不善の思惟心行の所造なり、無明は幻化の如しと達せざるを以ての故に、善不善の思惟を起す、則ち善不善の行有り、善不善の名色、觸、受を受く。今無明は幻の如しと達するが故に、則ち諸行も亦幻の如し。幻より生ずる識、名色等も皆幻の如し。愛、取、有生じて三世に輪轉し、幻化遷改して都て眞實無し。有智の人は、應に中に於て愛恚を生ずべからず。無明既に不可得なれば則ち無明生ぜず、生ぜざれば則ち滅せず。諸行老死も亦不生不滅なり、不生の故に則ち新に非ず、不滅の故に則ち故に非ず。非故とは故の畢るべき無く、非新とは新しきの造すべき無きなり。無新とは子縛斷じ、無故とは果縛斷ず。是を中智に十二因緣を觀じて、緣覺の菩提を得と名く。

上智觀とは、受は觸に由り、乃至行は無明に由ることを觀ず。無明は秖是れ癡の一念の心なり、心癡なるが故に煩惱を派出し、煩惱に由りて諸業を派出し、業に由りて諸苦を派出す。此煩惱を觀ずるに種別同じからず、不同なるが故に業同じからず、業不同なるが故に苦同じからず。諸行若干にして名色各異り、種種の三道無量無邊なれども分別して濫ぜず。此煩惱に因りて此業を起し、此苦を得。彼業、及び彼煩惱に關はらずと知る。是の如きの三道は三德を覆障す、破障の方便亦復無量なり。無明若し破すれば般若を顯出し、業破すれば解脱を顯出し、識、名色破すれば法身を顯出す。愛、取、有、老死も亦復是の如し。自ら旣に解し已れば、復能く他を化す。一切の種に於て一切の法を知り、道種智を起し、衆生を導利す。是を上智に十二因緣を觀ずと名く。

上上智觀とは、受は觸に因り、乃至行は無明に由ると觀ず。十二支の三道卽ち是れ三德なりと知る、豈三德を斷破して更に三德を求め、則ち諸法の相を壞すべけんや。煩惱道は卽ち般若なり、當に知るべし、煩惱も闇ならざることを。般若卽ち煩惱なれば、般若も明に不ず。煩惱旣に闇ならざれば、何ぞ更に斷ずることを須ひん。般若も明ならざれば、何の所にか能く破せん。闇も本より闇に非ざれば、明を須ひず。菩薩、毒を積るに藥と成るが如し、豈此を捨てて彼を取るべけんや。業道卽ち是れ解脱とは、當に知るべし、業道も縛に非ざることを。解脱卽業なれば、脱も自在に非ず。業も縛に非ざるが故に、何の所にか離すべけん。脱も自在に非ざれば、何の所にか得べけん。二道の人の如し、豈此を避け

【二六】六境に對する中第二に四諦に對して智を明す。

て彼に就かん耶。苦道即ち法身とは、當に知るべし、苦も生死に非ざることを、法身即ち生死なれば、法身は樂に非ず。苦も生死に非ざれば何の憂ふべき所かあらん、法身も樂に非ざれば何の喜ぶべき所かあらん。彼虛空の得無く失無く、忻に不ず戚ならざるが如し。是の如く觀ずれば、三道は三德に異ならず、三德は三道に異ならず、亦三道に於て一切の佛法を具す。何となれば、三道即ち三德にして、三德は是れ大涅槃なり、祕密藏と名く、此れ即ち佛果を具す。深く十二因緣を觀ずるは即ち是れ坐道場なり、此れ即ち佛因を具す。佛因佛果皆悉く具足す、餘は例して知んぬべし。是を上上智に十二因緣を觀じて、佛の菩提を得と名く。此に約して應に麤妙を判じ、麤を開して妙を顯すべし。意解すべきが故に、委しく記せざるのみ。又四智、四境を照すは、境若し轉ぜざれば共智則ち麤なり。四境轉ずれば妙境と成り、麤智即ち妙智と成る。仍是れ待絕の意なり云云。

(二六)二に四種の四諦に對して智を明さば、大經に云はく「聖諦を知る智に則ち二種有り、中智と上智となり。中智とは聲聞、緣覺、上智とは諸佛菩薩なり」と。若し此文に依らば、體、析を束ねて合して稱して中と爲し、大乘の利鈍を束ねて合して稱して上と爲す。今若し根緣の利鈍、內外の事理に約するに、開して即ち四と成る。聲聞は根鈍なれば四諦の事を緣ず、即ち生滅の四諦の智なり。緣覺は根利なれば四諦の理を緣ず、即ち無生の四諦の智なり。菩薩は智淺くして不思議の事を緣ず、即ち無量の四諦の智なり。諸佛は智深ければ不思議の理を緣ず、即ち無作の四諦の智なり。此れ乃ち大經の一文なり。又云はく、「凡夫は

苦有りて諦無し、聲聞は苦有り苦諦有り」と。凡夫は苦の理を見ず、故に諦無しと言ふ。聲聞は能く無常、苦、空を見る、故に諦有りと言ふ。即ち是れ生滅の四諦の智なり。又云はく、「菩薩の人は苦無苦にして而も眞諦有ることを解す」と。即ち是れ苦は苦に非ずと體す、故に無苦と言ふ。事に即して而も眞なり、故に有諦と言ふ。乃ち是れ摩訶衍門無生の四諦の智なり。又云はく、「諸の陰は是れ空なりと知り、諸入を門と爲すと知る、亦名けて苦と爲す。諸界を分と爲すと知るを亦名けて性と爲し、亦名けて智と爲す。是を中智と名く」と。前の說に依らば即ち聲聞に屬するなり。諸の苦、諸の入界等を分別するに無量の相有り、我彼經に於て竟に之を說かず、是を上智と名く。受、想、行、識も亦復是の如し、「諸の聲聞、緣覺の境界に非ず。此れ則ち前の兩意に異れり。旣に上智と稱す、又二乘の境界に非ず。豈別教の菩薩、恆沙の佛法、如來藏の理を觀ずるに非ずや。是を無量の四諦の智と爲す。又云はく、「如來は苦に非ず、集に非ず、滅に非ず、道に非ず、諦に非ず、是れ實なり。虛空は苦に非ず諦に非ず、是れ實なり」と。非苦とは虛妄の生死に非ず、非諦とは二乘の涅槃に非ず、是れ實とは即ち是れ實相中道佛性なり。又云はく、「苦有り、苦の因有り、苦の盡有り、苦の對有り。如來は苦に非ず、乃至對に非ず、是故に實と爲す」と。此の如く義を明すこと、旣に上の三番に異る、是無作の四諦の智に非ずや。此一諦を四とするに例するに、餘の三も亦應に爾るべし。謂はく集有り、集の因有り、集の盡有り、集の對有り。盡有り、盡の因有り、盡の障有り、盡の障の相有り、對有り、對の果有り、對の障有

り、對治の障の相有り。如來は此四四十六種に非ず、但是れ權に約して說く云云。是の如き等の智、四諦を觀ずるに、諦既に未だ融せざれば、智と諦と皆麁なり。獨り非苦非集、有實のみ有りて妙と爲す。若し諦圓なれば智も亦隨つて圓なり、皆是れ如來の非苦非諦、是れ實の妙智なり。此れ卽ち待絕の兩意なり云云。

妙法蓮華經玄義卷第三上

【一】六境に對する中、第三には二諦の境に對して智を明す。而してまた初め境に例して略列し、次に正しく解す。
【析法の二智】三藏教のこと。
【體法の二智】通教のこと。
【體法合中の二智】別接通のこと。
【體法無中の二智】圓接通のこと。
【別の二智】別教のこと。
【別合圓の二智】圓接別のこと。
【圓の二智】圓教のこと。

妙法蓮華經玄義　卷第三下

天台智者大師の說

（一）三に二諦の境に對して智を明さば、權實の二智なり。上の眞俗二諦に既に七種を開く、今權實の二智も亦七番と爲す。內外の相卽と不相卽とにて四なり、三の相振を合して七なり。若し上に對して之を數ふれば、析法の權實二智と、體法の二智と、體法合中の二智と、體法無中の二智と、別の二智と、別含圓の二智と、圓の二智と有り。上の七番に各隨情、隨情智、隨智を開す、合して二十一種の諦なり。今の七番の二智も亦三種を開す、謂はく化他の權實、自行化他の權實、自行の權實なり。合して二十一の權實なり。若し析法の權實の二智は、森羅の分別を照すを權智と爲し、森羅の分別を泯すを實智と爲す。此二智を說きて種種の緣に逗じ、種種の藥を作し、種種の欲、種種の宜、種種の治、種種の悟に隨ひ、各堪任するに隨つて、緣に當りて分別す。復種種なりと雖も、悉く析法の權實の攝と爲す。故に化他の二智有り、化他の二智は緣に隨ふの說なれば皆束ねて權智となす。若し內に自ら證得するところの若は權、若は實は、倶に是れ實證なれば束ねて實智と爲す。內外相望して共に二智と爲す、故に自行化他の權實の二智有り。自證の權實に就かば、唯獨り明了にして餘人は見ず。更に權實を判ぜず、故に自行の二智有り。今更に三諦に約して重

ねて之を分別す。此佛は、二乘の人を化するに多く化他の適智を用ひ、二乘は此化他の實を稟けて自行の實を修成す。故に佛菩薩を印して云はく、「我と汝と倶に實說の法に坐す」と。即ち此義なり。若し菩薩を化するには多く化他の權智を用ひ、其れ菩薩は化他の權を稟け、修學して自行の權を成ずることを得。佛亦印して言はく、「我亦汝の如し」と云云。此三種の二智は、若し體法の二智に望むれば悉く皆是れ權なり。故に龍樹は破して云はく、「豈不淨の心中に菩提の道を修すること有らんや。猶ほ毒器の食を貯ふるに任へず、食すれば則ち人を殺すが如し」と。此れ正しく析法の意を破す、故に皆是れ權なり云云。體法の權實の二智とは、森羅の色則ち是れ空なりと體す。即色は是れ權智、即空は是れ實智なり。大品に云はく、「色に即して是れ空なり、色滅して空なるに非ず」と。正しく是れ此義なり。緣の爲に二と說くも、緣別不同なれば說亦種種なり。復異說すと雖も、悉く化他の權實の爲に攝せらる。故に化他の二智有り、化他の二智は既に是れ他情なれば、皆束ねて權と爲す。內證の權實は既に是れ自證なれば、悉く名けて實と爲す、自の實を以て他の權に對す、故に自行化他の二智有り。自の證得に就いて又權實を分つ、故に自行の二智有り。此三の二智を含中の二智に望むれば、復皆權と名く。何となれば、中道無きが故なり云云。體法含中の權實の二智とは、色即ち空不空なりと體す。色を照すは是れ權智、空不空は是れ實智なり。此二智を說きて無量の緣に赴き、情に隨ひて異說す。復無量なりと雖も、悉く是れ含中の二智の所攝なり。故に化他の二智有り。化他の二智は本是れ逗機なれば、皆

名けて權と爲す。自證の二智は皆名けて實と爲す。自證の二智に於て更に權實を分つ、故に自行の二智有り。此三の二智は、顯中の二智に望むるに悉く皆是れ權なり。何となれば、空眞及び教道の方便を帶するが故なり。又體法顯中の權實の二智とは、色卽ち空不空にして一切の法は空不空に趣くと體す。色を了するは是れ權智、空不空にして一切の法空不空に趣くは是れ實智なり。緣の爲に二を說くも、緣旣に無量なれば說亦無量なり。無量の說悉く顯中の二智の所攝と爲す、故に化他の二智有り。化他の二智は旣に是れ隨緣なれば、悉く名けて權と爲す。自證の二智は旣に是れ證得なれば、悉く名けて實と爲す。自を以て他に望む、故に自行化他の二智有り。自證の二智に就いて更に權實を分つ。此三の二智は別の權實の二智に望むれば、悉く皆是れ權なり。何となれば卽空及び教道の方便を帶するが故なり。別の權實二智とは、色卽ち空不空なりと體す。色と空は倶に是れ權智、不空は是れ實智なり。此二智を以て自下の機に隨ひ、種種に分別す。分別すること多しと雖も、悉く次第の二智の所攝と爲す。故に化他の二智有り。化他の二智は悉く是れ緣の爲なれば皆名けて權となす。自證の二智は旣に是れ證得なれば、悉く名けて實と爲す。自を以て他に對す、故に自他の二智有り。自證の權實に就いて自ら二智を分つ、故に自行の二智有り。此三の二智は別合圓の二智に望むれば、悉く復是れ權なり。何となれば、次第を以ての故に、教道を帶するが故なり。別合圓の權實二智とは、色空不空にして一切の法は不空に趣く。色と空とを權智と名け、一切の法不空に趣くを實智と爲す。此二智を以て

百千の緣に隨ひ、種種に分別す。分別することを爲しと雖も、悉く別含圓の二智の所攝となす。故に化他の二智有り。化他の二智は既に是れ緣の爲なれば、悉く皆是れ權なり。自證の二智は既に是れ證得なれば、悉く名けて實と爲す、自他相望して共に二智と爲す、自の證得に就いて更に權實を分つ、故に自行の二智有り。此三の二智は、圓の二智に望むれば悉く復是れ權なり、何となれば、次第及び教道を帶するが故なり。圓の權實二智とは、色に卽して是れ空不空なり、一切の法色に趣き、空に趣き、不空に趣く。一切法の色に趣き空に趣くは是れ權智、一切法の不空に趣くは是れ實智なり。此の如く、實智卽ち是れ權智、權智卽ち實智にして二無く別無し。衆生を化せんが爲に種種に緣に隨ひ、欲に隨ひ、宜に隨ひ、悟に隨ひて種種に說くと雖も、悉く圓の二智の所攝と爲す。故に化他の二智有り。化他の二智は既に是れ隨情なれば、悉く復是れ權なり。自證の二智は、悉く名けて實と爲す。自證の中に就いて更に二智を分つ、故に三種の不同有り。此二智は析法等の十八種の二智の方便を帶せず、唯眞の權、眞の實あるを佛の權實と名く。經の如くんば「如來の知見は廣大深遠なり、方便波羅蜜皆悉く具足す」と。獨り稱して妙と爲し、前に待して皆麤と爲す。又析法の二智より顯中の二智に至るまで、凡そ十二種の二智は、前に待しては名けて麤と爲し、顯中を妙と爲す。何を以ての故に、此妙は後の妙に異らざるが故なり。又次第の二智より凡そ九種の二智は前に待して麤と爲し、不次第を妙と爲す。又前の十八種の二智は皆麤にして、唯不次第の三種を妙と爲す。又不次第の二種を麤と爲し、一種を

【如實智】唯だ諸佛所得の智慧にして諸法の實相に如ふ智。

【二諦】二諦の境に對して智を明す中之より下諸境に例す。

妙と爲す。又五味の教に歷れば、乳教に三種、九種の二智を具し、酪教は一種と三種の二智、生蘇は四種の十二種の二智、熟蘇は三種と九種の二智を具す。此經は但二種と三種の二智なり。若し酪教の中は權實皆麤、醍醐の教の中は權實皆妙なり。餘の三味の中は權實に麤有り妙有り、意を以て推すべし。若し上の如く諸智を釋することを作さずんば、經論の異說の意、則ち解し難し。何となれば、華嚴に初住心を解して云はく「三世の諸佛も初住の智を知らず」と。世人釋して云はく「如實智は、佛も自ら佛の如實智を知らず、亦初住の如實智をも知らず」と。此釋は自ら理に於て通ずと爲すと謂へども、其れ實には允らず。若し藏、通等の佛は如實智を論ぜず、云何ぞ自の如實智に於て知らざらん耶。別教の初住も如實智を得ず、云何ぞ不知と言はん。若し前來の諸智の意を得ば、三世の三種の佛は圓教の初住の智を知らず。此れ即ち事理の二種倶に滯り無し。此中の意に二種を實說、一には二十一種の權實を分別し、二には麤に待して妙を論ず。上に說くが如し。若し麤を開して妙を顯さば、諸の方便の諦も既に融じて妙諦と成る。諦に對して智を立つるも悉く復麤に非ず。賤人の舍も、王若し過ぐれば舍則ち莊嚴するが如く、衆流海に入れば同一鹹味なるが如し。諸の麤智を開すれば即ち是れ妙智なり。

茲に二智多く關はる所有り、須く商略して類通すべし。今七種の二諦に對して二十一種の權實を明し、以て章門と爲す。若し此意を得れば、因緣の境に約するも亦應に此の如くなるべし。謂はく析の因緣の智、體の因緣の智、含中の因緣の智、顯中の因緣の智、次第の因

【三】以下問答料簡。

緣の智、帶次第の因緣の智、不次第の因緣の智、一一に各化他、自行化他、自行等の三種の分別有り。合して二十一種有り。麁妙を分別し、五味の多少を判じ、待絕を簡ぶる等、四諦、三諦、二諦等も亦當に是の如し。當に自ら之を思ふべし、何ぞ煩はしく具に記せん。』

【三】問ふ、「四門の諦及び化他の智は、何の意ぞ無量なる。隨智の諦及び自行の智は、何の意ぞ多からざるや」。答ふ、「祇一人未得道の時に約するも、見心横に起り那數無窮なり。何に況や多人の種種各異なるをや、是此の惑の故に隨情は則ち多し。智の理を見るは、理は唯一種にして異り有ることを得ず」云云。

【四】謬を斥て今經破立の意を明す

【四】夫れ二諦の差別は已に上に說くが如し。此七の權實、二十一の權實を說くは、頗る世人の所執の義を用ふるや不や、頗る世人の所說の諦に同ずるや不や、頗る諸論の所立の義を用ふるや不や。既に世人に從はず、亦文疏に從はず。特に是れ大小乘の經を推して此釋を作すのみ。若は破、若は立、皆是れ法華の意なり。若し巧拙相形らば、通經の二智を以て三藏の經の二智を破し、乃至次第不次第相形らば、圓經の二智を以て別經の二智を破す。方便の諸經は智を明すこと既に麤なれば、通經の論豈妙とすることを得んや。經論既に爾り、經論を弘むる人何ぞ勞しく擊射せん。其所說に任じて自ら墮する所有り。若し生滅と作して權實を解せば、初番に墮在す。若し不生不滅と作して解するは、第二番に墮す。乃至、第七番も亦知んぬべし。又縱ひ廣く經論を引きて己が義を莊嚴する者も亦、初番の隨情の二諦化他の權實を出づることを得ず。況や初番の第二、第三の權實を出でんや。倘

【五】六境に對する中、第四に三諦の境に對して智を明す。而して今初に重ねて五境を叙する中、先づ總じて來意を標し、乃至相對して五を立て解釋す。

初番の三種の權實を出でず、況や第七番の三種の權實をや。若し但初番の二智を以て、一切世間の情熱を破して略盡く。假令化城に入ることを得るも、秖是れ自行の實智なり。倘化他の權をも得ず、何に況や能く後番の諸智を得んや。若し二十一種の二智を尋ぬれば、凡そ幾くの外見を破し、凡そ幾くの權の經論を破す。復幾くの是をか顯はし、幾くの權の經論をか立て、然して後、方に妙權妙實と稱す。世人は全く一兩種の權實の意を識らず、而して情中卽ち計して智と爲す。若し是れ智ならば、何の惑をか破し何の理をか見るや。未だ理を見ず、未だ惑を破せず、生死浩然たり。情に非ずして何とか謂はん。今若し前の諸の麤智に待して而も妙智を明すは、法華破待の意なり。若し其れ會せば、一切の權の經論に明す所の諦理皆妙理と成る。智地に非ざること無し。一切の權の經論に明す所の二智を會するに、妙智に非ざること無し、悉く是れ大車なり。此の如きの破會は深く廣し、中論を以て相比すること莫れ、熟之を思ふべし云云。

(五)四に三諦に對して智を明さば、上に五の三諦を明し竟りて、今更に分別す。夫れ三智、十法界を照すは、十を束ねて三と爲す。有漏と無漏と非有漏非無漏とを謂ふ。三法相入して分別するに五有り、初には謂はく、非漏非無漏の無漏に入るを、漏、無漏に對して三法と爲す。二には謂はく、一切法の無漏に入るを、漏、無漏に對して三法と爲す。三には謂はく、漏、無漏、非漏非無漏を三法と爲す。四には謂はく、一切法の非漏非無漏に趣くを、漏、無漏に對して三法と爲す。五には謂はく、一切法の漏に趣き、無漏に趣き、非漏非無

【十八】次に境に對して智を明すに、初めて五種の相を標し然る後正しく解釋す。

【道觀雙流】道と觀と並べ行ずるの意。道は化道、卽ち利他の行なり、觀は空觀にして是れ自利の行なり。

漏に趣くを三法と爲す。更に五境を說くこと竟んぬ。

此五境に對して五の三智を明さば、一切智、道種智、一切種智を謂ふ。三智相入して五種不同なり。一には中智の空智に入るを道智に對して三と爲す。次に如來藏智の空智に入るを、道智に對して三と爲す。次に中智を兩に對して三智と爲す。次に如來藏智の中智に入るを、兩智に對して三智と爲す。次に圓の三智なり、是を五差と爲す。中智の空智に入るを分別して三智と爲すは、初に無漏に依つて一切智を發し、次に有漏に依つて道種智を發し、後には深く無漏の空を觀じて空も亦空なりと知り、一切種智を發す。然るに初心は空の空なることを知らず、次に空を得と雖も亦空を空せず、後に能く深く空を觀じて前の空を空ず。但二空の名同じく、二境も亦合す、故に相入と言ふ。今若し分別せば、無漏の空を以て一切智と爲し、有漏の空を道種智と爲し、中道の空を一切種智と爲す。世人は經論の意を採りて云はく「六地に惑を斷ずるは羅漢と齊し、七地に方便道を修し、八地に道觀雙流し、無明を破し成佛す」と。卽ち此意なり。如來藏智の空智に入るに三智を分別せば、漏、無漏に依つて一切智、道種智を發するは前に異ならず。而も後別の境に因らずして更に中智を修す。但深く空を觀じて能く不空を見る、不空は卽ち如來藏なり。藏と空と合す、故に相入と言ふ。深く空を觀じて不空を見るを以ての故に、一切種智を發す。前の中道智は但別理を顯はす、理と智と諸法を具せず。藏理、藏智は一切の法を具す、故に前に異なる。藏智を以て兩智に對して三地と爲す。大經に云はく「聲聞の人は但空を見て不空

【種性の菩薩】住位の菩薩。

十

を見ず、智者は空及び不空を見る」と。大品に云はく、「一切智は是れ聲聞の智、道種智は是れ菩薩の智、一切種智は是れ佛智なり」と、即ち此意なり。中智を兩に對して三智と成るとは、各一境を緣じて各一智を發す。次第深淺相濫入せず。故に地持に云はく、「種性の菩薩は發心して二障を除かんと欲し、有佛無佛決定して能く次第に諸の煩惱を斷ず」と、即ち此意なり。如來藏の智の中智に入るを三智と爲すは、兩智は前に異ならず。一切種智は少しく異なる、何となれば、前に中の境を明すは直に中の理而已。此理を顯はさんと欲せば、應に萬行を修すべし。理を顯はすの智なるが故に、一切種智と名くるのみ。今如來藏の理は一切の法を含ず、直に理を顯にすの智を一切種智と名くるに非ざれば、前と異と爲す。此智を用て前に對し三智と爲す。故に地論師の云はく、「緣修は眞修を顯はす、眞修發する時は緣修を須ひず」と。前の兩智は即ち是れ緣修なり、後の智發する時は即ち是れ眞修なり。眞修は一切の法を具せば、餘を須ひず、即ち是れ此義なり云云。圓の三智とは、有漏は即ち是れ因緣生の法、即空、即假、即中なり。無漏も亦即假、即中なり。非漏非無漏も亦即空、即假なり。一法即ち三法、三法即ち一法、一智即ち三智、三智即ち一智、智即ち是れ境、境即ち是れ智にして融通無礙なり。此の如きの三智は、豈前に同ぜんや。釋論に云はく、「三智一心の中に得て前無く後無し、人に向つて說いて解し易からしめんが爲の故に、三智の名と作して說く耳」と。即ち是れ此意なり云云。若し智を顯はさんと欲せば、要ず須く觀成すべし。汎く觀智を論ずるに倶に因果に通ず、別すれば則ち觀とは因、

【七】以下麁妙を簡び而してまた麁を開して妙を明す

智は果なり。例せば佛性の因果に通ずるが如し、別すれば即ち因を佛性と名け、果を涅槃と名く。今は別の義に就いて、觀を以て因と爲し、智果を成ず。瓔珞に云ふが如き、從假入空を二諦觀と名け、從空入假を平等觀と名け、二觀を方便道と爲し、中道第一義諦觀に入ることを得と。今從假入空觀を用ひて因と爲し、果一切智を成ずることを得るを一切智と名く。從空入假觀を用ひて因と爲し、道種智の果を成ずることを得、中道觀を用ひて因と爲し、一切種智の果を成ずることを得るなり。上に智を明すに略して五種有り、今觀を以て、亦應に五種なるべし。細に作ることを知んぬべし、修觀の義は止觀の如し云云。

二に麁妙と言ふ者は、別、通の兩佛に一切種智の名有りと雖も、更に別の意無し、別の意を破せざれば此智成せず、故に用ひざるなり。中入空の智は中道を説くと雖も、但中を因として而も但智を成ず。後の中道を照すは麁大の用無し、但教を因となし、果又融せず。是故に麁となす。次に如來藏入空の智は、後の果理は融ずと雖も因は是れ通門なり、亦名けて麁と爲す。中を二智に對せば、通を因とせずと雖も而も三智即異なり、果も亦未だ融せず、是故に麁と爲す。如來藏の中に入るは、果に在りて融ずと雖も因は是れ別門なれば、此因も亦麁なり。圓の三智とは因も圓、果も圓、因も妙、果も妙、諦も妙、智も妙なり。正直に方便を捨てて但無上道を説く、是故に妙智と爲す。若し五味の教に歷れば、乳教に三種の三智有り、酪教には一種の三智有り、生蘇には五種の三智を具し、熟蘇にも亦五種の三智を具す。麁妙は知るべし。法華は但一種なり、此は是れ法華の破の意なれば、即ち

【八】六境に對する中、第五に一諦の境に對して智を明す。而してまた中に自ら釋、判、開の三段あり。

【九】六境に對する中、第六に無諦の境に對して智を明す。

相待妙なり。麤を開して妙を明さば、世智無道の法も尚邪相を以て正相に入る、治生產業皆實相と相違背せず。低頭擧手にも麤を開して妙を顯はし、悉く佛道を成ず。何に況や三乘出世の智をや。故に大經に云はく、「聲聞緣覺は亦は實、亦は虛なり」と。煩惱を斷ずるが故に之を名けて實と爲し、常住に非ざるが故に之を名けて虛と爲す。凡夫は未だ煩惱を斷ぜざれば、實無くして唯虛なり。尚麤を開して妙に入る、即ち是れ大乘なり。何に況や二乘の智をや。二乘の智は根敗し心死するも尚還つて生ずることを得。何に況や道種の智をや。此の如く開する時は、一切都て妙なり、實相に非ざるは無し。七寶の大車其數無量なりとは、此は是れ法華の會の意にして、即ち絕待妙なり。

(八)五に一諦に對して智を明すとは、即ち是れ如實智なり。釋論に云はく、「諸水流に入れば同一の鹹味なり」と。諸智も如實智に入れば本の名字を失す。故に知んぬ、如實智は總じて一切の智を攝し、純ら一境を照す。故に衆水を總べて但に一鹹と成すことを。若し十智に待するを麤と爲し、如實智を妙と爲す。若し諸の實智に待すれば、諸の實智を麤と名け、中道如實智を妙と名く。若し麤を開して妙を顯はさば、但諸の實智を妙と爲るのみに非ず、十智も亦妙と爲す云云。

(九)無諦無說とは、既に無諦と言ふ、亦復無智なり。若し諸處に歷て無諦を明さば、餘の方便の無諦無智を麤と爲し、中道の無諦無智を妙と爲す。若し杜口絕言の無諦無智を以てせば、亦麤無く妙無く、待無く絕無し。一切法に歷て皆麤無く妙無きなり。

【一〇】境に對して智を明す中、展轉相照を解釋す。

(一〇)二に展轉して相照すとは、六番の智は前の諸境を徧照す。思議の因緣の下智、中智は六道の十如の性相等を照す。下、中の二智の十二因緣の滅を觀ずるは、二乘の十如の性相等を照す。上智は菩薩の性相本末等を照し、上上智は佛法界の性相本末等を照す。四種の四諦の智は十法界を照すは、生滅、無生等の苦集の智は、六道の十如の相性を照し、生滅、無生の道滅の智は、卽ち是れ二乘の十如の相性を照す。無量、無作の苦集の智は、菩薩界の性相等を照し、無量、無作の道滅の智は、佛法界の相性本末等を照す。四種の四諦の智の四十二因緣を照すは、生滅、無生の苦集の智は、思議の兩の十二因緣を照し、生滅、無生滅の兩の道滅の智は、是れ兩の思議の十二因緣の滅を照す。無量、無作の兩の苦集の智は、不思議の兩の十二因緣を照し、無量、無作の道滅の智は、不思議の兩の十二因緣の滅を照す。七種の二智の十法界を照すは、生滅、無生滅の兩の權智、及び入通等の二を合しての四の權智は、六道の性相を照す。生滅、無生滅の兩の實智は、二乘の性相等を照す。別の權と圓入別の權との有の邊は、是れ六道の性相を照し、無の邊は是れ二乘の性相を照す。圓の權は、則ち通じて九界の性相を照す。別入通の實は、空の邊は是れ二乘の性相、不空の邊は是れ菩薩の性相なり。圓入通の實は、空の邊は是れ二乘の性相、不空の邊は是れ佛界の相性を照す。別の實は是れ菩薩の性相を照す。圓入別の實と圓の實とは、倶に佛法界の相性を照すなり。七種の二智の四種の因緣を照すは、前の四の權は是れ思議の兩の十二緣を照す。別の權と圓入別の權は、有の邊は是れ兩の思議の十二緣を照し、無の邊は

是れ兩の十二緣の滅を照す。圓の權は則ち通ず云云。別入通の實は、空の邊は是れ思議の十二緣の滅を照し、不空の邊は是れ不思議の十二緣を照す。圓入通の實は、空の邊は上に同じく、不空の邊は是れ不思議の十二緣の滅を照す。別の實は不思議の兩の十二緣の滅を照し、圓の實は兩不思議の十二緣の滅等を照す。前の四種の權智は是れ生滅、無生滅の兩苦集を照し、又三の權智は無量、無作の苦集を照す。二の實智は是れ思議の兩の道滅を照す。又五の實智は是れ不思議の兩の道滅を照す。五種の三智十法界を照すは、五種の道種智は六道の性相本末等を照す。五種の一切智は二乘、菩薩の性相本末等を照す。五種の一切種智は佛法界の十如の相性等を照す。又五種の三智の四種の十二因緣を照すは、五種の有の智は思議の兩の十二緣を照し、五種の一切智は兩思議の十二緣の滅を照し、又是れ不思議の十二緣を照す。五の一切種智は是れ兩の不思議の十二緣の滅を照す。五種の三智の四種の四諦を照すは、五に道種智は生滅、無生の兩の苦集を照す。五種の一切智は生滅、無生の兩の道滅を照し、亦是れ無量、無作の兩苦集をも照す。五種の一切種智は是れ無量、無作の兩道滅を照す。五種の三智七種の二諦を照すは、五の道種智は是れ四種の俗諦を照し、五種の一切智は是れ兩種の眞諦を照す。亦是れ別、圓入別、圓の三種の俗諦をも照す。五種の一切種智は是れ五種の眞諦を照す。一の如實智は是れ佛界の十如の性相を照し、又是れ不思議の十二因緣を照す。又是れ無作の四諦を照す。又是れ五種の眞諦を照す。又是れ五種の中道第一義諦を照す。無諦無諦は十の相性の如と合し、不思議の十二緣の滅と合し、四種

【二】迹門十妙の中、第三に行妙を明す。就中、今初に略して麤を簡び妙を顯す。

【一行一切行】圓教に於ては教行人理皆圓融なるが故に一行を執るに圓かに一切行を具成するを云ふ。

【面上の三目、伊字の三點】前者は大自在天の面上に三目あるをいひ、後者は梵語の伊字は三點より成るをいふ。以て法身、般若、解脫の三德不縱不橫なるに譬ふ。

の不生不生と合し、二諦の無生滅と合し、中道の非生死非涅槃と合す。此の如き等の諸智傳傳して諦を照す、諦若し融ずれば智即ち融す。智と諦と融ずる、之を名けて妙と爲す。此の如き等は皆是れ方便の說なれば、妙不妙と稱す。甲を迎ふるの時は復權實、非權非實無く、亦妙と不妙とも無し。是故に妙と稱するなり。七種の二諦、五種の三諦は更に相開入す、餘の諸境も亦此意有り。七種の二智、五種の三智皆に相開入すれば、餘の諸智も亦此意有り。例して自ら作すべし云云。

（三）第三に行妙とは三と爲す、一には通途の增數行、二には約教の增數行なり。夫れ行は進趣を名くるも、智に非ずんば前まず、智解行を導くは、境に非ずんば正しからず。智目行足をもつて清涼池に到る。而して解は是れ行の本なり、行能く智を成ず、故に行滿じて而も智圓なり。智は能く理を顯はす、理窮まれば則ち智息む。此の如く相須ふる者は、則ち妙行に非ず。妙行とは一行一切行なり、經の如くんば「本無數の佛に從ひて、具足して諸道を行ず」と。又云はく、「無量の諸佛の所にして、而も深妙の道を行ず」と。又云はく、「盡く諸佛所行の道法を行ず」と。既に具し、復深く、又盡せり。具は即ち是れ廣、深は即ち是れ高、盡は即ち究竟なり。此妙行と前の境智とは、一にして而も三を論じ、三にして而も一を論ず。前の境は說くこと法相の如く、法相亦三を具するを祕密藏と名く。前の智は是れ法相の如くにして解す、解亦三を具すること面上の三目の如し。今の行は是れ所行にして所說の如し、行亦三を具するを伊字の三點と名く。若は三、若は一、皆缺滅あるこ

【三二】次に正釋の中、先づ來意を叙し、而して通途增數の行を釋す。

【三三】次に約教增數の行を釋するに初めて通じて四教に約して增數の相を明す。

と無し、故に妙行と稱する耳。

（三二）前には境に對して智を明せり、今亦應に智に對して行を明すべし。若し直に一種の智に對して增數に行を明さば、則ち行は塵沙の若し、說いて盡すべからず。況や諸智に對して各衆行を導く、則ち法として虛空の若し。意を得ば言を亡じて復說くべからず。釋論に云はく、「菩薩、般若を行ずる時、一法を以て行と爲て一切の行を攝す。或は無量の一法を行と爲て一切の行を攝し、或は二法を行と爲て一切の行を攝し、或は無量の二法を行と爲て一切の行を攝し、乃至十法、百法、千萬億法を行として一切の行を攝し、或は無量の十法百千萬億法を行として一切の行を攝す。行は衆多なりと雖も智を以て本となす。智は導主の如く、行は商人の若し。智は利鉾の如く、行は長線の如し。智、行の中に御すれば車、則ち安隱にして能く至る所有り。」此增數の諸行を用て、前の十如諸智の所導、乃至は一實諦智の所導と爲す。若し此意を得ば、正智を以て衆行を導き、正境の中に入らしむ。此義唯懸に知るべし、載せて記すべからず云云。

（三三）一に約教の增數とは、若し三藏の增數に行を明さば、阿含の中の如し。佛、比丘に告げたまはく、「當に一行を修すべし、我汝等が四沙門の果を證せん」心不放逸を謂ふなり。若し能く護心不放逸の行を廣演廣布するときは、則ち所作已に辦じて能く涅槃を得ん」と。又比丘に告げたまはく「當に一行を修すべし、他物を取ること莫きを謂ふなり」と。比丘、佛に白さく、「我已に知り已んぬ」と。佛言はく、「汝云何が知るや」と。比丘、佛に白さく、

【阿練若】聚落を距ること五里乃至二里なる閑處。後轉じて寺院の意に用ひらる。

【怛薩阿竭】如來の梵語。

【七支】殺、盜、婬、妄、綺、兩舌、惡口の七罪。

【三乘共學】聲聞緣覺菩薩の三人共通して同一法門を學ぶこと。

「他物とは色、聲、香、味、觸、法を謂ふ」と。佛の言はく、「善い哉、若し能く此六を取らずんば、所作已に辦じて能く涅槃を得ん」と。言ふ所の廣演廣佈とは、不放逸の心を以て一切の法に歷て、三界、六塵皆放逸ならずして、涅槃に至ることを得るを謂ふ。二數を增して行を明さば、阿含に云はく、「阿練若の比丘は當に二法を修するを行と作すべし、止を修し、觀を修するを謂ふ」と。若し止を修する時は即ち能く諸惡を休息し、戒律威儀、諸行禁戒、悉く皆失せずして諸の功德を成ず。若し觀を修する時は、即ち能く苦を觀じて、實の如く之を知る。苦の集、苦の盡、苦の出要を觀じて實の如く之を知る、漏を盡すことを得て後行を受けず。怛薩阿竭も亦是の如く修す。增三數に行を明さば、戒、定、慧を謂ふ。此三は是れ出世の梯隥、佛法の軌儀なり。戒經に云はく、「諸惡は作すこと莫れ、諸善を奉行せよ。自ら其意を淨うするは、是れ諸佛の教なり」と。諸惡とは即ち七支の過罪、輕重の非違なり。五部律に廣く其相を明す。是の如き等の惡は、戒の防止する所なり。諸善とは善の三業、若は散、若は靜、前後の方便支林の功德、悉く是れ清升なるが故に稱して善と爲す。自淨其意とは、即ち是れ、諸の邪倒を破して世間、出世間の因果、正助の法門を了知し、能く心垢を消除し、諸の瑕穢を淨む、豈慧に過ぎんや。佛法の曠海は此三に攝し盡す。若し此意を得れば、四、五、六、七、乃至百千萬億の法を行と爲て、一切の行を攝するも亦是の如し。是を下智導行と名く。

通教の增數の行とは、部帙を定めて通教を判ぜず。但三乘共學の法門を取りて、此を指

して通とする耳。今且く釋論の增數を引きて、以て其相を示さん。論に云はく、「菩薩般若を行ずる時、諸法の一相なることを知ると雖も、亦能く一切法の種種の相を知る。諸法の種種の相を知ると雖も、亦能く一切法の一相を知る」と。云何が一切法の一相なるを觀ずるや、所謂る一切法の無相を觀ずるなり。四大の如き各各相離れず。地の中に水、火、風有り、但地多ければ、地を以て名と爲るのみ。水、火、風も亦是の如し。今此異相無きを觀ず、若し火の中に三大あれば、三大倂せて熱かるべし、若し三大、火中に在れば三大遂に熱からず、則ち火と名けず。若し三大倂せて熱ければ則ち三大は自性を捨つ、皆名けて火と爲すべし、復三大無からん。若し三大有れども而も細にして知るべからずと言はば、此れ無と何ぞ異ならん。若し細にして得べくんば則ち細有ることを知らん、若し細無くんば細も亦無し。是の如くんば則ち火の中の諸相不可得なり、一切の法相亦不可得なり、是故に一切の法皆一相なり。此れ一相を以て異相を破す、復無相を以て一相を破す、無相亦自ら滅す。火を萠むる木の、諸の薪を焚し已れば亦復自ら燒くるが如し。是を一切法一相、一相無なりと觀ずと爲す。是の如く無量の一切法は悉く皆一相、一相は無相なり。或は二法を行として一切の行を攝し、乃至百法千萬億の法を行として一切の行を攝す。意を以て推すべし、復繁く記さず。

別敎の增數の行とは、善財入法界の中に說くが如く、一の善知識の所に於て各一法を聞きて行と爲す、或は如幻三昧、或は巖に投じ火に赴き、砂を算へ數を相して、菩提心を

【止、觀】止とは諦理に安住して動ぜざるの義と安念を止息するの義とあり、觀とは觀智通達して眞如に契會すると及び智慧の利用能く煩惱を滅するとの義あり、即ち是れ寂照の二義、定慧の二法なり。

【五門禪】苦、空、無常、無我、寂滅の五門。

【七善法】初中後善、義善、語善、獨一善、圓滿善、調柔善、慈悲善、これ法華獨顯の圓の七善法なり。

【九種の大禪】自性禪、一切禪、難禪、一切門禪、善人禪、一切行禪、除惱禪、此世他世樂禪、清淨禪の九にして菩薩所修の九大禪なり。一切の善根功德悉く此中に

發する等、種種の一行なり。皆云ふ、「佛法は海の如し、我唯此一法門を知る、餘は知る所に非ず」と。乃至、一百一十の善知識、一一の法門皆是の如し、是一一の行皆無明を破して深境界に入る。若し二法、三法、百千萬億等の法も亦皆是の如くなるべし云云。

圓教の增數の行とは、文殊問經の如く一行三昧を修することを明して、當に靜室に於て結跏趺坐し、縁を法界に繫け、念を法界に一にせよ。一切の無明顛倒永く寂して空の如くなるべし」と。此一行は即ち是れ一切無礙の人の一道に生死を出づるなり。一切諸法の中、皆等觀を以て入る。解慧の心寂然として三界に倫匹無し。此れ乃ち一行に一切の行を攝す。增二法を行として一切の行を攝す、所謂る止と觀となり。增三法を行として一切の行を攝するは、聞、思、修と戒、定、慧を謂ふ。增四法を行と爲して一切の行を攝するは、四念處を謂ふ。增五法を行として一切の行を攝するは、五門禪を謂ふ。增六法を行として一切の行を攝するは、六波羅蜜を謂ふ。增七法を行として一切の行を攝するは、七善法を謂ふ。增八法を行として一切の行を攝するは、八正道を謂ふ。增九法を行として一切の行を攝するは、九種の大禪を謂ふ。增十數を行と爲して一切の行を攝するは、十境界或は十觀成乘等を謂ふ。百數、千萬億數、阿僧祇不可說の法門を增して行と爲すは、豈具に載すべけんや、若し其意を得れば例して解すべし。

(二四)然るに增數に行を明さば、行同じからず、須く麤妙を判ずべし。若し三藏の增數の諸行は、生滅の智を以て導き、但出苦を期し、化城に止息す。是故に麤と爲す。通教の增數の

諧在す。

【十境界、十觀成乘】天台は止觀に於て十法を用ひて十境を照了し以て觀行を成就せしむる規範と爲す。十境とは陰入境、煩惱境、病患境、業相境、魔事境、禪定境、諸見境、上慢境、二乘境、菩薩境にして十觀成乘の法とは觀不思議境、眞正發菩提心、善巧安心止觀、破法偏、識通塞、道品調適、對治助開、知次位、能安忍、無法愛の十を云ふ。如是十種の行相不同なれども、すべて中道常住の理に依るは一なり。之れ行人の根性不同なるに依る。

【二四】四教に約して增數の相を明す中、麤妙を判じ、麤を開して妙を論ず。

【二五】約教增數の行を釋する中、第二に廣く別圓二教

諸行は、體智巧なりと雖も但導きて苦を出づるのみ、灰斷是れ同じ。別教の增數の諸行は、智導くこと則ち遠し、淺より深に階り、而して諸行隔別なり、事理融せず是故に麤と爲す。圓教の增數の諸行は、行融じ智圓なり、是故に妙と爲す。今經は圓の增數に屬す、若觀經に云ふが如し「三七日に於て一心に精進す」とは、此れ一法に就いて行妙を論ず。若は行、若は坐に此經を思惟すとは、此れ二法に就いて行妙を論ず。若し是經を聞きて思惟修習し、善く菩薩道を行ずとは、此れ三法に就いて行妙を論ず。四安樂行は、此れ四法に就いて行妙を論ず。五品弟子は、此れ五法に就いて行妙を論ず。六根淨は、此れ六法に就いて行妙を論ず」と。是の如き等は、麤に待して妙を論ずるなり。麤を開して妙を論ぜば、低頭擧手、積土弄砂、皆佛道を成ず。種種の法を說くと雖も、其實は一乘の爲なり。諸行皆妙なれば麤の待すべき無く、待即ち絶すなり。

（二五）復次に五數に約して行妙を明さば、又二と爲す。先に別の五行を明し、次に圓の五行を明すなり。別とは涅槃に云ふが如し「五種の行あり、聖行、梵行、天行、嬰兒行、病行を謂ふ。聖行に三有り、戒、定、慧なり。經の如き、菩薩若し大涅槃を聞き、聞き已りて信を生じ、是思惟を作す。諸佛世尊は無上道有り、大正法大衆正行有り」と。此に從ひて行を立つ。若し大涅槃を聞きて、即ち是れ果を信じ、亦是れ滅を信ず。有無上道より已去は、是れ信より果の行を顯はす。無上道は是れ慧を信じ、有大正法は是れ定を信じ、大衆正行は是れ戒を信ず。是を因を信じ、道を信ずと名く。自ら己身及び諸の衆生の戒を備し

罪を造りて、人天の樂及び涅槃の樂を失ふことを傷むは、即ち是れ集を知るなり。生死に往來して惡道の報を受くるは、即ち是れ苦を知る。苦、集と戒、定、慧と相違すれば即ち道無し、道無きが故に涅槃を得ず、則ち滅無し。菩薩は苦集を抜かんと欲して大悲を起し、兩誓願を興す。道、滅を與へんと欲して大慈を起し、兩誓願を興す。

四弘誓願を發し已つて次に則ち修行す、在家は逼迫すること猶牢獄の如く、壽を盡すまで淨く梵行を修することを得ず。出家は開曠なること猶虚空の如しと思惟す。即ち家を棄て欲を捨て、白四羯磨して性重戒、息世譏嫌を持して、等しうして差別無し。愛見の羅刹の爲に、戒の浮嚢を毀られざること、止觀の中に說くが如し。是の持戒に因りて、根本業清淨戒、前後眷屬餘清淨戒、非諸惡覺覺清淨戒、護持正念念清淨戒、廻向具足無上道戒を具足す。根本とは、十善性戒にして、衆戒の根本なり。無漏心の爲に持す、故に清淨と言ふ。前後眷屬餘清淨戒とは、偸蘭遮等は是れ前眷屬、十三等は是れ後眷屬なり、餘とは律藏の所出に非ずして、諸經の制する所の者に在る、方等の二十四戒の流の如し、名けて餘戒と爲す。此兩支は律儀に屬す、作法受得の戒なり。後の三支は作法に非ずして、是れ得法なり、得法の時、乃ち斷戒を發す。非諸惡覺覺清淨戒とは、即ち定共なり。尸羅清淨ならざれば三昧現前せず、戒淨きを以ての故に、事障除きて未來を發得し、性障除きて根本を發得す。惡覺觀を滅するを定共戒と名く。護持正念念清淨戒とは、即ち四念處なり。理を觀ずる正念なり。未だ眞を發せずと雖も、相似の念に由つて、能く眞道を

の五行を明す。即ち先に章を列ね而して別教次第の五行を釋するに、第一聖行を出す。

【二六】聖行の中正しく行相を明すに初に戒聖行を釋す

【白四羯磨】一白三羯磨のこと。僧團生活に於ける受戒、懺重等に用ふる作法。

【性重戒、息世譏嫌】前者は四波羅夷罪、後者は十三僧殘。何れも重罪なり。

【偸蘭遮】四波羅夷、十三僧殘の前方便の罪を云ふ。

【定共戒、道共戒】定共戒とは色界四禪の定に入れば彼の定心と共に自ら防非止惡の功能を生ずるを云ふ。此定有漏なれば戒體亦有漏也。道共戒とは見道以上の位に至つて無漏道を證得すれば即ち無漏智と共に自ら防

非止惡の戒體を發するものを云ふ。
戒體亦無漏也。

發す、道共戒を成ず、故に正念念清淨戒と名く。復次に定共戒は定心に依りて發し、止善の義に屬す。道共戒は分別心に依りて發し、行善の義に屬す。動、不動倶に是れ毘尼なり。何となれば、戒は防止を論ず。定共の心を得れば復惡を起さず、道共を得て眞を發すれば永く過罪無し。故に倶に是れ戒なり。廻向具足無上道戒とは、即ち是れ菩薩は諸戒の中に於て、四弘六度を具し、發願要心して菩提に廻向す、故に大乘戒と名く。弘誓は前に說くが如し、六度とは惡を厭ひ出家して所愛を捨つ、即ち是れ檀なり。纖毫も犯さずして羅刹に拒逆するは、即ち是れ尸なり。能く身心を檢節し、打罵を安忍するを生忍と名く。八風寒熱貪恚等を耐ゆるを法忍と名く。愛見も損すること能はざるは、即ち是れ羼提なり。戒を守護して犯心起らざるは、即ち是れ精進なり。心を決し戒を持して狐疑の爲に誑かされず、專心不動なるを名けて禪と爲す。明かに因果を識り、戒は是れ正順解脫の本にして、一切三乘の聖人を出生す。六十二見羅狗等の戒に非ずと知るを、名けて般若と爲す。又別の發願は己心を要制す、寧ろ此身を以て熱鐵に臥すとも、破戒を以て他の牀席を受けじと。十二の誓願をもつて自ら其心を制す。又更に發願す、願くは一切の衆生をして、禁戒を護持することを得、清淨戒、善戒、不缺戒、不析戒、大乘戒、不退戒、隨順戒、畢竟戒、具足諸波羅蜜戒を得せしめんと。此十願を以て衆生を防護す。菩薩は一持戒の心、若干の願行を以て戒を莊嚴す。諸餘の行心も亦、應に是の如くなるべし。然るに護他の十戒は、自行の五支の中より出づ。根本、眷屬の兩支より禁戒、清淨戒、善戒を出

【篇、聚】比丘比丘尼の具足戒を分類せし綱目にして普通五篇七聚といふもの是なり。

す、何となれば、禪定の作法は即ち是れ無作なり。無作若し無作を發すれば、乃ち清淨と名く。清淨は即ち止善なり。而して行善と言ふ、即ち是れ行善なり。非惡覺觀清淨戒より不缺戒を開出す、何となれば、七支を防護すと雖も、妄念起つて缺漏有ることを致す。若し根本禪を發すれば則ち行缺かず。護持正念清淨戒より、不析戒を開出す、即ち道共戒なり。色を析して空に入るは、是れ析法の道共なり。今法を體して空に入る、故に不析と名く。又內に道共あらば、則ち戒品牢固にして破析すべからざるなり。無作具足無上道戒より、大乘、不退、隨順、畢竟、具足波羅蜜戒を開出す。大乘と言ふは、菩薩は性重、譏嫌を持し、等うして輕重無し。自ら佛道を求むるには性重則ち急なり、衆生を化せんが爲には譏嫌則ち急なり。小乘の自調は性重則ち急なり、他を護せざるが故に譏嫌則ち寬なり。菩薩は具に兩種を持す、故に大乘戒と名く。不退とは非道を行ずる善巧方便にして、婬舍、酒肆、非法の處に徧く以て人を度し、而して禁戒に於て退失あること無し。譬の蓮を喩して、蓮の爲に汙されざるが如し、故に不退と名く。隨順とは物の機宜に隨ひ、道理に隨順す、故に隨順戒と名く。畢竟とは、竪に無上の法を究竟するなり。具足波羅蜜とは、橫に一切圓滿して、法として備はらざること無きなり。大論に亦十種の戒を明す、不破、不缺、不穿、不雜の四種は、即ち是れ大經の根本支の中の禁戒、清淨戒、善戒、不缺戒なり。論の隨道戒は、即ち是れ大經の護持正念支の中の不析戒なり。論の無著戒は、即ち是れ大經の廻向支の中の不退戒なり。論の智所讃戒は、即ち是

【一七】戒聖行に就いて麤妙を判じ、然る後麤を開して妙を顯す。

れ大經の大乘戒なり。論の自在戒は、即ち是れ大經の自在戒なり。論の隨定戒は、即ち是れ大經の隨順戒なり。論の具足戒は、即ち是れ大經の波羅蜜戒なり。大經には畢竟を明し、論には隨定と言ふ、此れ大に同じくして小しく異なり、義に於て失無し。涅槃は菩薩の次第の聖行を辯ぜんと欲す、故に具に諸戒の淺深始終具足することを列ぬ。善く能く護持すれば即ち初不動地に入る。不動、不退、不墮、不散、是を戒聖行と名く。

（一七）戒聖行は既に始淺より以て深に至る、今仍ほ其の麤妙を判ずべし。梵、釋、善の三歸は律儀に屬す。律儀は通じて衆を攝す、故に尊卑の位の次第を定む。菩薩、佛等よりと雖も同に衆を立てず、故に戒法は是れ同なり。但佛菩提心を以て異と爲すのみ。故に知んぬ、律儀等の三歸は三藏の攝なることを。不缺は是れ定共、但不雜は是れ帶なり。亦三藏の攝に屬す、是故に帶と稱す。不析戒は是れ體法道共なれば即ち通教の攝なり。大乘、不退等は別教の攝なり、亦通を兼ぬ。適に出假有り、纔に隨ひ理に順じ、道に於て退せず。然るに諸諦に依りて別人に及ばず、別人を妙と稱す。隨順、畢竟、具足等は圓教の攝なり、滅定を起たずして諸の威儀を現じ、道法を捨てずして凡夫の事を現ず。故に隨順と名く。唯一人淨戒を具し、餘人は皆汙戒の者と名く。故に畢竟戒と名く。戒は是れ法界にして、一切の佛法衆生法を具し、尸の彼岸に到る。故に具足波羅蜜戒と名く。淨名に云はく「其れ能く是の如くなる、是を奉律と名け、是を善解と名く」と。此經に云はく「我等長夜に淨戒を持し、法王法の中久く梵行を修し、始めて今日に於て其果報を得」と。又「羅睺羅の密行

【菩薩戒】菩薩の行を修する人の一般に受持すべき戒律にして大乘戒なり。梵網の十重四十八輕戒等をいふ。

【三歸】佛法僧の三寶に歸依することと、

【五戒】殺、盜、婬、妄、酒の五戒。

【十善】不殺生乃至不邪見を云ふ。

【二百五十】比丘の具足戒にして、四波羅夷、十三僧殘、二不定、三十捨墮、九十單提、四提舍尼、百衆學、六滅諍を云ふ。

は唯だ佛のみ能く之を知る」と。豈前の諸戒の皆麁なるに待して、唯だ圓をもつて妙と爲るに非ずや。復次に初戒を持するは乳の如く、中間は三昧の如く、後戒は醍醐の如し。醍醐を妙と爲す云云。麁を開して妙を顯はさば、他の云はく、梵網は是れ菩薩戒なりと。今問ふ、是れ何等の菩薩戒なるぞ。彼若し答へて言はん、是れ通等の菩薩戒なりといはば、應に別に菩薩衆有るべし、衆既に別ならず、戒何ぞ異なることを得ん。又若し別に菩薩戒を明さば、何等か別して是れ緣覺戒なるや。今明す、三藏の三乘は別衆無ければ、別に菩薩、緣覺の衆あることを得ざるなり。若し別、圓の菩薩の節を作さば然るべし、何となれば、三乘共の衆の外別に菩薩有り、故に別に戒有り。問ふ、「三乘の衆の外に別に菩薩戒あらば、緣覺戒は云何。」答ふ、「三乘の衆の外別の緣覺無し。此れは猶是れ待麁の戒なる耳。麁を開せば毘尼の學者即ち大乘學なり」と。式叉式叉即ち是れ大乘第一義光にして、青に非ず、黃に非ず、赤白に非ず。三歸五戒、十善、二百五十是れ摩訶衍なり。豈麁戒の妙戒を隔つるもの有らんや。戒既に即ち妙、人亦復然なり、汝實に我子とは即ち此義なり。是を絕待の妙戒と名く。

妙法蓮華經玄義卷第三下

【一】聖行の中、第二に定聖行を明す。就中先づ世禪等の三を列ね、次に世禪より之を釋するに、初に根本味禪を解釋す。

【八觸】初禪定を得る時、身中に八種の感觸を生ず。八觸とは動、痒、輕、重、冷、煖、澁、滑なり。

【六行觀】六行とは自地を基として下地は苦、麤、障なりと厭ひ、上地は勝、妙、出なりと欣ぶを云ふ。

妙法蓮華經玄義　巻第四上

天台智者大師の說

（一）定聖行とは略して三と爲す、一には世間禪、二には出世間禪、三には上上禪なり。世間禪に復二あり、一には根本味禪、隱沒と有垢と無記なり、二には根本淨禪、不隱沒と無垢と有記なり。根本とは出世出法の根本なり、大品に云はく「諸佛の成道、轉法輪、入涅槃は悉く禪の中に在り」と。若し能く深く根本を觀ずれば、勝妙の上定を出生す、故に根本と稱するなり。隱沒とは闇證は觀慧無きなり、有垢とは地地に愛味を生ずるなり、無記とは境界分明ならざるなり。此に三品有り、謂はく禪なり、等なり、空なり、即ち十二門禪なり。初に方便を修し、當に善く風喘を簡び、明かに正息を識るべし。安徐として數を記し、增減せしむること莫れ。若し麤微細ならば善く解して緣を轉じ、調停して所を得しめよ。證前の方便の法に當る、或は麤細に住すれば皆持身法起ること有り。進んで欲界定、或は未到定を得、八觸發動し五支成就す、是れ初禪を發するなり。大論に云はく、「已に婬火を離るることを得れば則ち淸涼定を獲。人の大に熱悶して、冷池に入れば則ち樂しむが如し」云云。若し上に進みて下を離れんと欲せば、凡夫は六行觀に依り、佛弟子は多く八聖の種を修す。行者、初禪の覺觀支の中に於て覺觀を厭離し、初禪を以て苦

【四禪】四種の禪定を修して生ずる處の色界の四天處なり。

なり、麤なり、障なりと爲す。二法は定心を動亂する故に苦なり、二法より喜樂を生ずるが故に麤なり、二法は上定を障ずるが故に障なり。二禪此に異なるを勝、妙、出と名く。總じて之を言はば、一には過を知りて愛著せず、二には訶責す、三には析破して初禪を離ることを得、是れ二禪を作するの相なり。善巧に禁壓すれば則ち內外皎然として、喜と俱に發して四支成就す。故に論に云はく、「是故に覺觀を除き、一識處に入ることを得。內心淸淨なるが故に、定生じて喜樂を得」と云云。二禪の中に既に覺觀を離るれば、方便を作すことを得ず。出定の時修習して下を厭ひ上に進むに亦六行有り、初禪を棄つる方法の如し云云。爾時泯然として內外に依らず、樂と俱に發して五支成就す。故に論に云はく、「喜に由るが故に苦あり、喜を失すれば則ち憂を生ず、苦樂身安を離るるに、捨念及び方便あり」と云云。下を厭ひ上に進まんと欲するに亦六行あり、前の如し」云云。善修の故に心豁開明にして、出入の息斷じて捨と俱に發し、空明寂靜にして四支成就す。若し能く樂の患を知り、不動を見るに大に安し。憂喜先に除こり苦樂今亦斷ず云云。行人既に內に四禪を證し、外福德を修せんと欲せば、應に四等を學すべし。此に通修と別修と有り。通修とは、大論に云はく、「是慈は色界四禪の中間に在りて修することを得」と。此語は則ち通なり。別修とは、初禪に覺觀分別有り、悲を修すること則ち易し。喜支は喜を修すること易く、樂支は慈を修すること易く、一心支は捨を修すること易し。復次に初禪は悲を修すること易く、二禪は喜を修すること易く、三禪は慈を修すること易く、四禪は捨

【色籠】欲界の如き散亂麤動の身心を離るると雖も尚四大所造の物質の籠を出づること能はざるをいふ。

【二】世禪の中次に根本淨禪を明す而してまた初めに六妙門を解するなり。

【六妙門】根本淨禪に三あり。一に六妙門、二に十六特勝、三に通明禪なり。六妙門とは數五（蒲六數妙門乃至淨

を修すること易し。此れ即ち四無量定を修するの處所なり。復次に修する時、前人の離苦、得樂、歡喜、平等の相を緣じて、而も定に入る。發する時内に喜、樂、平等の法を得、外前人の離苦得樂を見る。或は内に得て外は見ず、或は外に見るも内に得ず。邪正を分別するは云云。行人、色籠を出でんと欲せば、四空定を修すべし。色を滅して心を存し、心心相依る、故に四空と名く。方便とは、須く訶すべし、色は是れ苦の本なり、饑渴寒熱は色を苦聚と爲すと。空を讃じては淨妙と爲す。諸の逼迫を離る。一切の色を過ぎて空定と相應せば、不苦不樂倍更に增長す。深定の中に於て唯虛空を見て、諸の色相無く心に分散無し。復次に空定を得るが故に色界を出過す、故に一切の色相を過ぐと名く。空法、心を持ちて種種の諸色起ることを得ざるが故に、有對の相を滅すと名く。已に空定を得、決定して能く色法を捨して憶戀せざるが故に、種種の色相を念ぜずと名く云云。下を訶して上を攀づるに皆方便有り、委しくは禪門に在り云云。根本味禪を竟りぬ。

(二)根本淨禪は不隱沒なり、無垢なり、有記なり、上と相違す。此れ又三品あり、六妙門と、十六特勝と、通明等を謂ふ。涅槃は是れ妙なれども、此六能く通ず、故に六妙門と言ふなり。此三法は三根性の爲なり。慧性多からんには爲に六妙門を說く。此一一の門は、欲界の中に於て即ち能く無漏を發するなり。若し定性多からんには、爲に十六特勝を說く。故に下地に無漏を發せず、上地に禪滿じて乃ち能く悟を得。定慧性等しからんには爲に通明を說く、通明は觀慧深細にして、下より上に至りて皆能く無漏を發す。此は是れ隨機の

數等)隨、止、觀三(惠等)轉、淨を云ふ。之れ眞理の涅槃に入るの門なり

【十六特勝】身の五(知息入等)受の三(心受喜等)心の三(心作喜等)法の五(觀無常四禪等)を云ふ。之れ無漏の善業を發して自害の失を除くしが故に名く。

【通明禪】息、色、心の三無差別を觀ず。

說なり、若し對治を作さば則ち復別途なり云云。若し廣く修習を明さば則ち一切の諸禪を攝す、今は但次第相生する一轍の豎の意なり。此六門を修するに、修證合論すれば則ち十二の法有り。佛の言はく、「三四に遊止して十二を出生す」と。即ち此れ數を修し數を證し、乃至淨を修し淨を證す。數を修すとは、行人初め氣息を調和して澁ならず滑ならず、安詳として徐に數へ、一より十に至る。攝心數に在りて馳散せしめず、是を數を修すと名く。數と相應すとは、覺心任運に一より十に至り、功力を加へざれば心自ら數に住す。息微に心細なる、是を數を證すと名く。若し數の麤なるを患へば、當に數を放ちて隨を修すべし。乃至淨も亦各是の如し。然るに觀に三義有り、一には慧觀なり、眞を觀ず。二には得解觀、即ち假想觀なり。三には實觀なり。此中初に實觀を用ひ、後には慧觀を用ふ。實觀を修すとは、定心の中に於て、心眼を以て諦かに此身を觀ずるに、細微入出の息の相、空中の風の如し、皮肉筋骨三十六物は、芭蕉の實ならざるが如く、內外の不淨なること甚だ厭惡すべし。復定中の喜樂等の受を觀ずるに、悉く破壞の相有り、是れ苦にして樂に非ず。又定中の心識を觀ずるに、無常にして刹那も住せず、著すべき處無し。復定中の善惡等の法を觀ずるに、悉く因緣に屬して皆自性あること無し。是の如く觀ずる時は能く四倒を破す、人我を得ざれば定何の依る所かあらん、是を修觀と名く。是の如く修する時、息の出入諸の毛孔に徧きを覺る。心眼開明して身內の三十六物、及び諸の蟲尸、內外不淨なるを徹見す。衆苦逼迫し、刹那に變易す。一切の諸法悉く自性無きを見る、心に

【三】十六特勝を釋す。

【四】通明禪を釋す。

悲喜を生じて依倚する所無し。四念處を得て四顛倒を破す、是を觀と相應すと名く。具に記すること能はず云云。佛、樹下に坐して內に安般を思ふ、一には數、二には隨等なりとは、正しく是れ此禪なり。

(三)十六特勝とは、名を釋すること云云。此れ因緣に從つて名を得るなり。修相とは、息入を知り息出を知るは、此れ數息に代ふ。息を調ふること綿細にして一心息に隨ひ、入る時は鼻より臍に至ると知り、出づる時は臍より鼻に至ると知り、照に隨つて亂ぜず。風、喘、氣を知るを麤と爲し、息を知るを細と爲す、麤に入れば即ち調へて細ならむ。守門の人の、入るを知り出づるを知りて、惡は遮り好は進むるが如し。澁滑、輕重、冷煖、久近難易皆知るべし。息は命の所依たり、一息還らざれば即便ち命盡くと知り、息と命とは危脆無常なるを覺りて愛慢を生ぜざれ。息は我に非ずと知れば、即ち見を生ぜず。若し知息長短は欲界定に對し、知息徧身は未到定に對し、除諸身行は初禪覺觀に對し、受喜は喜支に對し、受樂は樂支に對し、受諸心行は一心支に對し、心作喜は即ち喜と俱なる禪なり。心作攝は即ち二禪一心支なり、心作解脫は即ち三禪樂なり、觀無常は即ち四禪不動なり、觀出散は即ち空處なり、觀離欲は即ち識處なり、觀滅は即ち無所有處に對し、觀棄捨は非想非非想處に對す。觀棄捨の時即便ち三乘の涅槃を獲得す。若し橫に觀慧を論ずれば即ち四念處に對す云云。

(四)通明禪とは、行者、息、色、心を觀じて三事分別すること無し。諦かに出入の息を觀ずる

に、人に積聚無く、出に分散無く、來に經る所無く、去に履涉無し。空中の風の如く、性に所有無し。息は本身に依る、身本より有ならずして先世の妄想今の四大を招き、虛空を圍みて假に名けて身と爲す。頭等の六分、三十六物、四微一一身に非ず。身を觀ずるに心に由る、心は緣に由りて起る。生滅迅速にして住處相貌を見ず、但名字のみ有り、名字も亦空なり。是の如くに息、色、心を觀ずるに二性の別異を得ず、既に三事を得ざれば即ち一切の法を得ず。此は是れ修相なり。證とは內に眞諦の空を證す、觀の解の如し。次第に此身を通達して色と息と分明なり、亦世間の天文地理の身と相應することを知る。能く三界の禪定を具し、能く非想に細煩惱有るを知り、惑を破して眞を發し三乘の涅槃を得。委しくは禪門に在り。世間禪を竟りぬ。

(五)二に出世間禪を明さば即ち四種有り、觀、練、熏、修を謂ふ。觀とは、謂はく九想、八背捨、八勝處、十一切處を、通じて觀禪と稱す。行人婬火を破せんが爲には、必ず須く想を增し純熟すべし。所觀の時に隨ひて定と相應す、想と定と心を持し心に分散無く、能く世間の貪愛を除く。六種の欲を破す、有人は赤白黃黑等の色に著し、或は相貌の端嚴なるに著し、或は威儀姿態に著し、或は語言嬌媚に著し、或は細滑なる肌體に著し、或は可意の人に著す。此六欲の淵に行者を沈沒す、能く九想を修して此六賊を除くべし。死想は威儀言語の兩欲を破し、脹想、壞想、噉想は形貌欲を破し、血塗想、靑瘀想、膿爛想は色欲を破し、骨想、燒想は細滑欲を破す。九想通じて所著の人欲を除き、又噉想、散想は著意

【五】定聖行の中次に出世間禪を釋す。即ち初に名數を標列し、次に先づ觀禪を明す。

【八背捨】八勝處、十一切處と共に三法と稱し之の三は三界の貪愛を遠離する出世間禪なり。內有色想觀外色解脫初禪乃至滅受想背捨を八背捨と云ふ。

【八勝處】內有色想觀外色少乃至靑黃赤白を云ふ。

【十一切處】地水火風乃至識無邊處を云ふ。

の人を除く。此九旣に欲を除き、亦瞋癡を薄くし、九十八使の山動ずるなり。是れ不淨の初門なりと雖も能く大事を成ず、海中の屍の之に依りて度を得るが如し云云。八背捨の名は云云。淨潔の五欲に背き著心を捨離す、故に背捨と名く。修とは、行人、持戒清淨にして大誓願を發し、大事を成さんと欲せば、身を端し心を正しくして、諦かに足の大指を觀じて、大豆の黑脹皺起するが如しと想へ。此想成ずる時は更に進んで貍豆の大の如く、更に一指の大の如く、更に雞卵の大の如し。次に二指、三、四、五指なり。次に趺底、踵、踝、腨、膝、髀、髖を觀ずるに、悉く膖脹を見る。次に右脚を觀ずるも亦是の如し。復當に大小の便道、腰、脊、腹、背、胸、脅悉く膖脹すと想ふべし。又右の髀、臂、肘、腕、掌、五指を觀じ、又頭、頷等を觀ず。足より頭に至り、頭より足に至り、循身觀察して唯膖脹を見るに、心厭惡を生ず。復當に壞、膿、爛を觀ずべし。大小の便道より蟲膿流出し、臭きこと死狗よりも劇し。已身旣に爾り、所愛の人を觀ずるに亦復是の如し。內に見我を破し、外貪愛を破す。久住觀察すれば世の貪愛を除く。次に皮肉を除却し、白骨を諦觀す。骨の色相の異なるを見て、靑、黃、白、鴿を謂ふ、是の如きの骨相は亦復我無し、此觀を得る時を欲界定と名く。次に骨の靑を觀ずる時、此大地、東西南北悉く皆靑相なるを見る。黃、白、鴿色も亦復是の如し。此は是れ未到の相なり。又骨人を觀ずるに眉間より光を出し、光の中に佛を見るは、是れ初背捨の成ずる相なり。是の如く次第に乃至入背捨の發する相は、具に禪門の如し云云。八勝處とは、初の兩勝處は位初禪に在り、三と四との兩勝處は位二

【六】次に練禪を明す。

【七】之より下熏禪を明す。

【師子奮迅三昧】佛、此三昧に入れば大悲法界の身を奮ひ大慈の根門を開き應機の成を現じ外道二乘の小獸を攝伏せしむるを云ふ。

【八】修禪を明す

【九】以上の四また八背等を練熏修することを明し、乃至地の功能を結す。

禪に在り、後の四勝處は依四禪に在り。三禪は樂多く心鈍なり、故に立せず。前の背捨は緣の中多少に自在を得ず、是故に勝處に、更に淨細に少多好醜を觀察して、悉く勝知勝見ならしむ。快馬の能く障を破り、亦能く自ら其馬を制するが如し云云。十一切處とは、八色兩心更に相涉入するを以て、廣普遍滿して轉變無礙なり。具には禪門の如し云云。

(六)練禪とは即ち九次第定なり。上來、八禪を得と雖も入に則ち間有り。今純熟して初禪より極後深に至らしめんと欲して、次第にして而も入るに、中間に垢滓間穢有ること無く、不次第の者をして次第ならしむ。故に次第と名く。亦是れ無漏を以て有漏を練りて、諸の間穢を除く、故に練禪と名く。亦是れ均しく諸禪を調へ、定慧をして齊平無間ならしむるなり。阿毘曇に熏練を明せども、但無漏を以て四禪に熏ずと言ふ。今無漏を以て通じて八地を練る、即ち是れ次第に無間三昧に入る。

(七)熏禪とは即ち師子奮迅三昧なり。前は是れ次第無間に入る、今亦是れ次第無間に入り、亦能く次第無間に出づ。其間及び法愛味塵を除くこと、猶師子の能く卻き能く進みて、一諸の塵土を奮ふが如し。行者、此法に入出して、能く徧く諸禪熏じ、悉く通利にして轉變自在ならしむ。皮熟を熏じ、意に隨つて物を作るが如し。

(八)修禪とは超越三昧なり。近遠超入し、近遠超出し、近遠超住す。是禪は功德最も深し、故に頂禪と名く。諸の法門に於て自在に出入す云云。

(九)又九次第定は善く八背捨に入り、奮迅は善く八背捨を出で、超越は善く八背捨に住す。

【無作の色】戒法は無作色てふ色法を戒體と爲すが故にかく名く。

善入出住百千三昧とは即ち此意なり。譬へば畫師の五彩相淡して無量の色を出すが如く、世間の果の但四大を以て一切の五陰を出すが如し。定法も亦爾り、但觀、練、熏、修を以て、一切の神通變化を出生す、種として備はらざること無し。大經に云はく、「菩薩は禪に住して堪忍地を得」と。地は能く持し能く生ず。一一の禪の中に、皆慈悲誓願道品六度の諸行有りて具足せざること無し。何となれば、若し戒定の中に於て觀慧を明すは即ち共念處なり、單に觀を論ずるは是れ性念處なり。通じて戒定等、境智文字等を取るは是れ緣念處なり。又不淨觀は淨顚倒を破す、是れ身念處なり。諸禪の中の心受苦樂、三世の內外、受不可得なりと觀じて、樂顚倒を破するは是れ受念處なり。諸の禪心は心有るを以ての故に、善惡を造作す。心無ければ則ち作者無きを觀じて、我顚倒を破するは是れ法念處なり。心は生滅して前後際斷すと觀じて、常顚倒を破するは是れ心念處なり。復次に八背捨は四念處を觀じ、九次第定は四念處を練り、奮迅は四念處を熏じ、超越は四念處を修す。二乘は自の滅度の爲に、此五禪を修し、四種の念處を成ずれば、堪忍地と名けず。菩薩は衆生を化せんが爲に深く念處を觀じ、慈悲誓願を以て衆生を荷負し、四種の念處を成ず。是れ摩訶衍なり、堪忍地と名く。

問ふ、「無色無身に云何が四念處を具するや。」答ふ、「毘曇に云はく、『無色に道共戒有り、戒は是れ無作の色なり。無漏の緣通するを以ての故に、此戒色は無漏に隨つて無色に至る』と。成論の人の云はく、『色は是れ無教の法なり、無色に至らず』と。舍利弗毘曇に

云はく、「無色に色有り」と。當に知るべし、小乘に義を明すは即ち兩意有ることを。大經に云はく、「無色界の色は諸の聲聞の知る所に非ず」と。若し爾らば、四念處の無色に通ずること、亦復何ぞ妨げんや。問ふ、「諸禪の中但念處を明すことを得て、尙正勤無し、云何ぞ道品を具せんや。」答ふ。「位に約して言を爲さば、念處に從品無し。修行に義を爲さば、念處に道品を具す。大論に云はく、「初め善の有漏の五陰を修し、有爲法の中に於て正憶念を得るは、即ち念處の智慧なり。四種の精進は即ち是れ正勤なり、定心の中に修するを如意足と名く、五善根生ずるを名けて根と爲し、根の增長するを名けて力と爲し、道用を分別するを名けて七覺と爲し、安穩道の中に行ずるを八正道と名く。初の善有漏の中に已に能く此を具す、何ぞ見道に方に八正のみ有るべけんや。若し念處に既に三十七品を具せば、煖、頂等も例して然なり。觀禪既に爾り、練、熏、修等も亦然なり。然るに菩薩は一一の禪の中に於て、所入の法門に隨つて衆生を慈悲し、父母の食を得て其子を忘れざるが如し。癡闇のもの內に從ひて自ら樂を求めずして、他に從つて外に求め、五欲に耽荒して苦を求め、得ては怖れ失しては憂へ、諸欲樂しみ無きを愍傷す。此が爲に悲を起すなり。夫れ欲の患ひ是の如し、何ぞ能く之を去らん。禪定の樂を得ば則ち爲に欺かれず、是故に慈を起すなり。四弘誓有り。又諸禪の中に六度を修すとは、衆生は世間の生活業務に縛著して暫くも捨つること能はざれども、菩薩は之を棄てて一心に禪に入る、是を檀と名く。若し戒を持たずんば禪定發せじ、又禪に入る時は雜念起らずして任運に惡無し、是

【一〇】定理行の中第三に出世間上上禪を明す。

【一一】定理行に就いて麤妙を判じ麤を開して妙を顯す。

れ尸なり。身口を拘撿して捍勞忍苦し、外塵を制して著せず、內入を抑へて起らしめざるは、是を忍と爲す。初中後夜に繫念相續し、行住坐臥にも心常に定に在りて間念を生ぜざるは、是を精進と名く。一心定に在りて亂ぜず味せざるは、名けて定と爲す。若し一心定に在りて能く世間の生滅の法相を知り、深く邪僞を識るを般若と名く。一切の業行皆禪の中に於て具足す、一一の禪の中に能く諸の功德を生じ、慈悲荷負す。是故に堪忍の地と名くることを得るなり。

【一〇】三に出世間上上禪とは、卽ち九種の大禪なり。地持に釋する所の如し、今具に論ぜず。自性禪とは、卽ち是れ心の實性を觀ずるを名けて上定と爲す。一切の諸法は心に由らざる者有ること無し、心に一切を攝すること如意珠の如し。此九の大禪は皆是れ法界なり、一切は禪に趣き、境に造るに卽ち眞なり、一色一香も中道に非ざるは無し。二乘は尙其名をも知らず、況や其定を證するをや。

【一一】前の根本味禪は乳の如く、練禪は酪の如く、熏禪は生蘇の如く、修禪は熟蘇の如く、九の大禪は醍醐の如し。醍醐を妙と爲す。復次に根本禪の、愛味の心中に修するは卽ち乳と爲り、自度の心中に修するは卽ち酪と成り、慈悲の心中に修するは卽ち生蘇と成り、慈悲の次第の心中に修するは卽ち熟蘇と成り、實相の心中に修するは卽ち醍醐と成る。餘の四味も亦是の如し。若し實相の心を以て修せざるは、皆名けて麤と爲す。若し麤を開して妙を顯はさば、阿那波那は卽ち是れ摩訶衍なり。法界實相は諸法を攝持す、此を離れて外更

【三】聖行の中、第三に慧聖行を明す。而して今初に生滅四諦の慧を釋す。

に別の妙あること無し。故に知んぬ、諸禪の支道、諸法門、入涅槃は皆四諦に在ることを。四諦の中に實相を見るを摩訶衍と名く、何に況や餘定をや。此れ即ち絶待妙の義なり。

定聖行竟りぬ。

三に慧聖行とは、四種の四諦の慧を明す云云。生滅の四諦の慧とは、還つて九想背捨を觀するに、依正の兩報膖脹爛壞して不淨の色なり、是れ苦道の相、現の相、三苦の相なり。是れ苦諦の慧なり。迷を起し依正に著するを以て恩愛の奴と作り、身口を運動して三品の十惡業を起し、三途等の生を感ずるは、生長の相、轉の相、二十五有の相なり。又世間の因果、不淨の過患を知りて深く厭離す、他を殺して己を活し、彼を奪つて身を潤し、不淨に耽湎し、曲を隱し直を求め、怨親を離合し榮辱を開構し、內諂ひ外佞り、引納度無く、毒を縱し道を傷り、邪僻して眞を失せず、不淨を爲し十惡業を作らず、慚愧羞恥し、三品の十善を行じ三善道の生を感ず。亦是れ生長の相、轉の相、二十五有の相なり。是れを集諦の慧と名く。依正の不淨を觀じて淨顚倒を破し、諸受即ち苦なりと觀じて樂顚倒を破し、諸行の和合を觀じて我顚倒を破し、諸心の生滅を觀じて常顚倒を破す。別相、總相、善巧の正勤、如意、根、力、覺、道は涅槃の門に向ふ、慈悲誓願六度の諸行等は即ち大乘の相なり、亦是れ滅定慧の相なり、亦是れ能除の相なり。是を道諦の慧と名く。倒起らざれば則ち業起らず、業起らざれば即ち因起らず、因起らざるが故に果起らず、是を寂滅の相と名く。亦二十五有滅の相なり。亦除相と名く。是を生滅の四諦の慧と爲す。

〔一三〕慧聖行を說く中、次に無生の四諦の慧を明す。

〔一四〕慧聖行の中第三に無量の四諦の慧を明す。

〔一三〕無生の四諦の慧とは、不淨色を觀ずるに色性自ら空なり、色滅して空なるに非ず、鏡中の像の眞實有ること無きが如し。洞かに五受陰は空にて所有無しと達し、苦に苦無しと解して而も眞諦有り、是れ苦諦の慧なり。集は心に由るも、心幻化の如ければ、所起の集も亦幻化の如し。一切の愛見は虚空と等しと知る、是を集諦の慧と名く。道は本集を治す、所治既に幻化の如ければ能治も亦幻化の如し、是を道諦の慧と名く。法若し生有れば亦滅有るべし、法本生ぜざれば今則ち滅せず。若し一法の涅槃を過ぐる者有らば、我亦幻化の如しと說く、是を滅諦の慧と名く。五陰衆生は虚空の如しと知ると雖も、而も誓ひて如空の衆生を度す。集は所有無しと知ると雖も、而も諸の妄想を斷ずること、空と共に鬪ふが如し。道は二相に不ずと知ると雖も、而も勤めて空の中に樹を種う。衆生の滅度を得る者無しと雖も、而も無量の衆生を滅度す。此れ事に即して而も眞なるに約して、道品六度等を論ず云云。是を無生の四諦の慧と名く。

〔一四〕無量の四諦の慧とは、大經に云はく、「佛四諦を說きて若し法を攝すること盡くさば、則ち說かざる所の者十方の土の如しと言ふべからず。法を攝すること盡さずんば、應に五諦有るべし」と。佛の言はく、「四諦に攝し盡す、第五の諦有ること無し。但し苦に無量の相有り、集滅道等も皆無量の相有り。我彼經に於て竟に之を說かず」と。若し是れ空ならば、空尚空無し、云何ぞ無量ならん。當に知るべし、出假分別の慧なり。此慧偏く十法界の假實の差別を知るを、苦諦の慧と名く。徧く五住の煩惱の不同を知るを集諦の慧と名け、徧

【一五】慧聖行の中第四に無作の四諦の慧を明す。

く半滿正助等の行を解するを道諦の慧と名け、半滿十六門の諸滅門の不同を解するは是れ滅諦の慧なり。二乘は但四諦の藥を服して、見思の病を治し自ら生死を出づるも、分別に於ては則ち闇なり。菩薩は大醫王と作る、須く種種の脈を診て種種の病を識り、種種の藥を精びて種種差ゆることを得るを解すべし。此に約して種種の慈悲を起し、種種の行、諸度道品を行じて、種種の衆生を成じ種種の佛土を淨む。廣く說くこと止觀の如し云云。是を無量の四諦の慧と名く。

無作の四諦の慧とは、解惑の因緣に而も四を成ずるなり。大經に云はく、「寶珠體に在るも謂つて失去すと呼んで、憂愁啼哭す」と。但其體及び瘡をのみ見て、寶珠及び鏡を見ず。唯憂悲有りて復歡喜あること無し、此れ道滅に迷ひて苦集を起すなり。若し瘡體即ち是れ寶珠なりと解すれば、則ち喜びて哭せず。無明を滅するに因りて、即ち熾然たる三菩提の燈を得。此解悟の因緣即ち是れ道滅なり。道滅即ち苦集、苦集即ち道滅なり。若し爾らば則ち四といへども四に非ず。四既に四に非ざれば、無量も亦無量に非ず。無量既に無量に非ざれば、則ち假も假に非ず。假といへども假に非ざるが故に、則ち空といへども空に非ず。何ぞ但即空非空なるのみならん、亦即ち假も假に非ず、雙亡正入し、即ち寂照雙流す。大品に云はく「一切種智は即ち寂滅の相なり、種種の行類相貌皆知るを一切種智と名く」と。寂滅相は即ち是れ雙遮雙亡なり、行類相貌皆知るとは即ち是れ雙流雙照なり。無心に亡照し、任運に寂知す、故に不可思議と名く、即ち無作の四諦の慧なり。大經に云

【二六】無作の四諦の慧を釋する中、次に觀成じて行願等を具することを明す。

【八風】利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂の八は世間人心を動かせばなり。

はく、「苦無く諦無くして實有り、集道滅無く諦無くして實有り、實は即ち中道如來虛空佛性なり」と。

此の如く觀ずる時、無緣の慈悲、二邊の苦を拔き中道の樂を與ふ。色は淨に非ず不淨に非ずして、即空即假即中なりと修す、枯に非ず榮に非ずして中間に滅を論ず、一切の道品具足せざること無し。徧く十法界の依正を捨つるを檀と名け、中道の道共、尸の彼岸に到るを戒と名け、寂滅忍に住して二邊に動ぜざるを忍と名け、二邊間はらざるを牢强の精進と名け、王三昧に入り首楞嚴に住するを禪と名け、實相般若を智慧と名け、無謀の功用を方便と名け、八自在の我を力と名け、無記化化禪を願と名け、三智一心の中に得るを智と名く。一波羅蜜に十を具し、亦一切の佛法を具す。一行無量行、無量行一行なり、是れ如來行なり。是を無作の四諦の慧と名く。此慧を修する時即ち無所畏地に住することを得。即ち初歡喜地なり。五怖畏を離るとは、不活畏と、惡名畏と、死畏と、惡道畏と、大衆威德畏とを謂ふ。大經に云はく、「貪欲恚癡を畏れずとは、此れ内に三毒無く外八風を離るれば、則ち惡名畏あること無し。若し地獄等を畏れずと言ふは、即ち惡道畏無し。若し沙門婆羅門を畏れずと言ふは、即ち大衆畏無し。中道を見るときは則ち二死畏無く、實相の智慧常命立すれば不活畏無し」と。此地に入ることを得て二十五三昧を具し、二十五有を破し、二十五有の我性を顯はす。我性即ち實性、實性即ち佛性なり。佛の知見を開し、眞の中道を發し、無明の惑を斷じて眞應二身を顯はし、緣感すれば即ち應ず。百佛世

界に十法界の身を現じ、三世の佛智地に入りて能く自利利他する眞實の大慶を、歡喜地と名く。此地に四德を具足す、二十五有の煩惱を破するを淨と名け、二十五有の業を破するを我と名け、二十五有の報を受けざるを樂と名け、二十五有の生死無きを常と名く。常樂我淨を名けて佛性顯はると爲すは、即ち此意なり。地持に謂はく、「五怖畏を離る」とは、無我智を修すれば我想生ぜず、云何ぞ當に我愛、樂具愛有るべけんや。是れ不活畏を離るるなり。他人に於て求欲する所有らず、常に一切衆生を饒益するは、是れ惡名畏を離る。我見我想に於て心不生なるは、是れ死畏を離る。此身命終して、未來世に於て必ず佛菩薩と共に會するは、是れ惡道畏を離る。世間を觀ずるに與等の者無し、況や復過上をや、是れ大衆畏を離るるなり。十地經も亦同じ、十地論の解に云はく、「是中の第一は身に依り、第二は口に依り、第三と第四は身に依り、第五は意に依る」と。活とは、依身所用の衆具の能く生を資くるを資生と名け、生を活と爲す。此れ因中に就いて果を說く。菩薩は是畏無し。復次に名字言說は皆口失に依る。名を護るに利養の爲にせず、心に他人の恭敬を悕望せず、故に惡名無しと名く。第五は意に依りて解すべし、三と四とは身に依る、善道を愛して惡道を憎めば、身を愛憎すること無し、かるが故に惡道畏無きなり。亦身を愛憎せざるが故に死畏無し。

私に謂はく、貪欲等を畏れざるは、無作の集壞す。惡道を畏れざるは、此れ無作の苦壞と名く。大衆を畏れざるは、此は是れ無作の道立す。不活無く死畏無きは、此は是れ性を

【一七】大經に約して廣く二十五三昧を明すに、初に通別名の意を釋し次に通意を釋す

【一八】二十五三昧を各各別釋する中初に無垢三昧を明す。

見常を得て無作の滅立す。復次に二十五有を破するは、有能く果を含ず。有破するが故に集諦壞し、果破するが故に苦諦壞す。二十五三昧を得るは道諦立し、二十五有の我性を見るに、我性即ち佛性なれば滅諦立す。二十五有を破すれば則ち煩惱無し、是れ淨德なり。二十五有の果を破するが故に苦無きは、是れ常德なり。二十五三昧を得るは是れ樂なり、二十五の我性を見るは是れ我なり。四德宛然たり矣。

（一七）今二十五三昧の名を釋するに、四悉檀の意に依る。一には時に隨つて趣に立つ、人の多子なるに、各一名を立てて兄弟をして濫ぜざらしむるが如し。二十五三昧も亦復是の如し、各一名を舉げて世諦をして亂せざらしむ、豈定執すべけんや。二には其義便に隨ふ、各所以に隨つて而も一名を立つるなり。三には事に隨つて對當す、各主として治するところ有れば、對に從つて名を得。四には理實に名無けれども、而も理に依つて字を立つ。四意有りと雖も多く對治を用ひ、理に約して以て二十五三昧を立つるなり。通じて二十五を釋するに各四意と爲す、一には諸有の過患を出し、二には本法の功德を明し、三には行を結して三昧を成じ、四には慈悲を以て有を破す。一一に皆爾り。

（一八）地獄の有に無垢三昧を用て破するは、地獄は是れ重垢報の處なり、報因は則ち是れ垢なり、惡業垢、見思垢、塵沙垢、無明垢を謂ふ。一其菩薩は先に是過を見て、諸垢を破せんが爲、前來明す所の根本藏を修して惡業の垢を破す。前來明す所の背捨等の定を修して見思の垢を伏し、前來明す所の生滅無生滅の慧を修して見思の垢を破す。前來明す所の無量の慧を

【婆藪、調達】婆藪は婆羅門の中に初めて殺生を倡して、生き乍らにして地獄に墮し、後無量劫を經て華聚菩薩の大光明力に依り地獄より脫して釋迦佛の許に至り佛之が爲に大方便力を說く。調達とは提婆達多のこと。斛飯王の子にして釋尊の從兄弟なり常に釋尊に敵對し五逆罪を犯して生き乍ら墮獄せりと傳ふるも、法華經にては佛之に天王如來の記別を與へたまへり。

【一九】第二に不退三昧を釋す。

修して塵沙の垢を破し、前來明す所の無作の慧を修して無明の垢を破す。其見思の垢を破するが故に眞諦三昧成じ、惡業の垢、塵沙の垢を破するが故に俗諦三昧成じ、無明の垢を破するが故に中道王三昧成ず。其菩薩自ら地獄の諸垢を破する時、句句皆慈悲誓願有りて冥に法界に熏ず。彼地獄の有に、若し機緣有りて慈悲に關はれば、王三昧の力を以て法性不動にして、而も能く之に應ず。婆藪調達の如き、宜しき所の身を示し、宜しき所の法を說く。彼地獄の中に若し善機有れば、持戒の中の慈悲を以て之に應じて、離苦得樂せしむ。入空の機有れば、生無生の慧等の慈悲を以て之に應じて、眞諦を得せしむ。入假の機有れば、無量の慧の慈悲を以て之に應じて、俗諦を得せしむ。入中の機有れば無作の慧の慈悲を以て之に應じて、王三昧を得せしむ。先に自ら垢無く、今他をして垢無からしむ、故に此三昧を無垢と名くるなり。下去例して此の如し、復委しく記せず。

（一九）畜生の有に不退三昧を用て破すとは、畜生は慚愧あること無くして善道を退失す。則ち是れ惡業の故に退し、見思の故に退し、塵沙の故に退し、無明の故に退す。菩薩は諸の退を破せんが爲、前の持戒を修して惡業の退を破し、禪定を修して見思の退を伏し、生無生の慧を修して見思の退を破し、無量の慧を修して塵沙の退を破し、無作の慧を修して無明の退を破す。見思破するが故に位不退を得、眞諦三昧成ず。惡業塵沙破するが故に行不退を得、俗諦三昧成ず。無明破するが故に念不退を得、中道三昧成ず。本諸行を修するに、皆慈悲誓願有りて冥に法界に熏ず。彼畜生の中に、若し機緣有りて慈悲に關はれば、

【二〇】第三に心樂三昧を明す。

王三昧の力を以て、法性を動ぜずして往いて之に應ず。宜しく何なる身を示すべく、宜しく何なる法をも說くべし。龍と爲り、象と爲り、鷄鳥大鵬となる。若し善機有れば戒定の慈悲を以て之に應じ、苦を出で樂を得せしむ。入空の機あれば生無生の慧の慈悲を以て之に應じ、有を出で無を得せしめ眞諦三昧成ず。入假の機有れば無量の慧の慈悲を以て之に應じ、空を免れ假を得せしめ、俗諦三昧成ず。入中の機有れば無作の慧の慈悲を以て之に應じ、邊を出でて中に入らしめ、王三昧成ず。菩薩は自ら既に退せず、他をしても退せざらしむ。故に不退三昧と名くるなり。

(二〇)餓鬼の有に心樂三昧を用て破するは、此有は常に饑渴に弊み、惡業の苦、見思の煩惱の苦、客塵闇障の苦、無明根本の苦有り。菩薩は此の諸の苦を破せんが爲、前の持戒を修して惡業の苦を破し、定を修して見思の苦を伏し、生無生の慧を修して見思の苦を破し、無量の慧を修して塵沙の苦を破し、無作の慧を修して無明の苦を破す。見思の苦を破して無爲心樂三昧成じ、惡業塵沙の苦を破して多聞分別樂三昧成じ、無明の苦を破して常樂三昧成ず。本行の慈悲を以て、冥に法界に熏ず。彼餓鬼道に、若し機緣有りて慈悲と相關はれば、王三昧の力、法性を動ぜずして而も往いて之に應じ、所宜の身を示し所宜の法を說く。若し善機有れば持戒の慈悲を以て之に應じ、手より香乳を出し、施して飽滿せしむ。入空の機有れば生無生の慈悲を以て之に應じ、無爲の岸に到らしむ。入假の機有れば無量の慈悲を以て之に應じ、五道に遊戲せしむ。入中の機有れば無作の慈悲を以て之に應じ、三毒の

【三二】第四に歡喜三昧を釋す。

【三三】第五に日光三昧を釋す。

【弗婆提】プールバビデーハ Pūrvavideha 身形勝るるが故に勝身と名く須彌山の東方に在る四大洲の一。

根を淨めて佛道を成ずること、疑無からしむ。菩薩は自ら既に樂を得、又他をしても樂を得せしむ、是故に名けて心樂三昧と爲す。

(三二)阿修羅の有に歡喜三昧を用ふとは、修羅は猜疑怖畏多し、則ち惡業の疑怖、見思の疑怖、塵沙の疑怖、無明の疑怖有り。菩薩は是諸の疑怖を破せんが爲、諸の行を修す。戒を修持して惡業の疑怖を破し、諸の禪定を修して見思の怖を伏し、生無生の慧を修して見思の怖を破し、無量の慧を修して塵沙の怖を破し、無作の慧を修して無明の怖を破す。見思破するが故に空法喜三昧を成じ、惡業塵沙破するが故に一切衆生喜見三昧を成じ、無明破するが故に喜王三昧を成ず。本諸行の慈悲誓願を以て、冥に法界に熏ず。彼修羅の中に、若し機緣有りて慈悲に關はれば、王三昧の力を以て、法性を動ぜずして而も往いて之に應じ、所宜の身を示し所宜の法を說く。善機の者有れば應ずるに持戒身の慈悲を以て惡業の怖を離れしめ、入空の機有れば、應ずるに生無生の慈悲を以て見思の怖を離れしめ、入假の機有れば、應ずるに無量の慈悲を以て無知の怖を離れしめ、入中の機有れば、應ずるに無作の慈悲を以て無明の怖を離れしむ。自ら三喜を證し、他をしても復三怖無からしむ、是故に歡喜三昧と名く。此より前は、悉く對治を用て名を立つ。

(三三)弗婆提の有に日光三昧を用て破するは、日は朝に東より出づれば、便に隨つて名とするのみ。日は智光の能く照して、迷惑を除くを譬ふ。東天下の人は惡業の闇、見惑の闇、塵沙の闇、無明の闇有り。菩薩は此諸闇を照さんが爲の故に、前の戒光を修して惡業の闇を照

【一三】第六に月光三昧を明す。

【瞿耶尼】アパラゴーダーニーヤ Apara-godāniya 須彌山の四域四大洲の一。西方にあり。牛を貿易するが故に牛貨と譯名あり。

【一四】第七に熱燄三昧を明す。

【鬱單越】ウッタラクル Uttara-kuru 須彌山の北方に位する大洲の名。四洲中に於て國土尤も勝るるが故に勝處と云ふ。

し、禪定の流光を修して見思の闇を伏し、一切智光を修して見思の闇を破し、道種智の光を修して塵沙の闇を破し、一切種智の光を修して無明の闇を破す。見思の闇を破するが故に一切智の日光三昧を成じ、塵沙の闇を破するが故に道種智の日光三昧を成じ、無明の闇を破するが故に一切種智の日光三昧を成ず。本行の慈悲誓願を以て、冥に法界に熏ず。彼弗婆提に、若し機緣有りて慈悲に關はれば、王三昧の力、法性を動ぜずして而も往いて之に應じ、身を示し法を說く。若し事善の機有れば持戒の慈悲を以て之に應じ、惡業の闇を免れしむ。入空の機有れば生無生の慈悲を以て之に應じ、見思の闇を免れしむ。入假の機有れば無量の慈悲を以て之に應じ、無知の闇を免れしむ。入中の機有れば無作の慈悲を以て之に應じ、無明の闇を免れしむ。自ら旣に闇を破し、亦他をしても闇を破せしむ、故に日光三昧と稱す。

(一三)瞿耶尼の有に月光三昧を用て破すとは、月は夕に初て西に現ず、亦便に隨つて名を立つ。月も亦闇を照すこと例して日光に同じ云云。

(一四)鬱單越に熱燄三昧を用て破すとは、北方は是れ陰地なれば氷結んで銷し難し。熱燄の赫照に非ざるよりしては、終に融冶せじ。北天下の人は無我に氷執して、化度すべきこと難し。若し智火慧燄に非ずんば、無我所の心終に得度せじ。彼無我所は乃ち是れ妄計にして、猶自性の人我、法我、眞如我有り。菩薩は諸我を破せんが爲、生滅、無生滅の慧を修して性人我を破し、無量の慧を修して法我を破し、無作の慧を修して眞如我を破す。入空を得て

【二五】第八に如幻三昧を釋す。

【二六】第九に不動三昧を明す。

【四天王】帝釋天の外將。六欲の第一にして天處の初なり。四天王天とは東は持國南は增長西は廣目北は多聞の諸天なり。

眞諦の智餤を成じ、法空を得て俗諦の智餤を成じ、眞如空を得て中道の智餤を成ず。本の慈悲を以て法界に熏じ、彼鬱單越に、若し機緣ありて慈悲に關はれば、王三昧の力を以て法性を動ぜずして而も往いて之に應じ、身を示し法を說く。善機有れば、應ずるに或の慈悲を以てして、妄計の無我を免れしむ。入空の機有れば、應ずるに生無生の慈悲を以てして、性我を免れしむ。入假の機有れば、應ずるに無量の慈悲を以てして、法我を免れしむ。入中の機有れば、無作の慈悲を以て之に應じ、眞如我を免れしむ。自ら妄我を破し、他をしても妄我を破せしむ。故に熱餤三昧と名くるなり。

〔二五〕閻浮提の有に如幻三昧を用て破すとは、南天下は果報雜はり、雜にして壽命等定まらず、猶幻化の如し。此れ則ち心より惑を幻出し、見思を幻出し、無知を幻出し、無明を幻出す。菩薩は諸幻を破せんが爲、持戒より無作を幻出して結業の幻を破し、禪定に從つて背捨を幻出し、生無生の慧に從つて無漏を幻出し、無量の慧より有漏を幻出し、無作の慧により非漏非無漏を幻出す。見思の幻破すれば眞諦の幻成じ、無知の幻破すれば俗諦の幻成じ、無明の幻破すれば中道の幻成ず。故に經に言はく「如來は是れ大幻師なり」と。彼閻浮提に、諸の機緣ありて誓願に關はれば、本の慈悲を以て、感に隨つて之に應ず。自ら諸幻を破し、他の諸幻を成ず、是故に名けて如幻三昧と爲す。餘は上に說くが如し。

〔二六〕四天王の有に不動三昧を用て破するは、此天は國土を守護し世界を遊行せば、則ち果報の動、見思、塵沙、無明等の動有り。菩薩は諸行を修して諸動を破し、三昧を成ず。誓願熏

じ、機緣感ずれば、本の慈悲を以て、他をして四動を破せしめ、三の不動を成ず。是故に不動三昧と名く、委悉なること上に說くが如し。

(二七)三十三天の有に難伏三昧を用ふるは、此は是れ地居の頂なれば、卽ち是れ果報伏し難く、見思、塵沙、無明等伏し難し。菩薩は諸行を修して其上に出で、諸の難伏を破し、自ら三昧を成ず。誓願他を熏じて、若し機緣有れば本の慈悲を以て、他をして證を得せしむ。是故に三昧を名けて難伏と爲す、餘は上に說くが如し。

(二八)燄摩天の有に悅意三昧を用て破するは、此天は空に處して刀杖戰鬪あること無し、之を以て悅と爲す。此は是れ果報の中の悅にして、而も未だ不動の業の悅有るにあらず。亦無漏、道種智、中智等の悅も無し。菩薩は諸の不悅を破せんが爲に、而も諸行を修し、自ら三諦の悅意三昧を成ず。誓法界に熏じて、機緣有れば本の慈悲を以て、他意をして悅ばしむ。是故に三昧を名けて悅意と爲す、餘は上に說くが如し。

(二九)兜率陀天の有に青色三昧を用て破するは、眞諦三藏の云はく「此天の果報は青を樂ひ、空殿服玩等一切皆青なり」と。菩薩は諸青を破せんが爲第一義を修し、青黃赤白に非ずして、而も青黃赤白を見る。第一義は戒定慧に非ずして、而も戒定慧なり。戒を以て果報の青を破し、生無生の慧を以て見思の青を破す。眞に非ずして眞を見、假に非ずして假を見、中に非ずして中を見ること、亦復是の如し。三の青障を破して自ら三諦の三青三昧を成じ、乃至感應して他の三昧を成ず。上に例して解すべし。

【二七】第十に難伏三昧を釋す。

【三十三天】忉利天のこと。欲界の第二天にて、須彌山の頂にあり、帝釋を中央として四方に各各八天あれば合して三十三天となる。

【二八】第十一に悅意三昧を明す。

【燄摩天】欲界天の第三重の天處。

【二九】第十二に青色三昧を釋す。

【兜率陀天】譯して上足、喜足、妙足、知足と云ひ、欲界の夜摩天と化樂天との中間に在りて下より第四重に當り內院を彌勒菩薩の淨土と爲す。

【三〇】第十三に黃色三昧、赤色三昧及び白色三昧の三種を明す。
【化樂天】六欲天の第五。
【他化自在天】六欲天の第六。
【三一】第十四に種種三昧を明す。
【梵王】大梵天王の異名にして色界十八天の總稱なり
【三二】第十五に雙三昧を釋す。
【三三】第十六に雷音三昧を明す。
【三四】第十七に注雨三昧を明す。
【四禪】四種の禪定を修して生ずる處の色界の四天處なり。初禪に梵衆、梵輔、大梵の三天あり、二禪に少光、

(三〇)黃色三昧は化樂天の有を破し、(三一)赤色三昧は他化自在天の有を破し、白色三昧は初禪の有を破す。皆是れ果報の白等なり、青色三昧に例して大意を解すべし。白色三昧は、初禪の五欲を離るるを白と爲す。未だ覺觀を離れざるが故に是れ黑なり、見思、塵沙、無明等の黑なり。此諸の黑を破して諸行の白を修し、自ら三昧を成じ、又他の三昧を成ずること、上に說くが如し。

(三一)種種の三昧を以て梵王の有を破すとは、(三二)梵王は大千界を主領し種種に多し、即ち是れ果報種種なり、未だ種種の空、種種の假、種種の中を見ず。此種種を破して種種の行を修し、自ら種種を成じ、亦他の種種をも成ず。上に說くが如し。

(三二)二禪は雙三昧を用ふるは、二禪獨り內淨と喜との兩支有り、餘支は餘禪と共に共ず。此れ即ち果報の雙なり、而して未だ雙空、雙假、雙中を見ず。例して上に說くが如し。

(三三)三禪は雷音三昧を用ふるは、此禪は樂最も深くして、氷魚蟄蟲の如し、是れ果報に著樂するなり。又空樂、假樂、中樂に著す。諸樂を驚駭せんが爲、諸の雷音の行を修す、餘は上に說くが如し。

(三四)四禪に注雨三昧を用ふるは、四禪は大地の如く、種種の種子を具す。若し雨を得ずんば、芽生することを得じ。一切の善根は四禪の中に在り、業の種、三諦の種を謂ふ。諸行の雨を修し、自ら三昧を生じ、慈悲、機に應じて他の三昧を生ず云云。

(三五)無想天の有に如虛空三昧を用ふるは、外道は空に非ざるを妄りに涅槃と計す。謂はく果

無量光、光音の三天、三禪に少淨、無量淨、徧淨の三天、四禪に無雲、福生、廣果、無想、無煩、無熱、善見、善現、色究竟の九天あり。已上の十八天は總て欲界のもの麤散をはなれたるも猶色法の爲に籠めらる。故に色界と名く。

【三五】第十八に如虛空三昧を釋す。

【無想天】無想有情の天處なり。

【三六】第十九に照鏡三昧を明す。

【阿那含天】五淨居天と同じ、第四禪天に在り、聖賢果の聖者の生るる處。

【三七】第二十に無礙三昧を明す。

【空處等】無色界の四天にして既に色法を遠壞し已つて唯四陰のみあり。故に無色界と名く。上品の十善を行じ兼て禪定を修せる

報は空に非ず、三諦は皆虚無に非ず。諸の空淨の行を修して自ら成じ、他を成ず云云。

(三六)阿那含天に照鏡三昧を用ふるものは、此れ聖無漏の天なり、淨色を得と雖も但是れ報の淨色なり、未だ色空を究盡せざれば、鏡の未だ極明ならざるが如し。未だ色假を知らざること、鏡の未だ影有らざるが如し。未だ色中を知らざること、未だ鏡の體に達せざるが如し。餘は上に說くが如し。

(三七)空處に無礙三昧を用ふるは、此定は色籠を出づることを得れば、即ち果報無礙なれども、未だ是れ空假中等の無礙にあらず。餘は上に說くが如し。

(三八)識處に常三昧を用ふるものは、此定は、謂はく心相續して斷ぜざるを常と爲す、此れ乃ち定假なり、三無爲の常、化用の常、常樂の常に非ず。例して上の如し云云。

(三九)不用處に樂三昧を用て破するは、此處は癡の如し。癡の故に是れ苦、乃至無明の苦あり。例して上の如し云云。

(四〇)非想非非想に我三昧を用て破するは、頂天は是れ涅槃の果報なりと謂へども、猶細煩惱有りて自在ならず、乃至無明ありて自在ならず。修行して之を破し、眞我、隨俗の我、常樂の我を得ること、例して上の如し云云。

(四一)此二十五皆三昧と稱するは、調直定なり。眞諦は空無漏を以て調直と爲し、出假は稱機を以て調直と爲し、中道は二邊を遮するをもつて調直と爲す。故に皆三諦を具すれば、則ち通じて三昧と稱す。又王と稱ふは、空假の調直は未だ王とすることを得ず。所以に二乘

者は此果報を受く
【三八】第二十一に常三味を明す。
【三九】第二十二に樂三味を明す。
【四〇】第二十三に我三味を明す。
【四一】上の二十五三味に就いてその通名を釋し、總じて妙用を以て之を結す。
【四二】廣く二十五三味を明す中。終に問答料簡して疑ひを釋す。
【四三】別教次第の五行を釋する中、第二に梵行を明す

の入空、菩薩の出假は法王と名けず。中道の調直の故に王と稱することを得、一一の三昧に皆中道有れば、悉く稱して王と爲す、大經に云はく、「是二十五三昧を諸の三昧の王と名く」と。即ち其位高き義なり。若し是三昧に入れば、一切の三昧悉く其中に入るとは、即ち其體廣の義なり。二十五有の機に應ずるは、即ち其用長なり。無畏地の中に具に二十五三昧の種種の力用を得。須彌を芥に入れて草木を傷けず、毛孔に海を納れて龜魚を嬈さず。地獄に處すと雖も身心に苦無く、變通出沒するに動ぜずして而も達し、即ち其妙の義なり。蓋し乃ち菩薩の行成じて、能く其力有るなり。

(四二)問ふ、『三昧の有を破するは、乃ち是れ涅槃の文なり、何ぞ此を指することを得ん。』答ふ、「第三に云はく、『破有法王世に出現す。衆生の欲に隨つて而も爲に說法す』」と。四意の明文宛然として具足す。又涅槃は菩薩の破有を明し、此經は法王の破有を明すこと、彌く其義を顯はすなり。聖行を明し竟りぬ。

(四三)二に梵行とは、梵とは淨なり。二邊の愛見諍得無き、之を名けて淨と爲す。此淨法を以て衆生を與拔す、即ち是れ無緣の慈悲喜捨なり。菩薩は大涅槃の心を以て聖行を修し、無畏地を得、二十五三昧無方の大用を具す。爾時の慈悲は、是れ眞の梵行なり。餘の梵天所修の四無量心に非ず、亦三藏、通教の衆生緣、法緣等の慈悲に非ず。今の慈悲喜捨を以て衆行を熏修するに、成辨せざること無し。大經に云はく、「若し人有りて問ふ、誰か是れ一切の諸善根の本なりや」と。當に言ふべし、慈是れなりと。慈既に是れ行の本なり、故に

【十力】佛の有し給ふ十種の力能。即ち知是處非處智、知三世業報智、知諸禪解脫三昧智、知諸根勝劣智、知種種解智、知種種界智、智一切至所道智、知天眼無礙智、知宿命無漏智、知永斷習氣智。

【四無所畏】如來の德を顯はす。即ち一切知、漏盡、說障道、說盡苦道を云ふ。

【三十二相】應身佛の肉體上の特色を云ふ。即ち足安平、千輻輪乃至頂肉髻等之なり。

【四四】別教次第の第三行を釋する中、天行を明す。

【四五】別教次第の第四行を釋する中、嬰兒行を明す。

梵行と言ふ。若し圓に依りて語せば、亦大經の如し、慈は即ち如來、慈即ち佛性なり。慈若し佛の十力、四無所畏、三十二相を具せずんば、是れ聲聞の慈なり。若し具足するは是れ如來の慈なり。是慈即ち是れ大法聚なり、是慈即ち是れ大涅槃なり。慈の力弘深にして、一切の福德莊嚴を具す。故に梵行と名く。

(四四)三に天行とは、第一義天なり。天然の理は、此れ道前を語す。理に由りて行を成ずるは、此れ道中を語す。行に由りて理顯はるるは、此れ道後を語す。今は理に由りて行を成ずるに約す、故に天行と言ふ。菩薩は初地に入ると雖も、初地に住すべからず、所得有るを以ての故なり。上の十地の慧を修して、十重に眞修の門を發す。理に由りて行を成ずるを、名けて天行と爲す。天行は即ち智慧莊嚴なり。上佛道を求む、故に聖行、天行有り。下衆生を化す、故に梵行、病行、嬰兒行有り。

(四五)四に嬰兒行とは、若し福慧轉增すれば、實相開顯はる。作意して衆生を利益せずと雖も、任運に能く冥顯の兩益有り。天行の力に冥益有り、梵行の力に顯益有り。衆生に小善の機ありと雖も、菩薩の開發すること無ければ、生長することを得ず。慈善根の力は磁石の鐵を吸ふが如し、和光利行して能く衆生をして、菩薩の其習學に同ずるを見ることを得せしむ。漸く五戒十善、人天の果報、偈業の行を修す。又二百五十戒、觀、練、熏、修、四諦、十二因緣、三十七品を示して、二乘の嬰兒行に同ず。又六度を習ひて三阿僧祇百劫に相好を種ゑ、煩惱を柔伏する六度の菩薩小善の行に示同す。又色に即して是れ空なる無生

【四六】別教次第の五行を釋する中、第五に病行を明す

無記の善根の小善の行に示同す。又別教の歴別次第中道小善の行に示同す。皆是れ慈心の力働して而小に同じ、提引成就す。慈心の勢業に從つて嬰兒の行を起す。大經に云はく、「能く大字を說く、所謂る婆和なり」と。此れ即ち六度の小行にして而も作佛を求む、故に大字と言ふ。又云はく、「究竟涅槃等の相を見ず」と。即ち通教の菩薩の、色に即して是れ空の意に同ずるなり。又云はく、「大小の諸の事を造作すること能はず」と。大事とは即ち五逆なり、小事とは即ち二乘の心なり。此れ即ち別教に同ず。別教の生死に非ず、故に五逆無し。涅槃に非ず。故に小乘の心無し。又云はく、「楊樹黃葉」と。即ち人天の五戒十善の嬰兒に同ずるなり。又云はく、「非道を道と為す、能く道を生ずる微因緣なるを以ての故なり」と。即ち二乘の嬰兒に同ずるなり。經に善根の力能く假に出でて物を化し、小善の方便に同ず、佛慧に引入して圓教の嬰兒と作る。經に云はく、「起、住、來、去、語言すること能はず」と。經の如し云云。又麤妙を判じ、麤を開して妙を顯はすこと、例して解すべし云云。

(四六)五に病行とは、此れ無緣の大悲より起る。若し始めて小善を生ずるは、必ず病行有り。今生善に同ずる邊を嬰兒行と名け、煩惱に同ずる邊を名けて病行と為す。衆生病むを以て則ち大悲心に熏ず、是故に我病む。或は地獄に遊戲し、或は畜生の形と作り、身を化して餓鬼等と作るは、悉く是れ惡業の病に同ず、調達等の如し。又父母妻子、金鏘馬麥、寒風に衣を索め、熱病に乳を求むること有るを示すは、此れ人天に結業生老病死の

【四七】次第の五行を明し終りて、更に問答料簡す。

病あることを示す。又道場に三十四心に結を斷ずと示すは、二乘の見思の病に示同す。方便附近して語りて動作せしむ、三藏、通敎の菩薩も亦是の如し。又別敎の寂滅道場に、初めて塵沙、無明の病を斷ずるに同ず。是故に菩薩は悉く彼病に同じ、法界に徧くして衆生を利益す。次第の五行を竟りぬ。

（四七上）問ふ、「聖行は三地を證し、梵行は兩地を證す。天行、病行、嬰兒行は何ぞ地を證せざるや。」答ふ、「聖、梵の兩行は修因に名く、故に證地を論ずるなり。天行は正しく是れ所證なり、病、兒の兩行は果より應を起す、故に證を論ぜざるのみ。又義有り、經に別の義を顯はすは、地前に從つて各各入證す。經に圓の義を顯はすは、登地に同一に證す。又地前に圓を修せざるに非ず、登地に別あること無きに非ず。互に顯はして解し易からしむ、故に交を煩はしくせず。地前の別とは、聖行は淺より深に至りて不動地を證し、定行は淺より深に至りて堪忍地を證し、慧行は淺より深に至りて無畏地を證す。地上より去つて並に同じとは、豈三地條然として永く別なること有らん。秖登地の時、二邊の傷に動せられざるを不動地と名け、上佛法を持し下衆生を荷ふを堪忍地と名け、生死涅槃に於て俱に自在を得るを無畏地と名く。無畏地は我の德に從つて名を立て、堪忍地は樂の德に從つて名を立て、不動地は常の德に從つて名を立て、淨の德は三處に通ず。登地の日四德俱に成ずれば、則ち增減無し。蓋し化道は宜しく然るべし、例せば開三爲四の意の如き耳。登地より去りては地地に自行有り、地地に自證有り。自行は秖是れ天行を修し、自證は秖是

れ天行を證す、故に別して天行の證を說かざるなり。若し地前の化他は梵行と名く、慈悲喜は是れ化他の事行、一子地は是れ其證なり。捨心は是れ化他の理行、空平等は是れ其證なり。此二地も亦條然ならず、登地の慈悲の故に一子と言ひ、慈悲と體と同じき故に空平等と言ふのみ。地地に悲ありて惡に同ずるを病行と名け、地地に慈ありて善に同ずるを嬰兒行と名く。證道は是れ同じ、故に別して說かず。佛地の功德は仰いで信ずる而已、豈闇心を定んで分別すべけんや。略して答ふること此の如し云云。

妙法蓮華經玄義卷第四上

妙法蓮華經玄義 卷第四下

天台智者大師の說

【一】別圓二教の五行を明す中、正しく圓教不次第の五行を明す。即ち先づ教に約して之を釋する中、初に經を引きて行を立し、乃至正しく圓行を明す。

【安樂行】安樂行品に明す處の身、口、意、誓願の四安樂行のこと。

【三軌】衣、座、室にして法師品に出づ。忍、空、慈の三法を以て釋す。

（二）圓の五行とは、大經に云はく「復一行有り、是れ如來の行なり。謂ふ所の大乘大般涅槃なり」と。此大乘は、是れ圓因、涅槃は是れ圓果なり。此を擧げて如來行を標す。餘の六度、通、別等の行に非ず。前は大乘と名くと雖も圓に運ぶこと能はず。前には涅槃と名くと雖も荼を過ぎて說くべし。乃ち是れ菩薩の行なり、名けて如來の一行と爲すことを得ず。若し圓行は圓に十法界を具すれば、一運一切運なり、乃ち大乘と名く。即ち是れ佛乘に乘ず、故に如來行と名く。大論に云ふが如し「初發心より常に涅槃を觀じて道を行ず」と。亦大品に云ふが如し「初發心より行じ、生じ、修し、乃至道場に坐し、亦行じ、生じ、修す。畢竟と發心との二別ならず」とは、皆如來行の意なり。此經に、安樂行を明すは、安樂を涅槃と名く。即ち是れ圓果、行は即ち圓因なり。涅槃と義同じ。故に如來行と稱す。入室、著衣、坐座、悉く如來と稱するは、此れ人に就いて語を爲す。涅槃は法に就いて語を爲す。人に即して法を論ずれば、如來即ち涅槃なり。法に即して人を論ずれば涅槃即ち如來なり。二經義同じ。涅槃には、一行の名を列ねて而も廣く次第の五行を解す。法華には、安樂行を標じて廣く圓の意を解す。

【二】正しく圓行を明す中、法華經に依りて廣く行相を釋す。

（二）今法華に依つて圓の五行を釋せば、五行一心の中に在りて、具足して缺くること無きを如來行と名く。文に云はく、「如來莊嚴而自莊嚴」とは即ち圓の聖行なり、如來室とは即ち圓の梵行なり、如來座とは即ち圓の天行なり。如來衣に二種有り、柔和は即ち圓の嬰兒行、忍辱は即ち圓の病行なり。此五種の行は、即ち一實相の行なり。一は五と作らず、五は一と作らず。共に非ず離に非ず、思議すべからざるを一の五行と名く。云何ぞ莊嚴を聖行と名くる。文に持佛淨戒と云ふ。佛戒は即ち圓戒なり。又深達罪福相、徧照於十方と云ふ、罪に即し福に即して實相を見るを、乃ち深達と名く。實相の心を以て十惱亂を離る等は、皆是れ圓戒なり。佛自住大乘、如其所得法、定慧力莊嚴とは、即ち是れ佛の定慧莊嚴なり。故に佛の聖行と名く。云何ぞ如來の室を梵行と名くる。無緣の慈悲は能く法界の依止と爲る、磁石の普く吸うて歸趣せざる莫きが如し。又弘誓、神通、智慧を以て之を引きて、是法の中に住することを得せしむ。故に如來の室を以て梵行と爲す。云何ぞ如來の座を天行と爲す。第一義天實相の妙理は諸佛の師とする所、一切の如來の同じく棲息する所なり。文に云はく、「一切法空を觀じて動ぜず退せず。亦上中下法、有爲無爲、實不實の法を分別せず」と。故に如來の座は即ち天行なり。云何ぞ如來衣は嬰兒行、病行なる。喧を遮し靜を遮す、故に忍辱と名け、雙べて二諦を照すを復柔和と名く。文に云はく、「能く下劣と爲りて斯事を忍ぶ」と。即ち瓔珞を脫して弊垢の衣を著するは、即ち病行に同じく、方便附近は即ち嬰兒行に同じ。又復十法界の寂滅を觀ずるは即ち如來座なり、天行と名く。

【生善の機】人天　有漏の機類。
【入空の機】二乘　の機類。
【入假の機】別教　の菩薩。
【入中の機】圓教　の菩薩。

九法界の性相を抜くが故に悲を起し、一法界の樂を與ふるが故に慈を起すは、即ち是れ梵行なり。柔和にして善の性相を照すは即ち嬰兒に同じく、惡の性相を照すは即ち病行に同じ。又善の性相を照すは即ち戒、寂照は即ち定慧、即ち是れ聖行なり。當に知るべし、一心に十法界を照すに即ち圓の五行を具することを。又一心の五行は即ち是れ三諦三昧なり。聖行は即ち眞諦三昧なり。梵、嬰、病は即ち俗諦三昧、天行は即ち中道王三昧なり。又圓の三三昧は圓に二十五行を破す。即空の故に二十五の惡業見思等を破す。即假の故に二十五の無知を破す。即中の故に二十五の無明を破す。一に即して而も三、三に即して而も一なれば、一空一切空、一假一切假、一中一切中なり。故に如來行と名く。又如來室は冥に法界に熏ず。慈善根の力、眞際を動ぜずして光を塵垢に和し、病行の慈悲を以て之に應じて、種種の身を示せども聾の如く瘂の如し。種種の法を說けども狂の如く癡の如し。生善の機有れば嬰兒行の慈悲を以て之に應ず。婆和、木牛、楊葉なり。入空の機有れば聖行の慈悲を以て之に應ず。糞器を執持して狀畏るる所有り。入假の機有れば、梵行の慈悲を以て之に應ず。慈善根の力是の如きの事を見て、師子の牀に踞して寶几足を承く。商估賈人乃ち他國に徧く、出入息利處として有らざること無し。入中の機有れば天行の慈悲を以て之に應ず。快馬の鞭影を見て大直道を行くに、留難無きが如きが故なり。前無く後無く、并ならず別ならず、無分別の法を說く。諸法は本より來た常に自ら寂滅の相なり。圓に衆機に應ずること阿修羅の琴の如し。若し漸く引きて圓に入るは前に說く所の如し。

若し頓に引きて圓に入るは今說く所の如し。圓に入れば等しく證して更に差別無し。別圓初入の門を顯はさんが爲に、慈善根の力、漸頓の人をして此の如きの證を見せしむと云云。又圓の五行は、卽ち是れ四種の十二因緣の智の行なり。不思議の識、名色等淸淨なるは卽ち戒聖行、行有等淸淨なるは卽ち定聖行、無明愛等淸淨なるは卽ち慧聖行なり。十二支寂滅し、又前の三種の十二緣無きは卽ち天行、能く前の三種の十二因緣の滅に同ずるは卽ち嬰兒行、前の十二因緣の生に同ずるは卽ち病行なり。又是れ四種の四諦の智の行なり。無作の道は卽ち戒定慧の聖行、無作の滅は卽ち天行なり。慈悲拔苦、四種の苦を拔き四種の樂を與ふるは卽ち梵行、直の悲は卽ち病行、直の慈は卽ち嬰兒行なり。又是れ七種の二諦智の行なり。圓眞の方便は卽ち是れ聖行、圓眞の理は卽ち是れ天行、七俗を悲して七善を慈するは卽ち梵行、七俗に同ずるは卽ち病行、七眞に同ずるは卽ち嬰兒行なり。又是れ五種の三諦智の行なり。俗諦の中の善は是れ戒聖行、眞諦の中の禪は是れ定聖行、眞諦の慧は卽ち慧聖行、中諦は是れ天行、五俗の苦を拔き五の眞中の樂を與ふるは是れ梵行、五の俗に同ずるは是れ病行、五の眞中に同ずるは是れ嬰兒行なり。又是れ一實諦智の行なり。一實諦に道共戒、定、慧有るは卽ち聖行、一實境は卽ち天行、同體の慈悲合說するは卽ち梵行、各說するは卽ち病行、嬰兒行なり。

【三】觀心に約して圓の五行を釋す

(三)觀心の圓の五行とは、上來の圓行は遠く求むべからず、心に卽して、而も是れなり。一切諸法の中悉く安樂の性あり。卽ち心性を觀ずるを名けて上定と爲す。心性卽空卽假

【自性禪】十地已前に修證する處の禪定。【一切禪】初地に證する處の禪。

【四】別圓二教の五行を釋し終りてその麁妙を判じ、麁を開して妙を顯し乃至問答料簡して疑ひを釋す。

【五】迹門十妙を明す中、第四に位妙を釋す。即ち先づ來意を明し、乃至略して今經を達す。

即中なり、五行三諦、一切の佛法は、心に即して而も具せり。初心に此の如く如來の行を行ず、應に如來の供養を以て之を供養すべし。方に隨つて向ひ禮し、至る處に塔を起す。已に全身の舍利有るが故なり。初心尚爾り。況や似解をや。況や入住をや。地持に云はく、自性禪より一切禪を發す。一切禪に三種有り、一には現法樂禪なり、即ち眞相空慧、中三昧なり。二には出生一切種性三摩跋提なり、二乘の背捨除入等、即ち眞三昧なり。三には利益衆生禪なり、即ち俗三昧なり。當に知るべし、五行三諦は一切禪の中に於て皆悉く成辦することを。即ち初住の分位なり。此位に入る時は佛法に非ざること無し。是を圓心の行と爲す。豈前の五行次第の意と同じからん。

(四)當に知るべし、次第を麁と爲し、一行一切行を妙と爲すことを。即ち相待の意なり。若し麁を開して妙を顯はさば、麁の待すべき無し。即ち絕待行妙の意なり。問ふ、法華に麁を開して、麁をして皆妙に入る。涅槃は何の意ぞ更に次第の五行を明すや。答ふ、法華は佛世の人の爲に權を破して實に入る、復麁有ること無く、教意整足す。涅槃は末代の凡夫の見思の病重く、一實を定執して方便を誹謗し、甘露を服すと雖も、事に即して而も眞なること能はず。命を傷ない早夭する爲の故に、戒定慧を扶けて大涅槃を顯はす。法華の意を得る者は、涅槃に於て次第の行を用ひざるなり。

(五)第四に位妙を明さば、諦理既に融じ智圓にして隔つること無ければ、行を導きて妙を成ず。三義已に顯はるれば體、宗、用足る。更に位妙を明すは、行の所階なればなり。但し位

【六】經に依りて廣く解する中、初めに小草の位を釋す。

【鐵輪王乃至金輪王】轉輪聖王の身に三十二相を具し、即位の時天より輪寶を感得す。この輪王に金銀銅鐵の四種あり次第の如く四三二一の大洲を領し人民を統治す。

に權實有りて、經論に布在せり。若し成論、毘曇に位を判ずるは、善、大に渉らず。地、攝等の論を判ずるは、別して一途を叙して義兼語せず。方等の諸經に位を明すは、瓔珞已に淺深を開す。般若の諸經に位を明すは、仁王盛に高下を談ず。而して未だ麤妙を彰はさず。今の經は位の名彰はれざるも、而も意小大を兼ね、麤權實を判ず。然るに梵文盡く度らず、本經には必ず有らん。今、藥草喩品に但六位を明す。文に云はく、「轉輪聖王、釋梵諸王は是れ小の藥草なり。無漏の法を知りて能く涅槃を得、獨り山林に處して緣覺の證を得るは、是れ中の藥草なり。世尊の處を求め、我當に作佛すべし」と。精進定を行ずるは、是れ上の藥草なり。又、諸の佛子、心を佛道に專らにして常に慈悲を行じ、自ら作佛を知り、決定して疑無きは、是を小樹と名く。神通に安住して不退輪を轉じ、無量億百千の衆生を度する、是を大樹と名く。追つて其行の中の一地の所生、一雨の所潤、及び後の文に、今汝が爲に最實事を説くべしと云ふを取りて、以て第六の位と爲す。前の三義は是れ藏の中の位、小樹は是れ通の位、大樹は是れ別の位、最實事は是れ圓の位なり。

(六)小草位とは人天乘なり。輪王は是れ人主の位、釋梵は是れ天主の位なり、皆報果に約して位を明す。果の義既に優劣有り。當に知るべし、修因必ず淺深有ることを。人位の因とは即ち是れ五戒を秉持す、略して四品と爲す。下品は鐵輪王と爲つて一天下に王たり。中品は銅輪王と爲つて二天下に王たり。上品は銀輪王と爲つて三天下に王たり。上上品は金輪王と爲つて四天下に王たり。皆是れ散心に戒を持し、兼て慈心を以て、他を勸めて福を

爲す。故に報は人主、飛行の皇帝と爲る。四方德に歸し、神寶自然に應ず。

天乘の位とは十善道を修して、任運に淳熟す。通じて是れ天の因なり。加へて禪定を修し、進んで上界に升る。三界の天の果は高下同じからず、修因必ず深淺異なり。正法念に云はく、六萬の山須彌を遶ぐる。須彌の四埵に持鬘天有りて、十の住處有り。各各千由旬なり、北に四、餘は各各二なり。南を白摩尼と名け、能く十指手の頭に三歸依を受く。餘心を雜へざる者、此天に生じて樂を受く。轉輪王の十六倍も一に及ばず。諸の樂具悉く山河より流出す。二を峻崖と名く。昔河濟に於て橋船を造立し、持戒の人を度し、兼て餘人をも濟ふ。衆惡を作さず、果報知んぬべし。西方の一を果命と名く。昔饑世に於て淨戒を守持し、身口意を淨む。果樹を種殖して行者をして之を食せしめ、安樂充滿せり。二を白功德と名く、昔華鬘を以て佛の上及び塔の上に散ず。東方の一を一切喜と名く、昔幡を以て持戒の人に供養し佛に供ふ。自力、財を致して華を買ふ。果報知んぬべし。二を行道と名く。昔大火起つて衆生を焚燒するを見て、水を以て之を滅す。果報は云云。北方の四は一を愛欲と名け、二を愛境界と名け、三を意動と名け、四を遊戲林と名く、初は他の親友相破するを見て、諍訟を和合して此天に生ずることを得。次は昔說法の會(を作す)次は昔淨信心を以て衆僧を供養し、塔を掃ひ、淨く上田を信ず。次は昔持戒信心を以て、僧に衣を施し、一果の直を施し、作衣の價を爲して愛樂隨喜す。

次に遮留波陀天は、此に象跡と言ふ。亦十處有り。一を行蓮華と名く。昔持戒心を熏じ

三自歸を受け、南無佛と稱す。所有の蜂蜜尚餘の天に勝る。況や復餘の果報をや。次を勝蜂歡喜と名く。昔信心に戒を持し、慈悲行つて衆生を利益す。華香拔樂、佛塔を供養す。三を妙蜂と名く、昔佛に寶蓋を施す。四を香葉と名く。昔信心に戒を持し、香を佛塔に塗る。五を風行と名く。昔信心に戒を持して僧に扇を施し、淸凉を得。六天の香風悉く來つて之を熏じ、皆信倍増す。香風尚爾り、況や香風を念ずれば、念に隨つて皆得るをや。六を散華歡喜と名く。昔持戒の人を見て、乞食の時漿餅を施す。或は道路の中に淨水を盛り滿てて、人に漿餅を施す。七を普觀と名く。昔持戒の人に於て、善を以て心に熏じ、破戒の人精て恩惠を求めざるに於て、悲心を以て安を施し、心疲厭せずして病人を供養す。八を常歡喜と名く。昔法を犯す者の死すべきを見て、財を以て命を贖ひ、其をして脫を得せしむ。九を香藥と名く。昔戒を持し三寶を信じて、大福田の中に於て末香塗香を施し、淨心に供養す。法の如く財を得、施し已つて隨喜す。十を均頭と名く。昔人の罪を王に得て髲髮戮を受くるを見て、救ひて脫を得せしむ。

第三の天を常恣意と名く、十の住處あり。一を歡喜峰と名く。昔神樹と及び夜叉の所依の樹を救護す。樹有れば即ち樂しみ、樹を失すれば即ち苦しむ。二を優鉢羅色と名く。昔淨信に戒を持して三寶を供養し、優鉢羅華池を造るが故なり。三を分陀利と名く、昔此華池を造るなり。四を彩池と名く。昔淨心を信じ、僧の爲に袈裟雜色を染治し、法服を染治するが故なり。五を質多羅と名け、此には雜地と翻す。昔種種の食を以て持戒、不犯戒

等の人に施すが故なり。六を山頂と名く。昔屋を修造して風寒を遮り、人をして受用せしむるが故なり。七を崇倫と名け、此には美地と翻ず。昔戒を持し、悲心質直にして人を稱まさず。食を以て道行沙門、婆羅門に施し、或は一日、或は多日、或は息まざるが故なり、八を欲境と名く。昔戒を持し、若は邪見の人の、病に其所安を施すが故なり。九を清涼と名く。昔臨終渇病の人を見て、石蜜漿、或は冷水を以て病人に施すが故なり。十を常遊戯と名く。昔坐禪の人の爲に房舍を作り、圖畫して死屍の觀を作さしむるが故なり。

第四を箜篌天と名く。十の住處有り。一を犍陀羅と名く。昔園林甘蔗菴羅等の果林を以て僧に施すが故なり。二を應聲と名く。昔邪見の人の爲に一偈の法を說きて、其をして心淨く、佛を信せしむるが故なり、三を喜樂と名く。昔人に美飲、或は清美水を施し、或は泉井を覆うて蟲蟻をして入らしめず、行人之を飲んで苦惱無きが故なり。四を掬水と名く。昔病苦の者の臨終に咽喉忽忽として聲を出すを見て、其に漿水を施し、財物壽命を贖ふ。五を白身と名く。昔佛塔僧舍を塗飾し治補し、亦人を敎へて治補せしむるが故なり。六を共遊戯と名く。昔信心に戒を持し、法義に同じ和合し共ずるが故なり。七を樂遊戯と名く。昔戒を持して衆生を化し、心をして淨信ならしめ、戒施を稱嘆するが故なり。八を共遊と名く。昔法會に法を聽きて、經營を佐助し、深心に隨喜するが故なり。九を化生と名く。昔饑饉の者、沒溺の者を見て之を救護す。十を正行と名く。昔亡戒抄掠を見て、救ひて脫を得せしめ、嶮處に正道を示す。

次に日行天は、須彌山を遶り宮殿に住す。外道は說きて日曜と爲す。及び星宿は略して三十六億ありと說く。昔七戒を持して、增上の果を得せしむ。風輪に持せらる。此日行等の大天は二大天と與なり。提頭賴吒、毘沙門を請ふ。四天下に遊び空中に遊戯し、五欲の樂みを受けて意の如く自ら娛しむ。日行は須彌山を遶る、隨って何れの方にも在り。山に影現すること有れば、人說いて夜と爲す。風輪に北方の星を持す、轉輾して沒せず。外道は辰星の沒せざるを見て、其能く一切世間天上を持すと謂つて、風力の所爲なることを知らざるなり。

不殺戒は四天處に生ず。不殺不盜は三十三天に生ず。不婬を加へて焰摩天に生ず。不口の四過を加へて兜率天に生ず。又生聞戒を加へ、復信じて佛の七戒を奉して、化樂と他化の兩天に生ず。所持の戒轉勝れば、天身の福命轉勝る。又心の持戒と思心勝る者に隨つて、其福轉勝る。三十三天とは、一を作善法堂天と名く。昔七戒を持し堅固にして嫌無し。四果と病人と父母と入滅定との人に施し、慈悲喜捨を以て惰提に壽命を與へ、善法堂天に生じ釋迦提婆と作る。姓は憍尸迦なり、能天主と名く、九十九那由他の天女有つて眷屬と爲り、心に嫉妬無し。善法堂の廣さ五百由旬なり。第三を淸淨天、焰摩天と名く。王を牟修樓陀と名け、身の長五百由旬にして、百千の帝釋和合すとも及ばざる所なり。第四は兜率陀なり、此には分別意宮と云ふ。其王を刪闘率陀と名く。第五は涅摩地なり、此には自在と云ひ、亦は不憍樂と名く。第六を波羅尼密と名け、此には他化自在と云ふ。色、無

【七】中草の位を明す。

【二十七賢聖】學人に十八、無學に九、合して二十七となる。學の十八とは信行、法行、信解、見得、身證、家家、一種子、向初果、初果、向二果、二果、向三果、三果と中、生、行、不行、上流の五種含を云ふ。九無學とは思、進、退、不退、不動、住、護、慧、俱なり。

【八】正しく有門中、草の位を釋する中、初に聲聞。而して聲聞の中先に賢位を明す。卽ち初に五停心なり。

色は復昔さず。小の藥草竟んぬ。

(七)中の藥草の位とは、卽ち二乘なり。此れ習果に就いて位を判ず。舊の云はく「成論は探つて大乘を明し、菩薩の義を解す」と。此れ則ち然らず。論主自ら云はく「今正しく是れ三藏の中の實義を明す」と。實義とは空是れなり、人師豈論主を誣ふべけんや。此れ卽ち空門に二十七賢聖斷伏の位を明す、阿毘曇有門は「七賢七聖斷伏の位を明す」と。委くは兩論に有り。今略して有門の中草の位を明す。初に七賢を明し、次に七聖位を明す。七賢とは、一には五停心、二に別相念處、三に總相念處、四に煖法、五に頂法、六に忍法、七に世第一法なり。通じて賢と稱するは、隣聖を賢と曰ふ。能く似解を以て見を伏し、似に因つて眞を發す。故に隣聖と言ふ。又天魔外道は定見に流轉して四諦を識らず、此七位の人は明かに四諦を識る。大經に云はく「我昔、汝等と與に四眞諦を見ず」と云云。四諦を見るとは、愛に屬する四諦を識り、見に屬する四諦を識れば皆能く明了なり。若し四諦を解すれば、則ち所見眞正にして邪曲有ること無し。故に是れ賢人の相なり。

(八)一に初賢位とは、謂はく五停心を學ぶ、觀成じて四の障道を破するは、卽ち是れ初賢位なり。所以は何ん。若し定邪聚の衆生は、三寶、四諦を識らずして生死に貪染す。若し人三寶に歸依し、四眞諦を解し、發心して生死を離れ、涅槃の樂を求めんと欲するに、五種の障道、煩惱散動して四諦を觀ずることを妨ぐ。今五觀を修して成就すれば、障破し道明かなり。行解相稱ふ、故に初賢と名く。

【九】七賢位の中次に別相念處位を明す。

【四種の定】四如意足のこと、即ち、欲、勤、心、觀の四神足を云ふ。之の定を得て心を攝し定慧均等にして所願皆成ずれば四如意足と云ふ。

【五の善法】五根のこと、信、進、念、定、慧の五なり。

【一〇】七賢位の中第三に總相念處を釋す。

【一一】第四に煖法位。

(九)二に別相念處の位とは、五障既に除くを以て觀苦諦當なり。能く四諦を觀じて、而も正しくは苦諦を以て初門と爲し、四念處觀を作し四顚倒を破す。若し慧解脫の根性の人は、但性の四念處觀を修して性執の四倒を破す。若し俱解脫の人は共の四念處觀を修して、事理の四倒を破す。若し無疑解脫の根性の人は、性、共、緣の三種の四念處を修して、一切の事理文字等の四顚倒を破す。善巧方便は念處の中に於て四種の精進有り、四種の定を修して五の善法を生じ、五種の惡を破す。道用を分別し、安穩にして行ず。能く四諦を觀じて別相の四念處の位を成ずるなり。

(一〇)三に總相の四念處とは、前に已に別相念の慧をもつて、四顚倒を破す。今深細の觀慧、總じて四倒を破するなり、或は境總觀總、境別觀總、境總觀別、或は二陰、三陰、四陰、五陰を總ぶるを皆總相觀と名く。是中亦巧方便を以て能く正勤、如意、七覺、八道を生じ、疾く後の法に入る。故に總相念處の位と名くるなり。

(一一)四に煖法の位とは、別總念處の觀を以ての故に能く似解を發し、十六諦觀に佛法の氣分を得。譬へば火を鑽るに煙の起るが如く、亦春陽に煖の發するが如し。慧を以て境を鑽るに、相似の解を發す。解は即ち煖に喩ふ。又春夏に華草を積集し、自ら煖生ずること有るが如し。四諦の慧を以て衆の善法を集むれば、善法熏積して慧解起ることを得。故に煖と名くるなり。即ち是れ內凡の初位なり。佛弟子には有り、外道には則ち無し。是を煖法の位と名く。

【一二】第五に頂法位。

【一三】第六に忍法位。

【一四】第七に世第一法の位を釋す。

【一五】次に七聖位を明すに先づ位を列ね名を釋し、而して次に第一隨行の位を明す。

【一六】七聖位の中第二に隨法行の位

（一二）五に頂法とは、似解轉增して四如意定を得るに、十六諦觀轉更に分明なり。嶽の上に在ること、山の頂に登りて四方を觀矚するに、悉く皆明了なるが如し。故に頂法と名く。

（一三）六に忍法の位とは、亦是れ似解增長し、五種の善法增進して根を成ず。四諦の中に於て堪忍樂欲する故に忍法の位と名く。下中の二忍を皆忍位と名く。

（一四）七に世第一法の位とは、即ち是れ上忍の一刹那にして、凡夫の得る所に於て最勝の善根なれば、名けて世間第一法と爲す。上の智妙の中に已に略して說き竟んぬ。

（一五）七聖位とは、一には隨信行、二には隨法行、三には信解、四には見得、五には身證、六には時解脫羅漢、七には不時解脫羅漢なり。通じて聖と名くるは正なり。苦忍明發して、凡性を捨てて聖位に入り、眞智に理を見る、故に聖人と名く。一に隨信行の位とは、是れ鈍根の人の見道に入るの名なり。自の智力に非ずして他に憑つて解を生ず。是人は方便道に在りて、先に信有りと雖も、未だ眞を習はざるを以て、信を行と名けず、行は進趣を以て義と爲す。苦忍の眞明を得てより、十五刹那に進趣して眞を見る。故に隨信行の位と名くるなり。

（一六）二に隨法行の位とは、即ち是れ利根の道に入るの名なり。利なる者は自ら智力を以て、理を見て結を斷ず。方便道に在りて能く自ら觀を用ひて、四諦の法を觀ず。但未だ眞を發せざれば、名けて行と爲さず、世第一法に因つて苦忍の眞明を發し、十五刹那に進趣して

【一七】第三に信解の位。

眞を見る。故に隨法行の位と名く。

（一七）三に信解の位を明かさば、卽ち是れ信行の人の修道に入るを、轉じて信解の人と名くるなり。鈍根は信に憑つて、進んで眞解を發す。故に信解と名く。是人の證果に三有り、三果と謂ふ云云。初果を證するは、第十六の道比智相應して、卽ち須陀洹を證す。須陀洹は此に修習無漏と翻す。成論に明す「猶是れ見道」と。數人は明す「果を證すれば卽ち修道に入る」と。此を用ひて修習無漏の義を明すに便なり。若し見道の所斷は、略して三結盡と言ひ、廣くは八十八使盡と說く。七生在つて終に八に至らず云云。次に二果を證することを明すに、卽ち二種有り。一には向、二には果なり。向とは、初果の心より後更に十六諦觀を修して、七菩提行現前す。卽ち此世に無漏を以て煩惱を斷ず。一品の無礙に欲界一品の煩惱を斷じ、乃至五品を斷ず。皆是れ向に於てす。亦勝進須陀洹と名く。此に約して家家を論ずるなり。二に果とは、若し六品を斷じ盡して、欲界の第六品解脫を證するは、卽ち是れ斯陀含果なり。天竺には薄と云ふ、欲界の煩惱を薄くするなり。次に阿那含を證するを明すに亦二有り。一には向、二には果なり。向とは、若し欲界の七品乃至八品を斷ずるを、皆名けて向と爲し、亦勝進斯陀含と名く。此に約して一種子を說くなり。果とは九無礙に欲界を斷ず。若し第九解脫を證するは、卽ち阿那含果と名く。天竺には不還と云ふ、欲界に還生せざるなり。復次に須陀洹に三種有り。一には行中の須陀洹、卽ち是れ向なり。二には住果、正しく是れ須陀洹なり。三には勝進須陀洹、亦家家と名く。卽ち是れ

【五上分結】色界無色界の生死を感ずる五種の煩惱なり。色愛、無色愛、掉、慢、無明の五結を云ふ。

【一八】第四に見得の位。

【一九】第五に身證の位。

斯陀含向なり。斯陀含には但二種有り。一には住果、二には勝進なり。勝進は亦一種子と名く、即ち阿那含向なり。阿那含に亦二種あり、一には住果、二には勝進なり。勝進那含は五上分結を斷ず、色無色染等を謂ふ。即ち阿羅漢向なり。羅漢には但一有り、住果を謂ふなり。復次に超果とは、凡夫の時欲界の六品、乃至八品を斷じ盡して、見道に來入し、苦忍の眞明を發す。十五心の中は是れ斯陀含向なり。十六心は即ち斯陀含果を證す。若し凡夫の時、先に二果九品を斷じ盡し、乃至、無所有處を盡して後見諦に入る。十五心を阿那含行と名け、第十六心に即ち那含果を證す。此を超越の人、後二果を證すと名く。是信解は是れ鈍根性なりと雖も不同あり。退、護、思、住、進を謂ふ。若し阿那含を證するに各各復五、及び七種般、八種般有り。五種般とは中般、生般、行般、不行般、上流般なり。七種とは中般を開して三種と爲す。八種般とは五は前の如くにして、更に現般、無色般、不定般有り云云。

（一八）四に見得の位を明さば、法行の人轉じて修道に入るを名けて見得と爲す。是れ利根の人にして、自ら智勤を以て、法を見て理を得、故に見得と名く。是人は思惟道に在つて、次第に三果を證す。超越の二果も亦信解の中に分別するが如し。但利根なるを以て聞法に藉らず、衆具を假らずして、自ら能く法を見て理を得るを異なりと爲す。見得は但是れ不動根性なり。若し阿那含果を證するは、亦五種、七種、八種般の不同有り。

（一九）五に身證の位を明さば、還つて是れ信解見到の二人、思惟道に入り、無漏智を用て上下

【二〇】第六に時解脱羅漢。

分結を斷じ、四禪四無色定を發す。即ち是れ共念處を用ひて、八背捨、八勝處、十一切處を修し、九次第定に入つて三空、事性の兩障、先に已に斷盡す。又非想の事障を斷じ、緣理の諸の心心數法を滅して、滅盡定に入る。此定を得るが故に、身證阿那含と名くるなり。何となれば、滅定に入れば、似涅槃の法を身內に安置して、三界の一切の勞務を息め、身に想受の滅を證す。故に身證と名く。若し初の果に約して身證を解せば、但先に凡夫に於て等智を用ひて結を斷じ、四禪四無色定を得るを以て後に見諦を得、第十六心に那含果を證し、即ち共念處を修す、還つて欲界より背捨、勝處、一切處を修し、九次第定に入るは身證なり。是阿那含に二種有り。一には住果、但是れ阿那含なり。二には超果行向、即ち是れ勝進阿那含なり。亦是れ羅漢向の攝なり。釋論に云はく、「那含に十一種有り。五種は正しく是れ阿那含、六種は阿羅漢向の攝なり」と。此身證は、即ち是れ勝進なり、羅漢の攝と爲す。五種、七種般は皆上流般有り。八種般は但現般、無色般有り。毘曇に那含を分別するに、一萬二千九百六十種有りと云云。

(二〇)六に時解脱羅漢を明さば、是れ信行の鈍根なり。時及び衆緣具するを待つて、方に解脱を得。故に時解脱羅漢と名く。羅漢は此に翻無し。名に三義を含む、殺賊、不生、應供なり。位は無學に居す。羅漢に五種有り、隨信行より退法、思法、護法、住法、升進法を生ず。盡智と無學等見とを得るなり。若し金剛三昧を用ひて非想九品の惑に於て盡し、次の一剎那に非想第九の解脱を證して盡智を成ず。次の一剎那に無學等見を得るなり。或は彼

【滅盡定】ニローダサマーパティ(Nirodha-Samāpatti)二無色定の一にして六識の心心所を滅盡して起らしめざる禪定。

【三明】宿命明、天眼明、漏盡明にして佛にあつては三脫と云ひ羅漢にあつては三明といふ。

【八解】八背捨とも云ふ。三界の煩惱を捨離して其繫縛を脫する八種の禪定なり。

【三一】第七に不時解脫羅漢。

【三二】中草位の中次に辟支佛の位を明す。

時に退す、故に無生智を得と說かず。此五種の阿羅漢は是れ信種性なり。根鈍にして因中に道を修し、必ず衣食、牀具、處所、說法、及び人の隨順を假りて善根增進す。一切の時に、所欲の如く進むこと能はず。是五種に各二種有り。滅盡定を得ざるは但是慧解脫なり、滅盡定を得るは卽ち是れ俱解脫なり。若し滅盡定を得ざるは、是人因中に、偏に性念處を修す。若し滅盡定を得るは、是人因中に、性共を修するなり。證果の時、三明、八解、一時に倶に得、故に倶解脫と名く。

(三一)七に不時解脫の羅漢とは、卽ち是れ法行の利根にして、不動法の阿羅漢と名く。此人、因中に道を修し、能く一切時に、所欲に隨つて進んで善業を修し、衆具を待たず、故に不時解脫と名く。是人は煩惱の爲に動ぜられず、故に不動と名く。不動は是れ不退の義なり。三智を成就す。盡智、無生智、無學等見を謂ふ。能く重空三昧を用ひて聖善法を擊つは、定を以て定を捨す。故に能擊と言ふ。是不動羅漢に亦二種有り。一に滅盡定を得ざるは、但慧解脫と名く。二に滅盡定を得るは、卽ち是れ俱解脫なり。若し佛の三藏の教門を論くを聞き、緣念處を修して卽ち四辯を發すれば、無疑解脫と名く。是を波羅蜜の聲聞と名く、能く究竟して一切の羅漢の功德を具足す。沙門那と名く、沙門那とは沙門果なり。

(三二)二に辟支佛の位を明さば、此には緣覺と翻す。此人は宿世に福厚く、神根猛利にして、能く集諦を觀じて以て初門と爲す。大論には獨覺、因緣覺と稱す。若し無佛世に出でて自然に道を悟るは、此れ卽ち獨覺なり。若し佛世に出でて十二因緣の法を聞き、此を稟けて

【三】次に上草の位を明す。

道を得る故に、因縁覺と名く。獨覺の無佛世に生ずるに、小行り大行り。若し本學人に在りて、今佛後に生じ、七生既に滿じて八生を受けず、自然に道を成ずるは、名けて佛と爲さず、亦羅漢に非ず。小辟支迦羅と名く。其道力を論ずれば、舍利弗等の大羅漢に及ばず。二には大辟支迦羅なり、二百劫の中に功德を作して、身に三十二相の分を得。或は三十一、三十、二十九、乃至は一相なり。福力增長し、智慧利なり。總相と別相に於て、善く知り能く入る。久しく定を修集して、常に獨處を樂ふ、故に大辟支迦羅と名く。若し因緣に就いて小大を論ずれば、亦應に是の如く分別すべし。此人根利にして果を論ずべからず。能く正使を斷じ、又加へて習をも侵す。譬へば身壯なれば直に所在に詣つて、中に止息せざるが如し。故に果を制せず。是に中草の位を名け竟んぬ。

(三)上草の位とは、即ち是れ三藏の菩薩の位なり。此菩薩は初發菩提心より慈悲誓願を起し、四諦を觀察して道諦を以て初門と爲し、六波羅蜜を行ず。初の釋迦より罽那尸棄佛の時に至るを、第一阿僧祇劫と名く。常に女人の身を離れ、亦自ら當作佛、不作佛を知らず。二乘の位に準望するに、應に五停心、別相、總相念處位の中に在るべし。慈悲心を以て六度の行を行ず。罽那尸棄佛より然燈佛の時に至るを、第二阿僧祇劫と名く。爾時、自ら作佛を知ると雖も、而も口に說かず。此位に準望するに、應に煖法位の中に在るべし。即ち是れ性地順忍初心の位なり。既に證法の信有れば、必ず作佛を知る。而して煖の解を用ひて六度を修行すれど、心未た分明ならず、故に口に他に向つて說かざるなり。然燈佛より

【二三】小樹の位を明す。即ち初に三乘の同異を辨じ而して後正しく明す。中、先に三乘共の十地の位を明す。

毘婆尸佛の時に至るを、第三阿僧祇劫と名く。是時内心了了にして自ら作佛を知り、口に自ら言を發して、畏れ難る所無し。此位に準ずるに、應に頂法位の中に在るべし。六度を修行し、四諦の解明かにして、山頂に登つて了かに四方を見るが如し。故に口に他に向つて說く。若し三僧祇劫を過ぎ、三十二相の業を種うる者は、此に準ずるに是れ下忍の位なり。此忍智を用つて六度を行じ、百の福德を成じ、百福を用つて一相の因を成す。下忍の位に於て、人中に佛の出世する時種うることを得。若し道場に坐する時、位中忍、上忍に在り。上忍の一刹那より眞に入り、三十四心に結を斷じて阿耨三菩提を得れば、則ち名けて佛と爲す。爾前は則ち是れ三藏の菩薩上草の位なり。

（二四）小樹の位とは即ち是れ通教なり。三乘の人同じく無言說の道を以て、煩惱を斷じ、第一義諦に入ることを明す。體法の觀慧異ならずして、但智力に强弱の殊なりあり、煩惱の習に盡と不盡と有るを異と爲る耳。先に三乘共の十地の位を明し、次に名別義通を補ぶ云云。一に乾慧地とは三乘の初を同じく乾慧と名く。即ち是れ體法の五停心、別相、總相の四念處觀なり。事相は三藏に異ならず。此三階の法門に、陰入界は如幻如化なりと體し、總じて見愛の八倒を破するを身念處と名く。受心法も亦是の如し。是觀の中に住して正勤、如意、根、力、覺、道を修す。未だ煗法相似の理水を得ずと雖も、而も總相の智慧深利なり。故に乾慧の位と稱す。二に性地の位とは、乾慧を過ぐることを得。煗を得已つて、能く初中後心に增進し、頂法乃至世第一法に入るを皆性地と名く。性地の中の無生の方便、

【一念相應の慧】定慧相應の一念、理智相應の一念にして當に成佛せんとする時の智慧を云ふ。

解慧善巧なること轉た前に勝れ、相似無漏の性水を得、故に性地と言ふなり。三に八人地の位とは、即ち是れ三乘の信行、法行の二人、眞理を觀じて以て眞を發し、惑を斷じ、無間三昧の中に在りて、八忍具足し、智の一分を少く、故に八人位と名くるなり。四に見地の位とは、即ち是れ三乘同じく第一義無生の四諦の理を見、同じく見惑の八十八使を斷じ盡す。五に薄地の位とは、愛假即ち眞と體して、六品の無礙を發す。欲界の六品を斷じて第六の解脱を證し、欲界の煩惱薄きなり。六に離欲地の位とは、即ち是れ三乘の人、愛假即ち眞と體して、欲界の五下分結を斷じ盡し、欲界の煩惱を離るるなり。七に已辨地の位とは、即ち是れ三乘の人、色無色の愛即ち眞と體して眞無漏を發し、五上分結、七十二品を斷じ盡すなり。三界の事惑を斷ずること究竟す、故に已辨地と言ふ。八に辟支佛地の位とは、緣覺菩薩は眞無漏を發する功德力大なり、故に能く習氣を侵除す。九に菩薩地の位とは、空より假に入り、道觀雙流す。深く二諦を觀じ、進んで習氣色心無知を斷じ、法眼、道種智を得て、遊戲神通し、佛國土を淨め衆生を成就す。佛の十力、四無所畏を學し、習氣を斷じて將に盡きんとす。此に齊つて小樹の位と名く。十に佛地とは、大功德力をもつて、智慧を資け、一念相應の慧をもつて、眞諦を觀じて究竟し、習も亦究竟す。劫火の木を燒きて復炭灰無きが如く、象の河を渡るに邊底に到るが如し。菩薩と佛は名は二乘に異りと雖も、通じて俱に無生體法を觀ず。同じく是れ無學なり、二涅槃を得て共に灰斷に歸す。證果の處一なり、故に稱して通と爲す。

【二五】小樹の位を明す中、是より下名別義通を簡ぶ。【名別義通】別教の法門を籍りて通教の義を明すを云ふ。例せば菩薩位の十地に思想の斷惑を配當し或は二乘の果を配する如き之れにしてすべて名は別教にして義は通教なるなり

（二五）二に名別義通を簡ぶに、更に二と爲す。初に三乘共位の中に就いて、菩薩に別に忍の名を立てて而も義通ず。二に別教の名を用ふるに、名は別にして義は通ず。通の義は已に前に說くが如し。別に立つとは、別して菩薩の爲に、伏忍、柔順忍、無生忍の名を立つるなり。乾慧地は三人同じく見惑を伏す。而して菩薩に更に伏忍の名を加ふるは、菩薩は因緣卽空と信じて、無生の四諦に於て其心を降伏し、四弘誓願を起す。衆生は虛空の如しと知ると雖も、而も心を發して一切衆生を度す。是菩薩の衆生を度せんと欲するは、虛空を度せんと欲するが如し。故に金剛般若に云はく、「菩薩は是の如く其心を降伏す。所謂る無量の衆生を滅度すとも、實に衆生の滅度を得る者無し」と。次に三誓願を以て其心を降伏すること亦是の如し。是を菩薩の乾慧地に在りて、停心、別相、總相念處觀を修する時、二乘に異なると爲す。故に別して伏忍と稱す。復次に三乘の人同じく善有漏の五陰を發して相似の解を生じ、皆見惑を伏して第一義に順ず。而して菩薩獨り柔順忍の名を受くるは、菩薩は但結を伏し、理に順ずるのみに非ず。又能く一切衆生の爲に心を伏し、遍く六度を行ず。一切事の中に福慧皆究竟せしむ。三藏の菩薩の中忍の中に於て、三僧祇に六度を行じて身命を惜まざるが如く、今の菩薩も亦是の如し。空無相願を以て諸根を調伏し、衆生の爲の故に六度を滿足す。故に順忍と名くるなり。復次に三乘の人同じく眞無漏を發す。若は智、若は斷、同じく無生と名く。而して菩薩獨り無生法忍の名を受くるは、其諦理を見て結使を斷ずるも、取證の心を生ぜざるを以ての故に、別して無生法忍の名を受くるなり。何

【五下分結】五上分結に對す。三界の中、欲界の結惑を云ふ。貪、瞋、身見、戒取見、疑の五結なり。

となれば、若し取證の心を生ずれば、即ち二乘地に墮し、菩薩の第九地に入ることを得ず。復次に三乘同じく神通を得、而して二乘は用つて衆生を成就し、佛國土を淨むること能はざるが故に、遊戲の名を受けず。菩薩は能く爾り、故に別して遊戲神通の名を受くるなり。阿那含は五下分結を斷ずと雖も、而も涅槃空を捨てて欲界に來生し、和光利物すること能はず、其事に同ぜず。菩薩は能く此の如し、故に別して離欲清淨の名を受く。所以に三乘の人同じく二諦を觀ずるに、用與同じからず。若し二乘は二諦を觀ずと雖も、一向に假を體して空に入り、眞を用ひて結を斷じ、無學の果に至る。菩薩も亦二諦を觀ずれども、始め乾慧より終り見地に至るまで、多く從假入空を用ひて一切智と慧眼を得、多く眞を用ふるなり。薄地より進んで神通を學して、多く從空入假觀を修す。道種智、法眼を得て多く俗を用ふ。辟支佛地より二觀雙照を學して菩薩地に入り、自然に薩婆若海に流入す。是れ則ち無功用心に中道佛眼を修し、佛地圓明にして一切種智を成ず。佛眼同じく二諦を照すこと究竟す。故に大論に云はく、「聲聞法の中には乾慧地と名け、菩薩に於ては即ち是れ伏忍なり。聲聞法には性地と名け、菩薩法の中に於ては柔順忍と名く。聲聞法には八人地と名け、菩薩に於ては無生忍道と名く。聲聞法には見地と名け、菩薩法に於ては是れ無生法忍の果なり。聲聞は薄地と名け、菩薩法に於ては名けて遊戲五神通と爲す。聲聞法には離欲地と名け、菩薩法に於ては名けて離欲清淨と爲す」と。

阿羅漢地は、聲聞法に於ては即ち是れ佛地なり。何となれば、三藏の佛は三十四心に眞を

【八相成道】佛菩薩が衆生を濟度せんがため、世間に出現して八種の相を示し成道の相を現ずるをいふ。一に降兜率、二に入胎、三に降生、四に出家、五に降魔、六に成道、七に説法、八に涅槃なり。但し八種を數ふるに種種あり。

發し、三界の結を斷じ盡す。羅漢と稱し、故に佛地と名く。菩薩法の中に於ては、獨無生忍と名く。故に大品に云はく、「阿羅漢の若は智、若は斷、是れ菩薩の無生法忍なり」と。辟支佛地も、亦是の如し。九地は辟支佛を過ぎて、菩薩の位に入る。菩薩位とは九地、十地なり。是れ則ち十地の菩薩なり。當に知るべし、佛の如しと爲す。此に齊つて、習氣未だ盡きず。菩薩地を過ぎて則ち佛地に入る。擴を用つて餘習を扶け、閻浮提に生じて八相成道す。五相は三藏の如くにして殊なるに不ず。唯六に成道は、樹下に一念相應の慧を得て、無生の四諦の理と相應し、一切の煩惱の習を斷じ盡す。大慈悲、十力、四無畏、十八不共法、一切の功德を具足する、之を名けて佛と爲す。七に轉法輪は、權智は三藏生滅の四諦の法輪を開し、實智は摩訶衍無生の四諦の法輪を說き、通じて三乘の人を敎ふるなり。八に入涅槃の相は、双樹に無餘涅槃に入り、薪盡き火滅して、舍利を留めて一切天人の福田と爲す。是を通敎の共位と爲し、別して菩薩の爲に此名位を立つるなり。

二に別名を用ひて名くとは、即ち是れ別敎の名を取りて、通敎の菩薩の位に準望するなり。別の名とは即ち是れ十信、三十心、十地の名なり。鐵輪の位は、通の義に於ては即ち是れ乾慧地伏忍なり。三十心は即ち性地に望む、柔順忍なり。八人地と見地は即ち是れ初歡喜地にして、無生法忍を得るなり。故に大品に云はく、「須陀洹の、若は智、若は斷、皆是れ菩薩の無生法忍なり」と。薄地に向、果あり。向は即ち是れ離垢地、果は即ち是れ明地なり。故に大品に云はく、「斯陀含の智斷は是れ菩薩の無生法忍なり」と。離欲地に向と果と

あり。向は即ち焔地、果は即ち難勝地なり。故に大品に云はく、「阿那含の智斷は是れ菩薩の無生法忍なり」と。已辨地に向と果とあり。向は是れ現前地、果は是れ遠行地なり。大品に云はく、「阿羅漢の智斷は是れ菩薩の無生法忍なり」と。辟支佛地は即ち是れ第八の不動地にして、習氣を侵す。大品に云はく、「辟支佛地の智斷は是れ菩薩の無生法忍なり」と。菩薩地は即ち是れ善慧地なり、十地は、當に知るべし、佛地の如し。佛地は前に説けるが如し。此の佛と三藏の佛とは、亦は同、亦は異なり。同じく八十年、同じく眞の灰斷に入る。異とは、三藏は因は伏し果は斷ず。通佛は因果俱に斷ず。三藏は一日三時に根を照し、通佛は俗に即して而も眞なれば、照して入るを須ゐざるなり。是れ即ち別の名を用ひて位を辨ず。名は異に義は同じ、通教の位に屬するなり。

問ふ、「初地より七地に至るまで果に對するは、何れの經論に出づるや」。答ふ、「經論に對當せざるに非ず。但高下不同なれば、人師の之に對することと異なり。或は見地を用て正初地に對す、今用ふる所の如し。或は向に初に三地を取つて、倂せて初地に對す。仁王に四地を明すに、倂せて初地に對す。此れ定判し難し。但通教の見地は本是れ無間の道なれば、出觀せずして須陀洹を證す。豈初地に見を斷じ、乃至は三地、或は四地と云ふことを得んや。若し別惑を斷ずるは二乘に共せず、此義之れ有り。又或は六地に結を斷じて羅漢に齊しと言ひ、或は七地と云ふ。此れ定執し難し、前後の兩果、經論に對すること指定まらず。中間は意を以て得べし。今義を以て推すに定執すべからず」。「問ふ、「七地八地より常住を觀じて無

【二六】是より下大樹の位を明す。就中初に三門を分ち而して第一に經論の不同を出す。

明を破すとは、是れ何れの地位なるや。答ふ、「此れ則ち通に非ず、亦復別に非ず。何となれば、通教は始終に常を觀ずることを明さず。何ぞ中間にして而も無明を破することを得ん。別教は初心に卽ち常住を知り、初地に已に能く無明を破す。云何ぞ八地に始めて無明を破せん。此れ乃ち別接通の意のみ」。問ふ、「大論は三藏に初焔を明す。別圓に約すれば皆發眞を取つて初焔と爲す。通教は何の意ぞ乾慧を取つて初焔と爲すや」。答ふ、「別圓は各各一種の根性に逗ず、故に發眞を用て初焔と爲す、通教は多種の根性に逗せんが爲に、所謂る別圓入通なり。故に含容して乾慧を取る耳。若し鈍者は、八人、見地、是れ初焔なり。利者は乾慧に於て、卽ち能く結を斷ず、故に是れ初焔なり」。問ふ、「利人は十地無かる可しや」。答ふ、「譬に有り。根利なるを以ての故に、故に位を制せざるのみ」。問ふ、「別圓に利人無きや」。答ふ、「利鈍有りと雖も、根性純一なるを以ての故に、但一意を作す。宜しく此の如くなるべし」。

【二六】大樹の位とは、別教の位なり。立を三と爲す、一には經論の不同を出し、二には總じて位を明し、三には別して位を明す。此別教の名義は理、惑、智、斷、行、位皆別なり。此れ正しく因緣假名、恒沙の佛法、如來藏理、常住涅槃、無量の四諦に約して位次を論ず。無量の四諦に凡そ四種あり。無量の四諦の塵沙を伏破せず、亦無明を伏破せざる有り。無量の四諦の傍に塵沙を伏破し、無明を伏破せざる有り。無量の四諦の正しく塵沙を伏破し、亦無明を伏する有り。無量の四諦の正しく塵沙を伏破し、亦無明を伏破する有り。云何が無量は塵沙を伏せず無明を伏破せざる。若し三藏の伏道には十六諦觀有り、見諦の惑に無量

の種有るを明らむ。此れ乃ち見思を伏す、何ぞ塵沙に關はらん。例せば外道の世智を分別するに、見思を伏するに非ざるが如し。云何が無量は是れ傍に伏惑する。若し通教の七地出假に藥病を分別するは、此れ助けて界內を滅して正しく伏惑するに非ず。云何が無量は正しく塵沙を伏破する。此は是れ別教に內外の四諦を分別するに無量の種有り、即ち是れ塵沙を伏破し、亦無明を伏す。乃ち無明を破するの義有り。今事に從つて名を得、無明を伏する者を便と爲す。云何が無量は無明を伏破する。若し圓教の三諦は倶に法界の事理を照して、明了ならざる無し。自地の無明を破し、上地の無明を伏す。別教の無量の四諦は前の二に非ず、後の一にも非ず。正しく恒沙の佛法に就いて名に當つ。然るに實は通じて諸の四諦を緣ず。次第に論を爲さば傍正無きに非ず、初心に諸の無量を緣じて、發心誓願す、初に正しく生滅の四諦を用て通の見思を伏し、傍に三種を伏す。次に正しく無生を以て通の見思を破し、傍に兩種を伏す。次に正しく無量を以て內外の塵沙を破す。次に正しく無作を用て無明を伏す。次に正しく無作を用て無明を破す。既に此の如きの無量の階差有り。是故に經論の名數、斷伏の高下、諸の法門に對するに多く不同有り。若し華嚴には四十一地を明す、三十心、十地、佛地を謂ふ。瓔珞には五十二位を明す。仁王には五十一位を明す。金光明經には但十地佛果を出す。勝天王般若には十四忍を明す。大品は但十地を明す。涅槃は五行十功德を明す。義に約して位に配するに、三十心、十地、佛地を開するに似て、而も文に名を出さず。又十地論、攝大乘論、地持論、十住毘

婆沙論、大智度論は、並に菩薩の地位を釋して、而して多少出沒同じからず云云。又斷伏の高下も亦異なり。諸の法門に對するに行位も亦復殊別なり。然る所以は既に界內界外、生法兩身の菩薩の行位を明す。如來は方便、四悉檀を用ひて界內の衆生を化し、機に隨つて利益す。豈定んで說くことを得ん。廣く經論を尋ねずんば、日無うして日を評ふが如し。今若し位數を明すは、須く瓔珞、仁王に依るべし。若し斷伏の高下を明すは、須く大品の三觀に依るべし。若し法門に對するは、須く涅槃に依るべし。衆經の意を用て共に初心の觀教兩門を成じて、分明ならしむるのみ。諸聖の上位は凡の能く測るところに非ず。豈妄に說くべけんや。粗大意を知らしむるものは、行人の增上慢の心を破せんが爲なり。又經文を銷して物を引きて悕向せんが爲なり。偏に執して是非を諍競すべからず。今位の名數を判ずるに、瓔珞仁王に依るは、華嚴頓敎は多く圓頓の四十一地を明し、十信の名を出さず。諸の大乘經は多く諸の法門を明し、正しく位を辨ぜず。前四時の般若は多く菩薩の觀行法門の意を明し、亦正しく位を辨ぜず。今謂はく、瓔珞の五十二位は名義整足す。恐らくは是れ諸の大乘方等別圓の位を結するならん。仁王般若に五十一位を明すは、恐らくは是れ前四時の般若の別圓の位を結成するならん。涅槃に佛性を開して實を顯はし、一の圓位を顯はす。涅槃の大意は亦別圓の兩位を明して、名目を括出せず云云。斷伏の高下は大品の三觀に依るに、次第の義に於て便なり。觀、行の法門に對すること、涅槃の五行に依るは、正しく是れ持代入道の宜しき所なり。何となれば、別教

【二七】總じて位を明す。

に觀行を明すに二種有り。一に二乘に共せずして說くは、華嚴十地論、地持の九種の戒定慧、及び攝大乘論等の如き是れなり。二に二乘に共ずるを說くは、方等、大品、中論、釋論の如き是れなり。今涅槃の五行は凡より極に至る。故に是れ末代に行用するの要と爲るなり。

(二七)二に總じて菩薩の位を明すは、即ち三經に約す。一は瓔珞に約して位數を明すは、經に七位有り、十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺地を明す。初の十信心は即ち是れ外凡にして、亦是れ別教の乾慧地なり、亦伏忍の位と名く。十住は即ち是れ習種性なり。此より去つて三十心を擧して皆解行の位、悉く是れ別教の內凡なり、亦是れ性地なり、亦柔順忍の位と名く。別教の義に約して推せば、應に煖法の如くなるべし。十行は即ち是れ性種性なり。別教の義を以て推すに、應に頂法の如くなるべし。十廻向は道種性、別教の義を以て推すに、應に忍法、世第一法の如くなるべし。問ふ、『今別教を明すに何ぞ四善根の名を用ふるや。』答ふ、『別教の十地は既に四果に對す。今方便を以て四善根に擬するに、何の咎かあらん。又通教は通別眞似の兩解に通ずれば、此比次を作すに、義に於て分明なり。十地は即ち是れ聖種性なり。此れ皆別教の四果の聖位に入つて、悉く無明別見思の惑を斷ず。等覺の位は即ち是れ等覺性なり。若し菩薩に望むれば等覺佛と名く。若し佛地に望むれば金剛心の菩薩と名け、亦無垢地の菩薩とも名く。妙覺地は即ち是れ妙覺性なり、即ち是れ究竟の佛菩提の果、大涅槃の果果なり。

二に大品及び三觀に約し位に合して、斷伏の高下を明さば、大品に、「菩薩、道慧を具せ

【二八】別して七位を明す。

んと欲せば、當に般若を學すべし」と。卽ち此十信は從假入空の觀を習つて、愛見の論を伏し、十住の位に入らんと欲す。若し十住を得れば、卽ち界内の見思を斷ずるなり。道慧を以て道種慧を具足せんと欲せば、當に般若を學すべしと。此れ卽ち從空入假を修し、十行に入るなり。道種慧を以て一切智を具足せんと欲せば、當に般若を學すべしと。此れ卽ち中道正觀を修し、十廻向の位に入るなり。一切智を以て一切種智を具足せんと欲せば、當に般若を學すべしと。此れ卽ち是れ中道觀を證し、十地に入るなり。一切種智を以て煩惱の習を斷ぜんと欲せば、當に般若を學すべし。此れ卽ち等覺地なり、無明煩惱の習盡くるは、之を名けて佛と爲す。卽ち妙覺地なり。

三に涅槃に聖行を明すに約して位に合せば、初の戒聖行、定聖行は、卽ち是れ十信の位なり。生滅、無生滅の四眞諦の慧聖行は、卽ち是れ十住の位なり。無量の四聖諦の慧は、卽ち是れ十行の位なり。一實諦無作の四聖諦を修するは、卽ち是れ十廻向の位なり。次に若し眞を發して一實諦を見、無作の四聖諦を證するは、卽ち是れ聖行滿じて無畏地に住し、二十五三昧を得て、能く二十五有を破するを歡喜地と名け、五行具足す。次に後に十功德を說くは、恐らくは大涅槃に住する十地の功德を表するならん。此を過ぎて佛眼了了なるを明すは、是れ妙覺地なり。

（二八）三に別して七位を解するは餘本を尋ぬべし、大樹の位竟んぬ。

妙法蓮華經玄義卷第四下

妙法蓮華經玄義　卷第五上

天台智者大師の說

【一】最實位を明すとは、即ち圓教の位なり。此を十意と爲す。一には名義を簡び、二に位數を明し、三には斷伏を明し、四に功用を明し、五に麤妙を明し、六に位興を明し、七には位廢を明し、八には麤を開して妙を顯はし、九に經を引き、十に妙位の始終なり。

一に名義を簡ぶとは、若し圓と別との不同に、自ら十意あり。下の辨體の中に說かん。

今通、別、圓に約して三句を料簡す、一には名通義圓、二には名別義圓、三には名義倶に圓なり。名通義圓とは、下の文に云はく「我等今日眞の阿羅漢なり、普く其中に於て應に供養を受くべし」と。又云はく「我等今日眞に是れ聲聞なり、佛道の聲を以て一切をして聞かしむ」と。此名と通、藏と同じけれども、而も義異れり。何となれば、彼は但四住の賊を殺して、無明尚在り、此れ不生の義偏なり。故に天女の曰はく「結習未だ盡きずして華則ち身に著く」と、（是れ殺賊の義偏なり）。今は通別の兩惑を殺して如來の滅度を得、故に殺賊の義圓なり。又彼は是れ分段不生なれども界外に猶生ず、寶性論に云はく「二乘は無漏界に於て三種の意陰を生ず」と。今は則ち分段、變易の二倶に不生なれば、不生の義圓なり。彼は是れ界內の應供にして、界外の應供に非ず。淨名の曰はく「其汝に供ふる

【一】圓教最實位を明す。就中、初に十意を列ね、而して次に第一名義を簡ぶ。

【四住の賊】界內見思の煩惱なり、即ち見一切處住地、欲愛住地、色愛住地、無色愛住地の四を云ふ。

【二】圓教の位を明すに十意を分つ中、第二に位數を明す。卽ち先づ數を明すに就いて古師の解釋を擧げ、而して之を斥難す

は福田と名けず」と。則ち應供の義偏なり。今は則ち普く其中に於て供養を受くべし、則ち應供の義圓なり。彼は但小乘なれば他に從つて四諦の聲を聞く、則ち聲偏に聞偏なり。今は能く一切法界をして一實の四諦佛道の聲を聞かしむ。一切をして聞かしむるは則ち聲聞の義圓なり、故に知んぬ、義に依つて語に依らず、圓に從つて位を判ずることを。名別義圓とは、五十二位の如きは（共）名別と同じ、而して初中後位圓融妙實、隨自意語なれば、是れ教道の方便に非ず。義に依つて語に依らず、應に圓に從つて位を判ずべし。名義倶圓とは、文に云はく「開示悟入皆是れ佛の知見なり、佛の一切種智の知、佛眼の見なり。此知見は缺減有ること無し」と。又「如來の室に入り、如來の座に坐し、如來の莊嚴を以てす」と。是れ則ち名義倶に圓にして圓位を判ずるなり。

（三）二に位數を明さば又三となす。一には數を明し、二には引きて多少を證し、三に料簡なり。數とは、人の解同じからず。有が言はく「頓悟は卽ち佛にして、復位次の殊り無し」と。思益を引きて云はく「是の如く學する者は一地より一地に至らず」と。又有が言はく、「頓悟の初心は卽ち究竟の圓極なり、而して四十二位有る者は、是れ鈍根を化する方便をもつて淺深の名を立つる耳」と。楞伽を引きて言はく「初地は卽ち二地、二地は卽ち三地なり。寂滅眞如に何の次位か有らん」と。又有師の言はく「初に頓悟して十住に至るは卽ち是れ十地なり、而も十行、十廻向、十地有りと說くは、此は是れ重說なる耳」と。今謂はく、諸解悉く是れ偏取なり。然るに平等法界は、尙悟と不悟とを論ぜず。孰か淺深を辨

【三】次に正しく今家の正意を明す。即ち先づ總じて位を用ふるの意を述べ、次に位數を列ね、然る後五品の位を明す。第一に隨喜品なり。

ぜん。既に悟と不悟とを論ずることを得、何ぞ淺深を論ずることを妨げんや。究竟の大乘は、華嚴、大集、大品、法華、涅槃に過ぎたるは無し、法界平等、無說無示なりと明すと雖も、而も菩薩の行位は終に是れ炳然たり。又有人の言はく、「平等法界は定んで次位無し」と。今例して此語を難ず、眞諦に分別有り耶、眞諦に分別無し耶。見眞の者に七賢、七聖、二十七賢聖等を判ず。今實相平等にして次位無しと雖も、實相を見る者には次位を判ずるに何の咎かあらん。大論に云はく、「譬へば海に入るに、始めて入る者と、中に到る者と、彼岸に至る者と有るが如し」と。若し見眞に位を判ずるは江河の淺深の如し、若し實相に位を判ずるは海に入る深淺の如し。故に普賢觀に云はく、「大乘の因とは諸法實相、大乘の果とは亦諸法實相なり」と。

(三)諸の次位を論ずるは、徒らに臆說に非ず。契經に隨順し、四悉檀を以て、位を明すに妨げ有ること無し。還つて七種に約して以て階位を明す、謂はく十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺なり。今十信の前に於て、更に五品の位を明す云云。若し人宿殖深厚にして、或は善知識に値ひ、或は經卷に從ひて圓に妙理を聞く。謂はく、一法一切法、一切法一法にして、一に非ず一切に非ず、不可思議なり。前に說く所の如き、圓の信解を起す、一心の中に十法界を具し、一微塵に大千の經卷有るが如しと信ず。此心を開かんと欲して圓行を修す、圓行とは一行一切行なり。略して言つて十と爲す。謂はく、一念に平等に具足して思議すべからずと識り、己が昏沈を傷みて慈を一切に及ぼす。又此心常

【四】五品の中次に第二品を明す。

【五】五品の中次に第三品を明す。

に寂し常に照なりと知る。寂照の心を用ひて一切法を破するに卽空、卽假、卽中なり。又一心と諸心との若は通、若は塞なるを識る。能く此心に於て道品を具足し、菩提の路に向ふ。又此心の正助の法を解す。又己心及び凡聖の心を識る。又心を安んじて動ぜず、墮せず、退せず、散ぜず。一心の無量の功德を識ると雖も染著せず。十心成就す。要を擧げて之を言はゞ、其心念念悉く諸波羅蜜と相應す。是を圓教の初隨喜品の位と名く。

(四)行者の圓信始めて生ずれば善く將養すべし。若し事に涉つて紛動せば、道芽をして破敗せしめん。唯內に理觀を修し、外則ち大乘經典を受持し讀誦せば、聞に觀を助くるの力有り。內外相藉りて圓信轉た明かに、十信堅固なり。金剛般若に云はく「一日三時に、恆河沙の身を以て布施するは、一句を受持する功德に如かず」と。初品の觀智は目の如く、次の品の讀誦は日の如し。日に光有るが故に、目に種種の色を見る。論に云はく「實に於ては了因と名け、餘に於ては生因と名く。論は菩提に趣かず、(受持と讀誦との)二は能く菩提に趣く。」聞に巨益有ること、意此に在り。是を第二品の位と名く。

(五)行者の內觀轉た強く、外資又著はれ、圓解懷に在りて弘誓熏動す。更に說法を加へて實の如く演布す。安樂行に云はく「但大乘の法を以て答へよ」と。「設ひ方便を以て隨宜すとも、終には大を悟らしむべし」と。淨名に云はく「說法淨ければ則ち智慧淨し」と。毘曇に云はく「說法も解脫し聽法も解脫す」と。說法開導は是れ前人得道の全因緣なり、化の功已に歸して十心則ち三倍して轉た明かなり。是を第三品の位と名く。

【六】五品の中次に第四品を明す。

【七】五品の中次に第五品の位を明す。

(六)上來の如く、前に觀心を熟すれども、未だ事に涉るに遑あらず。今正觀稍明かなれば、即ち傍らに利物を兼ぬ。能く少施を以て虛空法界と等しく、一切法をして檀に趣かしむ、檀を法界と爲す。大品に云はく、「菩薩は少施を以て、聲聞、辟支佛の上に超過せば、當に般若を學すべし」とは、即ち此意なり。餘の五も亦是の如し、事相少しと雖も運懷甚だ大なり。此れ則ち理觀を正と爲し事行を傍となす、故に兼ねて布施を行ずと言ふ。事福をもつて理を資くれば、則ち十心彌盛なり。是を第四品の位と名く。

(七)行人の圓觀稍熟して事理融せんと欲すれば、事に涉つて理を妨げず、理に在りて事を隔てず。故に具に六度を行ず。若し布施の時は二邊の取著無く、十法界の依正一捨一切捨なり。財身及び命、無畏等の施なり。若し持戒の時は、性重、譏嫌等しうして等別有ること無く、五部の重輕觸犯する所無し。若し忍を行ずる時は、生、法寂滅し荷負安耐す。若し精進を行ずるも、身心俱に靜にして間無く退無し。若し禪を行ずる時は、諸禪に遊入し靜散妨げ無し。若し慧を修する時は、權實の二智究了通達し、乃至世智治生產業皆實相と相違背せず。具足して佛の知見を解釋し、而も正觀に於て火の薪を益すが如し。此は是れ第五品の位なり。此五品圓信の功德の如きは、東西八方も喩と爲すべからず。是れ初心なりと雖も、而も聲聞の無學の功德に勝る。具には經に說くが如し。若し比決して解を取らんと欲せば、類は三藏家の別總四念處の位の如し。義推するに通教の乾慧地の位の如く、亦伏忍の位の如し。義推するに亦是れ別教の十信の位を得云云。

【八】次に廣く諸位を釋する中、第一に十信の位を明す。

私に謂はく、五品の位は是れ圓家の方便の初なり。解し易からしめんと欲して、小に準じて大に望むれば三藏の五停心の如し。初品は圓に法界を信ず、上諸佛を信じ下衆生を信じて皆隨喜を起す。是れ圓家の慈停心にして、徧く法界の上の嫉妬を對治す。第二品は大乘の文字を讀誦す、文字は是れ法身の氣命なり、讀誦明利なるは是れ圓家の數息停心にして、偏に法界の上の覺觀を治す。說法品は能く自ら心を淨め、亦他心をも淨む。是れ圓家の因緣淨心にして、徧く法界の上の自他の癡を治す。癡去るが故に諸行去り、乃至老死も去る。兼行六度品は、是れ圓家の不淨停心なり、六蔽の初を貪欲と名く、若し貪欲を捨つれば欲の因、欲の果皆捨つ。捨つるが故に復報身無く、淨に非ず不淨に非ず。正行六度品は是れ圓家の念佛停心なり、正しく六度を行ずる時、事に即して而も理なり。理は道を妨げず、事は道を妨ぐ、事に即して而も理なれば、障の論ずべきもの無し。大意此の如し云云。

(八)一に十信の位を明さば、初に圓聞を以て能く圓信を起し、圓行を修し、善巧增益して、此圓行をして五倍して深明ならしむ。此圓行に因りて圓位に入ることを得るなり。善く平等法界を修するを以て即ち信心に入り、善く慈愍を修して即ち念心に入り、善く寂照を修して即ち進心に入り、善く破法を修して即ち慧心に入り、善く通塞を修して即ち定心に入り、善く道品を修して即ち不退心に入り、善く正助を修して即ち廻向心に入り、善く凡聖の位を修して即ち護法心に入り、善く不動を修して即ち戒心に入り、善く無著を修して即

【九】第二に十住の位を明す。

ち圓心に入る」是を十信の位に入ると名く。瓔珞に云はく「一信に十有り、十信に百有り、百法を一切法の根本と爲す」と。是を圓教の鐵輪十信の位と名く、卽ち是れ六根清淨なり。圓教の似解にして、煖、頂、忍、世第一法なり。普賢觀に無生忍を明す前、十境界有りとは、卽ち此位なり。此信心に入りて能く界內の見思を破し盡し、又界外の塵沙無知を破し、能く無明住地の惑を伏す。仁王般若に云はく「十善の菩薩大心を發し、長く三界の苦輪海に別る」と。亦此位なり。此位は纓絡に之を明すこと同じからず。華嚴に、法慧菩薩、正念天子に答へて、菩薩は十種の梵行空を觀じ、十種の智力を學して、初住に入ることを明す。十種の梵行空とは卽ち一實諦、亦無作の滅諦なり。十種の智力を學すとは卽ち無作の道諦を觀ず。卽ち十信の位なり。大品に云ふが若き「譬へば海に入るに、先に平相を見るが如し。亦是れ是乘は、三界の中より出づ」と。仁王般若と普賢觀は、前に引くが如し。下の文の入如來室座衣等は、卽ち是れ四安樂行の行處、近處を修す。涅槃に云はく「復一行あり、是れ如來行にして所謂る大乘なり」と。大論に云はく「菩薩は初發心より卽ち涅槃を觀じて道を行ず、若し涅槃を觀じて道を行じ、相似の解を生ずるは、卽ち是れ一行如來行なり」云云。

(九)二に十住の位を明さば、相似の十信より能く十住の眞中智に入るを以て、初發心住の發する時三種の心發す。一に緣因の善心發し、二に了因の慧心發し、三に正因の理心發す。卽ち是れ前の境、智、行妙の三種開發するなり。住とは、三德涅槃に住するなり。緣因の心

【首楞嚴定】佛所得の三昧の名。之に健相、一切事竟の意あり。健相とは佛德の堅固にして諸魔の壞すること無きを云ひ、一切事竟とは佛德の究竟を云ふ。

【三輪不思議】佛三輪を以て衆生の惑業を摧破す、其功力下達の謂る所に非ざれば名く。三輪とは神通輪、記心輪、正教輪なり。

發するは即ち是れ不可思議解脱、首楞嚴定に住するなり。慧心發するは即ち是れ摩訶般若畢竟の空に住するなり、正因の心發するは則ち是れ實相法身、中道第一義に住するなり。要を擧げて之を言はゞ、即ち是れ三德一切の佛法に住するなり。又淸淨圓滿の菩提心、無緣の慈悲、無作の誓願、普く法界を覆ふに住す。又一念の中に一切の萬行諸波羅蜜を成就するに住す。又一切種智圓に法界の見思無明を斷ずるに住す。又佛眼を得て、圓に十法界三諦の法を見るに住す。又圓に一切の法門に入るに住す、所謂る二十五三昧に冥に衆生を益す。又普門圓滿の業を成就し、能く一切の神通を顯はす。謂はく三輪不思議の化法界に彌滿し、頓に衆生を益す。又能く開權顯實を成就して、一乘の道に入る。又能く一切の佛土を嚴淨し、能く三業を起し、一切十方の佛を供養し、圓滿陀羅尼を得、一切の佛法を受持すること、雲の雨を持つが如し。又住能く一地より一切諸地の功德を具足し、心心寂滅して自然に薩婆若海に流入す。華嚴に云はく「初住の菩薩の所有の功德は、三世の諸佛も歎じて盡すこと能はず。若し具足して說かば、凡人は聞きて迷亂し、心狂を發さん」と。

私に謂はく、初住に十德を成就するは、應に是れ十信の中の十法似を轉じて眞となし、一住に十を具すべし。細意を以て之を尋ぬれば、對當相應せん。何となれば、十信の百法は一切法の本たり、豈此釋を作すことを得ざらん耶。初住既に爾り。三觀現前し、無功用の心に法界無量の無明を斷ずること稱計すべからず。一往大に分ちて、略して十品の智斷と爲す。即ち是れ十住なり。故に仁王に云はく「入理の般若を名けて住と爲す」と、即ち

【阿字門】諸法本不生の義を詮ずるに密敎にては阿字觀を依用す。

【龍女】提婆達多品に出づ、龍女は女身なれば五障あれども文殊の敎化に依り佛果を圓證したるを云ふ。

【一〇】第三に十行の位を明す。

【一一】第四に十廻向の位を明す。

是れ十番に進んで無漏を發し、同じく中道佛性第一義の理を見る。不住の法を以て淺より深に至り、佛の三德及び一切の佛法に住す、故に十住の位と名く。此位は諸經の出處同じからず、華嚴に云はく、「初發心の時便ち正覺を成じ、諸法眞實の性に了達す、所有の聞法他に由つて悟らず、是菩薩は十種の智力を成就し、究竟して虛妄を離れ、染無きこと虛空の如し。淸淨妙法身湛然として一切に應ず」と。當に知るべし、即ち是れ眞無漏を發して無明の初品を斷ずるなり。淨名に云はく、「一念に一切の法を知る、是を坐道場と爲す。一切智を成就するが故に、」亦是れ不二法門に入り、無生忍を得るなり。大品に明さく、「初發心より即ち道場に坐し、法輪を轉じて衆生を度す」と。當に知るべし、此菩薩を佛の如しと爲す。亦是れ阿字門なり、所謂る一切法初不生なり。即ち是れ今經の衆生をして佛知見を開かしめんが爲なり、亦是れ龍女は刹那の頃に於て菩提心を發し、等正覺を成ず、即ち是れ涅槃に明さく、「發心と畢竟との二別ならず、是の如きの二心には、前心を難しとなす」と。此諸の大乘悉く圓の初發心住の位を明す、乃至第十住云云。

(一〇)三に十行の位を明さば、即ち是れ十住より後、實相の眞明不可思議なり。更に十番の智斷もて十品の無明を破す、一行一切行念念に進趣して、平等法界海に流入し、諸波羅蜜任運に生長す。自行化他の功德虛空と等し、故に十行の位と名く。

(一一)十廻向の位とは、即ち是れ十行の後無功用の道なり。不可思議の眞明念念に開發す。一切法界の願行事理自然に和融して、平等法界海に廻入す。更に十番の智斷を證し、十品

【一二】第五に十地の位を明す。

【一三】第六に等覺の位を明す。

【無始の無明】吾人の無始已來先天的に具する根本無明にして台家にては之を微細の無明とも障中無明とも云ふ。

【一四】第七に妙覺位を明す。

【三德不縱不橫】法身、般若、解脫の三德各各常樂我淨を具し不一不異不縱不橫なること伊の三點、釋天の三目の如くなるを云ふ。

【一五】圓敎の位數を明す中、次に衆經の文を引きてその多少を明す。

の無明を破す。故に廻向と名くるなり。

（一二）十地の位とは、即ち是れ無漏の眞明無功用の道に入る。猶大地の如し、能く一切の佛法を生じ、法界の衆生を荷負し、普く三世の佛地に入る。又十番の智斷を證し、十品の無明を破す。故に十地の位と名く。

（一三）等覺地とは、無始の無明の源底を觀達して、邊際智滿じ、畢竟清淨なり。最後窮源微細の無明を斷じて中道の山頂に登り、無明の父母と別る、是を有所斷者と名け、有上士と名くるなり。

（一四）七に妙覺地を明さば、究竟の解脫、無上の佛智なり。故に無所斷者、名無上士と言ふ。此れ則ち三德不縱不橫にして、究竟後心の大涅槃なり。一切大なれば理大、誓願大、莊嚴大、智斷大、遍知大、道大、用大、權實大、利益大、無住大なり。即ち是れ前の十觀成乘の圓極（究）竟して佛に在り、茶を過ぎて字の說くべきもの無し云云。故に盧舍那佛を名けて淨滿と爲す、一切皆滿ずるなり。

（一五）二に次に衆經を引きて位數の多少を明さば、大涅槃に云はく「月愛三昧は初一日より十五日に至つて、光色漸漸に增長す」と。又「十六日より三十日に至つては、光色漸漸に損減す」と。光色の增長するは十五の智德摩訶般若を譬へ、光色の漸く減ずるは十五の斷德無累解脫を譬ふ。三十心を三の智斷と爲し、十地を十の智斷と爲し、等覺と妙覺は各一智斷と爲す。合して十五の智斷なり、月の體は法身を譬ふ。大經に云はく「月の性は常に

圓にして實に增減有ること無し、須彌山に因るが故に虧盈有り。增せずして而も增して白月漸く著はれ。減ぜずして而も減じて黑月稍く無し。法身も亦爾なり、實に智斷有ること無し。無明に因るが故に」と。如に約して智を論ずるに如は實に智ならず、如に約して斷を論ずるに如は實に斷ならず。智無しと雖も而も智なれば般若漸漸に明かなり、斷無しと雖も而も斷なれば解脫漸漸に（縛を）離れ、用を擧げて喩と爲すと、知んぬ、是れ圓敎の智斷の位なることを。大經に云はく、「初より諸子を秘密の藏、三德涅槃に安置して、然して後、我當に其中に於て、般涅槃すべし」と。此れ即ち最後の智斷なり。問ふ、『何ぞ月の喩は位を譬ふと知ることを得んや。』答ふ、「仁王に十四忍を明す、三十心を三般若と爲し、十地を十般若と爲し、等覺を一照般若と爲す。十四般若は菩薩の心中に在りて、皆名けて忍と爲す。轉じて佛心に至るを、之を名けて智と爲す。此れ十五日に智を明すの位と同じ。勝天王に十四般若の位を明すは、正しく十四日の月を用て譬となす。故に此說を作す。大品に四十二字門を明すも、「語等しく字等し。」南岳師の云はく、「此は是れ諸佛の密語なり、何ぞ必ず四十二位を表せざらん」と。諸の學人は、釋論を執して此解無しと云ひて、多く疑って用ひず。但論の本文は千卷なり、什師は九倍と作して之を略す、何ぞ必ず此解無からん耶。今謂はく、此解深く冥會すべし。何となれば、經に云はく、「初の阿と後の茶との中に四十有り、初の阿字門に四十一字具す」と、後の茶も亦爾なり。華嚴に云はく、「初一地より一切諸地の功德を具足す」と。此義即ち同じ。經に云はく、「若し阿字門を聞かば

則ち一切の義を解す、所謂る諸法初不生の故に」と。此れ豈圓敎の初住に初て無生法忍を得るに非ずや。茶を過ぎて字の說くべき無きは、豈妙覺無上無過に非ずや。廣乘品に、一切の法皆是れ摩訶衍なりと明し竟りて、即ち四十二字門を說く。豈圓敎の菩薩の初發心より諸法實相を得、一切の佛法を具するが故に阿字と名け、妙覺地に至って一切法の底を窮むるが故に茶字と名くるに非ずや。此義、共義、圓位とともに推せば自ら分明なり。又四十二字の後に即ち菩薩の十地を說く、此は是れ別敎の方便の次位を顯はすなり。又十地の後に次で三乘共の十地を說く、此れ通敎の方便の位を顯はすなり。經の文の次比三意宛然なり、今四十二字を取りて以て圓位を證す。此經の分別功德品に、初心の五品弟子の位を明すの文甚だ分明なり。法師功德品に六根淸淨の相を明す。方便品に云はく、「諸佛は一大事因緣の爲の故に世に出現す、衆生をして佛の知見を開かしむるが爲に」の四句あり。南岳師解して云はく、「開佛知見は是れ十住の位、示佛知見は是れ十行の位、悟佛知見は是れ十廻向の位、入佛知見は是れ十地、等覺の位なり。諸佛知と言ふは一切種智を得るなり、皆佛見と言ふは悉く佛眼を得るなり」と。又經に云はく、「是を諸佛の一大事因緣と爲す」とは、同じく一乘の諸法實相に入るなり。又云はく、「唯佛と佛とのみ乃ち能く諸法實相を究盡す」とは、即ち是れ妙覺の位なり。又譬喩品には、「諸子門外に車を索む、長者各等一の大車を賜ふ。是時に諸子、是寶乘に乘じて四方に遊び、嬉戲快樂し自在無礙にして、直に道場に至る」と。四方と言ふは即ち開、示、悟、入の四十位を譬ふ、直に道場に至ると

【一六】圓教の位數を明す中、第三に料簡。

【旋陀羅尼】旋轉分別して塵沙の惑を破り恆沙の佛法を顯はすを云ふ。旋陀羅尼とは聖智の異稱なり。

は即ち是れ實相を究盡する妙覺の位なり。序品の中の天より四華を雨すは、此四十の因位を表するなり。上に引く所の瓔珞經を證とするが如き、及び今の文に四十二位を明すを引くは、炳然として皆是れ無次位の次位なり。實相に達し、增道損生するに次位を論ずる耳。(一六)三に料簡とは、問ふ、「無明は佛性、中道を覆ふは、此四十二品と作して斷ずるのみならん耶」。答ふ、「無明は所有無しと雖も、有ならずして而も有なり、階品無きにあらず。一往大に分ちて四十二品と爲す。然るに其品數は無量無邊なり。大論に云はく、「無明の品類は其數甚だ多し、是故に處處に破無明三昧を說く」と。又云はく、「法愛盡き難ければ處處に重ねて般若を說く」と。此諸の圓位は不可思議なり、若し專ら法門に對せば、尋ぬる者は意を失し、多く別解別執して則ち圓融の道に乖かん。此の如き等の位は、凡情を以て局取すること莫れ、凡心を以て能く宣ぶるところに不ず。華嚴に云はく、「諸地は說くべからず」と、何に況んや以て人に示さんや。且らく是事を置く、若し大乘の懺悔をもつて、初隨喜圓信の心を發し一旋陀羅尼を護るも、已に人に向つて說くべからず。種種に分別すと雖も亦解せしむべからず、況んや後の諸位をや。二乘も、尙其名を聞かず、豈凡人をもつて能く說かんや。此語に意有り、大師自ら己證を說きたまふものなり。又且らく是事を置く。聲聞は四念處を學し、煖法を發得するも、亦外凡に向つて說き盡すべからず。設ひ種種に解すとも亦知ること能はず。又是事を置く、人の坐禪して初の五支を發するが如き、未證の者の爲に說くべからず。設ひ方便して說くも彼亦解せず。又是事を置く、斷輪人も其術

【一七】圓教の位を明すに十意を分つ中、第三にその斷伏を明す。文中また二大段ある中今先に正しく正位の伏斷を明す。

を以て其子に授くること能はず、況んや諸の深法を而も說くべけんや。末代の學者は、多く經論の方便斷伏を執して諍闘す云云。水の性の冷かなるが如きは、飲まずして安んぞ知らん。此れ乃ち諸佛の緣に赴く不思議の語なれば、機に隨ひて增減し位數同じからず。爾未だ證得せずして、空しく諍ひて何か爲ん。普く願はくは法界の衆生、併に歸して諍論を息め、大和合海に入らんことを。又四句を以て圓位を料簡す、或は初を開し後を合し、或は後を開して初を合し、或は初後俱に開し、或は初後俱に合す。大經に「三十三天不死の甘露を將臣共に服す」と明すが如きは、此れ諸位を譬ふ。前を開して三十心となし、十地を合して一と爲し、等覺を一と爲す。三十二臣を譬ふるは因位を喩へ、妙覺を主となすは果位を譬ふ。君と臣と同じく甘露を服すれば、因と果と俱に常樂を證するなり。若し開位を以て之を釋せずんば、此文會し難し。是を初を開して後を合し、以て圓位を明すと爲す。若し十四般若は三十心を合して三般若と爲し、十地を開して十般若と爲し、等覺に就いて十四般若と爲すは、皆是れ因位なり。轉じて薩婆若に入るは、即ち是れ果位なり。是を前を合し後を開して、以て圓位を明すと爲す。若し四十二字門は、即ち是れ初後俱に開して以て圓位を明す。若し天より四華を雨すは開、示、悟、入を表し、四方に遊ぶは、此れ即ち前後俱に合するなり。諸經の開合の不同は皆是れ悉檀方便にして、而も圓位宛然たり矣。

（一七）三に圓位の斷伏を明すとは、五品已に圓に一實の四諦を解す、其心念念に法界の諸波羅

【百千旋陀羅尼】空を旋轉して假に出で百千萬億の法に通達する假諦の智。

【法音の方便陀羅尼】中道に入るが故に法音說法に於て自在の方便を得て即ち中道の聖智をいふ。

蜜と相應す。諂僞、邪曲徼等の倒無くして圓に枝客根本の惑を伏す、故に伏忍と名く。諸教の初心には此義分無し。大經に云はく「大乘を學する者は肉眼有りと雖も、名けて佛眼と爲す」と。鼓中の鳴も諸鳥に勝る。例せば小乘の伏與の如し、佛法は則ち有り外道には則ち無し。今此伏忍は、圓教には則ち有り三教には則ち無し。十信の位は、伏道轉強くして似解を發得し、界內の見思、界內、界外の無知塵沙を破す。經の文に「三陀羅尼を得」と云ふが如きは、但似道を名く。未だ是れ眞道ならず。旋陀羅尼は是れ假を旋らして眞に入り、百千旋陀羅尼は是れ眞を旋らして俗に入り、法音方便は正しく是れ伏道にして未だ中に入ることを得ず。瓔珞の從假入空觀の如きは、見思を斷ずと雖も、但虛妄を離るるを名けて解脫と爲す。其實は未だ一切解脫を得ず。當に知るべし、六根淨しと雖も圓教の煖、頂、四善根、柔順忍、伏道の位のみ。若し初住に入れば眞の法音陀羅尼を得、正しく無明を破するを、始めて斷道と名く。佛性常住第一義を見るを、圓教の無生忍と名く。十行、十廻向、十地、等覺は皆無明を破す、同じく是れ無生忍の位なり。妙覺は斷道已に周く、究竟して成就するを、名けて寂滅忍と爲す。若し位に約して別して判せば、伏順の二忍は但伏して斷ぜず。例せば無礙道の如し。妙覺の一忍は斷にして而も伏に不ず、例せば解脫道の如し。無生の一忍は、亦は伏亦は斷、亦は無礙亦は解脫なり。若し通の義を論ぜば、妙覺の寂滅忍も亦無生忍と名く。大經に云はく「涅の言は不生、槃の言は不滅なり。不生不滅を大涅槃と名く」と。亦伏忍と名く、仁王に云はく「初發心より金剛の頂に至るまで皆

【一八】圓位の伏斷を明す中、次に兼ねて諸位を明す。

伏忍と名く」と。伏は是れ賢の義なり、普賢菩薩は衆伏の頂に居す。伏忍既に通ず、順忍は解すべし。伏順既に共れ上に通ず、寂滅無生も亦下に通ずべし。思益に云はく「一切衆生即ち滅盡定なり」と。淨名に云はく「一切衆生皆如なり」と。如は即ち無生忍なり。又事に就いて無生と爲し、理に就いて寂滅と爲す。又分證は寂滅と爲せども、果に讓つて無生と爲す。若し因果に約せば、亦通別あり、通とは一切衆生即ち大涅槃なり、即ち是れ因に約して果を論ず。佛性とは之を名けて因と爲す、此れ即ち果に約して因を論ず。大經に云はく「是れ果にして因に非ざるを大涅槃と名け、是れ因にして果に非ざるを名けて佛性となす」と。了かに佛性を見るは乃ち是れ佛に於てす、故に亦是れ因なることを得云く。等覺を妙覺に望めて因と爲し、菩薩に望めて果と爲す。自下已去は亦は因、亦は因因、亦は果、亦は果果なり。分別の義に約せば、伏順の二忍は未だ是れ眞因ならず、無生の一忍は未だ是れ眞果ならず。十住より去つて眞因と名け、妙覺を眞果と名く。云何ぞ伏順は眞因に非ざる、例せば小乘方便の位を修道と名けず、見諦已去を眞修道に約するが如し。此義知んぬべし。今圓忍の中に見思を斷除するは、水上の油の虚妄にして吹き易きが如し。無明は是れ同體の惑なり、水内の乳の如し。唯登住已去の菩薩鵞王は、能く無明の乳を唼んで法性の水を清うす。此より已去乃ち眞因を判ず。

（一九）復次に別教に、三地或は四地に見を斷じ盡し、六地或は七地に思を斷じ盡すと判ず。此れ應に爾るべからず。何となれば無明の見思は體を同じうするの惑なれば、何ぞ前後に斷

ずることを得ん耶。當に是れ別教を小乘に附傍する方便の説なるべき耳。若し見先に盡きなば則ち實理に復障り有ること無し、云何ぞ十地の見は了了ならざらん。地持に云はく、「第九に離一切見清淨淨禪」と。第九は是れ等覺地なり、離見禪に入りて乃ち大菩提の果を成ず。若し見先に斷ぜば等覺復何の離る所かあらん。若し思前に盡きなば、後の地は應に果報及び諸の禪定なかるべし。何となれば、華嚴に明す阿僧祇の香雲華雲不可思議にして法界に充塞する者は、此は是れ菩薩勝妙の果報の感ずる所の五塵なり、此を呼んで欲界の思惑と爲す。一切の菩薩皆無量百千の三昧禪定心塵の法に入出する、此を呼んで色無色界の思惑と爲す。若し七地に思盡きなば、十地に應に六塵を絶すべし、何が故ぞ復三賢十聖は果報に住すと言ふ。若し果報に住せば、思は前に盡きず、今明さく、此の如く見思は通じて十地に至り、佛に至つて方に盡く。故に唯佛のみ一人淨土に居し、唯佛のみ一人能く源を盡すと云ふ。是故に、伏斷は、前に分別するが如し云云。問ふ、「界內は必ず先に見を斷じ、次に思、後に無知なり。界外は何の意ぞ爾らざるや。」答ふ、「界內は三途の苦重きが爲に先に見を斷じ、次に思、後無知に及ぶ。界外は苦輕し、故に先に枝、後に本なり。又思と無知は偏眞を障へず、眞理を見るが爲の故に先に見を除く。界外の塵沙は是れ體上の惑なり、遠く能く理を障ふ。先に遠障を卻け、次に近障を除く云云。復次に三藏の中の後身の菩薩、及び超果の二乘は、見思同じく斷ず。亦先に思を斷ず云云。不超果の者は前後斷のみ。通教も亦超、不超の二義あり、別教は前後斷、圓教は同斷なり。前後

【一九】圓教の位を明すに十意を分つ中、第四に功用を明す。

の間は、但一途を見るのみ云云。

（一九）四に功用を明すに、若し字を分ちて義を解せば、功は自進を論じ、用は益物を論ず。字を合して解せば、正しく化他を語ふ。五品の位は理未だ顯はれずと雖も觀慧已に圓なり、煩惱性を具して能く如來祕密の藏を知り、世間の爲に初依止と作るに堪へたり。此人に依止するは猶如來の如し。當に知るべく、久しからずして道樹に詣り、三菩提に近づく。一切世間皆應に向つて禮すべし、一切の賢聖皆之を見んことを樂ふ。若し六根似解は、圓觀轉た明かにして長く苦海と別る、能く一妙音を以て三千界に徧滿し、意の至る所に隨つて、一切の天龍皆其處に向つて法を聽き、其人に所說の法有れば能く大衆をして歡喜せしむ、猶是れ第一の依止なり。涅槃に四依を標するは、義圓と別とに通ず。人師多く別に約して判ず、地前を通じて初依と名け、登地より三地に至つて見を斷じ盡すを須陀洹と名け、五地に至つて思を侵すを斯陀含と名け、是れ第二依なり。七地に至つて思盡くるを阿那含と名く、是れ第三依なり。九地より十地に至つて欲、色、心の三習盡くるを阿羅漢と名く、是れ第四依なり。若し圓を推して別に望むれば、應に十住に約して三依を明し、住前に對して四依と爲すべし。若し始終を判ずれば、五品、六根を初依と爲し、十住を二依と爲し、十行、十廻向を三依と爲し、十地、等覺を四依と爲す。初住より已上總じて功用を論ず、若し豎の功未だ深からずんば橫の用廣からず、豎の功若し深ければ橫の用必ず廣し。譬へば、諸の樹の根深ければ則ち枝潤く、華葉亦多きが如し。初住に豎に一分の無明を破し、一

【二〇】圓教の位を明すに十意を分つ中、第五に麤妙を論ず。

分の二十五三昧を得、一分の我性を顯はす。其實處を論ずれば不可思議なり。教門に依れば、横は則ち百佛世界に分身散影し、十法界の像と作りて衆生を利益す。是の如く住住に竪に入り、倍倍轉深し、無明漸漸に薄き三昧轉轉して增し、我性分分に顯はれ、横用稍稍に廣し、千佛世界、萬佛世界、恒沙佛世界、不可說不可說佛世界なり。是の如きの界に徧じて八相成道し衆生を敎化す、況んや餘の九法界の身をや。諸行諸地も亦復是の如し。其滿足を論ぜば、唯佛と佛とのみ乃ち能く無明の源を究盡す。故に經に言はく、「佛心の中の如きは無明無し、唯佛法王のみ究竟の王三昧に住す、毘盧遮那法身は横に法界に周く、竪に菩提を極め、大功圓滿し勝用具足す」云云。

（三〇）五に諸位に通じて麤妙を論ぜば、小草は止四趣を逸れて動ぜず出でず。中草は復動出すと雖も智源を窮めず、恩物に及ばず。上草は能く兼濟すと雖も、化を滅すれば拙と爲す。小樹は巧なりと雖も功は界內に齊る。故に其位皆麤なり。大樹實事は、同じく中道を證じて皆無明を破し、倶に界外の功用有り。故に此位を妙と爲す。而して別教は方便門より曲逕紆迴し、所因の處拙なれば、其位亦麤なり。圓敎は直門なり、是故に妙と爲す。又三藏の菩薩は全く惑を斷ぜず、圓教の五品に望むるに、齊有り劣有り。同じく惑を斷ぜず、是故に齊と言ふ。五品は圓に常住を解す、彼は全く常住を聞かず、是故に劣と爲す。若し三藏の佛の位は見思を斷じ盡す、六根淸淨の位に望むれば齊有り劣有り。同じく四住を除くは、此處を齊と爲す。若し無明を伏すれば、三藏は則ち劣なり。佛すら尚劣と爲す、二

乘は知んぬべし。當に知るべし、三草は蒙籠して生の用淺短なり、故に其位皆鈍なり。若し乾慧地、性地を五品の位に望むるに齊有り劣有り、前に例すと云云。若し八人八地に見思盡き、七地に方便を修し、佛に至つて習を斷じ盡すは、圓教の似解に望むるに齊有り劣有り。前に例して解すべし。當に知るべし、小樹の位は未だ干婆娑の能有らず、是故に皆鈍なり。若し別教の十信を五品の位に望むるに齊有り劣有り、同じく未だ惑を斷ぜず、是故に齊と爲す。十信は歷別にして五品は圓解なり、此れ則ち優と爲す。別教の十住は通の見思を斷じ、十行は塵沙を破し、十迴向は無明を伏す。秖圓家十信の位と齊し。優劣は云云。若し登地に無明を破するは、秖圓家の初住と齊し。何となれば、若し十地には十品に無明を破し、圓家の十住も亦十品に無明を破す。故に十地を開して三十品とするも、秖是れ圓家の十住の三十品と齊し。若し與へて論を爲さば、圓家は十住を開せず、三十心を合せ取りて三十品と爲し、別家の十地の三十品と等しからしめば、則ち十地と圓家の十迴向と齊し。若し奪つて論を爲せば、別家の佛地と圓家の初行と齊し。與へて論を爲せば、別家の佛地と圓家の等地と齊し。故に知んぬ、別教の權說に佛を稱すれば則ち高く、實に望めて言を爲さば其佛猶下る。譬へば、邊方未だ靜かならざれば官を授くること則ち高く、爵を定め勳を論ずれば官を置くこと則ち下るが如し。別教の權說は高しと雖も而も麤、圓教の實說は低しと雖も而も妙なり。此譬解すべし。我因を以て汝が果と爲せば、別の位は則ち麤なり。當に知るべし、大樹は已圓なりと雖も、要ず地に因りて方に漸く生長する

【二】圓教の位を明すに十意を分つ中、第六に位興を明す。

【三】圓教の位を明すに十意を分つ中、第七に位廢を明す。

ことを。是に知んぬ、圓位は初より後に至るまで皆是れ實說なり、實に代し實に開す、倶に皆妙と稱す云云。大論に云はく、「雪山に樹あり、名を好堅と曰ふ。地に在ること百歲、一出卽ち長きこと百丈にして、衆樹の頂きを蓋ふが如し」と。此れ圓の位を譬ふるなり。

(三三六)六に位興を明さば、問ふ、「權位皆實ならば、佛何の意をもつてか之を說きたまふ耶」。答ふ、「諸の衆生は好樂同じからず、生善の緣同じからず、過を知り惡を改むること同じからず、說に當つて悟を取ること同じからざるが爲なり」。是故に如來の種種の諸說は皆利益あり。若し界內の好樂に隨はば、前の兩教の位を說く。若し界外の好樂に隨はば、後の兩教の位を說く。界內の事善を生ずるには、三藏の位を說く。界內の理善を生ずるには、通教の位を說く。界外の事善を生ずるには別教の位を說き、界外の理善を生ずるには圓教の位を說く。界內の事惡を破するには、三藏の位を說く。界內の理惡を破するには、通教の位を說く。塵沙の事惡を破するには、別教の位を說く。無明の理惡を破するには、圓教の位を說く。事を緣じて眞に入るには、三藏の位を說く。理を緣じて眞に入るには、通教の位を說く。事より中に入るには、別教の位を說く。理を緣じて中を見るには、圓教の位を說く。是義の爲の故に、諸の位興ることを得、階差高下無量なり矣。

(三三七)七に位廢を明さば、理は本より位有ること無く、位は緣の爲に興る。緣既に迸に興れば位亦迸に謝す、是れ法華に始めて復廢するに非ず。須く諸の破立の意を識るべし、

妄に破し妄に立つることを得ざれ。何となれば、元夫れ如來の三藏の位を立てたまふは、權に事善を生ず、事善既に生じて用を濟すこと若し足らば便ち廢すべし。通別の位も亦是の如し、此は是れ如來の破立の意なり。若し毘曇婆沙の中に菩薩の義を明すは、龍樹往往に之を破す。謂はく、其れ佛の方便を失す、是故に、須く破すべし。佛の方便を申ぶ、是故に須く立つべし。此は是れ龍樹の破立の意なり。若し常途の大乘師は、全く三藏を整理せず、此れ則ち佛の方便を失す。常途の小乘師は、經の義を採り取りて弘むる所の論を釋し、菩薩の義を辨ず。毘婆沙に自ら菩薩の義を說いて、而も肯て用ひず。大乘經を取りて三藏空有の二門を解するは、豈相會すべけんや。此れ二過有り、一には佛の方便を埋め、二には論主の菩薩の義を解せざることを彰はす。是故に須く破すべし。縱令經を引きて大乘の義を釋すとも、是れ何等の大乘ぞや。若し通教の大乘と作さば、三乘同じく眞諦に入り、佛に至るも亦然り。那ぞ八地に中道を觀じて無明を破するを得ん。通の義を作すこと成ぜず、是故に須く破すべし。若し別教の大乘の義と作さば、始初心より二乘と異る、那ぞ六地に將に羅漢と齊しきことを得ん。別の義を作すこと成ぜず、是故に須く破すべし。又別は是れ方便なり、權を執して實を謗ず、是故に須く破すべし。往は人往いて義定まるも、今は其過を窺ひ見る。是故に須く破すべし。佛の方便を申ぶれば、復應に須く立つべし。即ち是れ今時の破立の意なり。而して圓教は一師より起る、三權を超えて一實に即す、境、智、行、位前と同じからず。若し文理會すること有らば、夷途共に

【三阿僧祇劫】三無數劫のこと。菩薩の佛果を得るに至るまで經る修行の年時なり。

遊び、旨を失し轍に乖く、請ふ良導に從へ。先に此意を敍し、次に位を廢することを明さん。若し佛機に赴きて興廢破立するは、無量義經に云ふが如し。無量の法とは一法より生ず、所謂る二道、三法、四果なりと。二道とは卽ち頓漸なり、三法とは卽ち三乘なり、四果とは四位なり、此無量の法は一法より生ず。何となれば、二道は旣に是れ頓漸なり、頓は卽ち大道にして日高山を照す、（今）且らく置いて論ぜず。今漸道の初を明さば卽ち三藏教なり、教に云はく、「佛を求めば當に三阿僧祇劫に六度の行を修し、百劫に相を種うれば乃ち佛を得べし」と。事善を生ぜしめんと欲するが故に是說を作す。佛を求めんと欲する者は、惡を改めて善に從へば善立ちて教廢す。卽便ち破して曰はく、「豈菩薩の結惑を斷ぜずして、而も菩提を得ること有らんや。毒器は食を貯ふるに任へざるが如し」、此教卽ち廢すれば行位皆廢す。本果を望んで因を行ず、果の望むべきもの無くんば佛智、佛位倶に廢す。若し二乘に約して廢を辨ぜば、本事の行をして心を調へしめ、拙度に從つて眞を見る、眞を見ること已れば教意卽ち足る、是故に析教廢す。此諸義の爲の故に、藏を廢して通を立つと言ふ。元通教を稟けて三藏を學せずんば、此人に於ては廢を論ぜず。通を立つるの意は理善を生ぜんが爲なり、體法は惑を斷じ、巧度に從つて眞に入る、教の意卽ち足る。智者は空を見、復應に不空をも見るべし。那ぞ恆に空に住することを得ん、通教則ち廢す。菩薩の行智悉く廢し、佛の智位亦廢す云云。二乘は但教廢す、餘は云云。此通教は、通に通じ別に通ず。共般若の意は上に說くが如し、不共般若の意は則ち廢せざること有り云

云。故に知んぬ、成論、地論師は、秖共般若の意を見て不共般若の意を見ず。中論師は不共の意を得て、共の意を失す。通教は既に兩意を具す、通の菩薩及び方便の聲聞に於ては卽ち是れ廢の意なり、住果の聲聞は未だ是れ廢の義にあらず、不共の菩薩は則ち不廢の義なり云云。若し別起る時は、「界外の事善を生ず。若し無知塵沙を破して事善已に成ずれば、教意卽ち足る、復破すべし。此れ隨他意語なり、是故に別教の教廢し地前の行位悉く廢す。地上の位及び佛位皆高を廢して下に歸す、是故に別を廢して圓を立す。圓の八番の位は皆是れ實位なり、故に廢すべからず。大經に云はく、「一切の江河悉く廻曲有り、一切の叢林必ず樹木有り。諸教は情に隨ふが故に廻曲有り、三草二木は是れ佛の方便なるが故に眞實に非ず、宜しく位を廢すべし。金沙大河は直に西海に入り、金銀の樹は、悉く是れ寶林なり、曲に非ずして是れ直なり、是故に廢せず。昔頓より漸を出す、漸は頓に合せず、漸を引いて頓に入らしめば處處に廢すべし。今已に頓に會す、頓何ぞ廢すべけん。文に云はく、「始め我身を見る」云云、是故に一教は廢せず。又云はく、「但無上道を說く」と、此道（卽ち）廢せず。昔は一佛乘に於て分別して三と說けば三乘は合せず、三をして一に合せしめんと欲せば處處に須く廢すべし。今三を會して一に歸し、同じく一乘に乘ず。是故に一行は廢せず。昔は四果隔別す、羅漢、辟支佛、菩薩の智果、方便の佛果を謂ふ。又四佛を四果と爲す、此果を合せんと欲せば處處に須く廢すべし。今は草菴已に破し、化城又滅し同じく寶所に至る、是故に一果は廢せず。若し是義に從はば、三は廢し一は廢せ

ず。然るに三教に廢あり不廢有り、何となれば、得道の夜より泥洹の夜に至つて說く所の四阿含經を、結して聲聞藏と爲す。初教何ぞ曾て廢せん。前人の事善を成じ後人の事善に逗ず、故に廢あり不廢有り。通教は前を成じ後に逗するも亦是の如し。別教の前を成じ後に逗するも亦是の如し。圓教には立あり不立有り、初高山を照すは已に自ら是れ立、三藏に於ては不立なり。文に云はく、「始我身を見て如來慧に入る」と。即ち是れ前の立なり。「小を學する者今佛慧に入る」と、即ち是れ後立なり。中間は知んぬべし。諸の行智に廢あり不廢有り。諸の果位に廢あり不廢有り。若し諸味に歷れば、乳味に兩教有り、一の教、行、位は亦は廢亦は不廢、一の教、行、位は不廢なり。酪の教、行、位は廢あり不廢有り、生蘇の四教は三の教、行、位は廢あり不廢有り、一の教、行、位は廢せず。熟蘇の三教は兩の教、行、位は廢あり不廢有り、一の教、行、位は廢せず。法華は三の教、行、位は皆廢し、一の教、行、位は廢せず。但無上道を說き、同じく一の寶乘に乘じ、俱に直に道場に至る、故に三義皆廢せず。無量義に云はく、「二道、三法、四果合せず」と。法華に至りて皆合す、故に廢を論ぜざるなり。成道より已來四十餘年未だ眞實を顯はさず、法華に始めて眞實を顯はす。相傳へて云はく、「佛年七十二歲にして法華經を說きたまふ」と云云。又教廢して行、位は廢せず、行、位廢して教は廢せず、俱に廢し俱に廢せず。云何が教廢して行、位廢せざる、住果の聲聞は猶草菴に在るは、行、位廢せずして而も教廢するなり。云何か行、位廢して教廢せざる、利根の密益は教を廢するを待たずして早く行、位を休むる者是れなり。云何が俱

【四弟子】信解品に須菩提、迦旃延、迦葉、目犍連の四弟子長者窮子の譬を以て所得を告白するを云ふ。

に廢する、三藏の菩薩是れなり。云何が倶に廢せざる、後緣に逗ずる者是れなり。通教、別教は此に例して解すべし云云。若し應權に就かば、三の教、行、位は立して一は立せず。若し廢權に就かば、三の教、行、位は廢して一は廢せず。若し利根に就かば、一は立し三は立せず。若し鈍根に就かば、三は立して一は立せず。若し鈍を轉じて利と爲すに就かば、一は立し三は立せず。利鈍合論せば亦は立亦は不立、亦は廢亦は不廢なり。若し平等法界に就かば、立に非ず不立に非ず、廢に非ず不廢に非ず。又教を廢して更に教を聞き、自ら教を廢して更に教を聞かざる有り、自ら教を廢せず更に教を聞く有り、自ら教を廢せず更に教を聞かざる有り。云何が教を廢して更に教を聞くとは、六度の事善を廢して更に亡三の理善を聞くが如し。云何が教を廢して更に教を聞かずとは、住果の二乘の教を廢し已りて滅に入るが如し。云何が教を廢せずして更に教を聞くとは、次第の學者に逗するに方等の中並に小大の名を聞く者の如し。云何が廢せずして更に聞かずとは、今の大教を廢せずして、而も密に入る者なり。又智を廢して更に智を修し、智を廢せずして更に智を修し、智を廢して智を修せず、智を廢せず智を修せず。云何が智を廢して更に智を修す、三藏の菩薩の已が智を廢して更に無生智を修するものこれなり。云何が智を廢せずして更に智を修す、住果の聲聞は已が智を廢せずして、還、復遊觀して無生智を學するも、實に巧智を用て結を斷せざるなり。又次第習の者も是れなり。云何が智を廢せず智を修せざる、亦是れ住果の聲聞は滅度の想を生じて、肯て大を修せざるなり。四弟子の領解に、我昔身體疲懈し、

【二三】圓教の位を明すに十意を分つ中、第八に麤を開して妙を顯す。

但容無相觀を念じて、菩薩の法に於て都て厭棄の心無しと云ふが如き者是れなり。及び頓に後の緣に通ずる者是れなり。云何が智を興して智を修せざる、三藏の智を實する菩薩の退いて諸惡をなす者是れなり、亦是れ智を廢し已つて密に頓の中に入り、方便智を修せざるもの是れなり。又位を廢して更に位に入り、位を廢して位に入らず、廢せず更に入らず、廢せずして而も入る。云何が位を廢して更に位に入る、三藏の菩薩の不斷惑の位を廢して斷惑の位に入るもの是れなり。云何が位を廢して更に位に入らざる、謂はく位を廢して密に頓を悟る者次第の位に入らざるなり。云何が位を廢せず更に位に入らざる、謂はく住果の二乘是れなり。云何が位を廢せずして而も更に位に入る、謂はく後の緣に通ずる者なり、亦是れ未だ廢せずして密に悟りて上位に入るなり。通教、別教の智位を料簡するも、亦應に此の如くなるべし云云。問ふ、「廢して更に修するは益あるべし、廢して更に修せざれば何の益か有らんや」。答ふ、「自ら修を廢して益を得ること有り、自ら詞責すれば聞きて修せずと雖も、而も小の鄙劣を恥づること有りて、其取證を折くの心有り、亦是れ益あるなり。又其開絕に約すれば、謂つて益無しと言へども、廻心して大に入れば即ち是れ益を得云云」。

（二三）八に麤位を開して妙位を顯はすとは、若し三を破して一を顯はす相待の意は前の如くなるを得べし。三に即して是れ一なる絕待の意は、義則ち開らず。何となれば、昔の權は實を蘊めて華の蓮を含めるが如し。權を開して實を顯はすは華開きて蓮現はるるが如し、此華を離れ已つて別に更に蓮有ること無く、此麤を離れ已つて別に更に妙有ること無し。何

ぞ麤を破して妙に往くことを須ひん、但權位を開して即ち妙位を顯はすなり。生死の麤心を開すとは、凡夫に反覆有り、菩提心を發し易く、生死即ち涅槃にして二無く別無く、麤に即して是れ妙なることを明すなり。若し始め凡夫より析、體、別、圓の四心を發さば、亦是れ因位の初心皆是れ因緣所生の心にして、即ち此れ因緣即空即假即中なれば、圓の初心と無二無別なり。諸の初心は是れ乳に妙を顯はす、即ち是れ毒を乳の中に置かば即ち能く人を殺す。殺に遲速有り、若し位を按じて而も妙なるは即ち假名妙を成じ、若し進んで方便に入るは相似妙を成じ、若し進んで理に入るは即ち分眞妙を成ず云云。若し六度權の位行を開せば、權即ち因緣生の法にして即空即假即中なれば、權を開して實相を見ることを得。乃至般若も亦復是の如し。亦毒を乳の中に置かば即ち能く人を殺すと名く。按位は即ち假名妙なり、若し方便に進めば相似妙を成ず。若し進んで理に入らば分眞妙を成ず云云。方便の聲聞の未だ位に入らざる者の權を開して實を顯はすも亦是の如し。三藏の斷結の位は若し未だ權を開せずんば永く反復無し、焦種の芽無きが如し、今析空は開すれば即假即中なり、毒を酪の中に置くが如し、亦能く人を殺す。麤を按ずるに即ち妙、是れ相似の位なり、若し進んで入らば位に隨つて妙を判ず。次に通教の三乘、菩薩を開するも亦是の如し、出假の菩薩の位は、此假を決了するに假即ち是れ中なり。毒を生蘇に置きて、而して能く人を殺すが如し。麤を按じて即ち妙なるは是れ相似の位なり、若し進んで入るは位に隨つて妙を判ず。若し別教の十信の位を開するは前に同じ。若し十住を開するは二乘に同

【二四】圓教の位を明すに、十意を分つ中、第九に經文を引きて成ず。即ち初にその來意を叙し、次に正しく經文を引くに、初に四教。

と云云。若し十行の位を斷するは通教出假の菩薩に同じ、若し十廻向伏無明の位を斷するは此に卽して而も中なり、是を毒を熟蘇に置きて卽ち能く人を殺すと名く。麁を接するに卽ち妙なるは是れ相似の位なり、若し進んで入るは位に隨つて妙を得ず、若し登地の位決了せざる者は祇是れ推度の位なり。今此權を決して實を顯はすことを得せしむるは、卽ち是れ毒を醍醐に置きて而も人を殺す。麁を接するに卽ち妙なるは是れ十住の位なり、若し進んで入るは位に隨つて妙を得す。若し諸の權を決せば或は接位妙、或は進入妙なり、麁の待すべき無く、同じく一妙を成ずること、其義已に顯はる。今更に重論せば、譬へば小國の大臣大國に來朝して、本の位次を失ふが如し。行伍に預ると雖も限外の客官なり。若し大國の小臣心存寵貴すれば、位乃ち未だ高からざれども他に敬貴せらる。諸教の諸位、實を決して妙に入るに入流を得と雖も、圓教の人妙に比せんと欲するに難し。是れ鈍の中より來る。圓教の初心は未だ位に入らずと雖も、能く如來種の中を知れば卽ち喚んで佛と作す。初心尙爾り、何に況んや後位をや云云。

九に涅槃の五譬を引きて、圓教の位を成ず、若し圓教を將て譬を消せずんば、譬を解すべからず。若し五譬は圓教の位を判ずるに非ずんば、信を取ること難しと爲す。若し經文を信ずれば則ち位の意曉らめ易く、諸位の意を解せば皎皎冷然たり。彼此相須つて兼美なる者と謂ひつべし。彼文に云はく「凡夫は乳の如く、須陀洹は酪の如く、斯陀含は生蘇の如く、阿那含は熟蘇の如く、阿羅漢、(辟支佛、)佛は醍醐の如し」と。此れ三藏の五位を譬

ふ。何となれば、凡夫は全く生うして未だ惑を除くこと能はず、菩薩も亦爾なり、但乳の如くなるを得るのみ。須陀洹は見を破し、凡を革めて聖と成る。乳變じて酪と爲るが如し。斯陀含は六品の思を侵す、故に生蘇の如し。阿那含は欲界の思を盡す、故に熟蘇の如し。阿羅漢と支佛と佛とは皆三界の見思を斷じ盡す、故に同じく醍醐と稱す。故に釋論に云はく、「聲聞經の中には、阿羅漢地を稱して佛地と爲す」と。故に共じて一味と爲す。問ふ、『此經には三藏の菩薩を以て上草と爲す、涅槃經には云何かしてか菩薩を以て乳味とするや』答ふ、『經は化他の邊の強きを取りて之を上草に喩へ、此中は自證の分に約ければ凡夫に同じく乳味と爲す云云』三十二に云はく、「凡夫は雜血の乳の如く、須陀洹、斯陀含は淨乳の如く、阿那含は酪の如く、阿羅漢は生蘇の如く、支佛、菩薩は熟蘇の如く、佛は醍醐の如し」と。此れ通教の五位を譬ふるなり。凡夫は惑を斷ぜざれば、乳の雜血を雜ふるが如し。二果は思を侵すこと未だ多からざれば、初果に同じく乳の如し。三果は欲の思已に盡す、故に酪の如し。四果は見思倶に盡す、生蘇の如し。支佛は智利にして習を侵せば小しく聲聞に勝る、故に菩薩と共に熟蘇の如し。十地を佛地と名く、即ち是れ醍醐なり。前は菩薩を凡味に同ずるを以て、故に是れ三藏なることを知る。今は菩薩を支佛に同ずるを以て、故に是れ通なることを知る。若し通と作して解せずんば、雙の義何に由りてか解すべけんや云云。

妙法蓮華經玄義卷第五上

【一】圓教の位を明すに十意ある中第九に經文を引きて成ずるに、今即ち四教の中別教なり。

妙法蓮華經玄義　卷第五下

天台智者大師の說

（二）第九卷に、凡夫の佛性は牛の新に生じて、血乳未だ別れざるが如く、聲聞の位は清淨の乳の如く、支佛は酪の如く、菩薩は生、熟蘇の如く、佛は醍醐の如し。此れは別教の五位なり。乳は無明を譬へ、血は四住を譬ふ。凡夫は此を具するが故に雜血と言ふ。十住に已に四住の血を斷ず、二乘と齊し、故に聲聞は乳の如しと言ふ。十住の後心は理明に智利なれば、支佛の習を侵すに類す。故に酪の如しと言ふ。十行に塵沙を破するは、生蘇の如し。十廻向に界外の塵沙を破するは、熟蘇の如し。故に菩薩は生、熟蘇の如しと言ふ。登地に無明を破して佛性を顯はし、一身無量身を得て百佛世界に八相作佛す。故に佛は醍醐の如しと言ふ。二十五に言はく、「雪山に草有り、名けて忍辱と爲す。牛若し食すれば即ち醍醐を得」と。牛は凡夫を譬へ、草は八正を譬ふ。能く八正を作して即ち佛性を見るを、醍醐を得と名く。此は圓教に大直道を行じ、一切衆生を行ずるに即ち涅槃の相復滅すべからざるを言ふ。圓に信じ圓に行じて次別に由らず、一生の中に於て即ち初住に入り、佛性を見ることを得。牛の忍草を食するが如し。四味を歷ずして、草より醍醐を出す。故に知んぬ、圓教の意なることを。忍草は境妙を譬へ、牛は智妙を譬へ、食するは行妙を譬

【一二】經文を引きて釋する中、次に不定醍醐なり。

へ、醍醐を出すは佛性を譬ふ。此れ圓の意なり。牛、餘草を食すれば血乳轉變す。四味を歴已つて方に醍醐を成ず。餘の方便教の境、智、行、位は皆圓意なり。前の四譬は即ち四處に醍醐を明すこと有り。四教に佛智を明すこと各各異なれども、倶に既に佛と稱し、同じく佛智を指して以て醍醐と稱す。藏、通の二佛は中道を明さず、但果頭の佛の二諦の智を取りて醍醐と稱す。別教は登地に無明を破し、即ち能く作佛す、中道の眞智を以て醍醐と稱す。圓教は初住に中道智を得、亦稱して醍醐と稱す。瓔珞に云はく、「一頓悟の世尊」と。即ち此れ初住の智を醍醐と爲るなり。前の兩醍醐は是れ權にして實に非ず、故に教有つて人無し。別教の醍醐は、名は圓にして理は實、圓教の醍醐は名理倶に實なり。此義を以ての故に前の三位は五味皆醍醐、圓教の一味は皆醍醐なり。

（三）第二十七卷に云はく、「譬へば人有り、毒を乳の中に置けば、則ち能く人を殺し、乃至醍醐も亦能く人を殺すが如し」と。此れ兩用を釋す。一には、通じて漸頓に約して不定教を明す。漸頓に皆佛性を見ることを得るなり。二には行不定に約す。行人の心行は之を譬ふるに乳の如し。實相智は之を譬ふるに毒を以てす。毒に命を殺す能有り、此智に無明を破するの力有り。久遠劫來實相の毒を塗きて、凡夫の心乳に置く。毒の慧開發すること定と稱すべからず。或は初味に於て發し、或は後味に於て發す。求佛に往いて發することを得ず。故に毒を乳の中、乃至醍醐に置くに、五味の中に遍じて悉く殺の義有りと言ふ。若し衆生、始め凡地に於て華嚴を聞くことを得て、即便ち理を見て佛慧に入るは、此は是

れ血乳人を殺すなり。若し先に十住を得、今華嚴に悟を得るは、即ち是れ酪の中に人を殺す。十行に悟る者は是れ生蘇に人を殺す。十廻向に悟る者は是れ熟蘇に人を殺す。諸地に更に悟るは是れ醍醐の中に人を殺す。若し過去に已に是れ圓教の中の觀行相似の位なれば、今華嚴を聞きて悟を得るは、亦是れ乳中に人を殺す。亦是れ酪、生、熟等の蘇の中に人を殺す。若し先に是れ諸住、諸行等の位にして、今更に華嚴を聞きて增道損生を得るは、即ち是れ醍醐の中に於て人を殺す云云。若し三藏教の中の凡夫、及び方便位、及び菩薩位を歷て、三藏教を聞き、中に於て即ち能く密に中道を見るは、即ち是れ乳中に人を殺す。若し四果の位に密に中道を見るは、即ち是れ酪の中に人を殺す。顯露の教の中には此事無し。若し通教の中の凡夫、及び三乘方便の位に、若し通教を聞きて密に佛性を見るは、即ち是れ乳の中に人を殺す。若し入位の者祕密にして去るは、即ち是れ酪の中に人を殺す。若し菩薩道種智の中より去るは、即ち是れ生蘇に人を殺す。九地の中より去るは、即ち是れ熟蘇に人を殺す。十地の中より去るは、即ち是れ醍醐の中に人を殺す。通教の聲聞は但祕密の中に人を殺すこと有り、顯露不定の殺無し。若し別教の中に歷るに、十信聞教より去るは即ち是れ乳の中に人を殺す。三十心の中より去るは、即ち是れ酪に人を殺し、生蘇、熟蘇等に人を殺す。登地より去るは、即ち是れ醍醐に人を殺すなり。若し圓教の中に、發の始に經を聞きて即ち無明を破し、佛性を見るは、是れ乳の中に人を殺す。六根清淨より去るは、是れ酪、生、熟蘇等に人を殺す。若し初住より去るは、是れ醍醐に人を殺す。若し

【三】之より下、法華の意を以て結成す。

【四】圓教の位を明すに十意を分つ中、第十に妙位の始終を明す。

行人有りて、諸教四諦五味に歴、過ぎ已つて方に圓教の醍醐の中に殺人に入ることを得るは、此は是れ三を破して一を顯はし、相形待して妙と爲す。若し毒を乳の中に置けば、味味に悉く人を殺すとは、此は是れ開權顯實なり。一切法の中に於て即ち中道を見る。故に文に云はく「汝等の所行は是れ菩薩の道なり」と。更に途を改め轍を易ふることを須ひずして、而も眞實を求め、麤に即して妙を見る。故に毒を置くを以て喩と爲す。

(三)諸經に悉く祕密置毒の妙有りて、而して未だ顯露に味に歷て妙に入ること有らず。亦顯露に麤を決して即ち妙なる無し。今法華に至りて方に二意有り。同じく寶乘に乘じ、皆佛の知見を開く、顯露の事彰はる。是故に獨り稱して妙と爲す。其意此に在り。次第入妙、開麤即妙に各各兩意有り。按位に開入し、有るは增進に開入す。若し聲聞法を決了して、是れ諸經の王なり、聞き已つて諦に思惟し、無上道に近づくことを得と言ふは、即ち是れ按位に妙を顯はす。增道損生は即ち是れ升進に妙に入る。故に法華獨り妙と稱するなり。

(四)十に妙位の始終を明すとは、眞如法の中には階次無く、一地二地無し。法性平等にして常に自ら寂滅なり。豈初後始終を分別すべけんや。良に平等大慧、法界を觀ずるに、若干有ること無きに由つて、能く若干の無明を破して、若干の智慧無きを顯出す。此智慧に約して、無始にして而も始なるは即ち是れ初の阿、無終にして而も終なるは即ち是れ後の茶なり。無中にして而も中を論ずるは、即ち是れ四十心なり。復差別すと雖も則ち差別

【位不退】見思の惑を破して永く凡位に退墮せざる位、三不退の一なり。

【行不退】塵沙の惑を伏斷して永く化他行に於て退轉せざる位なり。また三不退の一なり。

【念不退】中道の正念に安住して空假二邊の邪念を生ぜざる位、即ち又三不退の一なり。

傾し、尚に不退位と名くるなり。下の文に云ふが如し、聲聞、縁覺は竹林の如く、新發不退の菩薩は恒沙の如くなりと雖も知ること能はず。諸の菩薩衆の信力堅固の者を除く。聲聞、縁覺の知ること能はざる所とは、此れ三藏、通教菩薩の二乘を斷ず。三藏の菩薩は惑を斷ずること能はずして及ばず。無明、佛道に到らず、別教菩薩之を知ることを得ん。通教の菩薩は見思の智、二乘と同ならず。二乘も知らざれば佛智を知らず。今三藏の不知を論ずれば、兩經の菩薩も亦知ることを得ず。發心も知らずとは即ち通教の十信を指す。不退も知ること能はずとは、即ち別教の三十心を指す。十住は位不退、十行は行不退、十迴向は念不退なり。此の三不退は佛智を知ること能はず。三藏の中の不退は當に二乘に及ばず。通教の中の不退は、此の二乘に等しく、二乘は知らず、豈に況んや佛を擧げんや。今發心と不退とを標するは、即ち別教の中の人に約するなり。信力とは是れ觀行の位、堅固とは是れ相似の位なり。此の如き等の位は、猶ほ聞きて信ずる解す、故に知ると爲すことを得、眞位の智たり。初住の知見を聞き、是寶乘に乘じて東方に遊ぶとは、即ち是れ眞位の始めなり。三方は是れ中位なり、道場に至り、乘を過ぎて、守の歸くべき無し、即ち是れ後位なり。此の如きの眞位は、何等の乘にか乘ずる。乘に三種有り、理、隨、得を謂ふ。若し是れ理は三界より出でて、薩婆若の中に到りて住すと言ふは、住に二義有り。一には理を取るが故に住、即ち通教の意なり。二には所乘極まるが故に住、即ち別圓の意なり。初心は教の所詮に憑り、理を信じ行を立てて三界を出づることを得。無明未だ破せざれば未だ所證有らず、故に眞を見ず。但教乘

【無生法忍】不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位をいふ。

に乘じて此に來至するのみ。我圓教の中、其れ誰か是れなるや。謂はく五品弟子の、能く善く大心を發して、長く三界の苦輪海に別るるは、即ち其人なり。敎乘道に息し、命乘來た及ぼす。但偏の慧を以て進んで果行を作するは、即ち行を以て乘と爲す。方便（土）三界の中より出でて、初住に寶の中に到って住す。我圓教の中には、其れ誰か是れなるや。謂はく十信心六根淨の者即ち其人なり。初住乃至等覺の、更に增道損生する者は其れ識を以て乘と爲し、圓融の三界、乃至無後の三界の中より出でて、妙覺の中に至って、若を過ぎて字の說くべき無し。故に薩婆若の中に到って住すと言ふ。前來の諸乘は無上道有れば、住と稱することを得ず。若は無上の法なり、是故に住と言ふ。無住の處に住す、即ち妙位の常なり。復次に別教の十住に見思を破するは、是れ三百由旬を行く。十行に塵沙を破するは四百と爲す。十迴向に無明を伏するは五百と爲す。十地に無明を斷ずるは、是れ分に中道を見て即ち實所と爲す。圓教の六根淸淨の時は是れ四百を行く。無明を破して初住に入るは是れ五百を行く。二乘の觀を開きて、無明の惑を破し、佛知見を開き、道を得て作佛するは、即ち是れ諸の偏位を過ぎ了し、五百由旬を過ぎ、來つて初住に入る、即ち是れ妙位の始なり。諸の乘を得て東方に進ぶ。若し本門の中に至つて增道損生し、更に諸乘に乘じて、南方に進ぶは是れ進んで十行の位に入る。西方は是れ進んで十迴向に入り、北方は是れ進んで十地に入るなり。又文に云ふが如し。其佛の前世の因緣を說く時、六百八十萬億那由他恆河沙の人無生法忍を得とは即ち是れ十住なり。復千億の菩薩の阿惟越

【聞持陀羅尼】三陀羅尼の一。一切の音聲、言語を悉く憶持して忘るることなき功德を云ふ。

【五】迹門十妙の中、第五に三法妙を明す。就中、初に其來意を明し名を釋し、次に七章を分ち、然る後第一章に總じて三軌を明す。

羅尼を得るは即ち十行なり。復一世界微塵數の菩薩有りて、樂說辯才を得るは即ち十廻向なり。復一世界微塵數有りて、旋陀羅尼を得るは即ち初地なり。三千大千微塵の不退を得るは即ち二地なり。二千の國土微塵に能く清淨の法輪を轉ずるは即ち三地なり。小千國土微塵の八生に當に菩提を得べきは即ち四地なり。七生に當に得べきは即ち五地なり。六生に當に得べきは即ち六地なり。五生に當に得べきは即ち七地なり。四生に當に得べきは即ち八地なり。三生に當に得べきは即ち九地なり。二生に當に得べきは即ち十地なり。一生に當に得べきは即ち等覺なり。此一生を過ぐれば即ち是れ茶を過ぎて字無し。即ち是れ妙覺地にして、妙位の終なり。前の位を列ぬる中に、法華經の文を引くを將つて、此中に入つて共に一科と作すは、即ち煩はしからず。

(五)第五に三法妙とは、斯れ乃ち妙位所住の法なり。三法と言ふは即ち三軌なり。軌は軌範に名く。還つて是れ三法を軌範すべき耳。此に即ち七意あり。一には總じて三軌を明し、二には歷別に三軌を明し、三には麤妙を判じ、四には麤を開して妙を顯はし、五には始終を明し、六には三法に類し、七には悉檀料簡なり。一に總じて三軌を明さば、一には眞性軌、二には觀照軌、三には資成軌なり。名は三有りと雖も秖是れ一の大乘の法なり。經に曰はく、「十方に諦かに求むるに、更に餘乘無く唯一佛乘なり」と。一佛乘は三法を具す。亦第一義諦と名け、亦第一義空と名け、亦如來藏と名く。此三は定んで三ならず、三にして一を論ず。一は定んで一ならず、一にして三を論ず。不可思議、不並不別、伊字天目な

り。故に大經に云はく、「佛性とは亦は一、(亦)は一に非ず、(亦)は一に非ず非一に非ず」と。亦一とは一切衆生悉く一乘なるが故なり。此れ第一義諦を語す。非一とは是の如きの數法なるが故に、此れ如來藏を語す。非一非非一とは數非數の法決定せざるが故に、此れ第一義空を語す。而して皆亦と稱するは鄭重なり。秖是れ一法なるを、亦三と名くるのみ。故に單にして取るべからず、復にして取るべからず。不縱不橫にして、而も三而も一なり。前に諸諦の若は開、若は合、若は麤、若は妙等を明すは、已に是れ眞性軌の相なり。前に諸智の若は開、若は合、若は麤、若は妙を明すは、是れ觀照軌の相なり。前に諸行の若は開、若は合、若は麤、若は妙を明すは、已に是れ資成軌の相なり。前に諸位を明すは、秖是れ此三法を修して、證する所の果なるのみ。若し然らば、何を以てか重ねて說くや。重ねて說くには三義有り。一には、前の境智行は是れ因中所乘の三軌なり。今是大乘に乘じて已に道場に至ると明すは、證果所住の三軌なり。二には、前は境智等の名と作して別して說くも、今は法の名と作して合して說く。三には、前は直爾に散說して本末を論ぜず。今は遠く其本を論ず、卽ち是れ性德の三軌なり、亦如來の藏と名く。極めて其末を論ずれば、卽ち是れ修德の三軌なり、亦祕密藏と名く。本末に一切の諸法を含藏す。性德の三法より名字の三法を起し、名字の三法に因つて觀行の三法を修し、觀行の三法に因つて相似の三法を發し、乃至分證の三法、究竟の三法あり。自成の三法、化他の三法なり。是義の爲の故に、宜しく應に重說すべきなり。私に謂はく、一句は卽ち三句、三句は卽

【一八】三法妙を明すに七章を分つ中第二に歷別に三執を明す。而して今を明して開合を總じて明すなり。

ち一句なるを圓の佛乘と名く。記の中には既に如來藏の一句より諸の方便を出す。此れ乃ち別して判ず。例して應に通じて開すべし。非一とは數法の故に、此を指して如來藏と爲し、三藏の中の三乘事相の方便を開出す。非一非非一とは不決定の故に、此一句を指して第一義空と爲し、通教の三人の事に即して眞なるを開出す。亦一とは、一切衆生悉く一乘の故に、此一句を指して第一義諦と爲し、別教の獨菩薩乘を開出す。此諸の方便は悉く圓より出づ。故に經に言はく、「一佛乘に於て分別して三と說く」と。即ち此義なり。

(一八)二に歷別に三法を明さば、先に須く如來開合の方便を識るべし。然して後乃ち總じて三法を攬つて、一大乘と爲るを解す。佛は何の法よりしてか諸の權乘を開く。大經に、佛性非一を明すが如き、是の如きの數法は三乘を說くが故なり。當に知るべし、諸乘の數法を如來藏の所攝と爲す。佛此藏に於て聲聞、緣覺、及び諸の菩薩の通別等の乘を開出す。何となれば、諸乘は既に是れ方便なり、如來藏は又是れ事なり。事より方便を出す故に、諸權を如來藏の攝と爲すと言ふのみ。又經に依るが故に。大經に云はく、「聲聞僧をば有爲僧と名く」と。又云はく、「六波羅蜜は福德莊嚴なり」と。又云はく、「聲聞の人は定力多きが故に、佛性を見ず」と。當に知るべし、定力は即ち是れ福德、福德は秖是れ有爲なり。勝鬘には稱して有漏と爲す。例せば界內の見思未だ破せざれば、起作有りと爲す、故に有爲と名く。理を取ること當らず、故に有漏と名く。智慧の法に非ず、故に福德と名

【七】歷別に三法を明す中、之より下は四教に約して論ず。

くるが如し。今下を以て上に望むるに、亦應に是の如くなるべし。二乘は未だ變易を破せざれば、猶是れ有爲なり、無明未だ脫せず、故に有漏と言ふ。中道智に非ざるが故に福德と名く。是を以ての故に知んぬ、方便の諸乘は悉く資成の所攝たり。皆大乘の一句より偏に出せば、究竟の法に非ず。故に云はく「一佛乘に於て分別して三と說く」とは、卽ち此意なり。亦是れ一佛乘に於て分別して五と說き、亦是れ分別して七と說き、亦是れ分別して九と說く。若し此釋に依れば、如來藏の句より種種の方便、諸の權乘の法を開出するなり。

（七）次に四教に歷て各三法を論ずるは、三藏の中には無爲の智慧を以て觀照軌と名け、正しく乘の體と爲す。助道の乘を成ずるの具を資成軌と名く。正助の乘の惑を斷じて眞に入るは、眞は是れ眞性軌なり。敎來つて此を詮す、故に教を以て乘と爲す。緣覺も亦爾り。菩薩は無常觀を以て觀照と爲す。功德の肥ゆるを資成と爲し、道場に坐して結を斷じて眞を見るを眞性と爲す。此教は眞を詮し、是教乘に乘じて三界の中より出で、薩婆若の中に到つて住す。言教已に盡く、故に教乘無し。眞には運すること能はず、故に諦は乘に非ず。故に索車の意有り云云。二に通教は眞性軌を以て乘體と爲す。何を以ての故に、色に卽して是れ空なれば、事の中に理有り、此理卽ち眞なり、故に乘體と爲す。卽空の慧を以て觀照と爲し、衆行を資成と爲す。此教は眞を詮ず、是教乘に乘じて三界より出で、薩婆若の中に到つて住す。菩薩は三界を出で已つて、行を用つて乘と爲し、佛國土を淨め衆生を教

化す。乃至道場、乃ち住と名くべし。亦是れ教行つて人無く、誰の住する者無し。亦是れ教謝し遂に寂す。復運の義無く、亦衆車の意有り云云。三に別教の三法を明さば、縁修の觀照を以て乘體と爲す。諸行は是れ資成、此三法を以て縁修の智慧と爲す、慧は能く惑を破して理を顯はす、理は惑を破すること能はず。理若し惑を破せば一切衆生悉く理性を具す。何が故に破せざる。若し此慧を得れば則ち能く惑を破す、故に智を用て乘體と爲す。故に大經に云はく「無爲無漏を菩薩僧と名く」と。即ち是れ一地二地、乃至十地の智慧を智慧莊嚴と名く。此智慧を以て運んで十地に通ず、故に乘體と爲す。然るに攝大乘に三種の乘を明す。理乘、隨乘、得乘なり。理とは即ち是れ道前の眞如、隨とは即ち是れ眞如を見る慧は境に隨順す。得とは一切の行願、熏習して、無分別智に熏じ、無分別境に契ひて、眞如と相應す。此三意は、一往は乃ち三軌に同じく、而して前後未だ融せず。何となれば、九識は是れ道後の眞如なり、眞如無事、智行の根本の種子、皆梨耶識の中に在り。熏習成就して無分別智光を得て、眞實性を成ず。是れ則ち理乘は本有、隨と得とは今有なり。道後の眞如は方に能く物を化す、此れ豈縦の義に非ざらんや。若し三乘悉く梨耶の爲に攝せらるるは又是れ横の義なり。又冥初に覺を生ずるに濫ず。既に縦既に横なり、眞伊と相乖く。元夫れ如來初めて出でて、便ち實を說かんと欲す。堪へざる者の爲に先に無常を以て倒を遣り、次に空淨を用て著を蕩かし、次に歷別を用て心を起し、然して後方に常樂我淨を明す。龍樹は論を作つて佛の此意を申ぶ。不可得空を以て封著を洗蕩し、應一

【道後の眞如】理智用を融ぜし果上の眞如。

切法空を習ふ、是を般若と相應すと名く。此空豈無明を空ぜざらんや。無明若し空ならば、種子安んぞ在らん。諸法を淨うし已つて空を點じて法を說くに、四句の相を結せよ。此語は虛玄なり、亦住著無し。病除き已つて乃ち食を進むべく、食亦消化するが如し。那ぞ發頭より阿梨耶に據つて一切法を出すことを得ん。本の見慢全く自ら未だ降さず。此新文に封ぜられて、長冰に水を添ふるが若し。故に知んぬ、彼論は末代重著の衆生に逗ずるに非ず。乃ち是れ界外一途の法門のみ。又阿梨耶若し一切法を具せば、那ぞ道後の眞如を具せざるを得ん。若し具すと言はば、那ぞ眞如は第八識に非ずと言はん。恐らくは此れ猶是れ方便にして、如來藏の中より開出するのみ。若し方便を執せば、互に眞實を妨げん。若し是れ實なる者も、之を執すれば又諍見を成ず。多く兒に蘇を含ましめば、恐らくは將に命を夭せん云云。若し能く善く破立の意を解せば、諸の經論に於て淨うして滯著無からん。

四に圓敎の三法を明さば、眞性軌を以て乘體と爲す。不僞を眞と名け、不改を性と名く。即ち正因常住なり。諸佛の師とする所とは、此法を謂ふなり。一切衆生も亦悉く一乘なれば、衆生即ち涅槃の相なり、復滅すべからず。涅槃即ち生死にして無滅不生なり。故に大品に云はく、「是乘は動ぜず出でず」とは、即ち此乘なり。觀照とは、祇眞性の寂にして而も常に照なるを點ずるに、便ち是れ觀照、即ち是れ第一義空なり。資成とは祇眞性法界を點ずるに、諸行無量の衆具を含藏す、即ち如來藏なり。三法一異ならざること、如

意珠を喩ずる中、光を喩じ寶を喩ずるに、光寶と珠と一ならず、珠と異ならずして、縱ならず橫ならざるが如し。三法も亦是の如し、亦は一、亦は非一、亦は非一非非一にして、不可思議の三法なり。若し此三法に迷はば即ち三障と成る。一には界內界外の塵沙なり、智慧を障ふ。二には通別の見思なり、第一義空を障ふ。三には根本無明なり、第一義の理を障ふ。若し塵沙の障に即して無量の法門に達するは、即ち資成軌顯はるることを得。若し見思の障に即して第一義空に達するは、觀照軌顯はるることを得。若し無明の障に即して第一義諦に達するは、眞性軌顯はるることを得。眞性軌の顯はるることを得るを名けて法身と爲し、觀照の顯はるることを得るを名けて般若と爲し、資成の顯はるることを得るを名けて解脫と爲す。此兩は即ち是れ定慧の莊嚴なり、法身を莊嚴す。法身は是れ乘體、定慧は是れ衆具なり。下の文に云はく、「其車高廣にして衆寶莊校す」と。是を圓教の行人所乘の乘薩婆若に到り、茶を過ぎて字の說くべき無きを名く。字の說くべき無くんば、亦乘の運すべき無かるべきや。若し自行運し畢れば、乘の義則ち休す。若し權化未だ畢らざれば、他を運すること休まず。故に文に云はく、「佛自ら大乘に住す、其得る所の法の如きは定慧の力莊嚴す。此を以て衆生を度す」とは即ち其義なり。譬へば、御者は車を運して達到すれども、猶名けて車と爲すが如し。果乘も亦爾り、猶名けて運と爲す。復次に何ぞ必ずしも一向に運の義を以て乘を釋せん。若し眞性を取らば、動ぜず出でざるは、則ち運に非ず不運に非ず。若し觀照資成を取らば、能く動じ能く出づるは、則ち名け

【阿惟越致】阿鞞跋致と同じ。成佛するに定まりて再び凡夫に墮せざる位。

【毘尼】毘奈耶、(Vinaya)律藏の梵名。

【八】三法妙を明すに七章ある中、第三に麤妙を判ず。中に於てまた初に四教に約し、次には五味に約す。

て運と爲す。祇動出即ち不動出なれば、不動出に即して是れ動出なり。用に即して而も體を論ずれば、動出是れ不動出なり。體に即して用を論ずれば、不動出に即して是れ動出なり。體用不二にして而も二なるのみ。例せば轉不轉皆阿鞞跋致、動不動皆是れ毘尼なるが如し。是義を以ての故に、發趣不發趣を皆名けて乘と爲すなり云云。

(八)三に麤妙を明さば三藏は有爲福德に於て、三法を論じて乘と爲す。四念處は是れ聞慧、教乘に乘じて四善根に至る。四善根は行乘に乘じて見諦に到る。見諦は證乘に乘じて無學に到る。既に是れ權法なり。三界の外に出でて眞を以て證と爲す、證は則ち運せず、實乘を見ざれば嗚呼して自ら責む、世尊に問はんと欲す、「失とせんや不失とせんや」と、即ち此意なり。半字漸く引きて究竟の義に非ず、是故に三法皆麤なり。通教は即空の慧三法を乘と爲せば巧たれども、餘の意は大に同じ。乾慧地は教乘に乘じ、性地は行乘に乘じ、八人と見地は證乘に乘ず。此れ亦偏說なり、是故に麤と爲す。別教は資成を以て觀照を資け、觀照は眞性を開す。三法を乘と爲す。十信は教に乘じ、十住は行に乘じ、十地は證に乘じ、妙覺薩婆若の中に到つて住す。緣修成ずれば即ち謝し、唯眞修のみ在り。若し爾らば資成は前に在り、觀照は次に居し、眞性は後に在り。此三竪別なれば縱にして大乘に非ず。此三幷異なれば橫にして大乘に非ず。是れ方便の法なり、是故に麤と爲すなり。圓教は實相を照して第一義空と爲し、空を名けて縱と爲す。第一義空は即ち是れ實相なれば實相は縱ならず。此空豈縱ならんや。實相を點じて如來藏と爲し、之を名けて橫と爲す。

【大白牛】法華經譬喩品火宅の喩に出づ、茲は一佛乘を喩ふ。

【瓦官】天台大師法華を講ぜし金陵の瓦官寺のこと。

如來藏は即ち實相なれば、實相は横ならず、此藏豈横ならんや。故に縦を以て思ふべからず、横を以て思ふべからず。故に不可思議の法と名く。即ち是れ妙なり。祇空藏を點じて實相とすれば、空は縦、藏は横なり、實相寧ぞ縦横ならざらん。祇空を點じて如來藏とすれば、空寧に横ならず、藏寧ぞ横なることを得ん。如來藏を點じて空とすれば、藏既に縦ならず、空寧ぞ縦なることを得ん。實相を點じて空藏とすれば、實相は縦に非ず、横に非ず、空藏も亦縦に非ず横に非ず。宛轉相即して不可思議なり。故に名けて妙と爲す。祇如來藏を點じて廣と爲し、第一義空を點じて高と爲す、故に其車高廣なりと言ふ。如來藏は即ち實相なるが故に其車廣に非ず、第一義空即ち實相たるが故に其車高に非ず。祇實相是れ空、豈ぞ高に非ざることを得ん。祇實相是れ如來藏、寧ぞ廣に非ざることを得ん。又實相を點じて如來藏と爲す、故に衆寶莊挍し、又僕從多くして之に侍衞すと言ふ。實相を點じて第一義空と爲す、故に大白牛有つて肥壯多力、行歩平正にして、其疾きこと風の如しと言ふ。智慧の染無きを名けて白と爲し、能く惑を破するが故に多力と名け、中道の慧を平正と名く。無功用に入る故に、其疾きこと風の如し。不思議の三法は共に大車と成る。豈縱横幷別の異り有らんや。是の如きの教乘は不縱不横なり、五品の所乘は似解に到る。是の如きの行乘は不縱不横なり、似解の所乘は十住に到る。是の如きの證乘は不縱不横なり、十住の所乘は妙覺薩婆若の中に到つて住す。故に妙乘と名く。又云はく、「是乘は微妙にして清淨第一なり」と。故に瓦官に講を建つるに、人夢みらく、「聽く者

【九】三法妙を明すに七章ある中、第四に麤を開して妙を顯す。

乘に傷し、門に闕ちて出づ」と。彼處に講を建つるに、人夢みらく、「黄衣路に滿つ」と。相を以て之に則るに邪正明らかなり矣。若し此麤妙等の乘を將て五味に約せば、乳教は一麤一妙、酪教は一麤、生蘇は三麤一妙、熟蘇は二麤一妙なり。衆經悉く縱橫の方便を帶して、不縱不橫の眞實を說く、故に言つて麤と爲す。今の經は正直に方便を捨つ、故に之に加ふるに妙を以てす云云。

（九二）門に麤を開して妙を顯はすは、大經の三句に約す。經に言はく、「一切衆生悉く一乘の故なり。此は是れ不動不出の一乘なり、故に三法を具足して不縱不橫なり。夫れ心有る者は皆此理を備ふ。而して其家の大小は都て知る者無し、是故に麤と爲す。今衆生に諸覺寶藏を示し、草穢を耘除して藏金を開顯す。一切無礙の人は、一道より生死を出づ。十方に諦に求むるに、更に餘乘無く唯一佛乘なり。是故に妙と爲す。經に言はく、「佛性亦一に非ず非一に非ず、數非數の法決定せざるが故なり」と。若し緣修の智慧定んで能く理を顯はすと執せば、慧は自ら理に非ず。則ち照用明かならざれば佛性を見ず。是故に麤と爲す。今定執の慧を開するに即ち不決定の慧なり、慧に即して而も理、理に即して而も慧なり。數の定、三定、一に執著せず、非數の非三非一に著せず。此の如きは乃ち無著の妙慧と名け、能く一切の定相及び不定相を破して、亦能破所破無し。輪王の能く破し能く安ずるが如く、日の闇を除き物を生ずるが如く、醫の膜を除き珠を養ふが如し。即ち是れ大乘不縱不橫の妙慧なり。經に言はく、「佛性亦一に非ず、三乘と說くが故に」と。

【一〇】三法妙を明すに七章を分つ中第五に始終を論ず

即ち是れ三乘、五乘、七乘等の諸の方便乘なり。若し諸乘に住すれば但是れ事善、及び偏眞なり、通入の處近し、是故に麤と爲す。今若し諸乘を決了すれば即ち是れ如來藏なり、藏を佛性と名く。人天の善より乃至別乘まで、皆本法を動ぜざれば、即ち是れ妙に於てす。當に知るべし、三句に一切の法を攝して佛性に非ざる無く、悉く皆是れ妙なり、麤の待すべき無し。即ち絕待妙なり。

（一〇）第五に始終を明さば、五品の教乘を取りて始と爲さず。乃ち凡地の一念の心に、十法界十種の相性を具するを取って、三法の始と爲す。何となれば、十種の相性は秖是れ三軌なり。如是體は即ち眞性軌なり、如是性は、性は内に據るを以て即ち是れ觀照軌なり、如是相は、相は外に據るを以て即ち是れ福德、是れ資成軌なり。力は是れ了因、是れ觀照軌なり、作は是れ萬行精勤、即ち是れ資成なり。因は是れ習因なれば觀照に屬す。緣は是れ報因なれば資成に屬す。果は是れ習果なれば觀照に屬す。報は是れ習が報なれば資成に屬す。本末等は、空等は即ち觀照、假等は即ち資成、中等は即ち眞性なり。直に一界の十如に就いて三軌を論ず。今但凡心の一念即ち皆十法界を具することを明す。一一の界悉く煩惱の性相、惡業の性相、苦道の性相有り。若し無明煩惱の性相有るは、即ち是れ智慧觀照の性相なり。何となれば、明に迷ふを以ての故に無明を起す。若し無明を解すれば即ち是れ明に於てす。大經に云はく、「無明轉じて即ち變じて明と爲る」と。淨名に云はく、「無明即ち是れ明なり」と。當に知るべし、無明を離れて明有るにあらず。氷は是れ水の

如く、水は是れ氷なるが如し。又凡夫の心の一念に即ち十界を具し、悉く惡業の性相有り。秖惡の性相は即ち善の性相なり。惡に由つて善有り、惡を離れて善無し。諸惡を翻すれば即ち善の資成なり。竹の中に火の性有れども、未だ即ち是れ火の事ならざるが故に、有れども燒けず。緣に遇ひて事成ずれば、即ち能く物を燒くが如し。惡即ち善性なれども、未だ即ち是れ事ならず、緣に遇ひて事を成ずれば、即ち能く惡を翻ず。竹に火有り、火出でて還つて竹を燒くが如し。惡の中に善有り、善成ずれば還つて惡を破す。故に惡の性相に即して是れ善の性相なり。凡夫の一念に皆十界の識、名色等の苦道の性相有り。此苦道に迷ひて、生死浩然たり。此は是れ法身に迷ひて苦道と爲す、苦道を離れて別に法身有るに不ず。南に迷ひて北とするが如き、別の南無きなり。若し生死即ち是れ法身なりと悟れば、故に苦道の性相、即ち是れ法身の性相と云ふなり。夫れ心有る者は、皆三道の性相有り、即ち是れ三軌の性相なり。故に淨名に云はく、「煩惱の儔を如來種と爲す」とは、此謂なり。若し如是力、如是作と言ふは菩提心發するなり。即ち是れ眞性等の萠動するなり。如是因とは即ち是れ觀照の萠動するなり。如是緣とは即ち是れ資成の萠動するなり。如是果とは觀照に由つて萠動して習因を成じ、般若の習果滿を感得す。如是報とは資成に由つて萠動して緣因と爲り、解脫の報果滿ずるを感得す。果報滿ずるが故に、法身も亦滿ず。是を三德究竟滿と爲し、祕密藏と名く。本末等とは性德の三軌は、冥伏の不縱不横、修德の三軌は彰顯の不縱不横なり。冥伏の如等、數等、妙等、彰顯の如等、數等、妙等

【二】三法妙を明すに七章を分つ中第六に類通を明す。即ち初に來意を說き、十種の法を列ね、乃至その生起を明し、而して第一に類通三道を釋す。

なり。故に等と言ふなり。亦是れ空等、假等、中等なり云云。

（二）六に類通三法とは、前は三軌の法を以て、始より以て終に至る、即ち是れ竪に通ずることと無礙なり。今は横に諸法に通じて悉く無礙ならしめんと欲して、諸の三法に類通す。何となれば、緣に赴けば名異なれども、意を得れば義同じ。略十條を通ず、餘は領すべし。三道、三識、三佛性、三般若、三菩提、三大乘、三身、三涅槃、三寶、三德なり。諸の三法無量なれども止十を用ふるは、其大要を擧げて始終を明すのみ。三道の輪廻は生死の本法なるが故に、初と爲す。若し生死の流に逆らはんと欲せば、須く三識を解し、三佛性を知り、三智慧を起し、三菩提心を發し、三大乘を行じ、三身を證し、三涅槃を成ずべし、是三寶は一切を利益し、化緣盡きて三德に入り、祕密藏に住す云云。一に類通三道とは、眞性軌は即ち苦道、觀照軌は即ち煩惱道、資成軌は即ち業道なり。苦道即ち眞性とは、下の文に云はく、「世間の相常住」と。豈彼生死に即せずして、而も是れ法身ならんや。煩惱即ち觀照とは、觀照は本惑を照す、惑無くんば則ち照無し、一切法空是れなり。文に云はく、「諸法は本より來、常に自ら寂滅の相なり」と。即ち煩惱是れ觀照なり。照は薪の火を生ずるが如し、文に云はく、「諸の過去佛に於て、若し一句をも聞くこと有れば皆已に佛道を成ず」と。又云はく、「深く罪福の相に達すれば、徧く十方を照す」と。即ち是れ煩惱に體達するの妙句を聞くなり。資成即ち業道とは、惡は是れ善の資なり、惡無ければ亦善も無し。文に云はく、「惡鬼其心に入りて、我を罵詈毀辱す。我等佛を念ずるが

【二】類通三識を明す。

【菴摩羅識】第九識にして清淨、眞如、無垢等の義あり。舊譯家は八識の上に別に九識として立つ。新譯家は八識の果上の名として別立せず。

【阿陀那識】第七識、譯す。執持と此識の力にて善惡の業因及び有情の身體を執取し維持して破壞せざらしむ。唯識論は此を第八識の名と爲し地論師は第七識の

故に、皆當に是事を忍ぶべし。惡來り加はらずんば念を用ふることを得ず。念を用ふるは惡の加はるに由る」云云。又威音王佛の所の著法の衆は、不輕の言を聞きて罵詈打拍す。惡業に由るが故に還つて不輕に値ふ。不輕教化して皆不退を得。又提婆達多は是れ善知識なり。豈惡即ち資成に非ざらんや。三軌即ち三道とは是れ理性、非道を行じて佛道に通達すと爲す。五品は觀行に非道を行じて佛道に通達し、六根清淨は相似に非道を行じて佛道に通達し、十住より去りては即ち分眞に非道を行じて佛道に通達し、妙覺は究竟に非道を行じて佛道に通達す云云。

（二）二に類通三識とは菴摩羅識は即ち眞性軌、阿梨耶識は即ち觀照軌、阿陀那識は即ち資成軌なり。若し地人の明さく、「阿梨耶は是れ眞常淨識なり」と。攝大乘の人の云はく、「是れ無記の無明隨眠の識なり」と。亦無沒識と名く。九識は乃ち淨識と名く。互に諍ふ云云。今近に例して遠を況す。一人の心の如き復何ぞ定まらん。善を爲さば則ち善識、惡を爲さば則ち惡識、善惡を爲さざれば即ち無記識なり。此三識何ぞ頓に水火に同ずべけんや。秖善に背くを惡と爲し、惡に背くを善と爲し、善惡に背くを無記と爲す。秖是れ一人の三心のみ。三識も亦應に是の如くなるべし。若し阿梨耶の中に生死の種子有りて、熏習增長して即ち分別識を成ず。若し阿梨耶の中に智慧の種子有りて、聞熏習增長して即ち依を轉じて、道後の眞如と成るを名けて淨識と爲す。若し此兩識に異なるは、秖是れ阿梨耶識なり。此れ亦一法に三を論じ、三の中に一を論ずるのみ。攝論に云はく、「金土染淨の如し。

名とす。今家は第七識の名と爲せども義は前の六識を該ぬ。

【四三】以下類通三佛性を說く。

染は六識を譬へ、「金は淨識を譬へ、土は黎耶識を譬ふ」と。明文茲に在り、何ぞ勞しく苦めて諍はん。下の文に、「譬へば人有り、親友の家に至り、酒に醉ひて臥するが如し」と。豈阿黎耶識に非ざらんや。世間の狂惑分別の識起り已つて遊行し、以て衣食を求む。豈阿陀那識に非ざらんや。聞熏習の種子稍く起つて增長し、親友に會遇して示すに衣珠を以てするは、豈菴摩羅識に非ざらんや。菴摩羅識を無分別智光と名く。若し黎耶の中に此智の種子有るは、即ち理性の無分別智光なり。五品は觀行の無分別智光、六根淸淨は相似の無分別智光、初住より去つては分眞の無分別智光、妙覺は究竟の無分別智光なり。麤妙は云云。

(一三)三に類通三佛性とは、眞性軌は即ち是れ正因の性、觀照軌は即ち是れ了因の性、資成軌は即ち是れ緣因の性なり。故に下の文に云はく、「汝實に我が子、我は實に汝が父なり」と。即ち正因の性なり。又云はく、「我昔汝に無上道を教ふるが故に、一切の智願猶在りて失せず」と。智は即ち了因の性、願は即ち緣因の性なり。又云はく、「我敢て汝等を輕んぜず、汝等は皆當に作佛すべし」と。即ち正因の性なり。是時に四衆以て衆經を讀誦するは、即ち了因の性なり。諸の功德を修するは即ち緣因の性なり。又云はく、「長者の諸子、若は十、二十、乃至三十」と。此れ即ち三種の佛性なり。又云はく、「種種の性相の義、我已に悉く知見す」と。既に種種の性と言ふ、即ち三種の佛性有るなり。若し三軌即ち三佛性と知るは、是を理佛性と名く。五品は觀行に佛性を見、六根は相似に佛性を見、十住よ

【一四】類通三般若を明す。

【一五】類通三菩提を釋す。

り等覺に至つては、分眞に佛性を見て、妙覺は究竟に佛性を見る。是故に妙と稱す云云。

（一四）四に類通三般若とは、眞性は是れ實相般若、觀照は是れ觀照般若、資成は是れ文字般若なり。具には上に境、智、行の三妙を釋するの相の如し。故に下の文に云はく、「止みなん止みなん說くべからず、我法は妙にして思ひ難し」と。又云はく、「是法は示すべからず、言辭の相寂滅す」と。即ち實相般若なり。「我及び十方の佛、乃ち能く是相を知る。唯佛と佛とのみ乃ち能く究盡す」と。又云はく、「我得る所の智慧は微妙最第一なり」と、即ち觀照般若なり。又云はく、「我常に衆生の行道不行道を知り、隨つて度すべき所に應じて、爲に種種の法を說く。若干の言辭隨宜方便」と。即ち是れ文字般若なり。又云はく、「如來の知見は廣大深遠なり」と。廣大深遠は即ち實相般若なり、如來の知見は廣大深遠に稱ふ、即ち觀照般若なり。若し方便知見皆已に具足すと言ふは、即ち文字般若なり。故に知んぬ、三軌は亦三般若の異名なるのみ。若し三智の三心に在るを三人に屬するは、是れ即ち麤と爲す。三智一心の中に在りて不縱不橫なるは、是れ則ち理妙なり。五品は觀行の三般若、六根淨は相似の三般若、四十心は分眞の三般若、妙覺は究竟の三般若なり。

（一五）五に類通三菩提とは、眞性軌は即ち實相菩提、觀照軌は即ち實智菩提、資成軌は方便菩提なり。故に下の文に云はく、「我先に言はずや、汝等皆阿耨三菩提を得。非實非虛非如非異なり、三界の如く三界を見ず」と。即ち實相菩提なり。「我成道して已來甚大久遠」と。即ち實智菩提なり。「我說く、少うして出家し、伽耶城に近く三菩提を得」と。即ち方便菩

【一六】類通三大乘を明す。

【一七】類通三身を解釋す。

提なり。「若し弟子に就いて三菩提を明さば、若し我衆生に遇はば、盡く教ふるに佛道を以てせん」とは、即ち實相菩提なり。「實智の中に安住して我當に作佛すべし」と。又云はく、「佛子道を行じ已つて來世に作佛することを得ん、是寶乘に乘じて直に道場に至る」とは、即ち是れ修成の實智の菩提なり。八相の記を授くるは即ち方便菩提なり。一異ならざるは、之を名けて佛と爲す、決了せざるを麤と名け、決了を名けて妙と爲す。一切衆生は理性の菩提、五品は名字の菩提、六根は相似の菩提、四十一位は分眞の菩提、妙覺は究竟の菩提なり云云。

(一六)六に類通三大乘とは、眞性は即ち理乘、觀照は即ち隨乘、資成は即ち得乘なり。故に下もの文に云はく、「佛自ら大乘に住す、其所得の法の如きは定慧の力莊嚴す」と。住大乘は即ち理乘、定慧莊嚴は即ち隨乘、所得法は即ち得乘なり。佛自住大乘は是れ理乘、於道場知已は是れ隨乘、導師方便說は是れ得乘なり。又舍利弗本願を以ての故に三乘の法を說くとは、是れ得乘と隨乘なり。又是乘微妙清淨第一とは是れ理乘なり。於一佛乘は是れ理乘、分別說三は是れ得乘と隨乘なり。不縱不橫の妙は開麤の妙なり、七位を歷云云。五品は名字の乘、六根は相似の乘、四十一位は分眞の乘、妙覺は究竟の乘なり云云。

(一七)七に類通三身とは、眞性軌は即ち法身、觀照は即ち報身、資成は即ち應身なり。若し新金光明に云はく、「法身に依つて報身有るを得、報身に依つて應身有るを得」と。此れ即ち前に明す所の如く、境妙に依つて智妙有るを得、智妙に依つて行妙有るを得るなり。彼

【一八】類通三涅槃を明す。

文に云はく、「佛の眞法身は猶虛空の如し。物に應じて形を現ずること水中の月の如し」とこ報身は即ち天月なり。此文に云はく、「佛自住大乘」とは即ち是れ實相の身、猶如虛空なり。「定慧力莊嚴」とは、慧は天月の如く、定は水月の如し。又云はく、「唯佛與佛、乃能究盡、諸法實相」とは、即ち是れ法身なり。「我所得智慧、微妙最第一」とは、即ち是れ報身なり。「名稱普聞」とは即ち是れ應身なり。又「非生現生」等は是れ應身なり。「或示己身」は即ち法身と報身なり。「或示他身」は即ち報應なり。「我以相嚴身光明照十方、爲說實相印」とは「實相印」は即ち法身、「照十方」は即ち應身、「相嚴身」は即ち報身なり。又「深達罪福相、遍照於十方」は即ち報身、「微妙淨法身」は即ち法身、三十二は即ち應身なり。三軌の名異なれども義は即ち三身なり。故に普賢觀に云はく、「佛の三種の身は方等より生ず」と。法界性論に云はく、「水銀は眞金に和して諸の色像を塗る」と。功德は法身に和して處處に應現して往く。若し此三身は不縱不橫の妙なり。三身は決了して法身妙に入つて、七位の妙を歷るなり云云。

（一八）八に類通三涅槃とは、地人の言はく、「但性淨方便淨のみ有り」と。實相を名けて性淨涅槃と爲し、修因所成を方便淨涅槃と爲す。今理性を以て性淨涅槃と爲し、修因所成を圓淨涅槃と爲す。此れ則ち義の便なり。薪盡きて火滅するを方便淨涅槃と爲す。此れ文の便なり。若し修因所成を將つて方便涅槃と爲すは、薪盡火滅を以て何等の涅槃と爲さん。故に知んぬ、應に三涅槃有るべし。三涅槃は即ち是れ三軌なり。文に云はく、「是法は示す

【一九】類通三寶を明す。

べからず、言辭の相寂滅す」と。又云はく「諸法は本より來常に自ら寂滅の相なり」と。是れ性淨涅槃なり。又云はく「皆如來の滅度を以て之を滅度す」と。即ち圓淨涅槃なり。又云はく「我成佛してより已來甚大久遠なり。久修業の得る所の慧光照無量」と。亦是れ圓淨涅槃なり。「數數生を唱へ處處に滅を現ず。此夜に於て滅度するは、薪盡きて火滅するが如し」と。豈方便淨涅槃に非ずや。大經の題に大般涅槃と稱するは、翻じて大滅度と爲す。大とは其性廣博、即ち性の淨に據る。度とは彼岸に到る、智慧滿足す、即ち圓淨に據る。滅とは煩惱永く盡き斷德成就す、即ち方便淨に據る。此三涅槃は即ち是れ三軌なり。

（一九）九に類通一體三寶とは、眞性は即ち法寶、觀照は即ち佛寶、資成は即ち僧寶なり。故に法性動ぜざるを不覺と名く。佛智は理に契ふ故に、佛を名けて覺と爲す。事知し理和す、故に僧を和合と名く。思益に云はく「覺を知るを名けて佛と爲し、離を知るを名けて法と爲し、無を知るを名けて僧を爲す」と。此は是れ一體の三寶なり。故に下の文に云はく「佛自住大乘」と。「佛は是れ佛寶、大乘は是れ法寶なり、其所得の法の如く、此を以て衆生を度す」と。即ち是れ理と和し復衆生と和す。即ち是れ僧寶なり。世間相常住は法寶と名け、於道場知已は佛寶と名け、導師方便說は上は理と和し、下は衆生と和す、僧寶と名く。一體三寶は非一の一、不三の三なり。此三一は不縱不橫なり、之を稱して妙と爲す。七位を歷るは云云。

【二〇】類通三德を釋す。

(二〇)十に類通三德とは、大經の三德は共じて大涅槃を成じ、此經の三軌は共じて大乘を成ず。彼は法身の德を明し、此は實相を云ふ。彼に、佛性と云ふは亦は一なり、「一切衆生悉く一乘の故なり」と。亦是れ實相を指して一乘と爲す。彼處には般若の德を明し、此經は其智慧門難解難入にして、我所得の智慧は微妙最第一なり、乃至、聲聞法を決了するに是れ諸經の王なりと明す。皆是れ般若なり。彼經には解脫の德を明し、此經は數數示現して、生を現じ滅を現ずるを明す。衆生を調伏する所の處に隨つて、自ら既に累無く、他をして解脫せしめ、乃至萬善事中の功德を收取して、悉く證果を得。豈解脫に非ずや。二經の義合す。碌碌の徒は名に隨つて異解す、天帝を聞きて憍尸を識らざるに譬ふ。唯涅槃佛性の文を知つて、双樹に一乘有るの旨を見ず。彼文親しく佛性亦一なり、一は卽ち一乘なりと說く。而して人云はく「此れ乃ち涅槃の一乘は是れ佛性、法華の一乘は佛性に非ず」と。若し法華に佛性を明さずと言はば、涅槃に遙かに指して八千の聲聞、法華の中に於て記莂を受くることを得て、秋收冬藏するが如く、如來性を見て更に所作無しと云ふべからず。而して人云はく「涅槃に遙指の文有るも、此中佛性の語無し」と。今此文に據るに、「種種の性相の義は、我皆已に見る」と。既に種種と言ふ、何ぞ獨り佛性を簡ばん。又「世間相常住なり、道場に於て知り已つて導師方便して說く」と。豈佛性の文に非ざらんや。論に佛性の水と云ひ、常不輕は衆生に佛性有るを知ると云ふ。又「涅槃の三德を祕密藏と爲し、諸子を祕密藏の中に安置して、我亦久しからずして當に其中に入るべし」と。

【三二】三法妙を明すに七章ある中、第七に悉檀料簡を說く。

此れ即ち自他倶に祕藏に入る。此經に云はく、「佛自ら大乘に住し、此を以て衆生を度す。終に小乘を以て諸の衆生を濟度せず、悉く如來の滅度を以て之を滅度す」と。是の如く自他倶に如來の滅度に入る。滅度は秖是れ涅槃、涅槃は秖是れ祕藏なり。釋論に云はく「法華を祕藏と爲す」と。兩經の文義宛宛として恆に同じ。何が故に諸人は苟くも異を抗せんと欲するや。若し文義外隔するに、同の想ひを作すは罪無し。今は文義本より合す、之を離するは何の福ぞ。但涅槃は佛性を以て宗と爲すも、一乘の義を明さざるに非ず。今の經は一乘を以て宗とすれども、佛性の義を明さざるに非ず。機に赴きて異說するも、其義常に通ず。若し三德縱橫なるは即ち是れ麤、不縱不橫なるは即ち是れ妙なり。七位を歷云云。

（三二）七に悉檀料簡とは、問ふ、『十種の三法及び餘の一切は、皆是れ三軌ならば、唯應に三軌のみなるべし。何の意ぞ異說する。』答ふ、『衆生の機宜不同なれば、機に隨つて設逗して、悉檀の方便引接すべきのみ。俗に隨ふが故に異なり、便宜に稱ふが故に異なり、對治を逐ふが故に異なり、人をして道に入らしむるが故に異なり。朝三暮四、衆狙を撫して皆悅ばしむ。苦を塗り水に洗ひて嬰兒を養ひ以て時に適ふ。善巧に機に赴く故に方圓を物に任す。千車の轍を同じうするに譬ふ、豈一を守つて諸を疑はんや。今通じて四悉檀を用ひて、十法を歷て妙不妙を論ず。具に三軌を說いて共じて大乘を成ず。大乘の中備に三法及び一切法有りて、相混亂せざるは即ち是れ世界悉檀なり。資成は智慧を資發し以て善を生ずるが故

に、是れ爲人悉檀なり。觀照は惑を破し諸の惡滅するが故に、是れ對治悉檀なり。眞性の實理を第一義悉檀と爲す。一段の衆生、大乘の名を以て說くに、四の利益を得べきなり。備に三德を說きて大涅槃と爲す。三點上下すと雖も而も縱無く、表裏にして而も橫無く、一にして相混ぜず、三にして相離れず、即ち世界悉檀なり。善は則ち殃釁干さず、故に累の表に挺然たることを得、是故に解脫は即ち爲人悉檀なり。般若は金剛の隨つて擬する所皆碎くるが如し、即ち是れ對治悉檀なり。法身は即ち第一義なり。一段の衆生、三德の名を聞けば即ち四の利を獲ん。初を擧げ後を擧ぐれば、中間例して然り。次に妙不妙を明す。論に云はく、「三悉檀は是れ世諦にして、心所行の處なれば破すべく壞すべし。第一義悉檀は是れ心不行の處、諸佛聖人の心に得る所の法なれば破壞すべからず」と。即ち是れ眞諦なり。若し然らば此四悉檀は、二諦の爲に攝せらる。更に中道あり、云何ぞ攝せん。若し中を攝せずんば、但是れ藏通の意なれば、此悉檀を麤と爲さん。今言はく、俗は有、眞は無、是れ隔異の法なり。便ち是れ三悉檀は心所行の處、破すべく壞すべし。中道第一義は有に非ず無に非ず、有無不二にして則ち隔異無し。異無きは即ち眞諦なり。前の三悉檀は所通にして、止化城に至る。化城は實に非ざる故に破すべく壞すべし。壞すべきを麤と爲す。今の中道は異無ければ、又通じて寶所に至る。能く過ぐること無く、能く滅すること無し。故に壞すべからず。之を稱して妙と爲す。若し餘經に說く中道第一義悉檀は、此經と殊ならず。但餘經は阿羅漢の所得を帶して、第一義悉檀と爲す、故に妙と稱せず。此

經は正直に方便を捨てて、但圓實の四悉檀のみ有り、是故に妙と爲す。若し三悉檀を決して第一義に入れずんば是れ復麤と爲す。若し一一の悉檀皆第一義有りと決するは是れ則ち妙と爲す。五品弟子は假名の四悉檀、六根淨は相似の四悉檀、初住より等覺に至つては分眞の四悉檀、妙覺は究竟の四悉檀なり。是故に妙と稱す。此五番に妙を明して因より果に至り、以て自行の妙を辨ず。半如意珠竟んぬ。

妙法蓮華經玄義卷第五下

妙法蓮華經玄義　卷第六上

天台智者大師の說

【一】迹門の十妙を釋する中、第六に感應妙を明す。而して先づ初に來意を示し、次に章を開示す。

【毘盧遮那、盧舍那】之れ釋迦牟尼と共に次第の如く佛の法、報、應の三身に配す。又、理、智、用に配す。梵名は共に(Vairocana)にして前者を徧一切處、後者を淨滿と翻ず。

【二】感應妙を釋する中、第一に其名を解釋す。中に於てまた自ら三段あり、一には名を釋し、二には四悉檀を以て帖解し、三には料簡す。

【正法華】西晉の竺法護譯、十卷あり。

（一）第六に感應妙を明さば、上來の四妙を名けて圓因と爲し、「三法祕藏を名けて圓果と爲す。境妙究竟じて顯はるるを毘盧遮那と名け、智妙究竟じて滿ずるを盧舍那と名け、行妙究竟じて滿ずるを釋迦牟尼と名く。三佛一異ならず縱橫ならず、故に妙果と名く。釋論に云はく、「稽首す、智度無子佛とは、果地圓極にして復因位に非ず、故に無子と稱す。果智は寂にして照せば、感有れば必ず彰はる、故に感應妙と名くるなり」と。即ち六と爲す、一には感應の名を釋し、二には相を明し、三には同異を明し、四には相對を明し、五には麤妙を明し、六には觀心を明す。

（二）釋名に又三あり、一には釋名、二には四悉檀を以て帖解し、三には料簡す。釋名とは正法華に云はく、「無數の世界に廣く經法を說く」と。世尊の爲す所感應是の如し、今故に用ひて名と爲す。而して經の中の機の語、緣の語は、幷に是れ感の異目にして、悉く衆生を語す。且く機に從つて釋するに義則ち見易し、緣感は例して解すべし。機に三義有り。一に、機は是れ微の義なり。故に易に云はく、「機とは動の微、吉の先づ現ずるなり」と。又阿含に云はく、「衆生に善法の機有らば、聖人來り應ず。衆生に將に生ぜんとするの

善有らば、此善微微に將に動かんとして機と爲ることを得」と。若し將に善を生ぜんとするを機と爲すは、此語を促と爲す。今生ずべきの善を明す、此語則ち寬し。弩に發すべきの機有り、故に射る者之を發す。之を發すれば則ち箭動じ、發せざれば則ち前まざるが如し。衆生に生ずべきの善有り、故に聖應ずれば則ち善生じ、應ぜざれば則ち生ぜず。故に機は微なりと言ふ。二に、古注の楞伽經に云はく「機は是れ關の義なり」と。何となれば、衆生に善有り惡有りて聖の慈悲に關はる、故に機は是れ關の義なり。三に、機は是れ宜の義なり。無明の苦を拔かんと欲せば、正しく悲に宜しく、法性の樂を與へんと欲すれば、正しく慈に宜しきが如し。故に機は是れ宜の義なり。次に應を明すも亦三義と爲す。一に應は是れ赴の義なり。既に機に生ずべきの理有りと言ふ、機微將に動かんとするに聖人之に赴けば、其善生ずることを得べし、故に赴を用つて應を釋す。二に、應は是れ對の義なり。人の交關して更に相主對するが如し。若し一り賣らんと欲すれども、一り買はんと欲せざれば、則ち相主對せず。若し賣買兩和すれば、則ち貿易交決して貴賤の悔無し。今衆生を以て買ふものに譬へ、如來を賣るものに譬ふ。機に就いて以て關を論じ、應に就いて以て對を論ず、故に對を以て應を釋するなり。三には、應は是れ應の義なり。既に機は是れ宜しきに於てすと言ふ。何等の法にか宜しきとならば、應ずるに慈悲の法を以てするは、是れ善惡の宜しき所なり。悲は則ち苦を救ふべく、慈は則ち樂を與ふべし。隨つて何の法を以てするも其宜しき所に應ず。故に應を以て應を釋するなり。

二に四悉檀を以て帖釋することを明さば、機應各各三義有り。即ち四悉檀の意なり。若し微を以て機を釋し、赴を以て應を釋せば、是れ樂欲の心に赴く。何ぞ但心の善生ずべき、之を名けて欲と爲す。草木の無心なるが如き、亦は可生、欲生、將生と稱す。故に知んぬ、此善生ずるに赴くは、是れ樂欲に隨ふことを。即ち世界悉檀に機應を明すなり。若し關を以て機を釋し、對を以て應を釋せば更に相對當す。悲を以て其苦機に對し、慈を以て其善機に對するは、即ち是れ對治悉檀に隨ひ、以て機應を明すなり。次に宜を以て機を釋し、應を以て應を釋せば、即ち是れ爲人、第一義なり。宜しく此の如き等の法を以て、其機感と相宜し。事善を生ずるに宜しきは即ち爲人悉檀、理善を生ずるに宜しきは、即ち是れ第一義悉檀なり。

三に料簡とは、問ふ、『何の意ぞ、理善に於て第一義悉檀と稱するや。』答ふ、『理善の明生ずれば理闇必ず滅す。終に理惡滅して方に始めて理善生ずるにあらず、故に理善に於て第一義悉檀と稱するなり。若し事善生ずるとも、事惡未だ必ずしも去らず。事惡去れども、事善未だ必ずしも生ぜず。事は是れ隔別なり。對治悉檀は正に是れ藥病相對す、故に中に於て第一義悉檀を開せざるは、其意此に在り。』問ふ、『衆生の機、聖人の應は、一とせんや異とせんや。若し一ならば則ち機應に非ず、若し異ならば何ぞ相交關して機應を論ぜん。』答ふ、『一ならず異ならず。理を以て論ずれば則ち同じく如なり、是故に異ならず。事を以て論すれば機應有り、是故に一ならず。譬へば父子の天性相關はるが如き、骨肉遺體異な

【三】感應妙の中第二に機應の相を明すに、初には正しく之を解釋す。

らば則ち不可なり。若し同ならば父即ち子、子即ち父なれば、同も又不可なり。秖一ならず異ならずして、而も父子を論ず。衆生の理性は佛と殊ならず、是故に異ならず。而して衆生は隱れ、如來は顯はる、是故に一ならず。不一不異にして而も機應を論ずるなり。又同じく是れ事に非ず理に非ず、故に不異なり。衆生は事を得、聖人は理を得。又聖人は事を得、凡夫は理に有り。故に異を論ず云云。問ふ、「法身を用ひて應ずとせんや、應身を以て應ずとせんや。若し應身の應ならば、應身は本無し、何ぞ能く應ぜん。若し法身を用ひて應ぜば、應則ち法に非じ」。答ふ、「諸法を全論せば去來今に非ず。應に非ず不應に非ずして、而して能く應有り。亦法の應と言ふべく、亦應の應と言ふべし。法の應は則ち冥益、應の應は則ち顯益なり」。冥顯を分別するに四義有り、後に說くが如し云云。

（三）第二に機應の相を明さば、善惡に約して機の相を明し、慈悲に約して應の相を論ず。若し善惡を機と爲さば、單とせんや共とせんや。解するもの不同なり。或は言はく、「單惡をもつて機と爲す」と。經を引きて云はく、「我一切衆生の瘡疣重病を斷せんが爲なり」と。又云はく、「七子有るが如し。然るに病者に於ては心則ち偏に重し。如來も亦爾なり。諸の衆生に於て平等ならざるに非ず、然るに罪者に於ては心則ち偏に重し」と。又云はく、「如來は無爲の衆生の爲に而も世に住せず。又無記は是れ無明、終に惡の攝に屬す。此れ即ち單に惡を以て機と爲す。或は單に善を以て機と爲す」と。大經を引きて云はく、「我衆生を觀するに、老少中年、貧富貴賤を觀ぜず。善心有る者は則ち慈念す」と。此れ則ち單に善を

【闡提】不成佛の義にして之に斷善と大悲の二種の闡提あり。前者は大邪見を起して一切の善根を斷ぜしもの、後者は一切衆生を救濟せんが爲に身を現ぜし菩薩の行なり、今は前者を指す。

【四】機應の相を明す中、之より下問答を設けて料簡す。

機と爲す。或は云はく、「善惡は獨り機と爲すことを得ず。何となれば、金剛の後心の如き即ち是れ佛なり、衆善普く會して、善の此に過ぐるもの無し。此れ何ぞ機と爲すを得んや。佛佛相念ずと雖も、此は是れ通語にして、拔無く與無し。故に知んぬ、單善は機と爲すを得ざることを。單惡は機と爲ることを得ずとは、闡提の極惡の如きは、佛を感ずること能はず。大經に云はく、「唯一髮有るは身を升すこと能はず」と。即ち是れ性德の理善なり。此は是れ通機にして、終に感を成ぜざるなり。或は善惡相帶するを取りて機と爲すとは、闡提の改悔の心を起すより上等覺に至つて、皆善惡相帶すること有り。故に機と爲ることを得。是故に此善惡に約して、其相を明すなり云云。次に慈悲に約して以て應の相を明さば、或は單に慈を以て應と爲す。經に云はく、「慈善根の力、象師子を見る」と。廣く說くこと涅槃の如し云云。或は單に悲を以て應と爲す。請觀音の如き、或は地獄に遊戲して、大悲代つて苦を受く。或は合して慈悲を用ひて應と爲す。何となれば、良に悲心、智慧に熏じて能く他の苦を拔き、慈心、禪定に熏じて能く他に樂を與ふるを以てなり。下の文に云はく、「定慧の力莊嚴し、此を以て衆生を度す」と。論に云はく、「水銀、眞金に和して能く諸の色像を塗る。功德、法身に和して處處に應現して往く」と。豈是れ水銀眞金は、單に能く色像を塗らんや。當に知るべし、慈悲合して應を論ずることを。

(四)問ふ、「衆生の善惡に三世有り。何れの世をか機と爲すや。聖法に亦三世有り、何れの世をか應と爲すや。過去は已に謝し、現在は住せず、未來は未だ至らず。悉く機と爲すこと

を得じ、亦應と爲すことをも得ず。云何ぞ機應を論ぜんや」と。答ふ、「若し至理に就いて論覈せば、三世皆不可得なり、故に機無く亦應無し。故に經に言はく、『菩提に去來今有り』と謂ふに非ず。但世俗文字の數を以ての故に、三世有りと說く。四悉檀の力を以て、衆生に隨順して說くなり」と。或は過去の善を用て機と爲す。故に言はく、「我等宿福の慶び今世尊に値ふことを得つ」と。又五方便の人の如き、過去に方便を習ふ者は、眞を發すること則ち易く、習はざるは則ち難し。是故に過去の善を以て機と爲す。或は現在の善を以て機と爲すべし、故に言はく、「即ち此念を生ずる時、佛容中に於て現ず」と。或は未來の善を以て機と爲すべし、未生の善法をして生ぜしめんが爲の故なり。又無漏の習因無くして、而も能く佛を感ずるが如し。故に大論に云はく、「譬へば蓮華の水に在るに、已生、始生、未生の者有り。若し日光を得ざれば萎死すること疑はざるが如し」と。衆生の三世の善も、若し佛に値はざれば成ずることを得るに由無し云云。惡も亦是の如し、或は過去の罪を以て今悉く懺悔す。現に衆惡を造るも、今亦懺悔す。未來の罪相續心を斷ず。未來を遮するが故に、之を名けて發と爲すが如し。何となれば、過去の造惡は現善を障へて起ることを得しめず。此惡を除かんが爲に、是故に佛を請ず。又現在の果の苦報は、衆生を逼迫して救護を求む。又未來の惡は時と相値ひ、遮して起らざらしむ。故に通じて三世の惡を用て機と爲す。應も亦是の如し。或は過去の慈悲を用て應と爲す。故に云はく、「我本誓願を立てて、此法を得せしめんと欲す」と。或は現在の慈悲を用て應と爲すは、一切の天人修羅皆應に

【四正勤】精進して道を修すること一には未生の惡をして生ぜざらしめ、二には已生の惡は滅せしめ、三には未生の善をして生ぜしめ、四には已生の善は之を增長せしむるなり。

此に至るべし。聽法の爲の故に、未度をして度せしむるなり。又未來を用て機と爲すは、卽ち是れ壽量の中の未來世の益物なり。亦安樂行品の中に云ふが如し、「我三菩提を得る時、之を引きて此法の中に住することを得せしむ」と。若し通じて論ずれば、三世の善惡を皆機と爲す。別して論ずれば、但未來の善惡を取りて正機と爲す。何となれば、過去は已に謝し、現在は已に定まる。秖未來の惡を拔き、未來の善を生ぜしめんが爲なるのみ。問ふ、『若し未來を正機と爲さば、四正勤の意には云何。』答ふ、『此れ已に通の意に屬す。今更に別して答ふれば、秖過去の惡は未來の善を遮するが爲の故に、勸めて過去の惡を斷ず。秖過去の善、增長せざるが爲なり。增長とは、卽ち是れ未來の善なり。是故に四正勤の中には、言は過去と雖も意は實に未來なり云云。』問ふ、『未來は未だ有らず、佛云何ぞ照したまふや。』答ふ、『如來の智鑒能く是の如く知る。下地の知る所に非ず。仰いで信ずるのみ、何ぞ分別すべけん。』問ふ、『是れ衆生自ら能く感ずとせんや、佛に由るが故に感ずるや。如來自ら能く應ずるや、衆生に由るが故に應ずるや。』答ふ、『此れ應に四句を作るべし。自、他、共、無因に、是性の義悉く不可なりと破す。此四句無きが故に、則ち無性なり。無性の故に但世間の名字を以て、四悉檀の中に、而も感應能所等を論ず。而して能應を佛に屬し、所應を衆生に屬す。能感を衆生に屬し、所感を佛に屬す。若し更に翻覆して諸の語言を作さば、世諦の名字則ち亂れて分別すべからず。此の如きの名字を作すと雖も、是字住せず、是字所有無し。故に夢の如く幻の如し云云。』問ふ、『旣に善惡俱に機とならば、

誰か善惡無けん。此れ皆益を得べしや。」答ふ、「世の病者は醫を延けども、而も差不差有るが如し。機も亦是の如し、熟不熟有れば、則ち應に遠有り近有り。

(五)三に機感の不同を明すは、即ち三意と爲す。一には四句に就いて不同を論じ、二には三十六句に就いて不同を論じ、三には十法界に就いて不同を論ず。但衆生の根性百千なれば、諸佛の巧應無量なり。其種種に隨つて得度不同なり。故に文に云はく「名色各異なれば種類若干あり、上中下の根莖葉等の如し。其種性に隨つて各各生長を得」と。即ち是れ機應不同の意なり。今略して言はば四と爲す。一には冥機冥應、二には冥機顯應、三には顯機顯應、四には顯機冥應なり。其(標)相云何。若し過去に善く三業を修し、現在未だ身口を運せずして、往善の力に藉るは、此を名けて冥機と爲す。現に靈應を見ずと雖も、密に法身の爲に益せらる。見ず聞かざれども、而も覺し而も知る。是を冥益と爲す。二に冥機顯益とは、過去に善を殖ゑて冥機已に成ず。便ち佛に値ひ、法を聞くことを得て現前に利を獲、是を顯益と爲す。佛初めて出世し、最初に得度する人の如き、現在何ぞ嘗て修行せん。諸佛は其宿機を照し、自ら往きて之を度すと、即ち其義なり。三に顯機顯應とは、現在に身口精勤して懈らず。而して能く感降る。須達長跪すれば佛祇洹に往き、月蓋曲躬すれば聖、門閫に居するが如き、即ち行人道場に禮懺して、能く靈瑞を感ずるが如き、即ち是れ顯機顯應なり。四に顯機冥應とは、人一世に勤苦して、現善濃かに積むと雖も、而も顯に感ぜずして、冥に其利有るが如き、此は是れ顯機冥益なり。若し四意を解せば、

【五】感應妙を釋する中、第三に機感の同異を論ず。即ち一には四句に就き、二には三十六句に就き、三には十法界に就いて、その不同を論ずるなり。

【須達】(Sudatta) 給孤獨長者の本名なり。

【月蓋】毘舍離國の長者の名。

一切の低頭擧手にも福虚しく棄てず。終日感無けれども、終日悔無し。若し殺を喜んで壽長く、施を好んで貧乏するを見て、邪見を生ぜざれ。若し此を解せざれば、其功を徒うし計りごとを喪ふと謂つて、憂悔して理を失はん。釋論に云はく、今我疾苦は皆過去に出る。今生に福を修すれば報、將來に在り。正念僻むこと無くんば此四意を得ん。

二に三十六句に就いて機應の不同を論ぜば、前は冥顯互に論ずるに、略して四句を擧ぐ。若し具足して辨ぜば、四機を用て根本と爲す。所謂る冥機、顯機、亦冥亦顯機、非冥非顯機なり。冥は是れ過去、顯は是れ現在、冥顯は是れ過現、非冥非顯は是れ未來なり。佛闍提の爲に說法したまふが如し云云。一句の中に於て復四句と爲す。謂ゆる冥機冥應、冥機顯應、冥機亦冥亦顯應、冥機非冥非顯應なり。餘の三機も亦是の如し、四四卽ち十六句を成ず。機既に應を召せば、應も亦十六句有り。一機にして而も四應を感じ、一の應にして而も四機に赴く。機應各十六と爲し、合して三十二句を成ず。前の根本の四句に就かば、便ち是れ三十六句の機應なり。三に十法界に就いて機應の不同を論ぜば、秖一人の身業の機に約すれば三十六を具し、三業に約すれば卽ち一百八の機有り、三世の三業に約すれば則ち三百二十四有り。一界既に爾り、十法界には卽ち三千二百四十の機應の不同有り。自行に就くに既に爾り、化他も亦然なり。合すれば則ち六千四百八十の機應なり。此れ歷別の十法界に就くに此の如し。若し十法界交互に就かば、則ち九倍を增す。都て六萬四千八百の機應あり。

【六】感應妙の中次に機應相對を明す。

【無垢三昧】諸佛菩薩の清淨の三昧の總稱なり。

【白、黑業】感ずる果より形容せし言葉にして善惡の業を云ふ。

【見思】見惑と思惑なり。見思は迷理の惑にして、思惑は迷事の惑をいふ。共に三界に生を引く煩惱なり。

【塵沙】菩薩化道障の惑と稱し、劣慧無知をいふ。

【無明】中道の理に迷ふ煩惱にして之を中道觀附體の惑ともいふ。

(六)四に機應相對を明さば、即ち四意有り。一には諸有の苦樂と三昧慈悲と相對することを明す、二には機關等の相對、三には三十六句の相對、四には別圓相對なり。諸の三昧相對とは、諸機乃ち多けれども二十五有を出でず、諸應乃ち多けれども二十五三昧を出でず。地獄の有に善惡の機有り、無垢三昧の慈悲の應に關はる。其惡を論ずれば即ち黑業の惡、見思の惡、塵沙の惡、無明の惡有り。善を論ずれば則ち白業の善、即空の善、即假の善、即中の善有り。是を地獄の機と名く。無垢三昧の慈悲を應と爲すは、初め無垢三昧を修して地獄界を觀るに、因緣觀の慈悲、即空觀の慈悲、即假觀の慈悲、即中觀の慈悲あり。因緣觀を以てする時の悲は地獄黑業の苦を拔き、因緣觀を以てする時の慈は白業の樂を與ふ。即空觀を以てする時の悲は見思の苦を拔き、即空觀を以てする時の慈は無漏の樂を與ふ。即假觀を以てする時の悲は塵沙の苦を拔き、即假觀を以てする時の慈は道種智の樂を與ふ。即中觀を以てする時の悲は無明の苦を拔き、即中觀を以てする時の慈は法性の樂を與ふ。是を地獄に善惡の機有り、以て無垢三昧の慈悲の應に關はると爲す。拔苦與樂相對の義なり。二に機關相對とは、地獄界の中の黑業の惡に微の義有り、關の義有り、宜の義有り。此の如きの三機、即ち無垢三昧の時の慈悲に關はるに赴の義有り、對の義有り、應の義有り。地獄の白業も亦六義相對有り。即空は見思、塵沙、無明等なり、善惡皆六義相對を具す云云。三に三十六句相對とは、地獄の黑白業に具に冥機冥應、冥機顯應、顯機顯應、顯機冥應有りて、即ち無垢三昧の慈悲に關はる。冥顯の四應地獄に赴くに、見思即空、塵沙

種智、無明中道等皆具に四機四應相對す云云。又地獄に冥顯の三十六機有り、即ち無垢三昧の三十六應に對す云云。四に別圓相對とは、若し地獄に歴別の機有らば、三昧の應も即ち歴別なり。若し圓普の機有らば、三昧の應も亦圓普なり。若し歴別、機起らば三昧別に應ず。一の有の業謝すれども、餘の有業未だ必ずしも謝せず。三惡の思盡くれども、餘有の思未だ必ずしも盡きず。地獄の道種智明かなれども、餘有未だ必ずしも明かならず。地獄の佛性了了なれども、餘の有未だ必ずしも了了ならず。若し圓機圓應を作さば、地獄の自在業未だ究竟せざれば、餘の有も亦未だ究竟せず。一有の見思未だ盡きざれば、餘の有も亦未だ盡きず。一有の道種未だ明かならざれば、餘の有も亦未だ明かならず。一有の佛性未だ了了ならざれば、餘の有も亦未だ了了ならず。一有了了なれば餘有も亦了了なり。乃至一有の業自在なれば餘有の業も亦自在なり。地獄の機應相對を分別するは上に說くが如し、餘の二十四有の機應相對も例して亦是の如し。問ふ、「頗し善の機に惡の應、惡の機に善の應、偏の機に圓の應、圓の機に偏の應有りや不や。」答ふ、『無方適時は亦此義有り。』淨名に云はく、「或時は風火を現じて、照して無常を知らしむ」と。即ち惡、善に應ずるなり。「妙莊嚴は邪惡を信受し、三菩薩は應じて妻子と爲る」と。即ち善、惡に應ずるなり。「圓機偏應とは、一切の智願猶在りて失せず」と。不失は即ち圓機、聲聞の法を敎ふるは即ち偏應なり。偏機圓應とは、先に三車を引きて後に一大を與ふ。領解して云はく、「無上の寶聚求めざるに自ら得」と、即ち其義なり。樂を拔き苦を與ふるも、此に倣して知んぬ

【七】感應妙の中第五に麤妙を明す中就中一には機の麤妙を明し、二には應の麤妙を論じ、三には麤を開して妙を顯す。

べし云云。

（七）第五に麤妙を明すに即ち三意と爲す。一には機の麤妙を明し、二には應の麤妙を明し、三には麤を開して妙を顯はす。一に機の麤妙とは、樂閒地獄の如き、此樂は微善に因る。故に立世毘曇に云はく「人六畜を養ふに飲飴溫淸あり」とは、熱地獄に在りては冷閒を得、寒地獄には溫閒を得。若し此義に從はば、樂閒に十法界の機を論ずるを得べし。阿鼻は樂閒無ければ則ち事善無し、云何ぞ十を具せん。然るに阿鼻に性善斷ぜざること有るが故なり。又近世に事善無しと雖も、遠劫に或は有り。惡強く善弱ければ、其代して未だ發せず。若し因緣に遇はば發すること亦何ぞ定まらん。是故に阿鼻に十機を具することを得べし。即ち麤妙を判ぜば、九界の機を麤と爲し、佛界の機を妙と爲す。麤機は方便の應を召す。此機に熟未熟有り、方便の應に淺有り深有り。機の熟する者は應ぜられ、未熟の者には應ぜず。應の淺深とは、無間より閒に之くを得るが如し。地獄を出でて畜生に至り、畜生を出でて鬼に至り、三惡を出でて人天に至り、人天を出でて二乘に至る等なり。悉く是れ機の生熟、應の淺深、悉く麤機の攝に屬す。妙機は究竟の妙應を召す。妙の機も亦生熟有り、妙の應も亦淺深有り。慈童女の、地獄に在りて人に代つて罪を受け、即ち天に生ずることを得るが如き、此れ乃ち妙機淺く熟して、近く天に在るのみ。其餘は例して知んぬべし。

二には應に麤妙あることを明さば、聖人の慈悲誓願は、願の行を持すること物に膠有る

【二十五三昧】既出の無垢三昧乃至我三昧等の二十五三昧を指す。之等の二十五三昧に依て菩薩は二十五有に沒在せる衆生を救ふ。

が如く、任運に機と相著く。故に慈善根の力、手より師子を出すと、若し誓願無くんば、苦樂を觀ずと雖も、拔與すること能はず、慈力を以ての故に機の麤妙に隨ひて、先に熟するは先に應じ、後に熟するは後に應ず。三藏、通教等の聖も亦應有るを得べし、但是れ作意神通なるのみ。譬へば圖寫の經紀して乃ち成ずるが如く、覈論するに本無し。何となれば、灰身滅智して常住の本無し、何に約してか應を起さん。若し別接通は、別惑未だ斷ぜざれば亦應を得ず、縱令物に赴くも、皆麤應と名く。若し別圓の兩教は、初心に惑を伏すれども未だ應有ること能はず。初地、初住に三觀現前し、二十五三昧を證し、法身清淨にして染無く、虛空の如く湛然として一切に應ず。無思無念に、機に隨つて即ち對す。一月降らず、百水升らずして、河の短長に隨ひ、器の規矩に任せて、前無く後無く、一時に普く現ずるが如し。此は是れ不思議の妙應なり。又明鏡の表裏清瑩して、一像千像簡擇する所無く、功力を須ひず、任運に像似るが如し。是を妙應と名く。此は是れ相待に感應妙を論ずるなり。

三に麤を開して妙を顯はさば、若し九界の機は麤、一界の機は妙なり。未だ法身の應を得ざれば麤、法身の應を得るは妙なる者なり。諸の大乘經、華嚴等は麤妙相隔つるを明す。二乘は開かず解せずして、瘂の如く聾の如し。無量義經に麤妙を明すは、一理より無量の麤妙の機應を出生す。一理を妙と爲し、無量を出生するを麤と爲す。此れ則ち妙より麤を出し、隔てて未だ合せず。今の經は無量を還つて一と爲す。此れ則ち權を開して

【八】感應妙を明す中、第六に觀心なり。

【九】迹門の十妙を明す中、第七に神通妙を出す。而して之に四意ある中初にその次第來意を明にす。

實を顯はせば、秖麤是れ妙なり。何となれば、本一理を顯はして諸の方便を作せば、方便も即ち是れ眞實なり。故に云はく「凡そ所作有るも唯一事の爲にし、未だ曾て暫くも廢せず」と。譬へば、三草二木は秖是れ一地の所生なるが如し。即ち是れ同源なるは機一なり。一雨の所潤即ち是れ同受なるは應一なり。愚者は未だ解せずして、草木の四微は永く是れ地に非ずと謂ふ。智者は四微の生ずるは秖是れ地の變なり、四微の滅するは秖是れ地の還なりと了達す。豈草木有りて而も地に非ざらんや。是れ即ち權を開して實を顯はす。聲聞の法を決了するに、是れ諸經の王なり。九法界の機皆佛界の機たり。四聖の應も妙應に非ざること無し。

(八)第六に觀心を明す云云。

(九)第七に神通妙を明すは、此を四意と爲す。一には次第を明し、二には名數、三には同異、四には麤妙なり。來意とは、前に機應を論ずるは、止是れ共生ずべく、赴くべきの相を辨ず。若し正しく化用の他を益することを論ぜば、即ち是れ三輪不思議の化なり。身輪、口輪、他心輪を謂ふ。普門品に但二文有りて、而も三意を兼ね得たり。遊於娑婆世界は即ち是れ身輪、而爲說法は即ち是れ口輪なり。蓮華の大なるを見て池水の深きを知るが如し。若し說法の大なるを見れば、則ち智慧の大なることを知る。故に兩輪は兼ねて他心輪を示す。又化他には多く兩輪を示して、心輪を示すこと少し。多に從へば但二なり。故に心輪無し。經に言はく「其見聞の者悉く皆度を得」と。身輪を示すは即ち是れ藥樹王身、如

【一〇】神通妙の中第二に名數を明す

意珠王身を示し、口輪を示すは即ち是れ毒鼓、天鼓を示す。此は是れ慈悲、身口に熏じて、則ち二身の示現、二鼓の宣揚有り。若し心輪を示すは、即ち是れ隨自意、隨他意等を示す。亦是れ病行、嬰兒行に同じ。上に機感相關することを辨ずれども、而も妙理顯はれ難し。應に神通を須ひて發動し、瑞相を現じて密に理を表すべし。世人は蜘蛛挂れば則ち喜事來り、鳱鵲鳴けば則ち行人至るを以てす。小尚徵有り、大焉ぞ瑞無けん。近を以て遠を表するに、亦應に是の如くなるべし。

(一〇)二に名數とは、諸經に出す所の名數同じからず。今且く六種に依る。天眼、天耳、他心、宿命、如意身通、無漏等を謂ふなり。此六皆神通と稱するは、瓔珞に云ふが如し、神は天心を名け、通は慧性を名く。天心とは天然の心なり、慧性とは通達無礙なり。毘曇に亦、障通無知若去と云ふは、即ち慧性を發するなり。當に知るべし、天然の慧性と六法と相應するは、即ち能く轉變自在なることを。故に神通と名く。地持力品に云はく「神は測り知り難きを謂ひ、通は障礙無きを謂ふ」と。此解、瓔珞と同じ。天心は即ち是れ測り知り難きの義、慧性は、即ち是れ障礙無きの義なり。然るに此六法は、修に前後無く、證に次第無く、用も亦時に任かす。故に衆經の列次不同なり。釋論に云はく「幻術の事は是れ虛誑の法なり、草木に法りて人の眼を誑惑するも、物實に變ぜず。神通は爾らず、實に變法を得て、物をして實に變ぜしむ。地に水と成るの理有るが如し、水に地と成るの義有り。若し金銀火を得れば則ち融じ、水寒に遇へば則ち結す。火と寒は是れ融結の法なり、結する

【二】神通妙の中次にその同異を論ず。

【根本禪】根本定とも云ふ、下地の煩惱を伏して得る所の上地の禪定を近分と云ひて下地の煩惱を斷じて得る所の上地の禪定を根本と云ふ。

【五通】五神通のこと。天眼、天耳、他心、宿命、如意の不思議自在の五種の通力。

【六通】三乘の聖者所得の通力にして五通に更に漏盡智證通を加へしもの。

ときは則ち實に結し、融ずるときは則ち實に融ず。若し天然の慧性を得れば、則ち實に能く此の如く變用自在なり。變ずる所の水火は、他をして實に受用することを得しむ。而して其果報に非ずして、但是れ神通一時の所作なるのみ。

（二）三に神通の不同を明さば、鬼道は報得の通なり、人能く薬を服して亦通を得、外道は根本禪に因つて亦通を發す。諸天は報得の通なり。二乘は背捨、勝處、一切處に依り、十四變化を修して神通を發得す。六度の菩薩は禪に因つて五通を得、道場に坐する時能く六通を得。通教の菩薩は禪に因つて五通を得、體法の慧に依りて無漏通を得。別教の地前は禪に依りて五通を發し、登地は正無漏通を發して、任運に常に照して、二相を以て諸の佛土を見ず。圓教の通は、今の經及び普賢觀に依りて、鼻舌の兩根を以て、以て六數と爲す。菩薩處胎經も同じ。他心と宿命は意根に入りて攝す。然るに經の文に、鼻通を明すこと最も委悉なり。其五用を取るに塞ること無し。舌根は四を取るを以て無礙を辨ず、能く一妙音を以て遍く三千界に滿ちて、而も味を知ることを取らず。味を取るは是れ報法なり。經に云はく、「諸根通利にして智慧明了なり」と。六根の皆智慧なるは、即ち五用の意なり。今云はく、「六根の通は事禪に因つて發せず」と。此れ乃ち中道の眞なり、眞自ら通有りて、任運に成就して作意を須ひず。故に無記化化禪と名く。別して作意せざるが故に無記と名く、任運に常に明なること阿修羅の琴の如し。化復能く化す、故に化化と言ふ。中道の眞通任運なること此の如し、餘の通と異なり。其修習を論ずれば、皆實相常住の理を縁ず。

文に云はく「是れ常に眼根清淨なることを得」と。既に是れ常と言ふ、即ち本性清淨の常にして、性に垢染無し。毘曇婆沙に云はく「六入殊勝なること本自爾なるが故なり」と。鴦掘に云はく「謂ゆる彼眼根は、諸の如來に於て常なり。具足して滅修無く、了了分明に見る」と。乃至、耳鼻舌身意皆諸の如來に於て常なり。具足して滅修無く、了了分明に聞知する等なり。彼とは、佛に於けるを白と爲し、衆生に於けるを彼と爲す。衆生は謂つて無常と爲せども、如來に於ては是れ常なり。滅修とは、禪に依りて修するを名けて滅修と爲し、實相に依りて修するを無滅修と名く。佛性を見ざるを不了了見と名け、若し佛性を見るを了了見と名く。又實相の理を見るを了了と名け、法界の事を識るを分明と名く。見に二種有り、一には相似の見、二には分眞の見なり。相似とは、六根清淨の中に辨ずるが如し。其眞見を論ずれば、華嚴に明す所の佛の眼耳鼻舌身意の如し。此經の中に、亦眞身通の相を明す。謂ゆる普現色身、一切衆生所喜見の身を示すとは、即ち是れ外身の通なり。現身琉璃の如く、十方の諸佛悉く身中に於て現ずとは、即ち是れ內現の身通なり。眼耳鼻舌等の內外の示現も、亦例して此の如し。是れ則ち圓教の神通にして、前に辨ずるに異なり云云。問ふ、「若し六根を以て六通と爲さば、云何ぞ功德に增減有る。」答ふ、「大論の四十に云はく、鼻、舌、身を同じく覺と稱し、眼を見と稱し、耳を聞と稱し、意を知と稱す。三識の所知を、一と爲し、三識の所知を、別と爲す。而も三識は、道法を助くること多し、故に別說す。三識は爾らず、故に合說す。又三識は、但世間の事を知る、故に合說

【三】神通妙を明す中、之より下塵妙を論ず。

す。三識は、亦世間を知り、亦出世間を知る、故に別說す。又三識は但無記の法なり、三識は或は善、惡、無記等を緣ず。又三識は能く三業を生ずる因緣となる。故に別說す。若し此儀に例せば三根は種種の義强し、故に千二百の功德有り。三根の力弱し、故に但八百の功德なる者なり。蓋し一途に別說するは、經の圓意に非ず。正法華には「功德正等にして等しく千なり」と。今の經は六根互用を顯はし、三根を將つて二百を足し、三根に向つて互用するのみ。自在無礙なり。能等は正法華に說くが如く、能縮は身、眼、鼻の八百の如く、能盈は耳、舌、意の千二百の如し。經に云はく、「若し能く此經を持せば功德則ち無量なり。虛空の邊無きが如く、其福限るべからず」と。互用の意彰はる矣。

（一二三）四に麤妙を明す。若し神通、物を度することを言はば、但己身を變じて其正報に同ずるのみに非ず、亦己國土を變じて其依報に同ず。瓔珞に云ふが如く、一切の國土の應を起し、一切衆生の應を起すなり。若し正報に應同するは、即ち是れ示して十法界の像と爲る。若し依報に應同するは、即ち是れ十界所依の處に同ずるなり。若し四惡趣に應同するは、惡業を觀ずる慈悲を用て無記化化禪に熏じて、應じて地獄等の形質と作り、黑髮を身に纏ひ、猴猿鹿馬、大鷲獺鳥、修羅等の像各各皆其事業に同ずと見る。若し人天の身に應ずるは、是れ善業を觀ずる中の慈悲を用ひて、無記化化禪に熏じて善道の身と作る。後身の菩薩の如く、正慧胎に託し、地に墮ちて七步、手足を盥洗し、楊枝自ら淨うして、妃を納れ子を生じ、世を厭ひ出家す、乃至天の像も亦復是の如し。各各皆其事業に同ずと見る。若し應

の、三藏の二乘と作るは、是れ析空の慈悲を用て、無記化化禪に熏じて老比丘の像を起し、僧と共に布薩し、律儀規矩各各皆共事業に同ずと見る。若し通教に應ずるは、是れ即空の慈悲を用て、無記化化禪に熏じて體法の應と作る。無生を觀じ、苦空等を習應するに悉く不可得にして、各各皆共事業に同ずと見る。若し別教に應ずるは、是れ即假即中の慈悲を用て、無記化化禪に熏じて漸頓の應を起し、示して恆沙の佛法を修して、各各皆共事業に同ずと見る。若し圓教に應ずるは、是れ即中の慈悲を用て、無記化化禪に熏じて圓頓の應を起し、一の中の無量、無量の中の一を修することを示す。皆各各共事業に同ずと見る。是の如く正報に應同すること稱計すべからず。意を以て知るべし、言を以て盡すべからず云云。若し此意を得れば、往いて漸頓五味の教の中に望めて神通を用ふるは、乳教に用ふる所の神力は、若は多、若は少、但兩意を表す、一麤一妙なり。三藏に用ふる神力は、若は多、若は少、但一麤と爲す。方等に用ふる神力は、若は多、若は少、三麤一妙なり。般若に用ふる神力は、若は多、若は少、二麤一妙なり。此經の神力は、若は多、若は少、唯一妙と爲す。序品の中の瑞相に十有り、咸く皆妙を表する所以なり。地皆嚴淨は理妙を表し、放眉間光は智妙を表し、入於三昧は行妙を表し、天雨四華は位妙を表し、栴檀光風は乘妙を表し、四衆咸有疑は機を表し、見萬八千土は應を表す。此二は感應妙を明すなり。地六種動は神通妙を表し、天鼓自鳴、及び面覩說法は說法妙を表し、天龍大衆歡喜は眷屬妙を表し、又見佛子修種種行は利益妙を表す。此に神變を用ふるは、若は少、若は多、但

に妙を表するなり。文に云はく、「今佛三昧に入る、是れ不可思議希有の事を現ずるならん」と。現希有事は是れ妙の神通なり。

若し依報に應同するは兩意有り。若し國土の苦樂は衆生に因り、佛の所作に非ず。佛は但應同するのみ。若し折伏攝受を作すは、佛機緣を鑒みて、或は苦國を作り、或は樂國を作る。苦樂は佛に由りて、衆生に關はらず。今且く初の意を解せば、大論に云はく、「國土有り、純ら聲聞僧なり、或は國土有り、純ら菩薩僧なり、或は菩薩と聲聞と共じて僧と爲す。或は淨、或は穢なり。何が故に差別するや、皆乘戒の緩急に由る。若し戒緩にして、乘亦は急亦は緩なるは即ち是れ穢土、聲聞菩薩を以て共に僧と爲す。戒緩を以ての故に五濁にして土穢なり。乘亦緩の故に是れ三乘を開し、乘亦急の故に、是れ一乘を顯はす。娑婆是れなり。戒急にして、乘亦は緩亦は急なるは淨土なり。戒急の故に土に五濁無し。乘亦緩の故に三乘を開し、亦急の故に一を顯はす。安養是れなり。乘緩戒急なるは即ち是れ淨土にして、純ら聲聞を僧と爲す。此れ知るべきなり。戒緩乘急は即ち是れ穢國にして、純ら菩薩を僧と爲す。此れ亦知んぬべし。淨穢の差別は悉く衆生に由り、高下苦樂は佛に關はらざるなり。若し伏攝の義を作さば、國は佛に由りて、衆生に關はらず。佛、惡を觀ずる慈悲と無記化化禪と合するを以て穢國を起し、四趣の衆生を折伏攝受す。善業の慈悲と無記化化禪と合するを以て、兩趣の衆生を折伏攝受す。佛、析空六度等の慈悲と無記化化禪と合するを以て、或は穢國を起し、或は淨國を起して、聲聞菩薩兩界の衆

【三變土田】法華經見寶塔品に出づ。釋尊、十方分身佛の靈山來集に方り神力を以て三たび穢土を變じて淨土と爲したまへり。

生を折伏攝受す。佛體容の慈悲と無記化化禪と合するを以て、或は淨國を起し、或は穢國を起して、通教の聲聞菩薩兩界の衆生を折伏攝受す。佛歷別の慈悲と無記化化禪と合するを以て、或は穢國、淨國を起して、別界の菩薩衆生を折伏攝受す。佛即中の慈悲と無記化化禪と合するを以て、或は淨國を起し、或は穢國を起して、圓界の菩薩衆生を折伏攝受す。是の如く、種種に國を爲すこと不同なるは、皆如來の神力轉變に由る。今此依正の轉變を將つて、三教の作意の神通に待して、悉く名けて麤と爲す。譬へば圖畫するに、思ひを盡し力を竭して、終に眞に似ざるが如き、之を名けて麤と爲す。若し明鏡の容を寫すに任運に相似るは、之を名けて妙と爲す。方便の神通は圖畫の如し。中道は任運にして、即ち對すれば即ち應ず。淨鏡に譬ふべし、故に妙と爲す。無記化化禪の作す所の神變に就いて、自ら麤妙を論ず。若し九界の衆生の爲に、方便の神力を用ひて淨を作し穢を作すは、若は廣、若は狹、悉く名けて麤と爲す。若し佛法界の衆生の爲に、眞實の神力を用ひて淨を作し穢を作すは、若は廣、若は狹、悉く名けて妙と爲す、經に眉間の光を放ちて萬八千土を照し、及び三たび土田を變ずるが如き、餘經の神力に比すれば何ぞ多とするに足らん。但大事を開發するが爲の故に妙と言ふ。

又五味に約して麤妙を論ぜば、乳教は一麤一妙、酪教は一麤、生蘇は三麤一妙、熟蘇は二麤一妙、法華は一妙なり。又諸經の妙は同じく麤異なり。麤に二種有り、一には雜轉の麤、二には易轉の麤なり。易轉の者は諸經の中に於て、已に妙と爲るを得。雜轉の者は今

【一三】迹門の十妙を釋する中、第八に說法妙なり。即ち初にその來意を說き、次に章を分つ。

【一四】說法妙の中第一章に法の名を解釋するに就いて、先づ釋名の意を標し、次に達磨鬱多羅の釋を出す。

【達磨鬱多羅】佛滅後八百年に出でし阿羅漢、法尙のこと。雜阿毘曇心論十二卷及び增一集二十卷を撰す。今は後者の義をとる。

法華に於て、復兩還無くして但一妙有り。唯一大佛事の因緣は曾て他事無し、假に九界の神通に同ず。衆生は自ら他事と謂へども、佛に於ては常に是れ佛事なり。客作は自ら賤人と謂ひ、長者は審に是れ子なりと知る。此れ即ち相待の神通妙なり。又諸經の諸の靈の神通は、妙の神通を隔つるも、今の經は皆權を開して實を顯はせば、同じく妙の神通なり、是を絶待に妙神通を明すと名く。此は略して記す、周悉ならざるなり。

（一三）第八に說法妙とは、諸法は示すべからず、言辭の相寂滅すと。因緣有るが故に亦說示すべし。前の藥珠の二身は先に定を以て動ず、今毒天の二鼓は後に慧を以て拔く。一乘を演說するに二の差別有ること無く、皆悉く一切智地に到る。其所說の法は皆實にして虛ならず。是故に次に說法妙なり。即ち六意と爲す、一には法の名を釋し、二には大小を分ち、三には緣に對する同異、四には所詮を判じ、五には麤妙を明し、六には觀心を明す。

（一四）法の名を釋せば、三世の諸佛法は多無量なりと雖も、十二部經に收むるに攝きて盡きざるは無し。先に達磨鬱多羅に七種の分別有るを出す。體は一、相は二、制名は三、定名は四、差別は五、相攝は六、料簡は七なり。體一とは、經は名味章句を以て體と爲す。經として然らざるは無し。故に體一なり。相二とは、長行に直說し、偈を作りて讚頌する有りて、兩種の相別なり。何となれば、人情の喜樂不同なるを以て、質言を好む有り、美語を好む有り。故に相別にして二あり。制名の三とは、修多羅、祇夜、伽陀の三部は、字句に就いて名と爲し、所表に就かず。授記等の八部は所表に就かず、又字句にも就かずして、

事に從つて稱を立つ。方廣の一部は、名は所表に從ふ、何となれば、修多羅等の三部は直に法の相を說き、名に卽して以て所表を顯はすべし。苦集滅道の如く、名に依つて卽ち所表を顯はす、故に名に就いて以て名と爲すなり。授記等の經は、所表の法は但言を以て說くべからず。要らず事に寄せて方に乃ち顯はるるを得。授記經の事に從つて名と爲すが如し。止行因得果の道理を明す。理は事に託して彰はれ、事は言を以て辨ず。法華の中に聲聞に授記を與ふるが如く、一切皆當に成佛を得べきを彰はす。授記に寄せて以て所顯を彰はす、故に授記經と名く。無問自說の經とは、聖人の說法は皆請問を待つ。然るに亦衆生の爲に不請の師と作る、故に無問自說す。又佛法は知り難くして、人の能く問ふもの無し。若し自說せずんば衆則ち說不說たることを知らず。又復爲に何れの法をか說くを知らず、故に無問自說す。乃ち所說の甚深唯證を彰はす所以なり。是を以て無問自說に寄せて、以て所顯を彰はすなり。因緣經とは、戒法を明さんと欲せば、必ず犯に因りて過を彰はす。過相彰現なれば、方に制を立つることを得。此れ亦因緣に託して以て所顯を明すなり。譬喩經とは、法相は微隱なれば、要らず近を假りて以て遠を喩ふ。故に言を以て借り況へ、況に寄せて以て理を彰はすなり。本事本生經とは、本事は他事を說き、本生は自生を說く。現事に因つて以て往事を說き、本生に託して以て所表を彰はすを本事經と名け、本生に託して以て所行を彰はすを本生經と名く。未曾有經とは、希奇の事を說く。由來未だ有らざる者は未曾有なり。法に大力有り、大利益有るを示すに、未曾有の事に託して以て

所表を彰はすなり。今眞經とは、諸部の中の言義隱覆するを往復分別して所顯を明らかにするを得、論義に寄せて以て理を明らむるなり。故に授記等の八經は事に從つて稱を立つ。方廣の一部は、所表に從つて名と爲すは、方廣の理は名を以て說くと雖も、而も妙に名言を出づ。事に寄せて以て彰はすと雖も、然れども事の如く取るべからず、故に名に就かず、事に就かずして、所表に就いて以て名と爲るなり。名を定むるに四有り。修多羅を線經と名く、經の體は是れ名字にして、而も名は況喩に從ふ。祇夜と偈陀は當體を名と爲し、授記、無問自說、論義等の三經は體事合して目く。自餘は事に從ふなり。差別とは修多羅に九種有り。經に云はく「如是より奉行に至つて一切を修多羅と名く」と。是れ則ち修多羅の名通じて而も體總なり。皆名けて經と爲す、故に名通ず。文字經體に就いて分つて十二部と爲す、故に體總なり。第二に總の修多羅の中に就いて、事に隨つて分ちて十一部を出す。即ち十一部に對して、餘の直に法相を說く者は、是れ別相の修多羅なり。三に論義經は、十一部の經を解釋す。是れ即ち十一部を經の本と爲す。當に知るべし、論に解釋する所の前の十一部は、皆是れ修多羅なることを。又雜心の中の修多羅品に、亦論に對して、經を以て修多羅と爲す。又婆修槃駄の提婆の百論を解するが如き、論を經本と爲すも、亦論を名けて修多羅と爲す。又經に云はく、「修多羅を除いて餘の四句の偈は、以て偈經と爲す」と。即ち四句の偈經に對して、餘の長行說は是れ修多羅なり。又云はく、「祇夜を偈と名け、修多羅を頌す」と。即ち祇夜の頌偈に對して、所頌は即ち是れ修多羅なり。又三藏を分別

【婆修槃駄】(Vasubandhu)世親菩薩。佛滅後九百年に生れ俱舍論等大小論千部の著あり。【提婆】(Kāṇadeva)龍樹の弟子にして百論の外、百字論、外道小乘四宗論、外道小乘涅槃論等あり。

するが如き、理を敷置するの教を以て修多羅と爲し、別して毘尼、阿毘曇に對するなり。又經に說くが如し「佛より十二部經を出し、十二部經より修多羅を出す」と。十二の別教に對して、通教を以て修多羅と爲す。是れ九の中の初の二偈も亦是れなり。偈陀とは、四種有り、法華に、阿闍婆等の偈有り、涅槃に二萬五千偈と言ふが如き、是れ則ち偈經なり。復是れ通總なり。若し四句を偈と爲さば、一字一句も名けて經と爲すことを得。一字一句皆名けて偈とするには非ず。但聖言巧妙にして章句成就するを以て、數句を偈と爲す、故に通じて偈と名くることを得。二には修多羅を除いて、餘の四句を偈と爲す。三には偈の中の重頌を祇夜と名く。當に知るべし、重頌の偈を名けて偈經とするに不ざることを。四には修多羅を通總するを、事に隨つて尅分して別の異部と爲す、直說を以て修多羅と爲すが如し。當に知るべし、偈の中亦事に隨つて尅分することを。若し授記因緣等は別して異部と爲す。事に隨はずして直爾に偈說するを以て、名けて偈經と爲す。祇夜は名けて重頌と爲す。頌に三種有り、一には意を頌し、二には事を頌し、三には言を頌す。頌意とは、聖意所念の法相及び事を頌す。若し心所念の法相を頌するは、則ち偈陀經と名く。若し心所念の授記等の事を頌するは、則ち事に隨つて別して異經と爲す。頌事とは、授記等の事を謂ふ。亦所頌の事に隨つて別して異經と爲す。頌言とは、若し事に隨ふの言を頌するは、事に隨つて別して異經と爲す。若し直說の修多羅を頌するは、名けて重頌祇夜經と爲す。授記とは、果を心期とするを記と名け、聖言說與するを授と名く。授記に二種有り、若し

【一五】法の名を釋するに就いて之より以下正しく天台の正釋を出す。

諸の菩薩の與に佛の記莂を授くるは、是れ大乘の中の授記なり。若し近因近果を記するは、是れ小乘の中の記なり。無問自說に二種有り、一には理深く意遠くして、人の能く問ふこと無し。二には問ふべからざるに非ざれども、但衆の聞くに宜しければ、佛不請の師と爲る。不請の師とは、問ふことを待たずして自說したまふなり。方廣に二種有り、一には廣破、二には廣理なり。脩多羅とは、修多羅の中に於いて十一部を出す。若し偈と直說と相對して之を言はば、修多羅の中より九部を出すことを得、但二偈無し。偈陀の中より十部を出すことを得、但脩多羅の修多羅無し。祇夜の中より九部を出すことを得、修多羅無く、亦偈經無し。釋論有無云云。

法の名を釋することは上の觀教の中に已に說く。今名を標するに左に不同有り、翻譯多く異なり。今大智論に依りて名を標せば、一には修多羅、此に法本と云ひ、亦契經と云ふ、亦線經たり。二には祇夜、此には重頌と云ひ、偈を以て修多羅を頌するなり。三には和伽羅那、此に授記と云ふ。四には伽陀、此には不重頌と云ひ、亦略して偈とも言ふ。四句を頌と爲す、此間の詩頌の如し。五には優陀那、此には無問自說と云ふ。六には尼陀那、此には因緣と云ふ。七には阿波陀那、此には譬喩と云ふ。八には伊帝目多伽、此には如是語と云ひ、亦は本事と云ふ。九には闍陀伽、此には本生と云ふ。十には毘佛略、此には方廣と云ふ。十一には阿浮陀達磨、此には未曾有と云ふ。十二には優波提舍、此には論義と云ふ。部とは、部別各各類從有るなり。經とは外國には修多羅と云ひ、此には線經と云ふ。

線は能く貫穿し、經は能く經緯す。言ふ意は、能く法を持すること、線の如く經の如し。然るに阿毘曇羅心の中に修多羅の五義を說くは、乃ち是れ彼論師の解義にして翻名に非ずと云ふ。世俗亦緯に對して經と名け、而も經を訓じて常と爲す。物の始終に經亘するが如く、始終は時別なれども而も物に改異無し。改異せざるが故に之を名けて常と爲す。修多羅とは諸經の中の直說の者なり。謂はく四阿含及び二百五十戒の三藏の外に出でて、諸の摩訶衍經に直說する者は皆、修多羅と名くるなり。祇夜とは諸經の中の偈、四、五、七、九言の句、少多不定なり。重ねて上を頌する者は、皆祇夜と名く。和伽羅那とは、三乘、六趣、九道、劫數を數へて當に作佛することを得べし。若し後爾所の歲に當に涅槃安樂を得べし、後爾所の歲に當に六趣の報を受くべしと說くを、皆授記と名く。夫れ授記の法は面門より五色の光を放つ。上の二牙より出づるは三惡道を照し、下の二牙より出づるは人天を照す。光中に無常無我、安隱涅槃を演說す。光に遇ひ法を聞く者は、三途の中は身心安樂に、人中は羸瘦の者差ゆ。六欲天は欲樂を厭患し、色天は禪樂を厭ふ。光十方を照して遍く佛事を作す。還つて遶ること七匝、佛の足下より入るは是れ地獄道を記す。踵より入り、膝より入り、臍より入り、胸より入り、口より入り、眉間より入り、頂より入る者は是れ佛道を記す。偏に修羅を說くの光を見ざれば、當に是れ鬼道を記して修羅を出すべし、從容に其の間に在るのみ。伽陀とは、一切の四言、五言、七、九等の偈の、重頌せざる者皆伽陀と名く。優陀那とは、法有れば佛必ず說くべし、而して問ふ者有ること無くんば、佛略し

て妙法を聞く。佛が舍婆提毘舍佉堂上に在りて、陰地に經行して自ら優陀那を說きたまへるが如き、所謂る我無く我所無く、是事善い哉と。之を優陀那と名く。又般若の中に、諸の天子の須菩提の所說を讚ずるが如き、善い哉善い哉、希有なり世尊、希有なり世尊と。之を優陀那と名く。乃至佛の滅後に、諸の弟子偈を撰集し、諸の無常偈は無常品を作す、乃至婆羅門品を皆優陀那と名く。尼陀那とは、諸佛の本起因緣を說く。佛何の因緣あつてか此事を說きたまふ、修多羅の中に人有りて問ふが故に、爲に此事を說く。毘尼の中に人有りて是事を犯す、故に此戒を結す。一切の佛の語言の事を語るは、皆尼陀那と名く。阿波陀那とは、世間の語に相似して柔軟に淺語す。中阿含の長阿波陀那、長阿含の大阿波陀那、億耳、二十億耳の譬喩經の無數の譬喩の如き、皆阿波陀那と名く。伊帝目多伽に二種有り、一には結句なり、我先に說くことを許すと言ふ者、今已に說き竟るなり。二には更に經有り、一目多伽と名く。有人が言はく、因緣を伊帝目多伽と。名は三藏及び摩訶衍に出づ、何等か是れなる。淨飯王の如く強ひて千の釋子に逼りて出家せしむ。佛は道を得るに堪へたる者五百人を選んで、將ゐて舍婆提に住して親屬を離れしめ、舍利弗目連に教化せしむ。初中後夜專精にして睡らず、夜を以て長しと爲す。後道を得て本國に還り、迦毘羅婆林より五十里、城に入りて乞食するに道路長しと爲るを覺る。時に師子有り、來りて佛足を禮す。三因緣の爲に偈を說く云云。此三事の本因緣を說く、故に一目多伽と名くるなり。闍陀伽とは菩薩本曾て師子と爲り、獼猴の寄を受け、脊の肉を割りて猴の子に貿ふ。精世に於て

【迦旃延】（Kātyāyana）佛十大弟子の一、論義第一なり。施設足論一萬八千頌を著す。薩婆多部の祖なり。

【二六】說法妙を釋する中、第二章に法の大小を分つ。

赤目の魚と作り、諸の病者に施し、或は飛鳥と作りて沈溺を救ふ。是の如き等の無量の本生に、多く濟ふ所有るを說くを、闍陀伽と名く。毘佛略とは、謂ゆる摩訶般若經、六波羅蜜經、華首、法華、佛本起因緣、雲、法雲、大雲、是の如き等の無量の諸經は、阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲の故に、此毘佛略を說くなり。阿浮陀達磨とは、佛種種の神力を現じ、衆生は未曾有なりと怪しむ。放光動地、種種の異相の如きは、皆阿浮陀達磨と名く。優波提舍とは、諸の問者に答へて其所以を釋し、廣く諸の義を說く。是の如き等の問答論議を、皆優波提舍と名く。佛自ら諸經を說く、迦旃延の所解、乃至像法凡夫の人法の如く說く者も、亦優波提舍經と名く。

〔二六〕二に法の大小を分つことを明さば、此經には九部を指して大に入るの本と爲す。即ち九部は是れ小、三部は是れ大なり。麤に判して論ずるのみ。通じて論を作さば、小も亦六道の因果を記別すること有り。又阿含の中に、亦彌勒に當作佛の記を授く。豈遮記經に非ざらんや。亦自ら譬喩と唱ふる有り、無問にして而も說くものなり。彼の開經の中に法空を以て大空と爲す。故に成論の中に云はく、「正しく三藏の中の實義を明さんと欲す、實義とは空是れなり」と。阿毘曇に申べざる所、而も成論に空を申ぶ、空は即ち廣經たり。當に知るべし、小乘に通じて十二部を具することを。故に涅槃に云はく、「若し十二部經を聞くことを得と雖も、但名字を聞きて、其義を聞かず。今涅槃に因つて、其義を聞くを得つ」と。又云はく、「先に十二部經を聞くことを得と雖も、我意は略、故より是大涅槃經の如く

ならざるものと謂はん」と。大品に亦云はく、「魔、比丘と作りて菩薩の爲に雜聞の十二部經を說く」と。有經に言はく、「大小乘に各各十二部を具す。若し六部の大小乘に通ずるを信と、六部互に相通せざることを信せず」と。此を推すれば卽ち是れ大小倶に十二部有り。但是れ小乘の中の說にして、大乘の義に非ず。旣に斷じて三を取り、九を存す。何となれば、小乘は根鈍にして方廣身無し。故に記莂無し。假令法空を以て廣說の文と爲すとも、小乘は根鈍にして記は必ず喩を假る。天魔佛に作ることは無く、無問自說を少き、後說有りと雖も作佛を記することも少し。又涅槃の第七に云はく、「九部の中に佛性を明さずと云はば是人罪無し」と。此に例して言はば、十二部の中に佛性を明さずといはば是人罪有るべし。有人言はく、「大乘は九部なり、因緣、譬喩、論義を除く。大乘の人は根利にして、此三を假らず」と。斯れ亦別意たり。通じて大乘を論ずれば、何ぞ此三經無きことを得んや。有經に云はく、「小乘は但廣經の一部を讀りて十一部有り。方廣無きは、大乘は常住は是れ常、一切衆生皆佛性有りと說く。正理を方と爲し、包富なるを廣と爲す。又理融じて無二なるを、亦名けて等と爲す。聲聞の中に無き所なれば、但十一部のみ。若し小乘は定んで九有りと言はば、復十一部有るべからず。既に十一を取る、亦通じて十二有り。緣の爲に別說するに、或は三を讀り、或は一を讀り、以て大小乘を判ず云云。

妙法蓮華經玄義卷第六上

妙法蓮華經玄義 卷第六下

天台智者大師の說

【一】蓮門十妙の第八說法妙を釋する中、第三章に緣に對する同異を分別す。

（一）三には緣に對して異なり有ることを明さば、緣は即ち是れ十因緣の法に成ぜらるる所の衆生なり。而して此衆生に皆十界の根性有り、熟する者は先に熟す。佛は成熟未成熟の者を知りて、應ずるに時を失せず。若し衆生に、解脫の緣未だ熟せざれども、全く來つべからず。此機緣に對して、止人天乘の善を作して、但多羅等の名を作さず。故に天竺の外典には、十二部の名無く、亦共意も無し。此間の儒道も亦皆名無く、意も義も皆闕く。若し法身、正と隨りて、十善道を示すも亦僅に此名を用ひず。故に地持の中に、種性の菩薩は能く自ら熟し、又能く他を熟すと說く。二乘の種性及び佛の種性有るは、法に隨って之を熟し、種性無き者は善趣を以て熟す。善趣の熟するは即ち是れ共義なり、種性を熟する者は下に說くが如し。若し深く觀行の者は、妙に共意を得べし。邪相を以て正相に入り、無漏法を用ひて、邪經外典に約して、十二部の義を作すに、期道を得ざらん。而も正しく緣に對して說くに非ざるなり。次に十因緣所成の衆生に、小乘の根性有るに約す。此遺に對して說くは、適は則ち十二、闕は則ち或は九、或は十一なり云云。若し十因緣所成の衆生に、菩薩の機有るに對すれば、別記を作さずして但十二部經を明す。今總じて如來

【二】說法妙の中第四章にその所詮を判ず。

の四緣に對して、十二部の法を說くを論ずるに、兩種の四教の不同有り。一には隱顯に就いて共に四教を論ず、隱は即ち祕密教、顯は即ち頓、漸、不定教なり。祕密は既に隱れて、世に流布するに非ざれば、此は置いて論ぜず。若し四法界の衆生に對して、通じては十二部を說き、別しては或は九部、或は十一部を說くを、漸法の說と名く。若し兩法界の衆生に對して、通じて十二部を說くは、此れ頓法を說くなり。或は四法界に對し、或は兩法界に對して、或は別說を作し、或は但通說するは、此れ不定の法を說くなり。二には直に顯露漸教の中に就いて、更に四教を明すは、即ち是れ三藏、通、別、圓なり。三藏教は直に三法界に對して、別しては或は九、或は十一を說く。通教は四法界に對して、通じて十二部の法を說く。別教は兩法界に對して、通じて十二部の法を說く。圓教は一法界に對して、通じて十二部の法を說く。前は無記化化禪を以て、諸の慈悲と合して身輪を示現す。或は國師、道士、儒林の宗、父母兄弟、乃至猴猨鹿馬と爲り、事に同じて利益することを稱て說くべからず。今口輪の說は、例せば前の諸の慈悲を用つて、無記化化禪に熏じて、種種同じからざるが如し。百千萬法不可說不可說なり。故に龍宮、象負、海を渧し、山を研ぐ。八萬四千の法藏は窮盡すべからず。復崖無しと雖も、十二部を以て往きて收むるに、罄きて盡きざるは無し。

(三)四に所詮を明さば、若し委く其意を論ずるは、四教義の中に出す。今略して詮の意を引かんのみ。若し人天乘を說くは、界內思議の俗を詮じて永く眞を詮せず。若し漸教の人の

【三】說法妙の中第五章に麤妙を判ず。

爲に、別しては九部、十二部を説き、乃至通じて十二部なるは、初は正しく思議の俗諦を詮じ、傍に思議の眞諦を詮す。中ごろは正しく思議の眞諦を詮じ、傍に思議の俗諦を詮す。後は正しく不思議の眞諦を詮じ、傍に不思議の俗諦を詮ずるなり。乃至雙べて不思議の眞俗を詮す云云。若し頓の十二部を説くは、正しく不思議の眞を詮じ、傍に不思議の俗を詮す。若し不定を説くは、此れ則ち其詮を定判すべからず。若し漸の中の四教に約して詮を明さば、三藏は正しく思議の眞を詮じ、傍に思議の俗を詮す。若し三藏の菩薩の爲には、正しく思議の俗を詮じ、傍に思議の眞を詮す。若し通教の二乘は正しく思議の眞を詮じ、傍に思議の俗を詮す。若し通教の初心の菩薩の爲には、二乘と同じ。若し後心の菩薩の爲には、正しく俗を詮じ、傍に眞を詮す。若し別教の初心の爲には、正しく界内の眞俗を詮じ、傍に界外の眞俗を詮す。若し中心の爲には、正しく界外の眞俗を詮じ、傍に界内の眞俗を詮す。若し後心の爲には、雙べて界内外の眞俗を詮す。若し圓教の初中後心の爲には、圓に界外の不思議の眞俗を詮す云云。

(三)五に麤妙を明さば即ち五と爲す。一には理に約し、二には言に約し、三には所詮に約し、四には衆經に約し、五には正しく此經に約す。一に理妙に就かば、一切の諸法は中道に非ざること無く、文字を離れて而も解脱を説くこと無し。文字の性を離すれば、即ち是れ解脱なり。一切の所詮は、理に即して而も妙なり。譬へば龍の雨を雨らして、而も處處同じからざるが如し。或は水、或は火、或は刀杖なり。理も亦是の如し。理は具すれども情乖

き、順ずるのみ。麁くが故に麁と爲し、理に順ずるを妙と爲す。二に言辭に約せば、佛得道の夜より泥洹の夕に至るまで、常に般若を說き、常に中道を說き、而して一音法を演ぶるに、類に隨つて異解するが如き、一音の巧說は是れ則ち妙と爲す。異類殊解するは、自ら麁妙有り。三に所詮に就かば、若し六道の衆生に對して人天乘を說くは、此れ有爲を詮ず。能詮所詮俱に麁なり。若し鈍根三藏の五門に對して、生滅の四諦の理を詮ずるは、此れ則ち能詮所詮俱に麁なり。若し通教體法の五門は、三藏の析門に比するに、體門の能詮は巧みなりと雖も、而も所詮は猶是れ眞諦にして、所詮亦麁なり。若し別教の五門は、能詮を麁と爲し、所詮の中道を妙と爲す。若し圓教の五門は、能詮所詮俱に皆是れ妙なり。四に衆經に就かば、華嚴は別を詮し圓を詮ず。三藏は偏を詮じ、方等は四種の詮あり。般若は三種の詮あり。法華は唯一の詮なり。又諸經に妙を詮ずるは法華と異ならずして、而も麁の詮を帶し、麁詮は妙に合することを得ず。是故に麁と爲す。法華は爾らず、佛の平等の說は一味の雨の如し。正直に方便を捨てて但無上道を說くと、純ら是れ一の詮なり。又云はく「昔聲聞を毀呰し、佛は實に大乘を以て敎化す」と。又云はく「汝等が所行は是菩薩の道なり」と。此れ則ち麁を融じて妙ならしむ。此の如きの兩意は衆經に異なり、是故に妙と言ふ。譬へば良醫の、能く毒を變じて藥と爲すが如し。二乘の根敗反復すること能はざるを、之を名けて毒と爲す。今の經に記を得るは、卽ち是れ毒を變じて藥と爲す。故に論に云はく「餘經は祕密に非ずと云ふは、法華を祕密とするなり」と。復本地の圓說有

るは、諸經に無き所なり。後に在りて當に廣く明すべし云云。五に正しく此經に就いて、妙の十二部を明さば、修多羅に直說と名くるが如き、今の經には直に中道佛の智慧を說く。六道二乘菩薩等の法を說かずして、唯佛法を說く。故に直說を妙と爲す。祇夜の妙とは、重ねて長行の中道の說を頌するのみ。故に知んぬ、祇夜も亦妙なることを。伽陀とは、龍女の獻珠、喜見の說偈の如き、孤然として特り起る。此偈は刹那の頃に於て、便ち正覺を成ずることを明す。佛の菩提の事を成ずるを稱歎し、喜見の孤起は佛の容顏甚だ奇妙なるを歎ず。故に知んぬ、孤起の伽陀妙なることを。本事妙とは、即ち是れ二萬佛の所にして、無上道を教へて餘事を教へず、即ち是れ本事妙なり。本生妙とは、十六王子の生身より生じて王子と爲り、法身より生じて佛子と爲るを明す、即ち是れ本生妙なり。因緣とは、結緣覆講、大乘繫珠は、小乘人天等の緣を論ぜず。是を因緣妙と名く。未曾有妙とは、天華地動、二眉間光、三變土田等は、是れ不可思議未曾有の事妙なり。譬喩妙とは、經題は法譬を以て名と爲し、開二顯一を譬ふ。何ぞ曾て餘事を譬へん。即ち譬喩妙なり。優波提舍妙とは、身子の佛に問ふに、佛は諸佛の智慧門を答ふ。龍女智積の問答は、法華の事を論ず。智積の云はく、「我釋迦を見たてまつるに無量劫を經て方に菩提を成ず、此女の須臾に成佛することを信ぜず」と。此れ別を執して圓を疑ふなり。龍女の云はく、「佛自ら證知し、圓珠を以て佛に獻ず」と。此は圓を以て別を答ふ。此れ即ち提舍妙なり。無問妙とは、文に云ふが如し。「無問而自說、稱歎所行道、從三昧安詳而起、告舍利弗、說佛智慧」と。

【四】說法妙の中第六に觀心の釋を指す。

【五】迹門の十妙を解する中第九に眷屬妙を釋するに先づ初に章を分ち而してその第一に來意を明す。

又宿世の因緣、吾今當に說くべしと。即ち是れ無間妙なり。授記妙とは、三根に佛の記を授け、皆實智の中に安住して、天人の爲に敬まはると。即ち授記妙なり。方實妙とは、其車高廣なり、智慧深遠等と、即ち是れ方實妙なり。當に知るべし、此經は初直說より乃至優波提舍まで、十二の意足りて、而して皆是れ妙なり。此れ即ち麤に待して說法妙を明す。

麤を開して妙を顯さば、昔の十二、十一、九部の實を說かざる者も、今別の實の昔の不實に異る無し。昔は但曲廣にして理實を明さず。今曲廣を開するに即ち理實たり。昔の異を開して今の同を顯す、即ち是れ絕待に說法妙を明すなり。

(四)第六に觀心を說く云云。

(五)第九に眷屬妙とは、此に就いて五と爲す。一には來意を明し、二には眷屬を明し、三には麤妙を明し、四には法門を明し、五には觀心を辨ず。言ふ所の次第とは、若し說無くんば已みなん、說は必ず緣に被る。緣は即ち道を受くるの人なり。已に道を受くるが故に、即ち眷屬と成る。譬へば父母の遺體は、此を攬つて身を成じ、天性と爲すことを得るが如し。天性親愛の故に眷と名け、更に相臣順するが故に屬と名く。行者も亦爾り、受戒の時に、此戒法を說きて前人に授くるに、前人聽聞して、即ち戒を發することを得ん。師弟の由つて生ずる所なり。禪も亦是の如し。安心の法を授くるに、教の如く修行すれば、即ち定を發することを得ん。是を我師と爲す、我は是れ弟子なり。慧も亦是の如し。諸の法

【六】眷屬妙を釋する中、第二章に眷屬を明すに就いて先づ初に五種の名を列ね、而して次に第一理性の眷屬を明す。

【七】五種の眷屬の中、後の四眷屬を釋するに初に通じて四教の結緣の成熟に約す。

門を說きて、轉じて人心に入れ、法に由りて親を成ず。親の故に則ち信じ、信ずるが故に則ち順ず。是を眷屬と名く。他土は餘根皆利なれば、所用の塵に隨つて之を起して、他をして益を得せしむ。此土は耳根利なるが故に、偏に聲塵を用ふ。故に二萬佛の時に無上道を敎へ、十六王子は法華を覆講す。是より已來恆に眷屬と爲り、世世師と俱に生ず。或は人天の眷屬、或は三乘の眷屬、或は一乘の眷屬なり。故に身子の云はく「今日乃ち眞に是れ佛子なることを知る」と。昔五人を敎へて眞無漏を得るを佛子と名け、菩薩の眞を發せざるを名けて外人と爲す。法華に於て大乘の解を發して、自ら昔日は眞の佛子に非ずと稱す。今は一實の道を說く。聞より悟解して法身生ずることを得。佛口より生ずとは是れ聞慧の中の法身生じ、從法化生とは是れ思慧の中に法身生じ、得佛法分とは是れ修慧の中に法身生ずるなり。三慧成就するは是れ眞の佛子なり、天性を定めて眷屬と成るを得。故に說法の後に次で眷屬を明す。

(六)二に眷屬を明さば、又五種と爲す。一には理性の眷屬を明し、二には業生の眷屬を明し、三には願生の眷屬を明し、四には神通生の眷屬を明し、五には應生の眷屬を明す。一に理性の眷屬とは、衆生の如と佛の如と、一如にして二如無し。理性相關る、任運に是れ子なり。故に云はく「我も亦是の如し。衆聖の中の尊、世間の父なり、一切の衆生は皆是れ吾子なり」と。此は是れ理性なり、結緣と不結緣とに關らずして皆是れ佛子なり。

(七)二に業生の眷屬とは、但衆生は理を以て論ずれば皆子なれども、而も他の毒藥を飲んで

【八】次に別して四教に約して四眷屬を明す。即ち今初には三藏教に約す。

失心の者、不失心の者有り。不失心とは、拜跪問訊して救護を求索し、藥を與ふれば即ち服す。故に大通の覆講に於て妙法華を說きて、大乘の父子を結ぶことを得たり。其失心の者は、良藥を與ふと雖も背て服せず、生死に流浪し他國に迯逝す。即ち方便を起して、或は三藏の結緣を作して生滅の法を說き、或は通教の結緣を作して無生の法を說き、或は別教の結緣を作して不生生恆沙の佛法を說き、或は圓教の結緣を作して不生不生一實相の法を說く。若は信、若は謗、因つて倒れ因つて起つ。喜根は謗ずと雖も、後要らず度を得るが如し。結緣已後、二十五三昧を以て二十五有と爲し、三諦の法を說きて之を成熟す。或は中間に於て得度し、或は今にいたるも未だ度せず。復得度未度と雖も、皆是れ眷屬なり。

（八）今三藏の佛は、分段の國に於て出家成道す。往日の三藏の緣は、或は度を得、或は未だ度を得ず。得度の者は灰身滅智して、復生を論ぜず。緣未度の者は來りて分段を稟く。昔殷重に信順するは今親識の受道と爲し、昔汎汎に信順するは今疎外の受道と爲し、昔時に拒謗するは今怨家の受道と爲す。甘露初て降つて先に服嘗を得るは、早く分段を斷じて生死を出づることを得。大象の群を捍ぐが如し、俱に解脫を證す。五佛子の流の如きは、是れ異姓なりと雖も、則ち是れ法親しければ內の眷屬なり。若し道を得ずんば、是れ宗族なりと雖も外眷屬と名く。佛は其人に於て則ち利益無し。若し滅度に入れば、復更に生ぜず。此人緣盡くれば後佛に傳付す。

【九】別して四教に約して眷屬を明す中、次には通教、別教、及び圓教に約す。

三に願の眷屬とは、先世の結緣未だ苦を斷ぜずと雖も、願つて內の眷屬の中に生ず。或は怨家等之に因つて道を受く。若し得道の者は法の內眷屬と成り、得ざる者は法の外眷屬と成る。若し佛滅度すれば、此人益無ければ後佛に傳付す。

四に神通の眷屬とは、若し先世に佛に値うて、眞を發し諦を見るも、生猶未だ盡きざれば、或は上界に在り、或は他方に在り。今佛分段に作佛して、或は願力を以てし、或は通力を以てして、下界に來生す。或は親、中、怨と爲りて輔佛行化し、餘殘の惑を斷じて三界を出づ。若し殘惑未だ盡きざれば、佛の入滅に値うて、亦自ら能く斷じ、或は後佛を待つ云云。三藏は界外の生を說かず。今大乘の意を以て之に望むるに、昔佛に値うて得度し、三界の生盡くるは變易の身を受く。緣は分段を牽けども是れ業生に非ず、但是れ願通なり。願と通とは云何が異なる。自の報力に約して神通と名け、敎に約して誓願と名く。神通生の者は本受報の處に猶報身有り。身の通力を以て形を分つて此に來る。若し願生の者は報處に身無く、願力を以て下生するのみ。三藏は結を斷じて、誓願して生死の身を受くるを說かざれば、此敎に約して願を論ぜず。通敎は則ち誓つて餘習を扶けて、分段に生ずること有り。通に依つて願を明すを、義に於て便と爲す。此等は未だ法身を得ず、故に全く應生の眷屬無し。三藏の眷屬を竟んぬ。

(九)往昔に無生の緣を結ぶ者は、或は已に道を得、或は未だ道を得ず。佛は分段に於て作佛す。未得道の者は當處に卽ち業生有り、上界より下に向ふは卽ち願通の兩生有り。願通

【一〇】別して四教に約して四眷屬を釋する中、之より下は料簡なり。

を分別すること、前に說くが如し。橫に他土より來る者は即ち願通有り、豎に方便より來る者も亦願通有り。通教は未だ法身を得ず、故に應生の眷屬無し。往昔曾て別教の緣を結ぶ者は、中間に事を同じ、法を說きて種種に教化し、或は熟未熟あり。佛、今、分段に在りて作佛し、未得道の者は當處に即ち業生有り。上界より下に向ふは願通有るを得、橫に他方よりするに願通有るを得、豎に方便より來るに亦願通有り、豎に實報より來る者は應生有るを得。無明先に破して已に法身の本を得、能く應を起して生死に入る。此れ則ち前に異なり云云。往昔に圓教の緣を結ぶ者は、中間に調熟して、或は道を得、或は未だ道を得ず。今分段に於て作佛す。先に緣の牽き來ること差別同じからず。若し未得道は當處に一有り、上界より下に向ふは二有り、他方より橫に來るに二有り、方便より來るも亦二有り、實報より來るは一有り。例して前の如し云云。

〔一〇〕問ふ、「法身は惑除き理顯はる、何が故に生を受くるや。」答ふ、「應身の受生に、其意三有り。一には他を熟せんが爲、二には自熟の爲、三には本緣の爲なり。一に熟他とは、秖業生は善根微弱にして、自ら發すること能はざるが爲に、諸の菩薩等は先に得度すと雖も、彼迷闇を愍んで慈力應を起し、二十五有に入りて師導と作り、諸の實行を引きて佛所に向はしむ。若し眞道を得るは內の眷屬と成りて應生に同じ、若し似道を得るは願通に同じ。眞似を得ざるは勝業を增進せしめ、皆利益せしめて唐捐有ること無し。華嚴の中

に、佛初胎に託し、法身の菩薩皆侍衛して下生し、陰雲の月を籠めるが如く、餘胎に散降して親、中、怨と爲り、諸業を引くと說くが如きは、當に知るべし、諸の眷屬は生死の人に非ざることを。摩耶は是れ千佛の母、淨飯は是れ千佛の父、羅睺羅は千佛の子なり、諸諸の聲聞等は悉く內祕外現して、衆に三毒有りと示して、實に自ら佛土を淨む。諸の親族等は皆是れ大權にして、法身の上地なり。豈凡夫有りて能く那羅延の菩薩を懐かんや。復次に外道の怨惡、抗拒、誹謗は、當に知るべし、皆是れ法身の所爲なることを。何となれば、轉輪の小善も世に出づるに怨無し。豈無上の法王にして、怨讐路に滿つること有らん。若し佛に於て惡を起さば、惡道に罪を受く。何ぞ灼然として生生相惱ますことを得ん。龍象の蹴踏は驢の堪ふる所に非ず。調達は是れ賓伽羅菩薩、先世には其の善知識なり。阿闍世は是れ不動菩薩、薩遮尼揵は是れ大方便菩薩なり、諸句は是れ不思議解脫に住す。故に華嚴の列衆に、諸の天龍鬼神悉く不可思議法門に住することを明す。是の如き等の、若は親、中、怨、好惡、違順は、皆是れ法身なり。先には是れ法身の內眷屬にして、今は衆生の眷屬と作る。若し親、中、怨、好惡、違順の未だ法身を得ざるは、先に結緣すと雖も猶法の外に在るが爲に、同じく前業等の眷屬と稱す。諸餘の經典に、此權の利益の衆を明さざるに非ず。咸く是れ實內實外、實好實惡、實違實順と謂ふ。故に經に云はく、「未だ曾て人に向つて、此の如きの事を說かず」と。今の經には、佛自ら近權を開して遠實を顯はし、諸の眷屬の近權を開して本實を顯はす。故に文に云はく、「今當に汝が爲に最

實事を說くべし」と。是を應生の眷屬と名く、熟他の故に來るなり。二に自成の爲に來るとは、法身の菩薩は道を進むるに定まり無し。或は生身に從つて道に進み、或は法身に從つて道に進む。故に下の涌出の菩薩の云はく、「我亦自ら此眞淨の大法を得んと欲す」と。分別功德品の中に增道損生を明すは、即ち其義なり。三に本緣の爲に牽かるるは、此佛に從つて初て道心を發し、亦此佛に從つて不退地に住す。佛尙自ら分段に入りて佛事を施作す。有緣の者何ぞ來らざるを得ん。猶百川の應に海に朝すべきが如し。緣牽きて應生するも亦復是の如し。若し別して說かば、業生は分段に在り、願生と通生は方便に在り、應生は寂光に在り。通じて論せば、一處に具に四種有り。實報に已に法身を得て能く應を起し、四種の眷屬と作るが如し。圓の結緣に就かば、未だ惑を斷ぜずと雖も、自ら三種の眷屬有り、得度の者に就かば、即ち是れ四なり。別の眷屬も亦四なること、知んぬべし。通と藏との結緣の三種も知んぬべし。應來の應無しと雖も、感應の應を論ずることを得。所應に就いて名を得るに、四義宛かも足る。問ふ『下方の涌出と、妙音の東來と、大經の中に十方の諸大菩薩を召請して娑羅林に集め、大師子吼するが如きは、四の眷屬に於て、此は是れ何等ぞや。』答ふ、『是れ神通來にして、神通生に非ず、是れ應來にして應生に非ず、是れ大誓願相關はりて願生に非ず。是因緣相召す。下方の聲を聞き、妙音の光を見るが如きは、是れ諸佛大事業を以て來り、業生には非ず。業生の者は業を以て來ること能はず、業來は是れ業生に非ず。願通生の者は願通來なること能はず、願通來の者は亦能

【二】眷屬妙の中第三章に麤妙を判ず。即ち初には判次には開麤顯妙なり。

く顯通生じ、亦能く應來す、應來亦能く應生す。」云云。

（二）三に麤妙を明さば、若し三藏の根性の眷屬は此性下劣なり。昔此緣を結ぶも、緣亦淺小なり。中間に法を以て成熟するに、成熟は甚し少なり。若し佛國に來生して內外の眷屬、業、願、通等と作り、乃至三藏の佛に應來影響するは、皆麤の眷屬なり。通と別との根性、乃至內外は、巧別異なり有りと雖も、準例して知んぬべし。皆麤の眷屬なり。此經に說かく「諸の衆生は悉く是れ吾子にして、客作の人に非ず」と。其理性を論ずれば是れ子に非ざること無し、是を理性の眷屬妙と名く。往昔に覆講し、結緣繫珠し、二萬億佛は無上道を敎ふ。經に云はく「若し我衆生に遇はば、盡く敎ふるに佛道を以てす」と。若し衆生に佛性無くんば、敎ふるに佛道を以てせば過則ち佛に屬す。若し衆生皆佛性有らんに、迷惑して敎を受けずんば過は衆生に屬す。一切の有心皆當に作佛すべし。闡提も心を斷ぜざれば、猶反復すること有り。作佛すること何ぞ難からん。二乘は灰滅す、滅智は則ち心盡き、灰身は則ち色盡く。色心俱に敗すれば、其れ五欲に於て復堪ふる所無し。而して能く世世に之に遇ひて、盡く佛道を敎ふ。此れ則ち中間の成熟妙なり。今法華に於て普く作佛を得るは、此れ希有の事なり。最上の醫王は、毒を變じて藥と爲す。能く敗種を治し、無心も成佛するは、此れ則ち內外の眷屬妙なり。譬へば陣に臨んで勳を爭ふは、前鋒第一なるが如し。佛は諸敎を說きて衆生を收羅す。而して灰心の二乘は處處に入らずして、法華に於て、忽然として入ることを得つ。故に涅槃に、遙に八千の聲聞に記莂

を授くることを得て、破收冬藏して更に所作無きが如しと指す。若し法華に佛性を悟らずんば、涅槃に遂に指すべからず。若し衆生に本佛性無くんば、往昔に結緣して教ふるに佛道を以てすべからず。始を原ね終りを要するに、佛性の義明なり。意を以て得べし。今華嚴師に問ふ、頓極の教は一切衆生に佛性有りと說くや不や。若し其れ有らば、二乘は何ぞ經を聞きて、授記作佛せずして、那ぞ忽に聾の如く瘂の如くなる。若し二乘も本佛性有りと言はば、忽忽として小を取り本根を闕するが如き、本根已に敗せば治すべしとせんや、治すべからずとせんや。若し治すべくんば何が故に治せざる。若し治すべからずんば、那ぞ復一切衆生に皆佛性有りと言ふことを得ん。故に知んぬ、華嚴の治すること能はざる所は、是れ方便の說なることを。法華の能く治するは、是れ如實の說なればなり。能く難治を治するは、此處則ち妙なり。謂ゆる結緣妙、成熟妙、業生妙、願生妙、應生妙、內眷屬妙、外眷屬妙なり。能く妙道を受け妙事に影響す、是故に妙と稱す。若し此意を將つて五味に約せば、乳教には別圓の兩眷屬有り、一は麤一は妙なり。酪教は但一麤、生蘇は三麤一妙、熟蘇は二麤一妙なり。法華は麤無くして但妙なり。是を相待に眷屬妙を明すと名く。又麤を開して妙を顯はさば、諸經は麤の眷屬を明して、皆佛性を見ず。今の法華は天性を定め、父子を審にするに復客作に非ず、故に常不輕は深く此意を得、一切衆生の正因滅せずと知りて、敢て輕慢せず。諸の過去佛に於て、現在、若は滅後、若は一句をも聞くこと有るに、皆佛道を成ずることを得るは、即ち了因滅せず。低頭擧手も皆佛道

【三】眷屬妙の中第四章に法門の眷屬を明す。中にもまた自ら三意を含む、即ち一には分別、二には判、三には開麤顯妙なり。

を成ずるは、即ち緣因滅せざるなり。一切衆生は此三德を具せざること無し。即ち是れ開麤顯妙にして、絕待に眷屬妙を明すなり。

（三二）四に法門の眷屬を明さば、此れ普現菩薩の淨名居士に問ふが如し。「父母妻子、親戚眷屬、吏民知識、悉く是れ誰とかする。奴婢僮僕、象馬車乘、皆何の所か在る。」と。淨名答へて云はく、「方便を父と爲し、智度を母と爲す。一切の衆導師、此に由つて生ぜざること無し。」と。法喜を妻と爲し、慈悲を女と爲し、善心誠實を男とす。畢竟空寂は舍なり。弟子衆塵勞は、意の轉ずる所に隨ふ。道品善知識、是に由つて正覺を成ず。此法門を以て眷屬と爲す。若し爾らば、法門同じからず、深淺異なり有り。若し三藏の法門は、眞を觀ずるを實と爲し、假を觀ずるを權と爲し、此二智滿ずるを以て即ち名けて佛と爲す。佛は即ち導師なり。慈悲六道は即ち是れ女なり。他をして善く眞諦に會せしむるを名けて男と爲す。此法を得る時の喜を、此を名けて妻と爲す。此心の中に諸波羅蜜道品等を修するは、即ち是れ善知識なり。若し通教の中の法門の眷屬とは、諸法は如幻如化なりと觀じて、即空に體達するを實と爲し、四門の同異を分別するを權と爲す。此二智に於て解を生ずるを導師と名け、衆生を慈愛するを女と爲し、善道の心を生ぜしむるを男と爲し、六度道品を行ずるを知識と爲す。是を通教の中の法門の眷屬と爲すと云云。若し別教の法門恢洪の眷屬は、眞俗合して權智と爲す、是れ父なり、中實の理を母と爲す、無量の慈善、無量の道品、諸の波羅蜜、通達して滯り無し。道種智分明にして機を觀じ藥を識る、即ち

是れ別教の中の眷屬なり。故に無量義に云はく、「諸佛法王の父、經教夫人の母、和合して諸の菩薩の子を出生す」と。十住毘婆沙に云はく、「般舟三昧は父、大悲無生は母なり、一切の諸の如來は此二法より生ず」と。寶性論に云はく、「大乘の信を子と爲し、般若を以て母と爲す、禪は胎なり、大悲を乳母と爲し、諸佛は實の子の如し。闡提は大乘を謗るの障り、外道は横に身中に我有りと計するの障り、聲聞は生死を怖畏するの障り、支佛は衆生を背捨利益するの障あり。菩薩は四法を修して對治を爲す、信を修し、般若を修し、虛空定、首楞嚴定を修し、大悲を修して、淸淨法界を得、彼岸に到りて如來の性を見、如來の家に生ず、是れ佛子なり。既に如來の性を見、如來の家に生ずと道ふ。當に知るべし、如來を用つて父と爲すことを。無量の法門不可說不可說にして、皆能く佛子を生ず」云云。若し圓教の法門に眷屬を明さば、自行の三諦一諦を實と爲し、化他の一諦三諦を權と爲す。隨情の一諦三諦を權と爲し、隨智の三諦一諦を實と爲す、此不思議より解を生ず。一心に萬行の善を具するを男と爲し、無緣の大慈を女と爲し、佛知見を聞きて喜を生ずるを妻と爲し、非淨非垢等の中道の道品、六波羅蜜を善知識と爲す。是の如き等の、實相圓極の法門を以て眷屬と爲す。初住の中に便ち正覺を成じ、能く八相に物を化するは、即ち是れ導師なり。前來の諸の法門は既に麤なれば、諸の導師を生ずるも亦麤なり。今の法門の眷屬は既に妙なれば、所生の導師も亦妙なり。此意を用つて五味の教に歷れば、乳教は一麤一妙、酪教は但一麤有り、生蘇に三麤一妙有り、熟蘇に二麤一妙有り、法華は但一

【一三】眷屬妙の中第五章に觀心の眷屬を論ず。

妙有り。麤に待する意竟んぬ。諸經の妙なる者は自ら妙、麤なる者は自ら麤なり。今の經は但妙なる者を妙とするのみに非ず、亦復麤有ること無し。是前來の諸麤を絓へて悉く皆決了して、一の平等大慧の妙法門と爲す。絶對の意竟んぬ。

(一三)五に觀心の眷屬とは、即ち六と爲す。一には愛心、二には見心、四は則ち四教なり。愛心の眷屬とは、無明を父と爲し、癡愛を母と爲し、煩惱の子孫を出生す。憶想に貪著して、心中の法門を得んと欲するを以て、魔鬼便ち入る。媚女の思想は邪媚之に紹るが如し。行人も亦爾り、偏邪を憶想すれば邪物入ることを得。鬼力を以ての故に、或は權解を生じ、或は實の解を生ず。邪解生ずるが故に、鬼の導師生ず。鬼の慈善を起し、邪の法喜に著し、邪の六度道品を行じ、邪の辯を得、心明に口利にして、諸の法門を説くは、即ち愛心の眷屬なり。邪相既に利にして四見を發得し、見心推畫して諸の法門を作る。心所見の處を實と爲し、他に同ずるを權と爲す。心に愛を起すを女と爲し、心分別を男と爲し、是の如きの心中に六度道品を修するを、是を見心の眷屬と名く。何となれば、此見愛は、已心の苦集を識らずして、妄に道滅と爲す。字と非字とを知らず、蟲の木を食みて偶偶法門の名を得るが如し。名有りて義無し。豈愛見に非ずや。若し能く心を觀じて、愛見の心は皆是れ因緣生の法にして、無常生滅なりと識れば、即ち四番の觀心の眷屬有り。中論の偈に云ふが如し「因緣生の法即空即假即中」と。仍し四觀に於て各各眷屬を明す、前に準じて知んぬべし。五の觀心を判じて麤と爲し、後の一觀心を妙と爲す。又麤を決して妙を

【一四】迹門十妙の中、第十に利益妙を釋す。即ち利益妙に於ては名を釋し、次に章を分ち、而してその第一に來意を示す。

論ず、人尙自ら、己が愛見の心は是れ因緣生なりと識らず。何ぞ能く因緣の心即空即假なりと識らん。尙空假を識らず、何ぞ能く魔界即ち佛界にして、見に於て動ぜずして三十七品を修せんや。今、愛即ち是れ法性と觀じ、見に動ぜずと觀じて、三十七品を修すれば、魔界、見界即ち是れ佛界なり。非字の中に於て能く字を知り、非道を行じて佛道に通達す。一切法に於て、是れ妙ならざるは無し。事の眷屬を明して聽學文字の人を伏し、法門の眷屬を明して行教の人を伏し、觀心の眷屬を明して觀心坐禪の人を伏す。三種の法門並に其聞見に過ぐ云云。

【一四】第十に功德利益とは、秖功德（即ち）利益にして、一にして異り無し。若し分別せば、自益を功德と名け、益他を利益と名く云云。此を四と爲す、一には利益の來意、二には正說の中の利益、三には流通の中の利益、四には觀心の中の利益なり。一に利益の來意とは、諸佛の所爲は未だ嘗て空しく過ぎず。釋論に云はく、「佛、王三昧に入りて、前より光を放てば前なる者を度し、後より光を放てば後なる者を度す。譬へば網魚の前に獲、後に獲るが如し。光を見、法を聞くに、皆唐捐ならず」と。淨名に云はく、「法寶普く照して甘露を雨らすとは、即ち身口の兩益なり」と。華嚴、思益に並に放光は慳を破し、瞋を破し、癡を破す等と云ふ。具には彼說の如し。今の經には、四大弟子は佛の開三顯一の益を領す。佛の言はく、「如來に復無量の功德有り、汝等說くとも盡すこと能はず。譬へば大雲の世間に起るが如し。」とは、形益を譬ふるなり。雷を興し電を耀かすは、神通の益を譬ふ。其

【一五】利益妙を辨する中、第二章には正說の利益を辨ずるに初に先づ三科を分ち、而してその第一に遠益を論ず。就中、今初には通じて叙するなり。

【一六】別して遠益を釋するに、之より下七益を詳ず。

雨普等は說法の益を譬ふるなり。而諸草木各得生長は即ち是れ四種の眷屬皆七益に沾ふなり。故に次に利益妙を明す。

(一五)二に正說の利益を又三と爲す、先に遠益を論じ、次に近益を論じ、三に當文の益を論ず。

遠益とは、即ち大通佛の所にして、十六王子、化を助けて宣揚し、雙べて毒天の二鼓を擊つ。善生ずるに淺深有り、惑の死するに奢促有り。始め人天の善より、終り大樹に至るは淺益なり。始め初心の最實より、終り後心の最實は深益なり。始め不善を破し、終り塵沙を破するは奢の死なり。始め無明を破し、終り亦無明を破するは促の死なり。死の奢促は是れ毒鼓の力、善生の淺深は天鼓の力なり。故に文に云はく「有を破するの法王世に出現して、衆生の欲に隨つて爲に法を說く」と。即ち二鼓の文義なり。

(一六)破有の義は前に說くが如し、說法の益の義は今當に說くべし。略して七益と爲す、一には二十五有の果報の益なり、亦地上清涼の益と名く。二には二十五有の因華開敷の益なり、亦小草の益と名く。三には眞諦三昧析法の益なり、亦中草の益と名く。四には俗諦三昧五通の益なり、亦上草の益と名く。五には眞諦三昧體法の益なり、亦小樹の益と名く。六には俗諦三昧六通の益なり、亦大樹の益と名く。七には中道王三昧の益なり、亦最實事の益と名く。若し二十五有の因果の益は、業生の眷屬と爲るに堪へたり。若し眞諦三昧體析の益は、願生の眷屬となるに堪へたり。若し俗諦三昧五通六通の益は、神通の眷屬となるに堪へたり。若し中道王三昧の益は、應生の眷屬となるに堪へたり。私に謂はく、應

【二七】遠益を別釋する中、次には十益を明す。卽ち初にはその名を列ね然る後第一に果益を明す。

に圓雙八益有るべし。直是れ前を開し後を合す、故に七益と言ふ。若し後を開し前を合するも、亦是れ七益なり。前後俱に開すれば、即ち是れ八益なり。謂ゆる中道次第の益、中道不次第の益なり。若し前後俱に合すれば、則ち是れ六益なり」と云云。

〔二七〕已に略して七益を說き竟んぬ、今更に廣く開して十益と爲す。一には果の益、二には因の益、三には聲聞の益、四には緣覺の益、五には六度の益、六には通の益、七には別の益、八には圓の益、九には變易の益、十には實報の益なり。果の益とは、即ち二十五有の果報の益なり。八大地獄有り、阿鼻、想、黑繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱を謂ふ。一一に各各十六の小獄有りて、眷屬と爲す。合して一百三十六所あり。此正地獄は地の下二萬由旬に在り、其傍地獄は、或は地上に在り、或は鐵圍山の間に在り。傍は輕く正は重し。重き者は百三十六を遍歷し、中なる者は遍せず、下なる者は復減ず。其中の衆生は、常に熱苦の爲に逼めらる。具に說くべからず。聞く者驚怖せん。四解脫經に稱して火塗と爲す。初入、初出の兩時に化すべし。其中の罪人の宿世の善根、可發、關、宜なれば、而も爲に聖人赴對して之に應ず、或は光の照を蒙り、或は雨を注いで火を滅し、或は調達婆藪は開示し說法するに、熱悶蘇醒して身體清涼なり。冥顯の兩益を獲せしめ、諸の苦息むことを得。八の寒氷は阿波波等を謂ひ、亦百三十六所有り。乃至冥顯の兩益を得、溫煖身に適ふ。是を地獄の果の上に、清涼の益を得と爲すなり。畜生とは略して三種有り、水と陸と空となり。陸に三品有り、重き者は土内にして光明を見ず、中なる者は山林、

輕き者は人に畜養せらる。強き者は弱きを伏し、血を飲み肉を噉ひ、怖畏百端なり。四解脫經に稱して血塗と爲す。其中の衆生先世の善根、可發、關、宜なれば聖人赴對して之に應ず。畏るる所無きを得、冥顯の兩益を獲せしむ。是を畜生の果の上の清涼の益と爲す。餓鬼とは、或は海渚に居し、或は人間山林の中に在り。或は人の形に似、或は獸の形に似たり。重き者は飢火節熖にして漿水の名をすら聞かず。中なる者は蕩滌膿血糞穢を伺ひ求め、輕き者は時に薄く一び飽く。加ふるに刀杖を以て駈逼して、海を塞ぎ河を塡めしむ。四解脫に稱して刀塗と爲す。其中の衆生先世の善根、可發、關、宜なれば聖人赴對して之に應ず。手より香乳を出だし、施して飽滿せしめ、冥顯の兩益を獲せしむ。是を餓鬼の果の上の清涼の益と爲す。阿修羅とは、或は半須彌の巖窟に居し、或は大海の邊、或は大海の底なり。諸天と憾みを爲し、恆に怖畏を懷く。雷鳴を謂つて天鼓と爲し、龍雨變じて刀劍と成る。此中の衆生先世の善根、可發、關、宜なれば聖人赴對して之に應ず。軟言を以て調伏し、冥顯の兩益を獲せしむ。是を阿修羅の果の上の清涼の益と爲す。四天下の人は果報勝劣ありと雖も、俱に生老病死有り、同じく是れ輕報の泥犂なり。其中の衆生先世の善根、可發、關、宜なれば聖人赴對して之に應ず。所離をして離るることを得、所求をして求むることを得て、冥顯の兩益を獲せしむ。六欲天とは、地天は別して修羅鬪戰の難有り、通じては五衰の死相有りて、苦は地獄に等し。其中の諸天先世の善根、可發、關、宜なれば聖人赴對して之に應じて、冥顯の兩益を獲せしむ。四禪、梵王、無想、那含等の色天は、

【一八】十益の中、之より下には因の益を明す。

下界の諸苦無しと雖も、而も色の縛に籠めらる。若し命盡くる時は禪に入るを樂はず、風觸れて身を吹くに、唯眼識を除いて餘は皆苦有り。其中の諸天先世の善根、可發、闕、宜なれば聖人赴對して之に應じて、冥顯の兩益を獲せしむ。四空の諸天は、欲色界等の苦無しと雖も、病の如く、癰の如く、瘡の如く、箭の體に入るが如くにして、細煩惱を成就す。其中の諸天先世の善根、可發、闕、宜なれば聖人赴對して之に應じ、冥顯の兩益を獲せしむ。此れ清涼の益なり。合して之を言はば、蓋し凡聖の慈善根の力に由る。別して之を言はば、本菩薩の、初二十五有所防の惡を觀じて悲を起し、二十五の能防の善を觀じて慈を起し、此慈悲を以て王三昧に熏じて衆生を捨てず、闕宜に赴對して利益を得せしむるに由る。大經に、二十五三昧の二十五有を破することを明す。十番の一の意、略して此の如し。

二番に二十五有修因の益とは、夫れ自他の因果は、各各義の便に隨つて、互に一邊を擧げて之を說くは則ち易し、前の果報の益は處所時節不同なれば、一身に備に諸益を論ずることを得ず。多人多處に從ふは顯し易し。若し因の益を明さば、一人の心に無量の業を起す、其義顯し易し。故に一人に約して、二十五有の因の益を明す。云何なるか因の益ぞ。四因壞するの益、二十一因成ずるの益、或は一因壞するの益、一因成ずるの益、二十三の亦は成じ亦は壞するの益なり。若し戒自ら制する無く、其身口を縱にして、四趣の業を作すを地獄の人と名く。若し惡を捨て戒を持するを、天人を見ると名く。但禁戒嚴峻なれども、緣に遇ひて動退すれば、則ち惡業還つて興る。或は四重五逆、塔寺を焚毀す。此心

生ずる時は悪起り戒沒し、是業熟成すれば必ず悪道に墮す。此心を離れて、戒善を成就せんと欲するに、此に可發、關、宜の機有りて、無垢三昧赴對して之に應ずるを感ず。悪心豁かに破して地獄の因息み、冥顯の兩益を得云云。今の人は道場に入つて懺悔すと雖も、悪心轉ぜざれば則ち悪業壞せず。悪業壞せざれば得繩斷ぜず、罪滅することを得ず。若し慳貪諂媚にして名聞を邀射し、内に實德無くして人の稱美を欲す。此悪起り、戒伏すれば、鬼の中に墮す。若し慚愧無く、債を負うて還さず。恭敬の心無く、憍慢瞋恚、貪婪饕餮す。此悪起りて戒伏すれば、畜生道に墮す。若し賢を嫉み、能を妬み、勝他の爲の故に、而も福力を修し、虵毒の悪心をもつて方便隣陷し、他を驚怖す、是悪起りて戒伏するは、阿修羅に墮するの業なり。此三悪心を離れて、戒善を成就せんと欲するに、善に可發、關、宜の機有れば、聖用赴對して之に應じ、悪心豁かに破して戒善完く具す。此を四趣の因壞し、人天の因成じて、冥顯の兩益を獲と名く。此れ人道の修因に約して、此善を作すのみ。若し諸趣に約せば、地獄を出て畜に入らんと欲し、畜を出て鬼に入らんと欲し、鬼を出て修羅に入らんと欲し、修羅を出て人道に入らんと欲するに、皆傳傳して因有り、因成じ業轉ず。此に例して知んぬべし云云。若し堅く五戒を持ち、兼ねて仁義を行じ、父母に孝順して信敬慚愧するは、即ち是れ人業なり。人業に四品有り、上、中、下、下下なり。若し果報に就かば閻浮提を下下と爲し、若し人道に就かば、鬱單越を下下と爲す。貴時は善心歘末にして、悪念唯強し。善に成ずべき有り、悪に滅すべき有り、關、宜の機あれば聖用赴

【四惡趣】地獄、餓鬼、畜生、修羅を云ふ。

對して之に應じ、四惡趣壞し、四品の善成じ、冥顯の兩益を獲せしむ」云云。若し十善を修持して、任運無間に善心成熟するは即ち天の業なり。故に云はく、純惡の心に善念の間はること無きは即ち惡道の業なり、果の時純ら苦なるが故に。善惡相間はりて起るは即ち人の業なり、人中の果報は苦樂相間はるが故に。十善任運に成ずるは是れ天の業なり、天の中の果報は自然なるが故なり。若し十善を修し、兼ねて護法の心を起すは、即ち四天王の業なり。若し十善を修し、兼ねて慈を以て人を化するは、是れ三十三天の業なり。若し十善を修し、其心細妙にして任運に成熟し、行住坐臥、衆生を惱まさず、淳善純積なるは是れ焔摩の業なり。若し十善を修し、兼ねて禪定を修し、攝心專住細住するは是れ兜率の業なり。欲界定は、是れ化樂の業なり。未到定の事障を破するは、是れ他化の業なり。四禪は是れ色界の業なり。慈悲喜捨を心數法の中に兼ねて定を得るは、是れ梵王の業なり。心を滅して無心定を修するは、是れ無想の業なり。問ふ、「無想は是れ邪見の天なり、云何が機感とするや。」答ふ、『大集』に云はく、「菩薩の衆生を調伏すること多種なり。或は邪、或は正なり。非道を行じて佛道に通達す」と。云云。若し舊の云はく、「聖人は兩片の無漏を以て、夾んで一片の有漏を熏じ、練りて無漏を成ず」と。今言はく、「九次第定の有漏を熏修して、無漏を成ずるは是れ那含の業なり」と。四空定は、是れ無色界の業なり。是の如き等の二十一有は、白地の苦の麤を患へて出要を修せんと欲するに、所求は得ず、所捨は離れず。爾時、即ち可發、關、宜の機と名け、二十一三昧の慈悲の力を感じて共修因

【一九】十益の中、次には聲聞の益を明す。

を破し、所離をして去ることを得せしめ、所求をして成ずることを得せしむ。拔苦與樂、冥顯の兩益あり。此れ經の文に云ふが如し、小草、小根、小莖、小枝、小葉、而も生長することを得」と。是れ此益なり。合して之を言はば、蓋し凡聖の慈善根の力に由る。別して之を言はば、本と菩薩の、初二百五十戒を持ち、根本等の禪を修し、一一能防の善法の中に於て皆慈悲を起し、慈悲本誓は王三昧に熏じて衆生を捨てざるに由る。闕宜に赴對して各各利益を得せしむ。大經に云はく「二十五三昧は二十五有を破す」と。十番の二の意、略して此の如し云云。

（一九）三番に聲聞の利益とは、若し人の生死を厭患するに、死を以て生を受け、生を以て死に歸し、精神を勞累して輪轉際り無し。貪欲自ら蔽ひ、犛牛の尾を愛するが如くして解脱を得ず。故に言ふ、若し人苦に遭ひ、老病死を厭はば、爲に涅槃を説きて、諸の苦際を盡す。既に厭心内に決して出離を志求す、是事の爲の故に、聲聞の道を修す。若し戒を持つ時愛見の羅刹、浮嚢を毀損して、戒をして不淨ならしむ、戒不淨なるが故に、三昧現前せず。既に戒定無ければ無漏發せず、是故に一心に戒定慧を修す。可發、闕、宜の機有れば、無垢等の四三昧の力の之に加はることを感じて、四趣の業をして起らざらしめ、戒をして清淨ならしむ。若し均しく定慧を修するに、慧若し定有れば慧は狂ならず、定に若し慧有れば定は愚ならず。之を名けて賢と爲す。賢は隣聖を名く。此定慧を修して、一心に精進すること頭然を救ふが如く、禪慧を願樂すること渇の飲を思ふが如くす。而して二十一

【二〇】十益の中、第四に緣覺の益を明す。

【二一】十益の中、第五に六度の益を明す。

有漏の業に擾亂せらるるが爲に、若し諸の三昧の力の之に加はることを得れば、定發し觀明かにして、四善根成熟し伏道純熟す。一刹那に轉じて卽便ち眞を發し、須陀洹と成り、二十五有見諦の煩惱八十八使を破す。是を二十五三昧通じて加し、見諦の惑を斷じ、復兼ねて四思を除かしめんが爲の故に、第十六心に卽ち修道に入ると云ふ。是れ其義なり。次に修道に入る。若し是れ超人は、一時に十の三昧力を用つて之に加し、五下分思惟の惑を破す。若し鈍人は、其分分に思惑を斷ずるに隨つて、則ち分分に三昧を用ひて、之に加し、三界の惑を盡して、眞諦三昧の益を究竟す。此れ中草の利益なり。合して之を言はば、蓋し凡聖の慈善根力に由る。別して之を言はば、本の慈悲に由る。初めに十法界の中の析空滅色の善を觀ず、因つて弘誓をして王三昧に熏じ、衆生を捨てずして中草の利益有るを致すなり。大經に二十五三昧の二十五有を破することを明す。十番の三の意略して此の如し。

【二〇】四番に緣覺の利益とは、若し人、宿善深利なるは、無佛世に於て生死を厭患し、獨り善寂を樂ひ、深因緣を觀ず。文に云はく「曾て佛を供養し勝法を志求す、爲に緣覺を說く」と。此人大福ありて、可發、關、宜なれば、聖人赴對して之に應じ、其をして華飛釧動に冥顯の兩益を獲て、支佛の道を悟らしむ。此れ猶中草の利益に屬す。

【二一】五番に六度の菩薩は、四諦を觀じ、六度の行を行ず、若し檀を行ずる時、人の頭を乞ひ、眼、國城妻子を索むるに從つて、心或は轉動すれば檀度成ぜず。自ら是れ惡なりと知り、

壇の善を成ぜんと欲するに、可發、關、宜の機、三昧力を蒙りて其慳蔽を伏するは、是れ餓鬼の有を破す。蔽心に旣に去れば、歡喜布施すること甘露を飲むが如し。有爲の法は危脆無常なりと知る、是れ心樂三昧冥顯の益を蒙るなり。尸羅若し成ずれば、是れ毀戒の蔽を伏し地獄の有を破す。是れ無垢三昧の益なり。忍成ずれば瞋の蔽を伏し、畜生の有を破す、不退三昧の益なり。禪成ずれば是れ亂蔽を伏し、人の有を破す、是れ四三昧の益なり。精進成ずれば懈怠の蔽を伏し、修羅の有を破す、歡喜三昧の益なり。慧成ずれば愚癡の蔽を伏し、天の有を破す、十七三昧の益なり。六蔽は是れ六道の業なり、具には菩薩戒本に出づ。六道の業を伏するを以ての故に、諸の蔽の爲に惱まされず、五神通を得て六道に遊び、六度の行を成ず。此卽ち上草の益なり。通は應に前の如くなるべし。別して之を論ずれば、本十法界の事の中の善惡を觀じて弘誓を起し、王三昧に熏じて衆生を捨てざるに由る云云。

【二二二】第六に十益の中、通人の益を明す。

(二二二)六番に通人の益とは、此は是れ三乘共の學人なり。若し乾慧地、性地、八人、見地は、卽ち是れ二十五三昧を用ひて益す。薄地より去つて十地に至りては、二十一三昧を用つて加して思惑を破す。又無知をも侵除す。是を小樹の益と名く。總別の慈悲は前に例して知るべし云云。

【二二三】第七に十益の中、別人の益を明す。

(二二三)七番に別人の益とは、此は是れ次第心の中に、緣を法界に繫け、念を法界に一にす。十住に入つて眞諦三昧の益を得、十行、十回向に入りて俗諦三昧の益を得、十地に入りて中諦

【二四】十益の中、第八に圓人の益を明す。

【二五】十益の中、第九に變易の益を明す。

三昧の益を得。此れ即ち大樹の益なり。總別の慈悲は前に備す云云。

（二四）八番に圓人の益とは、此は是れ三諦一實の理を修し、念を法界に一にし、緣を法界に繫く。若し歷緣對境は、擧足下足、道場に非ざること無し。其心念念に、諸の波羅蜜と相應す。四三昧を修し、十種の境を觀ず。可發、闕、宜あれば聖人赴して之に應じ、豁然として開悟し、或は似、或は眞、冥顯の兩益を得。此は是れ圓に二十五三昧を用ひ、圓に加して二十五有を破し、我性を顯出して究竟眞事の益を得るなり。

（二五）九番に變易の益とは、此は是れ方便有餘土の人の益なり。前の八番の中凡そ四處有り。或は九處あり。謂はく、聲聞、緣覺、通敎の菩薩、別敎の三十心、圓敎の似解なり。此見思を破して、未だ無明を除かず。無明は無漏を潤し、方便の生を受く。故に下の文に云はく、「我餘國に於て、作佛して更に異名あり。而して彼土に於て佛の智慧を求め、是經を聞くことを得」と。即ち是れ彼土に一乘に入るなり。勝鬘に云はく、「三人變易土に生ず、謂はく大力の羅漢、辟支佛、菩薩等なり」と。楞伽に云はく、「三種の意生身とは、一には安樂法意生身なり。此は二乘の人の、涅槃安樂に入る意に擬せんと欲す。二には三昧意生身なり。此は通敎の出假化物、神通三昧を用ふる意に擬す。三には自性意生身なり。此は別敎の、中道を修する自性の意に擬す」と。通じて意と言ふは、安樂は空意を作し、三昧は假意を作し、自性は中意を作す。別圓の似解は、猶未だ眞を發せざれば、皆作意と名く。故に論に云はく、「是時意地を過ぎて智業の中に住在す。若し發眞は是れ智業なるべくんば、未發

【二六】十益の中、第十に實報の益を明し、而る後總じて上來の文旨等を結す。

眞は猶意地に在り。是人の彼に生ずるは、析法の者は鈍、體法の者は利なり。別人は已に假を習ひ、又小しく利なり。圓人は先より即中なれば最も利なり。既に利鈍の殊なり有れば、彼に於て修學するに、即ち次第、不次第の兩益有り」と。又是れ次第不次第に、二十五三昧に兩應を用ふるなり。是を九人、方便國に生じ、始めて彼土に於て、諸有の我性を見、最實の益を得と爲す。若し分別して言はば、謂はく方便土は三界の外に在り。若し事に即して而も眞なれば、必ずしも遠きに在らず。下の文に云はく、「若し能く深心に信解するは、即ち佛常に耆闍崛山に在して、大菩薩、聲聞衆僧と共に圍繞せられ、說法したまふを見ると爲す」と。即ち方便土の意なり。

（二六）十番に實報土の益とは、即ち實報土の人の益なり。八番の中に兩人生ずること有り。方便土に又二人あり。悉く無明を破して實相を見る者は、方に彼に生ずることを得。但無明の重數甚だ多し。三賢十聖は實報に住すと雖も、報未だ盡きざれば猶殘惑有り。更に王三昧を用ひて四十一番に之を益す。妙覺に至りて竪に窮め横に遍し、不生不滅なり。不生不滅とは、無明永く盡き智慧圓に足る、故に不生不滅と言ふ。又横に遍く滿足し、利益究竟す、故に不生不滅と言ふ。若し分別して言を爲さば、謂はく實報は方便の外に在り。若し事に即して而も眞なれば、此れ亦遠きにあらず。文に云はく、「娑婆を觀見するに瑠璃を地と爲し、坦然として平正なり。諸臺樓觀は衆寶の所成にして、純ら諸菩薩のみ咸其中に處す」と。即ち實報土の意なり。若は麤妙の機、若は別圓の應、若は淨穢の土、若は淺深

【三七】十益を明し終りて今更に問答料簡す。

の益は、十番を出す。法界を包括して、利益略周し。大意見るべし、繁文を俟たず。是を大通佛の所にして、毒鼓生を損じ、聞に遠近有り、死に奢促有り。天鼓の增道、聞に遠近有りと爲す。故に益に深淺有らしめ、業、通、願、應、諸の眷屬利益有るを致すなり。

【三七】問ふ、「初番に已に二十五有を破して益を得竟れば、則ち有の破すべき無く、更に益の論すべき無し。何ぞ十番に至るべけんや」。答ふ、「初めに二十五の果報の苦を破して、果報の益を獲せしむ。次に二十五の因の苦を破して、修因の益を獲せしむ。次に二十五有の見思の苦を破して、眞三昧の益を得せしむ。次に二十五の空を破して、二十五有の假を出しめ、俗三昧の益を得せしむ。次に二十五有の有空の二邊を破して、中道王三昧の益を顯す。次に方便有餘土を破して、二十五假を出しめ、俗、王の兩三昧の益を得せしむ。次に實報土を破して、但深く王三昧の益を顯す。三諦未だ了了ならざれば益の意息まず、故に十番有り、其義是の如し」。問ふ、「三諦は獨り極地に在りや、亦は凡に通ずることを得るや」。答ふ、「大品に云ふが如し、「衆生の色、受、想、行、識」と。又云はく、「無等等の色、受、想、行、識」と。仁王に云はく、「法性の色、法性の受、想、行、識」と。大經に云はく、「是色を滅するに因つて常色を獲得す、受、想、行、識も亦復是の如し」と。是れ則ち凡より聖に至つて、皆悉く是れ有、卽ち俗諦なり。淨名に云はく、「衆生の如と、彌勒の如と、賢聖の如は、一如にして二如無し」と。大品に云はく、「色は空なり、受、想、行、識も空なり。若し一法の涅槃を過ぐる有れば、亦如幻如化なり」と。此れ則ち凡聖皆空、卽ち眞諦なり。大經

に云はく「二十五有に我有りや不や。答へて言はく、我有り。我は即ち佛性、佛性は即ち中道なり。因緣生の法は、一色一香も中道ならざる無し」と。此れ則ち凡より聖に至つて、悉く皆是れ中道第一義諦なり。問ふ、「遠く利益を論ずるに、經に遠を語すること多し。第一に云はく「久遠劫より來た、涅槃の道を讚示し、生死の苦永く盡く、我常に是の如く說く」と。第二に云はく「我れ昔二萬億佛の所に於て、無上道を敎ふ」と。第三に云はく「宿世の因緣、吾今當に說くべし」と。定んで何れの文に據らんや」。答ふ「第一の文は、直に從久遠劫來と云ふ。久遠の言は實に杳漫にして、未だ本地を顯はさず。或は中間に據らん。第二は、直に昔曾二萬億佛所と云つて、未だ劫數を判せざれば久近明らめ難し。後の文を將つて準望するに近近なるに似如たり。今遠益を論ずるには、第三の文を取る。三千界の墨を以て東に千界を過ぎ、乃ち一點を下す。點と不點と、盡く抹して塵と爲し、一塵を一劫とす。復是數に過ぐること、無量無邊百千萬億阿僧祇劫ならんと。此明文を用つて、二萬億佛の所に望むるに、始めて昨日と爲す。是より已來、大乘を結ぶの首と爲す。彼佛は八千劫に經を說き、十六王子は八萬四千劫に覆講す。彼經論は、文廣く時深し。時に於ては聽衆、或は當座に已に悟るべく、或は中間に化得すべく、或は近來に化得すべし。咸く寶所に至つて法性身を受け、應生の眷屬と爲る。內祕外現して、共に衆生を熟して而も佛事を作す。淨名に曰はく、「成道し、法輪を轉ずと雖も、而も菩薩の道を行ず」と。是れ此意なり。時に於て、聽衆未た眞實の益を得ず。若し相似の益は、隔

生すれども忘ぜず。名字、觀行の益は、隔生すれば則ち忘じ、或は忘ぜざる有り。忘ずる者も若し善知識に値はば、宿善還つて生ず。若し惡友に値はば、則ち本心を失す。是故に中間に、種種に塗熨す。或は多く大乘を以て熟し、或は多く小乘を以て熟す。方便に生ずる者は、種種の道を說くと雖も、其實は一乘の爲なり。亦復皆寶所に至ることを得せしめ、法性身を受けて、彼國に於て第九番、十番の眞實の利益を被る。千世界の微塵の菩薩の如きは、即ち其流なり。斯等已に前に究竟するを、久遠の利益と名く。其中の衆生、今に於て聲聞地に住する者有れば、更に近く利益を論ず。後に說くが如し云云。

妙法蓮華經玄義卷第六下

【一】利益妙の中正說の利益を辨ずるに三科ある中、第二に近益を論ず而してまた初には即ち正釋なり。

妙法蓮華經玄義　巻第七上

天台智者大師の説

(一)二に近の利益とは、寂滅道場に起り、始めて正覺を成じて即ち法輪を轉じ、毒鼓天鼓を撃ちて衆生を利益す。法華に至る已前に齊つて、益に亦淺深あり、死に亦奢促あり。何となれば、教は本緣に逗ず。緣を略して四と爲す、教も亦四有り、教主も亦四あり。皆法王と稱すれば王三昧を具し、自ら二十五有を破して衆生を七益す。例して前に說くが如し。又大小乘の經に、佛王三昧に入りて光を放ち、法を說き、善惡の諸趣の果苦に益を得ることを明す。阿含の中に說くが如し「佛の光明を見、佛の手觸を蒙りて、六道の苦患悉く除愈することを得ん」と。又大品に云はく「光を放ちて地獄の衆生を照すに、苦惱即ち除いて、生じて第六天に齊し」と。苦の除くは是れ果の益、生天は是れ因の益なり。大品に稱して華葉の益と爲す。又佛光を放つて幽闇の處皆大に明かなり。各各是念を作す「此中云何ぞ忽ちに衆生を生ずる」と。此れ亦是れ果の益なり。此因果の益は、四の教主の佛、通じて能く此益あり。別して益を論ぜば、則ち是れ淺深同じからず。謂はく聲聞は正を斷じ、緣覺は習を侵す、同じく中草と名く。菩薩は惑を伏し、兼て衆生を度す。故に經に云はく「世尊の處を求めて我當に作佛すべし、精進を行じて定まる」と。是を上草の

【寂滅】摩竭陀國迦耶山頭尼連禪河の邊、菩提樹下金剛座上を指す。

益と名く。蓋し三藏の敎主の諸善根力の利益の相なり。經に云はく、「若し諸の菩薩、智慧堅固にして、三界を了達し、最上乘を求む」と。即ち三人同じく無生を觀ず。但前の析智の益有るのみに非ず、別に巧度有り。即ち是れ體眞なり、是を小樹増長の益と爲す。蓋し通の敎主の利益の相なり。經に云はく、「復禪に住して神通力を得、諸法の空を聞きて心大に歡喜する有り」と。住禪とは九種の大禪に住し、心大歡喜とは歡喜地に登る。無數億百千の衆生を度すとは、是を大樹増長と名く。但前の因果析體の益有るのみに非ず、而も別に分別道種智、乃至一切種智の益有り。蓋し別の敎主の利益の相なり。經に云はく、「今當に汝が爲に最實事を說くべし」と。啻前の如きの益のみならず、乃ち即ち無明を破して、佛性を顯出する究竟の實益有り。蓋し圓の敎主の利益の相なり。復次に前の三敎の益は、劣にして勝を兼ねず、勝は則ち劣を兼ぬ。解すべし云云。又五味に歴れば、乳敎は但因と、果と、大樹と、實事との四益ありて、三草一木を明さず。大乘經は二乘の人の手に入らずして、聾の如く瘂の如くなるを以ての故なり。酪敎は但三草等の四有り。生蘇は備に七益有り。熟蘇は析法の三草無く、而して體法等の七益有り。醍醐は但實事の益有り。前の諸の益は皆麤にして、今の益は則ち妙なり。近くは寂滅より訖り法華に至るまでを生身の菩薩と爲し、但八番の益を得て、第九、第十の益を得ざるなり。又得の義有るは、即ち是れ菩薩、法性身より來りて分段に入り、願、通應、生等の眷屬と作りて、進んで無明を破するは殘品を斷除して、即ち第九、第十番の益を明すことを得るなり。始め寂滅

【二】近益を論ずる中、次に問答を設けて料簡す。

より終り法華に至つて、略して十益と言ふ。

(三)問ふ、『法身の菩薩、應身の佛の說法を聞きて、應身の中の益に亦法身をして益を得せしむるや。』答ふ、『譬へば鏡を磨するに、鏡轉た明かなれば、色像も亦明かなるが如し。』又問ふ、『應身法を聞きて益するに法身も亦益せば、應身病を現ずるに法身も亦病むや。』答ふ、『此病若し實ならば、應病まば法も亦病まん。祇應の病は實に非ずと爲す。實に非ざるが故に、應身病無ければ、法身も亦病無し。又若し應身の現病少なければ、當に知るべし、法身の益も亦少し。若し能く應身の現病廣ければ、法身の益も亦廣し。』今諸句を作して料簡するに、自ら果は益して因は益せず、因は益して果は益せず、俱に益し、俱に益せざる有り。此れ卽ち現事なり、解すべし。自ら壞の益、成の益、亦壞亦成の益、不壞不成の益有り。不壞不成の益は是れ淸涼の益、四趣の因は是れ壞の益、非想の因は是れ成の益、中間は是れ亦成亦壞の益なり云云。自ら因の益卽ち果の益、果の益卽ち因の益なる有り、此れ[illegible]易の因移り果易るの意なり。自ら因の益は增道に非ず、果の益は損生に非ず。是因果の益を得、是因果の益を得ざる有り。分段の報の因果なり。自ら因の益は是れ增道、果の益は是れ損生にして、是因果の益を得ず、是因果の益を得る有り、習因習果なり。自ら眞の益にして、俗の益に非ざる有り、二乘なり。俗益の眞益に非ざるは、六度の菩薩なり。自ら先に俗の益にして、後に眞の益なる有り、六度の菩薩なり。自ら先に眞の益にして、後に俗の益なる有り、通の菩薩なり。自ら眞俗の益にして中の益に

【三】正說の利益を明す中、第三に當文の利益を論ず

非ず、中の益にして眞俗の益に非ざる有り、別なり。自ら眞益即ち俗益、亦即ち中道の益なる有り。圓なり。

(三)三に當文の利益とは、今の經に具くに備に七益有り。復差別すと雖も即ち差別無し。譬へば芽莖枝葉の生長不同なれども、而も是れ一地の所生なるが如し。七益誠に復淺深あれども、實相に非ざること無し。故に差別にして無差別なりと言ふ。諸經の差別は麤の益なり、同じく此經に入れば無差の妙益なり。或は進んで諸の妙益に入り、或は位を按じて妙益を成ず。進入の益とは、本是れ地上清涼なれども、今則ち進んで、大乘を發して解心明淨なり。或は觀行妙、相似分眞の中に進む。本是れ人天の因益なれども、今進んで相似分眞に入る。本是れ小乘の學無學の益なれども、今進んで無明分眞の妙益を破す。譬へば聲を變して角に入れ、小を轉じて大と爲すが如し。通別の進益は此に例して知るべし。按位の益とは、本是れ麤果の地上清涼は即ち理妙の益を成ず。麤因の益を按ずるに、即ち是れ觀行の妙益なり。麤の學無學の益を按ずるに、即ち是れ相似の妙益なり。麤即ち妙と開すれば、進入を須ひず。通別は此に例して知るべし。進入の妙益は、即ち是れ麤益に待して妙益を明す。按位の益は即ち是れ絕待妙の益なり云云。諸の麤益に眷屬を判ぜば、果因の二益は業生の眷屬となるに堪へたり。中上の二草、小樹等は、願通の眷屬となるに堪へたり。大樹の見性已去は皆應生の眷屬の攝なり云云。進入の按位とは、理妙、假名、觀行妙は業生の眷屬となるに堪へたり。相似妙は願通の眷屬となるに堪へたり。

【四】利益妙を明す中、第三章に流通の利益を論ず。而して又自ら三あり、一には師を出し、二には法を出し、三には益を出すもの是なり。

分身は應生の眷屬となるに堪へたり。是を此經の利益の相と名く云云。

(四)三に流通の利益を明すに三と爲す。一には師を出し、二には法を出し、三には益を出す。弘經の行人は具に凡聖に通ず。若し法身の菩薩は誓願莊嚴し、此土、他土、下土、上土をして、權實の七益、九益、十益を得しむ。化の功己に歸し、還つて法身を資けて增道損生す。生身の菩薩も亦能く此土、他土に經を弘め、他をして權實の七益を得しむ。化の功己に歸し、增道損生す。而して上土に利益すること能はず。凡夫の師は亦能く此土に弘經して、他をして權實の七益を得せしむ。化の功己に歸して、品位を增益す。故に無量義に云はく「病導師有り、此岸に在つて、船筏を成就して人を彼岸に渡す」と。即ち其義なり。問ふ、「凡夫は但能く凡夫の爲に弘經して、凡夫をして益を得しむるや、亦能く聖人をしても益を得しむるや。」答ふ、『聖に二種有り、一には小乘の聖、二には大乘の聖なり。經に云ふが如し、「若し實に阿羅漢を得て滅度の想を生ずること有れば、若し餘佛に遇ひて便ち決了することを得」と。南岳師の云はく、「初依を餘佛と名く、無明未だ破せざるは、之を名けて餘と爲す。能く如來祕密の藏を知り、深く圓理を覺するは、之を名けて佛と爲す。佛の滅後に實に羅漢を得る者は、權實に於て未だ了せず。若し初依に遇へば即ち能く決了して、相似の益を成せしめ、或は進んで分眞の益に入らしむ」と。此文は往凡夫の師の、小乘の聖人の爲に經を弘め、益を得ることを得たるを證す。經に云はく、「六根清淨の人、法を說くに、十方の諸佛皆樂で之を見、其處の說法に同ず。一切の天龍は、其所說

を開きて皆大に歡喜す」と。此れ亦是れ凡夫の師の、大聖の爲に法を說くの明文なり。

二に法を出すとは、通經の方法は明かに聖言に出づ。文に云はく、「若し衆生信受せずんば、當に餘の深法の中に於て示教利喜すべし」と。餘とは方便を帶するなり、深とは中道を明すなり。方便を帶して中道を明すは即ち別教なり。若し但方便にして中道を明さざるは即ち通藏等の教なり。經の文に、別を用ひて圓を助くることを許す、而も例して推すに、亦應に通を用ひて圓を助くべし。又文に云はく、「更に異の方便を以て第一義を助顯す」と。豈藏通を隔てんや。但菩薩は已に實慧を得、亦權意を得たり。實を以て權に濫ぜず、亦權は是れ實なりと謂はず。但爲に實を弘むるに、而も衆生は信ぜざれば、須く實の爲に權を施し、淺を以て深を助けて、虛妄無かるべし。此れ則ち雙べて權實を用ひて經を弘むるなり。安樂行に云はく、「若し難問有れば、小乘の法を以て答へざれ。但大乘を以て爲に解說し、一切種智を得しむべし」と。此れ則ち但實を用ひて經を弘めしむるなり。又云はく、「宜しきに隨つて爲に說く」と。此れ亦權を隔てざるなり。今時の人の法を弘むるは、或は一向に大を用ひ、或は一向に小を用ひて、皆佛意を得ず。善く經を弘むる者は用與時に適ふ。口に權を說くと雖も、而も內心は實法に違せず。但衆生をして權實の七益を得しめ、弘經に於て暢ぶ矣。

三に益を出さば、然るに流通の利益は第三の流通段を待たずして、方に利益を明す。祇正說の文の中、已に未來弘經の利を指す。譬喩品の後、授記品の末、法師品の中に、皆弘

經の功德利益を明す。能く如來の滅後に一句偈を聞く者に于ても、亦三菩提の記を與受す。況や弘宣する者、竊かに一人の爲に說く者は、功德尙多し。況や衆に處して廣く說く者をや。展轉して第五十人に至るは、隨喜の功德尙二乘の境界に非ず。況や最初會の中に聞きて隨喜する者をや。常不輕は一句を流通して尙六根淸淨を得たり。況や具足して流通する者をや。初品の弟子の弘經の功德は、無量億劫に五波羅蜜を行ずるも喩と爲すを得ず。況や第五品をや。十方の虛空に寧ろ邊表有るも、五品の弘經は尙窮盡し叵し。皆云ふ「如來の室に入り、如來の衣を著し、如來の座に坐す」と。如來の法は皆數量に非ず、況や八萬の大士、千界微塵の菩薩にして而も當に說くべけんや、而して當に知るべけんや。唯如來を除いて、能く盡く知る者無し。凡師の弘經は、凡をして七益ならしむ。經に云はく、「此經は是れ閻浮提の人の病の良藥なり。若し是經を聞けば、不老不死なる者なり」。老死の中に於て老死の實相を識る。老死は是れ果報の法なり、實相を識れば卽ち淸涼理妙の益を得。亦果報の益なり。能く此經を持つが故に安樂土に生じ、蓮華の中に處して貪欲の爲に惱まされず、亦是れ十惱亂を離る。是れ善く菩薩道を行ず、亦名字の益と名く。亦是れ觀行の妙、亦是れ修因の妙なり。陀羅尼を得て能く假を旋らして空に入るは、卽ち是れ下、中、上の藥草等の益なり。亦是れ小樹の益なり。百千旋陀羅尼を得るは、卽ち大樹の益なり。法音方便陀羅尼を得るは、是れ相似の實益なり。若し須臾も聞くこと有れば、卽ち三菩提を究竟することを得るは、卽ち是れ眞實の益なり。復次に人の高原を穿鑿して、

【五】利益妙を明す中、第四に觀心の中の利益を論ず。中に於て自らまた大分二段あり。即ち初に正しく觀心を明し、次に性過を破す。

乾土を見るが如きは、是れ下、中、上の藥草の益なり。泥を見るは是れ小樹、大樹の益なり。水を得るは是れ最實の益なり。後の五百歳も尚此益を獲、況や復今時に經を弘め他を利するは、寧ぞ七益無からんや。

(五)第四に觀心とは、小乘に明す心起れども、未だ身口を動ぜざるは、名けて業と爲す。大乘は刹那の造罪も、殃無間に墜つることを明す。無間は是れ大苦報の處、刹那は業を促起するの處なり。促心暫く起れば重業已に成ず、況や九法界にして而も具足せざらんや。若し能く心を淨むれば、諸の業即ち淨し。淨心觀とは、謂はく諸心は悉く是れ因緣生の法にして、即空即假即中なりと觀ずる一心三觀なり。是觀を以ての故に、心も心に非ずと知れば、心は但名のみ有り。法も法に非ずと知れば、法に我有ること無し。名も名無しと知れば、即ち是れ我等なり。法も法無しと知れば、即ち涅槃等なり。此解の起る時は、我我所に於て雲の如く幻の如し、即ち是れ地上清涼の益なり。信敬慙愧し、諸の善心生じて、空假中に於て意而も勇み有るは、即ち是れ因の益なり。念念に即空と相應するは、是れ中、上草、小樹等の益なり。念念に即假と相應するは、是れ大樹の益なり。念念に即中と相應するは、是れ最實事の益なり。一念の益心に於て七種に分別す云云。夫れ一向無生觀の人は但心益を信じて、外の佛の威の、益を加ふることを信ぜず、此れ自性の癡に墮す。又一向に外の佛の加を信じて、內心に益を求めざるは此れ他性の癡に墮す。共の癡、無因の癡も亦解すべし。自性癡の人は、眼に世間の重きを牽くに前まざる者も、傍より

【十八】迹門の十妙を釋するに大章五番を分つ中、第五に權實を結成す。卽ち先づ初に古師の見解を出し、而る後之を破斥す。

力を以て助け進むを見る。云何ぞ罪垢重き者も、佛威建立して、觀慧をして益を得せしむることを信ぜざらんや。又汝何れの處にか從ひて是無生の內觀を得るや。師に從ふや。經に從ふや。自に從つて悟るや。師と經とは、卽ち是れ汝の外緣なり。若し自ら悟らば、必ず冥加を被むらん。汝恩を知らざること、樹木の日月風雨等の恩を識らざるが如し。又三事ありて汝外の加あるを知らず、一には敎を信ぜず、二には自ら行じて外の加を求めず、三には人を敎へず。直に是れ汝が不信にして、外の益無きには非ず。經に曰はく、「內に非ず、外に非ず、而も內、而も外なり。而內の故に諸佛の解脫は心中に於て求む、而外の故に諸佛護念す。云何ぞ、外の益を信ぜざるや」云云。他、共、無因の擬は例して解すべし。卽假の故に自性無く、卽空の故に他性無く、卽中の故に共性無く、雙照の故に無因性無し云云。

(十八)第五に權實を結成すとは、光宅の云はく「三三の境を照すを權と爲し、四一の境を照すを實と爲す」と。今此解を用ひず。既に大乘の果を以て大理と爲さば、何ぞ小乘の果を用て小理と爲さざる。彼救ひて云はく「小果は眞に非ず、故に其果を以て理と爲さず」と。若し爾らば、權敎及び權行の人は、何ぞ嘗て是れ實ならん。既に權敎の行人を立つ、何ぞ權理を立てざらん。又權若し理無くんば、俗は諦と稱すべからず。既に俗諦と言ふ、權も止三なるべからず。實に四有らば、夫れ因果は是れ二法なり、云何ぞ二法を以て理一とせんや。經に云はく「一切法を觀ずるに如實の相なり、行ぜず分別せず」と。云何ぞ因果を

【七】權實を結する中、之より下は正しく今家の釋を述ぶ。

分別して理と爲ん。若し爾らば、便ち實相無ければ、則ち魔の所說なり、故に彼の釋を用ひず。

(七)今明さく、十麤の境を照すを權と爲し、十妙の境を照すを實と爲す。十麤とは卽ち前の九法界、三の因緣等、諸の麤の諦智、乃至麤の利益を皆權と稱するなり。十妙を照すとは卽ち是れ理妙、乃至利益妙なり。妙の故に實と爲す。復次に、十妙の爲の故に十麤を開出す。爲蓮故華は意蓮に在りて、而も蓮隱れて現ぜざるが如く、餘の深法に於て示教利喜するに、餘法に實在りて而も實顯はれず。文に云はく「如來の方便は意趣解し難し」と。又華開き蓮現ずるは、十麤を開して十妙を顯はすを譬ふ。則ち復十麤無し、唯一大事不可思議の境界、乃至利益なり。肇師の云はく「始め佛國より終法供養まで、皆不可思議を明す」と。今亦例して爾り。既に麤を開し已れば始終皆妙なり。又五味に約すれば、乳味は則ち十妙の爲に十麤を明し、十麤を開して十妙を顯はすこと有り。則ち一權一實を成ず。若し四悉檀に就かば、則ち六權二實有り。若し四門に約すれば、則ち十二權四實なり。若し三藏に約すれば一向是れ權にして、化城楊葉なり。還つて三藏に就いて、化他に約して權と爲し、自行に就いて實と爲す。四悉檀に約すれば三權一實、四門に約すれば十二權四實なり。若し方等は、既に備さに四教有り。故に三十種の權、一十種の實なり。若し四悉檀に約すれば、十四の權と二の實なり。四門に對すれば、五十六の權と八の實なり。若し摩訶般若に約すれば、既に三藏を廢して但三教を用ふ。通別の二十種を權と爲し、一十種

一圓を實と爲す。若し悉檀に約すれば、十の權と二の實なり。若し四門に歴れば、四十の權と八の實なり。若し法華に至れば、前來を一向に皆廢して、但一實を說く。實の中には方便無きに非ず、但是れ實相の方便なれば、同じく稱して實と爲す。今悉檀に約せば、未悟の前には三權、悟れば即ち一實なり。若し四門に歴れば、十二權と四實なり。名數は一往三藏に同じうして、而も意は天懸に地殊なること有り。彼教の十二權四實は一向に是れ權なり、法華は一向に是れ實なり。方等、般若に異なるを料簡するは云云。故に云はく、「但無上道を說き、眞實の相を示す」とは、此謂なり。若し涅槃に約すれば、涅槃は備に四教を釋す、亦是れ三十の權と一十の實なり。一往は方等に似同して、而も意は逈に異なり。彼は則ち二は實に入り、二は實に入らず。今の涅槃は四倶に實に入る。因中には則ち三權一實有り、果に在りては則ち四實にして權無し。若し四悉檀に約せば十四權二實なり。四門に歴れば五十六權八實なり。若し更に三の四門に約せば、五十六權なり。若し果門は、四實にして但是れ實なり。其本因に仍る、故に四と說くのみ。是れ則ち四門の入實にして、果に約せば四實十二權なり。法華と義齊し。故に知んぬ、諸教は同じく權實有りと雖も、權實同じからず。或は一向に實、或は一向に權、或は權實相兼ぬ。皆是れ機情に稱當して、理を緣ずること未だ融ぜず、今總じて教に就いて權實を判ぜば、若し三藏と通と別との三教は是れ權なり、圓教を實と爲す。又諸教の權實未だ融ぜざるを權と爲し、既に融ずれば、權を開して實を顯はすを實と爲す。今の法華は是れ一圓の故に實と爲し、又開權の故に實

【八】已に迹門の十妙を終りて、今更に本門の十妙を明す。卽ち初には大段二章を分ち、而してその第一に本迹を併釋す。本迹を釋するに亦六義に約す、一には理事、二には理教、三には教行、四には體用、五には權實、六には已今なり。これを卽ち六重本迹と稱す。⊠因に迹門の十妙を終りて正に本門の十妙に入らんとする中間に於て、荊溪はその釋籤に所謂る十不二門を建てて、本迹二十妙の大綱たる三千

と爲す。若し圓教に就いて語を爲さば、前の三教三十の麤を照すを權と爲し、十妙を照すを實と爲す。若し開權顯圓に就いて語を爲さば、三十の麤を決して皆妙と成すは、但稱して實と爲す。是故に妙と稱す。若し理を悟るを取らば、理は卽ち非權非實にして一法をも見ず。空拳小兒を誑かして權を說き實を說くは、是れ則ち麤と爲す。理は則ち非權非實なり、是故に妙と爲すなり。

（八）第二に本に約して十妙を明すは二と爲す。先に本迹を釋し、二に十妙を明す。本迹を釋するに六と爲す。本とは理本、卽ち是れ實相一究竟の道なり。迹とは諸法實相を除いて、其餘の種種を皆名けて迹と爲す。又理と事とを皆名けて本と爲し、理を說き事を說くを皆教迹と名く。又理事の教を皆名けて本と爲し、教を稟けて修行するを名けて迹と爲す。人の依處には則ち行跡有り、跡を尋ねて處を得るが如し。又行能く體を證すれば體を本と爲し、體に依りて用を起せば用を迹と爲す。又實得の體用を名けて本と爲し、權施の體用を名けて迹と爲す。又今日顯す所の者を本と爲し、先來已に說く者を迹と爲す。此六義に約して以て本迹を明す。一に理事に約して本迹を明さば、無住の本より一切の法を立す。無住の理は卽ち是れ本時の實相眞諦なり、一切法は卽ち是れ本地森羅の俗諦なり。實相の眞の本に由りて俗の迹を垂れ、俗の迹を尋ねて卽ち眞の本を顯はす。本迹殊なりと雖も不思議一なり。故に文に云はく「一切の法を觀ずるに空如實相なり。但因緣を以て有り、顚倒より生ず」と云云。二に理教に本迹を明さば、卽ち是れ本地所照の二諦は倶に不可說な

三諦の妙理を知らしめ、同時に之を吾人在迷の一念三千に結歸して、以て教門の要諦、觀門の樞要を開闡す。即ち十不二門と稱して世に別行し、四明知禮また之を註釋して十不二門指要鈔と名け古來盛に講學せらる。

るが故に皆本と名くるなり。昔佛方便して之を說くは即ち是れ二諦の教なり、教を名けて迹と爲す。若し二諦の本無くんば則ち二種の教無く、若し教迹無くんば豈諦の本を顯はさん。本迹殊なりと雖も不思議一なり。文に云はく「是法は示すべからず、言辭の相寂滅す。方便力を以ての故に、五比丘の爲に說く」と。三に教行に約して本迹と爲すは、最初に昔佛の教を稟くるを以て本と爲す、則ち修因致果の行有り。教に由つて理を詮じて行を起すことを得、行に由りて教を會して理を顯はすことを得。本迹殊なりと雖も不思議一なり。文に云はく「諸法は本より來常に自ら寂滅の相なり、佛子、道を行じ已つて來世に作佛を得ん」と云云。四に體用に約して本迹を明さば、昔最初に修行して、理に契ふに由りて法身を證するを本と爲す。初め法身の本を得るが故に、體に即して應身の用を起し、應身に由つて法身を顯はすことを得。本迹殊なりと雖も不思議一なり。文に云はく、「吾成佛してより已來、甚大久遠なること斯の如し。但方便を以て衆生を敎化して、此の如きの說を作す」と。五に實權に約して本迹を明さば、實とは最初久遠實得の法應二身を皆名けて本と爲す。中間に數數生を唱へ滅を唱へて、種種權施する法應の二身は、故に名けて迹と爲す。初得の法應の本に非ずんば、則ち中間法應の迹無し。迹に由りて本を顯す、本迹殊なりと雖も不思議一なり。文に云はく、「是れ我方便なり、諸佛も亦然り」と。六に今已に約して本迹を論ぜば、前來の諸教已說の事理、乃至權實は皆是れ迹なり。今の經所說の久遠の事理、乃至權實は皆名けて本と爲す。今明す所の久遠の本に非ずんば、以て已說の

迹を垂るること無く、已說の迹に非ずんば豈今の本を顯さん。本迹殊なりと雖も不思議一なり。文に云はく「諸佛の法は久うして後、要ず當に眞實を說くべし」と。若し已今に約して本迹を論ぜば、已を指して迹と爲し、釋迦寂滅道場より已來の十麤十妙を攝得して、悉く名けて迹と爲す。今を指して本と爲すは總じて遠を攝す、最初本時の諸麤諸妙を皆名けて本と爲すなり。若し權實に約して本迹を明さば、權を指して迹と爲し、別して中間種種の異名の佛の十麤十妙を攝得して、皆名けて權と爲す。實を指して本と爲すは、最初の十麤十妙を攝得して、悉く名けて實と爲す。若し體用に約して本迹を明さば、用を指して迹と爲し、最初の感應、神通、說法、眷屬、利益等の五妙を攝得す。體を指して本と爲すは、最初の三法妙を攝得す。若し教行に約して本迹と爲さば、行を指して迹と爲し、最初の行妙、位妙を攝得す。教を指して本と爲すは、最初本時の智妙を攝得す。若し理教を本迹と爲さば、理を指して本と爲し、本初の境妙を攝得す。教を指して迹と爲し、本時の師の教妙を攝得し、兼ねて本師の十妙をも得。若し理事を本迹と爲さば、事を指して迹と爲し、本時の諸の麤境を攝得す。理を指して本と爲し、本時の諸の妙境を攝得す。最初の本を本と爲すは、但本にして迹に非ず。最後の已說は、但迹にして本に非ず。中間は、亦は迹亦は本なり。若し本地の本無くんば、中間最後の迹を垂得すること能はず。若し已說の迹無くんば、今說の本を顯得すること能はず。本迹殊なりと雖も不思議一なり。

（九）二に本の十妙を明さば、一には本因妙、二には本果妙、三には本國土妙、四には本感應

【九】正しく本門の十妙を明すについて先づその名を列ねて之を釋するに十章を分ち、而してその第一には略して十妙の意を明す。

妙、五には本神通妙、六には本說法妙、七には本眷屬妙、八には本涅槃妙、九には本壽命妙、十には本利益妙なり。此十妙を釋するに又十重と爲す、一には略して十意を釋し、二には生起次第、三には本迹の開合を明し、四には文を引きて證成し、五には廣く解し、六には三世の料簡、七には麤妙を論じ、八には權實を結成し、九には利益、十には觀心なり。

一に略釋とは、本因妙とは本初に菩提心を發し、菩薩の道を行じて修する所の因なり。若し十六王子の、大通佛の時に在りて弘經結緣するは、皆是れ中間の所作にして本因に非ざるなり。若し娑婆を墨と爲し、東に行くこと千界にして方に一點を下し、點不點等盡く抹して塵と爲し、一塵を一劫とし、復是を過ぐること百千萬億那由他劫なり。彌勒補處出假の種智を以て、直に世界を數ふるも尚知ること能はず。況や其塵を數ふるは、寧ぞ當に盡すことを得べけんや。特り是れ如來の巧喩、其長遠の相を顯はす。況や世智を以て巧に算數を歷るをや。文に云はく、「我佛眼を以て、彼久遠を觀るに猶今の如し。唯佛のみ能く此の如きの久遠を知る。皆是れ迹の因にして、本の因に非ざるなり。若し中間の因を留むれば、後に於て信じ難し。是故に法華に迹を拂ひて疑ひを除く、權にして實に非ず。我本菩薩の道を行ずる時とは中間に在らず、是を過ぎて已前の所行の道は、之を名けて本と爲す。即ち是れ本因妙なり。二に本果妙を明さば、本初所行の圓妙の因は、常樂我淨を契得し究竟す、乃ち是れ本果なり。寂滅道場舍那の成佛を取りて本果と爲す。尚中間の果

を取りて以て本果と爲ず。況や舍那の始成は、云何ぞ是れ本ならん。但成佛してより已來、甚大久遠所證の果を取りて本果妙と名く。三に本國土妙とは、本既に果を成ずれば、必ず依國有らん。今既に迹は同居に在り、或は三土に在り。中間も亦四土有り。本佛も亦應に土有るべし。復何れの處にか居するや。文に云はく「是より來、我常に此娑婆世界に在りて說法敎化す」と。按ずるに、此文は實に今日迹中の娑婆に非ず、亦中間權迹の處所に非ず。乃ち是れ本の娑婆、即ち本土妙なり。四に本感應とは、既に已に果を成ずれば、即ち本時所證の二十五三昧、慈悲誓願、機感相關はる有り。能く寂に即して而も照なり、故に本感應と言ふ。五に本神通とは、亦是れ昔時所得の無記化化禪と、本門の時の諸の慈悲と合して、施化の所作の神通を以て、最初に度すべき衆生を駭動す、故に本神通と言ふなり。六に本說法とは、即ち是れ往昔初めて道場に坐し、始めて正覺を成じ、初めて法輪を轉じ、四辯所說の法を本說法と名く。七に本眷屬とは、本時の說法所被の人なり。下方に住する者の彌勒も識らざるが如きは、即ち本の眷屬なり。八に本涅槃とは、本時所證の斷德涅槃なり。亦是れ本時の應の、同居方便の二土に處して、緣有れば既に度し、唱へて滅に入ると言ふは、即ち本涅槃なり。九に本壽命とは、既に入滅を唱ふれば、則ち長短遠近の壽命有り。十に本利益とは、本の業、願、通、應等の眷屬の八番十番に饒益するものは是れなり。

(一〇)二に生起とは、此十種の義は緣に赴きて直說し、散じて經文に在り。今編次せんと欲す、

【四辯】四無礙辯なり。諸菩薩の說法は法、義、辭、樂說の四、無礙なるを云ふ。

【一〇】本門の十妙を釋するに十章を立つる中、第二に生起次第を明す。

【一二】本門の十妙を解するに十章ある中、第三に本迹の開合を明す。

【一三】本門の十妙を釋するに十章を分つ中、第四に經文を引きて證成す。

故に須く生起すべし。本因の初に居する所以は、必ず因に由りて果を致し、果成ずるが故に國有り。極果國に居すれば、即ち機を照すこと有り。機動ずれば則ち化を施す、施化には則ち神通有り。神通竟つて次に爲に法を說く、說法の所被は即ち眷屬を成じ、眷屬已に度し、緣盡きて涅槃す。涅槃するが故に則ち壽命の長短を論ず。長短の壽の作す所の利益、乃至佛滅度の後に正像等の益有り。義は乃ち無量なれども、止十條を作して始終を收束するに、復次第を成ず。

（一二）三に迹本の同異とは、迹の中は因は開して果は合す。習果報果を合して三法妙と爲すなり。本の中は因は合して果は開す、習果を開して報果を出し、本國土妙を明すなり。此同異を作す者は、義の便に依りて互に去取有り。迹の中には委悉に境、智、行、位を明す。本の文は語略して、通じて束ねて因妙と爲す。意を得れば是開合を知らんのみ。果妙は即ち是れ迹の中の三軌妙なり。感應、神通、說法、眷屬は、名は上に同じ。本に涅槃壽命妙を開するは、久遠の諸佛は、燈明迦葉佛等の如く、皆法華に於て即ち涅槃に入る。義を推すに、本佛は必ず是れ淨土淨機ならん。又往時已に成ず、故に涅槃等の妙を開出す。迹の中に此二義無きは、釋迦は法華に于て、唱へて涅槃すと言ふと雖も、而も未だ滅度せず。此事は方に涅槃に在り、故に迹の中には辨ぜず。利益は上に同じ。

（一三）四に文證を引くとは、遠く他經に索めず、亦通じて部內を引かず。但本門に就いて十義を證成す。然るに先佛の法華は、恆河沙阿闍婆の偈の如し。今佛は靈山に八年說法した

まふ、胡本の中の事、復何ぞ窮まるべけんや。眞丹の邊處に止大意を删き、人七卷を見れば謂て小經と爲す。胡文の浩博なる、何の辨ぜざる所かあらん。今數紙の內に就くも十意宛然たり。文に云はく「我本菩薩の道を行ずる時、成ずる所の壽命今猶未だ盡きず」と、即ち是れ本の行因妙なり。文に云はく「我實に成佛してより已來、無量無邊億那由他なり」と、又云はく「我實に成佛してより已來、久遠なること斯の若し。但方便を以て衆生を敎化して、此の如きの說を作す」と。即ち是れ本果妙なり。文に云はく「我娑婆世界に于て三菩提を得已つて、是の諸の菩薩を敎化し示導す」と、又云はく「是より來、我常に此娑婆世界に在りて說法敎化す。亦餘處に於て衆生を導利す」と。此國土は復今時の娑婆に非ず、即ち本國土妙なり。文に云はく「若し衆生有りて我所に來至するに、我佛眼を以て、其信等の諸根の利鈍を觀ず」と。此れ即ち本時照機の智、是れ感應妙なり。文に云はく「如來祕密神通の力」と。又中間の文に云はく「或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す」と。即ち是れ形を十界に垂れて、種種の像を作すなり。驗らむ、本も亦然ることを。是れ本神通妙なり。文に云はく「是の諸の菩薩は悉く是れ我所化なり、大道心を發せしめて今皆不退に住し、我道法を修學す」と。又「中間に或は己事を說き、或は他事を說く」と。驗するに本も亦然り。即ち本說法妙なり。文に云はく「此の諸の菩薩の身は皆金色なり、下方の空中に住す。此等は是れ我子なり、我久遠より來た是等の衆を敎化す」と。即ち本眷屬妙なり。文に云はく「又復其れ涅槃に入ると言ふ、是の如

【三】本門の十妙を釋するに十章ある中、第五に廣く之を解釋す。而して今初には總じて本妙の意を明し、然る後第一の本因妙を論述す。

きは指方便を以て分別す」と。又云はく「今實に滅するに非ずして、而も便ち唱へて當に滅度を取るべしと言ふ。往しの緣既に訖つて唱へて滅に入る。中間に既に涅槃を唱ふ」と。例するに本も亦涅槃行り。即ち本涅槃妙なり。文に云はく「處處に自ら名字の不同、年紀の大小を說く」と。年とは即ち壽命、大小とは即ち長短、常、無常なり。中間既に爾れば、本壽も亦然なり。即ち本壽命妙なり。文に云はく「又方便を以て微妙の法を說き、能く衆生をして歡喜の心を發さしむ」と。即ち中間の利益なり。又云はく「佛の壽命劫數長遠なること是の如しと說くを聞きて、無量無邊阿僧祇の衆生は大饒益を得」と。即ち迹中の益なり。迹と中間と既に爾れば、例するに本も亦然なり。即ち是れ本利益妙なり。十の據は經に在りて、人の造には非ず。

（二三）五に廣く釋せば、夫れ本は以て迹を垂るること無きに非ず、若し能く迹を解すれば、則ち亦本を知る。未解の者の爲に、更に重ねて分別せん。但本極の法身は微妙深遠なり、佛若し說かずんば彌勒も尙闇し。何に況や下地をや、何に況や凡夫をや、然りと雖も、父母の年は知らずんばあるべからず。如來の功德、何ぞ識らざるべけんや。今略して、經の旨に依りて髣髴に推尋す。本因妙とは、經に云はく「我本菩薩の道を行ずる時成ずる所の壽命」とは、慧命は即ち本時の智妙なり。我本行ずとは、行は是れ進趣にして、即ち本行妙なり。菩薩道時といふは、菩薩は是れ因人なれば、復位妙を顯すなり。一句の文に三妙を證成す。三妙は即ち本時の因妙なり、迹の因には非ず。迹の因は多種なり。或は言はく、

昔陶師と爲つて先の釋迦佛に値ひたてまつり、三事を供養す。藉草と然燈と石蜜漿なり。口を發いて記を得るに、父母の名字、弟子侍人も皆先佛の如し。即ち是れ初阿僧祇の發心なり。既に斷惑を明さず、知んぬ、是れ三藏の行因の相なることを。或は言はく、「昔摩納と爲りて然燈佛に値ひ、五華を奉散し、髮を布いて泥を掩ひ、身を虛空に踊らして無生忍を得たり。佛授記を與へて釋迦文と號す」と。大品に亦云はく、「華嚴城の內に記を得」と。義此と同じ。幷に斷惑を云ふ、故に知んぬ、通佛の行因の相なることを。或は言はく、「昔寶海梵志と爲つて、刪提嵐國寶藏佛の所にして大精進を行じ、十方の佛に華を送つて供養す」と。既に寶藏佛の父たり、又是れ彌陀の師なり、其功德を稱するに不可思議なり。故に知んぬ、是れ別圓の行因の相なることを。三義を以ての故に、此諸の因は悉く是れ迹の因なることを知る。一には近の故に、二には淺深同じからざるが故に、三には拂はるるが故なり。今世已前、本成已後、中間の行行は悉く是れ方便なり。故に知んぬ、是れ迹の因なることを。若し迹の因を執して本因と爲すは、斯れ迹を知らず、亦本をも識らざるなり。天月を識らずして、但池月の若は光、若は桂、若は輪を觀るが如し。下に準じて上を知る、光は智妙を譬へ、桂は行妙を譬へ、輪は位妙を譬ふ。若し迹の中の三妙を識りて、迹を拂ひ本を顯はさば、即ち本地の因妙影を撥つて天を指すが如くなることを知らん。云何ぞ盆に臨んで而も漢を仰がざらん。嗚呼聾騃は若爲ぞ道を論ぜんや。若し斯意を得れば迹の本は本に非ず、本の迹は迹に非ず、本迹殊なりと雖も不思議一なり。問ふ、

【一四】第二に本果妙を明す。

【世間、出世間】世間とは遷流の義一切生死の法なり出世間とは涅槃の法を云ふ。

『經に本行菩薩道時と稱するは、初住に眞道を得る時に在るべし。中間は應に是れ諸地の增道損生なるべし。今の寂場は應に是れ妙覺なるべし。妙覺(に對して)本を顯すに、應に昔の初住を指して云ふなるべし。此一途を允と爲んや。』答ふ、『文義不可なり。文に云はく、「盡く諸佛所有の道法を行ず」と。又云はく、「具足して諸道を行ず」と。悉く具足するの因は乃ち是れ本因なり。初住は悉具と稱することを得ず、故に指す所の本因に非ざるなり。又中間の果は悉く是れ權なりと拂ふ、況や今の寂場の果何ぞ實と爲すことを得ん。又中間の果も尙拂はる、中間の因寧ぞ實因ならんや。故に爾問ふは非なり。

（一四）二に本果妙を明さば、經に我成佛してより已來甚大久遠なりと言ふ。我とは即ち眞性軌なり、佛とは覺の義、即ち觀照軌なり。已來とは如實の道に乘じ、來りて正覺を成ず、即ち是れ應を起す資成軌なり。此の如きの三軌は成じ來ること已に久し、即ち本果妙なり。本果圓滿して久しく昔に在り、今の迹成に非ず。迹成は又一種に非ず。或は言はく、「道樹草座に三十四心に見思倶に斷じ、朗然として大悟し、世間出世間一切の諸法を覺知する、之を名けて佛と爲す。唯此佛のみ有りて十方の佛無し。三世の佛は悉く是れ他佛なり、我分身に非ず」と。此れ即ち三藏の佛果の相なり。或は言はく、「道樹に天衣を座と爲し、一念相應の慧を以て、餘殘の習氣を斷じて成佛することを得」と。大品の中に、共般若を說く時十方に千佛有つて現じ、問難する人を皆須菩提、釋提桓因等と字く。亦是れ他佛にして我分身に非ず。此れ即ち通佛果成の相なり。或は言はく、「寂滅道場に七寶

華を座と爲し、身、華臺に稱ひ、千葉の上の一一の菩薩に復百億の菩薩有り、是の如くして則ち千百億の菩薩有り。十方に白毫、及び分身光を放つ。白毫は華臺の菩薩の頂に入り、分身の光は、華葉の菩薩の頂に入る。此を法王の職位を受くと名け、諸佛の法底を窮め得て成佛することを得。華臺を報佛と名け、華葉の上を應佛と名くるも、報と應とは但是れ相關はるのみ、相卽することを得ず」と。此は是れ別佛果成の相なり。或は言はく、「道場に虛空を以て座と爲し、一成一切成なり。毘盧遮那は一切處に遍じ、舍那釋迦の成も亦一切處に遍ず。三佛具足して缺減有ること無く、三佛相卽して一異有ること無し法華に、八方一一の方に、各各四百萬億那由他の國土に安置する釋迦悉く是れ遮那なり」と。普賢觀に云はく「釋迦牟尼を毘盧遮那と名く」と。此れ卽ち圓佛果成の相なり。三義有るが故に、知んぬ、此諸の果は皆是れ迹果なることを。一には今世に始めて成ずるが故に、二には淺深不同なるが故に、三には中間を拂ふが故なり。若し是れ本果ならば、何ぞ今日始めて成ずることを得ん。本果は一果一切果なり、何ぞ前後差別して不同なることを得ん。今世より前、本成の後の百千萬億の行因得果、生を唱へ滅を唱ふるは悉く是れ中間なれば、拂つて方便と爲す。寂滅樹王も何ぞ迹に非ざることを得ん。若し迹果を執して本果と爲すは、斯れ迹を知らず、亦本をも識らざるなり。本より迹を垂るるは月の水に現ずるが如く、迹を拂つて本を顯すは、影を撥ひて天を指すが如し。當に始成の果は皆迹果なりと撥して、久成の果は是れ本果なりと指すべし。此の如く解せば、中間の果の疑ひ

【一五】第三に本國土妙を釋す。

颯然として皆盡き、長遠の信は其義明かなり焉。迹の本は本に非ず、本の迹は迹に非ず、迹本殊なりと雖も不思議一なり。

(一五)三に本國土妙とは、經に云はく「是より來、我常に此娑婆世界に在つて說法教化し、亦餘處に於ても衆生を導利す」と。娑婆とは即ち本時の同居土なり。餘處とは即ち本時の三土なり。此れ本時の眞應所栖の土を指す、迹中の土には非ざるなり。迹の中に土を明すこと、又一途に非ず。或は言はく「此三千百億の日月を統ぶるとは同居の穢土なり」と。或は言はく「西方に土有り、名を無勝と曰ふ。其土所有の莊嚴の事は猶安養の如し」とは、同居の淨土なり。或は言はく「華王世界蓮華藏海」と、是れ實報土なり。或は言はく「其佛の住處を常寂光と名く」と、即ち究竟の土なり。寂光は理通ず、鏡の如く器の如し。諸土の別異は像の如く質の如し。業力の隔つる所、感見不同なり、淨名に云はく「我佛土は淨うして汝に見えず」と、此れ乃ち衆生の感見差別して、佛土に關はらざるなり。若し今此三界は皆是れ我有なりと言ふは、諸土の淨穢、調伏、攝受は皆佛の所爲なり。譬へば百姓は土に居すれども、土は其有に非ざるが如く、父舍を立つるに、父去れども舍存るが如し。如來も亦爾り、衆生の爲の故に佛土を取り、化訖り滅に入りて佛去れども土は存す。此れ乃ち佛の土にして衆生に關はらざるなり。復次に三變土田とは、或は是れ同土の穢を變じて同居の淨を見せしめ、或は方便有餘の淨を見せしむ。例せば壽量に云ふが如し、若し深信解の者有りて、佛常に耆闍崛山に在して、大菩薩聲聞衆僧と共なりと見る者

【一六】第四に本感應妙を明す。

是れなり。或は實報の淨と見る、例せば、娑婆國土は皆紺琉璃にして、純ら諸菩薩のみありと見るが如きは、即ち其義なり。或は寂光と見る等なり。法華三昧の力、見をして不同ならしむるのみ。三義有るが故に。前の土は悉く迹土なりと知ることを得。一には今佛の所棲の故に、二には前後修立の故に、三には中間は攝はるるが故なり。若し是れ本土は今佛の所栖に非ず、今佛の所栖は即ち迹土なり。若し是れ本土は一土一切土なり。前後修立し深淺不同なるべからず。今土より已前、本土已後を皆中間と名け、中間を悉く方便と稱す。況や今の土寧ぞ迹に非ざることを得んや。本より迹を垂れ、迹を攝して本と爲すは、此れ迹を知らず、亦本をも識らざるなり。今迹を拂つて本を指す、本時所栖の四土は是れ本國土妙なり。迹の本は本に非ず。本の迹は迹に非ず。迹に非ず本に非ざれば、即ち不思議一なり。

（一六）四に本感應妙とは、經に云はく「若し衆生有りて我所に來至するに、我佛眼を以て、其信等の諸根の利鈍を觀ず」と。衆生來至とは法身を感扣するなり。我以佛眼觀とは、慈悲往いて應ずるなり。諸根利鈍とは、十法界の冥顯欣厭の不同なり。此れ本時に二十五三昧を證する感應を指す、迹中の感應には非ず。迹の應に多種有り、或は言はく「一日三時に定に入りて、度すべきの機を觀ず」と、此れ三藏の佛、分段穢國の九法界の機を照す析空の感應なり。或は言はく「俗に即して而も眞なれば、入出を須ひずして任運に能く知る」と。此れ通佛の、分段淨國の九法界の機を照す體空の感應なり。或は言はく「王三昧を用

【一七】第五に本神通妙を明す。

ひて歷別に十法界の機を照す」と。此れ別佛の、方便有餘土を照す次第の感應なり。或は言はく「王三昧一時に十法界の機を照す」と。此れ圓佛の、十法界寂光土の機を照す圓の感應なり。三義有るが故に、諸の感應は迹にして本に非ざることを知る。始成の故に、不同の故に、拂はるるが故なり。寂場樹下に始めて遍圓滿す、故に知んぬ、是れ迹なり。或は前に修し後に學し、深淺同じからず。故に知んぬ、是れ權なり。中間已來は皆方便として拂はる、寧ぞ迹に非ざらんや。本より迹を出だす、豈迹を執して本と爲すべけんや。迹を拂つて本を顯す、宜しく迹を捨てて本を指すべし。本の迹、迹の本なれば、不思議一なり云云。復次に、或は本の感は麤、迹の感は妙なり。或は本の感は妙にして、迹の感は麤なり。俱に妙、俱に麤なり。應も亦是の如し。又本の感は廣にして、迹の感は狹なり。或は迹の感は廣にして本の感は狹なり。俱に狹、俱に廣なり。應も亦是の如し。但今昔を取りて本迹を判じ、麤妙廣狹に約せず云云。

【一七】五に本神通妙とは、經に言はく「如來祕密神通の力」と。又云はく「或は已身他身を示し、已事他事を示す」と。已身已事を示すは圓の神通なり、他身他事を示すは偏の神通なり。祕密とは妙なり。若は偏、若は圓、皆是れ妙なり。此れ本時の神通を指す、迹の神通に非ざるなり。迹の通は多種あり。或は言はく「背、捨、除入、十四變化に依りて六通を獲得す、外道に過ぎ二乘に勝る」と。此れ乃ち三藏の佛の通なり。或は言はく、「體法無漏の慧に依りて六通を獲得し、背捨に依る者に勝る」と。此れ通佛の神力なり。或は言はく、

【一八】第六に本說法妙を解釋す。

「前の六通を束ねて五と爲し、中道に依りて無漏通を發す」と。此六は是れ別佛の通なり。或は言はく、「中道無記化化禪に六通一切の變化を具し、滅定を起たずして諸の威儀を現じ、語默相妨げず、動寂二理無し」と。又今經の中の六瑞の變土等の如きは、皆是れ圓の佛の通なり。三義を以ての故に、諸の神通を推すに迹にして本に非ず。始めて得、近く修し、疑ひを拂ふ等なり。上に說くが如し。又四句の料簡も亦上の如し。然るに本より迹を垂る、迹は則ち本に非ず。迹を拂ひて本を顯す、宜しく迹を棄てて本を指すべし。本の迹、迹の本なれば不思議一なり。

（一八）六に本說法妙とは、經に言はく、「此等は我所化なり、大道心を發さしめ今皆不退に住す」と。我所化とは正しく是れ說法なり、令發大道心とは小の說に非ざるを簡ぶ。此は本時の簡說を指す、迹の說には非ず。迹の說は多種あり。若し涅槃に依らば、初後の兩味は牛より出づることを明す。若し義を以て推せば、中間の三味も亦應に牛より出づべし。何となれば、凡犢は凡草を噉つて但能く乳を出し、忍草を噉はざる故に四味を出さず。良犢は調善にして高ならず濕ならず。酒糟麥麩五味圓滿し、具足して牛に在り。但飲隨に聽し搾るに隨つて出づ。若し凡草を噉はば搾るに即ち乳を出し、下忍草を噉はば搾るに即ち酪を出し、中忍草を噉はば搾るに生蘇を出し、上忍草を噉はば搾るに熟蘇を出し、上上忍草を噉はば搾るに醍醐を出す。若し牛より五味を出すは漸法を譬ふるなり。牛より醍醐を出すは頓法を譬ふるなり。牛より三味を出すは不定法を譬ふるなり。佛も亦是の如し、偏

圓滿足して佛の心中に在り、機の扣擊を聽さば說則ち同じからず。善趣の機擊たば人天の法輪を出し、析法の機擊たば二乘の法輪を出し、體法の機擊たば巧度の法輪を出し、歷別の機擊たば漸次の法輪を出し、圓頓の機擊たば無作の法輪を出す。又兩機擊たば第四第五味を出し、又一機擊たば第二味を出し、又四機擊たば四味を出して第一味を除き、又三機擊たば三味を出して第一第二の味を除き、又一機擊たば第五味を出して四味を除く。復次に三藏の道場所得の法は、乳の牛に在るが如し、道場を起つて卽ち乳の法輪を說く。通佛の道場所得の法は、酪の牛に在るが如し、道場を起つて卽ち酪の法輪を說く。別佛の道場所得の法は、五味俱に牛に在るが如し、道場より起つて次第の五味の法輪を說く。圓佛の道場所得の法は、醍醐の牛に在るが如し、道場より起つて卽ち醍醐の法輪を說く。問ふ、『大經に云はく、「乳味を食ひて更に所須無きが如し」と。應に是れ乳の法輪なるべしや。』答ふ、『乳に多種有り。驢牛の出す乳は、乳則ち害を爲す。善牛の乳は、是乳最も良し。』問ふ、『乳既に多種なれば醍醐も一ならざるや。』答ふ、『經に、羅漢と支佛を以て醍醐と爲す。故に知んぬ、優劣あることを。此中大に義有り、宜しく之を熟思すべし。三藏に對して往きて之を望むに、上の醍醐の說法は迹にして本に非ず。始めて滿じ、始めて說き、中間にして擁はるればなり。中間に滿じ、中間に說くは尙指方便なり。況や今滿じ、今說くは、寧ぞ迹に非ざらんや。迹を執すれば則ち俱に失し、迹を拂はば則ち俱に解す。迹に非ず、本に非ず、不思議一なり。復次に已說を迹と爲し、今說を本と爲す。已は

本、今は迹、倶に迹、倶に本なり云云。或は實本權迹の四句あり云云。體用乃至は事理の四句あり云云。

妙法蓮華經玄義卷第七上

妙法蓮華經玄義　卷第七下

天台智者大師の説

【一】本門の十妙を明す中、第七に本眷屬妙を釋す。

（一）七に本眷屬妙とは、經に云はく、「此の諸の菩薩は、下方の空中に住す。此等は是れ我が子、我は則ち是れ父なり」と。下方とは、下を名けて底と爲す。大品に諸法底三昧有り。釋論に云はく、「智度の大道は佛底を窮む」と。當に知るべし、此の諸の菩薩は佛に隣りて、智度の底を窮むることを。虛空とは、法性虛空の寂光なり。本時の寂光の空中より、今時の寂光の空中を出す。今時の寂光の空中の者は、本時の者を識らず。故に云はく、「我諸國に經遊して乃ち一人をも識らず」と。地涌千界は皆是れ本時の應眷屬なり。三無き所以は、時節既に久しければ、權轉じて實と爲れば但一にして二無し。或は一を擧げて、例して三有ることを知るべきなり。本より迹を垂る、迹の中に始めて成佛する時、亦業、願、通、應有り。中間の所化も亦四種有り。文殊觀音調達等を、或は稱して師と爲し、或は弟子と稱するは、惑ふ者に於ては未だ了ぜず。若し中間を拂はば、是れ迹に非ざること無し。則ち迹本は解すべし。若し迹を執して本を疑はば、二義俱に失す云云。問ふ、『迹本相望むるに千界の塵は則ち少く、增道の數は則ち多し。本迹の法身は淺深異なるや。』答ふ、『法身は先に滿じて增無く減無し、化緣に約するに廣狹なるのみ。』問ふ、『若し爾らば

【二】本門十妙の中、第八に本涅槃妙を明す。

初住、二住は化緣に多少あり、法身も亦應に淺深無かるべけんや。』答ふ、「菩薩は位未だ窮まらざれば、實證に約して淺深を判ず。佛は位已に滿ずれば、但權化に約するに、四句有りて廣狹を論ず云云。』問ふ、『因果等を明すに、皆迹佛に約して本を指す。眷屬を明すに、本を召して迹に到るは何ぞや。』答ふ、「因果等の法は幽微にして曉らめ難し、故に此に約して彼を指す。眷屬は是れ人なれば、召して證するに易しと爲す。或は本人を將つて迹人を示すべく、或は迹の法を將つて本の法を顯はす、互に現ずる意なるのみ。

(二)八に本涅槃妙とは、經に又復言はく「其涅槃に入るは、實の滅度に非ずして、便ち唱へて當に滅度を取るべしと言ふ」と。非實滅度とは常住本寂なり、唱言滅度とは衆生を調伏するなり。悉く本時の涅槃にして、迹の涅槃に非ず。迹とは大經に明さく、聲光の集まる所は、諸の弟子に始まり、蝮蠆に終る。無邊身の菩薩弟子の位は、身量無邊なり。豈大師に倚臥背痛有らんや。此れ乃ち生身に病を示し滅を示す、法身は疾無く常に不變を存す。或は析空の因滅し果亡ずるを取りて、有餘、無餘の涅槃を明す。或は體法の空の因滅し果亡ずるを取りて、有餘、無餘の涅槃を明す。生身の迹滅すとは、阿含の中の如し。結業の身は父母の所生なり。國を棄て王を捐てて六年苦行し、三十四心に結を斷じて成道す。八十二歳の老比丘の身、純陀舍に詣り、鉢を持して食を乞ひ、檀耳の羹を食し、食し訖りて說法す。果報の壽命、中夜にして盡きて無餘涅槃に入り、火を以て闍毘し舍利を收取するは、此れ三藏の涅槃の相なり。若し釋論に云はく、「六地の菩薩は見思已に盡し、

【無餘涅槃】煩惱と報質と倶に滅盡して餘す所なきをいふ。

七地より去つては誓ひて餘習を扶けて生死の身を受く。乃至上生下降し、一念相應の慧を以て、習を斷じて成佛す。度すべき衆生の緣盡くれば、化を息めて無餘涅槃に入る」と。此れ通佛の涅槃の相なり。若し地人の云はく「緣修は眞修を顯し、菩提の果滿じて大涅槃を成ず、亦稱して方便淨涅槃と爲す」と。大經に云はく「是色を滅するに因りて常色を獲得す。受と、想と、行と、識も亦復是の如し。是を色解脫、受想行識解脫と名く。乃ち是れ分段變易の因盡きて、常住の有餘涅槃を獲るなり。兩處の陰果の身盡きて常住の無餘涅槃を獲るなり」と。此と前と異なり、是れ別佛の涅槃の相なり。大經に云はく「大般涅槃は常住不變にして、能く種種の示現を建て衆生を調伏す」と。首楞嚴に廣く說くが如し。大涅槃を、常樂我淨と名く。此れ前と異れり、即ち圓の涅槃の相なり。經に曰はく「今日座中の無央數の衆は、各見るところ不同なり。或は如來は涅槃に入ると見る。或は如來の世に住すること一劫、減一劫なりと見る。或は如來の世に住すること、無量劫なりと見る。或は丈六の身と見、或は小身大身と見る。或は報身、蓮華藏世界海に坐して、百千億の釋迦牟尼佛の爲に心地法門を說くと見る。或は法身の虛空に同じくして分別有ること無く、無相無礙にして徧く法界虛空に同なりと見る。或は此處は娑羅樹林にして、悉く是れ土砂草木石壁なりと見る。或は此處は金銀七寶、淸淨莊嚴なりと見る。或は此處は三世の諸佛所遊の處なりと見る。或は此處は即ち是れ不可思議諸佛の境界、眞實の法體なりと見るなり」と。此れ佛身依正に各各四の相有るを明す、即ち前の四涅槃の相なり。大

【三】本門十妙の中、第九に本壽命妙を明す。

經と此經と義同じ。大經は常住を以て宗と爲す。迦葉初に長壽を問ふに、佛の答の中、處處に多く未來の常住を顯し、少しく先成の壽命を明す。法華に已に說くが爲の故に、彼經は一兩處に說くと雖も、判じて近成の短命と爲すべからず。今の經は正しく發迹顯本を明す。無量壽命を宗と爲し、少しく未來の常住を說く。一兩處に少しく說くと雖も、判じて無常と爲すべからず。二經互に擧ぐ。利根は本常と知れば未來も亦常なり。未來の長壽を解し、亦本從の長壽を解す。其義是れ同じ。又此經に、數數生を現じ滅を現ずとは、生も實の生に非ず、滅も實の滅に非ず、常住の義顯かなり。又二萬燈明迦葉は皆涅槃を說かず、祇法華に於て本常未來常を明す。彌彌法華に常を明すの義顯るることを見るなり云云。三義を以ての故に、諸の涅槃は迹にして本に非ざることを知る。今始めて入るが故に、入りて復出づるが故に、中間を拂ふが故なり。此迹の涅槃は皆本より垂る、云何ぞ迹を執して、謂つて是れ本なりと言はん、是れ迹の本を識らざるなり。若し迹を拂ひ本を顯さば、則ち二義に迷はず。迹に非ず本に非ず、不思議一なり。

(三)九に本壽命妙とは、上の因妙の中に智慧を以て命と爲す、此れ則ち長に非ず短に非ず。非長非短の慧命に由つて能く長短と爲る。此中は正しく長短の壽命を明す。經に、「處處に自ら名字の不同、年紀の大小を說く」と。年紀とは是れ壽命なり、大小とは長短なり。經に、中間處處年紀大小とは、迹に約して而も遙かに本を指す。迹の不同とは、三藏の佛の父母の生身は、八十二にして盡き、身灰し智滅して畢竟生せず。通教の佛の接頭の身は、化

【四】本門十妙の中、第十に本利益妙を釋す。

【五】本門の十妙を釋するに十章を分つ中、第六には三世に約して料簡す。即ち先づ初に略して立し、次に十五番に問答す。

緣著し訖れば亦灰斷に歸し、滅し已りて生ぜず。此兩佛は但業に齊り緣に齊つて、非長非短の慧命を得ず。長と作り短となり、大小の壽命なること能はず。別教は登地に無明を破して、如來の一身無量身を得。一身湛然として安住し、無量身は百界に作佛し、亦九界の身を示し、亦年紀の大小を論ずることを得。大は即ち大乘の常の壽、小は即ち小乘の無常の壽なり。圓教の登住の時も亦是の如し。此等は皆因中の菩薩なれども、常に非ず無常に非ずして、能く常無常大小の壽と作る。況や後心をや、況や妙覺をや。此の如き等の壽は三義あれば、皆迹中因果の壽なり。此壽は皆本地の因果圓滿なるに從つて而も此迹を垂る。迹既に此の如し、況や復本をや。經に「我本菩薩の道を行ずる時、成ずる所の壽命、今猶未だ盡きず」とは、本因を指す。因の壽尚未だ盡きず、況や本果の壽をや。若し迹を執せば則ち本を知らず。今迹を拂へば則ち本を識る。亦不思議一なることをも識るなり。

(四)十に本利益妙を釋せば、文に云はく「皆歡喜を得せしむ」と。歡喜とは即ち利益の相なり。若し迹中の三乘、共の十地、別の十地、開權顯實、接位妙、入位妙、是の如き等の益、乃至壽命を開きて增道損生するは、皆是れ迹の中の益なり。乃至中間の權實の益も、亦是れ迹の益なり。迹を以て本に望むるに、本も亦應に偏圓の利益有るべし。下方の菩薩の皆虛空に住する所以は、皆寂光に居すればなり、(是れ)本の益なり。故に本の本は以て迹を垂れ、迹を借りて以て本を知る。復具に記せざるなり。

(五)第六に三世に約して料簡せば、文に云はく「如來の自在神通の力、如來の大勢威猛の力、

【三三顯一】三乘は各異なるものなりとの謬見を除き去りて三乘そのままに一乘なりと顯示すること。

如來の師子奮迅の力」と。即ち是れは世尊施權の文なり。若し過去の最初に證する所の眞實の法を、名けて本と爲す。本證より已後方便して他を化し、開三顯一、發迹顯本するは、還つて最初を指して本と爲す。中間の示現、發迹顯本するも、亦最初を指して本と爲す。今日の發迹顯本も、亦最初を指して本と爲す。未來の發本顯迹も、亦最初を指して本と爲す。三世は乃ち殊なれども、毘盧遮那の一本は異なるに不ず。百千の枝葉、同じく一根に趣くが如し云云。問ふ、「現見の無量の佛は悉く是れ釋迦の分身なり。餘佛に復分身有るべしとせんや不や。」答ふ、「普賢觀に云はく、『東方に佛あり、名けて善德と曰ふ。彼佛に亦分身の諸佛有り』と。若し爾らば、亦諸佛有り、諸佛に亦分身有らん。又神力品に云はく、『彈指と謦欬と、是二の音聲、徧く十方諸佛の世界に至る。彼佛の四衆遙に供養を伸べ、散ずる所の諸物十方より來る。譬へば雲集の如くにして、徧く此間の諸佛の上に覆ふ』と。故に知んぬ、諸佛有り、諸佛に亦分身有ることを。」問ふ、「三世の諸佛に皆分身あらば、云何ぞ復多寶如來は全身散せず、禪定に入るが如しと言ふや。若し全身散ぜずんば、云何ぞ復十方に遊び、法華經を證すと言ふや。(此)二意云何が通ぜん。」答ふ、「釋論に念佛を解する中に云はく、『多寶は人の說法を請ずること無ければ便ち涅槃に入り、後佛身及び七寶の塔を化して法華經を證す』と。若し論の釋に從はば、乃ち是れ全身を化作す、全身無きに非ざるなり。師の云はく、若し說法することを得ずと言はば、那ぞ四衆に、我滅後に、一大塔を起てよと告げん。都て說法せざるに非ず、應に是れ法華を說かざ

るなるべし。故に大誓願を發して、生身の骨を碎かず、全身散ぜずして、出でて圓經を證す。如入禪定とは不滅を表し、出でて常經を證するは偏ならざるを表す。不偏不滅にして圓常の義顯はる。口に眞淨の大法を唱ふるは、眞は是れ常なり。略して（淨常の）二德を擧ぐ、我と樂は知んぬべし。鈍者は文を讀んで猶自ら覺らざるなり。』問ふ、『三世の諸佛皆本を顯はさば、最初の實成は若爲が本を顯はさん。』答ふ、『必ずしも皆本を顯はさず。今、有の義を作さば、最初の妙覺は初住を指して本と爲す。若し初住に加を被りて妙覺と作るも、亦初住を指して本と爲す。初住の前は竪に指す所無きも、横に體用有れば、卽ち體を指すに、豈本に非ずや。又願を發する故に壽の長遠を說くは、文の如し云云。又解す、最初の佛は長遠、已今、權實等の本迹の顯はすべき無しと雖も、而も體用、敎、行、理敎、事理等の本迹の顯はすべき有り云云。若し無の義を作さば、若し最初始成の佛は既に始めて本を得て、未だ迹を垂ることを論ぜざれば、久迹の發すべき無く、久本の顯はすべき無し云云。若し久成の佛は釋迦の佛の如く、東方を以て譬と爲す。若し此より久しき者は、卽ち四方を以て譬と爲す。又久しき者は十方を譬と爲す。若し此より近き者は則ち東方を滅じて譬と爲し、若し都て無き者は則ち譬ふる所無し云云。』問ふ、『若し實の初成に、久本の顯はすべき無くんば、云何が經に、是れ我方便なり、諸佛も亦然りと言ふや。』答ふ、『長久の本無しと雖も、若し方便を用ふべくんば、佛に延促劫智有りて、能く七日を演べて無量劫の義と爲す云云。』問ふ、『佛に若し久成と始成と有り、發迹と不發迹と有ら

ば、亦應に開三顯一、不開三不顯一有るべきや。」答ふ、「若し菩薩と聲聞を共じて僧と爲さば、則ち開三顯一有り。若し純ら菩薩をのみ僧と爲さば、何ぞ開顯を須ゐんや。」問ふ、「若し三を開し一を顯はさずんば、五佛の章は云何。」答ふ、「同じく是れ聲聞、菩薩を共じて僧と爲す。五濁の世に出づるは此の如くなるべし。淨土に出づる佛は則ち然らず。」問ふ、「十雙を破して十妙を顯はさば、則ち無明の惑盡き、一實の理彰はる。今更に迹の妙を破して麤と爲し、本を顯はして妙と爲す。何の惑を破して何の理をか顯はすや。」答ふ、「無明の重數甚だ多し、實相の海深きこと無量なり。此の如く破顯するに答無し』又問ふ、「若し爾らば還つて妙を以て妙を破す。所破の妙は妙にして而も更に麤なり。亦還つて麤を以て麤を破す、所破の麤は破するに更に是れ妙なるべし。所破の四住も例して亦妙なるべしや。」答ふ、「麤に就いて義を明さば、祇四住は即ち是れ妙に於てす。況や四住を破するの智は、寧ぞ妙に非ざらんや。」又問ふ、「若し爾らば但頓の義有りて、漸の義は無かるべしや。」答ふ、「若し漸頓を分たば、漸の能所は倶に麤、頓の能所は倶に妙なり云云』問ふ、「中間に偏圓權實有れども、而も同じく是れ權と稱すれば、亦應に同じく稱して偏と爲すべきや。」答ふ、「通の義は則ち爾り、別の義は然らず。偏圓は法に約す、法は則ち已に定まる、故に偏は圓に非ず、圓は偏に非ず。權實は教に約す、迹中の施設は同じく皆是れ假なり、故に假に就いて權を論ずるのみ。」問ふ、『既に麤を帶するの妙有り、復麤を帶せざるの妙有り。亦應に妙を帶するの麤、妙を帶せざるの麤有るべきや。」答ふ、「此に

【七八】本門の十妙を釋するに十章を立つる中、第七には麤妙を判ず。

四句あるべし。麤を帶するの妙は即ち別教なり、麤を帶せざるの妙は即ち圓教なり、妙を帶するの麤は即ち通教なり、妙を帶せざるの麤は即ち三藏なり。又麤を帶するの妙は通の如く、麤を帶せざるの妙は圓の如く、亦は麤を帶し亦は麤を帶せざるは別の如く、帶に非ず不帶に非ざるは圓接別の如く、圓、別接通の如し。又五味に約せば、麤の妙を帶せざるは酪の如く、妙の麤を帶せざるは醍醐の如く、亦は麤を帶し亦は麤を帶せざるは、生、熟蘇の如く、麤を帶するに非ず、麤を帶せざるに非ざるは乳の如し云云。」問ふ、「二麤既に同じからず、那ぞ忽に同じく呼んで麤と爲るや。」答ふ、「事に淺深有るが故に二と爲し、倶に妙理に非ざるが故に同じく是れ麤なり。」問ふ、「應に方便を帶するの實、方便を帶せざるの實あるべきや。」答ふ、『例せよ。』問ふ、「亦應に二を帶するの一あり、二を帶せざるの一あるべきや。」答ふ、『例せよ。通じて論ずれば、本迹は秖是れ權實なり。別して論ずれば、高下は宜しく本迹を用ふべし。横に眞僞を論ずれば、宜しく權實を用ふべし。本迹は身に約し、位に約す。權實は智に約し、教に約す云云。」問ふ、「本地の十妙は、六重本迹に約せば何れにか攝屬せんや。」答ふ、「已今に非ず、中間に非ず。乃ち是れ體用、教行、理教等に、共に十妙を論ずるなり。」

第七に麤妙を判せば、若し迹中已得の十妙を麤と爲し、十妙を妙と爲す。本門の十妙を麤と爲し、十を開して妙と成す。具には前に說くが如し。迹中の若は麤に待して妙なるも、若は麤を開して妙なるも、此妙は本の妙に異ならず。而して始得と言へば、始得を麤と爲

【七】本門の十妙を解釋するに十章を分つ中、第八に權實を結成す。

す。本の中先に成ずるところの、若は麤、若は妙、若は開麤妙も、亦迹の妙に異ならず。而も是れ先得なり、先得を妙と稱す。又迹中の事理の始めて得るを麤と爲し、本中の事理の先に得るを妙と爲す。迹中の理教、教行、體用、權實等も亦是の如し。又若し未だ發迹顯本せずんば、但迹中の事理の麤妙を解して、終に本中の事麤を解すること能はず。況や本中の理妙を解せんや。彌勒も尚達せず、何に況や餘人をや。若し迹中の事理を發すれば、卽ち本中の事理を顯はし、亦本中の事理に由つて能く迹中の事理を垂ることを知る。迹は旣に本に由る、卽ち本は妙、迹は麤なり。卽に本迹の殊り有り、故に麤妙を言ふ。妙理は則ち迹に非ず本に非ずして、不思議一なり。教理、教行、體用、權實、已今等も亦是の如し。

(七)第八に權實を明さば、迹中の十麤の境を照すを權と爲し、迹中の十妙の境を照すを實と爲す。乃至中間三世に照す所の十麤の境を權と爲し、十妙の境を實と爲す。若は權、若は實、悉く皆是れ迹なり、迹の故に權と稱す。是の如きの中間に、無量無量不可說節節の權實あり。餘經は尚中間一番の權すら無し、況や一番の實をや。尚中間一番の權實すら無し、況や無量番をや。尚中間の權實すら無し、況や本地の權實あらんや。中間の權實を皆名けて權と爲し、本初に十麤十妙を照すを皆名けて實と爲す。迹の權、本の實は俱に不思議にして、不思議は卽ち是れ法性なり。法性の理は古に非ず今に非ず、本に非ず迹に非ず、權に非ず實に非ず。但此法性に約して、本迹、權實、麤妙を論ずるのみ。但世俗の文字に去

【隨他意語】隨自意語に對す。即ち他の意にかなふやうに酬酌して說くことなり。或は隨他意說、隨他意教ともいふ。

【八】本門の十妙を釋するに十章を立つる中、第九に利益を明す。

來今あるを以て、菩提に去來今ありと謂ふには非ざるなり。復次に權實を分別すれば則ち三種有り、自行と化他と自行化他とを謂ふ、具には境妙の中に說くが如し。本地の自行所契の權實二智を、佛の自行の權實と名く。本より已來、乃至鹿苑に於ける種種の方便は隨他意語にして、此二智を說きて廻轉して無方なるを、佛の化他の權實二智と名く。化他に二種有りと雖も皆名けて權と爲し、自行に二種ありと雖も皆名けて實と爲す。是を自行化他合して權實を說くと名く。復次に迹の中に、實に約して權を施すは意實に在り、而して實の意は測り難し。何となれば、化城は是れ權なれども、而も人は實の解を作す。是れ權を識らず、亦實を知らざるなり。若し權を廢して實を顯はすは、意權に在り。權は則ち測り易し。何となれば、既に化城の一事は是れ佛の權施なりと知れば、則ち徧く恒沙の佛法に達し、遠く久劫の方便に通ず。故に華嚴の中に明す、阿鞞跋致の爲に多く事數を明すとは、即ち其義なり。若し權を開して實を顯はすは、事法に達し已れば、權意即ち息む。亦權を離れて遠く實を求めず。權即ち是れ實なれば復別の權無し、故に開權顯實と言ふなり。迹の中既に三意有ること此の如し。迹は本に由つて垂る、本も亦是の如し。本迹殊なりと雖も不思議一なり云云。

〔八〕第九に利益とは、前は生身の益を明し、次に法身の益を明す。生身は兩處に益を得、迹門に會三歸一し開權顯實するに、生身の菩薩利益を得るは十妙の中に於て五妙の益を得るなり。何となれば、境妙は則ち通じて一切具に有り。乘妙は則ち別にして、究竟は佛に在

り。慈悲、神通、說法は、皆是れ果上の益なり。若し但だ果を證せざれば此益を論ぜず。若し六即位の中に於ては四即の益を得。理即と究竟即は例して前の如し。但名字即の中の智、行、位、眷屬、功德、乃至分眞即の中の智、行、位、眷屬、功德を得。身子の得記の如き、四衆天龍歡喜して、偈を說きて云はく、大智舍利弗、今尊記を受くることを得たり。我等も亦是の如し、悉く當に作佛することを得べしと。即ち是れ生身の菩薩の、迹門の說法を聞く得益の相なり。本を發きて迹を顯はし、佛壽長遠なりと說くに、念佛三昧大に增長することを得。此に從ふも亦生身の菩薩有り、十妙の中の五益を得、六即の中の四益、生を損し道を增す云云。二住より去つて一生在に至るは、皆是れ法身五益を得るなり。何を以ての故に、應生も本地の功德を聞くに、念佛三昧轉更に深廣なり。稱げて量るべからず、前來の迹中の益の比に非ず。何となれば、佛境轉た深ければ、功德亦大なればなり。故に分別功德品に云はく、佛希有の法を說きたまふ、昔未だ曾て聞かざる所なり。世尊は大力有り、壽命量るべからず。法利を得る者を說くに歡喜身に充徧す。或は不退地に住し、或は陀羅尼を得と。即ち是れ生法二身の得益の相なり。若し實道の得益を論ぜば兩處に殊ならず、而して權智の事用は相比することを得ず。喩へば慧解脫と倶解脫とは、無漏不二にして而も功德に優劣あるが如し。前の迹門の得道は止無生法忍に齊り、本門の得道は餘の一生在に齊り卑を以て數と爲す。多少深淺豈前に同じからんや。當に彼文を揀ぶべし、發心の處に從へば、即ち是れ六根淨の位なり、乃至一生在は、即ち是れ最後の分眞なり云

【九】本門の十妙を釋するに十章を分つ中、第十には觀心を明す。

云く。又流通の利益とは、前に迹門を流通するは是れ諸の聲聞の菩薩、及び諸の羅漢の授記を得る者、此土、他土に經を弘むるなり。其功德を論ずるは、文を見るに但冥利を明して顯益を說かず。今本門を說くは一切諸佛所有の法を付囑す、兼ねて迹門の法をも得るなり。秘奧の藏は卽ち是れ本迹の中の實相なり、一切甚深の事は卽ち是れ本迹の中の因果なり。此の如き等の法を千世界微塵の菩薩に付囑し法身地に經を弘む。何ぞ但生身の此土他土に經を弘むる如くならんや。十法界の身の諸國土に遊ぶは、則ち冥顯の兩益有り。經に云はく「法身は常に佛有り、何ぞ菩薩の弘むることを須ひん」と。但し之を弘むることと人に在れば、時を待ち作を待つ。佛世に在すと雖も、而も文殊は龍宮に入るが如し。法身の處に佛有りと雖も、復外護を須ふ。故に佛は付囑し、舌を吐き頂を摩で、種種の相貌を以て、殷勤に付囑して此法を弘めしめ、無量微妙の功德を得るなり。其聞くこと有る者は、妙位稱げて數ふべからず。故に文に云はく、「若し佛の壽量を說くを聞くことあれば、一切皆歡喜し、無量の無漏功德の果報を得」とは、卽ち此意なり。

十に觀心とは、本の妙の長遠なるは、豈（因人の）心に觀ずべけんや。卽是ならずと雖も亦心を離れず、何となれば佛の如と衆生の如とは、一如にして二如無ければなり。佛は既に心を觀じて此本妙を得れば、迹用廣大にして稱げて說くべからず。我如は佛如に如す、亦當に心を觀じて此大利を出すべし。亦願はくは我如速に佛の如に如せん。故に文に云はく、「佛壽の無量なるを聞きて深心に須臾も信ぜば、其福彼に過ぎん。願はくは我未

【一二】既に本迹の十妙待明し竟りて今乃ち大と妙を料簡す。

來に於て最尊にして、衆生を度すること今日の世尊の如く、諸の樹中の王の道場に師子吼して、四魔を降きて畏るる所無からん。我等未來に於て一切に尊敬せられ、道場に坐する時、法を說くこと亦是の如くならん」と。此れ即ち觀心の本妙に六即の利益を得るの相なり云云。

（一二）問ふ、「大と妙とは云何。」答ふ、「此れ通に三義六句を以て分別すべし云云。文に云はく、『佛自ら大乘に住す』と。又云はく、『其の所得の如きの大果報』と。又云はく、『大車有り』と。而して通に稱して妙と爲す。涅槃に云ふが如くんば、『大般涅槃微妙の經典』と、通に稱して大と爲す。妙に即して是れ大、大に即して是れ妙なり。大品に云はく、『色は大に非ず、妙に非ず、乃至識も大に非ず妙に非ず』と。此は是れ大、妙を廢す。此文に云はく、『一切法空寂にして無漏無爲無大無小』と、此は是れ妙、大を廢す。大般涅槃の如きは此大涅槃を修し、滅、止、妙、離の如きは此妙義更に大を絶す云云。」問ふ、「若し大と妙と一等ならば、諸經も俱に通に妙と稱すべきや。」答ふ、「諸經は通じて論ずるに、理に約すれば大妙殊ならず。而して別しては方便を帶す。此經は方便を帶せず、故に別して妙と稱す。」問ふ、「大小俱に妙と稱し、小乘も入ることを得れば發迹顯本す、故に別して妙と稱す」大小俱に常を明すは一往なり。之を斥へば云云。小乘の滅止妙離は名同じけれども、理異なれば是れ常なることを得ず。幷（例して）云はく、是れ妙なることを得ざるや。」答ふ、「妙は不可思議に名く。小乘の眞諦は言を亡じ慮を絶すれば、通じて是れ不思議なること

【二】妙法の二字を釋してその玄意を開すること已に終れば、之より下乃ち蓮華の二字を解釋す。而して、また初に章を分ちて、次にその第一章に法譬を定む。

を得れば、通じて名けて妙とするのみ。次に之を縱すべし。亦三無爲を以て常と稱することを得れども、而も常は異なり。又並(例)す、既に倶に常と稱すれば、亦倶に一に會するや。」答ふ、『諸見を會して同じく眞に入るといふべし、而も會すること異なり。又並(例)す、倶に無常なるべく、倶に麤なるべく、倶に會せざるべきや。例せば通じて而も義は異なり、云何ぞ大乘は無常ならん。大乘は倶に無常無きのみに非ず、亦常も無し。常無きを以ての故に無常と言ふ。云何ぞ大乘は是れ麤なるや、夫れ言說有れば、即ち名けて麤と爲すのみ。云何ぞ大乘は不會ならんや。一切の諸法は皆是れ佛法なれば、更に會する所無し』云云。

(二二)次に蓮華を釋せば、四意と爲す。一には法譬を定め、二には舊釋を引き、三には經論を出し、四には正しく解釋す。法譬を定むとは、權實は顯はれ難ければ、喩を蓮華に借りて妙法を譬ふ。又七喩の文多し、故に譬を以て題を標す。又解して云はく、蓮華は譬に非ずして、當體に名を得。類せば、劫初には萬物に名無く、聖人理を觀じて、準則して名を作すが如し。蛛羅の絲を引くを見て、之に倣ひて網を結び、蓬の飛んで獨り運するを見て依つて車を造り、浮槎の流に泛んで而も舟を立て、鳥跡の文を成すをみて而も字を寫すが如し。皆理に法りて而も事を制するのみ。今蓮華の稱は是れ假喩に非ず、乃ち是れ法華の法門なり。法華の法門は淸淨にして因果微妙なれば、此法門を名けて蓮華と爲す。即ち是れ法華三昧の當體の名なり、譬喩に非ず。餘經は多く自ら名を稱すれども、此經には解す

【一三】蓮華を釋するに四意を立つる中、第二に舊師說を引き、然して之を評破す。

ることと無し。或は是れ其文未だ變らざるのみ。而して此の兩釋は皆過有り。今二意を融ず。問ふ、「蓮華は定んで是れ法華三昧の蓮華なりや、定んで是れ華草の蓮華なりや」と。答ふ、「定んで是れ法の蓮華なり。（而も）法の蓮華は解し難きが故に、草華をもつて喩と爲す。利根は名に卽して理を解すれば、譬喩を假らずして但法華の解を作す。中下（兩根）は未だ悟らざれば、譬を須ひて乃ち知る。解し易き蓮華を以て、解し難き蓮華を喩ふ、故に三周の說法有りて上中下根に逗す。上根に約するは是れ法の名、中下に約するは是れ譬の名なり。三根合論して雙べて法譬を標す。此の如く解すれば、誰とか諍ひを爲さんや。」今且く法譬に依りて釋を爲す。

（一三）二に舊解を引けば、叡師の叙に云はく、「未だ敷かざるを屈摩羅と名け、將に落ちんとするを迦摩羅と名け、處中にして盛なる時を分陀利と名く」と。遠師の云はく、「分陀利迦は是れ蓮華の開喩なり。然るに體は時を逐うて遷り、名は色に隨つて變ず」と。故に三名有り。大經に亦云はく「人中の蓮華、分陀利華」と。二名幷べ題するは應に通別の異なり有るべし。今蓮華は是れ通、分陀利は是れ別稱なるを取る。道朗の云はく「鮮白色なり、或は翻じて赤色と爲し、或は翻じて最香と爲す」と。此の如きは皆是れ開盛の義なり。分陀利を擧ぐれば則ち之を兼ぬ。問ふ、「梵本は別（名）を擧げ、此方には通を用ふるは何ぞや。」答ふ、「外國には三時の名有り、此方には則ち無し。但通名を擧ぐるに、通自ら別を兼ぬ。他の蓮華を解するに十六義有り。蓮華の緣より生ずるは、佛性の緣より起るを

譬ふ。蓮華の能く梵王を生ずるは、緣より佛を生ずるを譬ふ。蓮華の生ずること必ず泥に在るは、解の生死より起るを譬ふ。蓮華は是れ瑞にして見る者歡喜するは、見る者の佛と成るを譬ふ。蓮華は微より著に之く、一禮一念も皆作佛を得るを譬ふ。蓮華の必ず俱なるは、因果の亦俱なるを譬ふ。華に必ず蓮あるは、因の必ず佛と作るを譬ふ。蓮華は引いて蓮華世界に入るを譬ふ。蓮華は是れ佛の踐む所なるは、衆聖の託生を譬ふ。此十譬は、秖是れ今家の行妙を譬ふる中の片意なるのみ。蓮華の淤泥より生じて淤泥に染まざるは、一、三の中に在りて、三、一を染せざるを譬ふ。蓮華の三時異なるは、開三は秖是れ一なるを譬ふ。蓮華の開有り合あるは、緣に對するに隱あり顯あるを譬ふ。蓮華は諸華に於て最も勝るるは、諸說の中に第一なるを譬ふ。華開けて實顯はるるは、巧に說きて理顯はるるを譬ふ。蓮華に三時の異なり有るは、權實の時に適ふことを譬ふ。此六譬は、秖是れ今家の說法妙の中の片意なるのみ。光宅の云ふが如くんば、餘華の華果俱ならざるは、餘經の偏に因果を明すを譬ふ。此蓮華の華果必ず俱なるは、「此經に雙べて因果を辨ずるを譬ふ。弟子門に因を明し、師門に果を明す、故に蓮華を借りて喩と爲す」と。今謂はく、此解は語略にして義偏なり。若し迹門は、師弟各各因果有り。文に云はく「我盡く諸佛所有の道法を行じ、道場にして果を成ずることを得たり」と。即ちこれ師の因果なり。會三歸一は即ち弟子の因なり、得記作佛は即ち弟子の果なり。本門に云はく「我本菩薩の道を行ずる時」とは、即ち師の因なり、「我佛を得てより已來甚大久遠なり」とは、即ち師の果なり。

【法華論】世親の著、妙法蓮華經優婆提舍を云ふ。【三】蓮華を釋するに四章を分つ中第三には經論を引く。

「我昔其初發心を教ふ」とは、即ち弟子の因なり、「今皆不退に住し、悉く當に成佛することを得べし」とは、即ち弟子の果なり。彼意は偏にして略なり、故に用ひず。且く其語を助成せば、四微の色法の如きは、華と蓮とに當らず、而して微に約して華を論じ蓮を論ず。今の實相の理は本迹の因果に當らざれども、而も理に約して本迹の因果を明すのみ。次に四微の如きは開と合とに當らずして、而も微に約して開合を論ず。實相は權實に當らざれども、而も實相に約して開權顯實、發迹顯本を論ずるのみ。

（三）三に經論を引けば、法華論に十七名を列ぬ。一には無量義、二には最勝、三には大方等、四には教菩薩法、五には佛所護念、六には諸佛祕藏、七には一切佛藏、八には一切佛密字、九には生一切佛、十には一切佛道場、十一には一切佛所轉法輪、十二には一切佛堅固舍利、十三には諸佛大巧方便、十四には說一乘、十五には第一義住、十六には妙法蓮華、十七には法門攝無量名字句身、頻婆羅、阿閦婆等なり。餘の名は悉く解釋せず、唯十七名を列ぬ。次に蓮華を解するに二義有り、一には出水の義盡すべからず、小乘泥濁の水を出離するが故なり。復義有り、蓮華の泥水を出づるは、喩へば諸の聲聞、如來大衆の中に入りて坐するに、諸の菩薩の蓮華の上に坐するが如し。無上の智慧、清淨の境界を說くを聞きて如來の密藏を證するが故なり。二に華開くは、衆生は大乘の中に於て、心怯弱にして信を生ずること能はざるが故に、如來の淨妙法身を開示して信心を生ぜしむるが故なり。今論意を解せば、若し衆生をして淨妙法身を見せしむと言はば、此れ妙因開發するを

【一四】蓮華を釋するに四章を立つる中、第四には正しく之を解釋す。而して今初に重ねて法喩の意を叙するなり。

以て蓮華と爲す。若し如來大衆に入りて蓮華の上に坐すと言はば、此は妙報國土を以て蓮華と爲すなり。何となれば、盧舍那佛は蓮華藏海に處して大菩薩に共ず、皆生死の人に非ず。若し聲聞此に入ることを得れば、即ち妙報國土を蓮華と爲す。彼論を今の意に望むれば、乃ち是れ行位の兩妙なるのみ。大集に云はく「憐愍を莖と爲す、智慧は葉なり。三昧を鬚と爲す、解脱は敷なり。菩薩の蜂王甘露を食す、我今佛の蓮華を敬禮す。又戒、定、慧、陀羅尼を以て瓔珞と爲し、菩薩を莊嚴す」と。今經を解せば、當に是れ菩薩四法を攝りて假名の人を成ずるは蜂の蘂に在るが如く、復前の四法を以て自ら資くるは、蜂の華を食ふが如くなるべし

〔一四〕四に正しく釋するに、若し大集に依れば、行法の因果を蓮華と爲す。菩薩の上に處するは即ち是れ因華、佛の蓮華を禮するは即ち是れ果華たり。若し法華論に依れば、依報の國土を以て蓮華と爲す。復菩薩は蓮華の行を修するに由りて報に蓮華の國土を得。當に知るべし、依正、因果悉く是れ蓮華の法なり、何ぞ譬を須ひて顯はさん。（しかも）鈍根の人は、法性の蓮華を解せざるが爲の故に、世華を擧げて譬と爲す、亦何ぞ妨げあるべけん。然るに經の文には、兩處に優曇鉢華時に一現耳と說く。此華若し生ずれば、輪王應に出づべし。若し此經を說かば、即ち佛記を授くるの法王世に出づるなり。此靈瑞華は蓮華に似たり、故に以て喩と爲す。若し此意に從はば、即ち是れ喩を借りて妙法を喩ふるなり。夫れ喩には少喩と徧喩と有り、涅槃の如し云云。但少喩は、月を以て面を喩ふるに、其眉目

【一五】次に正しく釋するに初に通じて喩を用ふるの意を敍し、次に正釋なり。正釋の中また初には即ち總なり。

を求むることを得ず。雪山は象を（比）況するも、其尾牙を覓むべからず。今の法華三昧には以て喩と爲すもの無ければ、此蓮華に喩ふるのみ。

（一五）夫れ華に多種有ること、已に前に說くが如し。唯此蓮華のみ華果倶に多きは因に萬行を含し、果に萬德を圓ることを譬ふべし。故に以て譬と爲す。又餘華は麤なれば、九法界の十如是の因果を喩へ、此蓮華は妙なれば、佛法界の十如の因果を喩ふ。又此蓮華を以て、佛法界迹本の兩門を喩ふるに、各各三喩有り。迹を譬ふるは、一には華生ずれば必ず蓮有り、蓮の爲の華にして、（しかも）蓮は見るべからず。此は實に約して權を明すは、意實に在り、（而も）能く知る者無きを譬ふ。文に云はく、「我意は測るべきこと難くして、能く問を發する者無し」と。又云はく、「宜しきに隨つて說く所、意趣解し難し」と。二には華開くが故に蓮現ず、而も華を須いて蓮を養ふ。（此は）權の中に實有りて、而も知ること能はざるを譬ふ。今權を開して實を顯はすは、意權を須ふ。廣く恒沙の佛法を識る者をして、秖實を成じて深く佛知見を識らしめんが爲なるのみ。三には華落ちて蓮成ずるは、即ち三を廢して一を顯はし、唯一佛乘を以て直に道場に至るを喩ふ。菩薩は行有りて、見ること了了ならず。但華の（初めて）開くが如し。諸佛は行ぜざるを以ての故に、見ること即ち了了なり。譬へば華落ちて蓮の成ずるが如し。此三は迹門の、初方便より引きて大乘に入り、終竟に圓滿するを譬ふるなり。又三譬の本門を譬ふるは、一には華あれば必ず蓮有るは、迹は必ず本に有り、迹に本を含ずるを譬ふ。意本に在りと雖も佛旨知り難し、彌勒すら識ら

【二六】正しく蓮華を釋する中、之より下は別を明す。卽ち初に二譬を引きて意を敍べ、然る後眞釋するの中、初に迹門の十妙を譬ふ。兩して又初に境妙の中第一の十如境を譬ふるなり。

ざるなり。二には華開きて蓮現ずるは、迹を開して本を顯はすは意迹に在り、能く菩薩をして佛の方便を識らしめ、既に迹を識り已れば還つて本を識り、增道損生するを譬ふ。三に華落ちて蓮成ずるは、迹を廢して本を顯はすを譬ふ。既に本を識り已れば復迹に迷はず、但法身に於て道を修して上地を圓滿するなり。此三の譬は、本門は始初開より終本地に至るを譬ふ。二門の六譬は各各擬する所有り。初重は佛界の十如より、九界の十如を施出するに約す。次の重は九界の十如を開して、佛界の十如を顯はす。三重は九界の十如を廢して、佛界の十如を成ず。三譬に迹門の始終を攝得し盡すなり。若し此意を得れば、十二因緣、四諦、三諦等、智、行、位、乃至功德利益も、亦此譬を用つて之を譬ふべし云云。第四重は本の佛界の十如より、迹の中の佛界の十如を施出するに約す。第五重は迹の中の佛界の十如を開して、本の中の佛界の十如を顯出す。第六重は迹の中の佛界の十如を廢して、本の中の佛界の十如を成ず。始終圓滿し、開合具足す、是を少分に蓮華を以て譬と爲すとするなり。

(一六)多分喩とは、釋論に師子吼の義を解するに、深山谷種より生長し、身力手足、爪牙頭尾、雷吼等の譬を以て、師子吼の法門を譬ふ。亦大經に、波利質多樹の黃嘴超果等を明して、徧く行人を喩ふるが如し。今亦是の如し、初種子より乃至蓮成ずるは、妙法を喩ふるなり。譬へば石蓮の烏皮外に在り、白肉內に在り、內核を實と爲し、條街生ぜんと欲するに微細の茎具あり、華を開き鬚を布き、蓮の實の房成りて初後異ならざるが如し。蓮華の

【一七】別して十如の境を喩ふる中、初には即ち如是相を喩ふ。

【一八】如是性を喩ふ。

【一九】如是體を喩ふ。

【二〇】如是力を喩ふ。

始終に十如具足す。佛界の衆生は、始め無明より終り佛果に至りて、十如是の法を修行ること無きを喩ふ。總じて譬ふること竟んぬ。

（一七）譬へば石蓮の如し。黒ければ則ち染め叵く、堅ければ則ち壞し叵し。方ならず圓ならず、生ぜず滅せず。助縁に種無きが故に生ぜず、今も初めに異ならざるが故に滅せず、是を蓮子の相と名く。一切衆生の自性清淨の心も亦復是の如し。客塵の爲に染せられず、生死に輪轉して而も心常住して動せず、生せず滅せず。即ち是れ佛界の如是相なり。淨名に曰はく、「一切衆生即ち菩提の相なり」とは、即ち其義なり。

（一八）譬へば蓮子の復烏皮淤泥の中にありと雖も、白肉改まらざるが如し。一切衆生の了因の智慧も亦復是の如し。五住の淤泥、生死の果報に、一切の智願猶在りて失せず、是を佛界の如是性と名く。故に言はく、「煩惱即ち菩提なり」と、又「諸法は不生なれども般若生ず」とは、即ち其義なり。

（一九）譬へば蓮子の淤泥の中に在つて而も四微朽ちず、是を蓮子の體と名くるが如し。一切衆生の正因佛性も亦復是の如し、常樂我淨の不動不壞なるを佛界の如是體と名く。大經に言はく、「是味眞正にして、停留して山に在り、草木叢林も隱滅すること能はず」とは、即ち其義なり。

（二〇）譬へば蓮子の皮殼の爲に籠められ、泥の爲に沒せらるれども、而も莞荷心に在りて、生長の氣有るが如し。一切衆生の心も亦是の如し。苦果の爲に縛せられ、集惑に沈めらると

【三二】如是作を喩ふ。

【三三】如是因を喩ふ。

【三四】如是縁を喩ふ。

雖も、而も能く中に於て菩提心を發し、甚だ大雄猛なり。師子乳の如く、師子筋の弦の如し。是を佛界の如是力と名く。經に言はく、「若し菩提心を發すれば、無邊の生死を動かし、無始の有輪を破す。閻浮の人は未だ果を見ず、而して能く勇猛に發心するなり」と。

（三二）譬へば蓮子の復微小なりと雖も、烏皮の内に具に根莖華葉鬚臺有りて業具頭に足るが如し。是を蓮子の如是作と名く。一切衆生の初發菩提心も亦復是の如し。明解決定し、慈悲誓願を以て上求下化し、誓つて成就を取り志疲退せず、是を佛界の如是作と名く。華首經に言はく、「一切の諸の功德皆初心の中に在り」と、即ち其義なり。

（三三）譬へば蓮子の根は淤泥に依れども、而も華は虚空に處し、風日に鼓動して晝夜に增長し、葉擢頭に足るが如し。一切衆生も亦復是の如し、無明際より菩提心を發し、菩薩の行を修し、生死を出離して法性の中に入り、因行成就し、佛日に値ひて神通の光を被り、其心念々に薩婆若海に入る。此を佛界の如是因と名く。經に言はく、「無量劫に於て作す所の功德は、五莖の蓮華を燃燈佛に上つりて功德を得ることの多きに如かず、此は是れ眞因成覺なり」とは、即ち其義なり。

（三四）譬へば蓮華の鬚蘂間適して、華の内、蓮の外に在るが如し。此を蓮華の如是緣と名く。菩薩も亦是の如し、眞因の中に於て萬行六波羅蜜を具足す。一行一切行の因を資助するは、鬚の華内に在るが如く、若し果を得る時衆行休息するは鬚の蓮外に在るが如し。是を佛界の如是緣と名く、經に言はく、「盡く諸佛所有の道法を行ず」と、即ち其義なり。

【一四】如是果を喩ふ。

【一五】如是報を喩ふ。

【一六】如是本末究竟等を喩ふ。

【一七】境妙の中、次に十二因緣の境を喩ふ。

（一四）譬へば蓮華の華成じて蓮を結び、而して華葉零落して臺子に實を成ずるが如し。此を蓮子の如是果と名く。菩薩も亦是の如し、眞因所感の無上菩提の大果圓滿し、究竟じて實を成ず。是を佛界の如是果と名く。故に經に言はく、「佛子行道し已つて來世に作佛することを得ん」と、即ち其義なり。

（一五）譬へば蓮實の房臺包遶するが如し、此を蓮子の如是報と名く。菩薩も亦是の如し、大果圓滿して無上の報足り、習果の果の報果に依るは、（蓮）實の（房）臺に依るが如し。經に言はく、「是の如きの大果報は久修業の得る所」とは、即ち其義なり。

（一六）譬へば凋蓮の四微と、臺に處する蓮の四微と初後異ならざるが如し、此を蓮子の本末等と名く。一切衆生も亦是の如し、本有の四德隱るるを如來藏と名け、修成の四德顯はるるを名けて法身と爲す。性德と修德の常樂我淨は、一にして而も無二なり。是を佛界の十如の本末究竟等と名く。經に言はく、「衆生の如と佛の如は、一如にして二如無し」とは、即ち其義なり。是れ蓮華を用ひて十如の境を譬ふること竟んぬ。

（一七）次に蓮華を用て十二因緣を譬ふれば、烏皮淤泥、水草重覆すること、通は上に說くが如し。即ち是れ無明支の種子能生の力は、即ち是れ行支なり。內に菡萏有りて華鬚備に具するは、即ち是れ識、名色、六入、觸、受支なり。含潤を愛、取、有支となし、團圓盤屈して出づることを得る能はざるは、即ち是れ老死支なり。若し能く芽鋒萌動して、烏皮を鑽りて破するは、即ち是れ無明滅するなり、復烏皮の內に在つて生ぜざるは、即ち是れ諸行滅する

【二八】境妙の中、次に四諦、二諦、三諦、一諦、及び無諦の境を喩ふ。

【二九】迹門の十妙を喩ふ、中之より下乃ち第二智妙より第十利益妙に至るまでを喩ふ。

なり。蘊殼の外に出づるは、即ち是れ老死滅なり。此れ略して四種の十二因縁を譬ふ。

(二八)次に蓮華を用つて四諦を譬ふれば、烏皮は界内の苦を譬へ、内肉は界内の集を譬ふ。泥は界外の集を譬へ、水は界外の苦を譬ふ。道滅は知んぬべし。此れ通じて四種の四諦を譬ふるなり。次に蓮華を用つて二諦を譬ふるは、蓮藕華葉等は俗を譬へ、蓮藕華孔の空なるは眞を譬ふ。此れ通じて七種の二諦を譬ふるなり。次に蓮華を用て三諦を譬ふれば、眞と俗とは前の如し、四微は常樂我淨に擬して中道第一義諦を譬ふ。此れ通じて五種の三諦を譬ふるなり。四微の無生無滅なるは一實諦を譬ふ。劫初に生無く今時に滅無きは、無諦無說を譬ふるなり。蓮華を用て境妙を譬ふること竟んぬ。

(二九)次に更に九妙を譬ふれば、内に生ずるの性有るは智妙を譬ふ、卷荷の生ずる性は空智の妙を譬へ、翡葉の生ずる性は假智の妙を譬へ、蓮華四微の生ずる性は中智の妙を譬ふ。此三の生性は一心三智の妙を譬ふるなり。

蓮子は小なりと雖も備に根莖華葉有るは、行妙を譬ふ。華は即ち慈悲、葉は即ち智慧、鬚は即ち三昧、開敷は即ち解脫なり。又葉を以て三慈を譬ふれば、水を覆ふ青葉は衆生緣の慈を譬へ、水を覆ふ黄葉は法緣の慈を譬へ、停葉は無緣の慈を譬ふ。停荷若し出づれば蓮生すること久しからず、無緣の慈成ずれば記を得ること久しからず。又根莖子葉の、人蜂を利益するは即ち施、香氣は即ち尸、泥に生じて染めざるは即ち忍、增長は即ち精進、柔濡は即ち禪、汚れざるは即ち慧なり。此に約つて行妙を譬ふるなり。

【眞性軌】本有不改を義とす。一切の理、本體ともいはるべきものは悉く之に攝まる。

【觀照軌】破情顯理を義となす。一切の智といはるべきものは皆之に入る。

【資成軌】相由資用を義となす、一切の行、所作といはるべきものは悉くこの中に攝せらる。

蓮は理即の位を譬ふ。芽の皮を裹るは麁住の位、芽の皮を出づるは細住の位、泥を裹るは欲定の位、泥を齊るは未到の位、泥を出でて水に在るは四禪の位なり。禪定は水の如く、能く欲塵を洗ふ。水に處して增長するは無色の位を譬ふ。此に齊つて觀行の蓮華の位を譬ふ。水を出づるは見思を破するを譬へ、相似の蓮華は十信の位、空に處して合んで敷を欲するは十住の位を譬ふ。鬚臺は識るべし、十行の位を譬ふることを。日に隨つて開敷するは十廻向の位を譬へ、敷舒成就して蜂蝶を荷負するは十地の位を譬へ、鬚葉零落して臺子の獨り在るは、衆行を休息して妙覺圓滿し、果上無事にして眞常湛然なるを譬ふ。此れ行位妙を譬ふるなり。

蓮に四德有るは眞性軌を譬へ、蓮房の內の虛なると鬚臺の中の空なるは觀照軌を譬へ、臺房の圓滿するは資成軌を譬ふ。此れ三法乘妙を譬ふるなり。

蓮成りて空に出し、影淸水に臨むは顯機顯應を譬へ、影濁水に臨むは冥機冥應を譬へ、影風浪の水に臨むは亦冥亦顯の機應を譬ふ。大經に云はく、「闇中の樹影」と。即ち夜影の水に臨むは非冥非顯の機應を譬ふ。此等は感應妙を譬ふるなり。

若し風蓮華を搖して東に昂り西に倒れ、南に向ひ北に映り、下の風には則ち合し、上の風には則ち開くは、即ち東涌西沒、中涌邊沒等を譬ふ。此は地動瑞を譬ふるなり。日暮に華合するは入定瑞を譬へ、日出でて華の開くは說法瑞を譬ふ。遠く望めば則ち紅く、近く望めば則ち白く、赤華青葉相映して輝赫は放光瑞を譬ふ。流芳野に徧きは旃檀風瑞を譬へ、

【三】實釋の中、第二に本を譬へ、向して後總じて之を結す。

蘂蕤璀璨するは天雨華瑞を譬へ、風雨霑灑して翻珠相棠は天鼓自然鳴瑞を譬ふ。此等は皆神通妙を譬ふるなり。

華合して、未だ開かざるは、一乘を隱して分別して三を說くを譬ふ。華葉の正しく開くは、三を會して一に歸し但一乘を說くを譬ふ。華落ちて蓮存るは、跡を絕して理に實するを譬ふ。若し如來は常に說法せずと知るは、乃ち多聞と名く。此等は說法妙を譬ふるなり。

一藕の邊より更に一華を生じ、展轉して復無量の蓮華を生ずるは、衆生の眷屬妙を譬ふ。一の蓮房より子を墮して泥に在り、更に蓮華を生じ、展轉して復無量の蓮華を生ずるは、神通の眷屬妙を譬ふ。掘りて彼藕を移し、彼蓮子を採りて此池に種うるに、蓮華熾盛なるは願生の眷屬妙を譬ふ。他池より飛び來ること[illegible]の如く、此池に入りて蓮華[illegible]盛るは應生の眷屬妙を譬ふ。

魚鼈其下に噞喁し、蜂蝶其上に翔集するは、衆生の果報清涼の妙益を譬ふ。見る者歡喜するは因の益を譬へ、其葉を採用するは三草の益を譬へ、其華を採用するは妙の小樹の益を譬へ、其蓮を採用するは妙の大樹の益を譬へ、其藕を採用するは妙の實節の益を譬ふ、此等は功德利益を譬ふるなり。是の如き等の譬及び餘の無量の譬喩は、以て迹の中の十妙を譬ふ云云。

(三)次に本を譬ふるは、譬へば一池に蓮華始めて熟し、熟し已つて隋落し、泥水に投じて方に復生長し、乃至成熟す。是の如く展轉して更に生熟し、歲月既に積りて、遂に大

道に散く、穀の田に布き滿るが如し。佛も亦是の如し。本初の修因證果久に竟れど、衆生の爲の故に更に方便を起し、生死の中に在りて初發心を示し、復究竟を示し、無量生に[illegible]ること亦無數百千なり。本地より應を垂れ、俯して凡俗に同じて更に五行を修す、[illegible]の更に聖業を生ずるは、更に聖行を修するを譬ふ。蓮子の圓微の稍稍増長するは、更に天行を修するを譬ふ。荷葉の始めて生ずるは、更に梵行を修するを譬ふ。蓮子の泥に萌つるは、泥中に出でて更に病行を修するを譬ふ。蓮の芽の始めて萌すは、小善に同じて更に嬰兒行を修するを譬ふ。是の如く三世の益物は稱げて計るべからず、法界に遍滿して分身して本迹、開迹、發迹等の益に非ざること無し云云。

若し蓮華に非ずんば、何に由りてか遍く上來の諸法を喩へん。法と譬とを雙べて擧ぐ、故に妙法蓮華と稱するなり。

妙法蓮華經玄義卷第七下

妙法蓮華經玄義　卷第八上

天台智者大師の說

【一】妙法蓮華の四字別名を釋すること已に終りて、今乃ち經の一字を釋す。而してまた初には、別名に對して略し之を辨釋じ、次に正しく釋せんとするに五章を開す。

【二】通名を釋するに五章を明する中、初に無翻を明す。即ち初には無翻を立し、乃至五義を開す。

(二)第二に通名を釋すとは、經の一字なり。具に胡音を存せば、應に薩達磨分陀利修多羅と云ふべし。薩達磨とは此に妙法と翻じ、分陀利とは此に蓮華と翻ず。已に上に釋するが如し。修多羅は、或は修單蘭と云ひ、或は修妬路と云ふ。彼方の楚夏なり。此土には翻譯同じからず、或は言はく無翻、或は言はく有翻と。此を解するに五と爲す、一には無翻を明し、二には有翻を明し、三には有無を和融し、四には法に歷て經を明し、五には觀心に經を明す。

(三)無翻と言ふは、彼語は多含にして此語單淺なれば、單を以て複を翻ずべからず、宜に不翻の音を留むべしと。而して經と言ふは、隋譯の云はく、正翻に非ず、但此を以て彼に代へたるのみ。此間の聖說を經と爲し、賢說を子史となす。彼には聖を經と稱し、菩薩を論と稱す。既に翻ずべからざれば、宜しく此を以て彼に代ふべし。故に經と稱す。既に翻ずべからず、而して五義を含ず。一には法本なり、亦出生とも云ふ。二には微發と云ひ、亦顯示とも云ふ。三には涌泉と云ひ、四には繩墨と云ひ、五には結鬘と云ふ。今横五義を作すに翻ずべからず。今一の中に於て三(義)を作すに、三五十五の義あり。一には教本、二に

【三】無翻を明すに五義を開する中初に法本の義を釋す、

行本、三には義本なり。

〔二〕今實く之を推するに、法本と言ふは、一切皆論くべからざれども、四悉檀の因縁を以てすれば則ち言說有り。世界悉檀の說は則ち教本と爲し、爲人と對治は則ち行本と爲し、第一義悉檀は則ち義本と爲す。言ふ所の教本とは、金口所說の一言を本と爲して、無量の言教を派出す。若は通、若は別、當時物に被らしむるに、聞けば即ち得道す。故に經に云はく、一一の修多羅に復無量の修多羅有りて、以て眷屬と爲すと。若し後の人解せざれば、菩薩は佛の教を以て本として、通論別論を作り、通別の經を申べて、佛意をして滯らざらしむ。尋ぬる者の道を得るは、良に其論に本有るに由るが故なり。諸の外道等は、所說有りと雖も修多羅と合せず、戲論にして本無ければ道を得ること能はず。經は是れ行の本なりとは、人に無諍の法を示して通塞を導達し、眼目を開明して人の病を救治す。教の如く修行すれば則ち通別の諸行を起し、此より彼に至り、清涼池に入り甘露の地に至る。涅槃の法寶は衆生種種の門より入る。故に知んぬ、經は是れ行の本なることを。經は是れ義の本なりといふは、一句を尋ねて一義を詮し、無量の句を尋ねて無量の義を詮す。或は一句を尋ねて無量の義を詮し、無量の句を尋ねて一義を詮す。若は通じ若は別して、詮を尋ねて會入す。故に經は是れ義の本なり。此三種を束ねて法門と爲さば、教本は即ち是れ聞慧、行本は即ち是れ思慧、義本は是れ修慧によりて眞を見る。法本の義備に已に多含なり、故に翻ずべからず。或は出生と言ふも、此に例して知んぬべし。

【四】五義の中、次には微發を釋す

【五】五義の中、第三に涌泉の義を釋す。

(四)二に微發を含ずとは、佛四悉檀を以て說きたまふに、言辭巧妙にして次第に詮量し、初中後善にして圓滿具足すること、大海の水の漸漸に轉た深きが如し。聞教の者初め世界悉檀を聞きて次第に領受し、法相を分別するに微しく解生ずること有り、漸漸に增長し明練通達す。又徧く諸の異論を讀んで、廣く智者の意を知り、多聞強識にして以て成佛するに至る。此れ即ち教に約して微發を論ずるに就く。初に爲人對治を聞きて即ち能く行を起し、始め人天の小行より次に戒定慧(を修し)、無漏の行に入り、見道修道に遂に無學を證す。小より大に入り妙覺に終るは、是れ行に約して微發を論ず。初に第一義悉檀を聞き、展轉增廣して、聞、思、煖、頂、世第一に入り、次に見諦に入りて眞の第一義を得、次に修道に入り無學に至る。小より大に入り似眞の中道を見、毫末より起つて終に合抱と成る。此の三發を束ねて法門と爲さば、小乘に依れば即ち三種の解脫發するなり。大乘に依れば、初住の中に教發すること有るは是れ般若なり、行の發するは即ち如來藏なり、理の發するは是れ實相なり。微發已に自ら多含なり、故に翻ずべからず。

(五)三に涌泉を含ずとは、譬に從つて名と爲るなり。佛四悉檀を以て說法したまふに、文義無盡にして法流絕えず。若し世界に一句を說くを聞きて無量の句を解すること、月の四月より歲に至り、風の空中に於て自在にして無障礙なるが如し。初心の解を說くこと旣に涌泉の如し、何に況や後心をや、何に況や如來をや。猶ほ泉の流溢して徧く盈するが如し。若し爲人對治を聞きては、無量の行恒沙の佛法、種種の法門、一行無量行を起し、善境

【六】五義の中、第四に繩墨を釋す。

【七】五義の中、第五に結鬘を釋す。

界に入り正道に證入す。若し第一義を聞くに、理は虛空の若し。虛空の性は格量すべからずして、一切處に徧す。是を義の涌泉と名く。此を束ねて法門と爲さば、教泉は是れ法無礙辯、行泉は即ち辭無礙辯、義泉は即ち義無礙辯なり、樂說は三處に通ず。涌泉已に自ら多含なり、故に翻ずべからず。

（六）四に繩墨を含すとは、佛四悉檀を以て說きたまふに、初め世界を聞きて邪見の邪教を裁ち、邪見の爲に倒惑せられずして、正轍に入ることを得るは、即ち教の繩墨なり。若し爲人對治を聞きて非道を遠離し、邪正の道、道品の路に入るは、即ち行の繩墨なり。若し第一義を聞きて愛見の此岸を裁ち、彼岸に至ることを得て、生死を保せず、亦無住に住せざるは、即ち義の繩墨なり。此を束ねて法門と爲さば、教の邪を裁つは即ち是れ正語なり。行の邪を裁つは即ち正業、正精進、正念、正定等なり。義の邪を裁つは即ち正見、正思惟等なり。繩墨已に自ら多含なり、故に翻ずべからず。

（七）五に結鬘を含すとは、教行理を結すること、華鬘を結んで零落せざらしむるが如し。世界悉檀は佛の言教を結して零落せず、爲人對治は業行を結して零落せず、第一義は義理を結して零落せず。此を束ねて法門と爲さば、教を結するは口無失を成じ、行を結するは即ち身無失、義を結するは即ち意無失なり。亦是れ三種共に智慧行なり、亦是れ三陀羅尼なり。教の零落せざるは是れ聞持陀羅尼、行の零落せざるは行陀羅尼なり、義の零落せざるは即ち總持陀羅尼なり。若し單身の釋を作さば、即ち是れ教に約するを智慧莊嚴と名け、

【八】通名を釋するに五章を開する中、第二に有翻を明す。

行に約するを福德莊嚴と名け、義に約するは即ち是れ所莊嚴なり。所莊嚴は即ち是れ法身にして、定慧に莊嚴せらる。一切衆生皆法身有れども、法身の體は素にして天龍に怱劣せらる。若し定慧を修學して法身を莊嚴するは、一切に尊ばるるなり。釋の云はく、經に五義を含ずと。今則ち經に十五義を含ず、當に何なる義を以て問を斷ずべけんや。多含の釋此の如し云云。訓とは常に訓ず。今其訓を釋せば、天魔外道も改壞すること能はざるを、名けて教常と爲す。眞正にして雜はること無く、能く遮遏すること無きを、名けて行常と爲す。湛然として動ぜず、決して異變無きを、名けて理常と爲す。又法に訓せば、法の可軌、行の可軌、理の可軌なり。今直に訓を釋するに、已に六義を含ず。況や聞言の重複なる、單に翻ずべけんや。

(八)二に有翻と言ふは、亦五と爲す。一には翻じて經と爲し、經は由をもつて義と爲す、聲人の心口に由るが故なり。今亦隨つて之を釋するに、教由、行由、理由を謂ふ。一切の修多羅、一切の通別の論、一切の疏記等は皆聖人の心口に由る、是を教由と名く。一切の聖理の行、一切の相似の行、一切の信行、法行は皆聖人の心口に由る、故に行を以て由と爲す。一切世間の義、一切出世の義、一切方便の義、一切究竟の義も皆聖人の心口に由る、故に義を以て由と爲す。教由は世界、行由は爲人對治、義由は第一義悉檀なり。又經と言ふは緯の義なり。世の絹經は緯を以て之を織りて、龍鳳の文章成るが如し。佛は世界悉檀を以て經を說き、菩薩は世界の緯を以て織り、經と緯と合するが故に賢聖の文章成る。又

【九】通名を解釋するに五章ある中第三に有無を和融す。

行に約して經緯を論ずれば、聖行を以て經と爲し、行行を緯と爲し、經緯合するが故に八正の文章成る。又理に約して經緯を論ぜば、眞を詮ずるを經と爲し、俗を詮ずるを緯と爲し、經緯合するが故に二諦の文章成る。二に翻じて契と爲すは、義に契ひ、事に契ひ、義に契ふなり。世界の說は是れ緣に契ひ、隨宜の說は是れ生善に契ひ、隨對治の說は是れ破惡に契ふ、是を契事と爲す。隨第一義の說は是れ義に契ふなり。三に法本と翻ずとは、即ち教行理の本なること、前に釋するが如し云云。四に線と翻ずとは、線は教行理を貫持して零落せざらしめ、身を嚴る等の義、前に釋するが如し。又線は能く縫ふの義なり。教を縫ひて章句次第をして說法すべきに堪へしむ。支佛の如きは、十二部の線に値はざれば、說法すること能はず。世智辯聰も、亦經の線を得ざれば正語成ぜず。又線は能く行を縫ふ、經に依れば則ち行正しく、經に違すれば則ち行邪なり。又理を縫ふとは、理の印せざる所は六十二邪に墮し、理の印する所は一究竟の道に會す。五に善語教と翻ずるは、亦是れ善行教、亦是れ善理教なり。世界悉檀の說は即ち善語教、爲人對治は即ち善行教、第一義の說は即ち善理教なり。是を修多羅に五種の翻有りと名く。

（九）三に有無を和融せば、昔佛法初めて度りしに、胡漢未だ明らかならず。無翻と言ふは乃ち是れ河西の群學の所傳にして、晚人承用して此を以て彼に代ふることを加ふ、今傳譯煥爛して方言稍通ず、豈苟も無翻を執して猶多含を以て解をなさんや。若し多含ならば、何ぞ五(義)に局らんや。若し有翻ならば、何を以てか正とせん。義は寧ろ種種なるも、翻

那ぞ多なるを得ん。若し修多羅を翻じて經となさば、修多羅に九有り、通別の修多羅等を謂ふ。何ぞ周正せる十二部の中の經部と、三藏の中に經藏有るを見ざるや。若し翻じて契、法本等となさば、亦應に十二部の中に契部、法本部、線部、善語教部有るを改正すべし。三藏の中にも應に線等の藏有るべし。彼諸處は、皆此翻に從はず、何ぞ獨り通の修多羅のみならん。釋論に云はく、「般若は尊重、智慧は輕薄なり、何ぞ輕を用つて重を翻ずることを得ん」と。若し爾らば即ち是れ無翻家の證なり。夫れ實相は尊重にして說くべからざれども、遂に胡言と作して說くを得ば、何ぞ漢語と作して翻ずることを得ざらんや。若し翻ずべからずんば、亦說くべからず。此れ即ち有翻家の證なり。舊の云はく、「涅槃に三德を含ずれば、滅度を用つて翻と爲すべからず」と。又梁武の云はく、「滅度は小乘の法なり、用ひて大涅槃を翻ずべからず」と。此れ未だ必ずしも爾らず。經に言はく、「涅槃大涅槃有り」と。亦應に滅度大滅度有るべし。此經には如來滅度と云ふ、豈大滅度に非ざらんや。既に小滅度を以て小涅槃と翻ず、何ぞ大滅度を以て大涅槃と翻ぜざることを得ん。若し滅度は偏にして三德を含ぜずと謂はば、今含釋を作さんに、滅とは即ち解脫にして、解脫には必ず其人有り、人は即ち法身なり。法身は直身ならずして、必ず靈智有り、靈智は即ち般若なり。又大は即ち法身、滅は即ち解脫、度は即ち般若なり。但滅度と標するに三を含むこと宛然たり、何ぞ無翻なることを得んや。若し一言を執せば、則ち彼彼相是非して佛意に達せざること、已に上に說くが如し。今有無を和融して、義趣を虛豁ならしめん。

【二】通名を釋する五章の中、之より下は即ち法に歴て經を明す。中に於てまた初に歴法の中略して經體を明す。

若し無翻と言はば、名に五義を含む、一一の義に、更に三義を含じて、彌其美なるを見る。若し有翻と作さば、一一の翻に於て亦三義を具し、轉た旨の深きを益す。（故に）彼有無に任ずるに、何ぞ諍評する所かあらん。大經に云はく、「我經に世間と共に諍はず、世智に有と説かば、我も亦有と説き、世智に無と説かば我も亦無と説く」と。此の如く通融すれば二家に於て失無く、而も理有りて存す。復次に閒の義は無方にして、處處に通入す、乃ち上に說くが如し。若し正しく名を翻せば、世諦は混濫することを得ず。今且らく一名に據りて以て正翻と爲し、亦二家をして怨有らしめず。何となれば、古より今に及んで、胡を譯して漢と爲し、皆飜して經と爲す。若し餘の翻是れ正ならば、何ぞ改めて契線と作さざる。若し傳譯、既然らば、則ち經の正なること明らかなり。若し等しく是れ無翻ならば、何ぞ微發、涌泉等を標せざる。今正しく經を用ふるに、多含に於て一往強し。三の法本、三の微發、三の涌泉、三の繩墨、結鬘等の義を含じ、亦契、線、善語教、訓法、訓常等を含じて、經の一字の中に攝在せざるは無し、餘の句も亦是の如し。諸の大小乘の教は皆經を以て通名と爲す、故に餘の句を用ひざるなり。

四には法に歴て經を明さば、若し經を以て正翻と爲さば、何れの法か是れ經なるや。舊は三種を用ふ、一には聲を用ひて經と爲す。佛の世に在して金口を以て演說するが如き、但聲音の詮辯のみ有りて聽く者道を得、故に聲を以て經と爲す。大品に云はく、「善知識に從つて聞く所なり」と。二には色を用つて經と爲す。若し佛在世は聲を以て經と爲すべき

も、今佛世を去り、紙墨を以て傳持すれば、應に色を用ひて經と爲すべし、大品に云はく、「經卷の中に從つて聞く」と。三には法を用ひて經と爲す。內に自ら思惟して心と法と合すれば、他の敎に由らず、亦紙墨に非ずして、但心に曉悟すれば卽ち法を經と爲す。故に云はく、「我法を修する者は證して乃ち自ら知る」と云云。三塵を經と爲して此土に施す。耳識の利なる者は、能く聲塵に於て分別して悟りを取れば、則ち聲は是れ其經なり、餘に於ては經に非ず。若し意識の利なる者は、自ら能く心を研き、思惟して決を取れば、法は是れ其經なり、餘に於ては經に非ず。眼識の利なる者は、文字を以て詮量して道理を得れば、色は是れ其經にして餘に於ては經に非ず。此方は三塵を用ふるのみ、餘の三識は鈍なり。鼻に紙墨を臭ぐも則ち知る所無く、身を經卷に觸るも亦解すること能はず、舌に文字を嘗ふも寧ぞ是非を別たんや。若し他土は亦六塵を用ひ、亦偏に一塵を用ふ。淨名に曰ふが如く、一食を以て一切に施す。食に於て等しき者は法に於ても亦等しく、法に於て等しき者は食に於ても亦等し。此れ卽ち偏に舌根の所對を用て經と爲す。或は國土有り、天衣身に觸るゝを以て卽ち道を得、此れ偏に觸を用つて經と爲すなり。或は佛の光明を見て道を得るは、此は偏に色を用ひて經と爲す。或は寂滅無言にして心を觀じて道を得るは、此は偏に意を用ひて經と爲す。衆香土の如きは香を以て佛事を爲す、此は偏に香を用つて經と爲す。他方は六根識利なれば、六塵を經と爲すを得。此土は三根識鈍なり、鼻は驢狗鹿等に及ばず、云何ぞ香、味、觸等に於て能く通達することを得ん。

【三】正しく麤法を明す。

問ふ、「利根なるが故に麤に於て是れ妙ならば、鈍なる者には麤は則ち妙に非ざるや。」答ふ、「六塵は是れ法界なれば、體自ら是れ妙なり。」根利にして、取つて方に乃ち是れ妙なるに非ず。何となれば、大品に云はく、「一切の法は色に趣き、是趣過ぎず」と。此色能く一切法を詮す、黑墨の色の如き、一畫は一を詮じ、二畫は二を詮じ、三畫は三を詮じ、竪の一畫は則ち王を詮じ、右畫を足すは則ち丑を詮じ、左畫を足すは則ち田を詮じ、上に出せば由を詮じ、下に出せば申を詮じ、是の如く廻轉して、詮ずること、盡すべからず。或は一字に無量の法を詮じ、無量の字共に一法を詮じ、無量の字は無量の法を詮じ、一字に一法を詮ず。一の黑墨に於て小小廻轉するに、詮量大に異なり。左に廻らせば惡を詮じ、右に廻らせば善を詮じ、上の點は無漏を詮じ、下の點は有漏を詮ず。殺活、與奪、毀譽、苦樂は皆墨中に在りて、更に一法の此墨外に出づるもの無し。略して之を言はば、黑墨は無量の教、無量の行、無量の理を詮ず。黑墨は亦是れ教の本、行の本、理の本なり。黑墨は、初の一點より無量の點に至り、點より字に至り、字より句に至り、句より偈に至り、偈より卷に至り、卷より部に至る。又點一字句の中より、初に小行を立て、後に大行を著す、又點字の中より、初淺理を見、後深理に到る。是を黑色の教、行、義の三種の微發と名く。又黑色より點を涌出し、字、句、偈を出すこと、窮盡すべからず。諸行を涌出すること無盡、義を涌出すること無盡なり、是を黑色に三の涌泉を具すと名く。又黑色に約して教行義の邪を裁つ。又黑色に約して教行義の蹇を結し、又以て身を嚴る。又色は是れ

由なり、色に由るが故に、轉に六道の生死有り。色に由るが故に、脫に四種の聖人有り。又色は法と謂す、色に法るが故に能く教行理を成ずるなり。又色は是れ常なり、色教は破すべからず、色行は改むべからず、色理は動ずべからず。又色は翻ずべからず、色の義多含なるが故なり。又色は翻ずべし、色を名けて經とするが故なり。色の經を見る時、色の愛見を知り、色の因緣生の法を知り、色の卽空卽假卽中を知る。色卽ち法界にして、總じて諸法を含ず。法界の文字は、文字卽ち空にして、點無く、字無く、句無く、偈無し。句偈文字は畢竟不可得なり。是を字非字、非字亦字を知ると名く。墨色是れ經なるを法本と爲すとは、若し墨字に於て瞋を生ずれば他の壽命を害す。若し墨字に於て、愛を起して而も諂諛を作し、乃至墨に於て癡を起して邪見を生ず。當に知るべし、墨字は是れ四趣の本なり。若し墨字に於て慈を生じ、捨を生じ、乃至正見を生ずるは、當に知るべし、墨字は是れ人天の本なり。若し墨字は是れ果報無記なりと知れば、無記は是れ苦諦なり。樣色に於て著(着)を生ずるは卽ち是れ集諦なり。字は因緣の所成にして、苦空無我なりと知るは是れ道諦なり。旣に字非字を知れば、字の倒(惑)を生ぜずして、諸の顚倒滅するは卽ち滅諦なり。字の四諦を知りて能く煖頂を生ず、若は向、若は果、賢聖の解脫なり。當に知るべし、墨字は是れ聲聞の本なり。若し字に於て不了なるを無明と名け、字に於て愛恚を起すは是れ諸行、字の好醜を分別するは是れ識なり、字を識るを名色と名け、字の處に涉るを六入と名け、字の塵の根に對するを名けて觸と爲し、納領し染著するは卽ち是れ受、

纒綿して捨てざるは是れ愛、力を竭して推求するは是れ取、取は則ち業を成ずれば名けて有と爲し、有能く果を牽くは、是を生・老・病死と名け、苦輪息まざるは是れ則ち十二因縁の本なり。若し能く字非字を知れば無明即ち滅して行に至らず、乃至老死に至らずして、無明滅すれば則ち老死滅す。當に知るべし、此字は是れ辟支佛の本なり。若し字則ち空なり、滅し已つて空なるに非ず。字の性本より空にして、空の中には愛恚無く、乃至邪正無しと知れば字不可得なり。字を知る者は誰ぞ。云何がしてか、衆生は妄りに取舍を生ずる。慈悲誓願を起し、六度を行じて衆生を濟ひ、如實の際に入れば、亦衆生の滅度を得る者無し。當に知るべし、此字は是れ菩薩の本なり。若し字非字、非字非非字を知れば、二邊の倒無きを淨と名け、淨則ち業無きを我と名け、我則ち苦無きを樂と名け、苦無ければ則ち生死無きを常と名く。何を以ての故に、字は是れ俗諦、非字は是れ眞諦、非字非非字は是れ一實諦なり。一諦即ち三諦、三諦即ち一諦なる、是を境の本と名く。若し墨字は、紙と、筆と、心と、手の和合より成ると知れば、一一の字を推すに一字をも得ず。一一の點を推すに亦字を得ざれば、則ち所無し。心手を得ざれば即ち能を得ず。能無く所無し、能所を知るものは誰ぞ。是れ一切智の本なり。字は字に非ずと雖も、非字にして而も字なり。心に從ふが故に點有り、點に從つて字有り、字に從つて句有り、句に從つて偈有り、偈に從つて行有り、行に從つて卷有り、卷に從つて帙有り、帙に從つて部有り、部に從つて藏有り、藏に從つて種種の分別有るは、是れ道種智の本なり。字に非ず非字に非ずと雖も、

而も雙べて字非字を照すは、是を一切種智の本と爲す。雪山は八字の爲に所愛の身を捨つる、是を行の本と爲す。我一句乃至半句を解して、佛性を見ることを得て、大涅槃に入るとは、即ち是れ位の本なり。我三菩提を得るは、皆經を聞き、及び善哉と稱するに由るとは、字即ち乘の本なり。若し句逗を亡失せば還つて通利ならしめ、其に三昧及び陀羅尼を與ふとは、即ち感應の本なり。文に依りて(神)通を學ぶは、即ち神通の本なり。字に依るが故に語を得るは、即ち說法の本なり。字を說きて他を教ふるは、即ち眷屬の本なり。勸めて此字を學んで、亦其中に在るは、即ち利益の本なり。此の如く字を解するは、手に卷を執らざれども、常に是經を讀み、口に言聲無けれども徧く衆典を誦し、佛說法せざれども恆に梵音を聞き、心に思惟せざれども、普く法界を照す。此の如きの學問、豈大ならずや。當に知るべし、黑色は是れ諸法の本なることを。青、黃、赤、白も亦復是の如し。字に非ず非字に非ず、雙べて字非字を照す。不可說も不可說に非ず、不可見も不可見に非ず。何の簡擇する所、何の簡擇せざる所、何の攝する所、何の攝せざる所、何の棄つる所、何の棄てざる所かある。是なれば則ち俱に是、非なれば則ち悉く非なり。能く黑色に於て、一切に通達するに一切に非ず、一切に通達するに非ずして是れ一切に通達す。非に非ず是に非ず、一切の法は邪、一切の法は正なり。若し黑色に於て是の如く解せざれば、則ち字と非字とを知らず。黃、白、赤、青、有對、無對も皆知ること能はず。若し黑色に於て通達すれば、餘色を知るも亦是の如し。此れ即ち法華經の意なり、色を以て經と爲す。衆塵

【二二】法に歷て經を明す中、次には教に約して分別す。

も亦是の如し、或は一聲に一法を詮ず云云。耳根の利なる者は、即ち聲の愛見の因緣即空即假即中なりと解す。唇舌牙齒も皆不可得なりと知れば、聲も即ち聲に非ず。非聲亦聲、非聲非非聲なり。聲を教行義の本と爲す、種種等の義皆上に說くが如し。即ち是れ聲經に通達するなり。香味觸等も亦復是の如し。文に云はく「一切世間の治生產業も皆實相と相違背せず」とは、即ち此意なり。外入は皆經にして法界に周徧すれば、內入も亦是の如く、內外入も亦是の如し。經に云はく「內觀解脫を得るに非ず、亦內觀を離れず」と云云。是れ則ち一塵に一切塵を達し、一塵一切塵を見ず、一塵一切塵に通達す。一識に於て一切識を分別し、亦一識一切識を見ずして、一識一切識に通達す。自在無礙、平等大慧なり。何者か是れ經、何者か經に非ざる。若し細しく作さんと欲せば、一一の塵識に於て例して解すべし。有翻無翻は三義を以て之を織り、後に三觀を用つて之を結す云云。

（二二）諸教に歷て經を分別せば、若し理は文字を絕すと言はば、文字は是れ世俗なり。字に寄せて理を詮するに、理は是れ經なるべく、文字は經に非ず。六塵等は皆是れ經の詮なれども、正しき經には非ず。此れ即ち三藏の中の經のみ。若し文字を離れて解脫の義を說くこと無ければ文字の性離る、即ち是れ解脫なり。六塵即ち實相なれば二無く別無し。上の所說の如きは圓教の中の經なり。三の方便を帶して此說を作すものは、方等の中の經なり。二の方便を帶して此の如く說くは、般若の中の經なり。一の方便を帶して此の如きの說を作すは、華嚴の中の經なり。

【一三】通名を釋するに五章を開する中、第五には觀心に經を明す。中に於て自ら四あり、卽ち有翻と、無翻と、有無和融と、及び歷法とに約するをいふ。

（一三）五に觀心の經を明さば、皆上に類して四と爲す。一に無翻に類するは、心に善惡の諸の心數等を含ず。當に知るべし。此心は諸法の都(會)なり、何ぞ定判すべけん。若し惡是れ心ならば、心に善及び諸の心數を含ぜず。若し善是れ心ならば、心に惡及び諸の心數を含ぜず。知らず、何を以てか心に目けん。略を以て總に代ふ、故に知んぬ、略なる心は能く萬法を含ずるを。況や五義を含ぜざらんや。華嚴に云はく、一微塵の中に三千大千世界の經卷有りとは、卽ち其義なり。心は是れ法の本なりとは、釋論に云はく「一切世間の中心より造せざるは無し」と。心無ければ思覺なく、思覺無ければ言語無し。當に知るべし、心は卽ち語の本なることを。心は是れ行の本なりとは、大集に云はく「心行、大行、徧行」と。心は是れ思の數なり、思數は行陰に屬す。諸の行は思心に由つて立す、故に心を行の本と爲す。心は是れ理の本なりとは、若し心無くんば理は誰とともにか含ぜん。初心に理を研き恍恍として將に悟らんとするを以て、稍く相似に入り、則ち眞實を證す。是を理の本と爲す。心に微發を含ずとは、初刹那の心は微微として而も有り、次に心若は存し若は亡じ、次に漸く增長し、後則ち決定して心を暢べて口に發す。是れ語の微發なり。初心の習行は行循微弱なり、次に少しく樹立して後大行を成ずるは、卽ち行の微發なり。初め心を觀ずるに心の理を見ず、更に修するに髣髴とし、乃至相似の眞實なるは卽ち理の微發なり。心に涌泉を含ずとは、心に諸法を具するも障の故に流れず、土石泉を壅するに、壅を去れば涌溜するが如し。若し心を觀ぜずんば心闇くして明らかならず、所謂

長からず。若し觀心明徹なれば、則ち言語無方にして流溢盡き難し。豈語の涌泉に非ざらんや。若し心を明了せずんば行も則ち闇に有り、心を明了するを以ての故に念念相續し、六蔽を翻じて六度を成じ、六度に一切の行を攝す。是れ行の涌泉なり。若し能く心を觀ずれば利钁地を斸り、淺行沙鹵（を除いて）、理水清淨滔滔として竭くること無きが如きは、即ち義の涌泉なり。心に結鬘を合ずとは、觀念堅からずんば一聞持を得、文を穿つに失無し。心を觀じて定共の力を得れば行を穿つに失無く、道共の力を得れば義を穿つに失無し。又心を觀じて定慧を得れば法身を莊嚴す。此れ結鬘すべきなり。又心は是れ經鬘なりとは、若し心を觀じて正語を得れば邪倒の語を離れ、心を觀ずること正しければ則ち邪行を免れ、心に見著無くんば則ち正理に入る。事の行は鬘の如く、理の行は華の如し。愛見の木を彈して正法の器を成ず。是を心の經の多含と爲し、略して十五義を示す云云。

二に行翻に類して觀を明さば、心は即ち是れ由なり、三義は心に由る。一切の語言は覺觀の心に由り、一切の諸行は思心に由り、一切の義理は慧心に由る。經に云はく「諸佛の解脫は當に衆生心行の中に於て求むべし」と。心は是れ經緯（の義）なり、覺を以て經と爲し、觀を以て緯と爲し、言語を織成す。又慧行の心を經と爲し、行行の心を緯と爲して衆行を織り成す。心の竪に理を緣ずるを經と爲し、心の横に理を緣ずるを緯と爲して義理を織成す云云。又觀境を經と爲し觀智を緯と爲し、觀察廻轉して一切の文章を織成す。又心は即ち是れ契なり。觀慧の境に契ふは是れ緣に契ふ。樂欲に契ふ心を契教と爲し、便

宜對治に契ふ心を契行と爲し、第一義に契ふ心は理に契ふなり。心を法本と爲し、心を線と爲すは前の如し云云。心を善語教と爲すは、法と語と倶に善惡に通ずれども、今善法善語を以て之を定む。心と觀とも亦善惡に通ずれども、今善心善觀を以て之を定む。即ち是れ善語教、善行、善理なり。故に心に三義を具す。

心は是れ可軌なりとは、若し觀無くんば則ち規矩無し。觀を以て心王を正し、心王正しきが故に心數も亦正しく、行理も亦爾なり。心王理に契へば(心)數も亦理に契ふ、故に可軌と名くるなり。心は常なりといふは、心性常定にして、猶虚空の如し、誰か能く破する者ぞ。又惡覺は善覺を壞すること能はず、邪行は正行を干さず、邪理は正理を壞せず。故に心を常と名く。諸の事釋に隨つて、一一心に向へて觀と爲すに、觀慧彌成じて事に於て乖くこと無く、火に薪を益すが如くにして事理失すること無し。文字に即して文字無く、文字を捨てずして別に觀を作す。

三に有無を和融するに類して、觀を明すは解すべし云云。

四に歷法に類して觀と爲すは、若し小乘は惡の中に善無く、善の中に惡無しと明す。事理も亦然なり。此れ則ち惡心は經に非ざれば、則ち多含の義無し。隘路は二人の並び行くを受けず。若し大乘の觀心は、惡心を觀ずるに惡心に非ず、亦惡に即して而も善なり、亦即ち惡に非ず善に非ず、善心を觀ずるも善心に非ず、亦善に即して而も惡なり、亦善に非ず惡に非ず。一心を觀ずるに即ち三心なり、此三心を以て一切心に歷、一切法に歷るに、

【一四】五義各說の中、第二に經體を辨ず。即ち先づ來意を明し、次に七章を開す。

【一五】辨體に七章を設くる中、初には、正しく體を顯す。而して之にまた四意を開する中今先には即ち舊人の見解を出す。

何の心、何の法か一三ならざらん。一切の法は此心に趣き、一切の心は此法に趣く。此の如く心を觀ずるを一切の教本、行本、理本と爲す。有翻の五義、無翻の五義も一一心に於て解釋して滯ること無く、一切の心に徧うして是れ經ならざる無し。大意領すべし、多く記することを俟たざるなり。

(一四)第二に顯體とは、前の釋名は總說にして文義浩漫なり。今は頓に要理を點じて正しく經體を顯はし、直に實性を辨ず。實性は二執無きに非ざれども、解し易からしめんと欲して、是故に直說す。後に宗用を顯はすは、初執無きに非ざれども偏に擧げて名に當つるのみ。體とは一部の指歸、衆義の都會なり。但之に會すること在つて難きのみに非ず、亦乃ち之を說くこと易からず。大經に云はく「不生不生不可說」と。文に云はく「是法は示すべからず、言辭の相寂滅す」と。又云はく「因緣有るが故に亦說くことを得べし」と。今略して七條を開す。一には正しく經體を顯し、二には廣く僞を簡び、三には一法の異名、四には入體の門、五には徧く衆經の體と爲し、六には徧く諸行の體と爲し、七には徧く一切法の體となる。

(一五)正しく體を顯すに更に四意を明す、一には舊解を出し、二には體を論ずるの意、三には正しく體を明し、四には文證を引く。北地師は一乘を用つて體と爲せども、此語浩漫にして未だ簡要と爲ず。一乘は、語通(漫)にして權實に濫ず。若し權の一乘は、都て經の意に非ず。若し實の一乘は義に三軌を該ぬれば、體を顯すこと明らかならざるが故に用ひず。

【十二門論】一卷　龍樹の造、羅什の譯にして、一切皆空の宗義を明す。

【薩婆若】一切智と譯す、諸佛果上の智慧をいふ。

又行るが解して言はく「眞諦を體と爲す」と。此れ亦通途なり。小、大皆眞諦を明す。小乘の眞諦は故より言ふを俟たず、大乘の眞諦も亦復多種あり、今何等の眞諦を以てか體と爲す。故に用ひず。又行るが解して言はく「一乘の因果を體と爲す」と。今亦用ひず、何となれば一乘の語の通ずること、已に前に說くが如し。又因果は二法なれば猶未だ事を免れず、云何ぞ是れ體ならん。事は理の印無くんば則ち魔經に同じ。云何ぞ用ふべけんや。有人の解すらく「一乘の體は因果に通ず。果は、萬德を以て體と爲し、因は萬善を以て體と爲す」と。十二門論を引きて云はく、「諸佛大人の所乘は文殊觀音等の所乘なり」と。又此經を引きて「佛自住大乘とは即ち果なり、諸子乘是寶乘とは是れ因乘なり」と。又普賢觀の、大乘の因果は皆是れ實相なり」と言ふを）引く。「私」に問ふ、因果の乘は變ずとせんや、變ぜずとせんや。若し變ずれば誰か是れ能通、誰か是れ所通なりや。若し變ぜずんば因果則ち並ぶ、皆此理無し。若し別に法の因果に通ずる有りと云はば、當に知るべし、因果は果者の經體に非ざるを。十二門論に大人と云ふは、體は不行の故に乘と名く、體不行を以て因果の乘を論ずべけんや。諸經の佛自住大乘とは、此れ乃ち理に乘じて以て人を顯す。果體に住するには非ざるなり。普賢觀に因果を明すに皆實相を指すは、云何ぞ實相を以て因果を證せんや。今皆用ひず。今の明さく、因乘は般若を以て本と爲し、五度を末と爲し、果乘は薩婆若を以て本と爲し、餘を末と爲す。又因乘は狹く、果乘は寬し。又般若相應の心は是れ一體の乘、不相應の心は是れ異體の乘なり。又無所得相應の行は是れ近乘、

【中邊分別論】彌勒造、辨中邊論頌の解釋にして世親造、眞諦譯二卷。

【攝大乘論】無着の造、三譯あり。佛陀扇多譯二卷、眞諦譯三卷、玄奘譯三卷あり。

低頭擧手有所得は是れ遠乘なり。又六度は世出世の雜はる行なるは是れ遠乘、三十七品は但出世にして近乘と名く。又四句有り、度と品とは悉く得無く、又度と品と倶に得有り、又度は雜にして品は雜せず、又品は雜して度は雜せずと云云。私に謂はく、般若を乘本と爲すとは、今の經に於ては是れ白牛なり、經體に非ず。薩婆若を乘本と爲すも、今の經に於ては是れ道場所成の果なり、亦乘體に非ず。因乘は狹しとは是れ緣の修、果乘は廣しとは是れ儐の義なり、悉く今の經の乘體に非ず。般若相應の心無所得の近道等とは、今の經に於ては悉く是れ莊挍儐從にして、都て乘體に非ず。那ぞ忽に皮毛枝葉に於て、諍論を興さんや。縱橫此の如し、誰か能く之を別たん。有人釋論を引きて、六度を以て乘體と爲し、方便は生死を運出し、慈悲は衆生を運取す」と。今の經に於ては般若は是れ牛、五度は是れ莊挍、方便は是れ儐從、慈悲は是れ軒(蓋)なり、亦「乘體」に非ず。中邊分別論に云はく、「乘に五有り、一には乘の本なり「眞如佛性を謂ふ」、二には乘の行なり、福慧を謂ふ。三には乘の攝なり、慈悲を謂ふ。四には乘の障なり、煩惱を謂ふ。是れ煩惱障にして行解等は是れ智障なり。五には乘の果なり、佛果を謂ふ」と。唯識論に云はく、「乘は是れ出載の義なり、眞如佛性に由つて福慧等の行を出し、此行に由つて佛果を出し、佛果に由つて衆生を載出す」と。攝大乘論に「乘に三有り、一には乘の因なり、眞如佛性を謂ふ、二には乘の緣なり、萬行を謂ふ、三には乘の果なり、佛果を謂ふ」と。法華論には「乘體は如來の平等法身を謂ふと明す」と。又云はく「如來大般涅槃なり」と。此兩文は隱顯なるに

【六】正しく經體を顯すに就いて四意を設くる中、次には體を論ずるの意を辨ず。

似像たるのみ、發心低頭擧手等を乘緣と名く。十二門論に明さく、「乘の本は諸法實相を謂ふ」と、「乘の主は般若を謂ひ、乘の助は一切行萬善を謂ひ、乘至は薩婆若に至る」と。此と今は乘體を明すこと同じく、而して莊・挾は小しく異なれり。今の經に於て乘體を明さば、正しく是れ實相にして莊挾を取らず。若し莊挾を取らば、則ち佛所乘に非ざるなり。

（二六二）二に體を論ずるの意とは、何の意ぞ此體を須用ふべき。釋論に云はく、「諸の小乘經は若し無常と、無我と、涅槃との三印有つて之を印すれば、即ち是れ佛說にして、之を修すれば道を得。三の法印無きは即ち是れ魔說たり。大乘經は但一の法印有り、諸法實相を謂ふ。了義經と名け、能く大道を得。若し實相印無くんば是れ魔の所說なり」。故に身子の云はく、「世尊は實道を說き、波旬には此事無し」と。何が故ぞ小は三、大は一なる。小乘には生死と涅槃と異なりと明す。生死は無常を以て初印と爲し、無我を後印と爲し、二印印して生死を說き、涅槃は但一の寂滅印を用ふ。是故に三を須ふるなり。大乘は生死即ち涅槃、涅槃即ち生死にして不二不異なり。故に淨名に曰はく、「一切衆生は常に寂滅の相なり、即ち大涅槃なり」と。又云はく、「本より自ら不生にして、今則ち滅無し」と。本不生とは則ち無常無我の相に非ず、今則ち無滅とは則ち小の寂滅の相に非ず、唯是れ一實相なり。實相の故に常寂滅相と言ふ。即ち大涅槃は、但一印を用ふるなり。此大小の印は、半滿の經を印す。外道も雜亂すること能はず、天魔も破すること能はず。世の文符の印を得て信ずべきが如し。當に知るべし、諸經畢竟して實相の印を得れば、乃ち名けて了

【一七】之より下は正しく經體を顯す

【一八】正しく經體

義大義と爲すことを得べし。

三に正しく體を顯さば、即ち一實相の印なり。三軌の中には眞性軌を取る。十法界の中には佛法界を取り、佛界の十如是の中には如是體を取る。四種の十二因緣の中には不思議不生不滅を取り、十二支の中には苦道即ち是れ法身なるを取る。四種の四諦の中には無作の四諦を取り、無作の中には滅諦を取る。七種の二諦の中には五種の二諦を取り、五の二諦の中には唯眞諦を取る。五の三諦の中には五の中道第一義諦を取り、諸の一諦の中には中道一實諦を取り、諸の無諦の中には中道の無諦を取るなり。若し此意を得れば、冒妙の中に就いて而も、乃ち十妙の一一に正しく體を點出することを、例して知るべきなり。若し譬喩を以て此を明さば、梁柱の一屋を經緯するは、梁に非ず柱に非ず、即ち屋内の空なるが如し。梁柱は譬ふるに因果を以てし、屋空は譬ふるに實相を以てす。實相を體と爲せば梁柱に寄せざるなり。屋若し空無ければ容受する所無く、因果に實相無くんば成立する所無し。釋論に云はく、「若し空を以て此空無くんば、一切所作無し」と。又譬へば日月は天に附し、公臣は主に輔くるが如し。日月は二なるべく、大虚空の天は二なるべからず、臣僚は多なるべく、主は多なるべからざるなり。此義の爲の故に、須く正體を簡出すべし。三軌の乘を成ずるが如きは不縱不橫不即不離なれども、簡示するに義便なれば須く觀照等を簡ぶべし。唯眞性を指して名に當つるに正意分明なり。三軌既に然れば、餘法も例して爾り云云。

（一八）四に引證とは、序品に云はく、「今佛光明を放つて實相の義を助發す」と。又云はく、

を顯し竟りて今乃ち證文を引く。

【波旬】(Pāpīyān) 惡または殺者と譯す、魔王の名なり

【一九】辨體に七章を開する中、第二には廣く僞を簡ぶに就いて、先づその來意を示し、次に六意を立て、然るに後その第一には凡に就いて之を簡ぶ。

「諸法實相の義已に汝等が爲に說く」と。方便品に云はく「唯佛と佛とのみ乃ち能く諸法の實相を究盡す」と。偈の中に云はく「諸佛の法は久しくして後要ず當に眞實を說くべし」と。又云はく「我相嚴身を以て、爲に實相の印を說く」と。身子の領解に云はく「世尊は實道を說き波旬は此事無し」と。又云はく「實智の中に安住して我定んで當に作佛すべし」と。法師品に云はく、方便の門を開きて眞實の相を示す」と。安樂行に云はく「諸法の如實の相を觀ず」と。壽量に云はく「如來如實の知見」と。普賢觀に云はく「昔靈山に於て廣く一實の道を說く」と。又云はく「一實の境界を觀ず」と。故に知んぬ、諸佛は大事の因緣の爲に世に出現し、秖衆生をして佛の知見を開き、此一實の非因非果の理を見せしむるのみなるを。經文甚だ在り、明證と爲すべし。

(一九)二に廣く僞を簡ぶとは、夫れ正觀は玄絶にして、一往にしては知り難し。次に邪小の名、正を亂ず、譬へば、魚目の明珠を亂雜するが如し、故に廣く僞を簡ぶべし。卽ち六意と爲す、一には凡に就いて簡び、二には外に就いて簡び、三には小に就いて簡び、四には偏に就いて簡び、五には圓に就いて簡び、六には僞に就いて簡ぶ。一に凡に就いて簡ぶとは、釋論に云はく、『世典の亦實と稱する者は、乃ち是れ國を理り、家を濟むるを實と稱す』外道の亦實と稱するは、邪智辭辯を以つて實と爲す。小乘に實と稱するは、苦を厭ひて寂息し、偏眞を以て實と爲すなり。是の如き等は、但實の名のみ有りて其實有ること無し。何となれば、世間の妖幻の道術も亦稱して實と爲す。多くは是れ鬼神の魅法なれど

も、此法心に入れば迷醉狂亂して、自ら善好を衒ひて勝眞實と謂ひ、異を立て衆を動かして奇特の相を示す。或は鬧讙に屋を盜りて多人の前に約し、口を張つて大に叫み、或は生魚臭肉を噉伏飡し、或は裸形弊服にして四衢に誇嚴し、或は直に來り直に去つて問はず答へず。種種に諂詭して無智を誑誘し、信伏恭敬せしめ、皆し已つて膝を求むるに得回し。内には則ち病其身を害し、外は則ち家を誅り族を滅して、禍ひ種里に延き、現に衆苦を受け、後には地獄長夜の苦を受く。生生に道を障へて解脫の期無し。此れ乃ち世間の現見なり。何の實か論ずべけん。鈍使の愛論の攝なるのみ。若し周孔の經籍は治法、禮法、兵法、醫法、天文地理、八卦五行、世間の墳典なり。孝は以て家を治め、忠は以て國を治む。各其親を親とし、各其子を子とし、上を敬ひ下を愛し、仁義揖讓にして、百姓を安んじ社稷を寧立す。若し此法を失へば、強き者は弱きを陵ぎ、天下焦遑として民生を聊んずること無し。鳥は棲むに暇あらず、獸は伏すに暇あらず。若し此法に依れば、天下太平にして牛馬も内に向ふ。當に知るべし、此法は乃ち是れ民を愛し、國を治めて、而も稱して實と爲す。金光明に云はく、釋提桓因種種の勝論とは、即ち其義なり。蓋し十善の意のみ。十善を修して上天心に符ひ、諸天歡喜して天然の報を求む。此法を勝と爲す、故に勝論と言ふのみ。又大梵天王の出欲論を說くは、即ち是れ定を修して欲の淤泥を出づ。亦是れ愛論の攝のみ。世に又方術あり、藥を服して長生し、形を練り色を易ふ。神仙隱形の者は、此藥方をもつて祕要眞實と稱す。此れ亦愛論鈍使の攝なるのみ。

【一二】偈を簡ぶ中第二には外に就いて之を簡ぶ。

（一二）二に外に就いて簡ぶとは、即ち是れ外道の典籍なり。若し藥を服して知を求め、聰利明達にして道理を推尋するは、此藥方を稱して勝となし實と爲すも、藥力薄く知れども遠を鑒みること能はず。藥（方の制忌）に偏れば則ち（功能を）失し、藥（力の勢）嘗めば則ち（法を）失す。亦實に非ざるなり。若し此間の莊老は無爲無欲、天眞虛靜なり、諸の誇企を息め、聖を棄て智を絶する等なり。直に是れ其（懐）抱を虛無にすれば、尙單の四見の外に出ず。何ぞ聖法に關はらん。縱令單の四見の外に出づるとも、尙複の四見の中に墮す。見網の中の行にして解脫の道に非ず。若し外國の論力は、梨昌が募りを受けて五百の明難を撰す。其一に云はく、瞿曇は一究竟の道とせんや、衆多の究竟の道とせんや。佛の言はく、「但一究竟の道なり」と。論力の云はく、「云何ぞ諸師各各に究竟の道を說く」と。佛、鹿頭を指して、「汝其を識るや不や」と。論力云はく、「識る。究竟道の中に於て、其れ第一たり」と。佛の言はく、「若し其れ究竟の道を得ば、云何ぞ自ら其道を捨てて、我弟子と爲るや」と。論力即ち悟りて佛法の中に於て獨り一究竟の道を歎ず、又長爪の云ふが如き、一切の論は破すべく、一切の語は轉ずべし。諸法の實相を觀じて、久しきに於て一法の心に入ることを得ず。釋論に云はく、「長爪は亦有亦無の見を執す」と。又云はく、「亦不可說の見を計す」と。斯の如きの流類、百千萬種なり。虛妄の戲論は、惑の爲に流轉し、見網稠林、雜沓瀰漫として、各に執れて害を生ず。或時は推撲す、有の無を有と爲し、無の有、無の無を無と爲し、有の非有非無を有と爲し、無の非有非無を無と爲し、百

【二】觀を示す中、第三には小乘に置いて之を簡ぶ。

【三】偏を簡ぶ中、第四には偏權に就いて之を簡ぶ。即ち初に簡意を明し、而して後教に約し、五時に約して之を簡ぶなり。

に著相するも、[illegible]偏なり。生死の諸邊にして眞實に非ず。大經に云はく、「無明の相を執し生死の相に纏縛れ、二十五有を遶りて得脱すること能はず」と。[illegible]非義なり

〔二〕三藏の中に於いて而も之を[illegible]とは、聲聞法の中にも亦有を離れ無を離るるを[illegible]中道と名くと云ふ。大經に云はく、「聲聞沙門は最初に眞實の知見を獲得す」と。然るに小乘は大悲を缺いて、衆生を濟はざれば功德力薄し。作佛を求めず深く實相を窮めざれば、則ち智慧[illegible]相なり。有を離れ無を離るるを聖中道と名くと云ふと雖も、而も[illegible]の二見を以て二邊と爲し、眞諦を中道と爲す。但無漏の慧を名けて見と爲し、涅槃の理を證するを名けて道と爲す。生死を斷じて苦を除滅すと雖も、而も偏眞に住すれば究竟の理に非ず。前の生死の有の邊に對すれば、則ち是れ涅槃の無の邊なり。二俱に破すべく廢すべし、眞實の道に非ず。故に實相と名けざるなり。

〔三〕門に偏に就いて簡ぶとは、諸の大乘經に「二乘の人に共じて方便を帶びて說くものは、名字既に同じけれども義須く分別すべし。摩訶衍の中に云へるが如く、三乘の人同じく無言說の道を以て煩惱を斷ず」と。中論に云はく、「諸法實相は三人共に得とは、二乘の人は共に無言說の道を稟けて自ら出苦を求むと雖も、大悲心無ければ空を得て則ち止む。鈍根の菩薩も亦爾なり。利根の菩薩は、大悲物の爲にし深く實相を求む。其の實相は智慧火の如し、是故に實に非ず。不共の實相は智日光の如し、是故に實と爲す」と。大經に云はく、第一義空を名けて智慧と爲す。二乘の但空は空にして智慧無く、菩薩は不但

空を得れば即ち中道の慧なり。此慧は寂にして常に照す。二乘は但其の寂を得て照を得ず、故に實相に非ず。菩薩は寂を得、又寂照を得、即ち是れ實相なり。不空を見る者にも復多種有り、一には不空を見て次第に結を斷じ、淺より深に至る。此れ乃ち別教の意にして正實相に非ず。二には不空を見るに一切法を具し、初め阿字門に則ち一切の義を解す、即中即假即空にして、一ならず異ならず、三無く一無し。二乘は但一の即なり、別教は但二の即なり、圓は三即を具す、三即は眞の實相なり。釋論に云はく、何等か是れ實相なる。謂はく菩薩は一相に入りて無量の相を知り、無量の相を知りて又一相に入る。二乘は但一相に入りて、無量の相を知ること能はず。別教は一相に入り、又無量の相に入ると雖も、更に一相に入ること能はず。利根の菩薩は即空の故に一相に入り、即假の故に無量の相を知り、即中の故に更に一相に入る。此の菩薩は、深く中道の一實を求め、一心即ち三なり。是れ眞の實相の體なり。譬喩は三獸を度せずして、但菩薩に約す。三獸未だ底に得れば未だ正實に非ず、不失神に得るを名けて是れ正實なり。譬へば九人の中に四人三寶を得る、三人を虛と爲し一人を實と爲す。大師の三獸に三寶を説きて三人に擬す。前の二は深く求めず、淺にして而も實に非ず。後の一人は、深く一に三寶を求む、是故に是れ實なり。此經は、汝實に我が子なり、復四三の人無し。十方に諦求するに更に餘乘無く、但一實相を言なり。唯此の法を除きて但無上道を説けば、總じて是れ一實の體なり。

妙法蓮華經玄義卷第八上

【一】辨體に七章を開し、而して其の第二に僞を簡ぶ中、第四偏權に就いて簡ぶの條なり即ち五時に約して之を簡ぶの中、今更に獨り一實を明す。

妙法蓮華經玄義　卷第八下

天台智者大師の說

(二)大經に云はく「一實諦とは則ち二有ること無し、二有ること無きが故に一實諦と名く」と。又一實諦は無虛僞と名く。又一實諦は顛倒有ること無し。又一實諦は魔の所說に非ず。又一實諦は常樂我淨と名く、常樂我淨は空假中の異なり無し。異は則ち二と爲す、二の故に一實諦に非ず。一實諦は即空即假即中にして異無く二無し、故に一實諦と名く。若し三の異り有れば則ち虛僞と爲す、虛僞の法は一實諦と名けず。三異無きが故に即ち一實諦なり。若し異なれば即ち是れ顛倒未だ破せざれば、一實諦に非ず。三の異なり無きが故に顛倒無く、顛倒無きが故に一實諦と名く。異なるは一乘と名けず。三法異ならずして具足圓滿なるを、名けて一乘と爲す。是乘高廣にして衆寶莊校す、故に一實諦と名く。魔は別異の空假を論せずと雖も、而も能く別異の空假を說く。若し空假中異ならざるものは、魔は說くこと能はず、魔の說くこと能はざるを一實諦と名く。若し空假中異ならば顛倒と名け、異ならざるは不顛倒と名く。不顛倒の故に煩惱無く、煩惱無きが故に名けて淨と爲す。煩惱無ければ則ち業無く、業無きが故に名けて我と爲す。業無きが故に報無く、報無きが故に樂と名く。報無ければ則ち生死無く、生死無ければ則ち常と名く。常樂我淨を一實諦

【愛論、見論】凡夫の執着より起す戲論にして、愛論とは一切法に於て取着心を起す論、見論とは一切法に於て決定解を作す論

【二】偈を簡ぶ中第五には譬に就いて之を簡ぶ。

と名くるなり。一實諦とは即ち是れ實相、實相とは即ち經の正體なり。是の如きの實相は即空假中なり。即空の故に一切の凡夫の愛論を破し、一切の外道の見論を破す。即假の故に三藏の四門の小實を破し、三人共見の小實を破す。即中の故に次第の偏實を破す。復諸の顛倒小偏等の因果四諦の法無く、亦小偏等の三寶の名無し。唯實相の因果のみ有りて、四諦三寶宛然として具足す。亦諸の方便の因果四諦三寶を具す。何を以ての故に、實相は是れ法界海なるが故なり。唯此三諦は即ち是れ眞の實相なり。又次第の實を開すれば即ち是れ圓實なり、諦道是れ同じきが故に。又三人共得の實を開す、深く求めて即ち底に到るが故なり。又三藏の實を開して聲聞法を決了す。又諸の見論の實を開す、見に於て動ぜずして而も道品を修するが故なり。又諸の愛論の實を開す、魔界即ち佛界なるが故なり。非道を行じて佛道に通達す。一切諸法の中に悉く安樂の性有り。即ち絶待に實を明すは、是れ經の體なり。

(三)五に譬を以て簡ぶとは、今三喩を借りて正しく僞眞を顯はし、兼ねて開合破會等の意を明す。一に三獸の河を渡るに同じく水に入る、また三獸に強弱有れば、河水に底岸有り。兎と馬は力弱ければ、彼岸に濟ると雖も、浮むこと淺くして深からず、又底に到らず。大象は力強ければ、倶に底岸を得るに譬ふ。三獸は三人を喩へ、水は即空を喩へ、底は不空を喩ふ。二乘は智少ければ深く求むること能はず、喩へば兎馬の如し。菩薩の智深きこと、喩へば大象の如し。水の輭は空を喩ふるに、同じく空を見て不空を見ず、底は實相を喩ふ

【如意珠】梵名を震多摩尼と稱し、意のまゝに種々の珍寶を出す。故に如意珠、または如意寶珠といふ。

ると、菩薩のみ獨り有り、智者は空及び不空を見る。到るに又二種あり、小乘は但空に到り、大乘は深く寶上に到る。別の智は不空を見ると雖も歴別にして實に非ず、圓は不空を見て始めて眞寶を顯はす。是の如きの寶は、但兎馬の二乘の實に非ざることを論破するのみに非ず、菩薩小象不空の寶に非ざることを簡ぶ。乃ち大象の下空を取りて此經の體と爲す。此れ空中其に眞諦とするに約して、此の如きの譬を作すなり。二に頗梨と如意との由は相似て類同じからんと欲すれども、而も頗梨は但空にして寶を出すこと能はず、如意珠は亦は空亦は寶を雨すに譬ふ。頗梨の寶無きは以て偏空を喩へ、如意の能く雨すは以て中道を喩ふ。此れ有無を合して體と爲すに就いて、偏を簡んで圓を顯はす。今の經の體は如意に同じ。又但一の如意珠に約して譬を爲さば、珠を得て力用を知らざるは、唯貴なるのみ。智者は之を得て多く變る所有り。二乘は空を得、空を證して休息す。菩薩は空を得て方便利益し、普く一切を度す。此は含中の眞諦に就いて其得失を簡ぶなり。今の經は智者の如意珠を得るが如きを以て經體と爲す。三に譬へば黄石の中の金の如し、愚夫の識ること無きは之を視て石と謂ひ、擲つて糞穢に在り、都て顧錄せず。估客は之を得て、僅かして其金を出して保重するのみ。金匠之を得れば、種種の釵釧環瑠を造作し、仙客は之を得て練りて金丹と爲し、天に飛び地に入り、日月を捫摸の變通自在なり。野人は一切の凡夫を喩ふ、實相を具すと雖も修習することを知らず。估客は二乘を喩ふ、但煩惱の鑛を除て、即空の金を保して更に所爲無し、金匠は別教の菩薩の善巧方便して、空も

【三】偈を簡ぶ中第六には悟に就い

空に非ずと知り、假に出でて物を化し、佛土を莊嚴し、衆生を成就するを喩ふ。偃容は、圓教の菩薩の事に即して、而も眞にして、初發心の時、便ち正覺を成じ、一身無量身を得て普く一切に應ずるを喩ふ。今の經は、但金丹の實相を取りて、以て經體と爲す。同じきに就いて喩と爲さば、初より後に至つて、同じく是れ金なるは、凡夫と聖教と、倶に是れ實相なり。異に就いて喩と爲さば、初石は金に異なり、次に金は器に異なり、器は丹に異なり。丹は色淨徹にして、類ひ清油の若く、柔輭和好なり、豈に鉛錫に同じからんや。形乖き色別なり、故に一種に不中。此は且く破會に就いて、其得失を論ふ。此に三譬を引くものは、前は根性を喩ふ。根性に淺深有り、淺は其空を得、深は其假を得、又其中を得。次に三情を喩ふ。初の情は但苦を出でて、佛道を志求せず、眞を見て即ち息む。次の情は[illegible]前にして、圓修すること能はず。後の者は廣大にして、法界に遍うして求む。第三は三方便を喩ふ。二乘の方便は少なし、但空を守つて住するのみ。別教は方便多し、中能く次第生するのみ。圓教は方便深し、故に能く雲を呑み、漢を納る。今此經の實相の體を明さば、大象の底を得、堅くして壞すべからざるが如きを以て、佛性を譬へ、[illegible]すは其明珠を譬へ、[illegible]は其法性を譬ふ。此の如きの三譬は、即ち是れ三法なり、不縱不横なるを、名けて大乘と爲す。大乘の中に於て、別して眞性を指して、以て經體と爲すなり。

（三）六に悟に就いて喩ふとは、たゞ實相眞正なること[illegible]上に說くが如し。行未だ理に會せ

て之を偈示。

すれば、豈常住と名くることを得んや。徒らに勞して四求するに、一を逐うて迷を生ず。末と聞きては轉を認ひ、酪と聞きては乳を認ひ、蘇と聞きては酪を認ひ、醍醐と聞きては蘇を認ひて、終に乳の正色を見ることを得ず。情聞夜遊、何ぞ能く識に到らん。叫喚して底を求め、尚く眞有ることを無し、己を執して眞と爲し、皆は是れ妄情なり。此有、復無、是非交に相爭ひ、更に浪動を益す、云何ぞ常と名けん。若し乳を見んと欲せば、頓悟して念つること有り、當剎に機發すれば棄て佛を感じ、眼根開發し、照心明靜にして、信解虛融せん。兩時に開中に汝を見、驗勃として頓に然ならむと名く、人に當時了了たらず。若し能く安忍すれば、法を生ぜずして無明に化す。明淨、淨水流注無ければ、魚石の色は任運に自ら明了なるが如し。清淨の心は常に一なり、是の如きの智明の人は、則ち善く乾沢を見る。金剛眼を換ふるに一指、二指、三指分明なり。兩時色を見て有と言ふも亦是なり、無と言ふも亦是なり。云何ぞ有は是なるや、的的の色は眼と相應し、諸謂の理は智と相稱ふ、之を名けて有と爲す。云何ぞ無と爲す。復堅冷暖動の相無ければ、之を名けて無と爲す。論に云はく、「一切實、一切非實、亦實亦不實、非實非不實、是の如きを皆諸法の實相と名く」と。舍利弗の如き、寶部の中に安住して、「我究竟して當に作佛すべし、天人の爲に敬はれん」と。爾時乃ち證つべし、「永く、盡く除して餘り無し」と。是を眞實に體を見ると名く。故に涅槃に云はく、「八千の聲聞は法華の中に於て如來性を見たり、秋收冬藏して更に所作無きが如し」と。理に約して所作無しと明すは、此は是れ究竟の理な

【四三】辨體に七章を開する中第三には一法の異名を明す。而して又た此を四段に分ち、初に先づ種種の異名を出す。

【天主の千名云云】帝釋天は忉利天主にして三十二天を統御す。梵に〔Śakra devānām Indra〕釋迦提婆因陀羅と云ひ略して釋提桓因と云ふ。舍脂〔Śacī〕は阿修羅の女にして帝釋の夫人なり。

り。教に約して所作無しとは、此教を聞き已つて更に他聞せざるなり。行に約して所作無しとは、此行を修し已つて更に修を須めざるなり。是の如き等の種種の無所作の義あり云云。略して之を言はば、隨智の妙悟に體を見ることを得るなり。當に隨智妙悟の意を以て、諸の諦境の中に於て、節節に體と智と境智との種種の分別あるべし。餘の情想を離び、唯隨智を取りて體相を見ることを明す。

（四三）三に一法の異名とは、更に四と爲す。一には異名を出し、二には所譬を釋し、三には會歸し、四には四諦に約す。一に異名を出すとは、實相の體は祇是れ一法なれども、佛は種種の名を説きたまふ。亦は妙有、眞善妙色、實際、畢竟空、如如、涅槃、虛空佛性、如來藏、中實理心、非有非無中道、第一義諦、微妙寂滅等と名く。無量の異名は悉く是れ實相の別號にして、實相は亦是れ諸名の異號たるのみ。惑ふ者は迷滯して、名を執して異解す。經に云はく、「一無智の疑惑は則ち永失と爲す」と。小乘の論師は專ら名相に於て諍競を興し、法を非し人を毀り、世代微畢して法の怨讐となる。大乘の學者も亦復是の如し。妙有を學ぶ者は自ら至極なりと稱して、畢竟空を聞きて訶詰を生じ、其法を受けず、其人に詣へず。畢竟空を學ぶ者は自ら圓滿なりと謂ひて、妙有を引きて己に背へ、邪を推して他に與ふ。昔天主の千名を識らずして、因陀羅と聞きては喜び、舍脂夫と聞きては恚る。帝釋を乘戲に向望を慢辱して、皆に其福、其果を得はざるを恐る。實相も亦爾なり、同じく是れ一法なれば、豈一を謗り一を信ずべけんや。

【一五】一法の異名を明す中、之より下は解釋なり。

二に解釋とは、小乘の名體は由來明ならざれば且く置いて論ぜず。今辨ずる所は但四句料簡の八門に約す。更に四句と爲す、一には名、義、體同じく、二には名、義、體異なり、三には名義同じうして而も體異なり、四には名義異にして而も體同じ。初句は妙有を名と爲し、眞善妙色を義と爲し、實際を體と爲す。次に畢竟空を以て名と爲し、如如を義と爲し、涅槃を體と爲す。次に虚空佛性を以て名と爲し、如來藏を義と爲し、中實理心を體と爲す。次に非有非無中道を以て名と爲し、第一義諦を義と爲し、微妙寂滅を體と爲す。是の如き等の名字と、所以と、理趣は殊なりと雖も、而も同じく一門を用ふれば意別有ること無し。故に名義體同と言ふなり。第二句の名義體異なりといふは、妙有の如きは是れ名なり、畢竟空は是れ義なり、如來藏を體と爲す。又空は是れ名なり、如來藏を義と爲し、中道は是れ體なり。又如來藏を名と爲し、中道を義と爲し、妙有を體と爲す。又中道は是れ名なり、妙有を義と爲し、空を體と爲す。是の如き等の四門は、更互に不同にして三種皆別なり。故に名、義、體異なりと言ふ。第三句の名義同じうして而も體異なりとは、妙有の如きを名と爲し、妙色を義と爲し、畢竟空を體と爲す。是れ則ち二は同じく一は別なり、故に名義同じくして而も體異なりと言ふ。又空を名と爲し、如如を義と爲し、妙有を體と爲す。此れ亦二は同じく一は別なり。餘の兩門も亦是の如し、故に名義同じくして而も體異なりと言ふなり。第四句の名義異にして而も體同じとは、妙有等の名の如きは名同じからず、眞善色等の如きは義に異なり有り。而して同じく一體に歸して更に二趣無きが故に、名義異

【但空、不但空】森羅の諸法を觀る空觀に機の大小によつて淺深あるを云ふ。但空とは小乘にては諸法を分析して空なりと悟り有を見ず、菩薩は空の中に不空の理法を認むるが故に不但空と名く。

にして而も體同じと言ふ。三門も亦是の如し。前の三句は名義皆融ぜず。初句は一名を尋ねて一義を得、一體を得て、當門圓融して餘事に關はらず。第二句は異名を尋ねて異義異體を識れば、體義名最も融ぜず。此れ知るべきこと易し。第三句は體圓に融ぜざれば、名と義は同じと雖も終に不合を成ず。皆是れ別門に義を明すなり。意を得ざる者は諍ひ此より起り、或は小は大を陵ぎ、或は大は小を奪ふ。何となれば、小乘は生死を斷ぜんと欲すれば、畢竟不但空を聞きて其情欲に順じ、是れ但空なりと謂つて、此を執して諍ひを起す。又小乘は生死を斷ぜんと欲するが故に有に非ず、涅槃を樂する病を破するが故に無に非ず。中道の非有非無を聞きて其小情に扶するを、是れ已が眞の非有非無なりと謂ふ、故に二門に於ては多く諍競を起す。若し中實の理心を開きて小と相乖けば、則ち諍ひを起さず。何となれば、二乘は空を樂びて而も今有を開く。二乘は灰身滅智すれば、今心智を開くに彼情と乖く、故に執して諍ひを作さざるなり。是れ小、大を陵蓋するを以ての故に諍ふ。大は小を奪ふとは、大乘の學者は共三乘の人の空門と、非空非有門との名二乘に同じきを見て、深意を見ず。即ち著して誑相不眞宗に屬す。但妙有と亦空亦有の兩門を取りて、是に圓常の法を引き、二を廢して二を存せず、此諍ひは少しく可なり。若し空は是れ不但なり、非有非無は是れ二邊を遮すと知るは則ち四門倶に奪にして、而も小は苦に二門を諍ふ。又大乘の四門は名義融ぜず、門門各各諍ひて自ら相呑噬す。況や小乘をや。野干、師子を陵奪す、寧ろ苦を噉はざるべけんや。三句は諍を生ずれば、今の經體に

非ず。今四句は名稱異にして而も體同じく、體に實有りて功用異なし。四門は義に隨つて種種異稱あれども、體同するを以ての故に同に實名に歸す。法體既に同じければ、異名異當なれども而も體は異ならざるなり。其相云何、今當に略して示すべし。無量義に云はく、「無量義とは一法より生ず」と。其一法とは所謂る實相なり。實相の相は、相として相ならざる無く、相として相無きにあらず。名けて實相と爲す。此れ眞實を破壞すべからざるに從つて名を得。又此實相は諸佛の得法なり、故に妙有と稱す。妙有は見るべからずと雖も諸佛は能く見る、故に眞善妙色と稱す。實相は二邊の有に非ず、故に畢竟空と名く。空理湛然として非一非異なり、故に如如と名く。實相は寂滅の故に涅槃と名け、覺了不改の故に虛空佛性と名け、含受する所多きが故に如來藏と名け、寂照靈知の故に中實理心と名け、有に依らず亦無に附せざるが故に中道と名け、最上にして過ぐるもの無きが故に第一義諦と名く。是の如き等の種種の異名は、倶に實相に名く。種種なる所以は、倶に是れ實相の功能なり。其體既に同なれば、名義隔つること無し。蓋し是れ經の正體なり。復次に諸法は既に是れ實相の異名にして、而も實相の當體なり。又實相は亦是れ諸法の異名にして、而も諸法の當體なり。妙有は破壞すべからず、故に實相と名く、諸佛能く見るが故に眞善妙色と名く、餘物を雜へざるを畢竟空と名け、二無く別無きが故に如如と名け、覺了不變の故に佛性と名け、諸法を含備するが故に如來藏と名け、寂滅靈知の故に中實理心と名け、諸邊を遮離するが故に中道と名け、無上無過なれば第一義諦と名く。隨つて一法の當體を

【一八】一法の異名を明す中、第三には譬を以て之を顯す。

以て、用ふるに隨つて稱を立つること此に例して知るべし。大經に云はく、「解脫の法は諸の名字多し、百句の解脫は秖一の解脫なり」と。大論に云はく、「若し法の如く佛と般若と涅槃とは、是三則ち一相なりと觀ずれば、其れ實に異なり有ること無し」と。若し此意を得れば、種種の名指實相と名け、亦般若と名け、亦解脫と名くることを知る。三法は亦是れ諸法の名。諸法は亦是れ三法の體なり云云。

(六)三に譬を以て顯はすとは、譬へば一人を金師と名け、能く金を鍛ひて、其體黃なるが如きは初句の法を譬ふ。譬へば一人を吉と名け、能く漆を作り、其身白淨なり。又一人を烏と名け、能く朱を硏きて其身則ち朱なるが如し。是の如き等の無量百千の名、其身異なるは第二句を譬ふ。譬へば百人同姓同名にして、同じく一技を解し、而して其身各各異なるが如きは第三句を譬ふ。譬へば一人亂に遭ひ、鬻を業りて、處處に姓を易へ、處處に名を變へるが如し。張儀范蠡が類の如き、多の官職に涉り身に衆位を備ふ。若し多技に從へば書畫金鐵等の師と名くることを得、若し文官に從はば儒林中散、若し武官に從はば熊渠次飛なり。處に隨つて名を換ふるは名の異なるを譬へ、技に隨つて稱を得るは義の異なるを譬ふ。而も體是れ一にして更に異人に非ず。經に言はく、「王家の力士は一人當千なり。此人未だ必ずしも力千に敵せされども、直種種の技藝の能く千に勝るを以ての故に、かるが故に當千と稱す」と。工(習)衆技に徧うして、技として通ぜざること無く、仕へて衆位を具し、官として歷ざること無し。是れ不可境の人、妙技術の人、有膽氣の人、無

【七】一法の異名を明す中、第四には四隨に約して之を解釋す。

[illegible]の人、[illegible]の人、[illegible]敵の人、上[illegible]の人、[illegible]の人、多[illegible]の人、中[illegible]、信[illegible]の人、[illegible]の人にして、亦四句の法を擧ぐるなり。[illegible]を以て[illegible]にすこと[illegible]たり、故に如んぬ、前の三句は[illegible]に[illegible]し、後の一句は[illegible]に[illegible]す。

〔三〕四に四隨に約せば、問ふ、「實相は一法なり、何が故ぞ[illegible]するや」と。答ふ、「悉檀に隨ひて[illegible]し、[illegible]に赴き、宜しきに赴き、治に赴き、[illegible]に赴く」。[illegible]せば[illegible]人の[illegible]を[illegible]には則ち[illegible]を[illegible]て、[illegible]を修すれば則ち[illegible]を[illegible]み、[illegible]を[illegible]くすれば則ち中を[illegible]するが如し。[illegible]に聞くことを欲せざれば、之を聞くも悅ばず、[illegible]するに心無く、煩惱を[illegible]せず[illegible]心を[illegible]せず。「[illegible]己」[illegible]に[illegible]れて性を[illegible]ず、[illegible]法の根緣と作ることを得ず。如來[illegible]に佛眼を以て、其信等の諸根を觀じ、[illegible]干の言辭を以て隨應方便して爲に法を說く。[illegible]の根性の[illegible]に[illegible]有、[illegible]女色を說くに、[illegible]道を[illegible]はずして、信戒忍進は空見を[illegible]し、即ち[illegible]く悟入して實相に[illegible]ふ。空の根性の爲に畢竟空、如如、涅槃等を說くに諦聽[illegible]し、善を以て惡を[illegible]め、無[illegible]最上なり。亦空有の根性の爲に虛空佛性、如來藏、中實理心を說くに、欣然として善を[illegible]し、非を離れて心[illegible]し。非空非有の根性の爲には即ち非有非無の中道二邊を遮し、不來不去、不斷不常、不一不異等を說くに、聽聞せんことを得んと欲して欣ぶこと渴飮の如し、信[illegible]して衆善發生し、[illegible]見皆徒て惡[illegible]として盡さざること無く、第一義の理[illegible]然として明らかに發す。此四根に隨ふ故に四門異說す、說異なるが故に名異なり、功別なるが故に義異なり。理を悟ること殊ならざれば、

【八】辨體に七章を開する中第四には入實の門を明す。即ち初にその來意を示し、次にまた四意を開す。

【九】入門の門を明すに四意を立つる中、今初には門の相を示す。即ち初には總釋なり。

體終に是れ一なり。故に求那跋摩の云はく、「諸論各端を異にすれども、修行の理に二無し。偏に執するは是非あれども、達する者は違諍有ること無し」と。故に四門は唱を殊にすれども、是れ一實の異名なるのみ。

(八)第四に實相に入るの門を明さば、夫れ實相は幽微にして其理淵奥なり。絕塞に登らんとするに必ず雲梯を假るが如く、眞源に契はんと欲せば要ず教行に因る。故に教行を以て門と爲す。下の文に云はく、「佛教の門を以て三界の苦を出づ」と。「佛子行道し已つて來世に作佛することを得ん」と。門は能通を名くといふは此謂なり。略して四意と爲す、一には略して門の相を示し、二には入門の觀を示し、三には圓妙を示し、四には開顯を示す。

(九)門の相を示さば、夫れ佛法は宣示すべからず、而も緣に赴きて說けば必ず四句を以て理を詮じ、能く行人を通じて眞實の地に入る。大論に云はく、「是の如きの法に於て第一義悉檀を說く。謂ゆる一切實、一切不實、一切亦實亦不實、一切非實非不實、是の如きを諸法の實相と名く。實相は尙是れ一に非ず、那ぞ四と言ふことを得ん」と。當に知るべし、四は是れ實相に入るの門なるのみ。又云はく、「四門より淸涼池に入る、是門無礙なり。唯利者のみ入ることを得るに非ず、鈍者も亦入る。唯定者のみに非ず、散心專志精進の者も亦入ることを得」と。又云はく、「般若に四種の相有り、謂ゆる有相、無相、乃至、非有非無相なり」と。般若は尙一相に非ず、云何ぞ四相あらん。當に知るべし、亦是れ般若に入るの門なることを、又云はく、「般若波羅蜜は、譬へば大火炎の四邊取るべからざるが如

し、邪見の火熾くが煎なり。若し火に觸れざれば、身を溫め食を熟す。若し火に觸るれば、火則ち身を燒き、身旣に燒かるれば溫食も用無し。四門は本般若に通じ、煩惱を除きて大事を辦す。若し著する者は則ち邪見を成ず法身を燒く、法身旣に燒くれば四門何等にか通ぜん。若し火に觸れずんば、門則ち能く通ずるなり。若し佛教を以て門と爲すは、教を略して四と爲す云云。若し一教に於て、四句を以て理を詮すれば、即ち是れ四門なり。四門合して十六門と爲す。若し行を以て門と爲さば、教を稟けて觀を修し、思に因つて入ることを得るは、即ち行を以て門と爲す。教に藉りて眞を發するは、則ち教を以て門と爲す。若し初に教を聞くは、快馬の鞭影を見て即ち正路に入るが如し、修觀を須ひず。若し初觀を修するは、夜雷光を見て即ち道を見ることを得ば、更に教を須ひざるが如し。並に是れ往昔の善根習熟す、今教門に於て通ずることを得れば名けて信行と爲し、觀門に於て通ずることを得れば法行と名く。若し聞きて即ち悟らずんば、須く觀を修すべし。觀に於て悟る者は轉じて法行と成る。若し觀を修して悟らずんば、更に法を聽くことを須ひ、法を聽きて悟ることを得れば轉じて信行と名く。教は即ち觀の門と爲し、觀は即ち教の門と爲す。教を聞きて而も觀じ、教を觀じて而も聞き、教觀相資けて則ち通入して門を成す。教觀合して論ずれば則ち三十二門有り、此れ其大數を許するのみ。細に門を尋ぬれば、實には無量有らん。五百の身因三十二の不二門あり、善財は法界に遊びて無量の知識に値ひ、無量の教門、無量の觀行を說く。喜見城の如きは千二百の門あり、實相の法城豈唯一轍

【一〇】之より下は別して四教に約して門の相を明す。乃ち初には三藏教なり。

【三藏教】化法四教の第一にして小乘教を指す。因緣生滅の理を說き、萬有は煩惱業の因緣によりて生じ、因緣盡くれば萬有亦滅盡すと教ふ。卽ち界內の事教なり。

【昆勒論】小乘四門の一、亦有亦空の理を明す、佚藏譯一卷。

ならんや。經に云はく、「種種の法門を說きて佛道を宣示す」と。

(一〇)今且く四教に約して十六門の相を明さん。三藏の四門とは、初に有門を明さば謂はく生死の法は本より世性、微塵、父母の所作に非ず、乃ち是れ無明正因緣の法より諸行を出生す。煩惱業苦の三道悉く皆是れ有なり。一切は有爲、無常、苦、空、無我なり。能く煖、頂、世第一法を發得し、眞無漏の因を發して眞を用ひて道を修す。此れ則ち道諦も亦是れ有なり。子果既に斷じて有餘無餘の涅槃を得。故に大集に云はく、「甚深の理は說くべからず、第一義諦は聲字無し。陳如比丘は諸法に於て眞實の知見を獲得す」と。此れ則ち滅に因りて眞に會す、眞も亦是れ有なり。此は是れ諸の阿毘曇論の申ぶる所にして、有を見て道を得るは即ち有門なり。二に空門は、即ち是れ彼教に正因緣無明、老死、苦集二諦を析す。三假浮虛は假實を破し、悉く空平等に入り眞無漏を發す。空に因りて眞を見れば、空は即ち第一義の門なり。故に須菩提は石室に在りて、生滅無常を觀じて空に入る。空に因りて道を得、佛の法身を見る。恐らくは、此は是れ成實論の申ぶる所なり。三に有空門を明さば、即ち是れ彼教に正因緣生滅を明すに、亦は有亦は空なり。若し此教を稟くれば、能く偏に有無を執するの見を破す。因緣の有空を見て眞の無漏を發し、有無に因りて眞の有無を見る。即ち是れ第一義の門なり。此は是れ迦旃延、門に因りて道に入る。故に昆勒論を作りて還つて此門を申ぶ。四に非有非無門とは、即ち是れ彼教に正因緣の生滅を明す、非有非無の理なり。若し此教を稟くれば、能く有無の邊邪の執見を破し、

【二】通教四門の相を明す。【通教】化法の四教の第二。即空の無生の四眞諦を詮し、三乘通じて同學せしむ。即ち界内の理教なり。

因縁の非有非無を見て眞無漏を發す。非有非無に因りて眞の非有非無を見るは即ち第一義の門なり。阿含の車匿は此に因つて道に入れども、未だ其の來るを見ず。有人の言はく、「犢子阿毘曇に此の意を申ぶ」と。彼論に、我は第五の不可説藏の中に在りと明す。我は三世に非ざる故に有我に非ず、無爲に非ざる故に無我に非ず。此恐らくは未だ定んで用ふべからず。

二に通教の四門の相を明さば、此は是れ摩訶衍門なり。通に通じ別に通ずれば、偏に取るべからず。今通に通ずるに約して四門を論ぜば、上の三藏の四門は皆色を滅して空に入る。實人の頭等の六分を析して、人を求むるに得ざるが如し、故に名けて空と爲す。通教の四門は皆色に即して是れ空なること、鏡像を觀ずるに六分即空なるが如くにして、析し盡して空と爲すことを待たず。大論に云はく、「佛比丘に告げたまはく、色空は即ち[illegible]、[illegible]は即ち空なり」と。此は是れ體門の衍門に異なるところなり。三藏は生空を觀じて道を得已りて、次更に法空を觀ずれば、生法の二境融せず。今の通門は生空即ち法空、法空即ち生空にして、二無く別無し。大品に云はく、「色性は我性の如く、我性は色性の如く、此二皆幻化の如し」と。有人の言はく、「三藏は實性を計するを破し、實法に約して我を求むるに得ず、但是れ性空を觀ず。大乘は相の自性是れ空なりと明し、檢し已りて空と爲すことを須ひず」と。此れ乃ち一往の言なり。大品に云はく、「常性空にして性空ならざる時無し」。諸法を曉了するに、幻化、水月、鏡像の如し、豈性相空のみならん。祇此幻化に約し

【二】別教四門の相を明す。

【別教】化法四教の第三。眞妄の二法を隔別し、眞は平等にして妄惡は差別す。乃ち九界差別の妄法を斷破して佛界平等の理性に悟入すべきことを教ふ。是れ界外の事教なり。

て即ち四門を判ず」と。論に云はく、「一切實、一切不實、一切亦實亦不實、一切非實非不實」と。佛は此四句に於て、廣く第一義悉檀を說きたまふ。一切實を有門と爲すは、若は業、若は果の善惡等の法、乃至涅槃は皆幻化なればなり。譬へば鏡中の像は實性無しと雖も、而も幻化頭等の六分あるが如きを有門と爲す。諸法既に幻化の如し、幻化は本より自ら實無く、實無きが故に空なり、乃至涅槃も亦幻化の如し。鏡中の像の假に形色有りて、(而も)求むるに得べからざるが如し。是を空門と爲す。諸法既に幻の如し、故に名けて有と爲す。幻は不可得なり、故に名けて空と爲す。鏡中の像の、見れども而も見るべからず、見るべからずして而も見るが如し。是れ亦空亦有門なり。幻有尙不可得なり、況や復幻空にして而も當に得べけんや。即ち是れ兩ながら捨つるを門と爲す。是れ通教即空の四門なり。若し三乘共に稟くれども、而も根性同じからざれば、各四句に於て第一義に入る、故に此四句を皆名けて門と爲す。故に青目の注論に云はく、「諸法實相に三種有り」と。今是三乘の人同じく此門に入つて第一義を見るは、是れ即空の一種なり。

三に別教の四門を明さば、若し中論の偈を用ひば亦名爲假名なり。而も四門を辨ずるは即ち大論の四句の如し、亦是れ此四句の意のみ。言ふ所の別とは、下は二道に異なるに亡義有るが故に別なり、上は圓教に異なり、又歷別に中に入る故に別と言ふ。此意は正しく大經に出づ、但多く略說せり。今乳等の喩に約して即ち別の四門を辨はす。文に云はく、「佛性は乳に酪有り、石中に金有り、力士の額珠の如し」と。即ち是れ有門なり。若し石に金

【一三】圓教四門の相を指す。

【一四】入體の門を明すに四意を立つる中、第二には入門の觀を示す。即ち初には、略して入門の處を示すなり。

の性無く、乳に酪の性無しと明さば、衆生の佛性は猶虚空の如し。大般涅槃も空、迦毘羅城も空とは即ち是れ空門なり。又云はく、「佛性は亦有亦無なり。云何ぞ有とせん、一切衆生悉く皆有なるが故に。云何ぞ無とせん、善方便に從つて見ることを得るが故なり。」又譬ふるに、乳の中に亦酪の性有り、亦酪の性無し。即ち是れ亦有亦無の門なり。若し佛性は即ち是れ中道なりと明すは、雙非兩遣なり。又譬ふるに、乳の中に酪の性有るに非ず、また酪の性無きに非ず。即ち是れ非空非有門なり。別教の菩薩は此四門の教を稟け、佛性を見るに因りて大涅槃に住す。故に此四句は即ち是れ別教の四門なり。一往用ひて別門に擬す、經の文は或時は圓門と爲せども、此義下に在りて料簡す云云。

（一三）圓教の四門の相は、此門は佛性第一義に入ることを明す。一往は別門と名義是れ同じけれども、細しく意趣を尋ぬれば別に多途有り。その同異を分別すること、下に在りて委しく論ずべし云云。

（一四）二に入門の觀を示すに即ち二と爲す。先には略して入門の處を示し、二には略して入門の觀を示す。略して入門の處を示さば、能通の教門は大に十六と爲せども、所通の理は但是れ偏圓の兩眞なり。前の八門は同じく偏眞に入り、後の八門は同じく圓眞に入る。何が故に、偏眞の理は一にして門は八なるや。三藏の四門は紆廻隘陋なれば名けて拙度と爲し、通教の四門は是れ摩訶衍にして寛直の巧度なり。門に巧拙の殊り有れば能通を八と爲し、眞理は二無ければ所通は唯一なり。譬へば州城に四面の門を開くが如し。四面の偏門は以

【圓教】化法四教の第四。界外利根の衆生に對して、事理不二圓融の中道實相を説く。即ち界外の理教なり。

【一五】之より下略して入門の觀を示すに初に三藏教に就いて之を明す。而してまた初に有門の觀を明すに信法の兩行を立し、然る後法行に約して十觀を明す。即ち十觀の名を列ね乃至その一に所觀の境を釋す。

て三藏を譬へ、四面の直門は以て通教を譬ふ。偏直既に殊なれば能通を八と爲し、使君は是れ一なれば所通不二なり。別教の四門は偏にして未だ融せず、圓の四門は圓にして且融ず。偏圓既に殊なれば能通を八と爲し、圓眞は不二なれば所通は唯一なり。譬へば帝城に四面の門を開くが如し。四面の偏門は以て別教を譬へ、四面の直門は以て圓教を譬ふ。偏直既に殊なれば能通を八と爲し、帝尊は不二なれば所通は唯一なり云云。問ふ、『小乘は一種の四門にして、摩訶衍は何が故にか三種の四門なるや。』答ふ、『小乘は淺近なれば一生に結を斷ず、喩へば小家の如し。大乘は深遠なれば通ずる處則ち遠し。譬へば大家の千門萬戸を須ふるが如し。三（種の）四（門）も何ぞ多とするに足らん。』問ふ、『摩訶衍の門は那ぞ三人眞を見ることを得るや。』答ふ、『此門の正意は大に通じ、傍に小に通ず。譬へば王國に通門別門有り。別門は國士を通じ、通門は朝市に通ず。民庶登躋するを以て、謂つて民門と爲すべからざるが如し。摩訶衍の通門も亦是の如し、正しくは實相に通じ、傍らに眞諦に通ず。故に三乘の灰斷は兼ねて此門に由る。偏眞に兼通するを以て、而も小乘の門と名くべからず。

（一五）二に略して入門の觀を示すに、先に三藏の有門の觀を明す。彼有門の中に信法を具し、信行は説を聞きて即ち悟れば此心疾利なり、得道の方法は人に示すべきこと難し。且く法行の觀門に約せば、即ち十意と爲す。一には所觀の境を識り、二には眞正の發心、三には遵つて定慧を修し、四には能く法徧を破し、五には善く通を知り塞を知り、六には善く道

說を明さ、七には善く對治を用ひ、八には善く次位を知り、九には善く能く安忍し、十には法愛を生ぜず。[illegible]の中に[illegible]十法を具すれども其文煩[illegible]なり。今は[illegible]道を行ぜんと欲するも、何に依つてか修するを知らず、岐路に惑ひて所往を識ること無きが如し。今其要意を撮つて、通じて始終に冠らしむる時は、則ち有門入道の觀を顯すなり。一に所觀の境を明さば、即ち是れ正無明の因緣より一切法を生ずと識る。若し世間の苦樂の法は毘紐天より生ずと謂ひ、或は世性より生じ、微塵より生ずと言ふは、皆邪因緣の生なり。若し自然法爾として誰か作者無しと言ふは、此れ無因緣の生なり。無因緣の生は是れ因を破して果を破せず。邪因緣は亦是れ正因果を破す。是等は悉く正因緣の境に非ざれば、觀ずべからざる所なり。數(論)は隣虛を存し、(成實)論は隣虛を破す。此れ邪無と相濫じ、殆ど正因緣の境に非ず。何となれば、隣虛の有無は未だ二見を免れざれば、猶是れ無明顛倒なり。倒の故に是れ集、集の故に羅縠等の色を感ず。無明顛倒は既に其れ不實なり、所感の苦の果報那ぞ定んで有無の計することを得ん。故に大論に云はく「色の若は麤なるも、若は細なるも、總じて之を觀ずるに無常無我なり、無我の故に主無し。若は麤、若は細、若は因、若は緣、若は苦、若は集、若は依、若は正、皆無常無主にして悉く是れ無明顛倒の作す所なり。阿毘曇門に廣く說くが如し。是を正因緣の所觀の境を識ると名く。外道の邪無の因緣に同じからず。

(一六四)二に發心眞正とは、既に無明顛倒の流轉、行識、乃至老死は旋火輪の如しと識る。結業

【毘紐天】(一六三)又毘瑟紐、毘瑟笯、韋紐、毘搜紐と云ふ。那羅延天若くは自在天の別名なり。

【隣虛】極微とも云ふ。色法の根本分子にして外道并に小乘有部にては常住を認むれども其他は認むることなし。

【二見】斷常二見を云ふ。之れ正因緣を見ざるより來る謬見なり。

【一六四】次に眞正發心を明す。

【四七】遵修定慧を明す。

【四八】波羅提木叉】(Prātimokṣa) 戒律の名の一、別解脱戒と釋す。

は休息せんと欲して正に涅槃を求め、二乘の心を發して見愛を出離し、名利を要めず。但諸有を破して、苦集を增長せずして唯無爲を志す。其心清淨にして雜はらず、僞ならず。此心眞正なるを正發心と名く、外道天魔に同じからず。

三に遵修定慧といふは、行人既に誓つて有を出づることを求め、波羅提木叉に依りて住して道を修するに、但邪障紛動して心安んずることを得ず。道何に由つてか剋せん。四念處を修するが爲に、五停心を學し、五種の障を破す。五停の事觀は即ち是れ定、定の念處を生ずるは即ち慧なり。慧と定と均停なるが故に、安心と名く。又定慧調適す、故に停心と名く。若は定慧無く、若は單の定慧なる、若は均調ならざる定慧は、皆賢人と名けず。世間の賢人の智德具足するが如き、智は則ち闇はざる解脱し、德は則ち實行虧くること無し、許由巢父は乃ち賢と稱すべし。若し智多くして德寡ければ狂人と名け、德多くして智寡きは癡人と名く。狂と癡と皆賢に非ず。賢は賢能を名け、亦賢善と名く。善の故に德行り、能の故に智行りて智德具足す、故に賢人と稱す。行者も亦爾なり、四念處の方便を爲し、五停心の定を學して定慧具足す。云何が數息に定慧を具足して、諸の覺觀を制する。一より十に至つて息及び數を知るに、無常生滅して念念停まらず。又若し不淨を觀ぜば、當に深く臟惡を厭ふべし。能觀・所觀無常生滅し、速朽虛誑にして諸の衆生を誑かす、觀を厭ひて慧を起さば、須く慈と定と相應すべし。他の得樂を見ば、亦此定及び彼樂相の無常生滅を知る。因緣觀の時は橫に四生悉く是れ因緣生の法なりと觀じ、竪に三界

【一八】破法徧を明す。

【四品】雜四修品と破邪見品とをいふ。

も亦是れ因緣生の法なりと觀ず。根上の生ずる者は、悉く是れ無常無我なり。前の諦起らば、更に重く念術を用ふべきこと、上來の如し。是れ五停具に定慧を修すと名く。定有るが故に狂ならず、慧有るが故に愚ならず。此に依つて心を安んずるを、正行の具足と爲す。觀行を數作して常途の實用に入り、更に開るを發すの資此に在り。外道の闇證を知らざるに同じからず。豈に隨情に造惑し、或は阿陀頻蘇等をや。

二に破法徧とは、見有爲法を破するは、其れ心を定慧に安んず。若し五停心の後共念處を修する時、不淨等を帶して偏く諸法を破するは常理、悉く破す。若し五停心の後、單に性念處を修する時は一向に理觀なり。無常の理を以て偏く諸見を破す。破見の觀は、中論の下の兩品に明す所の如し。總じて四倒を翻ずるに斷證を成すや、但無常を明して偏く一切の邪道の、若は有、若は無、乃至非有非無、常無常等の六十二見を破して、斯の理なることを明せしなり。今因緣常等は他の破を受けて云はく、無常は是れ小乘、常は是れ大乘なり。常は無常を破することを得るも、無常は常を破することを得ず。若し前の道を得れば、是れ斷に墮するなから、未だ理を得ざる前の執心所計の常、無常、亦常亦無常、非常非無常等の諸見は、倶に二見に對して諸見を生ず。見は緣より生ず、緣より生ずる者は悉く是れ無常なり。云何ぞ外道に常樂我淨有らん。是の如きの四倒は、悉く無常を用ひて之を破す。故に五百の比丘、達理に語つて言はく、但無常を修して以て道を得べく、以て曲を得べし」と。六群比丘の如く、他の意に法を説かば純ら無常を説く。當に

【一九】知通塞を明す。

【二〇】善修道品を明す。

知るべし、見に滯礙無く、悉く無常の藥に破せらる。譬へば諸の乳藥を用ゐるに同じか
らざるなり。

(一九) 五に知通塞とは、前に徧く諸見の過を破すと雖も、若し其の塞を見ず。塞は即ち是れ苦、集は即ち是れ通なり。若し有の見の中の八十八使、乃至非有非無の見の中の八十八使は、悉く惑より生ず。之を名けて塞と為す。塞の中に通じて能く破すべし。道は其の通を識るとは、謂ゆる有の見の中の道滅、乃至非有非無不可說の見の中の道滅なり。是の如きの道滅は因緣より生ず、之を名けて通と為す。通は何ぞ破すべけん。若し諸の見を識らずんば、是事は實にして餘は妄語なりと謂ひ、執見は愛を成じ、愛の圍は塞を感す。苦集に非さらんや。能く諸見に於て、一一皆無常顛倒なりと知れば苦集を生ぜず。執せざる時は則ち苦集無く、苦集無ければ即ち因緣無し。是の如く推する者は則ち道滅有り、豈通と名けざらんや。」ト道の實木を貪みて、是實是牢非牢を知らざるが如くなるに同じからず。

(二〇) 六に善修道品とは、豈唯此の通塞を識るのみならんや、前に道品を修して、一切の法を運むべし。謂はく此有の見、乃至不可說の見を觀ずるに、何の法に依る。汗穢不淨なれば即ち身念處なり。若し有の受を受けば、乃至不可說の受を受くるは皆三受に攝す、受は即ち是れ苦なるは受念處と名く。諸見所起の想行を觀ずるに、悉く是れ無我なるを法念處と名く、諸見の心を觀ずるに、念念無常なるを心念處と名く。此の四觀を觀ずるに、有爲法の中に正憶念を得ると名く。是念を得るが故に、四倒則ち伏するは、是を念處と名け、四勤を動修するを

足と名け、定心の中に發するを四如意足と名け、五善根生ずるが故に五根と名け、五根增長して五障の惡法を遮る故に五力と名け、之を調停するを七覺分と名け、安隱道の中に行ずるを八正道と名く。今は行陰の道品に非ず、但だ陰界に就いて三十七を論ずるのみ。若し一の停心門に三十七品を作らば、餘の停心も亦是の如し。諸見煩惱の中に廣く分別すべし云云。此三十七品は是れ各道の法なり、將に涅槃の城に至らんとするに三門あり。謂はゆる苦の下の二行を空解脫門と爲す、集道に各四あり、苦の下に二行有り、是れ無作解脫門なり。滅の下に四有り、是れ無相解脫門なり。若し涅槃の門開けば即ち入ることを得、故に觀は頂數の觀の中に於て涅槃に至す。唯我が法の中にのみ八正道有り、外道の法の中には向一道すら無し、何に況や八道をや。

【二】對治を明す

七に對治とは、若し利人は前の如くなるも、若し入らざる者は當に助道を修すべし。故に論に云はく、「十二部經は悉く是れ助開門の法なり、正道に依らざれば涅槃に到ることを得れば、助道を修して資と爲す」と。論に云はく、「若し貪欲起れば不淨行觀等を修することを教ふ。緣の中に自在ならずんば、當に背捨を教ふべし。緣の中に勝處ならずんば、當に一切處を教ふべし。若し禪定少なければ、當に無量心を教ふべし。若し色を出でんと欲せば、當に四空を教ふべし。是の如き等は悉く是れ助道助開門の法なり。外道の根本禪に於て愛見慢を起すに同じからず。

【三】知次位を明す

八に善識次位とは、此の如く正助等の法を修すと雖も、即ち我は是れ聖人なりと言ふことなかれ。

【二三】能安忍を明す。

【二四】無法愛を明し、然る後有門、亦空亦有門、及び非空非有門の三をも例して三藏教の觀を終る。

とを得ず、眞似を明識するは實理を知らざるなり。今明かに眞似の階差を識りて、自ら聖に非ずと知れば、增上の慢則ち生ずることを得ず。外道の戒取見取に生死の法を計して、以て涅槃と爲すに同じからず。

(二三)九に善修安忍とは、別相念處の力弱くして、未だ甚だ通泰ならざれば、轉じて總相念處を修す。或は總一、或は總二、乃至は總四なり。是の時應に須く安忍して、諦觀をして成就せしめ、轉じて煖法に入り、似道の煙り生ずべし。大經に云はく「煖は有漏有爲なりと雖も、還つて能く有漏有爲を破壞す。我弟子には有り、外道には則ち無し」と。又若し安忍すれば即ち頂法を成ず、頂法の成ずるを忍と名け、彼岸に到る。如し其れ忍びずんば、則ち退して此道に還る。故に云ふ「頂法退して五逆を爲し、煖法退して闡提と爲る」と。是故に、此中に善く須く内外の諸障を安忍すべし。外道の細微の遮法を安忍すること能はざるに同じからず。

(二四)十に法愛不生とは、上來巳に四善根生ずることを得れども、若し法愛を起せば退して五逆闡提と爲らずと雖も、而も見諦に入ることを得ず。是れ則ち三番縮觀して、進んで上忍世第一法と成る。苦忍の眞明を發し、十六刹那に初果を成ずることを得、或は超果を成じ、或は重ねて觀を用ひて、五下五上を斷じ無學を成ずることを得。若し利人の觀を用ふるは節節に入ることを得、若し鈍人の觀を用ふるは共に十に來至す。阿毘曇の中に復廣く解すと雖も、十意を出でず。五百の阿羅漢は毘婆沙を作りて正に有門の得道を申ぶ、云何

【五】入門の觀を示す中、次に通教に就いて之を明す

ぞ是れ調心の方便と言ふ。四門に異通すれば倶に能く道を得、若し取著を生ずれば倶に道を得ず。若し但有を見て道を得、空を見て道を得ずと云はば、云何ぞ外人に異ならん。故に大論に云はく、「若し般若の方便を得ざれば、則ち有無に堕す」と。今十法を以て方便と爲し、直に眞門に入る。亦た外道に異なり。是を以て有門入眞の觀と爲す。餘の空門、亦空亦有門、非空非有門の入眞の觀の始終の方便は、有門に比するに各各不同なり。然るに倶に偏眞に會し、三界の惑を斷ずるは更に異なることと無し。其三門も有に準じて、例して應に十觀なるべし。大同小異なり。意を以て得べし、今煩しく記すこと能はず云云。

〔三〕次に通教の有門の觀を明さば、例して十意と爲す。所者は云云。諸法は皆幻化の如しと體信す。三人の發心同じと雖も亦小異有り云云。中論師の云はく、「此中は是れ大乘の聲聞なり」と。今言はく非なり。經に云はく、「聲聞縁覺を得んと欲せば、當に般若を學すべし」と。論に云はく、「聲聞及び縁覺の解脱涅槃の道は皆般若より得」と。經論には是れ大と云はず、人師の謬れるのみ。定慧不可得なりと知ると雖も、而も心を二法に安んず。幻化の慧を以て、徧く四見、六十二見及び一切の諸法を破す。幻化の中の苦集を知るを名けて塞と爲し、幻化の中の道滅を知るを名けて通と爲す。不可得の心を以て三十七品を修す。所治無きを以て諸の對治を學して、乾慧地、乃至佛地を識る。幻化の慧は外魔の爲に動ぜられず、内障に退せられず。諸法不生にして般若生じ、亦愛著せずして即ち眞に入ることを得。若は智、若は斷、無生法忍なり。前に比するに巧なりとす。準作して知るべし、復委しく記

【二六】入門の觀を示す中、次に別教に就いて之を明す

さず。餘の三門の十意も大同小異なり、意を以て得べし、亦煩しく文を記さざるなり。

〔二六〕次に別教の有門の觀を明さば、即ち十意と爲す云云。一に觀境は凡夫の四見四門の外に超出し、亦二乘の四門の法に非ず、亦通教の四門の法に非ず。諸の四門の法を境と爲すは、實相と名けず。生死涅槃に非ざる如來藏とは、乃ち名けて妙有と爲し、眞實の法有り。此の如き妙有は一切法の爲に依持と作り、此妙有より諸法を出生す。是を所觀の境と爲すなり。二に發心を明さば、菩薩は深く實相の妙有を觀じて、生死の爲に還されず。金藏草穢し頽珠闘ひ沒す、貧窮孤露甚だ憐傷すべし。菩薩此が爲に大慈悲、四弘誓願を起す。思益に三十二の大悲有り。華嚴に云はく「一人、一國、一界、微塵の人の爲にせず。乃ち法界の衆生の爲に菩提心を發す」と。是の如き發心は大勢力有りて、師子吼の如し。既に發心し已れば安心道行す、前に說く所の如き種種の定慧なり。是の如き時の中に、宜しく是の如きの定を修すべし。是の如きの時の中に、宜しく是の如きの慧を修すべし。定の愛と慧の策は心を安じて道を修す、二法に依止して餘に依止せざるは、是を安心の法と爲す。還つて妙有の慧を以て、徧く生死の一切の諸見六十二等を破す。功德黑闇皆悉く受けずして、徧く涅槃沈空の取證を破す、猶大鵬の經鳥を宿さざるが如し。一一の法の中に於て、明かに通塞を知る。雪山の中に備に毒草有り、亦藥王有るが如し。菩薩は須く知るべし、此の如きの心起るは即ち是れ六道の苦集なり、名けて塞と爲す。是の如きの心起るは即ち是れ二乘の道滅なり。名けて通と爲す。又是の如きの心起るは是れ二乘の苦集

なり、名けて集と爲す。是の如きの心起るは是れ菩薩の道滅なり、名けて道と爲す。是の如きの心起るは名けて菩薩の苦集と爲し、是の如きの心起るは佛の道滅と名くるを。苦集の中に於て、能く非道を知りて佛道に通達し、能く佛道を知つて煩惱を絕し、了了として滯り無きは、是を通塞を識ると爲す。道品とは、夫れ三十七品は是れ菩薩の寶炬陀羅尼なり。倒を破するの金剛、觀、行、定、心、五分法身を生し、能く五陰を照す。定慧調適し、安隱道の中に行ず。十相を離るるが故に空三昧と名け、亦空相を見ざるを無相三昧と名け、願求を作さざるを無作三昧と名く。是行道の過は近通塞門なり。若し諸法對治の門を修するは、所謂る常無常、恆非恆、安非安、爲無爲、斷不斷、涅槃非涅槃、增上非增上なり。常に善んで諸の對治門を觀察し、實相を助開す。初十住より十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺あり、此位の深淺を具く知りて濫まることと無く、終に相似に上位を濫むと謂はず。內に善惡の兩覺、違從の二境を忍び、外八風を忍ぶ。忍力を成ずるが故に傾動せられず。設ひ相似の法愛を除するも、法愛起らざれば菩薩の頂に墮せず。生を法愛と名く、是愛無きが故に卽ち菩薩の位に入り、無明の穢草を破して妙有の金藏を顯出し、佛性を見ることを得て實相に入る。是を有門に入實の觀を修すと爲す。餘の空門、亦空亦有門、非空非有門の入實の觀も、例して亦十と爲す。諸門の方便は各各不同なりと雖も、俱に圓眞に會して理に差二無し。三門の觀法は、有に準じて知んぬべし、復委しくは記さず云云。

妙法蓮華經玄義卷第八下

【一】略して入門の觀を示す中、之より下は圓教に就いて明す。即ち初に二章を開し、而してその第一に圓門を簡ぶ。中に於てまた初には簡ぶの意を敍べ、次に正しく簡ぶに就いて十門を分つ。

【二】十門の中に於て先づ初に融と不融とに約して別圓の二教を辨ず。

妙法蓮華經玄義　卷第九上

天台智者大師の說

(一)次に圓門入實の觀を明さば、先には圓門を簡び、次には圓觀を明す。上の三種の門は實色を滅して眞に通ず、意を得ざれば諍ひ多し。幻門は幻色に即して眞に通じ、人に無諍の法を示す。別門は生死の色を體達し、次第に法性の色を顯して中に通ずるも、意を得ざれば諍ひ多し。圓門は生死の色に即して是れ法性の色なり、法性の色に即して而も中に通じ、人に無諍の法を示す。故に文に云はく「無上道」と。又云はく「深妙の道を行ず」と、即ち其義なり。上の兩門は中に通ぜざれば、分別するを俟たず。別圓は兩種は俱に中に通ず、其同異を論ずるに略して十と爲す。一には融と不融、二には即法と不即法、三には佛智と非佛智とを明し、四には次行と不次行を明し、五には斷の斷惑と不斷の斷惑を明し、六には實位と不實位を明し、七には果縱と果不縱、八には圓詮と不圓詮、九には權開に約し、十には譬喩に約す。此十意を尋ねて、明かに八門の同異を識る。

(二)一に融と不融を明さば、別教の四門は據る所決定す。妙有の有色は空に關らず、畢竟空に據れば有に關らず。乃至非空非有門も亦是の如し。四門は歷別なれども、當分に各通ず。意を得ざる者は定相を作して取り、性實に似同して殆ど冥初の覺を生ずるに濫す云

云く、前の三藏の有門は、已に外道の邪計を破すること先に畢す、次の空等の三門は、邪を破すること則ち少し。又通の有の四門は三藏の執を破す、又別教の門は通門の近きを破す。已に二乘と與に共せず、何に況や外道の實覺を以て妙有に濫ずるをや。妙有は如來藏に依りて四門を分別す、何ぞ阿梨耶の性實に同じきことを得ん。周璞と鄭璞は名同じく實異にして、貴賤天隔なるが如し。今時學者を學ぶの人は、魯に反きて衛に適り、竊に此義を以て僻みて莊老に安んず。餘有相傳へて遂に邪正をして並濟せしめ、前賢の涇渭を濁たす。若し諸の四門の意を得て、精しく眞僞を簡べば濫生せず。然るに別門は定説を作すと雖も、是の如きの別門は諸佛の境界なれば二乘も知らず、豈外道に同じからんや。圓門は虚融微妙にして、定實すべからず。有を説くも無を隔てざれば、有に約して無を論じ、無を説くに有を隔てざれば、無に約して而も有を論ず。有無不二にして決定の相無し、假に有に寄せて以て言端と爲す。而るに此有門は亦即ち三門なり、一門無量門、無量門一門なり。一に非ず四に非ず、四にして一、一にして四なるは此れ即ち圓門の相なり。復次に更に破會に約して融不融の相を明すに、若し外道の邪見を破するも、二乘の邪曲を破せず、亦大乘の方便を破せず。又會すれども圓ならざるものは、淨名の中の如し。凡夫の反復を會するも聲聞は無し、塵勞の儔を會して如來種と爲すも、無爲にとて正位に入るは反復すること能はず。生死の惡人、煩惱の惡法皆會せらるるも、二乘の善法、四果の聖人は會せられず。又般若の中に、二乘所行の念處道品は皆摩訶衍なり、貪欲、無明、見愛等も

【三】十門分別の中、次には即法と不即法とに就いて論ず。

皆摩訶衍なりと明し、善惡の法悉く皆會せらるるも、亦惡人及び二乘の人等を會せず、其作佛を辨ぜざるは、此れ即ち別門の攝なり。

若し圓の破は、別教より已去皆是れ方便なり。故に遍集自ら破して云はく「此より前は我等皆邪見の人と名く」と。既に邪見の人と言ふ、則ち圓の正道の法無し、則ち人法俱に破せらる。別教の人法尚爾り、何に況や草菴の人法をや。二乘も尚爾り、何に況や凡夫の人法をや。是れ則ち圓の破は困留する所無し。圓の會は、諸の凡夫著法の衆を會す。汝等皆當に作佛すべし、我敢て汝等を輕んぜずと。五逆の調達も、亦受記を與へ、龍畜等も亦受記を與ふ。況や二乘菩薩等をや。世間の治生産業皆實相と相違背せずと、即ち一切の惡法を會するなり。汝等の所行は是れ菩薩の道なりと。析法の二乘も尚會せらる、況や通、況や別をや。汝は是れ我子、我は即ち是れ父なりと。人法として、會せられざること有ること無く、俱に皆融妙なるは、此れ即ち圓門の攝なり。復次に、更に經文の前後に約して圓不圓の相を明す。若し先に不融門を明すは此れ地前を說き、後に不融門を明して而も證融を言ふは此れ向の後を說く。或は先に證融門を明すは此れ向の後を說き、後に不融門を明すは此れ地前を說く。此れ皆別門の攝なり。若し先に融門を明し、證亦融ずるは此れ信の後を說き、後に證の不融を明すは此れ住前を說く。或は先に證の不融を明すは此れ住前を說き、後に證融を明すは此れ信の後を說く。此れ皆圓門の攝に屬す云云。

（二）二に即法不即法とは、若し有を說きて門と爲すは、此有、生死の有に非ず、生死の外に

【四】十門分別の中、第三に佛智非佛智に約して辨ず。

【五】十門分別の中、第四には次第と不次第とに約す。

出でて別に眞善妙有を論ず。今門は二乘の眞の外に出でて別に非有空を論じ、乃至非有非無門も亦是の如し。此を別の四門の相と爲す。若し有を門と爲すに生死の有に即して是れ實相の有なり、一切の法は有に趣き、有即ち法界なり。法界に出づるの外、更に法の論ずべき無し。生死即ち涅槃、涅槃即ち生死にして二無く別無し、有を舉げて門體と爲すのみ。實は一切の法を具して圓融無礙なり、是を有門と名く。三門も亦是の如し。此れ即ち生死の法にして是れ圓の四門の相なり。復次に即法に通と不通と有りて圓別の相を判ずるは、前に例して分別す云云。五住に約して通と不通とあり。復次に即法と不即法と、或は前廢は後に別圓の相を判ず。前に分別するが如し云云。

(四)三に佛智非佛智に約せば、若し有を門と爲すに一切智の空法を了達するを分別し、道種智の恆沙の佛法の差別不同を照すを分別するは、是れ菩薩智にして即ち別の四門の相なり。若し有を門と爲し、一切種智左眼具足して、圓に法界を照すと分別し、正徧知なるは即ち諸佛の智にして、是れ圓の四門の相なり。復次に別門に圓智を著き、圓門に別智を説く。或は前、或は後に別圓の相を分別すること、例して前の如し云云。復次に別門に圓智を證し、圓門に別智を發す。或は前、或は後に別圓を分別すること、前に分別するが如し云云。

(五)四に次第不次第に約せば、若し有を以て門と爲し、門に依りて修行するに、漸次階差ありて微より著に至り、一行の中に即ち無量行なること能はず。乃至非空非有門も亦是の如し、是れ別の四門の相なり。若し有を以て門と爲さば、一切の法は有門に趣く。門に依り

【六】十門分別の中、次には斷惑と不斷惑を明す。

【七】十門分別の中、第六には實位と不實位とに約して論ず。

て修行するに亦一切の行は有の行に趣き、一行無量行なるを名けて徧行と爲す。乃至非空非有門も亦是の如し、是れ圓の四門の相なり。復次に別門に圓の行あり、圓門に別の行あり。或は前、或は後に別圓を分別すること、例して前の如し云云。

(六)五に斷の斷と不斷の斷とに約せば、夫れ至理虚無にして、無明の體性本より自ら有ならざれば、何ぞ智慧を須ひん。解惑既に無し、安んぞ圓別を用ひん。涅槃に云はく、「誰か智慧あり、誰か煩惱有らん」と。淨名に曰はく、「婬怒癡の性即ち是れ解脱なり」、又「癡愛を斷ぜずして明・脱を起す」と。此れ則ち斷不斷を含せず。「經に云はく、「闇の時明無く、明の時闇無し。智慧有る時は則ち煩惱無し」、此れ智慧を用ひて煩惱を斷ずるなり。若し別の有門は、多く定分割截に就いて漸次に五住を斷除すれば、則ち是れ思議の智斷なり。乃至三門も亦是の如し、是を別の四門の相と爲す。若し圓の有門は、解惑不二にして多く不斷の斷を明し、五住皆不思議なり、即ち是れ不思議の斷なり。乃至三門も亦是の如し、是を圓の四門の相と爲す。復次に圓門に斷を說き、別門に不斷の斷を說く。或は前或は後に別圓の相を判ずるは、例して前に說くが如し云云。

(七)六に實位と非實位とに約せば、若し有門に界内の見思を斷ずるに三十心の位を判じ、界外の見思無明を斷ずるに十地の位を判じ、等覺の後心に無明を斷じ盡して、妙覺の常果業外無事なりと判ずるは、此れ乃ち他家の因をもって將に已が家の果と爲す、皆方便にして實位に非ず。後の三門も大同小異なり、皆是れ別の四門の相なり。若し有門に初發意より三觀

【八】十門分別の中、第七には果縱と不果縱とに約して辨ず。

【檀波羅蜜】(Dānaparamita)檀は布施、波羅蜜は到彼岸の意。菩薩の六度行の一なり。

【九】十門分別の中、第八には圓詮と不圓詮とに約す。

一心にして界內の惑を斷じ、圓に界外の無明を伏するに十信の位を判じ、進んで眞智を發し圓に界外の見思無明を斷ずるに四十心の位を判じ、等覺の後心に無明永く盡きて、妙覺と名界外なるは、此は是れ究竟眞實の位なり。乃至三門も亦是の如し、是を圓の四門の相と名く。復次に別門に實位を說き、圓門に不實位を說き、別門に實位を證し、圓門に不實位を證す。或は前或は後なるは、皆前に分別するが如し云云。

(八)七に果縱と果不縱とに約せば、若し有をもつて門と爲し、門に從つて果を證するに三德縱橫なり。法身は本有、般若は修成、解脫は始滿なりと言ふは、但果德の縱に成ずるのみにあらず、因も亦局限なり。地人の云ふが如き、初地に檀波羅蜜を具足すと。餘に於ては修せずと爲すに非ず、力に隨ひ分に隨ふ。檀は初地に滿じて上地に通ぜず、餘法は分に有りて、而も具足せざるは、是義有餘なり。三門も亦是の如し、是を別の四門の相と爲す。若し有を門と爲し、門に從つて果を證するに、三德具足して不縱不橫なり。亦因も是の如し、一法門に一切の法門を具足し、通じて佛地に至る。華嚴に云はく「初の一地より諸地の功德を具足す」と。大品に云はく「初の阿字に四十一字の功德を具足す」と。三門も亦是の如し、是を圓の四門の相と爲す。復次に別門に果不縱を說き、圓門に果の縱を說く。或は前、或は後に圓別の相を判ずること前に例す云云。

(九)八に圓詮と不圓詮とに約せば、若し有を門と爲すに門圓融せず、或は一を融じ、或は二を融ず。門の前の章は偏の弄引なり、門の中章は不融不即の菩薩の智、乃至偏の譬喩等を

【一】十門分別の中、第九には難問に約す。

【二】十門分別の中、第十には譬喩に約して論じ、而して後上來の意を結し示す。

【二】正しく簡ぶの中、また五味に約して分別す。

【三】正しく簡ぶの中、次には今の經文の十義を以て四門の相の不同を辨ず。

詮述し、門の後は還つて不融不卽等を結す。三門も亦是の如し是を別の四門の相と爲す。若し有をもつて門と爲すに、一門卽ち三門なり、門の前は圓の弄引、門の中は融卽の佛智、乃至圓の譬喩等を詮述し、門の後に融卽等を結成す。三門も亦是の如し、是を圓の四門の相と爲す。復次に別門に圓を詮し、圓門に別を詮す。或は前、或は後に別圓の相を分別すること前に例す云云。

（一）九に問答に約せば、若し有門に義を明すも未だ圓別を辨ぜずんば、須く問答覆徵して自ら圓別の指趣を見んことを求むべし。三門も亦是の如し云云。

（一）十に譬喩に約すとは、諸門の前後、或は金銀寶物を擧げて譬へと爲し、或は如意日月を擧げて譬へと爲す。或は別を用ひて合し、或は圓を用ひて合するに、圓別の相自ら顯る云云。今十意を以て玄に衆經を覽るに、圓別の兩門皎然として明かなり矣。

（二）復五味に約して少多を分別せば、乳敎は兩種の四門、酪敎は一種の四門、生蘇は四種の四門、熟蘇は三種の四門、此經は一種の四門なり云云。

（三）今の經の十義は、一切法は空如實相なりと觀ず、聲聞法を決了するに是れ諸經の王なりと。方便の門を開すと。此は是れ凡と小と大の人法を融するなり。一切世間の治生產業は皆實相と相違背せず。卽ち客作は是れ長者の子なりと。此は是れ麤法の妙なり。佛の知見に開示し悟入すと、今作すべき所は唯佛の智慧なりと。卽ち佛慧なり。如來の衣座室等は卽ち不次第の行を著はすなり。五欲を斷ぜずして而も諸根を淨む。又五百由旬を過ぐとは、

【一四】是より下正しく圓教入實の觀を明す。初に有門について觀を說く。即ちまた自ら十意ある中、第一に所觀境を明す。

即ち不斷の斷の義なり。五品六根淨しと、寶乘に乘じて四方に遊ぶとは、即ち實位なり。佛自ら大乘に住し定慧の力莊嚴す、此を以て衆生を度すと、即ち果の不縱なり。合掌し敬心を以て具足の道を聞かんと欲すと、即ち今佛の文前の圓詮なり。諸法實相の義、已に汝等が爲に說くと。即ち古佛の文後の圓詮なり。智積と龍女と問答して圓を顯はす。輪王の頂珠と、其車高廣なるとは皆譬喩なり。十意既に足りて圓門明らかなり。觀門の四相は今當に說くべし。若し佛の智慧は、微妙第一なりと言ふ。又云はく、我如來の智慧を以て彼久遠を觀ずるに猶今の若しと。智の妙法を知るは有門なり。一切の法空にして常に寂滅の相なり、終に空に歸すと。空門なり。諸法は常に無性なり、佛種は緣より起ると、即ち亦空亦有門なり。非如非異、非虛非實の雙非兩捨は即ち非空非有門なり。四相は門を標し、十意は別を簡ぶ。故に知んぬ、此經は圓の四門を明すことを云云。

〔一四〕二に入實の觀を明すとは、上に已に四の圓門を知れば、今有門に依りて觀を作す。觀は則ち十法と爲す云云。前の十二の思議の門に對して不思議境と名く、不思議境は即ち是れ一實の四諦なり。謂はく生死の苦諦不可思議にして、即空即假即中なり。即空の故に方便淨、即假の故に圓淨、即中の故に性淨なり。三淨を一心の中に得るを大涅槃と名く。淨名に曰はく、一切衆生は即ち大涅槃なりと。故に不可思議の四諦と名く。復滅すべからず。此れ即ち生死の苦諦是れ無作の滅なり、亦是れ集道なり。煩惱の集諦不可思議にして即空即假即中なり。即空の故に一切智と名け、即假の故に道種智と名け、即中の故に一切種智

【一五】圓教入實の義を明す中、次に眞正發心を明す。

【一六】第三に適修定慧を明す。

【一七】第四に破法徧を明す。

なり。三智一心の中に得るを大般若と名く。淨名に曰はく、「一切衆生即ち菩提の相なり、復得べからず」と。此れ即ち煩惱の集にして、而も是れ無作の道諦なり。亦是れ苦と滅なり。故に不思議一實の四諦と名く。亦是れ眞善妙色なり、何となれば、生死即空の故に眞と名け、生死即假の故に善と名け、生死即中の故に妙と名く。此を有門の不可思議境と名くるなり。

〔一五〕二に眞正の心を發すとは、一切の衆生は即ち大涅槃なり、云何が顚倒して樂を以て苦と爲す。即ち大悲を起し、兩誓願を興して、未度の者をして度せしめ、未斷の者をして斷ぜしむ。一切の煩惱は即ち是れ菩提なり、云何が愚闇にして道を以て非道と爲す。即ち大慈を起し兩誓願を興して、未知の者をして知り、未得の者をして得せしむ。無緣の慈悲、淸淨の誓願にして、慈善根の力任運に一切衆生を吸取す。

〔一六〕三に安心とは、既に體解成就し、發心具足す。豈池に臨んで魚を觀、敢て網を結ばず。糧を裹み脚を束ねて、安坐して行かざるべけんや。修行の要は定慧を出でず、譬へば陰陽調適して、萬物秀實なるが如し。雨旱節ならずんば、焦爛して豈生ぜんや。若し兩輪均平なれば是乘能く運し、二翼具足すれば飛升するに堪任す。生死即ち涅槃なりと體するを名けて定と爲し、煩惱即ち菩提なりと達するを名けて慧と爲す。一心の中に於て巧に定慧を修し、一切の行を具足するなり。

〔一七〕四に破法徧とは、此妙慧を以てすれば、金剛の斧の擬する所皆碎くるが如く、翳し無き

日の臨む所皆朗かなるが如し。若し生死即ち涅槃なれば分段變易の苦諦皆破し、若し煩惱即ち菩提なれば四住五住の集諦皆破す。復能く破すと雖も、亦破する所有るに不ず。何となれば、生死即ち涅槃なり、故に破する所無し。

（一八）五に識通塞とは、主の兵寶の取舍宜しきを得るが如き、強き者は之を綏め、弱き者は之を撫す。生死の過患を知るを名けて塞と爲し、即ち涅槃なるを名けて通と爲す。煩惱の惱亂なるを名けて塞と爲し、即ち是れ菩提なるを名けて通と爲す。始め外道の四見より、乃至圓教の四門皆通塞を識る。節節に執著するは即ち是れ塞なり、節節に亡妙なるを名けて通と爲す。若し諸法の爽驗を知らざれば、但行法の前まざるのみにあらず、亦重寶を亡去せん。

（一九）六に善識道品とは、生死即涅槃と觀ずれば、十界の生死の色陰皆淨に非ず不淨に非ず、乃至識陰も常に非ず不常に非ず。善く八顛倒を破するは、即ち法性の四念處なり。念處の中に道品、三解脫、及び一切の法を具す。又涅槃即生死と知るは四枯樹を顯し、生死即涅槃と知るは四榮樹を顯す。生死涅槃不二なりと知るは即ち一實諦なり、非枯非榮は大涅槃に住す。

（二〇）七に善修對治とは、若し正道に障り多ければ應に助道を須ふべし。生死即涅槃と觀ずれば報障を治し、煩惱即菩提と觀ずれば業障と煩惱障を治す。

（二一）八に善知次位とは、生死の法本より即ち涅槃なるは理の涅槃なり、生死即涅槃と解知す

【一八】第五に識通塞を明す。

【外道の四見】計一（數論師）計異（勝論師）計亦一亦異（勒娑婆論師）計非一非異（尼揵子）

【一九】第六に善識道品を明す。

【二〇】第七に善修對治を明す。

【二一】第八に知次位を明す。

【二二】第九に能安忍を明す。

【二三】第十に無法愛を明し、而して經體を結成し、乃至空門、亦有亦空門、及び非有非空門の三を例示す。

【二四】圓觀を明す中、次に法華經文を引きて十觀の相を示し、然る後結斥傷歎す。

るは名字の涅槃なり、勤めて生死即涅槃と觀ずるは觀行の涅槃なり、善根功德の生ずるは即ち相似の涅槃なり、眞實の慧起るは即ち分眞の涅槃なり、生死の底を盡すは、即ち究竟の涅槃なり。煩惱即菩提と觀ずるも亦是の如し。

(二二)九に善安忍とは、能く内外强軟の違障を安(耐)して觀心を壞せず。若し生死即涅槃と觀ずれば、陰入境、病患、業、魔、禪、二乘、菩薩等の境の爲に動壞せられず。若し煩惱即菩提と觀ずれば、諸見、增上慢の境の爲に動壞せられざるなり。

(二三)十に無法愛とは、既に障難を過ぎて道根成立し、諸の功德生ず。生死即涅槃と觀ずるが故に諸禪三昧の功德生じ、煩惱即菩提と觀ずるが故に、諸の陀羅尼、無畏、不共、諸の般若生じ、生死涅槃不二と觀ずるが故に法身實相生ず。相似の功德は理に順じて而も生ず。喜んで順道法愛を起す、生を法愛と名け、上らず退せざるを名けて頂墮と爲す。此愛若し起らば即ち疾く滅すべし。愛若し滅し已れば無明を破し、佛知見を開き、實相の體を證す。生死即涅槃と觀ずるが故に解脫を證得し、煩惱即菩提の故に般若を證得し、此二不二なるが故に法身を證得して一身無量身なり。無上の寶珠、如意圓珠、衆法具足す。是を有門より眞に入りて經體を證得すと名く。餘の三門も亦是の如し。

(二四)是十種の觀は經文に具足す。是法示すべからず、言辭の相寂滅す。諸餘の衆生の類は能く解を得ること有ること無しと。又我法は、妙にして思ひ難しと、即ち不思議境なり。一切衆生の中に於て、大慈心を起し、非菩薩の中に於て大悲心を起す。我三菩提を得る時、

神通力、智慧力を以て、之を引きて其法の中に住することを得せしむと。即ち正しく發心なり。佛自ら大乘に住す、其所得の法の如きは定慧の力莊嚴すと。即ち是れ二法に安んじて、自ら成じ他を成ずるなり。破有法王とは、即ち是れ破法徧なり。又日月の光明の如く、能く諸の幽冥を除き、斯人世間に行じて能く衆生の闇を破すと。即ち破法徧なり。一導師有りて將に衆人を導き、明了の心決定して險に在りて衆難を濟ふとは、善く通塞を知るなり。淨戒淨眼の善く三十七品諸波羅蜜を作するは、即ち是れ助道なり。增道損生して四方に遊ぶとは、即ち是れ次位を識るなり。安住して動ぜざること須彌の頂の如しといひ、如來の衣を著すといふは、即ち安忍なり。是諸の聲を聞くと雖も、之を聽きて著せず、其意等の六根皆清淨なること此の若しと言ふと。又云はく、清淨の大法と、即ち無法愛なり。是十種の觀は散じて經文に在り、而れども人は知らず。今十數を撮聚して有門に入れて觀と爲す、乃至三門もまた小異大同なり。十觀の實に入ること、亦復是の如し。復次に此十觀の意は但獨り今の經に出づるのみに不ず、大小乘の經論に備に其意有り。摩黎山の、純ら栴檀を出すが如し。固より外道の四韋陀典、及び此間の莊老の載する所に非ず。世人は咸く共に講讀すれども、而も文に對して知らず。若し道を學ばんと欲するも全く方便無し、悲しい夫。徒に乳酪を知りて鑚搖を解せず。若し十意を識らば、小乘の四門に於て倶に用ひて眞に入り、大乘の四門に於て倶に用ひて實に入る。既に實に入り已れば、乳糜を食ひて更に所須無きが如し。半如意珠、全如意珠を一切に布施す。此

【二五】入寶の門を明す中、已に門の相を示し、また入門の觀を說き來れるを以て、今茲には諸門の麤妙を判ず。卽ちまた二意に約する中、初には能所に就いて之を判ずるなり。

【圓接通】三被接の一。通教卽空の理に圓教不但中の理を悟り接ぐをいふ。

【圓接別】又三被接の一なり。別教の初地以前の人をして圓教の初住以上の聖位に接入せしむるをいふ。

施有りと雖も、人の生を輕んじ道を重んじて、勤心に修習すること有るを見ず。受け用ひざるに、徒に施して何の益かあらん、我則ち悔ゆ焉。益する所無しと雖も、毒鼓の因と作る。具に之を知らんと欲せば、委くは止觀の如し云云。

(二五)三に諸門の麤妙を明すとは二と爲す。一には能所に就いて麤妙を判じ、二には諸門に約して麤妙を判ず。能所を四句と爲す。門は能通を名く、理は是れ所通なり。自ら能通は麤にして所通も亦麤なるあり、能通は妙にして所通は麤なるあり、能通は麤にして所通は妙なるあり、能通妙にして所通も亦妙なる有り。三藏の四門は事に挾すれば淺近なり、故に能通を麤と爲す、但偏眞を詮すれば所通も亦麤なり。通教の四門は大乘の初法、如實の巧度なれば能通を妙と爲し、三乘偏に證すれば所通を麤と爲す。別教の四門は、佛道の方便なれば能通を麤と爲し、圓眞に詮入すれば所通を妙と爲す。圓教の四門に、諦理の實說なれば能通を妙と爲す、事に卽して而も圓なれば所通も亦妙なり。又自ら麤の能所を帶する有り、生蘇の教是れなり。麤の能所を帶せざるは、乳教是れなり。自ら麤の所を帶して麤の能を帶せざる有り、熟蘇の教是れなり。自ら麤の能を帶して麤の所を帶せざる有り、圓接通と(圓)接別は是れなり。涅槃の中の諸門も亦是れなり。問ふ、『經に云はく「唯一門有つて而も復狹なり」と。麤なるが故に一小と稱すとせんや、妙なるが故に一小と稱すとせんや。』答ふ、此義當に通用すべし、局つて一門に在るべからず。何となれば、三藏の四門の如きは機に赴きて異說する故に門と言ひ、同じく是れ有教なるが故に一

と言ふ。門門の方便異なるが故に四と言ひ、同じく涅槃に向ふが故に一と言ふ。所通は能通に從ふ故に四と言ひ、能通は所通に會するが故に一と言ふ。文字の中には菩提無し、是れ教に約して狹小を論ず。譬へば隘路の二人并び行くことを受けざるが如し、即ち行に約して狹小を論ず。教行の兩門眞を取るに契ひ難し、即ち理に約して狹小を論ず云云。通教も亦是の如し。緣に逗じて別說する故に四と爲し、同じく是れ佛教なるが故に一と言ふ。觀法同じからず、故に四行り。倶に無生に向ふ、故に一と爲す。所は能に隨ふ、故に四と爲し、能は所に隨ふ、故に一と爲す。通教は事に即して而も眞なれば、文字の中に菩提有り。善惡倶に觀ずるに皆不可得なるは、即ち是れ并び行ふ。此義に約しては狹小を論ぜず。但教觀眞を取るに當り難し、故に理を名けて狹小と爲す云云。別教の四門も亦是の如し。四機の爲に說くが故に四行り、同じく是れ佛教なるが故に一と言ふ。入實の觀異なるが故に四と言ひ、倶に一實に向ふ故に一と言ふ。所は能に隨ふ、故に四と言ひ、能は所に會するが故に一と言ふ。生死に即して是れ涅槃にあらざれば教は狹小なり、煩惱に即して是れ菩提にあらず、故に行も狹小なり。教行に理を取るに當り難きを、理に狹小を論ずと名く。圓教の四門も亦是の如し。四種の機に逗ずる故に四と言ひ、皆是れ佛說なるが故に一と言ふ。入實の觀異るが故に四と言ひ、四觀は實に向ふ故に一と言ふ。門を將つて理に名く、故に四と言ひ、理を以て門に應ず、故に一と言ふ。此教は生死に即して是れ涅槃なれば教は狹小ならず、煩惱即ち菩提なれば行も狹小ならず。而して此教觀は理を取るに當り難け

【二六】諸門の麤妙を明す中、第二には即ち諸門に約して麤妙を判ず。而してまた中に約教約味の兩釋ある中、初には則ち約教なり。

れば、理を名けて狹小と爲す。若し經文の唯一門有りて而も復狹小なりと云ふに依りて、正しく教行の門、理を取るに當らざるを語す。故に狹小と言ふなり。今一句を開拓するに處處不同なり、豈定執して一文をのみ守るべけんや。若し此意を得れば、麤妙自ら明かなり云云。

(二六)二 二に諸門に約して麤妙を判ぜば、先に三藏の四門を明すに皆是れ能通なり。四門に執著すれば倶に皆壅礙す。成壞麤妙更に優劣無し、此れ則ち偏く判ずべからず。若し法に從つて語を爲せば、有は則ち俗に附すれば、道に入ること則ち拙なり。空は則ち眞に傍へば、道に入ること則ち巧なり。故に釋論に云はく「鈍根の人の爲に生空を說き、利根の人の爲に法空を說く」とは、則ち其義なり。亦有亦無門は前に望むれば巧なりとするも、後に望むれば是れ拙なり。非有非無門は則ち是れ巧なり。大論に云はく「半有半無の者は名けて鈍人と爲す」と。此れ四門の法に約して麤妙を判ずるなり。今根性の便宜に約せば、若し有門に宜しきは、有門は成じて三門は壞す。若し無門に宜しきは、無門は成じて三門は壞す。乃至第四門も亦是の如し。若し一門に就いて、皆四悉檀を得る者を皆名けて成と爲し、四悉檀を失ふ者を皆名けて壞と爲す。還つて一門に執かば欲に赴くを得と爲し、情に乖くを失と爲す。宜しきに當るを得と爲し、宜しきに當らざるを失と爲す。病を治するを得と爲し、病を治せざるを失と爲す。第一義を見るを得と爲し、第一義を見ざるを失と爲す。(展)轉して成壞有り。此に約して麤妙を論ずることを得。又十觀に約して麤妙を判ぜば、

因緣を觀ずるに境の正なるを得と爲し、境の邪僻なるを失と爲す。眞正の心を發するを得と爲し、爾らざるを失と爲す。安心所を得るを得と爲し、安心適はざるを失と爲す。破法徧を得と爲し、不徧なるを失と爲す。通塞を知るを得と爲し、通塞を知らざるを失と爲す。乃至助道法愛の生ぜざるを得と爲し、助道法愛の生ずるを失と爲す。若し一門の十法成就すれば、則ち此門を妙と爲し、餘門を麁と爲す。若し餘門の十法成就し、此門成就せざれば、則ち此を麁と爲し、餘門を妙と爲す云云。

通の四門の麁妙は、通の理は唯一なれば、一は説くべからず。何の麁妙を形比してか論ずべき有らん。機に赴きて門を説くに就かば優劣無きに不ず。四門の深淺を判ぜば、三藏の中に説くが如し。又一一の門に約して、若し四悉檀の機に會することを説くは、之を名けて妙と爲し、若し四機に乖けば之を名けて麁と爲す。若し一一の門の十觀の修行に於て、句句に所を得るは之を名けて妙と爲し、句句に所を失ふは之を名けて麁と爲す。麁の故に四邊火に燒かれて、淸凉池に入ることを得ず。此に異なる者は、之を名けて妙と爲す。

別の四門の麁妙は、若し法相を論ぜば有門は事に附す、故に麁と爲す。空門は理に傍ふ、故に妙と爲す。空門は單理なるが故に麁と爲し、亦空亦有門は兩通す、故に妙と爲す。亦空亦有は兩ながら存する故に麁と爲し、非空非有門は兩ながら捨つるが故に妙と爲す。若し根緣に約せば、則ち是の如くならず、有門は欲に稱ふ故に妙と爲し、三門は欲に稱はざ

【鎭頭迦】（Tinduka）柿。

【迦羅迦】（Kalaka）果。

るが故に麤と爲す。有門は是れ宜なるが故に妙と爲し、三門は宜に非ざる故に麤と爲す。有門は惡に對する故に妙と爲し、三門は對に非ざる故に麤と爲す。有門は第一義を見る故に妙と爲し、三門は第一義を見ざるが故に麤と爲す。餘の三門も亦是の如し。次に有門の眞善妙色の境を識るは鎭頭迦と名け、境を識らざるが故に迦羅迦と名く。正しく心を發するが故に鎭頭迦と名け、正しく心を發せざるを迦羅迦と名く。心を定慧に安んずるを鎭頭迦と名け、二法に安んせざるを迦羅迦と名く。諸法を破することを得るを鎭頭迦と名け、破法徧からざるを迦羅迦と名く。善く通塞を識るを鎭頭迦と名け、通塞を識らざるを迦羅迦と名く。三十七品を修するを鎭頭迦と名け、道品を修せざるを迦羅迦と名く。善く對治を解するを鎭頭迦と名け、對治を善くせざるを迦羅迦と名く。善く次位を知るを鎭頭迦と名け、次位を識らざるを迦羅迦と名く。安忍にして動ぜざるを鎭頭迦と名け、安忍すること能はざるを迦羅迦と名く。順道の愛無きを鎭頭迦と名け、順道の愛起るを迦羅迦と名く。迦羅迦果は則ち九分有り、鎭頭迦果は纔に一分有り。若し十觀成就すれば則ち十分の鎭頭あり、十觀皆妙なり。若し九分の迦羅あるも迦羅は則ち麤にして、一分の鎭頭は鎭頭則ち妙なり。麤華の千斤なるは眞金の一兩に如かず、故に此に約して麤妙を判ず。有門旣に爾り、餘の三門も亦是の如し。

圓教の四門は則ち皆妙にして麤無し。何となれば、有門を法界と爲せば一切の法を攝して思議すべからず、即ち是れ一切法なり、況や復三門をや。空門は即ち是れ法界なり、一

切の法を攝す。況んや復三門をや。餘の二も亦是の如し、法相平等にして復優劣無し。若し爾らば則ち四門の異なり無し、但根機に隨じ、緣に赴きて四説するに因る。四指一月を指すに、月は一なれども指に四たるが如し。何となれば、此れ衆生世世に此四門を習ひて、門りて以て性を成ずるに由る。若四門の中に理を推（尋）するに、無明を翻ぜんと欲して即ち性の根性と成る。昔四門の中に於て福を修して、顛倒を翻せんと欲して即ち福德の根性と成る。福德の因緣は今各名色、即、果を感じ、各各不轉に於て、而も愛取を起す。是を十法に因性の衆生を成ずと爲す。欲樂同じからざれば、宜治異なり有り。佛智明かに鑒みて機を照すに差ふこと無し。世界悉檀を以て四性の欲に赴きて、此四門を説く、爲人悉檀を以て四善を生じ、對治悉檀を以て其四惑を治し、第一義悉檀を以て四人をして理を見せしむ。此四機無ければ、佛四法を説したまはず。緣既に一ならざるも略して其四を言ふ。皆是れ正直に方便を捨てて但無上道を説く。門の相圓融して四門相即なり。此れ教門に就く、更に圓妙を判せん。何となれば、若し四悉檀の意を得ざれば、諸論諍競して誰か能く融通せん。地論に南北二道有るが如き、加へて復攝大乘興り、各自ら眞と謂つて、互に相排斥して負處に墮せしむ。若し意を得ざれば四門倶に失せん。但圓門は融淨にして、教尙虛玄なり。經論を領稱するに何の競か息まざらん。若し道に入らんと欲せば、何れの門か通ぜざらん。理を悟る時、豈門を存すべけん。修行の時、豈塞有るべけんや。但し四塞に輕重あり。別教は門隔てたり、悟る者は乖くこと無けれども、未だ悟らざれば諍いを成じ、其執

【一七】諸門に約して麤妙を判ずる中、次には五味に約して之を論ず。

大に重し。譬へば鈍馬の手を縮めて乃ち去るが如し。圓門は虚玄なれば、未悟の時も其益則ち輕し、譬へば快馬の鞭影を見て卽ち去るが如し。此の如きの偏執は、若し未だ第一義の益を得ざれども、三悉檀の利を失はず。故に論に云はく、「是四悉檀は皆實にして虚ならず」と。何となれば世界の故に實、乃至第一を見るが故に實なり。倶に是れ實なりと雖も、實に深淺有り。亦倶に是れ虚なり、何となれば有門に世界悉檀を說くが如きは、樂欲に於ては是れ實なれども、餘に於ては則ち虚なり。有門に生善を實と爲すも、餘に於ては則ち虚なり。有門に破惡を實と爲すも、餘に於ては則ち虚なり。有門に第一義を見るを實と爲すも、餘に於ては則ち虚なり。乃至三門も亦是の如し。有門の三悉檀は世界に於ては故實なるも、第一義に於ては則ち虚なり。一悉檀は第一義に於ては故實なるも、世界に於ては則ち虚なり。實の故に妙と爲し、虚の故に麤と爲す。廣く作るべし云云。

〔一七〕若し此麤妙を以て五味に約せば、乳教に八門有り、四は麤、四は妙なり、所通は倶に妙なり。酪教は四門を麤と爲す、理も亦是れ麤なり。生蘇は則ち十六門有りて、十二門は是れ麤、四門は是れ妙なり。前の所通を麤と爲し、後の所通を妙と爲す。熟蘇は十二門有りて、八門は是れ麤、四門は是れ妙なり。一理を麤と爲し、一理を妙と爲す。法華は四門を妙と爲す、一理も亦妙なり。諸の聲聞の人は、前來は門と理と倶に麤なれども、此法華に至つて門、理融妙なり。菩薩は不定にして、或は方等般若に於ては門と理と融妙なり、頓鈍の者は二乘に同じ。涅槃に十六門有りて、十二門は麤にして四門は妙と爲す、所通は

【六】諸門の麁妙を明す中、第四門に麁を開して妙を顯す。

俱に妙なり。何となれば、前來の諸門は麁妙各通じ、隨情は麁を存す。涅槃に至らずして、一切諸法の中に悉く安樂の性有り、是れ前の衆生に皆佛性有り、復權實無くして但一つの妙理なり。而して更に麁門を存して實理の方便と爲し、皆實に入ることを明す。私に志而うて云ふが如し、既に妙なるが故に、更に何ぞ麁ならんと。而も反覆して答ふ云云。故に知んぬ、百川の海に歸ふるが如く、麁門は實に會す。實理は要たなり、是故に麁すべし。鏡像を變引して衆の方便を作す。涅槃は扶律して麁門の詞を破す、金沙大河の復た曲無きが如し。涅槃は捃拾して更に麁門を許す、各因緣の爲に存廢異なり有り。然るに金沙百川の海に歸すること別ならず云云。

【六】四に麁門を開して妙門を顯さば、問ふ、中論は先に摩訶衍門を明し、後に二乘門を明す。今何の意ぞ先に小門を明し、後に大門を明すや。答ふ、中論は時人の見(空見)病を破すが爲に、先に大を以て蕩し、後に入實の門を示す。今の經は復見の病無し、但草菴に住すれば、方便の門を開して眞實の相を示すべし。故に先に小門を明ね、次に大門を明す。開破時に隨ひて、各其美有り。若し法華の後の教は、更に開するを俟たず。法華の前の教は、或は門と理と已に理妙に入る者は、更に何の開する所ぞ。或は門理妙なりと雖も而も人未だ妙ならず、門理妙なる者は亦開すべからず。若は門、若は理、若は人の未だ妙ならざる者は今當に開すべし。謂はく一切の愛見煩惱は即ち是れ菩提なりと開す、故に觀一切法空如實相と云ふ。一切の生死即ち是れ涅槃なりと開す、故に世間相常住と云ふ。一切の凡人

【一九】辨體に七章を開する中、第五章に實相を明す。即ち衆經の體と作す相を明す。之を五章に分ち、而して其の第一には今經の體の種種の異名を辨ず。

は即ち是れ妙人なりと開す、故に一切衆生は皆是れ吾子なりと云ふ。一切の愛見言教も、即ち是れ佛法なりと開す、故に若し俗間の經書を說き、生を治め業を營るは皆實相と相違背せずと云ふ。一切衆生即ち是れ妙理なりと開す、故に令衆生、開佛知見と云ふ。示、悟、入等も亦復是の如し。一切の小乘の法即ち是れ妙法なりと開す、故に聲聞法を決了するに是れ諸經の王なりと云ふ。一切の聲聞教を開す、故に佛、昔菩薩の前に於て聲聞を毀訾す、然るに佛は實に大乘を以て敎化せらると云ふ。一切の聲聞の行は即ち是れ妙行なりと開す、故に汝等が所行は是れ菩薩の道なりと云ふ。一切の聲聞の理は即ち是れ妙理なりと開す、故に方便の門を開して眞實の相を示すと云ふ。諸の菩薩の未だ妙を識らざる者を開して今皆圓を得、故に菩薩は是法を聞きて疑網悉く已に除くと云ふ。別教に一種の菩薩有り、三藏に亦一種の菩薩有り、通教に一種の菩薩あり、未だ決了せざる者は今皆開顯す。若は門、若は理、妙に入らざること無し。是を權を開して實を顯し、麤を決して妙ならしむと名く、云云。

第五に實相を諸經の體と爲すに、更に五と爲す。一には今經の體の種種の異名、二には諸經の體の種種の異名、三には傍正の料簡、四には此後の料簡、五には麤妙を判じ麤を開して妙を顯はす。一に此經の體の名前後同異なるものは、序品に云はく「今佛光明を放ちて實相の義を助發す」と。又云はく「諸法實相の義は已に汝等が爲に說く」と。方便品に廣く說く中に云はく「諸佛は一大事因緣を以て佛知見を開示す」と。無上道、實相

【三〇】實相を衆經の體と作すを明す中、第二には諸經の體の種種の異名を論ず。

印等（とも云ふ）。譬喩の中には、大車を以て一大乘を譬へ、信解の中には家業を付すと名け、藥草の中には一切智地、最實事と名け、化城の中には寶所と名け、授記の中には繫珠と名け、法師の中には祕密藏と名け、寶塔の中には平等大慧と名け、安樂行の中には實相と名け、壽量の中には非如非異と名け、神力品の中には祕要の藏といひ、妙音の中には普現色身三昧と名け、觀音の中には普門と名け、勸發の中には殖衆德本と名く。是の如き等の異名同じからず、其義亦異れり、理極は眞實なり、實を以て相と爲す、故に實相と名く。靈知寂照なるを佛知見と名け、三世の諸佛は唯此を用ひて自行化他す、故に大事因緣と言ふ。虛通するを道と名け、諸法を正定するを實相印と名け、運載するを乘と名け、佛事を成辨するを家業と名け、一切の所依なるが故に智地と名け、諸法の元なる故に寶所と名け、圓妙にして難思なるが故に寶珠と言ひ、積聚する所無くして而も衆法を含ずれば祕藏祕要と名け、通達無礙なるを平等大慧と名け、二邊を遮するを非如非異と名け、妙色自在なる故に普現三昧と言ひ、入實の由なるが故に普門と名け、諸法由りて生ずるが故に德本と言ふ。是の如きの名義差別すれども、體は卽ち實相なり。已に上に說くが如し云云。

〔三〇〕に　二に諸經の體の種種の異名とは、問ふ、『釋論に云はく、「實相の印無きは是れ魔の所說なり」と。今實相を談ずれば用ひて體と爲すべし。餘經は爾らず、應に是れ魔說なるべしや。』答ふ、『然らざるなり。諸經の異名は、或は眞善妙色、或は畢竟空、或は如來藏、或は中道等、種種の異名ありて具に載すべからず。皆是れ實相の別稱にして、悉く是れ正

【三一】實相を衆經の體と作すを明す中、第三には傍正の料簡なり。

【三二】實相を衆經の體と作すを明す中、第四には彼此に就いて料簡す。

印なり。各第一と稱す、實印に由るが故なり。若し此意を失はば則ち佛法に非ず、故に衆經の體同じと言ふなり。[三一]

(三一)三に傍正の料簡とは、衆經は半滿小大の殊りありて體に傍正有り。正は即ち實相、傍は即ち偏眞なり。偏眞も、或時は實相を含じ、實相も、或時は偏眞を帶す、而も通じて實相と稱す。故に中論に云はく「實相は三人共に得」と。共に得とは即ち偏眞なり。大經に云はく「聲聞の人は但空を見る」と、空は即ち傍なり。智者は空及び不空を見ると、不空は即ち正なり。此經に云はく「我等昔日同じく法性に入る」と。法性は即ち傍なり。今日實智の中に安住すと、實智の中とは即ち正なり。小乘の三法印は此れ傍なり、通教は傍を帶して正を明し、別圓は但正を明して復傍を論ぜず。若し五味に約せば乳は唯正を論じ、酪は唯傍を論じ、生蘇と熟蘇は傍正相兼帶し、醍醐は唯正なり。又正の實相に諸の名字多く、名字に約する中に復傍正を論ず。淨名には自性清淨を正と爲し餘名を傍と爲し、華嚴は法身を以て正と爲し、般若は一切種智を以て正と爲し、涅槃は佛性を以て正と爲し、此經は實相一乘を以て正と爲し、餘名を傍と爲す。此れ則ち傍に非ず正に非ずして傍正を論ず、傍正悉く是れ經の體なり云云。

(三二)四に彼此に就いて料簡せば、上は別圓二法の異名に約して料簡し、今更に通じて小大の四句に就いて料簡す。或は名、義、體、此經と同じく、或は名、義、體、此經と異なり、或は名と義は此經と同じくして而も體異なり、或は名、義、此經と異にして而も體同じ。

【三】實相を衆經の體と作すを明す中、第五には麤妙を判じ、開麤顯妙を論ず。

三藏の中に若し體を名けて實相と爲さば、此名義は此經と同じくして而も體異なり。若し名けて實相と爲さずんば、此れ名と義と體とは此經と異なり。唯兩句を論じて兩句有ること無し。通教に實相を名けて體と爲さば、此名義同じけれども而も體は異なり。若し此名を作さずんば、則ち名義體俱に異り。若し通門に遠く中道に通ずるものは則ち名義體同じく、名義異にして而も體同じ。別教を圓教に望むれば四句あり、一法の異名の中に分別するが如し云云。五味に歴れば、乳教は兩種の名義同じく、兩種の名義異にして體同じ。略教は前の如し云云。生蘇と熟蘇の中も前の如し云云。涅槃の中の四種は名義異に、名義同にして而も皆體は同一佛性なれば、則ち麤別無し云云。

(三)五に麤妙とは、正實相の中の傍正の異名は、此れ乃ち名を異にし義を異にするも、其體は本同じければ此れ麤妙無し。但傍を麤と爲し、傍に正を含じ、正に傍を帶するは一往亦麤と爲し、但正をのみ妙と爲す。藏通は名同じく義同じけれども、而も體別なれば一向に是れ麤なり。別は名義或は同じく、或は異なり。教門の異なるを麤と爲し、體同じきを妙と爲す、名義同じく、名義異にして、而も體同じきを妙と爲す、五味に歴る中の麤妙は知るべし。麤を開するは即ち傍を開するなり。或は傍教を開すれば即ち正教なり、佛昔菩薩の前に於て聲聞を毀呰すれども、然も佛は實に大乘を以て教化せらる。或は傍行を開するに即ち正行なり、汝等が所行は是れ菩薩の道なりと。或は傍人を開するに即ち正人なり、客作の人の一日の價も即ち長者の子なりと。或は傍體を開すれば即ち正體なり、方便

【三】辨體に七章を開する中第六に偏く諸行の體と爲すことを明す。即ち初に諸行の同異を論じ、乃至開麁顯妙を論ず。

の門を開して眞實の相を示すと。後に此貧人を見て、示すに繫くる所の珠を以てすと。深く傍理を觀ずるに即ち正理なり。一切皆妙なれば更の行ずべき無きは即ち經の正意なり。

(二四)第六に諸行の體とは、此を四と爲す、一には諸行の同異、二には經に依つて修行し、三には麤妙、四には開麤なり。行の同異とは、夫れ教を稟けて行を立つるは信法を出ず。鈍者は聞に因りて解を得、解に從つて行を立つ、故に信行と名く。利者は自ら推(尋)して解を得、解に從つて行を立つ、故に法行と名く。二行は四教に通ず、三藏の信法は傍の實相を以て體と爲し、通教の信法は傍に正を含ずるを以て體と爲し、別教の信法は正を以て體と爲し、圓の信法も亦正を用つて體と爲す。若し横に行を論ずれば、即ち是れ諸波羅蜜、慈悲、喜、捨等なり、當教に體を論ず。若し横竪の諸行に體有れば、則ち不(成)立して道生ずるなり。若し體に行有れば、體は則ち行に藉りて顯る。重ねて圓の竪の行を明せば、五品六根は相似の正を以て體と爲し、初住より等覺に至つては皆眞正を用つて體と爲す。横の行とは大品に云ふが如し「一切の法皆是れ摩訶衍なり、不可得なるを以てなり」と。不可得の故に即ち正實相なり。此文に云はく「諸法の若は有、若は無を得ず。等しく諸子に各各一大車を賜ふと、即ち其義なり。信者の然燈佛を見て無生忍を得るは行に眞體あり」と。金剛般若に云はく「相に住すること無くして布施すれば、人の目有りて種種の色を見るが如し」とは、亦其義なり。竪の行に體有れば其の車則ち高く、横の行に體有れば其車即ち廣し。高廣にして大に運ぶ、行歩平正にして其疾きこと風の如し云云。

二に經に依つて修行すとは、前に信法の四行は意通じ時寛し。或は勤苦を經ること、譬へば長く剛むが如し。若し諸經に依つて別して行法を明すは、日を剋し時を制す、譬へば苦に攻むるが如し。若し事行に隨つて行ずれば、行則ち體無し。若し理行に隨つて行ずれば、此空慧と行と相應せしむ。能く無量の障道の罪を破し、能く無生忍を得るは、此れ行に體有ればなり。諸經の別行は乃ち多けれども略して共四を言ふ、謂はく常行行、常坐行、半行半坐行、非行非坐行なり。諸行に各事相の方法相つて、動身苦策す。悉く實相正觀を用ひて體と爲し、念念無間に清淨なること空の如し。其に觀の意を論ずること、止觀の中に說くが如し。然るに小乘の藏教には懺重を許さず、修多羅觀には犯重の人をして佛身を念ぜしむ、佛身とは空を念ずるなり。亦偏に常行等の方法有れども、而も偏空を以て體と爲す。通教も亦常行等の方法を明し、即空を用ひて體と爲す。別の行は歷別、圓の行は虛融にして、俱に正實相を用つて體と爲す。此四行を以て五味に歷て、方法の體を論ずること、義を推して知るべし。

三に麤妙とは、藏通の信法は、眞似の橫竪の諸行は傍實相を以て體と爲す、體と行と俱に麤なり。別の信法の眞似の橫竪の諸行は、別門に依ると雖も正實相を用つて體と爲す。因は無常なれども果は是れ常なれば、行は麤、體は妙なり。圓の信法の眞似の橫竪は、圓門の正體に依れば體と行と俱に妙なり。五味に歷て麤妙を明すこと知んぬべし云云。諸經の方法に依れば、常行等の行は、傍を以て體と爲す、體と行と俱に麤なり。正を以て體

とすれば、則ち行は麤にして體は妙なり。體行倶に妙なること前に例して知るべし。五味に歴るも亦解すべし云云。

四に麤を開すとは、三藏の信法の兩行を開するに、亦是れ聲聞の法を決了するに是れ諸經の王なり。聞き已つて諦かに思惟し、無上道に近きことを得。聞は即ち信行、思惟は即ち法行なり。皆無上道に近づくは、即ち大乘無相の行の眞に近きなり。横の行を開せば、低頭擧手、歌詠散心皆已に佛道を成ず。三藏の最淺なるも尚開を被れば即ち妙なり、況や通別等をや。意を以て得べし。小乘に依る常行等の方法を開するに、小小の微善も一として成佛せざること無し。意を以て得べし云云。

妙法蓮華經玄義卷第九上

【一】辨體に七章を開する中、第七に遍く一切の法の體とするを明す。即ち初には正しく之を論じ、然る後麤妙を判じ、又開麤顯妙を論ず。

【二】五義各説の中第三に宗を明す。即ち初にはその來意を叙べ、次に五章を開き、而してその一に宗と體とを簡ぶ。就中また大分二ある中、先には即ち非を破して正を顯すなり。

妙法蓮華經玄義 卷第九下

天台智者大師の說

(一)第七に、徧く一切法の體とするは、觀經に云はく、「毘盧遮那は一切處に徧ず」と。一切とは四諦を出でず。大經に云はく、「佛の說かざる所は十方の土の如く、說く所は爪上の土の如し」と。迦葉の云はく、「已に說けるは是れ四諦なり、其の未だ說かざる者とは、五諦有るべしや」と。佛の言はく、「無なり。但此四諦に無量の相有るを言ふのみ」と。若し然らば、廣く開すれば即ち四種の四諦を成ず、具には境妙の中に說くが如し。當に知るべし、苦、集は世間の善惡の因果、道、滅は出世の一切の因果なり。悉く實相を用つて體と爲す。淨名に曰はく「無住の本より一切の法を立す」と。此謂乎。然るに所依の體は、體妙にして異無し。能依の法は、法に麤妙有り。諸法相待して分別することを知んぬべし。五味に歷て麤妙を分別すること亦知んぬべし。開麤顯妙も亦知んぬべし云云。略して經體を說き竟んぬ。

(二)大章第三に宗を明さば、宗とは修行の喉衿、顯體の要蹊なり。梁柱の屋を持ち、綱を結ぶ綱維の如し。維を提ぐれば則ち目動き、梁安ずれば則ち椽存す。宗を釋するに五と爲す、一に宗體を簡び、二に正しく宗を明し、三に衆經の同異、四に麤妙を明し、五に因果

を結す。

宗と體とを簡ぶとは、有人の言はく「宗即ち是れ體、體即ち是れ宗なり」と。今用ひざる所なり。何となれば、宗致は既に是れ因果、因果は即ち二なり。體は因に非ず果に非ず、體は即ち不二なればなり。體若し是れ二ならば體即ち體に非ず、體若し不二ならば體即ち宗に非ず。宗若し不二ならば宗即ち宗に非ず、宗若し是れ二ならば宗即ち體に非ず。云何が而も體即ち是れ宗、宗即ち是れ體なりと言はん。又柱梁は是れ屋の綱維にして、屋の空は是れ梁柱の取る所なり。應に梁柱を以て是れ屋の空有り、屋の空は是れ梁柱なるべからず。宗と體と若し一ならば、其過是の如し。又宗と體と異ならば則ち二法孤調なり、宗も顯體の宗に非ず、體も宗が家の體に非ず。宗は體を顯はすの宗に非ずんば、宗則ち邪倒無印なり。體は宗が家の體に非ずんば、則ち體狹くして周ねからず。法性を離れて外、別に因果あらん。宗と體と若し異ならば、其過是の如し。今言はく、不異にして而も異、非因非果に約して而も因果を論ず、故に宗と體との別ある耳。釋論に云はく「若し諸法實相を離れては皆魔事と名く」と。普賢觀に云はく「大乘の因とは諸法實相なり、大乘の果とは亦諸法實相なり」と、即ち其義なり。當に知んぬべし、實相の體は通ずれども而も因果に非ず。行の始に因を辨じ、行の終に果を論ず。而して復偏圓の別あるは、譬へば金の體は始に非ず終に非ざれども、鑄て像と爲るに擬すれば即ち像の始と名け、治瑩悉く畢れば即ち像の終と名くるが如し。此れ圓の因果を譬ふ。若し器皿及び其成就に擬すれば、器

【三】宗と體とを簡ぶ中、之より下は章安私に廣く舊說を述べてその非を辨ず。
【遠師】盧山の慧遠法師。
【龍師】盧山の惠龍法師。
【印師】齊の中興寺僧印法師。

皿の始終は偏の因果を喩ふるなり。七方便の心を發するを偏因と言ひ、有餘、無餘を證するを偏果と名く。佛知見を開くを圓因と名け、妙覺を究竟するを圓果と名く。若し此喩を識らば、不即不離の宗の義明かなり矣。例せば、正因佛性は因に非ず果に非ずして、而も是れ因にして果に非ざるを佛性と名け、是れ果にして因に非ざるを大涅槃と名くと言ふが如し。又佛性は當に非ず本に非ずして、而も本自ら之有りと言ふ。一切衆生即ち涅槃の相なり、復滅すべからず。又言はく「一切衆生悉く佛性有り」と。而も實には未だ三十二相有らず、未來に當に金剛の身を得べし。其當に非ざるを以て、是故に本（自ら之有り）と言ふ。其本に非ざるを以て、是故に當（に得べし）と言ふ。宗と體との義も亦復是の如し。

〔三〕遠師は一乘を以て宗と爲す、謂はゆる妙法なり。文を引きて云はく「是乘は微妙にして上有ること無しと爲す」と。私に謂はく、三を破せんが爲の故に一ならば、但は妙因に非ずと待す、而して始末を該ねず。龍師の云はく「但果を以て宗と爲す。妙法とは是れ如來の靈智の體なり、衆麤斯に盡きたるを妙と爲し、動靜物に軌るを法と爲す。法既に眞妙なれば、蓮華を借りて之を譬ふ。果智を宗と爲る所以なり」と。私に謂はく、果は孤り立せず。云何が其因を棄てん。又文に乖く。慧觀の序に云はく「會三歸一は乘の始なり、慧覺成滿すれば乘の盛なり、滅影澄神は乘の終なり」と。什師歎じて云はく「若し深く經藏に入るに非ずんば、豈能く是の如きの說を作さん」と。印師の云はく「諸法實相は是れ一乘の妙境な

り、境智を用て宗と爲す。境には三の僞無し、故に實相と稱す」と。今謂はく、境を加へて而も果を闕く、躡れて肥を益さざるなり。光宅に一乘の因果を用て宗と爲す、前段を因と爲し、後段を果と爲す。私に謂はく、二文各因果有り。若し互に存し互に沒せば、則ち經の文を害せん。有人は權實の二智を用つて宗と爲す。私に謂はく、權を用ひば則ち三は是れ經宗を明すべし。三は是れ今經に棄つる所なり、云何が棄つる所を取りて宗とせん。又師の云はく、「此れ妙法蓮華と名く、卽ち名を以て宗と爲す。妙法は是れ佛の得たまふ所にして、根本眞實の法性なり。此性は惑者に異ならず、惑と同ならず、故に妙と稱す。卽ち宗を名とする耳」と。此は是れ地師の用ふる所なり、八識は是れ極果なるに乘る。今攝大乘に之を破して、是れ生死の根本なりと謂ふ。有師の云はく、常住を宗と爲す、但未だ極上ならず、是れ覆相に常を明す」と。私に謂はく、都て經の意に非ず、常若し覆はるれば、宗何の顯はす所ぞ。常覆はれざるも、常は則ち宗に非ず。有師の云はく、「是れ顯了に常を明す、涅槃と廣略を爲す耳」と。私に謂はく、常を宗となさば、常は因果無からん、常亦宗無し云云。有が言はく、萬善を宗と爲す、但是善をして皆作佛することを得せしむるなり」と。私に謂はく、若し作佛は卽ち是れ果なり、何ぞ果を取りて宗と爲さざるや。有が言はく、「萬善の中無漏を取りて宗と爲す」と。私に謂はく、太だ局す、又小涅槃に濫す。有人の言はく、「若し此異說を稟けて各一釋を稟らば、衆釋も非と爲すべき無し。聞きて而も捨てざれば、衆釋も是と爲すべき無し。一師の意唯偏に在るを貴む、宜しく偏を以て經宗と爲すべ

【四】明宗に五章を立つる中第二には正しく宗を明す

【五】明宗に五章を分つ中、第三に衆經の因果の同異を辨ず。即ち先には之を雙べ標し、次に正しく釋するに就いて初に迹門を解釋す。

し」と。大經に云はく、「若し定相有らば是れ生死の法、是れ魔王の相なり。佛法には定相無し、是故に如來は非道を道と說き、道を非道と說く」と。當に知るべし、唯悟のみ是れ從ふと。私に謂はく、若し悟をもつて宗とせば乃ち是れ果證なり。行因を謂ふに非ず。南を問ふに北を指す、方隅料亂するなり。又定んで悟を以て宗と爲さば是れ定の定たり、何ぞ不定と謂はん。說く者甚だ多し、具に出すこと能はず。

(四)二に正しく宗を明さば、此經は初め序品より安樂行品に訖るまで、方便を破廢して眞實の佛知見を開顯す。亦弟子の實因實果を明し、亦師門の權因權果を明す。文義廣しと雖も其樞要を撮るに、弟子の實因を成ぜんが爲なり。因は正、果は傍なり。故に前段に於て迹因迹果を明す。涌出品より勸發品に訖るまで、迹を發して本を顯はし、方便の近壽を廢して長遠の實果を明す。亦弟子の實因實果を明し、亦師門の權因權果を明す。而して師の實果を顯はせば、果は正、因は傍なり。故に後段に於て本因本果を明す。前の因果を合して共に經の宗と爲す意此に在り。所以に經に二文を分ちて本を論じ迹を論ず、雙べて法譬を題し、蓮を擧げ華を擧ぐ、師弟の權實總て其間に在り。

(五)三に衆經の因果の同異とは、謂はく迹の因果は或は同、或は異なり。本の因果は永く異なり。迹の因果は、實相通じて諸體を印す、何れの經か此に約して因果を論ぜざらん。大品には非因非果の實相を明して體と爲す、而して但因を宗と爲す。般若の遣蕩は正しく是れ因の意なり、爲に云はく、「菩薩心の中を般若と名け、佛心の中に在るを薩婆若と名く」と。

【叡師】　僧叡法師

文の中亦菩薩の無生無滅の因は、不斷不常の薩婆若の果を獲と說く。叡師の序に云はく、「玄章を啓いて、不住を以て始と爲し、三慧に歸して、無得を以て終と爲す」と。終始は因果なり。文の中亦一切種智の佛果を說けども、般若の因を成ぜんが爲なれば、因は正、果は傍なり。無量義に摩訶般若、歷劫修行を宣說す、故に知んぬ、彼經は因を用て宗と爲することを。淨名には佛國の因果の兩義を用て宗と爲す、寶積は具に因果を問ひ、佛は備に因果を答ふ。故に知んぬ、雙べて因果を用て宗とすることを。華嚴圓頓の教は宗を解することと同じからず。或は言はく「因を用て宗と爲す、題して華嚴と言ふに據らば、是れ萬行莊飾修因の義なり。文の中多く四十地の行相を說く、故に因を以て宗と爲す」と。又云はく「果をもつて宗と爲す、題して大方廣佛と云ふに據らば、佛は是れ極果の名なり。華嚴は是れ定慧萬善佛身を莊嚴す。因を莊嚴するに非ず。文の中多く舍那法身の事を說く、即ち果を以て宗となす」と。又解して云はく、因果合して宗と爲す、佛は即ち是れ果、華嚴は即ち是れ因なりと言ふが如し。文の中具に法身を說き、亦諸地を說く、倶に因果を用て宗と爲す。諸經は緣に對すること同じからず、故に宗を明すこと互に異なるのみ。般若は通じて三人に對すれば、傍身の因果あり、此義は則ち異なり。別して菩薩に對するに復利鈍有り、鈍の爲には因を明す、此義亦異なり。利人の因は此義則ち同じ。淨名の佛國は義兼ぬ、若し三種の佛國の因果は此義則ち異なり。一種の佛國の因果は則ち因なり。華嚴も亦兩緣に對す、鈍は異に利は同じ。前に分別するが如し。又此意を以て五味の因果に

【六】衆經の因果の同異を明す中、次に本門に約して之を釋し、然る後總じて結論す。

【七】明宗に五章を開する中、第四に麤妙を判ず。

餘るは、例して知んぬべし。此を衆經の因果と迹門との同異の相と爲す。

（六）二に本門の因果は永く諸經に異なるとは、若し三藏の菩薩は始より實の因果を行じて、權の因果無し。乃至、佛は道樹にして始めて成ずと明せば、久遠の本迹に非ず。通教の菩薩も亦始に因を行ずるに、神通變化して而も本迹を論ず、久遠の本迹に非ざるなり。大品には菩薩は本迹有り、二乘は則ち無しと說く。佛始めて生、法二身の本迹を得ると說きて、久遠を說かず。淨名には聲聞に本迹有りと說かず、但菩薩のみ不思議の本迹に住すと明す。佛に淨土有りと說くも、衆生の見る所は亦久遠に非ず。華嚴には舍那、釋迦を本迹と爲すと說く。菩薩も亦本迹あり。聲聞は尙聞かず解せず、云何ぞ自ら本迹有らん。今經は聲聞に本ありと發く。本に因果有り、而して二乘迹中の因果と爲し、佛の迹を發す。王宮生身の生、道樹法身の生、乃至中間の生、法二身、悉く皆是れ迹なり。但最初に眞應を得るを取りて、之を名けて本と爲す。故に師弟の本因本果は餘經と永く異なり。今經の迹中の師弟の因果と衆經と同あり異有り、本の中の師弟の因果は衆經に無き所なり、正しく此因果を以て經の妙宗と爲す。

（七）四に麤妙とは、若し半字の因、道樹の偏果は、此宗則ち麤なり。大品に明す所の三乘共の因果も亦是の如し、不共の因は、菩薩一日般若を行ずるは、日の闇を照すが如し。發心に即ち神通に遊戲すと云ふと雖も、而も猶麤因を帶し、圓因獨り顯はすことを得ず。法身は無來無去なりと說くと雖も、猶麤果を帶し、圓果獨り顯はすことを得ず。故に名けて麤

【八】明宗に五章を立つる中第五に因果を結成す。而して之にまた二意を立つる中、今初には即ち因果を結す。

と爲す。方等の中には偏の因果を彈じて、高原陸地に蓮華を生ぜずと雖も、偏の圓に入ることを得るを辨ぜず。圓彰顯ならざれば、是れ亦麤と爲す。華嚴は前に高山を照し一の圓因を說き、究竟の後身に一の圓果を說く。又別の因果を帶すれば、所帶の是麤なり。今經は、聲聞は記を受け、菩薩は疑ひ除く。同じく佛知見を開き、倶に一の圓因に入る。發迹顯本に同じく實果を悟る。因圓に果實にして方便を帶せず、永く餘經に異なり、故に稱して妙と爲す。麤を開すれば、昔の緣は根鈍にして、未だ佛乘の因果を讃ずるを聞くに堪へず、方便の因果を用て近情を引接し、五味に調熟して心漸く通泰す。麤因を決了するに同じく妙因を成じ、諸の麤果を決するに同じく妙果を成ず。故に低頭擧手、著法の衆皆佛道を成じ、更に佛道の因に非ざること無し。佛道既に成ず、那ぞ猶非佛の果あることを得ん。散善微因も今皆開決するに、悉く是れ圓因なり。何に況や二乘の行をや、何に況や菩薩の行をや、皆是れ妙因果ならざること無し。

(八)五に結成とは即ち二と爲す、一に因果を結し、二には四句をもつて料簡す。夫れ經に因果を說くは、正しくは通じて生法の行人を益せんが爲なり。若し權を開して實を顯はすは、正しく七種の方便、生身未入の者をして入らしめ、傍らには生法二身已入の者をして進ましむ。若し壽量の長遠を說くは、傍らには生身未入の者をして入らしめ、正しくは生法已入の者をして進ましむ。神力品に云はく、「如來の所有る一切甚深の事」とは、非因非果は是れ甚深の理、因果は是れ甚深の事なり。七種の方便に初めて圓に入ることを得るより銅

【九】因果を結成する中、之より下は四句を以て料簡す。

輪の位に登る、之を名けて因と爲す。乃至論に一生の在る有りて、若し一生を轉ずれば即ち妙覺を得る、之を名けて果と爲す。一住より等覺に至る中間を名けて亦は因、亦は因因、亦は果、亦は果果と爲す。無礙道を用て一分の無明を伏するは、之を名けて因と爲す。解脱道を用て一分の無明を除するを、之を名けて果と爲す。此解脱に約して復無礙を修す、故に因因と云ふ。此無礙より復解脱を得、故に果果と言ふ。復次に、初の十住を因と爲し、十行を果と爲す。十行を因と爲し十向を果と爲し、十向を因となし十地を果と爲し、十地を因と爲し等覺を果と爲し、等覺を因と爲し妙覺を果と爲す。妙覺は唯果、唯解脱なり。因と名け、無礙と名くることを得ず。初住は唯因、唯無礙なり。果と名け、解脱と名くることを得ず。何となれば、初住に理を見るは、理を以て因と爲す。但前相似は是れ習因に非ず。若し性徳を初因とするを取らば、彈指散華は是れ緣因の種、隨聞一句は是れ了因の種、凡そ心有る者は是れ正因の種なり。此れ乃ち遠く性徳の三因の種子を論ず、是れ眞實の開發に非ず、故に取りて因とせざるなり。

（九）二に四句料簡とは、問ふ「若し初住に理に入るを名けて圓因圓果と爲すと言はば、何ぞ文に漸漸修學得成佛道と云ふことを得るや。」答ふ「應に兩種の四句を作して料簡すべし。自ら漸の圓なる有り、自ら圓の漸なる有り、自ら漸の漸なる有り、自ら圓の圓なる有り。漸圓とは、此れ理外の七種の方便同じく佛知見を開いて、始めて圓理を見るに約す。圓理を見るとは、良に理外の方便漸く圓因に入るに由る。故に漸圓と

【正習】正使と習氣とをいふ。煩惱と及び習慣より得たる惡習となり。

言ふ。漸圓の三句云云。圓漸とは、初めて此圓に入りて同じく三諦を觀じ、實相の理を見ることと初後殊なることと無し。然るに事の中の修行未だ盡く備はること能はず、復須く研習すべし。初めて圓に入るに據る、故に名けて圓と爲す。進んで上行を修するを、復名けて漸と爲す。漸漸とは、二住より去つて等覺に至る。此は是れ圓家の漸漸にして、理外の漸漸に非ず。圓圓とは、妙覺に至つて亦漸圓と名け、亦圓圓と名く。圓理は先より圓、今復事圓なり、故に圓圓と名く。復次に圓漸は初住の如し、漸漸は二住已去より三十心に至るが如し、漸圓は初地已去の如く、圓圓は卽ち妙覺なり。三十心に同じく賢聖の義ありと雖も、賢をもつて稱して賢と爲す、伏多く斷少きが故なり。十地より去つては名けて聖と爲す、伏少く斷多きが故なり。又十住を賢の聖と名け、二十心は是れ聖の賢なり。十地、等覺は是れ聖、妙覺は是れ聖の聖なり。今喩を借るに、初月は匡郭已に圓なれども光用未だ備はらず、是れ圓漸を譬ふ。二日より十四日に至つては其圓漸く進む、是れ漸漸を譬ふ。十五日に至るは是れ漸圓を譬へ、又圓圓を譬ふ。是れ月に虧盈無けれども、亦月に約して虧盈を辨ず。理は圓漸無けれども、亦理に約して圓漸を判ずる耳。此經の宗は利益巨大なり、始め圓漸より終り圓圓に竟るまで、大乘の因果增長し具足す云云。問ふ、「旣に圓漸と稱す、復圓別と稱するや。乃至通藏も亦應に爾るべしや」。答ふ、「此義は四教章の中に出づ。其意云何、三藏の三藏は解すべし。別とは諦、緣、度なり、通とは實諦なり。圓とは無作[illegible]するなり。通の通とは同じく無生なり。三藏とは道諦の中の戒、定、慧なり。別とは止習の

【五住】根本の無明住地以下、枝末の有愛、色愛、欲愛、見一切處住地の五住地の煩惱を云ふ。

【一〇】五義各說の中第四に用を論ず、即ち初には名を釋し、また之を論ずるに就いて五章を開す。

盡不盡なり、化他、不化他、出假、不出假の別なり、圓とは同じく眞を證するなり、別の別とは上に別に下に別なり、三藏とは無量の道諦の中の戒、定、慧を修するなり、通とは四門倶に中に契ふなり、圓とは五住盡るなり、圓の圓とは融なり、別とは四門異なり、通とは四門相攝するなり、藏とは圓の道諦、圓の戒、定、慧なり。此義既に通ず、亦應に漸漸、漸圓の四句皆得べし。因果を結すること皆成ず、然して後に麤妙を判じ、麤妙を開すること悉く得るなり。

〔一〇〕大章第四に用を明さば、用は是れ如來の妙能、此經の勝用なり。如來は權實二智を以て妙能と爲し、此經は斷疑生信を以て勝用と爲す。祇二智能く疑ひを斷じて信を生ず、信を生じ疑ひを斷ずるは二智に由る。人に約し法に約し、左右に論ずる耳。前に宗を明すに、宗體に就いて分別し、宗と體とをして濫ぜざらしめたり。今用を論ずるに、宗用に就いて分別し、宗と用とをして濫ぜざらしむ。何となれば宗亦用あり、用亦宗有ればなり。宗の用は用の用に非ず、用の用は宗の用に非ず、用の宗は宗の宗に非ず、宗の宗は用の宗に非ず。宗の用とは因果は是れ宗、因果に各斷伏有るを用と爲す。用に宗有りとは、慈悲を用の宗と爲し、斷疑生信を用の用と爲す。若し宗を論ずるには、且らく斷伏を置いて但因果を論ず。今用を明すには、但斷疑生信を論じて且らく慈悲を置く。若し此意を得るときは、則ち權實の二智能く疑ひを斷じ信を生ずるを知る。是今の經の大用なり、其義明けし矣。用を論ずるに開して五と爲す、一に力用を明し、二に同異を明し、三に歷別を明し、

【二】用を論ずるに五章を開する中第一に正しく力用を明す。

四に四悉檀に對し、五には悉檀の同異なり。

一に正しく用を明さば、諸經には純ら佛の智慧を明さず、佛の自の應迹を發せず。正しく二乘の果を破廢せず、生身の菩薩の遠疑を斷じ、其遠信を起さしめず。本地を顯はして法身の菩薩の本念佛の道を增し、界外の生を損せしめず。此の如きの力用は衆經に無き所、今經に之を具にす。所以に命章に二乘、菩薩等の智を論ぜず、純ら佛の微妙の智慧を顯はす。衆生の九法界の知見を開かずして、純ら衆生の佛知見を開く。餘經は但佛の變化する所は是れ迹なりと道つて、佛身自ら是れ迹なりと道はず。今經は自ら佛身是れ迹なりと道ふ、其餘の變化は寧ぞ迹に非ざることを得んや。今經は正しく化城の二乘の果を破廢す、況や其因行をや。又方便教を稟くる菩薩の、迹を執して極と爲るを破す。今皆發廢して悉く是れ權迹なりと稱す、及び中間の諸疑悉く斷じて深遠不思議の信を起す。又本地眞實の功德を顯はして、法身の菩薩をして大利益を得せしむ。初初阿より、終後茶に隣る。十方那由他の土を抹して塵と爲し、增道の菩薩を數ふるに盡さしむること能はず。蓋し如來、權實二智一味の雨を雨すに、普等四方倶に下るは、一切の諸の四門倶に破するなり。具足道を求むる者を充足して、其深疑を斷じ、其大信を起し、一圓因に入りて摩訶衍の車を控きて四方に遊ばしむ。直に道場に至れば大用大力あり、妙能妙益猶自ら未だ盡さず。復次に此力能く二乘の果を破す、二乘は生死を怖畏して、空に入りて證を取り、安隱の想ひを生じ、已度の想ひを生ず。三無爲の坑に墮し、若は死、若は死に等しき苦あり。已に

【一】正しく力用を明し竟りて更に展轉比決す。

敗種の更に還つて生ぜさるが如し、智者も手を拱き、方薬も用無し。涅槃の能く闡提を治するが如きに至つては、此れ則ち易と爲す。闡提は心智滅せず、夫れ心ある者は皆當に作佛すべし。定死の人に非ずんば、治すること則ち難からず。二乘は灰身滅智す、身を灰するときは則ち色も常住に非ず、智を滅するときは則ち心慮已に盡く。焦芽敗種も復高原陸地に在り、既に聾にして且つ瘂なり、永く反覆無し。諸の經目の棄つる所、諸經の方藥行はず。今は則ち本佛の智大きく、妙法の醫良し。色身灰ならずして淨瑠璃の如し、内外の色像悉く中に於て現ず。心智をして滅せず、佛の知見に開示し悟入せしめ、各佛の眼入をして菩提の家に付せしめ、高原陸地に佛の蓮華を長く。其耳は一時に十方界の聲を聽き、其舌は一切の類に隨つて、佛の音聲を演べて、一切をして聞かしむ。能く一根を以て遍く互用を爲す、即ち是れ今經の力用なり。

二に上に已に佛の智力を説き竟んぬ、今更に重ねて說く。漢の世三分するが如き、曹公の智略當時第一なれども、復楊脩に劣ること三十五里なり。此震旦の人の智は外國の外道の智に及ばざること、芥をもつて山に比するが如し。一切世人の外道の智は舍利弗の智の十六分が一に及ばず、二乘の智は螢火の蟲の如く、菩薩の智は日光の如し。通の菩薩の智は鴻鵠の勢ひ遠きに及ばざるが如く、別の菩薩の智は金翅鳥の一須彌より一須彌に至るが如し。別の菩薩の智は爪上の土の如く、佛の智慧に比すれば十方の土の如し、當に知んぬべし、佛の智慧は至つて融じ至つて即し、至つて頓、至つて實なり、思議すべからず、不縱不橫

【二三】用を論ずるに就いて五章を開する中、第二には諸經との同異を明す。

【二四】用を論ずるに五章を分つ中、第三には別して之を解釋す。即ちまた開して二段とし、而してその第一に迹門を解釋するに、十意を列ね、次に通別に之を釋し、乃至十妙に對す。

にして圓妙無比なり、喩を以て盡すべからず。餘經は純ら說かず、今經獨り純ら之を說く、此れ佛の實智の力大なり。譬へば十の小牛乃至一龍、十龍一力士の如し。十力士は五通の人に如かず、外の五通は一の羅漢に如かず、一の羅漢は一の目連に如かず、目連は一の身子に如かず、身子は菩薩に如かず、菩薩は別の菩薩に如かず、別の菩薩は圓の菩薩に如かず、圓の菩薩は佛に如かず。佛は迹甚だ大なり、化復化を作し、化化盡くること無し。無謀にして而も當ること修羅の琴の如し、一切の賢聖も能く測る者有ること無し。佛の權力既に此の如し。餘の諸義は例して知んぬべし、復記さず。

（二三）二に同異を明さば、問ふ、實相の體、因果の宗は既に衆經に通ず。權實の二智は復云何ん。答ふ、名は通用すと雖も、力は大に差別す。藏、通は、二智を以て四住の惑を斷じ偏眞の信を生ず。淨名は二乘及び偏行の菩薩を彈斥すと雖も、亦是れ界內に疑を斷じ信を生ず。小乘及び方便の菩薩をして、大疑を斷じ大信を生ぜしむること能はず。大品の通意も亦是れ界內の疑を斷じ信を生ず、別意は界外に在りと雖も亦未だ近疑を斷じ近信を生ぜしめず。華嚴の正意は界外の疑を斷じ圓信を生ずるも、亦未だ近を斷じ遠を生ぜず。故に權實の二名は復通用すと雖も、而も力は大に異なれり。今經は佛菩提の二智を用て、七種の方便の最大の無明を斷じ、同じく圓因に入る。近迹を執するの情を破して本地の深信を生ず、乃至等覺に亦疑を斷じ信を生ぜしむ。是の如きの勝用、豈衆經に同じからん耶。

（二四）三に別釋を兩と爲す、一には別して迹門を釋し、二には別して本門を釋す。迹門を釋す

るに十と爲す、一には破三顯一、二には廢三顯一、三には開三顯一、四には會三顯一、五には住一顯一、六には住三顯一、七には住非三非一顯一、八には覆三顯一、九には住三用一、十二は住一用三なり。此意は通じて十妙に亘、一一の妙の中皆十意を具す。義推して解すべし云云。

今別に就いて說かば、破三顯一とは、正しく三情を破して而も一智を顯はす。何となれば、昔若し初めに佛乘を讚せば、衆生は苦に沒在せん。故に大を聞くに堪へず、過去の佛の所行の方便力を尋念するに、亦權に三乘を說くべし。三乘を說き已れば、教に背り三情に封せられて、更に好き淨を顯はず。今三の執を破して佛智を顯はす、故に諸佛の法は久しうして後、要ず當に眞實を說くべしと言ふなり。廢三顯一とは、此れ正しく教を廢す。三情を破すと雖も、若し教を廢せずんば執猶因つて生ず。教を廢して意を生ず、是故に教を廢す。正直に方便を捨てて但無上道を說く、十方佛土の中唯一乘の法のみ有り、二も無く亦三も無しと。開三顯一とは、正しくは理に就き、傍らには教に約することを得。約教とは、昔の教は三人の果に入ることを明し、今の教は三人の佛を得ることを明す。正しく理に約するは、祇是れ二乘の眞容、自ら實相有り、昔の方便は深からざれば、妙に見ること能はず。今此容を開するに即ち是れ實相なり、故に權門の迷を決了するに是れ諸經の王なりと言ふ。方便の門を開して眞實の相を示すと。大經に云はく、「諸の聲聞の爲に慧眼を開發す」と。會三顯一とは、正しく行に就く。大品の會宗に云はく、「四念處、四禪等皆是れ

摩訶衍なり」と。但其法を會して、未だ其人を會せず。此經は人と法と行と倶に會す、故に云ふ、汝等が行ずる所は是れ菩薩の道なり。漸漸に修學して悉く當に成佛すべし。低頭擧手皆佛道を成ずと云云。住一顯一とは、此れ佛の本意に就く。本實智を以て物を化し佛は平等に說くこと一味の雨の如し。佛自ら大乘に住す、其所得の法の如きは定慧の力莊嚴し、此を以て衆生を度す。若し小乘を以て化せば、我則ち慳貪に墮せん、此事を不可と爲すと。故に知んぬ、得道の夜より常に中道を說き、常に大乘を說くことを。而して衆生は卵の故に、故に如來をして毒を以て乳に塗り、弊垢の衣を著せしめ、方便調和して引いて大に向はしむ。故に言ふ、種種の道を說くと雖も其れ實には一乘の爲なりと云云。住三顯一とは、此れ佛の權智に就いて方便して物を化す。尋ねて過去の佛の所行の方便力を念ふに、我今亦是の如し、即ち波羅奈に趣きて、方便力を以ての故に五比丘の爲に說く。過去の諸佛も亦三乘に住して而も一乘を顯はす、今佛も亦爾り。故に更に異の方便を以て、第一義を助顯すと言ふ。又昔菩薩の爲に於て偏斷を呵責す、然れども佛は實は大乘を以て度脫を得せしむ。住非三非一顯一とは、或は理に約し、或は事に約す。理に約すとは、是法は法位に住す、世間の相常住なり。是法は示すべからず。法は常に無性なりと知る、佛種は緣より起ると。無性は即ち非三非一なり、緣より起るとは是れ三の緣より一を顯はして、非三非一に會せしむ。事に約するは、即ち是れ人天乘なり、此乘は三に非ず、亦復一に非す。常に此乘を以て引いて大に入らしむ、低頭擧手皆佛道を成ず。若し我衆生に遇ふに、

【二】別して用を釋するに就いて二門を開する中、之より下は即ち本門を解釋す。

盡く教ふるに佛道を以てすと。覆三顯一とは、此れ權巧多端なるに約く。前の權は、前に度す、但其病を除いて其法を除かず。法除かざるが故に、後緣を化するに擬す。若し此法を廢せば、後に何の用ふる所かあらん。機息めば則ち覆ひ、機興れば則ち用ふ。何ぞ但佛のみ爾ならん、人實の菩薩も亦然なり。若し此法を信ぜざるもの有らば、餘の深法の中に於て示教利喜せよと云云。住三用一とは、此れ法身妙應の眷屬に約く。前の住三顯一は是れ師門なり、今の住三用一は是れ弟子門なり。富樓那等の如きは、實に是れ法身なれども現に聲聞と作り、三に住して而も常に一を顯はすことを示し、同梵行の者を饒益す。住一用三とは、此れ本誓に約く。華光作佛して、願つて三乘を說けども而も惡世に非ざるが如し。今佛も亦寶藏佛の所に於て、惡世に於て此三乘を說かんことを願ふ云云。但權實の大用、法界を包括す。豈止十意のみならんや、十妙の用を顯はさんが爲に、故に略して十と言ふのみ。

破三顯一は是れ智妙を用ひ、廢三顯一は是れ說法妙を用ひ、開三顯一は是れ境妙を用ひ、會三顯一は是れ行妙を用ひ、住一顯一は是れ乘妙を用ひ、住三顯一は是れ感應妙を用ひ、住非三非一顯一は是れ神通妙を用ひ、覆三顯一は是れ位妙を用ひ、住三用一は是れ眷屬妙を用ひ、住一用三は是れ利益妙を用ふ。十用を將て十妙に對當するに文義相揀ぶ、大意解すべし云云。

（二）二に本門の力用は、例して十意と爲す。若し文の便を扶せば應に開近顯遠と言ふべし、

若し義の便を取らば應に本迹と言ふべし。祇近を呼んで迹と爲し、遠を本と爲す、名は異なるも義同じ。言ふ所の十とは、一には破迹顯本、二には廢迹顯本、三には開迹顯本、四には會迹顯本、五には住本顯本、六には住迹顯本、七には住非迹非本顯本、八には覆迹顯本、九には住迹用本、十には住本用迹なり。通じて本門に就くに、一一の妙の中皆十意を具す。

若し別して論ぜば、破迹顯本は、亦情を破するに就く。序品、方便、寶塔の三文、已に執を動じ疑ひを生ず。文殊、彌勒に答へて云ふが如し、昔の八王子は、妙光は先に補處に居し、而して王子は成佛す、號して燃燈と曰ふ。弟子今又成佛して、號して釋迦と曰ふ。妙光は翻つて弟子と爲り、字を文殊と曰ふ。迹執を動じて、此疑を生ず、何に由りてか決すべけん。今言はく、是れ補處淹緩するに非ず、亦弟子超越するに非ず。良に釋迦の成道已に久しきに由りて、昔は弟子を示し、今は師と作ることを示す耳。此迹の疑を拂つて本智を顯はす、故に破迹顯本と言ふなり。方便品に云はく「我久遠劫より來、涅槃の道を讃示して、生死の苦永く盡す。我常に是の如く說く」と。常に知るべし、生死久しく已に永く盡くれば、是れ中間に、始めて涅槃に入るに非ざることを。寶塔涌現して、滅を示せども滅せず、迹に卽して、而も常なることを證す。分身皆集まること、八方稠り數ふべからず。分身既に多し、當に知るべし、成佛久しきことを矣。荷積んで池に滿つる喩の如し。三品の文を推すに、已に是れ破迹の漸なり。所以に下方の涌出は、寂滅道場にして化を

受くるに非ず、亦他方分身の所にして、化を受くるに非ず。此閒處の人、及び彌勒も皆識る、而して今は識らず、所以に騰疑す。此近情を破して本の長遠を顯はす。故に文に云はく、「一切世間皆謂ふ、我釋迦牟尼は釋氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からずして三菩提を得」と。然るに「我實に成佛してより來、無量百千萬億那由他劫なり」と。直世界を擧げて彌勒に問ふに、彌勒其數を知らず。何に況や世界の中の塵にして、而も當に數ふべけんや。此は是れ近執の謂を破して其遠相を生ずるなり。實遠顯本とは、亦說法に就く。昔五濁の障重きが爲に、遠く本地を說くことを得ず、但迹中の近成を示す。今障除き機動ず、須く道樹王城の迹中の說は皆是れ方便なりと覺すべし。執近の心既に斷じ、封近の教亦息む。文に云はく、「是より來、我常に此娑婆世界に在りて說法教化す」と。亦「餘處百千萬億那由他阿僧祇の國に於て、衆生を導利す」と。即ち是れ一期の迹教を廢して久遠の本說を顯はすなり。開迹顯本とは、此亦法に就き、亦理に就く。秖文殊の述ぶる所の燃燈佛、及び久遠より來、涅槃の道を讚示し、及び分身の諸佛、此の如きは迹說なれども、是れ顯本の意を以てす。惑ふ者は未だ玄旨を悟らず。今本を顯はすが若きは亦迥に餘途に就かず、還つて近迹を開して其本要を示す耳。理に就かば、但深く方便の迹を觀ずれば本理即ち顯はる。文に云はく、「我實に成佛してより已來久遠なること斯の若し、但方便を以て衆生を教化して佛道に入らしむ」と。若し佛道に入れば、迹に即して本を得るなり。會迹顯本とは、此れ則ち行に就く。迹中の諸行を尋ぬるに、或は此佛に從つて行を行じて記を

得、或は彼佛に從つて行を行じて記を得、或は己身、他身權に隨つて應現し、長短大小を示す。諸の迹は悉く本より垂る、若し古今を結會せば、還つて迹を結して本を顯す耳。本迹殊なりと雖も不思議一なり。文に云はく、「諸の善男子、是中間に於て我燃燈佛等と說き、又復其れ涅槃に入ると言ふ。此の如きは皆是れ方便をもつて分別するなり」と。即ち迹を會して本を顯はす意なり。住本顯本とは、此れ佛の本意に就く。即ち下方の菩薩空中に於て住す、法身の佛、法身の菩薩の爲に法を說く。法身、道を修するに純ら一乘を說くが如し。文に云はく、「娑婆世界は純ら黃金を以て地と爲し、人天充滿す」と。又云はく、「人衆は燒盡すと見れども我が淨土は毀れず。能く是の如く深く信ずるを、是を深信解の相と爲す」と。常に是本に住して恒に本を顯はす。文に云はく、「我成佛してより已來、甚大久遠なり、壽命は、無量阿僧祇劫に常住にして滅せず」と。豈住本顯本に非ずや。住迹顯本とは、此れ迹の意に說く、即ち是れ釋迦生身に住して一を顯はす、一を顯はすに由るが故に古佛の塔涌す、塔涌するが故に分身を各請す、分身集まるが故に、弘經を募覓し、下方より出現す、弘經を募覓し、下方より出現すれば彌勒は疑問す、問ふが故に壽の長遠を說き、惑を動じ疑を遣る。是を住迹顯本と爲るなり。文に云はく、「我佛眼を以て其信等の諸根を觀じ、乃至種種の方便を以て微妙の法を說き、能く衆生をして歡喜の心を發さしむ」と。非迹非本に住して本を顯はすとは、此れ絕言實會に約す。即ち是れ本に非ず、迹に非ずして而も能く本迹あり、昔は迹に非ずして而も迹を垂れ、今は本に非ずして而も本を顯

はす。文に云はく、「非實非虛、非如非異、昔の如きの事は如來明かに見たまふ」と。覆迹顯本とは、示便機を微なるに約す。若し迹を執すれば本を隱ふ、故に覆うて執せざらしむ。更に後の機に對して而して迹を用ふべし、故に開示迹の法有り。文に云はく、「經中の言辭、因緣、譬喩を以て種種に說法す、所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず」と。住迹用本とは、上本迹に住して本を顯はすは、此れ是れ經中の踊出從地をもつて本地の理を顯はす。今住迹用本と言ふは、卽ち是れ中間の迹、近世に於いて種種に說す。自身他身とは皆本地の實因實果種種の本法を用て、諸の衆生の爲に而も佛事を作す、故に住迹用本と言ふ。此は卽に約いて解を爲す。若し弟子に約せば、卽ち是れ本地時の眷屬なり。佛迹に住して權を九道に垂れ、而も本法を用て衆生を利益す。文に云はく、「[illegible]るに衆を實に沒在するに非ず、而も便ち唱へて當に滅度を取るべしと言ふ。佛は如實の便を以て衆生を教化したまふ」と。此は是れ迹に住して、本地の實果を用ひて而も滅度を示すなり。住本用迹とは、卽ち是れ本地を動ぜずして、而も迹を法界に開らし、形生に生を現じ、非滅に滅を現じ、常に非迹を用て衆生を利潤す、此れ等は皆に遍る。若し弟子に據らば、卽ち是れ法身の菩薩、不住の法を以て本地に住す。當位の權、迹用盡くることと無し。文に云はく、「諸善男子、諸佛如來の法皆是の如し、衆生を度せんが爲、皆實にして虛ならず」と。佛意は、衆緣に赴けば、文少しく次ならず。今擧げ來つて義を證するに、唯だ其の文を引きて證す。

破迹顯本、會迹顯本は別して而妙を用ひ、開迹顯本は是れ別して論ずれば本果妙を用ひ、

【一六二】用を論ずるに五章を開する中第四には悉檀を結成す。

住本顯本は是れ別しては本國土妙を用ひ、住迹顯本は別して論ずれば是れ本說法妙を用ひ、住非迹非本は別して論ずれば是れ本感應妙を用ひ、覆迹顯本は別して論ずれば是れ本神通妙を用ひ、住迹用本は別して論ずれば是れ本壽命妙を用ひ、亦是れ本眷屬妙を用ふ。住本用迹は別して論ずれば是れ本涅槃妙に住す、亦是れ本利益妙なり云云。

（一六二）四に悉檀を結成すとは、權實二智の十用同じからず、即ち是れ一實の眞諦を機に隨ひて各解す。迹中の破廢は、四種の方便をして佛知見を開かしむ。本中の破廢は、塵沙の菩薩をして疑を斷じ道を增せしむ。皆是れ四悉檀の意をもつて衆生を成熟す。今此十用を束ねて四悉檀と爲す、先に迹門を束ね、次に本門を束ぬ。迹に就いて三と爲す、先には別して束ね、次に通じて束ぬ。別とは、開三顯一と、住三用一と、會三歸一と、此三種は爲人悉檀に屬す。何となれば、本此三を習ふ、今還つて三に約して一を修す、迹を改め緣を易へず、祇深く此三を觀ずるに一理自ら顯はる。三の中に一あれば取捨すべからず、故に開三顯一は爲人悉檀に屬す。住三用一も亦是の如し、祇此三に就いて而も一道を修す。富樓那の但聲聞に住して而も自ら饒益し、亦廣く同梵行者をも饒益するが如し。即ち是れ三法を改めずして能く一の解を生ずれば、皆爲人悉檀に屬す。破三、廢三、覆三の、此三は對治に屬す。其三に封せられて一を妨へば、其情を斥破し、權執を廢し、密に權法を覆ひ、以病の心を除き、一實の道に入り、實智の中に安住せしむるなり。住三顯一と住一用三との兩種は世界悉檀に屬す、何となれば、世界は[illegible]を以て本と爲す。若し衆生は三乘の道を

得んと欲して、一實の化を開かんと欲せず、故に佛自ら一に住したまへども、故に同じて三を說く。又三乘の緣異なるは、世界の隔別するが如し。故に世界悉檀と名く。住三顯一も亦是れ世界なり、何となれば、佛は人機に隨つて方便に住し、調熟して一を顯はす、故に世界悉檀に屬するなり。住一顯一と、住非三非一顯一とは、此は第一義悉檀に屬す。通じて四悉檀を明さば、祇三を破して一を顯はすに四種の義有ることを得。何となれば、佛子は過を開かんことを樂ひ、小人は愆を聞かんことを惡む。過を知つて必ず改めんことを欲するは、即ち執を破して病を除かんが爲なり。縱審修行は即ち是れ世界なり、若し住三を執すれば道を進むること能はず、三を破して一に從ふに、覺悟の心生じ善法增進す、是を爲人と名くるなり。三を執するは是れ病なり、一を說くを藥と爲す。是を對治と名く。若し破三を聞きて理を見ることを得るは第一義と名く。餘の九種も例して爾り。故に知んぬ、佛の善巧、機緣に稱合して皆益を得せしむるは、四悉檀の力なることを。

二に本門の十妙を結して四悉檀とするも、亦別と通との二意有り。住迹顯本と、住本用迹とは、此は世界悉檀に屬す。亦隨樂欲と名く、釋すること前の如し。開迹顯本と、會迹顯本と、住迹用本とは、爲人悉檀に屬す。迹を改めて更に修せず、還つて本法に約し、修して本を顯はすなり。釋くこと前の如し。破迹と、廢迹と、覆迹とは對治に屬す。住本顯本と、住非本非迹顯本とは第一義に屬す。釋すること前の如し。次に通じて一科に約して四悉檀を結せば、亦前の如し。餘の九も例して亦爾り、具に解すること云云。

【一七】用を論ずるに五章を開する中第五には悉檀の同異を論ず。

（一七）五に悉檀の同異とは、餘經に亦四悉檀の破三顯一、破迹顯本等を用ふれども、而も此と異り有り。即ち兩と爲す、一には迹門に異を明し、二には本門に異を明す。迹門の異とは、三藏の中に亦四悉檀の破廢等の意有るも、但有餘、無餘の涅槃と爲す云云。大品の中の共般若も亦四悉檀の破立廢等の意を用ふれども、但眞理を悟りて未だ圓に入ること能はず云云。方等の中に亦破三顯一あり、菩薩の人に於ては一分の同有るも、二乘の人は實に入ることを得ず、故に十弟子は淨名に訶せられ、八邪に墮し衆數に入らず。此は是れ破斥の語なり、不思議大乘の道を稱歎す。皆四悉檀の意を用ふ、而して二乘は悟らず。此經は四悉檀の意を用ひ、二乘も疑を斷じ執を除き、佛の正道に入り、受記作佛することを得。故に知んぬ、此經は四悉檀を用ふること巧妙なり。文に云はく、「言辭柔軟にして衆心を悅可す」と。身子の領解に云はく、「佛は種種の緣、譬喩を以て巧に言說したまふ、其心安きこと海の如し、我聞きて疑網斷じ、安んじて實智の中に住す」と、即ち其義なり。問ふ、「法華に一を顯はすは、還つて先に破するに藉る、前の調熟無くんば、今亦解せじ。」答ふ、「今日悟ることを得るは昔の彈訶に由れども、但功は此經に屬すれば徒得に非ずと名く。譬へば百人共に一賊を圍めども、而も攻め圍むの力は實に衆人を籍み、能く賊を擒ふる者は勳を得て、百人に屬せざるが如し云云。此經の開權顯實四悉檀の大用を最も雄猛と爲す云云。」發迹顯本の四悉檀は永く衆經に異なる、何となれば、迹中の力用已に諸教に出づ。本の中の十用は諸經には一も無し。況や十有るべけんや、迹の中の悉檀

は已に諸經に出づ、本の中の差別は諸經には一も無し、何に況や四有らんや。意を以て推すべし、煩はしくも多く記すること無し。

妙法蓮華經玄義卷第九下

【一】五義各説の中、第五に教相を釋す。即ち初には、その來意を明し、乃至五章を開す。

【二】教相を釋するに五章を開する中、第一には大意を明す。即ち先づ初には説の根本を明し、次に正しく大意を明すに就いて初に教法の優劣を論ず。

妙法蓮華經玄義　卷第十上

天台智者大師の説

（一）大章第五に教相を釋せば、若し但經を弘むるには、教相を明さざるも義に於て傷ること無し。若し法華を弘めんには、教を明さずんば文義闕くること有り。但し聖意幽隱にして教法彌難し、前代の諸師、或は名匠に祖承し、或は思ひ神衿より出づ、阡陌縱横なりと雖も、孰れか是なるを知ること莫し。然るに義は雙び立せず、理は兩つながら存すること無し。若し深く所以有りて、復修多羅と合する者は錄して之を用ふべし。文無く義無きは信受すべからず。南嶽大師は心に存する所あり、又經論を撿同し佛語に準遵す。天台師は述して從ひ用ふ。略して教を明すに五と爲す、一には大意、二には異を出し、三には難を明し、四には去取、五には判教なり。

（二）大意とは、佛は無名相の中に於て、名相を假りて説きたまふ。餘の經典を説くには、各縁に赴きて益を取らしむるなり。華嚴の、初に圓、別の機に逗じ、高山を先に照すが如きに至つては、直に次第不次第の修行、住上地上の功德を明して如來説頓の意を辨せず、若し四阿含を説くには、增一には人天の因果を明し、中には眞寂の深義を明し、雜には諸の禪定を明し、長には外道を破す。而も通じて無常を説き、苦を知つて集を斷じ、滅

【折小彈偏歎大褒圓】小乘の卑劣を折挫し、藏通別の前三教の偏を彈破し、後の大乘を稱歎し、圓教の深勝を褒揚するの意にして方等部の意を示す語なり。

【三】判教相の中、正しく大意を明すに就いて、之より下は物機の不同を辨ず。

を證し道を修す。如來曲巧施小の意を明さず。諸の方等の折小彈偏、歎大褒圓の若きは、慈悲行願、事理殊絶なれども、並對調停の意を明さず。般若の若きは、通を論ずるときは則ち二人同じく入り、別を論ずるときは則ち菩薩獨りのみ進む。廣く陰入に歷て盡淨虛融すれども、亦共別の意を明さず。涅槃の若きは後に在りて、略して三修を斥ひ、麤五味を點ずれども、亦委しく如來置教の原始、結要の終を說かず。凡そ此諸經は皆是れ他意に逗會し、他をして益を得せしむ。佛意を譚ぜず、意趣何くにか之く。今經は爾らず。是法門の網目を絓くるのみにして、大小の觀法、十力、無畏、種種の規矩は皆論ぜざる所なり。前の經に已に說くが爲の故なり。但如來布教の元始、中間の取與を論じて、漸頓時に適ふ。大事の因緣、究竟の終訖、說教の綱格、大化の筌蹄なり。

(三)其宿殖淳厚なる者は、初に即ち頓を與へ、直に菩薩の位行功德を明し、言は小に涉らず。文に云はく、「始め我身を見、我所說を聞きて、即ち皆信受して如來の慧に入る」と。其堪へざる者には、其無量の神德を隱して、貧所樂の法を以て、方便附近して、語りて勤作せしむ。文に云はく、「我若し佛乘を讃ぜば、衆生は苦に沒在せん」と。此の如きの人は、應に此法を以て漸く佛慧に入るべし。既に道を得已れば宜しく彈斥を須ふべし、即ち方等に大を以て小を破するが如し。文に云はく、「苦切に之を責め已つて、示すに繫くる所の珠を以てす」と。若し通を兼ぬるに宜しければ、半滿を以て洮汰す。大品に相著を遣蕩して、其宗途を會するが如し。文に云はく、「衆人を將導して、嶮道を過ぎんと欲す」と。此難を過

【四】大意を明す中、次には如來の能鑒を明す。

ぎ已つて、之を定むるに子父を以てし、之に付するに家業を以てし、之を拂ふに權迹を以てし、之を顯はすに實本を以てす。當に知るべし、此經は唯如來設教の大綱を論じて、微細の網目を委しくせざることを。譬へば算者の、初に下し後に除き、大數を紀定して斗斛を存せざるが如し。故に無量義に云はく、「無量義とは一法より生ず」と。則ち一佛乘に於て分別して三を說くは、此れ算を下すに譬ふ。若し無量を收めて以て一に入れ、三を會して大に歸するは、此れ算を除いて唯大數を記するに譬ふ焉。

(四)是の如き等の意は、皆法身地にして寂にして而も常に照す。始めて道樹にして大に逗じ小に逗ずるに非ず。佛智の機を照すこと、其來ること久し矣。文に云はく、「唯一大事因緣を以て世に出現す」と。此れ大を照すこと久しきなり矣。文に云はく、「般若に方便を稱歎す」と。此れ小を照すこと久しきなり矣。文に云はく、「諸佛の法は久しうして後、要ず當に眞實を說くべし」と。此れ小を會して大に歸するを照すこと久しきなり矣。信解品に云はく、「師子の牀に踞し、子を見て便ち識る」と。此語は初大機を鑒みること久しきなり矣。窻牖の中に於て遙に其子を見るとは、此れ小機を鑒みること久しきなり矣。當に二人を遣し方便附近して、語りて勤作せしむとは、此れ三を開することを須ふるを鑒みること久しきなり矣。心相體信して入出に難り無しとは、此れ調斥を鑒みること久しきなり矣。衆物を領知すとは、此れ洮汰を鑒みること久しきなり矣。後に家業を付するは、此れ教行等を鑒みること久しきなり矣。當に知るべし、佛意深遠にして、彌勒も所爲の因緣を識らず、

【五】大意を明す中、次には更に所説を校量することを明す。

況や下地、二乘、凡夫等をや。文に云はく、「唯我のみ是の相を知る、十方の佛も亦然り」と。

(五)又已今當の説には(法華)最も難信難解と爲す。前の經は是れ已説にして隨他の意なり、彼には此意を明さず、故に信じ易く解し易し。無量義は是れ今説にして亦是れ隨他の意なり、亦信じ易く解し易し。涅槃は是れ當説なり、先に已に聞くが故に亦信じ易く解し易し。此教を説かんとするには疑請重疊なり、具には迹本の二文の如し。請を受けて説く時は秖是れ教の意を説く、教の意は是れ佛意なり、佛意は即ち是れ佛智なり。佛智は至つて深し、是故に三止四請す。此の如きの艱難は餘經に比するに、餘經は則ち易し。若し始道場に坐し、梵王初めて請ずるに、直請法を言つて亦梵網往復殷勤すること無し。諸の方等を説くは、文を觀て知んぬべし。大品を説く時は、猶梵請に酬ゆ。唯華嚴の中に、金剛藏に請ずるを連類と爲すべし。而して人師偏へに著して法華より加れたりと謂ふ、小乘の請を致すは菩薩に及ばずと言ふは、此れ一途を見る耳。身子は衆心を擧げて云はく、「佛口所生の子合掌瞻仰して待つ、佛を求むる諸の菩薩は大數八萬有り、具足の道を聞かんと欲す」と。何ぞ獨り是れ一小乘のみならんや。又彌勒も衆を開べ決を文殊に求む、解脫月金剛藏と若爲ぞ異なること有らんや。又本門の中には、菩薩、佛に佛法を説きたまへと請ず。豈菩薩の菩薩に菩薩の法を説きたまへと請ずるに比せんや。若し此意に就かば、彼に加すること有らん。若し彼列衆は十方より雲集す、皆是れ盧舍那佛宿世の知識なり。此經の雲集、地涌の菩薩は、皆釋尊に從つて發心す、是れ我所化なり。此れ一往は即ち齊しけれども、

【六八】判教相に五章を開する中、第二に異解を出す。【南三北七】江南に於ける三家と江北地方の七家との十家判教を指す。

而も誰か無からざらん。又彼には十方の佛華嚴を說きたまふことを明す、加を被むる者同じく法慧、金剛藏等と名け、彼の佛は是れ舍那の分身なりと言はず。今は三變土田して、一方に各四百萬億那由他の土の中に滿つる諸佛は、悉く是れ釋尊の分身なりと明す。此意彼に異なり。彼華嚴を以て勝れたりと爲さば、還つて復一兩句を出す、故に毀を興すには非ず。若し其優劣を較ぶれば、恐らくは旨を失ふことを成ぜん。但此法華のみ權を開し本を顯はす、前後の二文は疑ひ多く請倍す。餘經に比せず。秖深く佛教を論じ妙に聖心を說くこと、近く開因に會ひ遠く本果を申べんが爲なり。所以に慇請已まず。若し能く精しく教相を知らば、則ち如來の權實の二智を識らん。教意甚深なること、其れ略して是の如し。

(六)二に異解を出さば即ち十意と爲す、謂ゆる南三北七なり。南北の地は通じて三種の教相を用ふ、一には頓、二には漸、三には不定なり。華嚴は菩薩を化せんが爲、日の高山を照すが如きを、名けて頓教と爲す。三藏は小乘を化せんが爲に先に半字を教ふ、故に有相教と名く。十二年の後大乘の人の爲に五時の般若、乃至常住を說くを無相教と名く。此等は倶に漸教と爲す。別に一經あり、頓、漸の攝に非ずして而も佛性常住を明す、勝鬘、光明等是れなり。此を偏方不定教と名く。此三意は通途に共に用ふるなり。一には虎丘山の笈師なり、頓と不定とを述ぶることは前舊に殊ならざるも、漸を更に三と爲す。十二年前に三藏の見有得道を明すを有相教と名け、十二年の後法華に至るを以つて、見空得道を明す

【莊嚴の旻師】莊嚴寺の守旻法師。【定林の柔、次】定林寺の僧柔と慧次。【道場の觀法師】道場寺の慧觀法師【開善、光宅】開善寺の智藏法師と光宅寺の法雲法師を指す。

を無相教と名く。最後に雙林に、一切衆生の佛性、闡提作佛を明すを常住教と名く。二には宗愛法師なり、頓と不定とは前に同じ。漸に就いて更に四時教を判ず、即ち莊嚴の旻師の用ふる所なり。三時は前に異ならず、更に無相の後、常住の前に於て、法華に三を會して一に歸し、萬善悉く菩提に向ふを指して同歸教と名くるなり。三には定林の柔、次の二師及び道場の觀法師なり、頓と不定とを明すは前に同じ、更に漸を判じて五時教と爲す、即ち開善、光宅の用ふる所なり。四時は前に異ならず、更に無相の後、同歸の前に約して、淨名、思益の諸の方等經を指して褒貶抑揚教と爲す。四には北地師も亦五時教を作る、而して提謂波利を取りて人天教と爲し、淨名、般若を合して無相教と爲す、餘の三は南方に異ならず。五には菩提流支なり、半滿教を明す。十二年の前は皆是れ半字教、十二年の後は皆是れ滿字の教なり。六には佛馱三藏の學士光統の辨ずる所は、四宗を以て教を判ず。一には因緣宗なり、毘曇の六因四緣を指す。二には假名宗なり、成論の三假を指す。三には誑相宗なり、大品、三論を指す。四には常宗なり、涅槃、華嚴等の常住佛性本有湛然を指す。七には有師なり、五宗教を開す。四義は前に異ならず、更に華嚴を指して法界宗と爲す。即ち護身の自軌大乘の用ふる所なり。八には有人、光統を稱して云はく、四宗は收めざる所有れば更に六宗を開す。法華の萬善同歸、諸佛法久後、要當說眞實を指して、名けて眞宗と爲す。大集の染淨俱に融じ法界圓普するを、名けて圓宗と爲す。餘の四宗は前の如し、即ち是れ耆闍の凜師の用ふる所なり。九には北地の禪師なり、二種の大乘教を明

【七】略して教相を明すに五章を分つ中、第三には難を明す。而して先に南方三家を難ずるに、初にその五時教を難ず、即ち第一に有相教を難ずるなり。

す。一には有相大乘、二には無相大乘なり。有相とは華嚴、瓔珞、大品等に、階級十地の功德行相を說くが如し、無相とは楞伽、思益に、眞法には詮次無く、一切衆生卽ち涅槃の相の如し、十には北地の禪師なり、四宗、五宗、六宗、二相、半滿等の教に非ず、但一佛乘にして二も無く亦三も無し。一音をもつて法を說くに類に隨つて異解す、諸佛は常に一乘を行ず、衆生は三を見るも但是れ一音の教なり。異解を出すこと竟んぬ。

（七）三に難を明すとは、先に南地の五時は其義成せざるを難ず。餘の四時、三時は例して壞すべし。若し十二年前を有相教と名くと言はば、成實論師自ら己が論を誣ふ、論に云はく、「我今正しく三藏の中の實義を明さんと欲す、實義とは謂ゆる空是れなり」と。空は無相に非ずや、三藏は十二年前に非ずや。又阿含の中に說く「是れ老死とは誰か老死する、二皆邪見なり」と。是れ老死無きは卽ち法空、誰の老死無きは卽ち生空なり。三藏經の中自ら二空を說く、二空は豈無相に非ずや。又釋論に云はく「三藏の中には法空を明して大空と爲し、摩訶衍の中には十方空を明して大空と爲す」と。既に法空を以て大空と爲す、卽ち大無相なり。又成道六年に卽ち殃掘摩羅經を說き、空を明すこと最も切なり。此れ無相に非ずんば、誰か是れ無相なるや。又大論に云はく「得道の夜より泥洹の夜に至るまで常に般若を說く」と。般若は卽ち空慧なり。復次に十二年の前を有相教と名けば、得道とせんや不得道とせんや。若し得道ならば則ち成論に乖く。論師の云はく「有相の四諦は是れ調心の方便なり、實に道を得るに不ず。空平を見て乃ち能く道を得べけん」と。旣に有相

【拘隣如】憍陳如の別稱。

【八】南方五時敎を難ずる中、次には無相敎を難ず。

【共般若】般若時の說法の中、通敎に屬するものをいふ。三乘共通して學び得る法門なるを以てなり。

【不共般若】般若時の說法の中、別圓の二敎を指す。是れ二乘の共學する能はざる法門なればなり。

と言ふ、那ぞ忽ちに道を得ん。若し道を得ずんば、此敎を以て（何にか）爲んや。又拘隣如の五人は、最初に佛法に於て寂然として聲字無く、眞實の知見を獲と。最初の言は豈十二年の前に道を得るに非ずや。又若し道を得ば、敎は無相に同じ、若し道を得ずんば、敎は邪說に同じ。又若し道を得ば、何等の道をか得ん。若し空を見て道を得ば還つて無相に同じ。若し空を見ずして道を得ば亦九十五種に同じ、佛道を得るに非ず。有相の敎には具に二過有り云云。

(八)二に十二年の後を無相敎と名くることを難ぜば、空を明し相を蕩かせども、未だ佛性常住を明さず、猶是れ無常八十年の佛なり。亦三を會して一に歸せず、亦彈訶褒貶無しと、此れ解すべからず。若し無相と言はば、何の意ぞ無常を蕩かさざる。猶無常あり、何ぞ無相と謂はん。若し佛性法身の常住を明さずと言はば、共般若は佛性法身常等に非ざるべし。不共般若は云何が佛性に非ざらん耶。大經に云はく「佛性に五種の名有り、亦は首楞嚴と名け、亦は般若と名く」と。般若は乃ち是れ佛性の異名なり、何ぞ非と言ふことを得ん。彼卽ち救ひて言はん「經に佛性と稱し、亦般若と名くるは、是れ三德の般若なり。何ぞ無相の般若に關はらん」と。若し爾らば、涅槃の第八に何の意ぞ我先に摩訶般若の中に於て、我と無我と其性不二なりと說くが如き、不二の性は卽ち是れ眞實、實性の性は卽ち是れ佛性なりと云ふ。此の如き遙に指す明文灼然たり、何の意ぞ非と言ふや。又涅槃の佛性は秖是れ法性常住にして、變易すべからず。般若に實相實際は不來不去なれば、卽ち是れ佛

にして無生の法なり、無生の法は即ち是れ佛なりと明す。二義何ぞ異ならんや。故に知んぬ、法性實相は即ち是れ正因佛性なり、般若觀照は即ち是れ了因佛性なり、五度の功德の般若を資發するは即ち是れ緣因佛性なり。此三般若と涅槃の三佛性と、復何ぞ異ならん耶。金剛般若論に云はく「福は菩提に趣かず、二能く菩提に趣く、餘に於ては生因と名け、實に於ては了因と名く」と。實相の了因は能く菩提に趣く、豈佛性に非ざらんや。但名は異にして義は同じ、前に分別するが如し。何ぞ釋提婆那民を聞きて常釋に非ずと謂ふことを得ん。其謬此に類す。若し無常八十年の佛說かは佛性常住に非ずと言はば、涅槃に亦云はく「八十年の佛背痛して疾あり、娑羅に於て滅に入る、那ぞ忽に常を斷じ性を辯ぜん」云云。釋論に云はく「佛に生身と法身と有り、生身は人法に同じく寒熱病患、馬麥乞乳あり。法性身の佛は光明無邊、色像無邊なり。尊特の身は猶虛空の如し、法性身の菩薩の爲に法を說く。聽法の衆亦生死の身に非ず」と。何に況や佛をや。釋論に云はく、「又生身の佛は壽則ち有量、法身の佛の壽は則ち無量なり」と。豈無常八十年を以て、法身に加ふべけん耶。小乘の中に、法身尚其れ滅せずと云ふ。均提沙彌の懊惱するが如し、佛問ふ、『汝が和尚の戒身、滅するや不や。』答へて言はく、『不なり。』『乃至解脫知見滅するや不や。』答へて言はく、『不なり。』と。何に況や般若の法身にして、而も無常と言はん。若し般若に三を會すること無しと言はば、何が故に問住品に「諸の天子、今未だ三菩提心を發せざる者も、應に當に發すべし」と云ふや。若し聲聞の正位に入るは、是人三菩

提心を發することと能はず。何を以ての故に、生死の與に障隔を作すが故なり。是人若し三菩提の心を發せば、我亦隨喜す。所以は何ん、上人は應に上法を求むべし、我終に其功德を斷ぜずと。若し聲聞、上法を求めずんば、何の隨喜する所か有らん。既に上法を隨喜す、即ち是れ三を會するなり。若し般若に彈訶無しと言はば、大品に云はく、「二乘の智慧は猶螢火の如し、菩薩の一日智慧を學するは日の四天下を照すが如し」と。又十三卷に云はく、「譬へば狗の大家に從うて食を求めずして、反って作務の者に從って索むるが如し。當來世の善男女人、深般若を棄てて而も枝葉を攀ぢ、聲聞、辟支佛の所應行の經を取る」と。又云はく、「象を見んとして跡を觀るは、皆不黠と名く」と。豈彈訶の更に此より劇しきもの有らんや、褒貶無しと謂はんや。若し般若は是れ第二時教なりと言って、諸天子の佛に白して、第二の法輪轉ずるを見ると云ふを引くは、何の經か第二を見ざらん。而も獨り般若を言はんや。淨名に云はく、「始め道樹に坐して、力め魔を降し、甘露滅を得て覺道成ず。乃至說法有ならず亦無ならず」と。兩說相對するに、亦應に是れ第二の法輪轉なるべし。法華に亦云はく、「昔波羅奈に於て四諦の法輪を轉ず、今復更に最上の法輪を轉ず」と。涅槃に又云はく、「昔波羅奈に於て初め法輪を轉ずるに、八萬の天人は須陀洹果を得たり。今此間の拘尸那城に於て法輪を轉ずる時、八十萬億の人不退轉を得る」と。諸經に皆此旨有り、亦幷に是れ第二なるべし。何ぞ獨り般若のみならん耶。若し十二年の後に無相を明すと言はば、何ぞ二夜常に般若を說くことを得ん。故に知んぬ、無相の過亦甚だ衆多なり云

【九】南方五時教の中、第三には褒貶教を難ず。

【一〇】南方五時教の中、次には第四時同歸教を難ず。

云。

(九)次に褒貶教は是れ第三時なることを難ず。七百阿僧祇と雖も猶是れ無常にして常住を明さず、直是れ彈訶褒揚する而已と。今問ふ、般若を說く時、諸の大弟子皆轉教說法す。悕取せずと雖も咸く以て具に菩薩の法門を知る、何ぞ訶を被りて、茫然として是れ何の言といふことを識らず、何を以て答ふるかを知らざることを得んや。故に知んぬ、褒貶は般若の後に在るべからず、第三時に非ざることを。又彌勒等も亦屈折せらる、何ぞ但聲聞のみならん。若し七百阿僧祇と言はば、此れ亦然らず。此文に自ら佛身は無常にして諸數に墮せずと說く。金剛の體に何の疾、何の惱みかあらん、衆生を度せんが爲に斯事を現ずる耳。文に金剛を辯ず、而して人は七百を判ず、涅槃に亦金剛を辯ず、豈に忽ち常住なる。又云はく「身を觀ずるに實相、佛を觀ずるも亦然り」と。又「一不思議解脫に三種有り、眞性、實慧、方便なり」。即ち是れ三佛性の義なり。凡らく復塵勞の儔を是れ如來の種」と、豈正因佛性に非ずや。「癡愛を斷ぜずして諸の明脫を起す」と、明は即ち了因の性なり、脫は即ち緣因の性なり。三義宛然なるを是れ無常なりと判ぜば、涅槃の三種の佛性は何ぞ是れ常なることを得ん耶。

(一〇)次に第四時の同歸教を難ぜば、正しく是れ萬善を收束して一乘に入るも佛性を明さず、神通延壽、前は恒沙に過ぎ、後は上數に倍するも亦常を明さずと。此れ應に爾るべからず。法華に一種の性相、一地の所生を明す、其說く所の法皆悉く一切智地に到る。命章に

即ち佛の知見に開示し悟入すと云ふ。華嚴に佛の智慧を明すも猶菩薩の智慧を帶す、菩薩の智慧は爪上の土の如く、如來の智慧は十方の土の如し。法華には純ら佛の智慧を說く、十方の土の如し。而して常に非ずんば、華嚴の爪上の土に云何ぞ常住を明さん。又華嚴には、始めて道場に坐し初めて正覺を成ずれば、成佛すること太だ近し。法華には、成佛の久遠なることを明す、中間、今日は皆是れ迹なる耳。迹の中に說く所すら而も是れ常と言ふ、本地の教豈常を明さざらんや。又無量義經に云はく、「華嚴の海空に歷劫修行を說き、未だ嘗て是の如きの甚深無量義經を宣說せず」と。甚深無量義經は已に自ら甚深なり、甚深の經を法華の弄引と爲す、豈常を明さざらんや。若し常住の語少なりと言はば、天子の一語の如きは勅に非ざるべけん耶。文に云はく「世間相常住」と。又云はく「無量阿僧祇劫に壽命無量なり、常住にして滅せず」と。伽耶城の壽命及び數數示現等は是れ應佛の壽命なり、阿僧祇の壽命無量なるは是れ報佛の壽命なり、常住不滅なるは是れ法佛の壽命なり。三佛宛然として常住の義足る。法華論に云はく「三種の菩提を示現す」と。一には應化佛の菩提なり、所應の見に隨ひて爲に示現す。釋氏の宮を出で、伽耶城を去ること遠からずして、道場に坐して三菩提を得るを謂ふ。二には報佛の菩提なり、十地滿足して常涅槃を得るを謂ふ。文に云はく、「我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由他劫なり」と。三には法佛の菩提なり、謂はく、如來藏性淨涅槃は常に淸淨不變なり。文に云はく、「如來は實の如く三界の相を知見す、三界の三界を見るが如くならず」と。衆生界即ち涅

槃界なるを謂ふ、衆生界を離れざるは即ち如來藏なればなり。又云はく、「我敢て汝等を輕んぜず、汝等皆當に作佛すべし」と、即ち正因佛性なり。又云はく、「衆生をして佛知見を開かしめんが爲なり」と、即ち了因佛性なり。又云はく、「佛種は緣より起る」と、即ち緣因佛性なり。法華論に亦三種の佛性を明す、論に云はく、「唯佛如來のみ大菩提を證す」と。究竟して一切の智慧を滿足す、故に大と名く。我敢て汝等を輕んぜず、汝等皆當に作佛すべしと言ふは、諸の衆生に皆佛性あることを示す。經論に明據あり、云何ぞ無しと言ふや。又涅槃に云はく、「是經の世に出づること彼果實の如し。利益する所多く、一切を安樂し、能く衆生をして如來の性を見せしむ。法華の中の八千の聲聞の如き、記莂を受くることを得て大果實を成ず。秋收冬藏して、更に所作無きが如し」と。若し八千の聲聞は、法華の中に於て佛性を見ずんば、涅槃に懸に指すべからず。明文信に驗けし、何ぞ勞はしく苟くも執せん。又涅槃の二十五に云はく、「究竟畢竟とは一切の衆生得る所の一乘なり、一乘とは名けて佛性と爲す。是義を以ての故に、我一切衆生に悉く佛性有りと說く」と。「一切の衆生に悉く一乘有り」と。故に今經は是れ一乘の敎なり、涅槃と玄に會す。且らく涅槃とは猶三乘の得道を帶す、此經は純一にして無雜なり。涅槃は更に迹を發せず、此經は本を顯はす義彰かなり。處處に生を唱へ、處處に滅を現ず。未來常住にして三世に物を益す、人衆は燒くるを見れども我土は毀れず、豈是れ神通延壽滅盡すること有らん耶。神通延壽の義を破す云云。

【一】南方五時教の中、次には第五時常住教を難ず。

【二】已に漸の中の五時を難じ竟りて、今乃ち頓等の三教を難ず。

（一）第五時の教の雙林常住、衆生の佛性、闡提の作佛を難ぜば、問ふ、『成論師は二諦に依つて義を解す、第五時の教は二諦の攝と爲んや不や。若し二諦の攝ならば、諸經と同たり。前の教の二諦は猶是れ無常ならば、雙林の二諦は何ぞ是れ常なることを得ん。若し雙林は二諦を出でずして能く別理を照し、別惑を破し、是れ常なることを得ば、前の教に明す所の二諦も亦別理を照し、別惑を破すべし、那ぞ忽ち無常ならん。』衆生の佛性、闡提の作佛も例して此の如く難ず、故に知んぬ、理を明すこと前時に異ならざることを。何に據つてか常住とせん耶。

（二）頓教を難ずるも此に例して解すべし。實は既に是れ同じ、何に據つてか頓とせん。但は別異なりと雖も事に從へて大小を判ずべからず、則ち大に顚倒すと云云。

次に偏方不定教を難ぜば、謂く、次第に非ずして別に一緣の爲にす。金光、勝鬘、楞伽、殃掘の流の如し。問ふ、『殃掘の經は六年の所說なり、衆を列ぬる次第は餘經より委悉しく、彈斥して常を明すこと餘經より分明なり。釋梵四王及び十弟子、乃至文殊皆訶斥を被る、同聞宛然なり、應に次第に入るべし。而して今判じて偏方と作すや。淨名も亦是れ彈訶なり、那ぞ引いて次第を爲すことを得ん。又淨名の訶する所の事は往昔に在り、追つて前語を述して以て堪へずと辭す、當に知るべし、十二年の前に已に訶を被ること殃掘と同じ。若し殃掘は偏方ならば、則ち淨名は次（第）に非ず。若し殃掘に常を明すは別して一緣の爲にすと謂はば、淨名に云はく、「塵勞の儔是れ如來の種」と。何ぞ是れ

【一三】五時を難ずる中、次に涅槃の五味を用ふることを難ず。

次第の說なることを得ん云云。

（一三）次に其涅槃の五味に依りて五時教を判ずるを難ぜば、牛より乳を出すを用て、三藏十二年の前の有相教を譬ふれば、乳より酪を出すは十二年の後般若無相教を譬へ、酪より生蘇を出すは方等褒貶教を譬へ、生蘇より熟蘇を出すは萬善同歸の法華教を譬へ、熟蘇より醍醐を出すは涅槃常住教を譬ふと。此れ現見に文に乖き、義理顚倒して相生殊に次第ならず。何となれば、經に云はく、「牛より乳を出すは、初め佛より十二部經を出すを譬ふ」と。云何ぞ十二部を以て九部の有相教に對せん耶。一には有相教に十二部無く、二に有相教は佛の初說に非ず。故に此を以て對を爲すべからず云云。彼即ち救ひて云はく、小乘に亦十二部有り。文を引きて證して云はく、「雪山に忍草あり、牛若し食すれば即ち醍醐を出す。更に異草有り、牛若し食すれば即ち醍醐を出さず」と。故に知んぬ、大小通じて十二部有ることを、但有佛性と無佛性と異なる耳と。今問ふ、縱令通じて十二部有らば、何が故に佛性を明すの十二部を取りて乳教と爲さざる耶。大經の第七に云はく、「七部には佛性を明さず。是人罪無し。大海には唯七寶有りて八寶有る無しと言ふが如き、是人罪無し」と。此に例して言はば、「若し十二部に佛性無しといふは、是人罪を得べし。既に十二部を具すと言ふ、何の意ぞ佛性を明さざらん。即ち得罪の句に墮す、豈無罪の十二部に會せん耶。若し十二部より修多羅を出し、修多羅を無相般若教に對すと言はば、修多羅は則ち一切の有相無相に通ず。五時皆修多羅と名く、何を以てか獨り無相の般若に對せん。併して云はく、「般若の中に直說

【一四】南三を難ずる中、次には重ねて前文に三時を用ふる義を難ずるなり。

【一五】難を明す中第二には北地の七家を難ず。即ち初めにはその五時を難ずるなり。

の義有り、復是れ第二時なり、故に以て之を諍す」と。若し直說は是れ修多羅なるべしと言はば、般若の中には譬說、因緣說、授記說、論義說有り。那ぞ獨り是れ直說なるを得ん耶。般若は衆說を兼ね具すれども、修多羅を以て名と爲せば、餘經にも亦直說あり、何ぞ修多羅に對せざる。若し第二時なりと言はば、何れの經か第二時に非ざる、已に前に難ずるが如し。修多羅より方等經を出すを用て、褒貶淨名等の教に對せば、淨名は大品の後に在るべからざること、已に前に破するが如し云云。方等より般若を出すを用て法華に對せば、經の文に自ら般若と云ふ、而も曲辯して法華と爲し、經文を廻して義に就く、最も意無しと爲すべし。涅槃に云はく「八千の聲聞は法華に於て記を受く」と。般若に記を受くと道はず、那ぞ法華を喚んで般若と爲すことを得ん。文に乖き旨を失ひ、次第を成ぜざるなり。般若より大涅槃を出すとは、彼即ち解して云はく「法華より大涅槃を出す」と。此れ亦經文に會せず、譬へば根子の如く、又便革に似たり云云。五時の失、其過此の如し。其四時、三時は勞はしく更に難ずること無し。南方の教相は復依るべからざるなり。

〔一四〕今更に三時を用ふることを難ず、義家に云はく「十二年の後法華に至るを同じく無相教と名く」と。法華に三を會すれば、般若も亦應に一に歸すべし。若し爾らずんば云何ぞ同じく是れ無相ならん。四時も亦例して爾なり。

〔一五〕次に北地の五時の義を難ず、若し提謂に五戒十善を說くと言はば、彼經には但五戒を明して、十善を明さず。唯是れ人教にして則ち天教に非ず。縱ひ此を以て人天教と爲さば、

【一六】北七を難ずる中、第二には流支の半滿二教を難ず。

諸經にも皆戒善を明す、亦應に是れ人天敎なるべし耶。又彼經に云はく、「五戒を諸佛の母と爲す、佛道を求めんと欲せば是經を讀むべし。阿羅漢を求めんと欲せば是經を讀むべし」と。又云はく、「不死の地を得んと欲せば、當に長生の符を佩し、不死の藥を服し、長樂の印を持すべし。長生の符とは卽ち三乘の法是れなり、長樂の印とは卽ち泥洹の道是れなり」と。云何ぞ獨り是れ人天敎なりと言はん耶。又云はく、「五戒は天地の根、衆靈の源なり。天之を持ちて陰陽を和し、地之を持ちて萬物生ず。萬物の母、萬神の父、大道の元、泥洹の本なり。又四事の本、五陰六衰の本なり。四事は卽ち四大なり、四事本より淨、五陰本より淨、六衰本より淨なり。此の如き等の意は、窮元極妙の說なり、云何ぞ獨り是れ人天敎ならん耶。又提謂長者は不起法忍を得、三百人は信忍を得、二百人は須陀洹を得、四天王は柔順法忍を得、龍王は信根を得、阿須輪衆は皆無上正眞道の意を發す。此得道を觀るに、豈是れ人天敎ならん耶。復次に釋論に法藏を結集す、初波羅奈より泥洹の夕に至つて、凡そ說く所の小乘の法を結して三法藏と爲す。初生より雙樹に至つて凡そ大乘を說くを、結して摩訶衍藏と爲す。奈苑の前は小乘の攝にも預からず、何となれば、爾時、未だ僧寶有らず、故に提謂を用て初敎と爲すべからざるなり。若し提謂は是れ祕密敎の一音異解なりと言はば、應に顯露の初に在るべからず。餘の四時は南家に同じ、已に前に破するが如し云云。

(一六)次に流支の半滿の義を難ず、初鹿苑三藏より皆半の義を明し、般若已去より訖り泥洹に

【二七】北七を難する中、次には四宗教を難ず。

至つては皆滿を明すとは、此れ應に然るべからず。得道の夜より常に般若を說く、鹿苑より已來何ぞ曾て滿ならざらん。提謂の時無量の天人、無生忍を得るが如し。成道六年に已に殃掘摩羅を說く、涅槃に云はく「我初成道するに、恆沙の菩薩來りて是義を問ふ、汝が如く異なること無し」と。當に知るべし、鹿苑は純ら半なるべからざることを。般若より已去の諸經皆滿なりといはば、釋論に云はく「般若は祕密教に非ず、以て阿難に付す。法華は是れ祕密教なり、諸の菩薩に付す」と。若し同じく是れ滿教ならば、何ぞ一は祕、一は祕ならざることを得ん。又若し皆是れ滿ならば、應に同じく三を會すべし。又若し同じく是れ滿ならば、生、熟の二蘇同じく是れ醍醐なるべし。醍醐は同じく是れ生、熟蘇なるべし。能譬の味既に差別同じからず、所譬の法豈倂せて是れ滿ならんや云云。

【二七】次に四宗を難ぜば、因緣宗は阿毘曇の六因四緣を指すと謂ふ、若し爾らば成論に亦三因四緣を明す、一切の諸法皆因緣の所成たり。因緣の言通ず、何ぞ獨り毘曇に在らんや。又因緣宗は假名宗に異なり、故に成論に云はく、「見有四諦は是れ調心の法なり、道を得ること能はず。既に因緣宗を立つ、何等の道をか得るや。若し小乘の道を得ば則ち假名宗と同じ、何ぞ別に立つることを須ひん。若し大乘の道を得ば卽ち開常等と同じ、何ぞ別に立つることを須ひん。今別に宗と爲るを以て、應に別に一道を判ずべし」云云。次に假名宗を難ぜば、成實論の三假浮虛を觀ずるを指すならんも、乃ち是れ世諦の事法にして彼論の宗に非ず。彼論は空を見て道を得れば、應に空を用て宗と爲すべし。又釋論には三藏の中の

空門を明す、假名門無し。若し彼義を指せば、應に彼宗を用ふべし。既に別に名を立つれば、則ち空を見て道を得るには非ず云云。次に不眞宗を難ず。此れ大品の十喩を指して不眞誑相と爲す、龍樹は方廣を彈じて云はく、「佛の十喩を取りて一切如幻如化、無生無滅と說く、般若の意を失すれば外道と同じ」、云何ぞ他の被彈の義を拾ひて不眞宗を立つるや。若し文に幻化を明して佛性常住を難ずるを不眞と爲すと謂はば、此れ則ち然らず。經に佛性常住を明すこと已に前に說くが如し、何ぞ但此經のみ幻化を明すのみならん耶」と。華嚴に亦云はく、「如幻忍、如夢忍、心如工幻師等の種種の譬喩あり」と。涅槃に亦云はく、「諸法は幻化の如し、佛は中に於て著せず」と。縱りて是れ諸經皆幻化を明す、亦應に是れ不眞宗なるべし。若し諸經の幻化は不眞宗に非ずんば、何ぞ獨り大品のみ苦に誑相とせん。又常宗、涅槃を指すを難ず、涅槃の經は何ぞ但常のみを明さん、亦非常非無常、能常能無常雙用を明し、八術を具足す。云何ぞ單に常用を取りて宗とせん、何ぞ無常用を取りて宗とせざる。單輪隻翼は飛運すること能はず云云。彼云はく、「誑相不眞宗は即ち是れ通教なり、常宗は祇是れ眞宗なれば即ち是れ通宗なり」とは、宗は則ち眞、不眞に通ず、不眞は何の意ぞ宗を沒して而も教を用ふる、眞宗は何の意ぞ教無くして而も宗を立つるや。宗若し教無くんば何ぞ眞を知ることを得ん、眞宗若し宗を沒して教あれば則ち同じく通教と名けん。若し倶に教を沒して宗を留めば則ち同じく通宗と名けん、若し倶に教を安せば則ち同じく通宗教と名けん、若し不眞眞を留めば則ち通不眞宗教、通眞宗教と名けん。通

【一八】北七を難ずる中、次には五宗を難ず。

【一九】北七を難ずる中、次には六宗教を難ず。

不眞宗は三乘通修となすべくんば、通眞宗も亦應に三乘通修なるべし。若し其通は是れ緣通の通なりと言はば、通教も亦是れ通通の眞なるべし。此れ則ち名に混濫して、義に別無きなり。彼楞伽經を引きて云はく、「說通は童蒙を教へ、宗通は菩薩を教ふ、故に眞宗を以て通宗と爲す」と。若し爾らば、是れ則ち因緣、假名、不眞皆是れ童蒙なり、悉く宗を立つべからず。彌御蝦遞するに、四宗の名義甚だ便ならず。

〔一八〕次に五宗を難ぜば、四宗を難ずること前の如し。若し華嚴を法界宗と爲すは大涅槃に異なり、涅槃は法界に非ずして但常宗と名くと言はば、大經には大般涅槃は是れ諸佛の法界なりと云ふ。若爲ぞ華嚴に容融せん耶。若し常は法界に非ず、法界は常に非ずと云はば、法界は常に非ずんば應に生滅有るべし、常は法界に非ずんば法を攝すること盡さず。此れ皆然るべからざるなり。大品に云はく、「一法の法性の外に出づるを見ず」と、法性は是れ法界なり。又云はく、「一切の法は色に趣く、是趣過ぎず」と。豈法界の說に非ざらんや、而して獨り華嚴は是れ法界にして、涅槃、大品に異なりと言はん耶。

〔一九〕次に六宗を難ぜば、四宗は前に難ずるが如し。今眞、常の兩宗を問ふ、眞、常若し同じくば、何が故に兩を開する。眞、常若し異ならば、俱に妙法に非ず。何となれば、眞若し常に非ずんば、眞は則ち生滅なり。常若し眞に非ずんば、常は則ち虛僞ならん。又眞若し常に非ずんば、前の三宗と何ぞ異ならん。若し常は眞に非ずんば、卽ち破壞有るの法ならん。次に圓宗を難ぜば、若し大集の染淨圓融なるは、涅槃、華嚴に異なりと言はば、此れ亦然

【二〇】北七を難ずる中、次には有相無相の二種大乘敎を難ず。

らず。大品に云はく「色に即して是れ空なり、色滅して空なるに非ず」と。釋論に解して云はく「色は是れ生死、空は是れ涅槃なり。生死の際と涅槃の際と一にして而も二無し」と。此れ豈染淨倶に融ずるに非ずや。又云はく「一切法は色欲に趣き、瞋に趣き、癡諸見に趣く等」と。豈倶に融ずるの相に非ずや。淨名に云はく「一切の塵勞、是れ如來の種なり、癡愛を斷ぜずして諸の明脫を起し、非道を行じて佛道に通達す」と。此圓融何ぞ大集に異ならん云云。此六宗と五宗は皆四宗に依傍して而も開す、但四宗は文無し、或は言はく「頂王經に出づ」と。經に云はく「初に因緣の諸法空なることを說き、次には諸子に一乘常住の法を敎ふ」と。諸法空ならば、應に是れ假名宗なるべからず。一乘常住ならば、應に是れ通敎誑相なるべからず。或は言はく「經は度らず」と。四宗既に爾り、五宗、六宗は四に約して開立すれば皆信用し難し。

(二〇)次に有相、無相の大乘敎を難ぜば、相、無相は單に說くべからず。何となれば、本眞に約して俗を論ずれば、還つて俗に約して眞を論ず。一切智人は無爲法を以てすれども而も差別有り、華嚴には十地を論ずと雖も、何ぞ嘗て法身に約せざらん。般若、思益も復空を論ずと雖も、何ぞ嘗て無生忍を說かざらん。若し純ら有相を用ふれば、相は則ち數無し、敎何の詮ずる所かあらん、亦道を得ず。若し純ら無相を用ふれば、無相は眞寂にして言を絕し相を離る、言語道斷、心行處滅なり、則ち復是れ敎に非ず。云何ぞ說くべけん。若し是れ敎なりと言はば、敎は即ち是れ相なり、何ぞ無相と謂はん。大品に須菩提問うて云はく、

【三二】北七を難ずる中、次に一音教を難ず。

【三三】略して教相を明す中、大章第四に去取を明す。卽ち初に章名を解釋し、然る後正しく研詳去取を明すに、又初には南三を研詳す。

「若し一切法畢竟じて所有無くんば、云何ぞ一地乃至十地有りと說くや。」佛答へて云はく、『諸法畢竟じて所有無きを以ての故に、則ち菩薩の何地乃至十地あり。若し諸法に決定の性有らば、則ち一地乃至十地あること無し』と。故に知んぬ、一種の大乘を別に說くは經に乖くことを云云。

(三二)次に一音教を難ぜば、但一大乘にして三の差別無しと言はば、秖是れ實智のみにして權智を見ず。若し但大乘ならば、法華に何が故に、我若し但佛乘を讚せば衆生は苦に沒在せん、法を破して信せざるが故に三惡道に墜ちん、尋ねて時に方便を思ふに諸佛皆歡喜したまふと云ふや。故に知んぬ、獨り一大乘教のみに非ざることを。若し純ら是れ一乘ならば、亦應に純ら長者の身なるべし。既に垢衣の體有り、亦大小教の異なり有るべし。那ぞ混じて一音なりと判じて、方便を失することを得んや。若し佛常に一乘を說けども衆生は三を見ると言はば、是れ則ち衆生は能化、佛は是れ所化たり。佛既に是れ能化たらば、應に能く三乘を說くべし、何ぞ一乘を用ふることを得ん。若し法華は純一なりと言はば爾るべし。華嚴の五天往反も亦鈍根の菩薩の爲に別の方便を開す、況や餘經をや。故に知んぬ、一音の教は但一の大車有りて、僕從の方便侍衞有ること無し。但智慧波羅蜜有りて方便波羅蜜あること無し云云。

(三三)四に研詳去取とは、實を覈するが故に研と言ひ、權を覈するが故に詳と言ひ、法相に適ふが故に去取と言ふ。若し五時に教を明すは、五味の方便の文を得て、而も一道眞實の意

を失す。其文を得と雖も配對するに旨を失す、其文は通じて用ふるも其對は宜しく休むべし。若し十二年の前に有相教を明すと言ふは、此れ小乘の一門を得て而も三門を失す。何となれば三藏に四門の得道有り、或は有を見て道を得、阿毘曇の如し。或は空を見て道を得、成實の如し。或は亦有亦空を見て道を得、毘勒の如し。或は非空非有を見て道を得、車匿の如し。故に知んぬ、泥洹眞の法寶は衆生各種種の門を以て入る。若し一を擧げて門を標せんと欲せば、應に總じて三藏と言ふべし。若し廣く明さんと欲せば、備に四種を立すべし。何の意ぞ、偏に有相を存して三を失沒せん耶。後生を疑惧し、空有諍ひを成ぜん。若し三藏の中の菩薩は、廣く四門を學して諸の方便に通ずべし、後に佛を得る時は正徧知と名く。若し但有相の教をのみ標せば、唯見有得道の一門の聲聞を得て、全く三門より泥洹に入るの路を失すれば、則ち小乘に於て義闕く。若し但有相にして、秖偏に一門を知りて三門を解せざれば正徧知に非ず、菩薩に於て義闕く。其闕くること則ち衆し、故に須く棄つべし。其得は則ち寡し、唯一を存するのみ。若し十二年の後に無相を明すといふは、無相は此れ共般若を得て不共般若を失す。共般若に四門有り、如幻如化は即ち有門なり、幻化即ち無なるは是れ空門なり、幻化有にして而も有ならざるは是れ亦空亦有門なり、雙べて幻化を非するは即ち非空非有門なり。若し般若無相と言はば、秖共般若の一空門を得て、全く三門を失し、亦七門を失す。尙是れ因中の正偏知に不ず、況や果上の正徧知ならんこ。其失は則ち去り、其得は即ち取る云云。若し第三時に聲聞を抑挫し菩薩を

【三三】研詳去取を明す中、次には北七を研詳す。

褒揚すと言はば、此れ小の一種の讚歎を斥ふことを得て、全く七種の讚歎を失す。頓大の一意を得て、全く諸の偏の讚歎を折挫し、權實の讚歎を褒揚することを得ず。亦諸の權の讚歎を折挫し、實の讚歎を褒揚することを得ず。又偏圓權實の四門を識らず、得る所は甚少く、得ざる處は多し。若し第四時を同歸の教と言はば、唯萬善同歸一乘の名を得て、萬善同歸一乘の所を得ず。所とは即ち佛性同じく常住に歸する等なり。祇會三歸一を得て、會五歸一を得ず、會七歸一をも得ず。唯一に歸することを得て、佛性常住に歸するを得ず。北の如き等の失有り云云。第五時は、若し二諦に依つて常住を會せば則ち常住に非ず、若し二諦に依らずんば斷然する所無し。後常を明すと雖も、全く常に非ず無常に非ずして雙べて常無常を用ふるを失す。唯四術の一を得て、永く七術を失す。復其正體を得ず云云。四時教、三時教は文の依るべき無く、實の據るべきもの無し。進退の取るべき所無し云云。

(三三)北地の五時も亦文の據ろ無く、又實の意を失す。其間の去取は前に類して知んぬべし。半滿の教は實の意を得て、方便の意を失す。四宗教は五味方便の意を失し、又實の意をも失す。五宗、六宗も例して此の如し。二種の大乘教は權實乖離す、父母乖離せば導師云何ぞ生ずることを得ん。權若し實を離るれば實相の印無し、是れ魔の說く所なり。實若し權を離るれば說示すべからず。一音教は實を得て權を失す、鰥夫寡婦は生活を成せず、永く子孫あること無し。衆家の教を解すること種種不同なり、皆是れ當世の師にして、各各

【二四】去取を明すの中、之より下は用義の異相を明す

【二五】教相を明す中、大章第五に正しく大師の判教を明す。中に於てまた初に六章を分ち而してその一に大綱を擧ぐ。卽ち、三種の教名を列ね之を釋するに教觀二門に約することを辨じ、然る後先づ教門に約して解す。

自ら深致有りと謂ふ。時既に流播せば義亦添雜すべし、晩賢情執して苟くも諍ひ紛紜たり。所以に上來硏難し、次に去取を論じて、略大意を知らしむ云云。

(二四)若し共病を除けば、上に說く所の如し。若し法を除かずんば、之を用ふること則ち異なり。云何ぞ用ふること異なるや、有相は則ち共に四門を用ひ、無相は則ち共、不共の八門を用ひ、褒貶は則ち小を貶し大を褒じ、偏を貶して圓を褒じ、權を貶して實を褒ずるを用ひ、同歸は則ち同じく一乘常住佛性究竟の圓趣に歸するを用ひ、常住は則ち常に非ず無常に非ずして、雙べて常無常を用ひ、二鳥倶に遊び八術具足するを用ふ。五味を用ふることは則ち次第文の如し、下に在りて當に說くべし。提謂波利を用ふるは、亦止是れ人天の乘のみならず。半滿を用ふるは則ち五句有り、滿と、滿を開して半を立つると、半を破して滿を明すと、半を帶して滿を明すと、半を廢して滿を明すとなり。因緣、假名を用ふるは則ち三藏の兩門とする耳。誑相を用ふるは是れ通教の一門なる耳。眞を用ふれば秖是れ常、常は秖是れ眞なり。法界は獨り華嚴に在らず、圓宗は偏に大集を指さず。有相無相を用ふるは、有相に約して無相を明し、無相に約して有相を明す、二は相離れず。一音を用ふるは、慧有るの方便は解、方便有るの慧は解なり、設ひ其名を取るも、義を用ふること永く異なり云云。

(二五)五に教相を判ずるは即ち六と爲す、一に大綱を擧げ、二に三文を引きて證し、三には五味半滿相成し、四には合不合を明し、五には通別、料簡し、六には增數に教を明すなり。

一に大綱に三種あり、一には頓、二には漸、三には不定なり。此三は名は舊に同じくして義は異なり云云。今此三教を釋するに、各二解を作す、一には教門に約して解し、二には觀門に約して解するなり。教門は信行の人の爲にし、又聞の義を成ず。觀門は法行の人の爲にし、又慧の義を成ず。聞慧具足するは、人の目有りて、日光明かに照せば種種の色を見るが如し。具には釋論の偈の如し云云。先に教に約せば、華嚴の七處八會の說の若きは、譬へば日出でて先に高山を照すが如し。淨名の中には唯薝蔔を嗅ぐ、大品の中には不共般若を說く。法華に云はく「但無上道を說く」と。又「始め我身を見、我所說を聞き、即ち皆信受して如來の慧に入る。若し衆生に遇へば、盡く佛道を教ふ」と。涅槃の二十七に云はく「雪山に草有り、名けて忍辱と爲す。牛若し食へば即ち醍醐を得」と。又云はく「我初成佛するに、恒沙の菩薩來りて是義を問ふ、汝が如く異なること無し」と。諸大乘經の此の如きの意義類例して、皆頓教の相と名く。頓教の部には非ざるなり。二に漸教の相とは、涅槃の十三に云ふが如し。佛より十二部經を出し、十二部經より修多羅を出し、修多羅より方等經を出し、方等經より般若を出し、般若より涅槃を出すと。此の如き等の意は、即ち是れ漸教の相なり。又始め人天より二乘、菩薩、佛道にいたるも亦是れ漸なり、又中間に次第に入るも亦是れ漸なり云云。三に不定教とは、此れ別の法無し。但頓漸に約するに、其義自ら明かなり。今大經の二十七に云ふところに依るに、「毒を乳の中に置けば乳即ち人を殺し、酪、蘇、醍醐も亦能く人を殺す」と。此は過去の佛の所にして、嘗て

【二六】大綱の中之より下は即ち觀門に約して解釋し、而して後簡示稱歎す。

【十二門禪】四禪、四無量、四空定を云ふ。

【六妙門】數息門

て大乘實相の教を聞くを謂ひ、之を譬ふるに毒を以てす。今釋迦の聲教に値うて、其毒即ち發し結惑の人死す。若し提謂波利の如き、但五戒を聞くに法忍を起さず、三百人は信忍を得、四天王は柔順忍を得、皆長樂の藥を服し、長生の符を佩し、戒の中に住して諸佛の母を見ると。即ち是れ乳の中に人を殺すなり。酪の中に人を殺すとは、智度論に云ふが如し、教に二種有り、一には顯露教、二には秘密教なり。顯露とは、初轉法輪に五比丘及び八萬の諸天、法眼淨を得、若し秘密教には、無量の菩薩、無生法忍を得ると。此は是れ毒、酪に至つて能く人を殺すなり。生蘇の中に人を殺すとは、諸の菩薩有りて、方等大乘教に於て佛性を見ることを得、大涅槃に住すと。即ち其義なり。熟蘇の殺人とは、諸の菩薩有り、摩訶般若教に於て佛性を見ることを得るは、即ち其義なり。醍醐人を殺すとは、涅槃の教の中の如き、鈍根の聲聞は慧眼を開發して佛性を見ることを得、乃至、鈍根の緣覺、菩薩七種の方便皆究竟の涅槃に入るは、即ち其義なり。是を不定教の相と名く、不定の部には非ざるなり。

（二六）二に觀門に約して義を明さば、一には圓頓の觀なり、初發心より即ち實相を觀じ、四種三昧を修し、八正道を行ず。即ち道場に於て佛知見を開き、無生忍を得。牛の忍草を食へば即ち醍醐を得るが如し。其意具に止觀に在り云云。二には漸次の觀なり、初發心より圓極の爲の故に阿那波那、十二門禪を修す、即ち是れ根本の行なり、故に凡夫は雜血乳の如しと云ふ。次に六妙門、十六特勝、觀、練、熏、修等、乃至道品、四諦觀等を修す。即ち是れ

隨門、止門、觀門、還門、淨門にして、涅槃を得る行法なり。

【十六特勝】觀法を主とせる行によつて悟に入る方法即ち、知息入、知息出、知息長短、知息徧身、除諸身行、受喜、受樂、受諸心行、心作喜、心作攝心作解脱、觀無常、觀出散、觀離欲、觀滅、觀棄捨なり。

聲聞の法、清淨の乳の如きの行なり。次に十二因緣觀を修す、即ち是れ緣覺にして、酪の如きの行なり。次に四弘誓願、六波羅蜜を修す、通、藏の菩薩の行ずる所の事理の法にして、皆生蘇の如きの行なり。次に別教の菩薩所行の行を修す、皆熟蘇の如し。故に菩薩は熟蘇の如しと云ふ。次に自性禪を修して一切禪に入り、乃至清淨淨禪なり。此諸の法門は能く佛性を見、大涅槃に住し、眞應具足す、故に醍醐の行と名くるなり。若し的しく菩薩の位に就いて五味の義を辨ぜば、上の行妙の中に辨ずるが如し。亦次第禪門に說くが如し、是を漸次觀と名く。不定觀とは、過去の佛に從ひて深く善根を種う。今十二門を修證して豁然として開悟し、無生忍を得。即ち是れ毒、乳の中に在りて即ち能く人を殺すなり。若し坐して不淨觀、九想、十想、背捨、勝處、有作の四聖諦觀等を證し、此禪定に因つて豁然として心開し意解して無生忍を得。即ち是れ毒、酪の中に至つて人を殺すなり。若し人有りて四弘誓願を發し六度を修し、假を體して空に入り、無生の四諦觀豁然として悟解し、無生忍を得るは、即ち是れ毒、生蘇に至つて人を殺すなり。若し人六度を修行し、從空出假を修し、無量の四諦觀を修して豁然として心悟し無生忍を得るは、是れ毒、熟蘇に至つて人を殺すなり。若し坐禪して中道自性等の禪、正觀を修し、無作の四聖諦を學し、法華、般舟等の四種三昧を行ずること有り、豁然として心悟し無生忍を得るは、即ち是れ醍醐の行の中に人を殺すなり。今信、法の兩行を辨じて佛法を明すに各三意を作る、前の諸教に歷るに一科として諸の法師に異ならざるもの有ること無し。若し禪を修し道を

【二七】判教相の中第二には三文を引きて證するに、初に先づ方便品の文を引き而して之を解釋す。

學せんと欲せば、前の諸觀に歷て、法行の人の爲に安心の法を說く、一科として世間の禪師と同じきこと有ること無し。是を略して教觀の大意を點じ、大に佛法を該ぬと名く。

（二七）二に三文を引きて證すとは、謂ゆる方便品と、無量義經と、信解品となり。方便品に云はく、「我始め道場に坐し、樹を觀じ亦經行して、三七日の中に於て、此の如きの事を思惟す。我得る所の智慧は、微妙にして最も第一なり、衆生の諸根鈍にして、云何ぞ度すべけん、我寧ろ法を說かずして、疾く涅槃に入らん」と。「尋いで過去の佛所行の方便力を念ふに、我今得る所の道も、亦應に三乘と說くべし」と。我始坐道場とは、即ち是れ頓を明す。何となれば、兜率より下るに法身の眷屬隱雲の月を籠めるが如く、共に母胎に降る。胎は虛空の若くにして、常に妙法を說く。乃至寂滅道場にして始めて正覺を成じ、諸の菩薩の爲に純ら大乘を說く、日の初めて出でて前に高山を照すが如し。此れ釋迦最初の頓說を明すなり。序品に云はく、「佛眉間の光を放ちて、遍く東方萬八千の土を照し、聖主師子を覩る、經法を演說するに、微妙第一なり。諸の菩薩を教ふ」と。次に云はく、「若し人苦に遇はんには、爲に涅槃を說きて諸の苦際を盡さしむ」と。即ち是れ現在の佛も先に頓、後に漸なり。又文殊は疑ひを釋くに昔佛も亦爾るを引く、文に云はく、「又諸の如來の自然に佛道を成ずるを見る、世尊は大衆に在りて深法の義を敷演すと。次に即ち云はく、「一一諸佛の土、聲聞衆は無數なり」と。即ち是れ古佛も頓を先にし漸を後にするなり。又下方涌出の菩薩問訊するに、佛答へて云はく、『是の如く是の如し、衆生は度し

易し、始我身を見、我所說を聞き、即ち皆信受して如來の慧に入る。先に修習して小乘を學する者を除く。是の如きの人は、我今亦是の經を聞くことを得て佛慧に入らしむ。」即ち是れ釋迦も頓を初にし漸を後にするなり。此の如き等の初頓は、未だ必ずしも純ら法身の菩薩を教へず、亦凡夫大根性の者有り。即ち兩義有り。當體圓頓に悟を得る者は、即ち是れ醍醐なり。初心の人は大教を聞くと雖も始めて十信に入るは、最も是れ初味なり。初能く後を生ずるも、復是れ乳に於てす。何となれば、是れ頓なりと言ふと雖も、或は乘戒俱急、或は戒緩乘急なり、此の如きの業生は自ら致すに由無し、必ず應生を須ひて七處八會に引入す。大機の佛を扣くは忍辱草に譬へ、圓應の頓說は醍醐を出すに譬ふ。又頓教の最初始めて內凡に入れば、仍呼んで乳と爲す、呼んで乳とするは意淡きに在らず、初を以ての故に、本の故なり。牛新に生ずれば血變じて乳と爲り、純淨にして身に在り、犢子若し嗽へば牛即ち乳を出すが如し。佛も亦是の如し、始道場に坐し新に正覺を成ず、無明等の血轉變して明と爲る。八萬の法藏十二部經具に法身に在り、大機の犢子先に乳を感得す。乳を衆味の初と爲すは、頓の衆教の首に在るを譬ふ。故に華嚴を以て乳とする耳。三教に分別すれば即ち頓教と名く、亦即ち醍醐なり。五味に分別すれば、即ち乳教と名く。又行に約せば、大機の頓を稟けて即ち無明を破し無生忍を得れば、行は醍醐の如し、又此頓を稟くと雖も、未だ悟入すること能はざれば、始初めて行を立つ、故に其行は乳の如し。若し小根性の人に望むれば、行又乳の如し。何となれば、大教を小に擬すれば聾の如く瘂

の如し、已が智分に非ず。行は凡地に在りて、全く生しきこと乳の如し。此義を以ての故に頓教は初に在り、亦醍醐と名け、亦名けて乳と爲す。其意見つべし。次に漸を開するは、佛本大乘を以て衆生を度せんと擬すれども、其堪へざる者には尋ねて方便を思ひ、波羅奈に趣き、一乘の道に於て分別して三を說く。卽ち是れ三藏教を開するなり。但釋迦は其無量の神德を隱して、斯漸化を作すに非ず。過現の諸佛も亦復是の如し。前に引く所の如し、當に知るべし、初頓の後次に漸を開することを。故に涅槃に云はく「佛より十二部經を出し、十二部より修多羅を出す」と。正しく此義と相應す、譬へば牛より乳を出し、乳より酪を出すが如し、其譬違はず。漸機は頓教に於て未だ轉ぜざれば、全く生しきこと乳の如し。三藏の中に轉じて凡を革め聖と成るを、乳を變じて酪となるに喩ふ。卽ち是れ次第相生して第二時教と爲す、濃淡優劣を取りて喩と爲るに不ず。方便品の文は此に齊る。

妙法蓮華經玄義卷第十上

【一】判教相に六章を開する中、第二に三文を引きて證するに、今は即ち無量義經の文を引きて之を解釋す

妙法蓮華經玄義　卷第十下

天台智者大師の說

【二】次に無量義を引きて證と爲さば、文に云はく、「我佛眼を以て一切法を觀ずるに、宣說すべからず。所以は何ん、諸の衆生は性欲同じからず、性欲同じからざれば種種に法を說く。文辭は是れ一なれども而も義は則ち異り。義異るが故に衆生の解異り、解異るが故に、得法、得果、得道も亦異り。初に四諦を說くは、聲聞を求むる人の爲にす。而して八億の諸天は來下して法を聽き、菩提心を發す。中に處處に於て、甚深の十二因緣を說いて、支佛を求むる人の爲にす。次に方等十二部經、摩訶般若、華嚴海空を說き、菩薩歷劫の修行を宣說す。而して百千の比丘、無量の衆生は、菩提心を發し、或は聲聞に住す。萬億の人天は須陀洹を得、阿羅漢に至り、辟支佛に住す」と。佛眼を以て一切法を觀ずとは、即ち是れ頓法前に在り。四諦、十二緣は即ち是れ漸を次にするなり。若し此文に依らば、三藏を說き竟つて次に方等十二部經を說く。小に次いで大を說く所以は、佛本大を授けんとするに衆生は堪へざれば、大を抽んで小を出し、結を斷じて聖と成らしむ。此益有りと雖も、佛の本懷には非ず。次に方等に維摩、思益、殃掘摩羅を說き、小乘保果の僻を彈訶し、三藏斷滅の非を譏刺す。故に身子、善吉は教に齊つて小を專らにし、初め曾て大乘の威德を聞か

ず。或は茫然として鉢を棄て、或は怖畏して華を卻く。是れ何の言なるかを知らず、何を以てか答ふるを知らず。然るに方等の彈斥は、教は三藏の後に在り、訶を被むるの時は應に十二年前に在るべし、何を以てか知ることを得る、皆追つて昔の訶を述するを以て、是れ前事なることを驗らむるなり。何となれば、前に已に教を稟けて道を得、無學を證せり。佛恩の深きを荷ひ、心相體信して復恚怒せず。昔より今に至りて殃掘の譏を恣にし、淨名の折に任すは、恥小慕大の益と爲ることを得。喩へば酪を煮て生蘇と作すが如しと、即ち此義なり。無量義を按ずるに、方等は是れ三藏の後にして、第三時の教とするを知ることを得。無量義經を按ずるに云はく、次に摩訶般若、華嚴海空、歷劫修行を說くとは、此は是れ方等の後而も大品を明すなり。大品に或は無常無我を說き、或は空を說き、或は不生不滅を說く。皆色心に歷て一切種智に至るに、句句迴轉して修行の法を明す。即ち是れ歷劫修行の意なり。又云はく「百千の比丘、萬億の人天は須陀洹、及び阿羅漢を得、辟支佛に住す」と。是れ共般若なることを驗らむ。而して華嚴海空と言ふは、若し寂滅道場の華嚴なりと作さば此れ次第に非ず。今法性論に云ふに依るに、鈍根の菩薩は三處に法界に入る。初は則ち般若、次は則ち法華、後は則ち涅槃なり。般若に因つて法界に入るは、則ち是れ華嚴海空なり。又華嚴は時節長し、昔は小機未だ入らずして聾の如く瘂の如し、今は般若を聞きて即ち能く入ることを得るは、即ち其義なり焉。大品は三乘の人に通ず、四果有ることを得べし。華嚴は小を隔つ、故に此義無し。故に方等の後に次に般若を說く

【洮汰】大小の法を隔つる執我を洮ひ去ること。即ち般若の部意を示す語なり。

を、第四時の教と爲るなり。復熟蘇味と言ふは、命じて轉教せしめ、衆物を領知し心漸く通泰す、自ら螢火の日光に及ばざることを知り、敬伏の情倍倍更に轉た熟す、生蘇より轉じて熟蘇と成るが如し。又解す、般若の後に華嚴海空を明すとは、即ち是れ圓頓法華の教なり。何となれば、初め成道の時純ら圓頓を說く、解せざる者は大機未だ濃かならざるが爲に、三藏、方等、般若を以て洮汰淳熟す。根利障り除き、圓頓を聞くに堪ふれば即ち法華を說き、佛知見を開きて法界に入るを得ること華嚴と齊し。法性論の中入の者是なり。故に下の文に云はく「始め我身を見るは、如來の慧に入る、今是經を聞きて佛慧に入る」と。初後の佛慧圓頓の義齊し、故に般若の後に次いで華嚴海空を說くは法華と齊し、亦第五時の教なり。復醍醐と言ふは、是れ樂味の後なり。涅槃には稱して醍醐と爲し、此經には大王饍と名く。故に知んぬ、二經倶に是れ醍醐なることを。又燈明佛は法華經を說き竟つて、即ち中夜に於て、唱へて涅槃に入る。彼佛の一化は、初に華嚴を說き、後に法華を說く。迦葉佛の時も亦復是の如し、悉く涅槃を明さずして、皆法華を以て後教後味と爲す。今佛は前番の人を熟し、法華を以て醍醐と爲す。更に後段の人を熟し、重ねて般若を將つて洮汰し、方に涅槃に入る。復涅槃を以て後教後味と爲す。譬へば田家の先に種うるは先に熟し先に收め、晩く種うるは後に熟し後に收むるが如し。法華の八千の聲聞、無量の損生の菩薩は、即ち是れ前に果實を熟し、法華の中に於て收めて更に所作無し。若し五千自起と人天被移は、皆是れ後熟にして、涅槃の中に收む。此義の爲の故に、故に摩訶般

【二】三文を引きて證する中、次に法華經信解品の文を引證す。卽ち先には文を引きて五時の教を領するを證す。

若より大涅槃を出だすと云ふは、卽ち後番の次第なり。無量義を按ずるに云はく、「摩訶般若、次に華嚴海空」と。卽ち前番法華の中の次第なり。問ふ、『何の意ぞ鈍者は法華に於て入らず、更に般若を用つて淘汰すと知るや。』答ふ、『釋論に云はく、「須菩提は何が故に、更に菩薩の畢定、不畢定を問ふや」。』答へて云はく、「須菩提は法華の中に於て諸の菩薩の受記作佛するを聞く、今般若の中に於て更に畢定、不畢定を問ふ」と。』當に知るべし、法華の後更に般若を明すことを。

(二)三に信解品の四大聲聞の教を領するを引きて次第を證せば、文に云はく「其父先より來子を求むるに得ず、一城に中止す。其家大に富みて、多く僮僕、臣佐、吏民有りて、亦甚だ衆多なり。時に貧窮の子、遇父の舍に到り、疾く走り去る。卽ち傍人を遣し、急に追うて將ゐて還らしむ。窮子驚愕して、怨なりと稱して大に喚ふ。「罪無くして囚執へらる、此れ必定して死せん」と。父使に語つて言はく、「此人を須ひじ、強て將ゐ來ること勿れ」と。此は何の義をか領せる、初め成佛して、寂滅道場にして法身の大士、四十一地の眷屬圍繞して、圓頓の教門を說く。時に大を以て子に擬するに、機生じて悶絕することを領ずるなり。當に知るべし。佛日初めて出でて頓教先に開く、譬へば牛より必ず先に乳を出すが如きことを。爾時長者、將に其子を誘引せんと欲して、而も方便を以て密に二人の形色憔悴して威德無き者を遣す。「汝彼に詣つて、徐に窮子に語るべし、汝を雇ふことは糞を除はしめんとなり」と。卽ち瓔珞を脫ぎ、垢膩の衣を著し、方便を以ての故に、其子に近づ

【般若の觀慧】般若に明す所の畢竟空の觀慧。即ち大乘小乘の法門皆畢竟空にして隔別することなしと了達するをいふ。

くことを得つと。此は何の義をか領ずる、此は頓の後に次で、舍那威德の相好を隱し老比丘の像と作りて、三藏の教を說き、二十年の中常に糞を除はしめ、一日の價を得しむることを領ずるなり。即ち是れ十二部より後修多羅を出す、時に見思已に斷じて無漏の心淨し、譬へば乳より酪を出すが如し。又經にいはく、「是を過きて後、心相體信して出入に難り無し」然れども其所止は、「故本處に在り」と。此は何の義をか領ずる、三藏の後に次に方等を說くことを明すなり。已に道果を得て心相體信す、大を聞くを入と名け、小に住するを出と名く。若し彈訶するを難り無しと名くと言はば、又宅內に進むを入と名け、入りて群臣豪族の大功德力を見、寶炬陀羅尼を聞き、不思議解脫の神變を見る故に入と名くるなり。出とは草菴に止宿するなり、二乘の境界を出と名く。心相體信すとは、羅漢を得已つて罵るを聞けども瞋らず、內心慙愧して、敢て聲聞、支佛の法を以て人を化せず、心漸く淳熟す、酪より生蘇を出すが如し、是を修多羅より方等經を出すと名く、即ち第三時の教なり。是時に長者疾有りて、自ら將に死せんこと久しからじと知りて、窮子に語つて言はく「我今多く金銀珍寶有りて倉庫に盈溢せり。其中の多少、應に取與すべき所なり」と。窮子敕を受けて衆物を領知すれども、而も一餐をも悕取するの意無し。然も其所止は、故本處に在りと。此は何の義をか領ずる、方等の後次に般若を說く、般若の觀慧は即ち是れ家業なり。名色乃至種智に歷るは、即ち是れ衆物なり。善吉等の轉教するは、即ち是れ領知なり。但菩薩の爲に說きて自らは行證せず、故に悕取する無し。即ち是れ方等經より

【三】信解品を引證する中、之より下は二經同味を結す。

【三周】法説周、譬説周、因緣周の説法をいふ。法華

摩訶般若を出す、是に因つて大士の法門を識ることを得て、無知を滅破す。生蘇より熟蘇を出すに譬ふ、是を第四時の教と爲るなり。復少時を經て、父、子の意漸く已に通泰するを知りて、終らんと欲する時に臨みて、其子に命じ、并に親族を會して即ち自ら宣言すらく、「此れ實に我子、我は實に其父なり。今吾所有は皆是れ子の有なり」と、付するに家業を以てす。窮子歡喜して、未曾有なることを得たりと。此は何の義をか領ずる、即ち是れ般若の後に、次に法華を説くなり。先に庫藏の諸物を領知するを以て、後に説くことを須ひず、但業を付する而已。前に轉教して皆法門を知れば、重ねて觀法を演ぶることを須ひざるを譬ふ。直に草菴を破し、一大車を賜ひ、作佛の記を授く。豈明かに佛性を見て、大涅槃に住するに非ずや。故に摩訶般若より大涅槃を出すと言ふ、是時に無明破して中道の理顯る、其心皎潔にして、淸きこと醍醐の如し。即ち是れ熟蘇より轉じて醍醐を出す、第五時の教と爲るなり。

(三)此五味の教は、一段調機の衆生を調熟す。身子等の大德の聲聞の如きは、法華の中に於て記莂を受くることを得、如來の性を見、大果實を生ず。秋收冬藏して、更に所作無きが如し。不生不生を大涅槃と名く、即ち是れ前番に、摩訶般若より妙法華を出すなり。未熟の者の爲に、更に般若より涅槃に入りて佛性を見ることを論ず。即ち是れ後番に、又般若より大涅槃を出すなり。然るに二經の教意は、起盡是れ同じ。法華の如き、三周に法を説きて聲聞を斷鍊し、咸く一實に歸し、後に開近顯遠して菩薩の事を明す。涅槃も亦爾な

經迹門に於ては、同一の理趣を此三周りに說きて、一代調熟の化意を顯はし、敗種の二乘をして一佛乘に入らしむるなり。

【四】判教相に六章を開する中、第三には五味半滿の相成に約して論ず

り、先に勝の三修に聲聞を斷奠して祕密藏に入らしめ、後に三十六問に菩薩の事を明すなり。又涅槃は滅に臨みて更に三藏を扶け、將來を誡約して、末代の鈍根をして、佛法に於て斷滅の見を起さざらしむ。廣く常宗を開して此顛倒を破し、佛法をして久住せしむ。此の如き等の事は、其意は則ち別なれども、第五の醍醐にして、佛性の味同じければなり。

(四)三に五味、半滿の相成に約すとは、若し直五味をのみ論ぜば、猶南師の但方便を得るに同じく、若し直半滿のみならば、猶北師の但其實を得るに同じ。今明すところは、五味は半滿を離れず、半滿は五味を離れず。五味に半滿あれば則ち慧有る方便の解なり、半滿に五味あるは方便ある慧の解なり。權實倶に遊ぶこと鳥の二翼の如く、復倶に遊ぶと雖も行藏は所を得るなり。若し華嚴は頓滿、大乘の家業なり、但一實を明して方便を須ひず、唯滿にして半ならず、漸に於ては乳を成ず。三藏の客作は但是れ方便なり、唯半にして滿ならず。漸に於ては酪を成ず。若し方等の彈訶は則ち半滿相對して、滿を以て半を斥ふ。漸に於ては生蘇を成ず。若し大品の領教は半を帶して滿を論ずれば、半は則ち通じて三乘の爲にし、滿は則ち獨り菩薩の爲にす。漸に於ては熟蘇を成ずるなり。若し法華の付財は半を廢して滿を明す、若し半字の方便を以て鈍根を調熟すること無ければ、則ち亦滿字の佛知見を開く無し。漸に於ては醍醐を成ずるなり。如來殷勤に方便を稱歎したまふは、半に滿を成ずるの功有り。(方便を歎ずるの)意此に在り。四大聲聞は領解して、無上の寶聚、求めずして自ら得、實智の中に安住するは、皆半滿相成ずるに由る、意此に在り。

【五】判教相に六章を立つる中、第四には合不合を明す。

（五）四に合不合を明すとは、半滿、五味は既に通じて諸經に約す。諸經同じからざれば、今當に其開合を辨ずべし。華嚴の如きは正しく小を隔てて大を明す、彼初分に於ては永く聲聞無し、後分には則ち有り。復座に在りと雖も聾の如く瘂の如し、其境界に非ず。爾時、尚未だ半有らず、何の合をか論ずる所有らん。次に三乘を開し、小機を引接して見思を斷ぜしむれば、則ち小を以て大を隔つ。既に滿を論ぜず、何の合すべき所かあらん。故に無量義に云はく「三法、四果、二道は一ならず」と。不一は即ち不合なり。若し方等教は、或は半滿雙べ明し、或は半滿相對し、或は滿を以て半を彈じ、半を棄け滿を開く。小を恥づることを知ると雖も、猶未だ大に入らず。故に止宿草菴と云ふ。下劣の心猶未だ改むること能はざれば、則ち半滿合せず。般若には滿を以て半を洮練す、命じて家業を領じて、半の方便通じて無生に入ることを明す。半字の法門皆是れ摩訶衍なれば、是れ其法を合す。而も一餐の物をも悕取せざれば、即ち是れ未だ其人を合せず。是故に半滿合せざるなり。若し法華に至れば、化城を覺悟して眞實に非ずと云ふ。汝等が行ずる所是れ菩薩の道なりと、即ち是れ法を合す。汝は實に我子なりと、即ち是れ人を合す。人法倶に合するなり。鹿苑に權を開するより諸の經教を歷て、法華に來至して始めて實に合することを得。故に無量義に云はく「四十餘年未顯眞實」と。若し法華に於て、未だ合せざるは、涅槃に於て合することを得。法性論に「中下の二根法界に入ることを明すは、即ち是れ菩薩を合することを得るなり」と。若し聲聞を論ぜば、一には祕密合、二には顯露合あり。祕密合と

【六】判教相に六章を開する中、第五には料簡なり。即ち三意を分ち、而してその一に通別に約して料簡す

は、初め提謂の爲に五戒の法を說くに、已に密に無生忍を悟る者有り、況や修多羅、方等、般若に、豈密悟無からんや。此れ則ち論せず。若し顯露に就かば、未入位の聲聞は亦處に隨つて合することを得。例せば、般若に三百の比丘の、記を得る者の如き是れなり。若し住果の聲聞は、決んで法華に至りて敎信して合せしむ。若し住果の合せざるは、是れ增上慢なり。未入位の五千は、衆を簡んで起ち去る。涅槃の中に到つて、方に復合することを得るなり。總じて諸經に就いて、通じて四句を作さば、華嚴、三藏は合に非ず不合に非ず、方等、般若は一向に不合、法華は一向に合、涅槃は亦は合、亦は不合なり。何となれば、涅槃は末代の爲に、更に諸の權を開して後代の鈍根を引く。故に亦は不合なりと言ふ。

問ふ、『菩薩は法華に因りて法界に入るは、華嚴と合す。華嚴に因りて一乘に入りて、法華と合するを見ずや。』答ふ、『華嚴に法界に入るは即ち是れ一乘に入るなり云云。』

（六）五に料簡とは、三意と爲す、一には通別に約し、二には益と不益、三には諸敎に約するなり。通別とは、夫れ五味半滿は別を論ずれば別して齊限有り、通を論ずれば初後に通ず。若し華嚴頓乳は、別しては但初に在れども、通じては則ち後に至る。故に無量義に云はく、「次に般若の歷劫修行、華嚴海空を說く」と。法華に佛慧に會入す。即ち是れ通は二經に至る。又像法決疑經に云はく、「今日坐中の無央數の衆は、各見ること同じからず。或は如來の涅槃に入りたまふを見るものあり、或は如來の世に住すること一劫、若は減一劫、若は無量劫なりと見るあり、或は如來の丈六の身を見るものあり、或は小身を見るものあ

【半滿相對】半滿とは小乘と大乘となり。涅槃經に半體字を小乘經に、成字をば大乘經に配するより出づ。而して今方等教は四教相對望し、半に對して滿を說く。故に半滿相對といふ。

り、或は大身を見るものあり、或は報身の蓮華藏世界海にして、千百億の釋迦牟尼佛の爲に心地法門を說くを見るものあり、或は法身の虛空に同じくして分別有ること無く、無相無礙にして法界に徧同するを見るものあり、或は此處に山林地土沙あるを見るあり、或は七寶と見るものあり、或は此處は乃ち是れ三世の諸佛所行の處なりと見るあり、或は此處即ち是れ不可思議諸佛の境界、眞實の法なりと見る」と。夫れ日初て出るに先に高山を照し、日若し沒するに垂んとして、應に峻嶺に餘輝あるべし。故に蓮華藏海は、通じて涅槃の後に至る。況や前の教をや。若し修多羅半酪の教は、別して論ずれば第二時に在れども、通じて論ずれば亦後に至る。何となれば、迦留陀夷は法華の中に於て面り受記を得たるも、後聚落に入りて害せられ結戒の緣起と作る。又身子の如きは法華の請主たり、後に入滅す。均提は三衣を持して至り、佛、問ふ云云。豈三藏後に至るに非ずや。釋論に云はく、「初め鹿苑より涅槃の夜に至るまで、說く所の戒定慧を結して、修妬路等の藏と爲す」と。當に知るべし、三藏は通じて後に至ることを。若し方等教の半滿相對するは、是れ生蘇の教なり。別して論ずれば是れ第三時なれども、通じて論ずれば亦後に至る。何となれば、陀羅尼に云はく、先に王舍城に於て諸の聲聞に記を授け、今復舍衞國祇陀林の中に於て、復聲聞に記を授く。昔波羅奈に於ても聲聞に記を授く。身子の云はく「世尊は虛ならず、言ふ所眞實なり。故に能く第二、第三に、我等に記を授く」と。故に知んぬ、方等は法華の後に至ることを。般若の半を帶して滿を論ずるは、是れ熟蘇の教なり。別して論ずれば第

【七】料簡の中、第二には益不益に就いて料簡す。

四時に在れども、通じて論ずれば亦初後に至る。何となれば、得道の夜より泥洹の夜に至るまで、常に般若を說くと。又釋論に云はく、「須菩提は畢定、不畢定を問ふ」と。當に知るべし、般若も亦後に至ることを。若し涅槃醍醐の滿敎は、別して論ずれば第五時に在り、通じて論ずれば、亦初に至る。何となれば、釋論に云はく、「初發心より常に涅槃を觀じて道を行ず」と。前來の諸敎、豈發心の菩薩、涅槃を觀ずること無からん耶。大經に云はく、「我道場菩提樹下に坐し、初めて正覺を成ず。爾時無量阿僧祇恆沙の世界の諸の菩薩、亦曾て我に是甚深の義を問ふ。然るに其問ふ所の句義功德、亦皆是の如く等しうして異り有ること無し。是の如く問ふ者は、則ち能く無量の衆生を利益す」と。此れ則ち通じて前に至るなり。若し法華は、顯露の邊に論ずれば前に在ることを見ざれども、祕密の邊に論ずれば理として障礙無し。故に身子の云はく、「我昔佛に從ひて、是の如きの法を聞き、諸の菩薩の受記作佛することを見る」と。豈昔の通記を證するの文に非ざらんや。問ふ、『涅槃には追つて四を說き、方等には正しく四を開し、別敎に復四有り、若爲ぞ分別せんや。」答ふ、「涅槃は當(分の)四(敎)に通じて佛性に入る、別敎は次第に後に佛性を見、方等は諦を保すれば、二は性を見ず云云。」

(七)二に益不益に就いて料簡せば、若し華嚴を乳と爲し、三藏を酪と爲るは、此れ則ち方便の味ひ濃に、大乘の味ひ薄し。此を釋するに三と爲す、一に用益を取りて論を爲す、貴藥なれども病治するに非ず、賤藥なれども是れ病に宜し。貴藥なれども宜きに非ざれば、

徒に服して益無きが如し。初め華嚴を說くに、初心に於て未だ深益あらず、漸機に於ても亦未だ轉ぜざれば、二緣に於ては乳の如し。若し漸機、三藏を稟けて能く見思を斷じ、三毒稍く盡して即ち凡を轉じて聖と成るは、乳を變じて酪と爲すが如し。用ひて益あるを以て賤をも勝と謂ひ、用ひて益あらざれども貴を劣なりと謂ふべからず。華嚴も亦是の如し、小に於ては乳の如く、大に於ては醍醐の如し。少分の譬喩なり、全く求むべからず。二には良醫に一の祕方有り、十二の藥を具す、三種最も貴し。善く病の相、盈縮の宜き所を占ひ、終に候に乖きて、謬まつて所治有らざるが如し。佛も亦是の如し、圓方妙治、十二部を具す、無問、廣、記を最も甚深と爲す。菩薩は智利にして、具足して全く服すれども、二乘は病重ければ、九を以て劑と爲す。此れ若し縮せざれば病に於て益無し。不縮に於ては乳と爲し、縮に於ては酪と爲す。此れ相生の次第を取りて譬と爲す、濃淺淺濃を用ひざるなり。

三には行人の心に約せば、華嚴を說く時は凡夫は見思を轉ぜず、故に乳の如しと言ふ。三藏を說く時は見思の惑を斷ず、故に酪の如しと言ふ。方等に至る時は、挫せられて恥伏し、眞極と言はず、故に生蘇の如し。般若に至る時は、敎を領し法を識れば、熟蘇の如し。法華に至る時は無明を破し、佛知見を開き、授記作佛して心已に淸淨なり。故に醍醐の如しと言ふ。行人の心生しければ敎も亦未だ轉ぜず、行人の心熟すれば敎も亦隨つて熟す。問ふ、『一人五味を稟くとやせん、五人とや爲ん。』答ふ、『自ら一人一味を稟くる有

【八】料簡の中第三には諸教に歴て以て料簡す。

り、華嚴の中の純一の根性の如きは、即ち醍醐を得て五味を歴ず。大經に云はく、「雪山に草有り、牛若し食へば即ち是れ醍醐」と。自ら一人五味を歴るもの有り、小乘の根性の如きは頓に於ては乳の如く、三藏は酪の如く、乃至醍醐に方に乃ち究竟す。大經に云ふが如し「牛より乳を出し、乃至蘇より醍醐を出す」と。自ら利根の菩薩、未入位の聲聞有り、或は三藏の中に於て、性を見るは、是れ二味を歴るなり。自ら方等の中に性を見るものあり、是れ三味を歴るなり。般若の中に性を見るは是れ四味を歴、「三百の比丘の如し。大經に云はく、「毒を乳中に置けば、五味の中に徧じて悉く能く人を殺す」と。即ち此意なり。

(八)三に諸教に歴て料簡せば、大經に云ふが如し、凡夫は乳の如く、「聲聞は酪の如く、菩薩は生、熟蘇の如く、佛は醍醐の如し」と。今此譬を釋せば、總じて半滿五時を喩ふ、凡夫は治道無ければ全く生しきこと乳の如く、聲聞は眞を發すれば通じて皆酪の如く、通教の菩薩及び二乘は生蘇の如く、別教は熟蘇の如く、圓教は醍醐の如し。今當教に各五味を判ずべし。大經に云はく、「凡夫は乳の如く、須陀洹は酪の如く、斯陀含は生蘇の如く、阿那含は熟蘇の如く、阿羅漢、支佛、佛は醍醐の如し」と。超果の者あれば、即ち醍醐を得。或は味味に入る者有り、此れ即ち三藏教の中の意なり。當通教の中の五味とは、大經の三十二に云はく、「凡夫の佛性は、雜血の乳の如し。血とは、即ち是れ無明、行等の一切の煩惱なり、乳とは即ち善の五陰なり。是故に我れ說く、諸の煩惱、及び善の五陰に從ひて

【九】判教相に六章を分つ中、第六に增數に教を明す。即ち初には章を列ね、而して次には第一に迹門に約して之を明す。

三菩提を得」と。衆生の身は皆精血に從つて成就することを得るが如し、佛性も亦爾り。須陀洹、斯陀含は少煩惱を斷ずれば眞の乳の如く、阿那含は酪の如く、阿羅漢は生蘇の如く、支佛より十地の菩薩に至るまでは熟蘇の如く、佛は醍醐の如し」。超果と不定とは云云。當別教に自ら五味を明さば、第九に云はく、「衆生は牛の新たに生じて血乳未だ別れざるが如し、聲聞、緣覺は酪の如く、菩薩の人は生、熟蘇の如く、諸佛世尊は猶醍醐の如し。具には超果、不定有り云云。當圓教は但一味なり、大經に云はく、「雪山に草有り、名けて忍辱と曰ふ。牛若し食すれば即ち醍醐を得」と。正直純一なり、故に五味を論ぜず。若し無差別の中に差別を作さば、名字即乃至究竟即に約して、五味の相生を判ず。佛より十二部を出すは即ち是れ乳を出す、新醫の乳を用ふるなり。四善根に約して、發の中に就いて五味と爲すべし。

(九)六に增數に教を明すは、先に迹に約し、次には本に約す。夫れ教は本機に逗ず、機既に一ならざれば教迹衆多なり。何ぞ但半滿五時のみならん、當に知るべし、無量種の教なることを。今且く一を增して八に至る。初めに一法に約して開合を明さば、十方佛土の中には但一乘の法のみ有り。此法に於て解せざれば、全く生しきこと乳の如し。若し開せんと欲せば、圓を開して別教の一乘を出すなり。若し別に於て解せざるは、亦全く生しきこと乳の如し。又通の一乘を開す。若し通に於て解せざるは亦全く生しきこと乳の如し、又三藏の一乘を開す。開して四と爲すと雖も、皆一大乘法と名く、但に佛果を求むるなり。若

し三藏の一乘に於て解を得れば、即ち乳を變じて酪と成し、乃至本の一乘に入るなり云云。若し四の一乘に於て解せざれば、又更に三藏に於て聲聞、支佛の教を開出す。若し結を隱じ果を證し、心漸く通泰すれば、即ち二乘を卻けて、唯大乘求佛と言ふ。漸く般若を以て洮汰し、心をして調熟せしむ。即ち方便の一乘を廢して唯圓實の一乘なり、故に云はく「我本誓願するが如きは、今已に滿足す。一切衆生を化して、皆佛道に入らしむ。若し小乘を以て化せば、我則ち慳貪に墮せん、此事を不可なりと爲」と。是故に始め一よりして一を開し、終に一に從ひて而も一に歸す。若し二法に約して開合を論ずれば、半滿兩教に約す。初に華嚴の滿を明し、若し衆生に機無ければ次に滿に約して半を開す。次に方等に半に對して滿を明し、次に般若には半を帶して滿を明し、次に法華は半を捨て滿を明す。始は則ち滿より半を開し、終は則ち半を廢して滿に歸す云云。

次に三法に約して開合を論せば、即ち是れ一佛乘に於て方便して三を說くなり。既に息むを知り已れば化城を滅却す。亦是れ三善に約せば、聲聞を下善と爲す云云。次に四法に約して開合を論せば、即ち是れ四教なり。圓に約して別を開し、別に約して通を開し、次に三藏を開す。是の如く、次第に會し來つて圓に合す云云。又四法に開合を論ぜば、四門に約す。本是れ圓の四門なり。衆生解せざれば別の四門、乃至通、三藏の四門を開出す。利者は傳傳して入ることを得、鈍者は五味に調入す。次に五法に約して開合を論ぜば、即ち是れ五味なり。初め十二部より修多羅乃至涅槃を開し、教教に五味を論ず。初の五味よ

【一〇】増數に教を明す中、第二に本門に約す。

り、諸の五味を開し、細細に漸く合し、還つて圓滿の五味に歸す。次に六法に約して開合を論ぜば、卽ち是れ四教の大乘の六度、七覺分、八正道なり。初め圓を開して別を出し、乃至三藏(を開す)、是の如く縮合して、還つて一圓道(に歸す)云云。次に七法に約して開合を論ぜば、四教、二乘並に人天乘を謂ふなり。若し上向は圓別を合し、下向は人天を合し、七數をして足らしむ。開合は云云。次に八法に約して開合を論ぜば、前の八法に約して開合す云云。若し開合の意を得れば、自在に之を說くべし。

(一〇)二に本門に約して教の開合を明さば、迹を借りて本を知る、本も亦復是の如し。復次に本門の中に、或示己身、或示他身、或說己法、或說他法を明す。己身とは是れ佛法界の像、他身とは是れ九法界の像なり。己法とは是れ圓頓佛の知見、此を降つて以下は皆是れ他法なり。種種の形を示すと雖も度脫せしめんと欲するが故なり、種種の道を說くと雖も、其實は一乘の爲なり。此れ卽ち開合の意なり。是の如きの開合は、半滿五味宛然として失すること無し。次第の意も復分明なり、次第の意に非ざるは自然に解すべし、不定の教は、彌見易しと爲す矣。一より一を開するは、十方佛土の中には唯一乘の法のみ有り。衆生解せざれば全く生しきこと乳の如し、此圓の一乘より別の一乘を開出す。衆生又解せざるは亦全く生しきこと乳の如し、又體法の一乘を開出す、衆生又解せざれば亦全く生しきこと乳の如し、又折法の一乘を開出す。衆生卽ち解す、是れ則ち乳を轉じて酪と爲る。次に體法に入るは卽ち酪を轉じて生蘇と爲り、次に別の一乘に入るは、卽ち生蘇を轉

【一二】是より下は記者章安尊者の雜錄なり中に於てま

じて熟蘇と爲る。次に轉じて圓の一乘に入るは、熟蘇を轉じて醍醐となるが如し。是中備に頓、漸、不定有り云云。此は是れ一より以て一を開し、一より以て一に歸するなり。次に二より以て二を開するは、元は本是れ如來藏にして、如來藏の中に半滿不思議の二有り。衆生解せざるは全く生しきこと乳の如し、又觀を帶するの滿を開出す。又解せざれば全く生しきこと乳の如し、又半を破するの滿を開出す。衆生解せざれば亦全く生しきこと乳の如し、又單に半を說くに、衆生解すれば乳を轉じて酪と爲る。次に半を破するの滿を說くに、酪を轉じて生蘇と爲る。次に半を帶するの滿を說くに、衆生は一の熟蘇と爲る。次に純ら不思議の滿を說くに、衆生は醍醐の如し。此中具に頓、漸、不定有り、即ち二より二を開し、二より二に歸す。三より三に歸するは、本是れ即空即假即中の三なり。衆生解せざれば、即ち次第の三を開し、又解せざれば即ち偏眞の三を開し、又解せざれば即ち析法の三を開す。利人は析空の三より體空の三に入り、體より次に入り、次より即に入る。鈍者は析の三に住す、故に體空の三を用つて之を調ふ、即ち生蘇なり。又次の三を用つて調ふるに熟蘇と爲り、今方に即空即假即中に入ることを得るなり。此れ三法に約して開合を論ず。四法の開合とは、本是れ圓の四門なり。衆生解せざれば別の四門、乃至三藏の四門を開す。傳傳して入らしむること前の如し。五法に約して開合を論ずるは、五味に約することと前に準ず云云。乃至八も亦是の如し。

【一二】記者私に異同を錄す。有人、釋論の會宗品を引きて十大經を擧ぐ、雲經、大雲經、

た大分二ある中、初めには異聞を雜記するには又自ら四あり、今乃ち第一に般若と法華とを料簡して以て同異を辨ず。

法華經、般若最大なり」と。又大明品に云はく、「諸餘の善法は般若の中に入る、謂はく法華經も亦是れ善法なり」と。第百卷に云はく、「法華は是れ秘密なり、般若は秘密に非ず、二乘の作佛を明さざるが爲の故なり」と。又云はく、「般若と法華は是れ異名なる耳」と。此三種、云何が通ぜん。有人、會して云はく、「衆聖は無心を以て無相に契ふ、衆流の海に納るが如し。若し其れ物を化するには、無相を以て宗と爲す、容の總包するが如し。般若は盛んに此二を明す、故に十經に於て最も大なり。又般若に第一義悉檀を明す、是故に最大なり。又九十品には、前の六十品は實慧を明し、無盡品より去りては方便を明す。二慧は是れ三世の佛の法身の父母なり、是故に最大なり。普衆經に此二を明すは、皆攝して般若の中に入る。問ふ、『衆經に此二を明すも、亦應に般若を衆經の中に攝入すべしや。』答ふ、『大品の最初より專ら此二を明す、餘經は爾らず。古來般若は是れ得道の經なりと稱す、故に知んぬ、大なることを。』今謂はく、還つて是れ今の時なれば大の義を專にす、何ぞ會通と謂はん。會通せば、共般若、不共般若有り、不共般若は最も大なり。餘經若し不共を明すは、共義正等なり云云。他の會通すらく、法華には二乘作佛を明す、是れ秘密なり。般若には二乘作佛を明さず、故に秘密に非ずとは、秘密は則ち深、般若は則ち淺なり。何となれば、般若に菩薩は是れ佛の因なりと明すは、義に於て解し易し。故に秘密に非ず。二乘作佛は昔の教と反す、義に於て解し難し。故に是れ秘密なり。論に云はく、「藥を用つて藥と爲るは共事易く、毒を用つて藥と爲るは共事難きが如し」と云云。然るに密、

顯は大小に通ず、釋論の第四に云はく「顯示教に、羅漢は惑を斷ずれば淸淨なれども、菩薩は惑を斷ぜざれば淸淨ならずと明す。故に菩薩は後に在りて列ぬ。若し祕密の法には、菩薩は六神通を得、一切の煩惱を斷じ、二乘の上に超えたりと明す。當に知るべし、顯示は淺く、祕密は深し」と。今般若と法華とは、皆菩薩に無生忍を得て六神通を具すと明す。當に祕密、並に深、並に大なり。祕密に就いて更に祕、不祕を論ず。般若には二乘作佛を明さざれば、此一條を闕く、故に不祕と言ふ耳。問ふ『般若には未だ權を開せざれば、應に是れ祕密なるべし。法華には權を開す、應に是れ顯示なるべしや。』答ふ、『若し開權を取らば所問の如し、今は淺易を取りて顯示と爲るのみ。』問ふ、『若し爾らば未了の者云何ぞ大と言はんや。』答ふ、『二慧に據るを深大と爲し、二乘作佛を明さざるを未了と爲す。』問ふ、『旣に深大と言ふ、何ぞ二乘は是れ方便にして、作佛を得せしむと說かざる。此義未了ならば、亦何ぞ大ならん乎』答ふ、「獨り自ら釋するに非ず、叡師も亦云はく、「般若は照なり、法華は實なり。理を窮め性を盡し、萬行を明すことを論ぜば、則ち實は照に如かず。大に眞化を明し、本三無しと辨するを取らば、則ち照は實に如かず」と。是故に深を歎ずるときは則ち般若の功重く、實を美むるときは則ち法華の用高し。』問ふ、『叡師を引くと雖も、枯を攀ぢ力を求めて、覺えずして人杌倶に倒るるが如し。釋猶未了なり。』今謂はく、不共般若は、何れの時か二乘作佛を明さざらん、法華の平等大慧と更に復何ぞ殊ならん耶。

【一二】異聞雜記の中、次には經論諸藏の離合を明す。

【一三】異聞雜記の中第三に四教の名義の所憑を明す。

(一二)衆の經論に教を明すこと一に非ず、若し摩得勒伽には二藏有り、聲聞藏と菩薩藏となり。又諸經に三藏有り、二は上の如し、雜藏を加ふ。十二部經を分つは、是れ聲聞藏、方廣部は是れ菩薩藏なり。十二部を合するは是れ雜藏なり。又四藏有り、更に佛藏を開す。菩薩處胎經には八藏あり、胎化藏、中陰藏、摩訶衍方等藏、戒律藏、十住藏、雜藏、金剛藏、佛藏を謂ふ。彼諸藏は云何が會通せん。二藏を通ぜば、其一は聲聞に通じ、其二は菩薩藏に通ず。三藏を通ぜば、初教は聲聞藏、次は雜に通ず、其一は菩薩藏に通ず。四藏に通ぜば、一一に相通ず。八藏を通ぜば、八藏は降神より已來、四教は轉法輪より已來、時節に節の異なり有り。今は轉法輪より來の八教を以て之を通ず。若し胎化藏、中陰藏は、未だ阿難の爲に說かざる時なれば、即ち是れ祕密教なり。阿難の爲に說く時は、即ち是れ不定教なり。摩訶衍方等藏は即ち頓教なり。戒律藏より去つて五藏は、即ち漸教の中の次第なり。戒律藏は即ち三藏教なり。十住藏は即ち方等教なり。雜藏は即ち通教なり。金剛藏は即ち別教なり。佛藏は即ち圓教なり。然るに佛意は測り難し、一往相望めて此會通を作すのみ云云。

(一三)問ふ、『四教の名義は何れの經に出づるや。』答ふ、『長阿含の行品に、佛、圓彌境の北尸舍婆村に在して四大教を說きたまふとは、佛に從ひて聞き、和合衆、多比丘に從つて聞き、一比丘に從つて聞く。是を四大教と名く。月燈三昧經の第六に、四種の修多羅を明す。諸行、訶責、煩惱、清淨を謂ふ。私に之を釋會せば、諸行は是れ因緣生の法なれ

ば、即ち三藏の義なり。訶責は是れ過罪を體知す、即ち通教の義なり。煩惱は、互に入らざれば實理を得ず、若し煩惱無ければ則ち智慧無し、即ち別教の義なり。清淨は、既に一の淨を擧げて名に當つれば、任運に我、常、樂等有り、即ち圓教なり。又一一の教に四の修多羅を具す。諸行は即ち集諦なり、諸行の果は即ち苦諦なり、諸行は對治せらる、煩惱を對治するは即ち道諦なり。諸行清淨なるは即ち滅諦なり。此れ三藏の中に四の修多羅を具するなり。又諸行を訶責するは即ち集諦なり、諸行を訶責するは即ち苦諦なり、煩惱を訶責する對治は即ち道諦なり、訶責の清淨なるは即ち滅諦なり。此れ通教の中に四の修多羅を具す。又煩惱の諸行は是れ集諦なり、煩惱の果行は是れ苦諦なり。煩惱の行の訶責を被むるは即ち道諦なり。煩惱の清淨なるは即ち滅諦なり。此れ別教の中に四の修多羅を具す。又涅槃即ち生死なるは苦諦の清淨なり。菩提即ち煩惱なるは道諦の清淨なり。煩惱即ち菩提なるは道諦の清淨なり。生死即ち涅槃なるは滅諦の清淨なり。是れ圓教の中の四の修多羅なり。彼經に復四論、四法、四境界、四門、四斷煩惱智、四苦、四集、四道を明す。皆四教と相應す。具には彼れの如く、應に知んぬべし。地論の第七地に云はく、一念の心に十波羅蜜、四攝、三十七品、四家を具す。四家を釋して云はく、「般若家、諦家、捨煩惱家、苦清淨家なり」と。私に釋せば、苦諦に約して初門と爲し、道品を修して、苦をして清淨ならしむるは、即ち三藏の義なり。捨煩惱家とは、即ち無相に體達するを捨と爲す、色是れ空なるが如き、空捨無相を以て修道品を論ずるは、此れ即ち通教

【一四】異聞雜記の中、第四には古の五時、七階の不同を破す。即ち初めには略して古異を述するなり。

【一五】古の五時七階の不同を破する中、之より。下は即ち雜破なり。而してまた自ら二意を分つ中、今初めには頓漸を破す。

の義なり。般若家とは、般若の智照せば諸法明了にして、恒沙の法門皆悉く通達し、而も道品を修するは、此れ即ち別教の義なり。諦家とは、諦は則ち實相の理なり。即ち是れ圓教の、實相に約して道品を修するなり。具には彼に說くが如し云云。

(一四)達摩鬱多羅は教迹の義を釋して云はく「教とは佛、下に被むらしむるの言を謂ふ。迹とは蹤跡を謂ふ、亦は應迹、化迹なり」と。言は聖人の布教にして、各歸從あり。然るに諸家の判教一に非ず。一に云はく、釋迦の一代、頓漸を出でず。漸に七階五時あり、世共に同じく傳へて是と言はざること無し。又云はく、五時の言那ぞ定むることを得べけん。但雙林已前は是れ有餘不了なり、涅槃の唱へは、之を以て了と爲す。又佛は一音を以て演に暢ずるに、衆生は大小並に受く。何ぞ頓漸を以て往いて定むべけんと言ひて、頓漸無しと判ず。

(一五)今之を經論に驗むるに、皆是れ穿鑿する耳。何となれば、人云ふ「佛教は頓漸を出でず」と。而して實には頓漸に教を攝すること盡さず。四阿含經の五部の戒律の如き、教未だ深を窮めざれば、未だ頓と名くることを得ず。說は始終に亙れば、復大と次第して漸と爲らず。是れ則ち頓漸に攝せず、何ぞ佛教は頓漸を出でずと云ふことを得んや。然るに頓無きに不ざれば、全く破することを得ず。何となれば、凡そ頓漸を論ずるは蓋し所爲に隨へばなり。若し如來に就けば實に大小並べ陳ぶ、時に前後有ること無し。但所爲の人は悟解同じからず、自ら頓を受くる有り、或は漸より入る。所聞に隨つて結集す、何ぞ頓無しと言

ふことを得ん。但其時節を定め、其淺深を比ぶべからざる耳。人、漸教の中に七階五時ありと言ふ。言はく、佛の所成道に、提謂波利の爲に五戒十善人天の教門を說く。然るに佛は衆生に隨つて、聞くに宜ければ便ち說く。何ぞ唯利時に局つて、二人の爲に五戒を說くことを得ん。又五戒經の中に「二の長者は不起法忍を得、三百人は信忍を得、二百人は須陀洹果を得。普曜經の中には、佛、二の長者の爲に記を授け、密成如來と號せん」と。若し爾らば、初め二人の爲に人天の教門を說くと言ふは、義何の依據かある。又二の長者は見佛聞法して、佛を禮して去る。竟に鹿苑に向はず。初め五戒を說く時は、未だ陳如を化せず。誰と與にか次を接して、而も名けて漸と爲ん。人、第二時は十二年の中に三乘別教を說くと言ふ。若し爾らば、十二年を過ぎて、四諦、因緣、六度を聞くに宜きもの有れば、豈說かざるべげんや。若し說かば是れ則ち三乘別教なり。此十二年の中に在らず。若し說かずんば是れ一段後に在りて聞くに宜きに佛點化せざるべけん。定んで此理無し。經に言はく、「聲聞の爲に四諦を說き、乃至六度を說くは、止十二年のみに不ず。蓋し一代の中、聞くに宜き者に隨つて即ち說く耳。四阿含經の五部律の如きは、是れ聲聞の爲に說くに、乃ち聖滅に訖るとは、即ち是れ其事なり。故に增一經に說く「釋迦十二年の中略して戒を說き、後瑕疵起るに乃ち廣く制す」と。長阿含遊行經に「乃至涅槃を說く」と。何ぞ小乘は悉く十二年の中なりと言ふことを得ん。人言はく「第三時は三十年の中に空宗般若、維摩、思益を說く」と。何れの經文に依りてか三十年の中なることを知るや。四十年の後

【二六】難破の中、次には了不了を破す。

に法華一乘を說くと言ふ。法華經の中に、「彌勒の言はく、佛の成道より來、始て四十餘年を過ぐ」と。然るに法華は定んで大品經の後に在りと言ふべからず。何が故ぞ、大智論に云はく「須菩提は法華の中に於て、擧手低頭皆作佛を得と說くを聞きて、是を以て今退の義を問ふ」と。若し爾らば、大品と法華とは前後何ぞ定まらんや。

【二六】然るに大品、法華及び涅槃の三教の淺深は、輙く言ふべきこと難し。何となれば涅槃の佛性を亦般若とも名け、亦一乘とも名く。一乘は是れ法華の宗、般若は是れ大品の說く所にして、卽ち是れ性を明すなり、復何の未了か有らん乎。大品の中に第一義空を說くと。涅槃經に空を明すと異なること無し。皆色空、乃至大涅槃亦空なりと云ふ。又大品に涅槃は化に非ずと說き、維摩には佛身は五非常を離ると說くは、涅槃に常を明すと、涅槃に不空を說くと、何の異りか有らん。而して自ら分別を生じて、維摩は偏へに非常と名け、大品は一向に空を說くと言ふなり。人、阿難等の諸の聲聞の、大品會に在るを以て、復法華會を經て、終りに涅槃會に至る。故に知んぬ、大品、法華、涅槃は應に淺深あるべしと。義必ずしも爾らず、何となれば、阿難、迦葉の如きは法華會を經て、若し未だ常を說くを聞かずといはば、涅槃會の中に二人在らず、何に由りてか、常の解有ることを得て、涅槃を流通せん。復次に舍利弗は、佛涅槃の前七日に在りて滅度す。大目連は執杖外道の爲に打たれ、亦佛の前に在りて涅槃す。皆雙林の會に在らず、豈常の解を得ざるべけんや。卽ち知んぬ、法華の中に已に常を悟り覺つて、更に聞くことを假らざることを。又舍利弗等

の諸の聲聞は、皆是れ大乘の菩薩なることを、法華經に廣く説くが如し。又、「小法を樂ひて而も大智を畏ると知る、是故に諸の菩薩は聲聞、緣覺と作る」と。涅槃に亦云はく、「我法の最も長子は、是を大迦葉と名く。阿難多聞の士は能く一切の疑ひを斷じ、自然に能く是の常と無常とを解了す」と。誰に知んぬ、聲聞の人は、前に在りては則ち小なり、何ぞ其人に就いて、而も涅槃を並むべけんや。又、若し涅槃より前に涅槃に入らば、涅槃經の中に已に常當に始まるに並ずして、久しく涅槃を成ずと明す。何に由りてか、涅槃の中方に常住の始終を辨じて、實を化して衆少を爲さんや。故に知んぬ、一代の衆生の法華に得を列く者の爲に涅槃經を説く、佛性を聞く者は、涅槃を聞くことを得ざるなり。又、法華經に大利益有り、法華の中の八千の聲聞、記別を受くることを得、大果實を成ずるが如しと。若し法華の得記を以て涅槃の意を證せば、即ち是れ其同じうして、秋收冬藏更に事無きこと明かなり矣。又、涅槃の發起衆の中に、涅槃經は法華に依り始まりて、決定する所無きことを明す。涅槃は大涅槃の中に於て、法華を觀じて最も深遠と爲す。何が故ぞ涅槃は法華に付し、唯法華のみ但菩薩に付すと。是故に知んぬ、法華は究竟滿足にして、疑ひを致すべからざることを。復應に知るべし、諸の大乘經は皆開權ならず、但直しきに隨って實を爲すことを爲すのみ。華嚴、無量義、法華の如き、皆三昧の名なり。般若は是れ大慧智慧なり、維摩に不思議解脱を說くは是れ解脱なり、大涅槃は是れ究竟の滅なり、文殊問の普擬は是れ滿足の道なり、悉く是れ佛法にして、法に優劣有ること無し。中に於て果

【一七】古の五時七階の不同を破する中、第三には正しく今宗の意を明す

を明すには皆是れ佛果なり、因を明すには皆是れ地の行なり、理を明すには皆是れ法性なり、所爲は皆是れ菩薩なり、皆倶に異なり有るべからず、何ぞ強て優劣を作すや。若し爾らば、誕公の云はく、「雙樹已前、法華經までは悉く不了なりと指す」と。豈謬誤に非ずや。

【二七六】大經說に曰く、「經藏は云何ぞや、摩得勒伽に十二部經を說く、唯方等部は是れ菩薩藏、十一部は是れ聲聞藏なり。又佛は聲聞、菩薩の爲に出苦の道を說く、聲聞の爲の者、菩薩の爲に說く所を以て菩薩藏と作し、聲聞の爲に說く所を以て聲聞藏と爲す。」龍樹も大智論の中に於て亦云はく、「大迦葉と阿難と王舍山に在りて、三藏を選集して聲聞藏と爲す。文殊と阿難とは、摩訶衍經を集めて菩薩藏と爲す」と。涅槃にも亦云はく、「十一部經を二乘の藏と爲し、方等部を菩薩の所持と爲す」と。是を以て經論に依り按ずるに、略して唯二種あり、聲聞藏と及び菩薩藏となり。然るに教は必ず人に對す。人は則ち亦二あり、聲聞藏の中に決定の聲聞、及び退菩提心の聲聞有り。菩薩藏の中に頓悟の大士あり、漸入の菩薩有り。聲聞藏の中の決定の聲聞とは、久しく二乘の根性を習へば、小心狹劣にして小性を成就し、一向に小を樂ふ。佛は爲に小を說くに、畢竟じて證を作し、大に趣くこと能はず。退菩提心の聲聞と言ふは、是人曾て、先佛及び諸の菩薩の所に於て菩提心を發すも、但生を經、死を歷て本念を忘失し、遂に小心を生じて小を志願するなり。佛は爲に小を說き、終に大に趣かしむ。然るに決定の聲聞は一向に小に住し、退菩提心の聲聞は後に大に趣く。其行は往あり返ありと雖も、而も小を受くる時は一なり。故に此二人に對して說く所を聲聞

頓と爲す。若し華嚴の中に於て頓悟する者有り、華嚴等の經所爲の衆生の如きは、小に由つて來らずして一往に大に入る、故に名けて頓と爲す。漸より入る者は、即ち向の退菩提心の聲聞の如く、後能く大に入る。大は小より來る故に稱して漸と爲す。頓と漸との不同有りと雖も、然も大を受くる處は一なり。故に此二人に對して說く所を菩薩藏と爲す。然るに此三藏は所爲に隨ひ、所說に隨ふ。聲聞藏の中にも菩薩の影響となる有り、然るに所爲に非ざれば、菩薩に從つて名けて大乘經と作すべからず、菩薩藏の中にも亦聲聞の人有り、正しく所爲の宗に非ざれば聲聞の法を說かず、故に名けて小乘の法と爲すべからず。人に擬して法を定むるに、各自ら不同なり、是れ要を以て之を攝す、略すれば唯二なり。

問ふ、「佛は三乘の人の爲に三種の教を說く、何を以ての故に、藏を判ずるに唯其二有るや。」答ふ、「佛は三乘を求むる人の爲に三乘の法を說く、然るに因緣を開く者は、即ち是れ聲聞なり、辟支佛は無佛世に出でて但神通を現じ、默して說く所無し。故に經を結集する者、集めて二藏と爲るなり。」經に依つて教を判ず、厥致云ふこと爾り。」今の四教と達摩の二藏との會通は云何ん、彼自ら要を以て之を攝するに、略して唯二種なりと言ふ、今開いて之を分ち、判じて四教とする耳。聲聞藏は即ち三藏教なり、菩薩藏は即ち通、別、圓教なり。決定の聲聞の爲に三藏教を說き、退大の聲聞の爲に通教を說き、漸悟の菩薩の爲に別教を說き、頓悟の菩薩の爲に圓教を說く。唯名數融じ易きのみに非ず、而も義意玄に合す。今古符契して、一にして二無し焉。

【一八】章安自ら記錄すること略なる記を述べて師說の深賾なるに推るなり即ち先きに記者の意を述べ、次に稟師の作意を述して之を結す。

【一八】唯文略にして而も義廣し、致一にして而も諸に叢つ。若し隱を申べて以て顯ならしむるには、須く多く論義を作るべし。川澤を捕獵するに籠に筌罤を結ふが如し、豈漁獵する者博きを好まん耶。已むことを得ずして博くする耳。

師の云はく「我五章を以て、略して玄義を譚ずるも、能く文外の妙を申ぶるに非ず。特に是れ麤所懷を述するのみ。常に恨むらくは、言、意を暢ぶること能はず。況や復記するに能く言を盡さんや。然りと雖も若し能く七義を尋ね、次に十妙に通じ、別體の七を研かば、餘の五の鈎瑣相承し、宛宛として綱の如し。經を引きて印定し、句句環合す。直諸の名教を包ね、半滿を該ぬる而已に非ず。又事に即して觀を成じ、凡夫の乾土を鑿りて、聖法の水泥を見るべし。圓通の道斯に於てか通ず矣、偏朗の朗玆に於てか明かなり矣。此を前に備へて、今更に文を後に消するなり」と。

[illegible]

昭和六年七月一日印刷
昭和六年七月十日發行

昭和新纂 國譯大藏經 第十二卷

編纂者 國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者 東京市神田區一ツ橋通町二番地
株式會社 東方書院
代表者 三井晶史

印刷者 東京市神田區表神保町十番地
[illegible]舍
代表者 井關[illegible]三郎

發行所 東京市神田區一ツ橋通町二
株式會社 東方書院
電話九段三八四二
振替東京六八六一一

印刷所 西村山太郎 ・ 製本所 讀貝定次郎

不許複製

東京市赤門前
山喜房佛書林
振替東京一九〇〇
電話小石五三六一

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3100